関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書

五料平遺跡
（五料Ⅰ遺跡）

五料野ヶ久保遺跡
（五料Ⅱ遺跡）

五料稲荷谷戸遺跡
（高墓遺跡）

1997

日本道路公団
群馬県教育委員会
松井田町遺跡調査会

五料平遺跡
（五料Ⅰ遺跡）

五料野ケ久保遺跡
（五料Ⅱ遺跡）

五料稲荷谷戸遺跡
（高墓遺跡）

1997

日本道路公団
群馬県教育委員会
松井田町遺跡調査会

序　文

上信越自動車道の建設に伴い、本調査会が発足したのは昭和62年11月のことでした。発掘調査では、縄文時代を中心に弥生、古墳、奈良、平安、中～近世と、私たちの祖先の足跡が間断なく発見されました。ここに至り、ようやくその成果を報告する次第であります。

縄文時代では、国内初の発見となった石棒製作跡の西野牧小山平遺跡をはじめ、早期土器を伴う横川大林遺跡、クッキー状炭化物が出土した行田大道北遺跡、弧状配石墓群の行田梅木平遺跡など、全国規模の重要遺跡が発見されました。また、縄文時代前期から平安時代までの集落である八城二本杉東遺跡、大型掘立柱建物跡の検出で古代東山道の駅家を示唆する原遺跡も注目を集めた遺跡でした。

本町においては、計11箇所の遺跡が発見された訳ですが、これらはこれまで調査されたものとともに、郷土の生い立ちを示す貴重な遺産であります。今でこそ電車や自動車、また飛行機でと、交通の利便性はとどまるところを知りませんが、古くは碓氷峠の峰が行く者の前に大きく立ちはだかったことでしょう。縄文やそれ以前から人々の地域間の交流があったといわれるようですが、遺跡に見られる祖先達の営みの積み重ねの上に現代の私達の文化が成り立っているということ、このことをあらためて認識することが大切なのだと思います。

ここに刊行いたします報告書が、広く皆様に活用されることを祈念するとともに文化財に対する認識を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業を通じて御指導・御協力をいただいた日本道路公団、群馬県教育委員会、実務の全てを遂行された山武考古学研究所、また、調査に従事された全ての方々に厚く御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。

平成９年３月

松井田町遺跡調査会
会長　武田　弘

例　言

1．本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い、事前調査された群馬県碓氷郡松井田町に所在する五料平遺跡・五料野ヶ久保遺跡・五料稲荷谷戸遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会の指導により、松井田町教育委員会に松井田町遺跡調査会を設置し、実施したものである。

3．発掘調査及び整理作業は松井田町遺跡調査会より委託を受けた山武考古学研究所が実施した。

4．本遺跡の名称は、群馬県教育委員会が行った昭和60年度の事業路線内遺跡分布調査に基づくものであったが、大字・小字名に変更する事が妥当と考え、協議の上、以下の遺跡名に変更した。

旧遺跡名	新遺跡名
五料Ⅰ遺跡	五　料　平　遺　跡　（ごりょうたいらいせき）
五料Ⅱ遺跡	五料野ヶ久保遺跡　（ごりょうのがくぼいせき）
高墓遺跡	五料稲荷谷戸遺跡　（ごりょういなりがいといせき）

5．遺跡の所在地・面積・調査期間・調査・整理担当は下記の通りである。

所在地・面積

五料平遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字五料字平482他	4,105.74㎡
五料野ヶ久保遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字五料字野ヶ久保880－3他	5,310.00㎡
五料稲荷谷戸遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字五料字稲荷谷戸1,403他	21,574.00㎡

発掘担当者

五料平遺跡	高柳正春・肥田順一
五料野ヶ久保遺跡	福山俊彰・長谷川一郎・千田幸生
五料稲荷谷戸遺跡	福山俊彰・桐谷　優

発掘調査期間

五料平遺跡	昭和64年1月6日～平成元年6月17日
五料野ヶ久保遺跡	平成元年3月10日～平成元年9月7日
	平成2年5月8日～平成3年3月30日
五料稲荷谷戸遺跡	平成元年3月16日～平成元年11月9日
整理調査期間	平成8年4月1日～平成9年3月31日

整理担当者

五料平遺跡	松田政基
五料野ヶ久保遺跡	福山俊彰
五料稲荷谷戸遺跡	桐谷　優

6．発掘調査に於いて、測量は開成測量株式会社、航空写真は有限会社青高館、自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社・立教大学に委託した。

7．本書の作成にあたり、出土品及び図面整理には以下の方々の協力を得た。

池田と志子・伊藤順子・井上とみ子・江口弘子・金子浩美・河村公子・黒田宣子・小山みさ子
末廣弘子・関根しず子・根本時子・藤曲ひろ子・山口トモ子

8．本書の編集は福山俊彰が行った。執筆は以下の通りである。

序　章	第１節	飯塚　聡（群馬県教育委員会）
	第2・3節	田口　修（松井田町教育委員会）千田幸生　長井正欣　福山俊彰
五料平遺跡		松田政基
五料野ヶ久保遺跡		福山俊彰
五料稲荷谷戸遺跡		桐谷　優

9．本遺跡の記録類・出土遺物は報告書刊行後、松井田町教育委員会が保管している。

10. 発掘調査の実施及び報告書刊行まで下記諸機関・諸氏の御協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（敬称略）

群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

秋池　武・折舘伸二・篠原　正・鈴木徳雄・谷藤保彦・田村公夫・大工原豊

長谷川福次・水澤祝彦・三浦京子・藪下彰治朗・山口逸弘・綿田弘実

立教大学・開成測量・青高館・パリノ・サーヴェイ・新成田総合社

11. 発掘調査参加者

新井豊次郎・新井美喜雄・浅井芳子・安藤とく・石井きち・石井シマ・石井とみ・飯野ふみよ・
飯野　直・五十嵐昌子・伊丹節子・伊丹松子・飯塚栄司・入村きよ子・岩井明美・岩井しづ・
岩井登美枝・岩井道子・上原はつ・上原好江・上原春枝・浦野美奈子・大井千津代・大塚美恵子・
大塚ちよ子・大塚虎雄・大塚　守・岡部みや子・尾高小鈴・尾高淑子・大野ひろ子・大野千津子・
岡田ウメ・岡田早百合・大手チヨ・大手ふじ江・大手いね・片貝和子・加藤震二・門屋さかゑ・
金井綾子・金井文子・金井みつる・金井輝秋・金井はる・柏木亀蔵・黒田静子・小泉美津子・
小板橋静乃・小板橋百合子・小板橋朋子・小板橋守・神小柴エイ・小清水子之吉・小林節子・
小林ちえ・小此木敏江・小此木三代子・斉木恒男・斉藤澄野・佐藤イト・佐藤角司・佐藤いさ枝・
佐藤茂子・佐藤千代・佐藤　巴・佐藤フジエ・佐藤フミ子・佐藤正子・佐藤幸枝・佐藤重雄・
佐藤友江・佐藤　亨・佐藤ハナ・佐藤なか子・佐藤はつ江・佐藤幸子・酒井善三郎・桜井きみ江・
桜井慎三・桜井貞子・猿谷正枝・猿谷光弘・島田可寿江・島田　清・清水かず恵・清水きち子・
清水文子・神宮千代子・神宮房子・塩谷とめ子・清水千秋・清水路子・白石弘子・鈴木喜代子・
鈴木久栄・鈴木弘子・鈴木はな子・鈴木百合子・菅野とみ江・武井イツ子・武井　健・武井よし江・
武井より子・高橋美代・高橋達三郎・田村成子・田村たか子・田村春子・高橋きくの・高橋みさ子・
高橋好仁・高橋恒雄・高橋久子・高橋百合子・武井数子・田中　実・田中繁次郎・武田アサ子・
武田金作・谷口英夫・田中今造・田中一夫・田畑益司・田村綾子・土屋育太郎・土屋一夫・
寺島ハツ子・都丸孝江・富沢昭夫・富沢昭子・勅使河原酉造・中島三代子・中山良子・中澤次夫・
中沢スミ子・中島　要・中山俊子・中原ケサ・中山寅男・永井千津子・永井順子・鍋岡久子・
新田恒夫・庭植吟子・野田絹子・野田達也・萩原君代・馬場ツヤ子・広木和子・廣瀬成美・
平石信好・福安正男・藤巻勝江・藤巻武雄・古谷久子・萩原君代・萩原信子・松本モト子・
松本三江・松本　博・松本　芳・丸山トク・黛垣三郎・黛　典子・黛　正代・三田今朝次・
三浦あさ・毛利ヨシエ・矢野由利子・山崎二三子・吉川勝蔵・横尾はじめ・山口一男・若島清美

凡　例

1．序章第1図は松井田町誌掲載の松井田町河岸段丘分布図を加筆転載した。第2図は松井田町役場発行2万5千分の1『松井田町』を6万分の1に縮小して使用した。第3図は松井田町役場発行5千分の1地形図10・11を7千5百分の1に縮小して使用した。

2．五料野ヶ久保遺跡位置図には国土地理院作製2万5千分の1「三ノ倉」「松井田」、空撮対比図には「南軽井沢」「軽井沢」「三ノ倉」「松井田」を使用した。

3．各遺跡の周辺地形図・路線図には松井田町役場発行5千分の1地形図及び2千5百分の1地形図を使用した。

4．遺構実測図中の方位は座標北を示し、基本堆積土層図及び遺構土層図・断面図に示した数値は標高を示している。

5．本書の挿図縮尺は下記の通りである。

五料平遺跡

トレンチ設定図－1/2,000　遺構配置図－1/400　基本堆積土層図－1/40　住居跡・土坑・掘立柱建物跡・集石－1/60　カマド－1/30　溝跡－1/120　土器・鉄製品・鉄滓－1/4　小形遺物－1/2

五料野ヶ久保遺跡

調査区地形図・トレンチ設定図・調査区配置図－1/1,500　基本堆積土層図－1/30　遺構配置図－1/600　住居跡・土坑－1/60　炉跡・埋設土器・集石・配石・2号敷石遺構・38号土坑－1/30　配石遺構全体図・配石墓配置図－1/200　立石・組石－1/30　1号敷石遺構－1/60　配石墓－1/40　配石内土坑－1/40　古代住居跡－1/60　カマド－1/30　溝跡－1/260　溝跡断面図・土層図－1/80　土器・土製品・石器－1/3・1/4　1号埋設土器－1/6　小形石器・土製品－2/3

五料稲荷谷戸遺跡

トレンチ設定図・調査区分図・グリッド設定図－1/300　基本層序－1/20　遺構配置図－1/1,000　住居跡・掘立柱建物跡－1/60　カマド・炉跡－1/30　溝状遺構－1/800　溝状遺構土層図－1/80　畠跡－1/160　畑跡土層図－1/80　溝跡・道跡－1/200　溝跡・道跡土層図－1/30　井戸跡・土坑－1/40　土器・石器・石製品・鉄滓－1/4　鉄製品－1/2

6．遺物番号は本文・挿図・写真番号ともに一致している。

7．遺物写真図版の縮尺は基本的に挿図と同縮尺としたが、大形土器・石器及び小形土製品・石器等は縮尺率を変えて掲載している。

8．五料野ヶ久保遺跡の石器に付した計測・観察表は下記の意味を表す。

長さ×幅×厚さcm
重さg：石材

9．本書の挿図に使用した記号・スクリーントーンは下記の意味を表す。

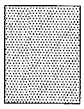
五料平遺跡

地　山・石断面

焼　土　　●－土器・土製品

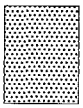
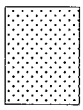
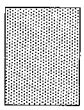
五料野ヶ久保遺跡

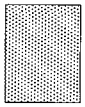
地　山・石断面

焼　土

磨　き

●－土器・土製品　■－石器類

五料稲荷谷戸遺跡

地　山

焼　土

カマド（粘土）

火床部


灰　釉　　●－土器　■－石器類

目　次

序　文
例　言
凡　例
抄　録

序　章

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　遺跡の位置と考古学的環境……3
第３節　調査会の経過……9
第１図　松井田町地形図……2
第２図　松井田町遺跡分布図……5
第３図　上信越自動車道（関越自動車道上越線）路線図……11
第１表　松井田町遺跡一覧表(1)……7
第２表　松井田町遺跡一覧表(2)……8
第３表　松井田町遺跡調査会組織表１（昭和62年度～平成３年度）……9
第４表　松井田町遺跡調査会組織表２（平成４年度～平成８年度）……10

五料平遺跡

本文目次

第１章　遺跡の立地……1
第２章　調査の方法と経過……1
　第１節　調査の方法……1
　第２節　調査の経過……6
第３章　基本土層……6
第４章　検出された遺構と遺物……7
　第１節　遺構の概観……7
　第２節　歴史時代……7
　　第１項　住居跡……7
　　第２項　掘立柱建物跡……18
　　第３項　土　坑……18
　　第４項　溝　跡……25
　　第５項　集　石……25
第５章　まとめ……37

挿図目次

第１図　関越自動車道松井田町路線図と調査区……2
第２図　トレンチ設定図（１）……3
第３図　トレンチ設定図（２）……4
第４図　遺構配置図……5
第５図　基本土層……6
第６図　１号住居跡実測図……8
第７図　２号住居跡実測図……9
第８図　３号住居跡実測図……10
第９図　４号住居跡実測図（１）……11
第10図　４号住居跡実測図（２）……12
第11図　５号住居跡実測図（１）……14
第12図　５号住居跡実測図（２）……15
第13図　６号住居跡実測図……16
第14図　７号住居跡実測図……17
第15図　１号掘立柱建物跡……19
第16図　土坑実測図（１）……20
第17図　土坑実測図（２）……21
第18図　土坑実測図（３）……22
第19図　溝跡実測図……26
第20図　集石実測図（１～４・６号）……27
第21図　１・２号住居跡出土遺物実測図……28
第22図　２～４号住居跡出土遺物実測図……29
第23図　４号住居跡出土遺物実測図……30
第24図　４・５号住居跡出土遺物実測図……31
第25図　５～７号住居跡出土遺物実測図……32
第26図　７号住居跡・１～3・9・10・12・17・21・23・25・29号土坑出土遺物実測図……33
第27図　31～33・37・39・40・42・48～50・54・63・72・75～77・84号土坑遺物実測図……34
第28図　１・２号溝出土遺物実測図……35
第29図　２・４号溝出土遺物実測図……36

表　目　次

別表　遺物観察表（１）……38
別表　遺物観察表（２）……39
別表　遺物観察表（３）……40
別表　遺物観察表（４）……41
別表　遺物観察表（５）……42
別表　遺物観察表（６）……43
別表　遺物観察表（７）……44
別表　遺物観察表（８）……45
別表　遺物観察表（９）……46

写真図版目次

図版１　１．JR信越線・国道18号間調査前現況（北より）
　　２．国道18号南側調査前現況（北より）
図版２　１．JR信越線南側調査前現況（北より）
　　２．JR信越線町道間調査前現況（南より）
図版３　１．調査前現況（北より）
　　２．調査前現況（北より）
図版４　１．調査区全景（北西より）
　　２．調査区全景（南より）
図版５　１．調査区全景（南より）
　　２．調査区全景（南西より）
図版６　１．１号住居跡完掘状況（南西より）
　　２．２号住居跡完掘状況（西より）
　　３．３号住居跡完掘状況（西より）
　　４．３号住居跡遺物出土状況（西より）
　　５．４号住居跡構築状況（北西より）
　　６．同カマド出土状況（北西より）
図版７　１．４号住居跡遺物出土状況（西より）
　　２．同遺物出土状況（西より）
　　３．５号住居跡構築状況（西より）
　　４．同カマド出土状況（西より）
　　５．６号住居跡構築状況（西より）
　　６．同カマド出土状況（西より）
図版８　１．７号住居跡完掘状況（北西より）
　　２．同カマド遺物出土状況（北西より）
　　３．同遺物出土状況（西より）

4．同遺物出土状況（東より）
5．同遺物出土状況近景（南より）
図版９　1．１号掘立柱建物跡（南より）
2．１号集石出土状況（北東より）
3．２号集石出土状況（南東より）
4．３号集石出土状況（西より）
5．４号集石出土状況（南より）
図版10　1．６号集石出土状況（北西より）
2．１号土坑完掘状況（南より）
3．２号土坑完掘状況（東より）
4．３号土坑完掘状況（東より）
5．31号土坑完掘状況（北より）
6．32・33号土坑完掘状況（北東より）
7．38号土坑完掘状況（北東より）
8．43・61号土坑完掘状況（北西より）
図版11　1．51号土坑完掘状況（東より）
2．57号土坑完掘状況（北東より）
3．64号土坑完掘状況（南西より）
4．69号土坑完掘状況（南より）
5．72号土坑完掘状況（南東より）
6．73号土坑完掘状況（南東より）
7．76号土坑完掘状況（北東より）
8．85号土坑完掘状況（南より）
図版12　1．２号溝跡遺物出土状況（東より）
2．１トレンチ（東より）
3．２トレンチ（東より）
4．３トレンチ（東より）
5．４トレンチ（東より）
6．５トレンチ（東より）
7．６～８トレンチ（南より）
8．９～11トレンチ（北より）
9．12～15トレンチ（南より）
図版13　1．17・18トレンチＢ軽石下状況（南西より）
2．19～21トレンチ（北より）
3．21トレンチ確認状況（南より）
4．22トレンチ（西より）
5．23トレンチ（西より）
6．24トレンチ（西より）
7．22～25トレンチ（北より）
8．25トレンチ（東より）
9．23トレンチ土層断面（北より）
10．22トレンチ土層断面（西より）
11．24トレンチ土層断面（西より）
12．24～27トレンチ（北より）
13．26トレンチ（西より）
14．27トレンチ（東より）
15．28トレンチ（西より）
16．国道トレンチ全景（北より）
図版14　２・３号住居跡出土遺物
図版15　４号住居跡出土遺物
図版16　５・６号住居跡出土遺物
図版17　７号住居跡・１・２・９・12・23・33・37・40・42・49・50・77号土坑出土遺物
図版18　１・２号溝出土遺物
図版19　２号溝・遺構外出土遺物
図版20　１・３号集石・遺構外出土遺物

五料野ヶ久保遺跡

本文目次

第１章　遺跡の立地……1
第２章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法……3
　第２節　調査の経過……3
第３章　遺跡の土層……7
第４章　検出された遺構と遺物
　第１節　遺跡の概観……9
　第２節　縄文時代……9
　　東調査区……9
　　住居跡……10
　　土　坑……21
　　集　石……26
　　遺構外出土遺物……26
　　中央調査区……32
　　住居跡……32
　　土　坑……36
　　集　石……39
　　配　石……39
　　敷石遺構……42
　　屋外埋設土器……44
　　西調査区……46
　　住居跡……47
　　土　坑……62
　　２号埋設土器……62
　　配石遺構……66
　　炉　跡……67
　　１号敷石遺構……68
　　配石墓……71
　　配石内土坑……96
　　グリッド出土遺物……97
　第３節　~~歴史時代~~ 古代時代……120
　　住居跡……120
　　溝　跡……124
第５章　調査の成果……127

挿図目次

第１図　遺跡位置図……１
第２図　周辺地形図……２
第３図　現況地形図……４
第４図　トレンチ設定図……５
第５図　基本堆積土層図……７
第６図　調査区配置図……８
第７図　東調査区遺構配置図……９
第８図　１号住居跡・出土遺物……10
第９図　２号住居跡・出土遺物……11
第10図　３号住居跡・出土遺物……12
第11図　６号住居跡……13
第12図　６号住居跡出土遺物（１）……14
第13図　６号住居跡出土遺物（２）……15
第14図　５・７・８号住居跡……16
第15図　５号住居跡炉、
　　７号住居跡炉・埋設土器……17
第16図　５号住居跡出土遺物……17
第17図　７号住居跡出土遺物（１）……18
第18図　７号住居跡出土遺物（２）……19
第19図　７号住居跡出土遺物（３）……20
第20図　８号住居跡出土遺物……20
第21図　東調査区土坑（１）……22
第22図　東調査区土坑（２）……23
第23図　東調査区土坑出土遺物（１）……24
第24図　東調査区土坑出土遺物（２）……25
第25図　東調査区集石・出土遺物……26
第26図　東調査区遺構外出土遺物（１）……27
第27図　東調査区遺構外出土遺物（２）……28
第28図　東調査区遺構外出土遺物（３）……29
第29図　東調査区遺構外出土遺物（４）……30
第30図　東調査区遺構外出土遺物（５）……31
第31図　中央調査区遺構配置図……32
第32図　12号住居跡・出土遺物……33
第33図　13号住居跡・出土遺物……34
第34図　17号住居跡・出土遺物……35
第35図　中央調査区土坑……37
第36図　中央調査区土坑出土遺物……38
第37図　３・６・８号集石・出土遺物……40
第38図　７号集石・出土遺物……41
第39図　１号配石……42
第40図　２号敷石遺構……42
第41図　２号敷石遺構出土遺物……43
第42図　中央調査区埋設土器……44
第43図　１・３～６号埋設土器……45
第44図　西調査区遺構配置図……46
第45図　14号住居跡……47
第46図　14号住居跡出土遺物（１）……48
第47図　14号住居跡出土遺物（２）……49
第48図　14号住居跡出土遺物（３）……50
第49図　14号住居跡出土遺物（４）……51
第50図　15号住居跡……52
第51図　15号住居跡出土遺物（１）……53
第52図　15号住居跡出土遺物（２）……54
第53図　15号住居跡出土遺物（３）……55
第54図　15号住居跡出土遺物（４）……56
第55図　15号住居跡出土遺物（５）……57
第56図　15号住居跡出土遺物（６）……58
第57図　西調査区土坑……59
第58図　西調査区土坑出土遺物（１）……60
第59図　西調査区土坑出土遺物（２）……61
第60図　２号埋設土器……63
第61図　配石遺構全体図……64
第62図　配石墓配置図……65
第63図　上部配石（立石・組石）……67
第64図　１号炉、２号炉・出土遺物……67
第65図　１号敷石遺構……68
第66図　１号敷石遺構出土遺物（１）……69
第67図　１号敷石遺構出土遺物（２）……70
第68図　１号配石墓・出土遺物……71
第69図　２号配石墓……72
第70図　２号配石墓出土遺物……73
第71図　３号、４号配石墓・出土遺物……74

第72図　5号配石墓・出土遺物……75
第73図　6号配石墓……76
第74図　6号配石墓出土遺物……77
第75図　7号配石墓・出土遺物……78
第76図　8号配石墓・出土遺物……79
第77図　10号配石墓……79
第78図　9号配石墓・出土遺物……80
第79図　11号配石墓・出土遺物……81
第80図　12号配石墓……82
第81図　13号配石墓……82
第82図　14号配石墓・出土遺物……83
第83図　15号配石墓……84
第84図　16号配石墓・出土遺物……85
第85図　17号配石墓・出土遺物……86
第86図　18・19号配石墓・出土遺物……87
第87図　20・21号配石墓……88
第88図　21号配石墓……89
第89図　22号配石墓……90
第90図　23号配石墓……91
第91図　24号配石墓・出土遺物……92
第92図　26・27号配石墓……93
第93図　25号配石墓・出土遺物……94
第94図　28号配石墓・出土遺物……95
第95図　配石内土坑・出土遺物……96
第96図　グリッド出土遺物（1）……99
第97図　グリッド出土遺物（2）……100
第98図　グリッド出土遺物（3）……101
第99図　グリッド出土遺物（4）……102
第100図　グリッド出土遺物（5）……103
第101図　グリッド出土遺物（6）……104
第102図　グリッド出土遺物（7）……105
第103図　グリッド出土遺物（8）……106
第104図　グリッド出土遺物（9）……107
第105図　グリッド出土遺物（10）……108
第106図　グリッド出土遺物（11）……109
第107図　グリッド出土遺物（12）……110
第108図　グリッド出土遺物（13）……111
第109図　グリッド出土遺物（14）……112
第110図　グリッド出土遺物（15）……113
第111図　グリッド出土遺物（16）……114
第112図　グリッド出土遺物（17）……115
第113図　グリッド出土遺物（18）……117
第114図　グリッド出土遺物（19）……118
第115図　グリッド出土遺物（20）……119
第116図　10号住居跡……121
第117図　10号住居跡出土遺物……122
第118図　11号住居跡・出土遺物……123
第119図　1～3号溝跡……125
第120図　溝跡断面図……126
第121図　溝跡出土遺物……126

表　目　次

表－1　東調査区土坑一覧表……21
表－2　中央調査区土坑一覧表……36
表－3　西調査区土坑一覧表……62
表－4　10号住居跡出土遺物観察表……120
表－5　11号住居跡出土遺物観察表……124
表－6　溝跡出土遺物観察表……124

写真図版目次

図版１　空撮（国土地理院1991年撮影
ＫＴ－91－ＩＸ　Ｃ７－３）
図版２－１　遺跡全景（空撮）
－２　東調査区全景（空撮）
図版３－１　東調査区全景
－２　同　遠景
－３　１号住居跡
－４　２号住居跡
－５　同　埋設土器
図版４－１　３号住居跡
－２　６号住居跡
－３　同　覆土堆積状況
－４　同　遺物出土状況
－５　５・７・８号住居跡遺物出土状況
図版５－１　５号住居跡焼土
－２　７号住居跡埋設土器
－３　１号土坑
－４　10号土坑
－５　17号土坑
－６　20号土坑
－７　２号集石
－８　Ｑ－29グリッド遺物出土状況
図版６－１　中央調査区遺構配置状況（空撮）
－２　同　基本堆積土層
－３　12号住居跡
－４　13号住居跡
－５　同　炉跡
図版７－１　17号住居跡
－２　同　埋設土器
－３　28号土坑
－４　33号土坑
－５　34号土坑
－６　３号集石
－７　１号配石
－８　２号敷石遺構
図版８－１　２号敷石遺構遺物出土状況
－２　同
－３　１号埋設土器
－４　５号埋設土器
－５　Ｌ－15グリッド遺物出土状況
－６　Ｉ－16グリッド遺物出土状況
－７　Ｊ－16グリッド遺物出土状況
－８　Ｋ－15グリッド遺物出土状況
図版９－１　西調査区南側遺構配置状況（空撮）
－２　同
－３　西調査区南側遠景
－４　Ｉ－10グリッド遺物出土状況
－５　14号住居跡
－６　同　炉跡
－７　同　土偶脚部出土状況
－８　同　注口土器出土状況
図版10－１　15号住居跡
－２　同　遺物出土状況
－３　27号土坑
－４　同　遺物出土状況
－５　38号土坑
－６　２号埋設土器
－７　40号土坑
－８　同　覆土堆積状況
図版11－１　西調査区北側配石遺構全景（空撮）
－２　同　配石遺構検出状況
図版12－１　配石遺構検出状況
－２　同
図版13－１　基本堆積土層
－２　配石遺構検出状況
－３　同
－４　同
－５　Ｇ－９グリッド配石遺構近景
－６　同　立石、組石検出状況
－７　同　立石近景
－８　Ｆ－８グリッド配石近景

図版14－1　G－8グリッド遺物出土状況
－2　同
－3　同
－4　H－10グリッド遺物出土状況
－5　G－8グリッド遺物出土状況
－6　F－8グリッド遺物出土状況
－7　G－9グリッド遺物出土状況
－8　同
図版15－1　F－9グリッド遺物出土状況
－2　G－9グリッド遺物出土状況
－3　G－8グリッド土偶出土状況
－4　F－9グリッド土偶脚部出土状況
－5　F－9グリッド遺物出土状況
－6　F－8グリッド多孔石出土状況
－7　1号炉跡
－8　2号炉跡
図版16－1　1号敷石遺構全景
－2　同　埋設土器
－3　同　脚付石皿形土製品出土状況
－4　同　多孔石出土状況
－5　同　石棒出土状況
図版17－1　西調査区北側配石墓全景（空撮）
－2　同　配石墓配置状況（空撮）
図版18－1　配石墓配置状況
－2　同
図版19－1　1・2号配石墓
－2　1号配石墓
－3　同　遺物出土状況
－4　同　構築状況
－5　同
図版20－1　2号配石墓
－2　同　構築状況
－3　同
－4　3号配石墓
－5　4号配石墓完掘
図版21－1　配石墓西側配置状況
－2　5号配石墓
－3　6号配石墓
－4　同
－5　7号配石墓
－6　8号配石墓
－7　9号配石墓
－8　10号配石墓
図版22－1　11号配石墓
－2　同
－3　12号配石墓
－4　同
－5　13号配石墓覆土堆積状況
－6　13号配石墓
－7　13～17号配石墓確認状況
－8　14号配石墓
図版23－1　15号配石墓
－2　同
－3　同　蓋石除去状況
－4　同　覆土堆積状況
－5　同　完掘
図版24－1　16号配石墓
－2　同　土層状況
－3　同　遺物出土状況
－4　17号配石墓
－5　12・18～21号配石墓配列状況
図版25－1　18～21号配石墓
－2　同　蓋石除去状況
図版26－1　18・19号配石墓遺物出土状況
－2　18号配石墓覆土堆積状況
－3　18号配石墓
－4　19号配石墓
－5　20・21号配石墓確認状況
－6　20・21号配石墓蓋石除去状況
－7　22号配石墓
－8　23号配石墓

図版27－1　22～24号配石墓配列状況
－2　22・23号配石墓蓋石除去状況
図版28－1　24号配石墓確認状況
－2　同　遺物出土状況
－3　同　調査状況
－4　26号配石墓確認状況
－5　41号土坑
図版29　東調査区1～3・6号住居跡出土遺物
図版30　東調査区5・6号住居跡出土遺物
図版31　東調査区7号住居跡出土遺物
図版32　東調査区7号住居跡(2)・土坑(1)出土遺物
図版33　東調査区土坑(2)・遺構外出土遺物(1)
図版34　東調査区遺構外出土遺物(2)
図版35　東調査区遺構外出土遺物(3)
図版36　中央調査区住居跡・土坑出土遺物
図版37　中央調査区土坑・集石・敷石出土遺物
図版38　中央調査区埋設土器
図版39　西調査区14号住居跡出土遺物(1)
図版40　西調査区14号住居跡出土遺物(2)
図版41　西調査区15号住居跡出土遺物(1)
図版42　西調査区15号住居跡出土遺物(2)
図版43　西調査区土坑出土遺物
図版44　西調査区40号土坑出土遺物・2号埋設土器
図版45　西調査区1号敷石遺構・1号炉跡出土遺物
図版46　西調査区配石墓出土遺物(1)
図版47　西調査区配石墓出土遺物(2)
図版48　西調査区配石墓(3)・配石内土坑出土遺物
図版49　グリッド出土遺物(1)
図版50　グリッド出土遺物(2)
図版51　グリッド出土遺物(3)
図版52　グリッド出土遺物(4)
図版53　グリッド出土遺物(5)
図版54　グリッド出土遺物(6)
図版55　グリッド出土遺物(7)
図版56　グリッド出土遺物(8)
図版57　グリッド出土遺物(9)
図版58　グリッド出土遺物(10)
図版59　グリッド出土遺物(11)
図版60　グリッド出土遺物(12)
図版61　中央調査区出土石器
図版62　西調査区出土石器
図版63－1　10号住居跡
－2　同　遺物出土状況
－3　同　カマド
－4　11号住居跡
－5　同　カマド
－6　同　遺物出土状況
－7　2号溝跡
－8　同　遺物出土状況
図版64　10・11号住居跡、1・2号溝跡出土遺物

五料稲荷谷戸遺跡

本文目次

第1章　遺跡の立地……1

第2章　調査の方法と経過

第1節　調査の方法……1

第2節　調査の経過……2

第3章　基本層序……7

第4章　検出された遺構・遺物

第1節　各時代の概観……11

第2節　縄文時代……12

第3節　弥生時代……24

第4節　古代

住居跡……28

掘立柱建物跡……85

溝状遺構……90

畠　跡……91

井戸跡……93

溝……94

土　坑……94

第5節　近世

畠　跡……95

道　跡……98

第5章　まとめ

第1節　概　　観……99

第2節　縄文時代……99

第3節　弥生時代……99

第4節　古　　代……101

第5節　近　　世……103

挿図目次

第１図　トレンチ設定・調査区分図（西地区）…３
第２図　グリッド設定図（西地区）……４
第３図　トレンチ設定・調査区分図（東地区）…５
第４図　グリッド設定図（東地区）……６
第５図　基本層序……７
第６図　遺構配置図（１）……８
第７図　遺構配置図（２）……９
第８図　遺構配置図（３）……10
縄文時代
第９図　縄文時代出土遺物（１）……13
第10図　縄文時代出土遺物（２）……15
第11図　縄文時代出土遺物（３）……17
第12図　縄文時代出土遺物（４）……19
第13図　縄文時代出土遺物（５）……21
弥生時代
第14図　弥生時代出土遺物（１）……25
第15図　弥生時代出土遺物（２）……27
古代
第16図　１号住居跡・炉跡……28
第17図　２号住居跡・出土遺物……29
第18図　３号住居跡……30
第19図　３号住居跡カマド……31
第20図　３号住居跡出土遺物……32
第21図　４号住居跡・カマド……34
第22図　４号住居跡出土遺物……35
第23図　５号住居跡・カマド……37
第24図　５号住居跡出土遺物……38
第25図　６号住居跡……39
第26図　６号住居跡カマド……40
第27図　６号住居跡出土遺物……40
第28図　７号住居跡・カマド……41
第29図　７号住居跡出土遺物……42
第30図　８号住居跡・カマド……43
第31図　８号住居跡出土遺物……44
第32図　９号住居跡・カマド……46
第33図　９号住居跡出土遺物（１）……47
第34図　９号住居跡出土遺物（２）……48
第35図　10号住居跡・カマド……50
第36図　10号住居跡出土遺物……51
第37図　11号住居跡・カマド……52
第38図　11号住居跡出土遺物……53
第39図　12号住居跡出土遺物……54
第40図　12号住居跡・カマド……55
第41図　13号住居跡・カマド……56
第42図　13号住居跡出土遺物……58
第43図　14号住居跡……59
第44図　14号住居跡カマド……60
第45図　14号住居跡出土遺物……61
第46図　15号住居跡……62
第47図　16号住居跡・カマド……63
第48図　16号住居跡出土遺物……64
第49図　17号住居跡・カマド……65
第50図　17号住居跡出土遺物（１）……67
第51図　17号住居跡出土遺物（２）……68
第52図　18号住居跡……70
第53図　18号住居跡カマド……71
第54図　18号住居跡出土遺物……72
第55図　19号住居跡……73
第56図　19号住居跡出土遺物……73
第57図　20号住居跡・カマド……74
第58図　20号住居跡出土遺物……76
第59図　21号住居跡・カマド……78
第60図　21号住居跡出土遺物……79
第61図　22号住居跡・カマド……80
第62図　22号住居跡出土遺物……81
第63図　23号住居跡……82
第64図　23号住居跡カマド……83
第65図　23号住居跡出土遺物……84

第66図　1号掘立柱建物跡……85
第67図　2号掘立柱建物跡……86
第68図　3号掘立柱建物跡……88
第69図　4号掘立柱建物跡……89
第70図　1号溝状遺構……90
第71図　1号畠跡……92
第72図　1号井戸跡……93
第73図　1号溝……94
第74図　1号土坑……94
近世
第75図　2号畠跡……95
第76図　3号畠跡……96
第77図　4号畠跡……97
第78図　1号道跡……98
まとめ
第79図　1号溝状遺構の調査外断面実測図
・路線予測ライン……100

表　目　次

第1表　縄文時代出土遺物観察表（1）……12
第2表　縄文時代出土遺物観察表（2）……14
第3表　縄文時代出土遺物観察表（3）……16
第4表　縄文時代出土遺物観察表（4）……18
第5表　縄文時代出土遺物観察表（5）……19
第6表　縄文時代出土遺物観察表（6）……20
第7表　縄文時代出土遺物観察表（7）……22
第8表　縄文時代出土遺物観察表（8）……23
第9表　弥生時代出土遺物観察表（1）……24
第10表　弥生時代出土遺物観察表（2）……26
第11表　弥生時代出土遺物観察表（3）……27
第12表　2号住居跡出土遺物観察表……29
第13表　3号住居跡出土遺物観察表（1）……31
第14表　3号住居跡出土遺物観察表（2）……33
第15表　4号住居跡出土遺物観察表……36
第16表　5号住居跡出土遺物観察表……38
第17表　6号住居跡出土遺物観察表（1）……39
第18表　6号住居跡出土遺物観察表（2）……40
第19表　7号住居跡出土遺物観察表……42
第20表　8号住居跡出土遺物観察表……45
第21表　9号住居跡出土遺物観察表……49
第22表　10号住居跡出土遺物観察表……51
第23表　11号住居跡出土遺物観察表……54
第24表　12号住居跡出土遺物観察表……54
第25表　13号住居跡出土遺物観察表……57
第26表　14号住居跡出土遺物観察表（1）……60
第27表　14号住居跡出土遺物観察表（2）……62
第28表　16号住居跡出土遺物観察表……64
第29表　17号住居跡出土遺物観察表（1）……66
第30表　17号住居跡出土遺物観察表（2）……69
第31表　18号住居跡出土遺物観察表（1）……70
第32表　18号住居跡出土遺物観察表（2）……72
第33表　19号住居跡出土遺物観察表……73
第34表　20号住居跡出土遺物観察表（1）……75
第35表　20号住居跡出土遺物観察表（2）……77
第36表　21号住居跡出土遺物観察表……79
第37表　22号住居跡出土遺物観察表……81
第38表　23号住居跡出土遺物観察表……84
第39表　1号掘立柱建物跡ピット計測表……85
第40表　2号掘立柱建物跡ピット計測表……87
第41表　3号掘立柱建物跡ピット計測表……87
第42表　4号掘立柱建物跡ピット計測表……89
第43表　1号溝状遺構出土遺物観察表……91

写真図版目次

図版１－１．東地区全景（航空写真）
－２．１号住居跡全景（北より）
－３．２号住居跡全景（北より）
－４．３号住居跡全景（西より）
－５．４号住居跡全景（西より）
図版２－１．５号住居跡全景（西より）
－２．６号住居跡全景（西より）
－３．７号住居跡全景（南より）
－４．８号住居跡全景（南より）
－５．９号住居跡遺物出土状況（西より）
図版３－１．10号住居跡全景（西より）
－２．11号住居跡全景（西より）
－３．12号住居跡全景（西より）
－４．13号住居跡全景（南より）
－５．14号住居跡全景（西より）
－６．14号住居跡カマド（西より）
－７．16号住居跡全景（南より）
－８．18号住居跡全景（南より）
図版４－１．18号住居跡全景（西より）
－２．21号住居跡全景（西より）
－３．22号住居跡全景（西より）
－４．23号住居跡全景（南より）
－５．１号掘立柱建物跡全景（南より）
－６．２号掘立柱建物跡全景（西より）
－７．３号掘立柱建物跡全景（東より）
－８．４号掘立柱建物跡全景（西より）
図版５－１．西地区全景（航空写真）
図版５－２．１号溝状遺構中央部付近（東より）
図版６－１．１号溝状遺構分岐点（北より）
－２．１号溝状遺構西側付近（北より）
図版７－１．１号溝状遺構セクションＡ－Ａ'
（東より）
－２．１号溝状遺構セクションＢ－Ｂ'
（西より）
－３．１号溝状遺構セクションＣ－Ｃ'
（東より）
－４．調査区外Ａトレンチ全景（北より）
－５．調査区外Ａトレンチセクション
（東より）
図版８－１．４号畠跡（西より）
－２．１号井戸跡（東より）
－３．１号溝（東より）
－４．基本層序Ⅰ
－５．基本層序Ⅱ
図版９　縄文時代出土遺物（１）
図版10　縄文時代出土遺物（２）
図版11　縄文時代出土遺物（３）・弥生時代出土遺物
図版12　２～７号住居跡出土遺物
図版13　７～９号住居跡出土遺物
図版14　９～14号住居跡出土遺物
図版15　14・16・17号住居跡出土遺物
図版16　17～20号住居跡出土遺物
図版17　20～23号住居跡出土遺物・１号溝状遺構出土遺物

抄　　録

フリガナ	ゴリョウタイライセキ（ゴリョウイチイセキ）　ゴリョウノガクボイセキ（ゴリョウニイセキ）　ゴリョウイナリガイトイセキ（コウハカイセキ）
書名	五料平遺跡（五料Ⅰ遺跡）　五料野ヶ久保遺跡（五料Ⅱ遺跡）　五料稲荷谷戸遺跡（高墓遺跡）
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	編集／福山俊彰　執筆／松田政基（五料平）　福山俊彰（五料野ヶ久保）　桐谷優（五料稲荷谷戸）
編集機関	山武考古学研究所　〒286　千葉県成田市並木町221番地
発行機関	日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会　／〒379－02　群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245（松井田町教育委員会）
発行年月日	西暦１９９７年　3月３１日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ゴリョウタイラ 五料平	グンマケンウスイグンマツイダマチオオアザ 群馬県碓氷郡松井田町大字 ゴリョウアザタイラ 五料字平482	10401		36° 19′ 05″	138° 46′ 28″	19890106～ 19890617	4,105.74㎡	関越自動車道 （上越線）建設工事
ゴリョウノガクボ 五料野ヶ久保	グンマケンウスイグンマツイダマチオオアザ 群馬県碓氷郡松井田町大字 ゴリョウアザノガクボ 五料字野ヶ久保880－3	10401		36° 19′ 25″	138° 46′ 08″	19890310～ 19890907 19900508～ 19910330	5,310.00㎡	関越自動車道 （上越線）建設工事
ゴリョウイナリガイト 五料稲荷谷戸	グンマケンウスイグンマツイダマチオオアザ 群馬県碓氷郡松井田町大字 ゴリョウアザイナリガイト 五料字稲荷谷戸1403	10401		36° 19′ 30″	138° 45′ 56″	19890316～ 19891109	21,574.00㎡	関越自動車道 （上越線）建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五料平	集落跡	奈良・平安時代	住居跡　7軒　土坑77基 溝跡　4条　集石　5基	須恵器・土師器・緑釉椀・円面硯・刀子鉄族・紡錘車・鉄滓・縄文土器・弥生土器・石鏃	律令初期から末期に至る集落跡、住居の覆土中に鉄滓が多く見られ、調査区外に鍛冶等の生産遺構が予想される。
五料野ヶ久保	集落跡 配石遺構	縄文時代前期・中期・後期 奈良・平安	縄文前期　住居跡7軒、土坑 縄文中期　住居跡3軒、土坑 縄文後期　住居跡2軒、土坑　配石遺構・配石墓 奈良・平安　住居跡2軒、溝跡	縄文前期～後期土器、土偶・脚付石皿形土製品・ミニチュア土器・石器類（石棒・石剣・砥石・凹石・丸石・石鏃・石斧・石匙・石錐等）土師器・須恵器	縄文後期中葉を中心とする配石遺構・配石墓28基が検出され、該期の遺物（堀之内・加曽利B・高井東式等）が大量に出土している。他に縄文前期・中期集落、奈良・平安時代住居跡が検出されている。
五料稲荷谷戸	集落跡	奈良・平安時代	住居跡　24軒　溝状遺構　1条 掘立柱建物跡　2棟 溝跡　1条　畠跡　4枚	須恵器・土師器・灰釉陶器・縄文土器片・弥生土器	８～９世紀代の集落跡と、同時期の大形溝状遺構が検出されて、性格的に道の可能性が指摘されている。

序　　章

序　章

第１節　調査に至る経緯

上信越自動車道（「関越自動車道上越線」）は、首都圏と上信越地方とを結ぶ高速自動車国道として、東京都練馬区を起点とし、新潟県上越市に至る総延長約280㎞（このうち練馬～藤岡インター間80.4㎞は関越自動車道新潟線との重複区間）が日本道路公団によって建設されている。なお、平成５年３月27日には、藤岡～佐久両インター間69.5㎞が供用されており、その後平成７年11月には佐久～小諸両インター間10.8㎞が供用され、そして平成８年11月14日には小諸インター～更埴ジャンクション間36.8㎞が供用されて長野自動車道と接続し、現在信州中野インターまでが供用されている。本県内は、藤岡市・多野郡吉井町・甘楽郡甘楽町・富岡市・甘楽郡下仁田町・甘楽郡妙義町・碓氷郡松井田町の各市町を通過する。

本県部分の埋蔵文化財発掘調査にかかわる上信越自動車道藤岡～佐久間については、昭和47年に基本計画が策定され、同54年に建設大臣より日本道路公団が施工命令を受けている。そして同56年には、藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・妙義町・松井田町（東部）の路線が発表され、翌57年には松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

上信越自動車道にかかわる群馬県内の埋蔵文化財の取り扱いと調査経過、ならびに松井田町における埋蔵文化財発掘調査の経緯は以下の通りである。

昭和49年度　藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法の遵守、国・県・市町村の各指定文化財を避けること、文化財に関係する事項は県教育委員会文化財保護課と協議すること、等の考え方を示す。

昭和54・55年度　県教育委員会文化財保護課は、路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の状況をまとめ、県企画部交通対策課により、『関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書』として報告される。

昭和59年度　建設工事の具体化に伴い、日本道路公団から県教育委員会に対し、路線内の埋蔵文化財に関する具体的な調査の依頼がなされ、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を実施した。

昭和60年度　県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を「遺物分布の濃い部分」「遺物分布の淡い部分」「試掘調査を必要とする部分」に区分、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した（後の試掘調査によって52遺跡に変更）。そして、埋蔵文化財発掘調査に関する基本方針を次のように策定した。

①発掘調査終了年度は昭和66年度とする。

②発掘調査は㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分については調査会方式を導入し、関係市町には進捗状況を考慮しながら協力を求める。

③調査関係別対応面積は次のとおり。

・埋文事業団：富岡市以東の約76万㎡（面積は変動の可能性あり）。

・調査会：下仁田町・妙義町・松井田町の約22万㎡（面積は変動の可能性あり）。

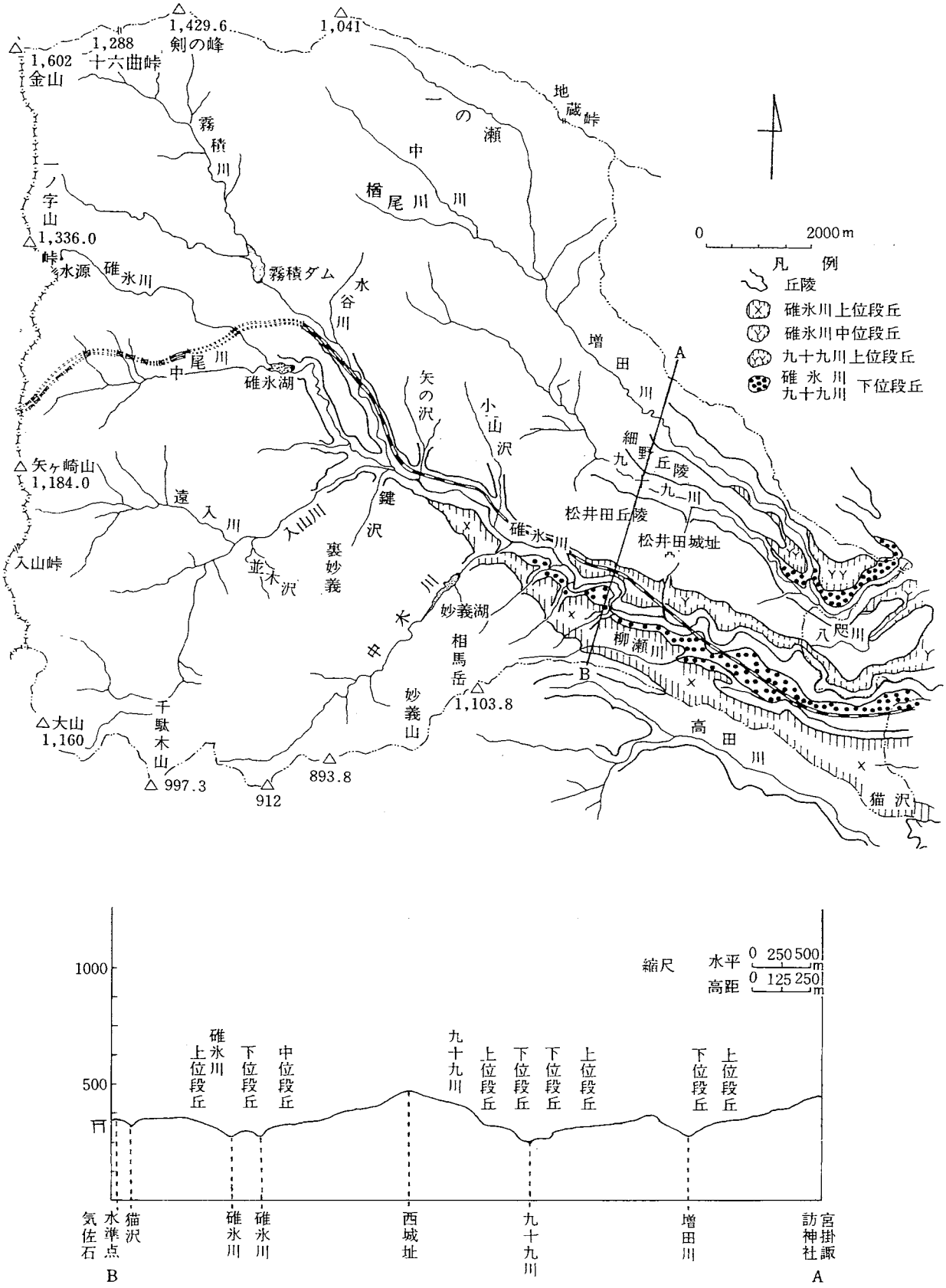
◎発掘調査事業実施方法：日本道路公団東京第二建設局が群馬県教育委員会に対し発掘調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はこれを受けて、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団ならびに各遺跡調査会に対し、再委託のかたちで委託契約を締結し、それぞれ発掘調査を実施する。

昭和61年度　４月　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団により４遺跡にて発掘調査が開始された。

昭和62年度　11月　松井田町遺跡調査会が設立され、年度末３月より発掘調査を開始（～平成３年度迄）

平成４年度　発掘調査の終了した各遺跡について整理事業を開始する。

平成８年度　各遺跡の整理報告書が刊行となり、松井田町遺跡調査会の全事業が終了する。



第１図　松井田町地形図（「松井田町誌」より転載）

第２節　遺跡の位置と考古学的環境

松井田町は群馬県の南西部に位置し、西側は碓氷峠・入山峠・和美峠を境に長野県北佐久郡軽井沢町に接している。松井田町の地形は山地・丘陵・河岸段丘面に大別され、北西部・西部及び南西部には山地が囲み、それぞれの山地から流れる各河川沿いに丘陵や段丘が形成されている。

また、松井田町の市街地から西北西26㎞には浅間山が位置し、有史以前から度重なる噴火を繰り返してきた。この降下火山灰・軽石は、遺構の年代決定の指標にもなっている。

松井田町を流れる主要河川には、碓氷川・九十九川・増田川などがあり、それぞれ並行するように南東流している。丘陵地には、長者久保丘陵・松井田丘陵・西横野丘陵・細野丘陵などがある。河岸段丘は、碓氷川流域・九十九川流域・増田川流域に形成されている。

長者久保丘陵は、剣の峰から地蔵峠を経て南東方向に延び、安中市板鼻まで続く当地方最大の丘陵地で、碓氷郡と群馬郡との分水嶺となっている。松井田丘陵は、剣の峰から松井田城跡を経て安中市名山へと延びるもので、南面を碓氷川及びその支流に、北面を九十九川及びその支流に浸食されている。西横野丘陵は、碓氷川南岸の丘陵で、碓氷郡と甘楽郡との郡境をなし、碓氷谷と鏑谷との分水嶺になっている。同丘陵は表妙義の山稜から派生し、源ヶ原・行田・越泉・上人見を経て、安中市へと続いている。なお、妙義山地の白雲山から流下する猫沢川・柳瀬川が西横野丘陵を東流している。

平坦な地形は、おもに碓氷川・九十九川・増田川流域南側の丘陵上及び河岸段丘上に分布し、この平坦地を中心に遺跡が分布している。以下、各時代ごとに本地域の遺跡を概観する。

旧石器時代

行田大道北遺跡(2)から細石核が出土しているが、旧石器の検出は極めて少ない状況にある。本地域では、浅間山噴火に伴う浅間－板鼻黄色軽石（ＹＰ層：約13,000～14,000年前）や浅間－板鼻褐色軽石（ＢＰ層：約18,000～21,000年前）が厚く堆積し、遺物の検出が困難なことにも起因していると考えられる。また、碓氷川右岸の上位段丘では地表下８～９ｍで広域火山灰の姶良－Ｔｎ火山灰（ＡＴ層：約24,000～25,000年前）が確認される。なお、安中市の古城遺跡で、ＡＴ層前後の局部磨製石斧・ナイフ形石器が出土している。

縄文時代

今回の上信越自動車道関連の発掘調査において、当該期遺跡の状況が多数明らかにされた。

碓氷川右岸では、八城二本杉東遺跡(1)・行田大道北遺跡(2)・行田梅木平遺跡(3)・新堀東源ヶ原遺跡(4)が調査されている。八城二本杉東遺跡では、前期関山式期の住居跡が円形柱穴列を取り囲むように検出された。行田大道北遺跡では、早期押型文期の住居跡１軒・前期黒浜～諸磯式期を中心とする集落跡・後期初頭の敷石住居跡などが検出されている。また、前期の遺構からクッキー状炭化物が出土している。行田梅木平遺跡では、中期末葉から後期にかけて形成されたとみられる弧状列石と配石墓群が３群検出され、西方に位置する妙義山を意識して構築された可能性が指摘されている。新堀東源ヶ原遺跡は、中期初頭～末葉の大規模な集落跡であるが、前期花積下層式期の住居跡及び同時期とみられる滑石製品・未製品・砕片などが大量に検出され、工房跡の可能性も考えられている。同遺跡では、早期押型文期の住居跡も検出されている。

碓氷川左岸では、前期諸磯式・後期加曽利Ｂ式期の住居跡や後期の配石墓が検出された五料野ヶ久保遺跡(6)、早期撚糸文期末の住居跡が検出された横川大林遺跡(8)が調査されている。

碓氷川支流の入山川左岸では、西野牧小山平遺跡(11)から石棒製作跡が発見され、注目されている。同製

作跡は、浅間Ｄ軽石と思われる橙色軽石の直下で検出されており、中期後半の時期が想定されている。

上信越自動車道関連以外でも、前～晩期の遺物が出土した千駄木岩陰遺跡(24)、敷石住居跡４軒など検出された仁田遺跡(23)、後期初頭の敷石住居跡と環状列石が検出された暮井遺跡(22)、前期関山式期の住居跡が検出された八城赤羽根遺跡(18)、後期前半の敷石住居跡が検出された二軒在家二本杉遺跡(17)などの遺跡が調査されている。

弥生時代

碓氷川右岸では、上人見遺跡(13)で再葬墓に使用したとみられる土器が出土しているほか、八城二本杉東遺跡でもほぼ同時期の遺構・遺物が検出されている。また、行田梅木平遺跡では東海地方西部の水神平式と思われる壺が出土している。さらに、松井田工業団地遺跡(15)でも中期後半の住居跡が調査されている。

碓氷川左岸では、五料稲荷谷戸遺跡(7)から中期初頭の岩櫃山式土器が出土している。

細野丘陵東端に位置する国衙遺跡(27)では、中期後半から後期の住居跡３軒が調査されている。

古墳時代

松井田町地域の古墳は、『上毛古墳綜覧』（1938，群馬県）に63基が記載されており、松井田・西横野・塚原・九十九・細野地区などに後期～終末期を中心とした古墳群がある。増田川右岸に位置する下増田上田中遺跡(83)の１号古墳は、Ｔ字状の横穴式石室を有するもので円筒埴輪や須恵器が出土している。同古墳は出土遺物などから６世紀前半（初頭）の築造とみられ、県内における横穴式石室受容期の古墳と考えられる。同様の横穴式石室は、九十九川流域の安中市・後閑３号墳にもみられる。なお、碓氷川流域には安中市に、同じく横穴式石室受容期の前方後円墳である簗瀬二子塚古墳がある。

集落跡は、松井田工業団地遺跡や国衙遺跡などで後期の住居跡が調査されている。また、入山峠祭祀遺跡(89)では、４世紀代から６世紀代の土師器・滑石製模造品が多量に検出されている。なお、同遺跡での祭祀は、奈良・平安時代まで継続するようである。

奈良・平安時代

原遺跡(10)では、布掘りを施す大形の掘立柱建物跡が検出され、東山道の坂本駅跡の一部と推定されている。なお、東山道は入山峠越え・碓氷峠越えの二説がある。また、五料稲荷戸遺跡では、浅間Ｂ軽石が埋没土上層に堆積する大規模な溝状遺構が検出されている。

集落跡は、松井田工業団地遺跡で大規模な集落跡が調査されているほか、愛宕山遺跡(26)・仁田遺跡・暮井遺跡・人見北原遺跡(16)・五料山岸遺跡(19)・国衙遺跡・下増田天神原遺跡(29)・二軒在家二本杉遺跡などが調査されている。これらの遺跡の内、愛宕山遺跡では、皇朝十二銭の万年通宝や巡方・丸鞆が出土している。また、上信越自動車道関連では、八城二本杉東遺跡・行田梅木平遺跡・五料平遺跡(5)・五料野ヶ久保遺跡・五料稲荷谷戸遺跡・横川萩の反遺跡(9)・原遺跡で住居跡が調査されている。

生産遺跡としては、松井田工業団地遺跡や新堀陣場遺跡(25)で浅間Ｂ軽石下の水田跡が検出されている。また、高梨子碓貝戸遺跡では、同軽石下の畠跡が調査されている。近接して位置する五料山岸遺跡・五料平遺跡では、多量の須恵器が検出され、周辺に窯跡の存在が推測されている。

中・近世

城郭では、北条氏の重臣・大道寺氏の松井田城(31)が著名で、ほかに松井田西城(32)・小日向城(33)・下増田城・愛宕山城・坂本城・大王寺城・人見城・名山城などが知られている。

生産遺跡では、横川大林遺跡・下増田百石遺跡(88)・上増田長久保遺跡(80)で浅間Ａ軽石下の畠跡が検出されている。また、人見北原遺跡では、「妙義道」と推定される道路状遺構が調査されている。

第１表　松井田町遺跡一覧表（１）

No	遺　跡　名	時　　代	種　　別	概　　要
1	八城二本杉東遺跡	縄文前期・中期、弥生前期、平安	集落跡	縄文前期関山式期を主体とする集落跡。住居跡35軒、土坑217基、円形柱穴列２列、掘立柱建物跡１棟。
2	行田大道北遺跡	縄文早期～後期	集落跡	縄文前期を主体とする集落跡。住居跡117軒、敷石住居跡１軒、土坑532基、集石５基、溝３条、掘立柱建物跡４棟、ピット群等が検出され、クッキー状炭化物が出土している。
3	行田梅木平遺跡	縄文前期～後期、弥生、平安	配石遺構、集落跡	配石・配石墓群３群、住居跡35軒、土坑506基、屋外埋設土器26基、製鉄跡２基、掘立柱建物跡35棟、集石８基、溝、柵列跡。
4	新堀東源ケ原遺跡	縄文早期～中期、弥生、古墳、平安	集落跡	縄文中期環状集落、住居跡182軒、土坑1070基、チャート剥片集中区１ケ所、屋外埋設土器15基、掘立柱建物跡２棟、古墳２基が検出され、滑石製品・スタンプ型土製品が多量に出土している。
5	五料平遺跡	奈良・平安	集落跡	住居跡７軒、土坑77基、溝４条。集石５基、上野型短頸壷、円面硯等の須恵器が多量に出土し、他に緑釉椀。刀子、鉄族、鉄滓、紡錘車等が出土している。
6	五料野ケ久保遺跡	縄文前期・中期・後期、奈良・平安	配石遺構、集落跡	縄文後期配石遺構、配石墓28基を主体とし、堀之内・加曽利Ｂ・高井東式の遺物が多量に出土している。他に縄文前期住居跡７軒、中期住居跡３軒。後期住居跡２軒、敷石遺構２基、集石土坑、埋設土器、奈良・平安時代住居跡２軒、溝２条を検出している。
7	五料稲荷谷戸遺跡	奈良・平安	集落跡、大形溝状遺構	住居跡23軒、掘立柱建物跡４棟、大形溝状遺構１条、畠跡３枚、道跡、溝、井戸等が検出され、大形溝状遺構は道跡の可能性が指摘されている。
8	横川大林遺跡	縄文早期・前期・中期	集落跡、土坑群	縄文早期後半絡条体圧痕文系土器を伴う土坑群、集石、焼土跡を主体として、早期前半住居跡５軒、前期・中期住居跡４軒、近世畑跡等が検出され、黒曜石を主体とする石鏃製作関係の資料が大量に出土している。
9	横川萩の反遺跡	平安	住居跡	平安時代住居跡１軒が検出され、状況的に焼失家屋と考えられる。
10	原遺跡	奈良・平安	集落跡、掘立柱建物跡	住居跡５軒、大形掘立柱建物跡１棟、溝２条。大形掘立柱建物跡は遺構形態と立地条件より、東山道坂本駅家の可能性が指摘され、埋め戻しによる保存処理がとられている。
11	西野牧小山平遺跡	縄文中期	石棒工房跡	全国初の発見例である縄文時代中期末の石棒工房跡が検出され、注目された遺跡である。石棒は最長１ｍを測る大形で原石から未製品・破損品・完成品に至る各段階のものが124点出土し、石棒破片・剥片、石棒製作工具の敲き石、加曽利Ｅ３式土器等が伴う状況で出土している。
12	東山道推定路	古代	古代官道	入山峠、碓氷峠の２説有り。
13	上人見遺跡	弥生	再葬墓	弥生中期の壷、甕、スクレイパー出土。
14	人見谷津遺跡	縄文～古墳、中世	住居跡	弥生後期住居跡、人見城堀切跡、縄文土器、弥生土器、土師器出土。
15	松井田工業団地遺跡	古墳～平安	集落跡、水田跡	古墳から平安時代の住居跡445軒、掘立柱建物跡11棟、Ｂ軽石下の水田跡、古墳、井戸。
16	人見北原遺跡	古墳、平安	集落跡、道路等	平安時代住居跡、ピット群、土坑、近世の道路状遺構。
17	二軒在家二本杉遺跡	縄文、平安	住居跡	縄文後期柄鏡形敷石住居及び平安時代住居跡。
18	八城赤羽根遺跡	縄文、中世	住居跡、包蔵地	縄文前期住居跡、包含層、中世堀跡。
19	五料山岸遺跡	奈良・平安	廃棄場、住居跡	奈良時代土坑１基、須恵器片集中部１、平安時代住居跡２軒。
20	五料丙小竹遺跡	縄文、平安	集落跡、土坑等	縄文中期の配石遺構１基、平安時代住居跡１軒、土坑多数。
21	北野牧狐萱遺跡	縄文	包蔵地	土器小片のみ。
22	蓑井遺跡	縄文～平安	集落跡等	敷石住居を含む縄文住居跡４軒と環状列石、平安時代住居跡１軒、中世溝跡、石垣等。
23	仁田遺跡	縄文～平安	集落跡等	敷石住居を含む縄文住居跡６軒、平安時代住居跡３軒。
24	千駄木岩陰遺跡	縄文～平安	包蔵地（住居跡）	昭和48年に県と町で調査した岩陰遺跡、縄文～平安時代の遺物が多数検出、県指定史跡。
25	新堀陣場遺跡	平安	水田跡	Ｂ軽石下の平安時代水田跡。
26	愛宕山遺跡	奈良～平安	集落跡	住居跡５軒、４号住居より木工用具、装身具、紡織具、万年通宝出土。
27	国衙遺跡	縄文～平安	集落跡等	石組状遺構と石組炉１基、弥生時代住居跡３軒、古墳時代住居跡４軒、平安時代住居跡４軒。
28	国衙森浦朝日遺跡	縄文～近世	住居跡等	縄文後期柄鏡形敷石住居跡、包含層、弥生後期住居跡、山寄式円墳、江戸末期寺院跡。
29	下増田天神原遺跡	縄文、平安	住居跡、包蔵地	縄文前期包蔵地及び平安住居跡１軒、遺跡西側で三角滴形土製品出土。
30	土塩下原遺跡	縄文	住居跡、包蔵地	縄文中期住居跡２軒、集石遺構３基、炉跡１基、包含層。
31	松井田城	中世	城館跡	安中氏、武田氏を経て北条氏の重臣大道寺駿河守政繁により現在の城が形成された。天正18年（1590）年に前田利家を総大将とする北国勢により落ちる。昭和60年度林道開発計画により事前の発掘調査が行われ、青磁、古瀬戸、刀子、石臼等が出土。
32	松井田西城跡	中世	城館跡	諏訪但馬守の居城と伝えられている。
33	小日向城	中世	城館跡	松井田城の東北の出城として武田氏時代に築かれたものと思われる。
34	大王寺城	中世	城館跡	方形館跡か。上原兵庫の城と伝えられる。
35	人見城	中世	城館跡	南北朝期、足利氏に属した人見四郎恩和の館として創建され、戦国期に大改修が行われたと思われる。
36	河田陣屋	近世	単郭環壕跡	元和２年旗本政親により築かれる。
37	塚原古墳群	古墳	墳墓	10数基の小円墳群、数基は消滅し、うち１基は前方後円墳の可能性あり。
38	西横野６号墳	古墳	墳墓	戦前の調査では直刀２振が出土。宅地内にあり墳丘部は植込になっている。
39	西横野21号墳	古墳	墳墓	墳丘部は残存しない。畑地面に玄室部の石が数個あるのみ。
40	西横野20号墳	古墳	墳墓	石室の一部を残すのみ。
41	西横野５号墳	古墳	墳墓	石室の大石が少々存在する他はほとんど原型を留めない。
42	松井田２号墳	古墳	墳墓	ほとんど原型を留めていない。石室奥壁と側壁基部の石が少々残存。
43	松井田３号墳	古墳	墳墓	石室は土中に残存しているようである。墳丘上部は削平。

第２表　松井田町遺跡一覧表（２）

No	遺　跡　名	時　　代	種　　別	概　　要
44	松井田５号墳	古墳	墳墓	墳丘は削平され、石室部が僅かに残る。本墳の他すべて横穴式石室の小円墳。
45	松井田６号墳	古墳	墳墓	（えな塚、陣場塚）300年程前から昭和30年前代までえな塚であったようだ。
46	小日向古墳群	古墳	墳墓	古墳時代末期の小円墳が密集しており、一部前方後円墳も存在する。
47	臼井７号墳（本学院）	古墳	墳墓	東西10ｍ、南北８ｍ、高さ３ｍ。
48	（人見法正寺）	古墳～平安	包蔵地	土師器、須恵器が散布する。古墳群の中にあり、周辺の濃密な散布が想定される。
49	（二軒在家別所）	縄文	包蔵地	縄文中期を中心に濃密な遺物の散布が確認されている。
50	（二軒在家上座馬）	古墳～平安	包蔵地	土師器、須恵器が散布する。周辺への広がりが想定される。
51	（新堀西下原）	縄文～平安	包蔵地	縄文、土師器、須恵器、布目瓦、子持勾玉が出土した。一帯は各期の複合遺跡として濃密な分布があるものと思われる。
52	（五料滝名田）	平安	包蔵地	土器の散布が見られる。
53	（五料高墓）	中世末		板碑、磨耗が進み、年号は不明ながら小型でかなり形骸化しており、中世末期の所産と考えられる。
54	（北野牧遠入）	縄文	包蔵地	縄文時代加曽利Ｂ式期の土器が検出されている。
55	（小日向中原臼田）	縄文～平安	包蔵地	縄文土器、土師器、須恵器が散布。小日向地区で古墳群と共に分布域は広がると思われる。
56	高梨子三次郎遺跡	縄文、古墳～平安	集落跡	古墳～平安時代住居跡14軒、掘立柱建物跡、土坑、溝等。
57	（高梨子中貝戸）	弥生～平安	包蔵地	周辺部は濃密な散布地。弥生、土師器、須恵器が見られる。
58	高梨子椚坂	弥生	包蔵地	弥生後期の樽式土器が散布する。
59	（新井白石）	縄文	包蔵地	遺物の散布が認められる。
60	（土塩山口）	中世末		小型の板碑で記年銘等は不明。中世期の物と考えられる。
61	高梨子碓貝戸遺跡	弥生、奈良・平安	集落跡、畠跡	弥生、奈良～平安の住居跡27軒とＢ軽石下畠跡、集石、土坑等。
62	小日向遠地谷戸遺跡	弥生	住居跡	弥生後期樽式土器及び住居跡２軒。
63	（土塩東大久保）	縄文	包蔵地	昭和33年中期加曽利Ｅ式土器のほぼ完形品が出土。昭和35年畑の開墾の際に前期関山式土器が出土。
64	（新井上原）	縄文	包蔵地	昭和32年、中期勝坂式土器が出土。
65	（土塩畑中）	縄文	包蔵地	昭和49年、道路拡幅の際に後期堀之内式土器の完形品が出土。
66	（上増田上細野原）	縄文	包蔵地	昭和31年、後期加曽利Ｂ式土器が出土。（細野小所蔵）
67	（上増田板ケ沢）	縄文	包蔵地	昭和11年、後期加曽利Ｂ式期の小型コップ型土器が出土。
68	（上増田宮掛～浅谷）	縄文	包蔵地	中期を中心とした土器、石器が濃密に分布している。
69	（土塩地内）	縄文	包蔵地	昭和28年～40年にかけて用水路工事が行われ、これに伴い縄文中期を中心に多くの遺物及び遺構が出土。住居床面の一部、炉、敷石部等の他67の北西では土坑が10数基検出され、該地周辺での広がりが推察される。
70	（土塩長久保）	縄文	包蔵地	中期を中心に遺物が確認されている。
71	（土塩白石）	縄文	包蔵地	中期を中心とした遺物の分布が認められ、石鏃が多く見られる。（60と同一）
72	細野７号墳	古墳	墳墓	（狩家）。上毛古墳総覧によると帆立貝古墳とあるが現状では不明。昭和53年の県道工事の際に葺石の一部と須恵器、土師器片が出土。
73	細野８号	古墳	墳墓	石室部は陥没しているが全体に残存状況は良好。前方後円墳と思われる。
74	（土塩坊地）	鎌倉		建治４（1278）年の銘をもつ板碑。残長171㎝と大型で頂上線、天蓋、瓔珞、種子（キリーク、サ、サク）及び蓮座と共に下部には無量寿経念仏往生願の一節が刻まれる。
75	（上増田引ノ内）	中世末		小型の石碑で記年銘等は全く不明。筒中に所在する。
76	（上増田引ノ内）	中世末		同上。八郡に所在する。
77	原遺跡（町調査分）	縄文、奈良・平安	包蔵地、集落跡	縄文包含層及び奈良～平安期に住居跡４軒、土坑等。
78	二軒在家東光寺遺跡	縄文、平安他	集落跡	縄文住居跡２軒、平安掘立柱建物跡２棟、土坑、溝跡等。
79	土塩西大久保遺跡	縄文	包蔵地	縄文中期遺物包含層。
80	上増田長久保遺跡	縄文、近世	包蔵地、畠跡	縄文土器片少々。Ａ下畠跡、縄文～古代（？）遺跡。
81	新堀東下原遺跡	平安	住居跡	平安時代住居跡２軒、土坑12基。
82	下増田下田中遺跡	古墳、平安	住居跡、墳墓他	古墳時代住居跡２軒、古墳周溝１、平安時代溝跡、土坑。
83	下増田上田中遺跡	縄文、古墳～平安	住居跡、墳墓他	縄文住居跡１軒、弥生土器、Ｔ字形石室円墳２基、平安住居跡１軒。
84	松井田塚越遺跡	縄文、古墳	包蔵地、住居跡	縄文時代土坑、敷石住居跡（？）１軒、古墳時代遺物包含層。
85	下増田十二平遺跡	平安	住居跡	平安時代住居跡２軒、土坑。
86	人見東原遺跡	古墳	集落跡	古墳時代住居跡３軒。
87	八城三日市遺跡	縄文、平安	集落跡	縄文中期住居跡４軒、土坑12基、平安時代溝跡。
88	下増田百石遺跡	古墳、近世	住居跡、畠跡	古墳時代住居跡１軒、Ａ下畠跡。
89	入山峠祭祀遺跡	縄文、近世	祭祀跡	古墳時代前期を中心とする祭祀遺跡、滑石製模造品を主体として土師器、須恵器、銅銭等が出土している。

第3節　調査会の経過

松井田町遺跡調査会は昭和62年度に組織され、西野牧小山平遺跡の確認調査から開始し、平成8年度の報告書刊行をもって解散した。調査組織は以下の通りである。

第3表　松井田町遺跡調査会組織表1（昭和62年度～平成3年度）

組織＼年度		昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度
職名	役職	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
会長	町長	中山治秀	武田弘	武田弘	武田弘	武田弘
副会長	教育長	小板橋文夫	小板橋文夫	宮下初太郎	宮下初太郎	宮下初太郎
理事	教育委員長	宇佐美忠一	宇佐美忠一	宇佐美忠一	宇佐美忠一	佐藤博昭
	文化財調査委員	小林二三雄	小林二三雄	関光保	関光保	関光保
	文化財調査委員	上原富次	上原富次	上原富次	上原富次	上原富次
	総務課長	坂本克朋	坂本克朋	寺嶋正行	春原直方	上原坦
	企画課長	上原坦	上原坦	上原収	上原収	上原収
	財政課長	上原長男	春原直方	萩原修一	白石敏行	白石敏行
	社会教育課長	白石敏行	土屋眞	土屋眞	土屋眞	土屋眞
顧問	県企画部交通対策課長	町田達男	小野宇三郎	小野宇三郎	小野宇三郎	磯貝弘二
	県教委管理部参事文化財保護課長	梅沢重昭	梅沢重昭	梅沢重昭	梅沢重昭	
	県教委管理部文化財保護課長					上月正博
	日本道路公団富岡工事事務所長	栗原紀一	栗原紀一	栗原紀一	倉沢貞夫	倉沢貞夫
	日本道路公団佐久工事事務所長	蛭川友司	蛭川友司			
	山武考古学研究所長	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫
監事	監査委員	松本武夫	松本武夫	松本武夫	佐藤敏夫	須藤祐伸
	収入役	小板橋正昭	小板橋正昭	内田武夫	寺嶋正行	寺嶋正行
事務局長	文化財保護係長	伊藤節夫	伊藤節夫	伊藤節夫	伊藤節夫	
	社会教育課課長補佐文化財保護係長					清水博
事務員	文化財保護係主事	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦
	松井田町遺跡調査会臨時職員	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子

第4表　松井田町遺跡調査会組織表2（平成4年度～平成8年度）

組織＼年度		平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
職名	役職	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
会長	町長	武田弘	武田弘	武田弘	武田弘	武田弘
副会長	教育長	宮下初太郎	宮下初太郎	稲塚勇	稲塚勇	稲塚勇
理事	教育委員長	中島久	山賀基宏	山賀基宏	山賀基宏	山賀基宏
	文化財調査委員	関光保	上原富次	上原富次	上原富次	上原富次
	文化財調査委員	上原富次	佐藤義一	佐藤義一	佐藤義一	佐藤義一
	総務課長	上原坦	白石敏行	白石敏行	白石敏行	白石敏行
	企画課長	上原収	武井貞夫	武井貞夫	武井貞夫	武井貞夫
	財政課長	白石敏行	土屋眞	土屋眞	土屋眞	土屋眞
	社会教育課長	土屋眞	金谷宏二	金谷宏二	金谷宏二	金谷宏二
顧問	県企画部交通対策課長	青木茂一				
	県土木道路建設課長		武井上巳	武井上巳	高橋丑五郎	高橋丑五郎
	県教委管理部参事文化財保護課長	上月正博	荒畑大治	荒畑大治	荒畑大治	
	県教委文化スポーツ部文化財保護課長					土田明
	日本道路公団富岡工事事務所長	佐々木芳文	佐々木芳文			
	日本道路公団佐久工事事務所長			土井俊二	土井俊二	村上友章
	山武考古学研究所長	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫
監事	監査委員	須藤祐伸	須藤祐伸	須藤祐伸	中山公平	中山公平
	収入役	寺嶋正行	寺嶋正行	寺嶋正行	寺嶋正行	寺嶋正行
事務局長	社会教育課課長補佐文化財保護係長	清水博	清水博	清水博	佐野興伸	佐野興伸
事務員	文化財保護係主事	水澤祝彦	田口修	田口修	田口修	田口修
	松井田町遺跡調査会臨時職員	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子

五料平遺跡

（五料Ⅰ遺跡）

第１章　遺跡の立地

松井田町は北方を地蔵峠丘陵によって群馬郡倉淵村とさかいし、西方は碓氷峠、入山峠および和美峠を結ぶ県境稜線によって長野県北佐久郡軽井沢町と接し、南方は横野丘陵によって甘楽郡妙義町とそれぞれ接していて東方は地蔵峠丘陵より派生した後閑丘陵によって安中市とさかいしている。

松井田町の地形は北西部、西部および南西部を、それぞれ山地で囲まれており、その山地から東流するいくつかの河川（増田川、九十九川、碓氷川）とその流路には丘陵（細野丘陵、松井田丘陵、西横野丘陵、長者久保丘陵）が形成されるように、松井田町は河川、丘陵、山地によって複雑な地形になっている。

本遺跡は九十九川と碓氷川間に形成された北西から南東にのびる松井田丘陵の南縁に位置し、東流する碓氷川の右岸、中位段丘と呼ばれる河岸段丘上に立地する。河床からの比高は20ｍ程にもなる。南方には妙義山を望む。

松井田丘陵に沿って古代から主要な交通路が通り、古代の東山道、近世の中山道と呼ばれてきた。本遺跡は中山道の道筋にあり、すぐ西隣に五料茶屋本陣が保存されている。

現在でもこのルートには国道18号線やJR信越本線が平行しており、本遺跡は松井田丘陵からJR信越本線間とJR信越本線から国道18号線間と国道18号線から碓氷川間の３地区に区分されている。

松井田丘陵からJR信越本線の地区ではロームの２次堆積があり２次堆積ローム上に歴史時代の遺構が検出された。JR信越本線から国道18号線の地区では安定したローム層が形成され、縄文時代中期の遺物が出土している。国道18号線から碓氷川の地区では河岸段丘の礫石層が一面に検出された。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

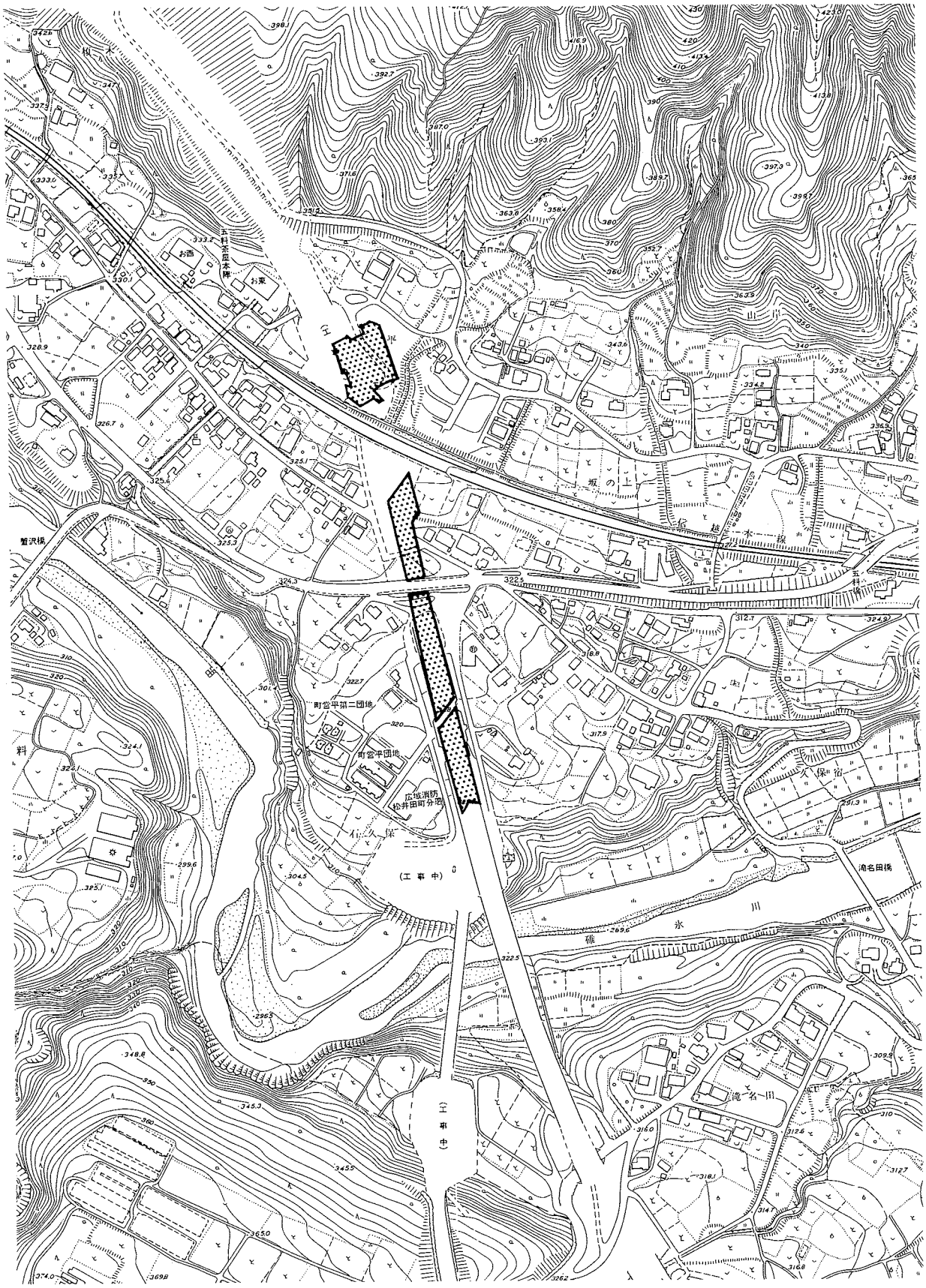
確認調査）

発掘調査は、遺構分布状況・時期・性格などを確認するための試掘調査から開始し、予めテストピットを数ヵ所設定し、重機によりトレンチ法によって行われた。試掘調査は対象面積の約7.50%の試掘を行う事とし、幅1.5ｍのトレンチを20ｍ間隔で設定して実施された。各トレンチは東西方向に設定し、呼称は北から１・２・３…とした。

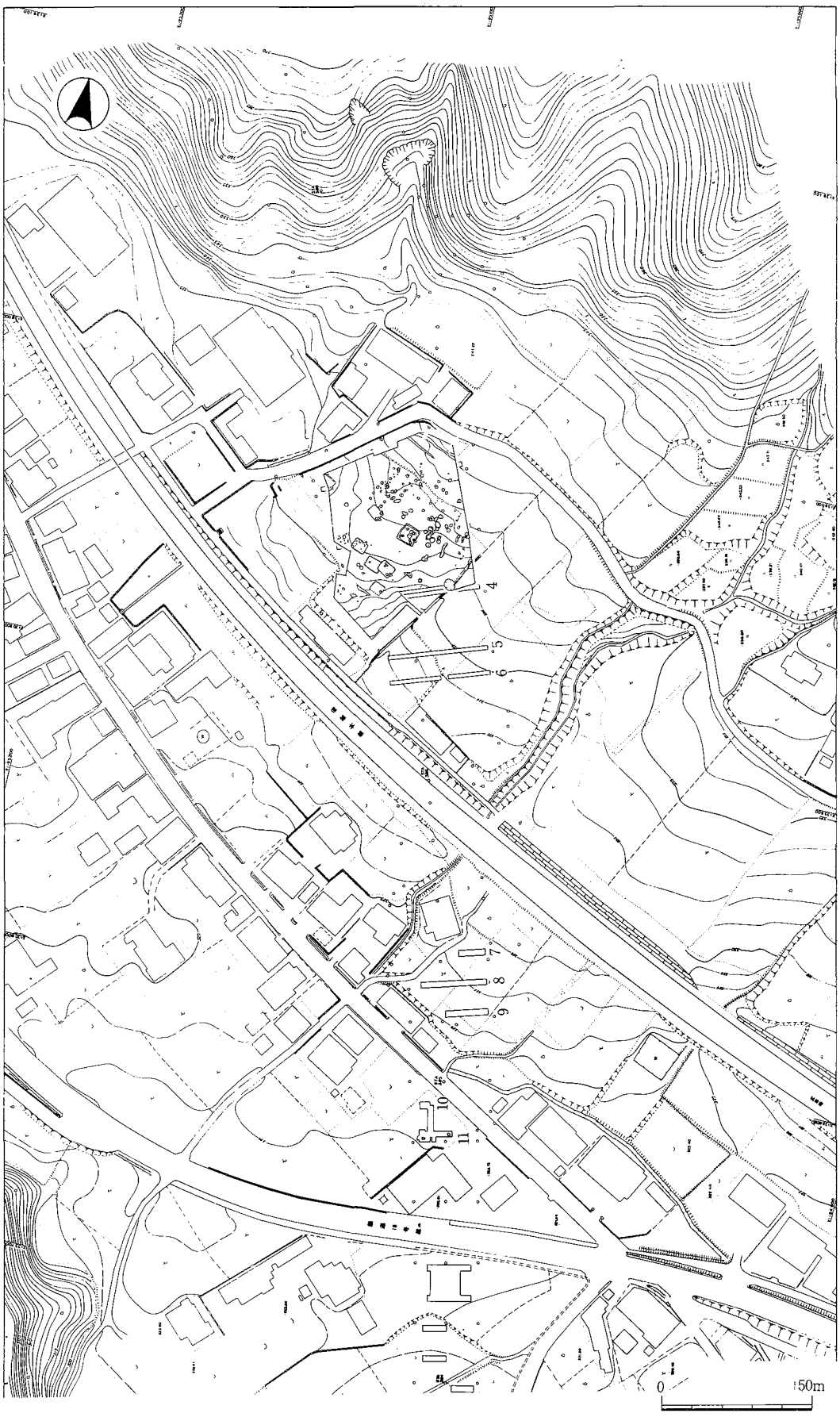
その結果、28トレンチを南限とし１～３のトレンチ間に遺構が密に捉えられた為この間を拡張した。遺構は南西側に面した緩やかな斜面にのみ見られる事が判明した。他のトレンチは土坑が単発的に検出されたがまとまりがないため、そのつど調査を行なった。土坑番号は通してある。

本調査）

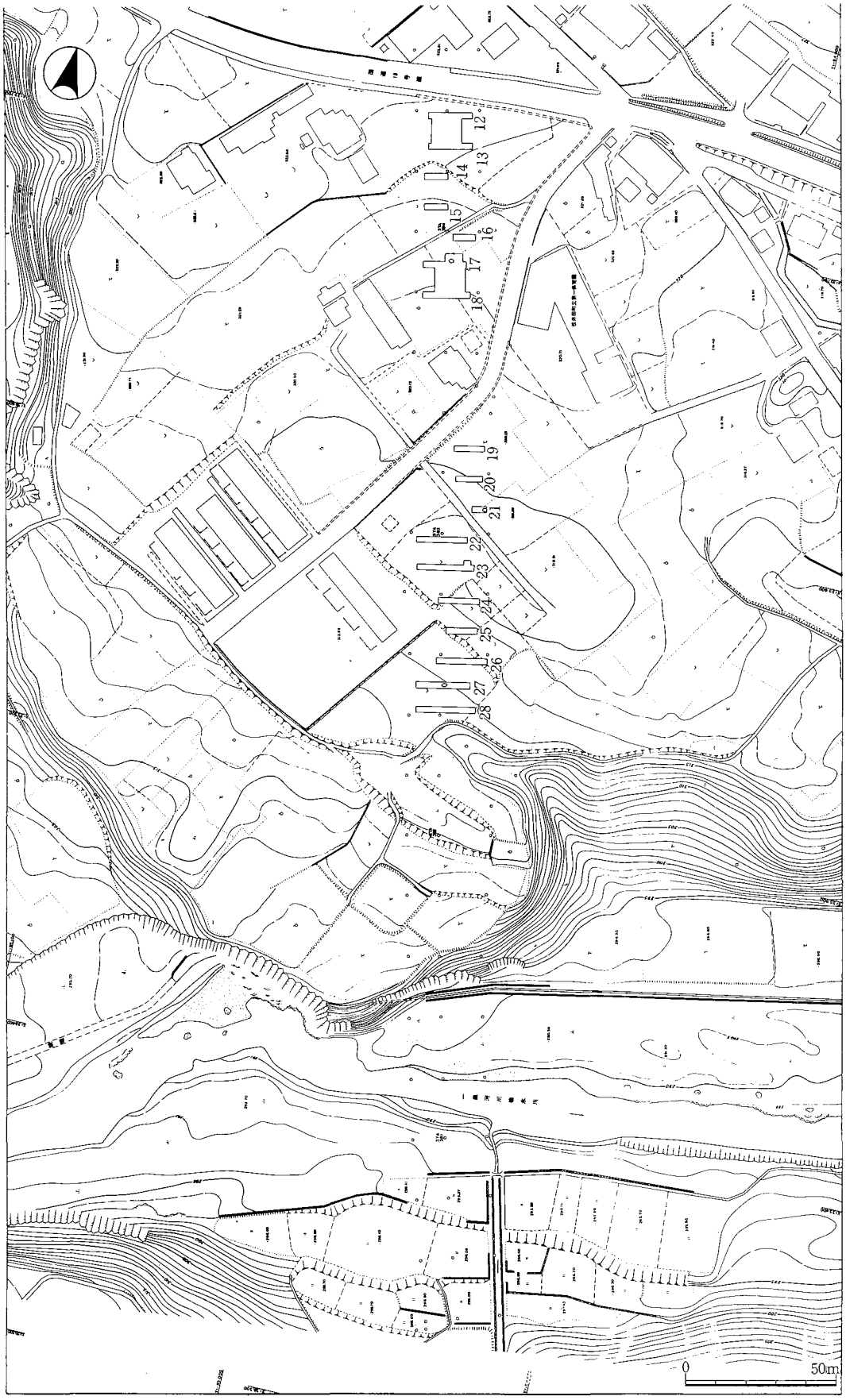
試掘調査によって得られた成果に基づき、群馬県教育委員会の指導の基に本調査の範囲を決定した。調査区には公共座標（Ｘ座標36,010、Ｙ座標－95,130）を基準に基準10ｍグリッドを設定し、グリッド番号は南北をＡａ・Ａｂ…Ａｋ、東西を算用数字でそれぞれ付した。



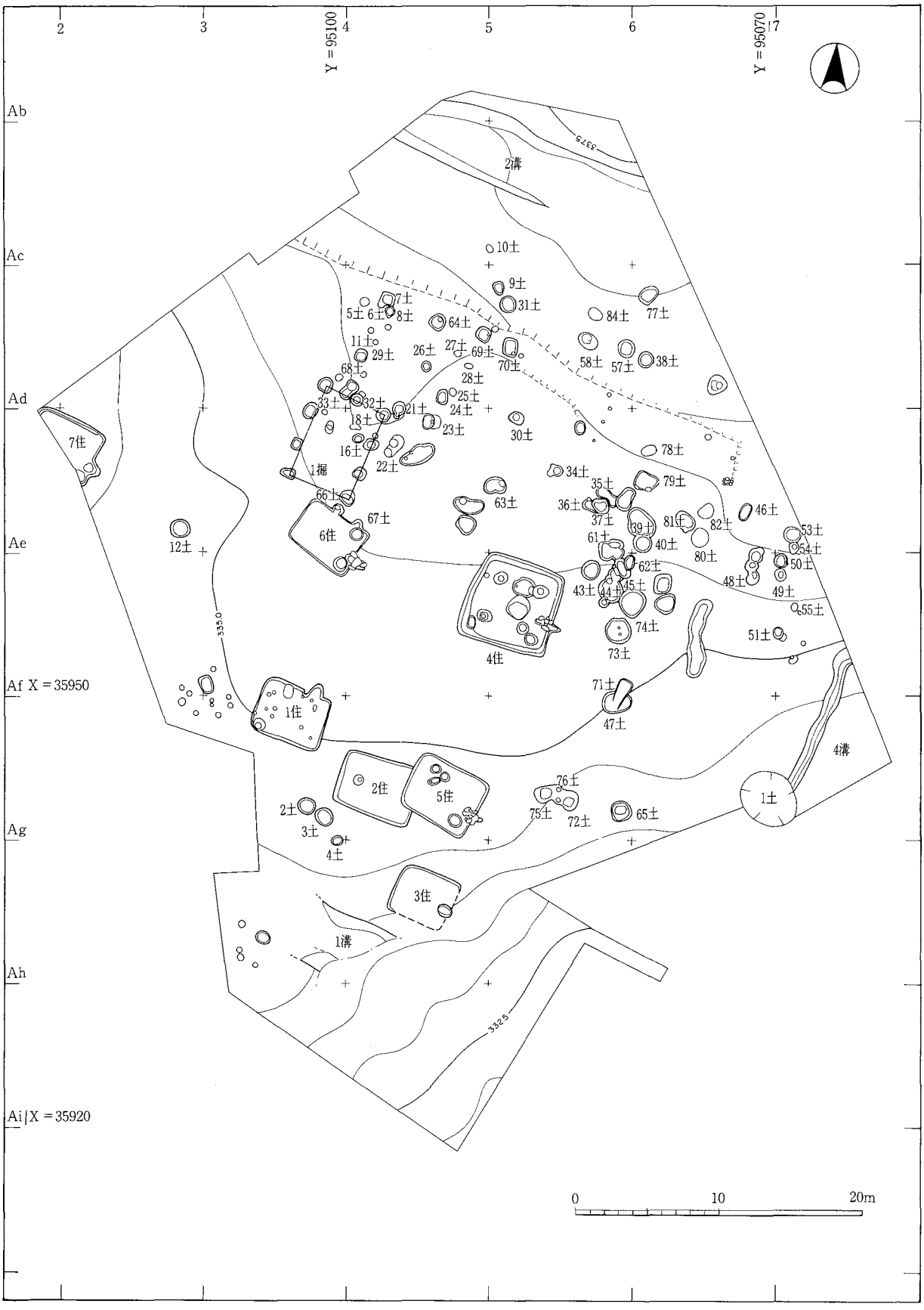
第１図　関越自動車道松井田町路線図と調査区（１/2,500）



第２図　トレンチ設定図（１）



第３図　トレンチ設定図（２）


2
3
4
5
6
7
Y = 95100
Y = 95070
Ab
Ac
Ad
Ae
Af X = 35950
Ag
Ah
Ai X = 35920
2溝
1掘
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
1溝
4溝
1土
0
10
20m

第４図　遺構配置図

実測図の縮尺は、遺跡全体図……500分の１、遺構配置図……200分の１、住居跡・掘立柱建物跡・土坑……20分の１、カマド……10分の１で実施した。

写真の撮影は、白黒用大型カメラ１台、白黒及びカラースライド用小型カメラ各１台を使用し、調査の進捗状況に合わせ、また各調査段階の必要に応じて実施した。さらに、遺跡の全体写真はローリングタワーより行ない、遺構の状況により住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡等も対象とした。

第２節　調査の経過（日誌抄）

１月期　17日作業開始。トレンチ（以下ト）を４本とテストピット（以下TP）を設定し、TPより深鉢片出土。16日４号住居跡東隅よを掘り下げ開始。確認面はＢ軽石の直下黒色土（締まり強）とする。

２月期　４日住居跡２軒確認。13日３号土坑より勝坂式の深鉢片出土。16日４号住居跡東隅より鉄鏃・刀子出土。27日調査区の南東側が湧水などにより水没する。

３月期　１日１～４号住居跡、５～10号土坑、１号溝の掘り下げ。２日JR信越本線北側（以下JR北）の全測図作成。９日５～７号住居跡の掘り下げ。14日７号住居跡のカマドは東壁南寄りに位置する石組みである。13～15・17・59・60号土坑は長方形を呈し焼土を多く含み、結果的には掘立柱建物跡の掘り方となる。

４月期　４日20～33・34～64号土坑、３号溝掘り下げ。14日１号掘立柱建物跡（側柱式）３×１間の覆土は焼土を含む黒色土である。65～86号土坑掘り下げ。15日JR北は終了し、国道18号線（以下Ｒ18）との間をTPを設定し掘り下げる。17日JR北の埋め戻しを重機で行なう。19日１号土坑は井戸状の遺構か？。21日Ｒ18南のトを重機で掘り下げ開始。27日JR～Ｒ18間は重機が入らないため人力で行なう。

５月期　10日６～８ト間・JR北にはローム層が認められない。この周辺は現在では平坦となっているが元は谷地形の一部であろう。15日６～８ト間には遺構は検出されなかった。16日10トで阿玉台式の摩滅した深鉢がまとまって出土したが遺構は確認できなかった。11トを追加した結果遺構はない。19日Ｒ18南17・18・20・21トを掘り下げたが当初の目的であるＢ軽石直下の水田跡は確認できなかった。31日22～28ト掘り下げ。

６月期　２日26～28トのＡ軽石直下は段丘の礫層となる。12日JR～Ｒ18の間のトを人力により埋め戻し、全工程を終了する。

第３章　基本土層

第７トレンチの基本土層である。

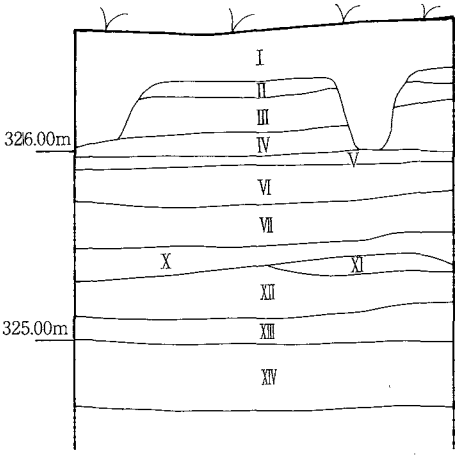
Ⅰ　暗灰色土　Ａ軽石を含む耕作土。締まり粘性なし。

Ⅱ　暗灰色土　Ｂ軽石。締まり粘性なし。

Ⅲ　黒色土　　締まり粘性ややあり。

Ⅳ　暗褐色土　赤橙色の軽石、ローム粒子を、Ｃ軽石を微量に含む。締まり良く粘性ややあり。

Ⅴ　暗褐色土　赤橙色の軽石、ローム粒子を、やや多く締まり良く粘性ややあり。



第５図　基本土層

Ⅵ　黒褐色土　赤橙色の軽石、ローム粒子を、やや多く締まり良く粘性ややあり。
Ⅶ　暗褐色土　赤橙色の軽石、ローム粒子を、やや多く締まり良く粘性ややあり。
Ⅷ　黒色土　　赤橙色の軽石、C軽石を微量に含み鉄分の沈殿が見られる。締まり粘性あり。
Ⅸ　黒色土　　赤橙色の軽石、C軽石を微量に含み鉄分の沈殿が見られる。締まり粘性あり。
Ⅹ　黒褐色土　赤褐色の軽石、ローム粒子を、C軽石を少量、砂粒を微量に含む。締まり・粘性あり。
Ⅺ　暗褐色土　赤褐色の軽石、ローム粒子を、C軽石を微量に、砂粒を多く含む。締まり・粘性弱い。
Ⅻ　黒色土　　赤褐色の軽石、C軽石を微量に含む。
ⅩⅢ　暗褐色土　小礫を微量に含む。締まり粘性あり。
ⅩⅣ　暗褐色土　小礫を微量に含む。締まり粘性あり。

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概観

五料平遺跡は、碓氷川によって形成された河岸段丘上に位置し、河床よりの比高は20ｍの差がある。碓氷川は石久保・滝名田・赤羽下辺りで屈折し瀬を形成するが、五料平遺跡付近は最初の瀬となっている。

本遺跡は、古代を主体とした集落跡で出土した須恵器は遺構数の割りには膨大な量であった。松井田町教育委員会が調査した工事用道路は、本遺跡北側の山麓に位置するが、調査により多量の須恵器が発見され、須恵器窯本体の存在は見られなかったものの周辺にはその存在が高いとされている。

また、当地域は碓氷川に沿って古代から主要な交通路として古代の東山道、近世の中山道として使用されて来た。本遺跡は中山道の道筋に当たり、すぐ西隣には五料茶屋本陣が保存されているなど、東山道との関わりは色濃いものと思われる。

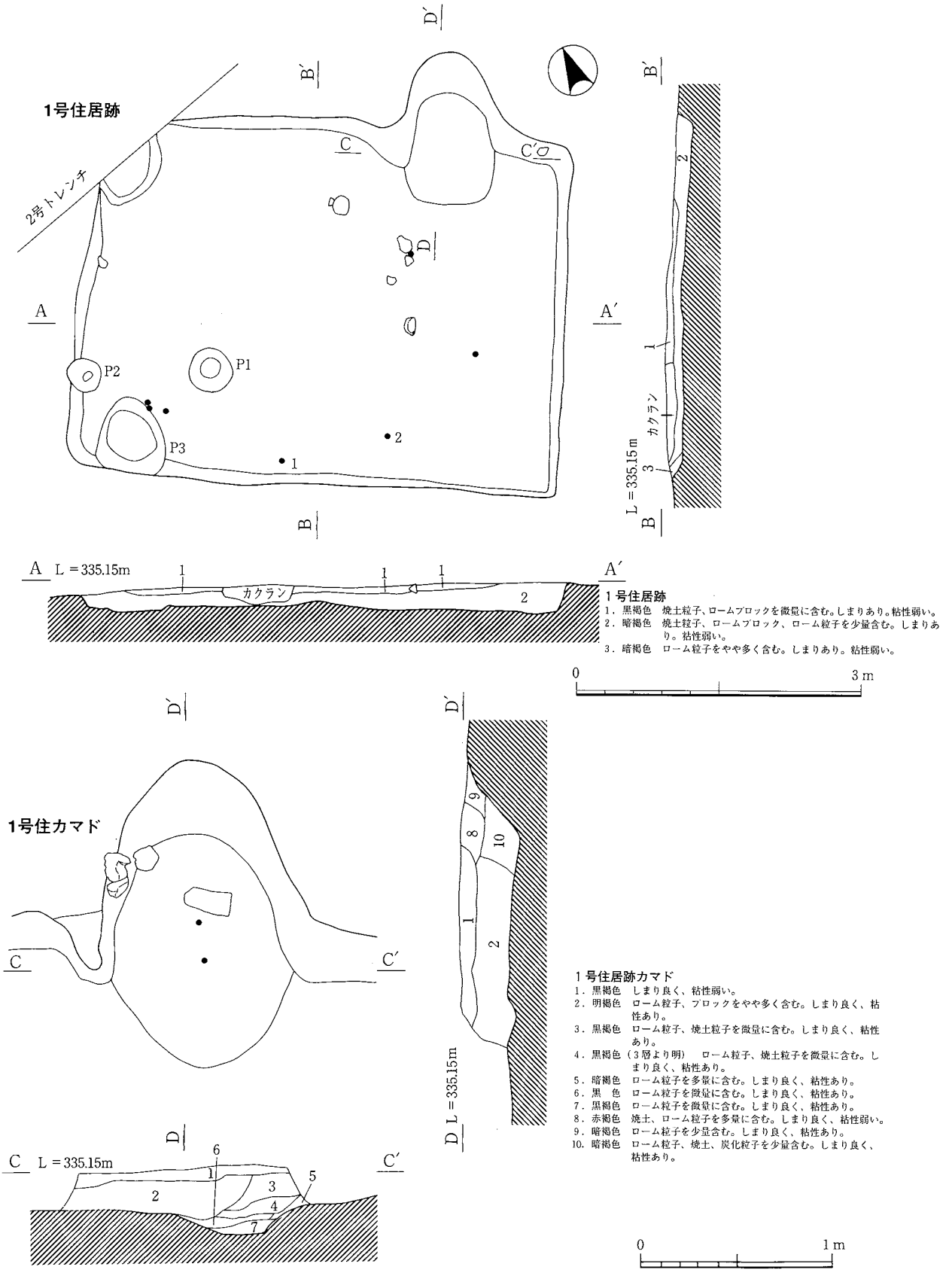
第２節　歴史時代

第１項　住居跡

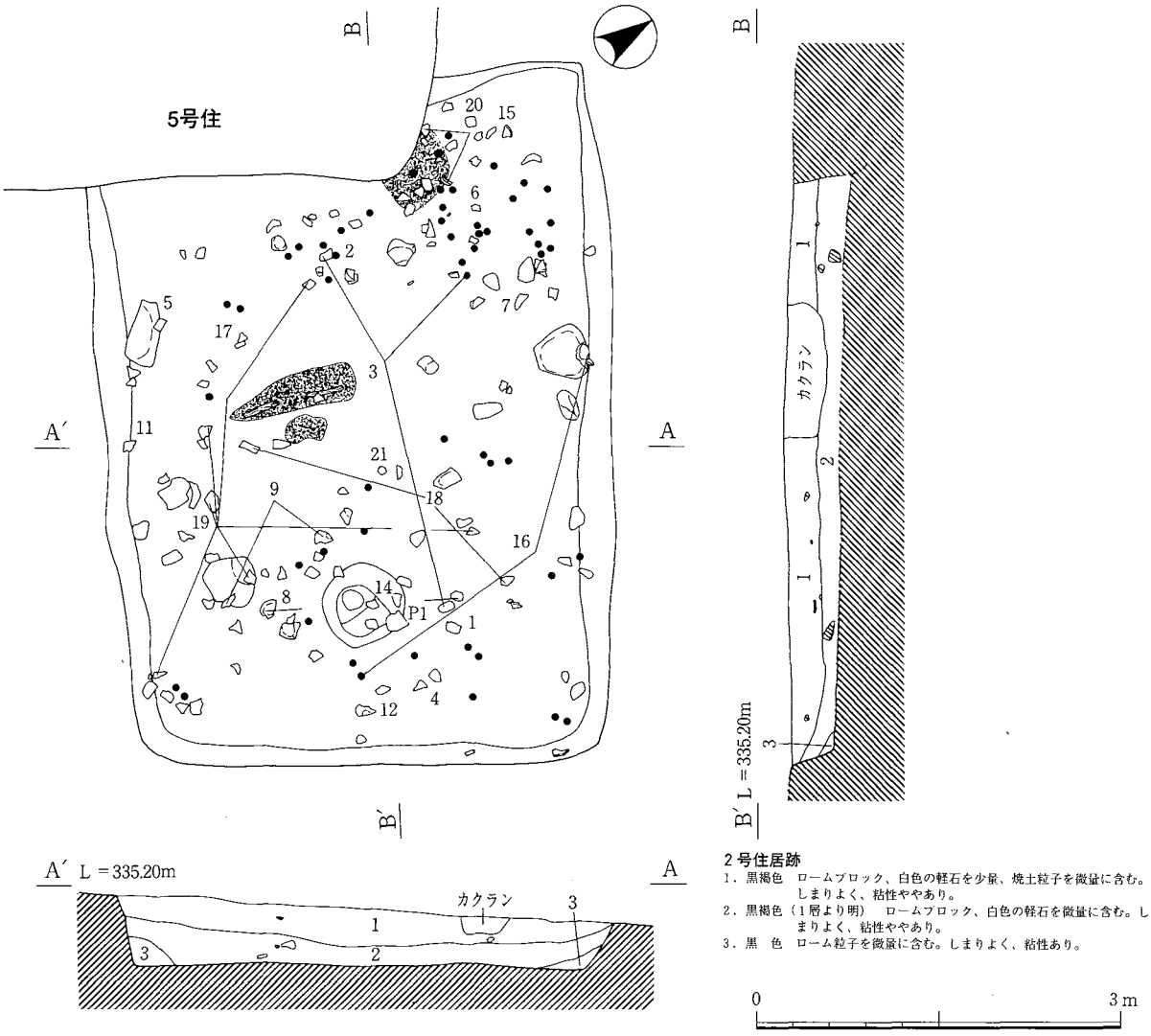
住居跡は７軒検出された。南緩斜面に散見されるもので８～９世紀代に亘る集落である。重複関係は２・５号住居跡（９世紀後半）があり、２号住居跡（８世紀前半）が古い。カマドは１号住居跡の北向きを除き大半が東向きである。形態は東西に長い方形を呈し、規模は東西軸4.80～6.00ｍ、南北軸3.00～7.88ｍである。主柱穴はこの中では大型の４号住居跡に見られる。

１号住居跡

形　態　東西に長い方形を呈する。　規　模　東西4.80ｍ，南北3.60ｍ。　主柱穴　なし。　梯子柱穴　明確ではないが位置的にＰ１・２がこれに相当すると思われる。　カマド　北壁に位置しやや東寄りに偏在する。燃焼～煙道は長さ・幅とも大きく地山を削り出し、特に燃焼部は幅１ｍと大きい。燃焼～煙道部には角礫が数点遺存するところからカマドの構築材と思われる。　貯蔵穴　南西隅角に位置する。規模は長軸0.80ｍ，短軸0.70ｍで三角形を呈する。　壁　溝　なし。　出土遺物　南壁付近より土師器非ロクロ坏と



第6図　1号住居跡実測図

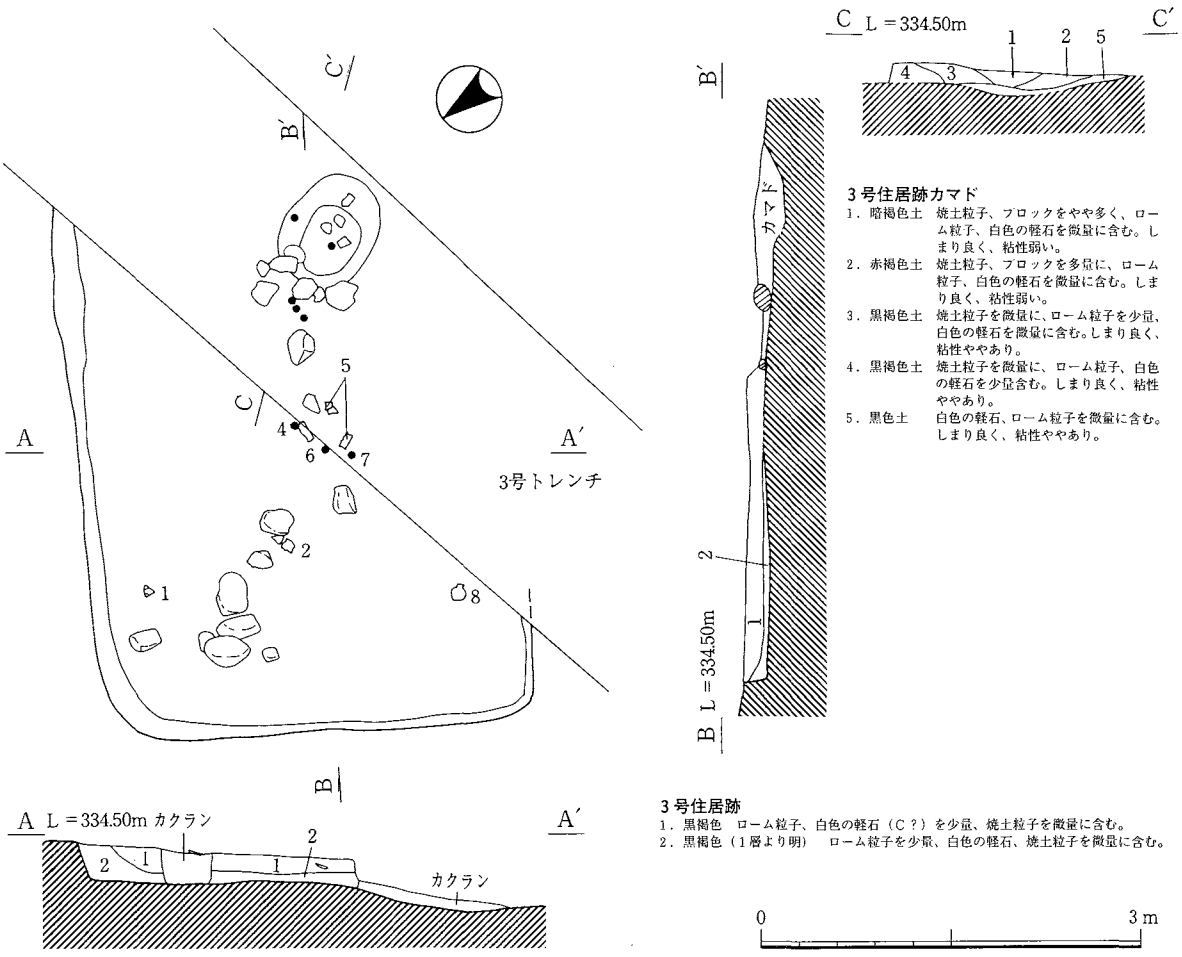


第7図　2号住居跡実測図

甕が検出されている。1．非ロクロ坏の口縁部は端部が内反するもので外面のヘラ削りは上位に及ぶ。2．甕の外胴部は細かくヘラ削りされている。また吹きこぼれによるおこげが外底部に見える。

2号住居跡

形　態　東西に長い方形を呈する。　規　模　東西5.20m，南北3.80m。　主柱穴　なし。　梯子柱穴　P1はカマドの対面、西壁に近接して位置する。通常のものと比較して壁面からの距離（1m）が長過ぎる点から別途の性格を考えた方が良いかもしれない。　カマド　5号住居跡に切られてない。　貯蔵穴　なし。　壁　溝　なし。　重複関係　5号住居跡が新しい。　床　面　図面の状況が物語るように接合するものは各々飛び散っており、また数ヵ所ではあるが焼土・炭化物が検出されている。　出土遺物　土師器非ロクロ坏・甕、須恵器坏A・坏B・蓋・盤・大型甕、鉄鏃が出土している。非ロクロ坏は5・6のように内底部に螺旋・放射状暗文がある。甑（18）は口縁端部を摘み上げる。甕（20）は長胴となるものである。小型



第8図　3号住居跡実測図

壷（21）は形態的に前代の須恵器模倣タイプに類似するもので口縁部に孔を穿つ。

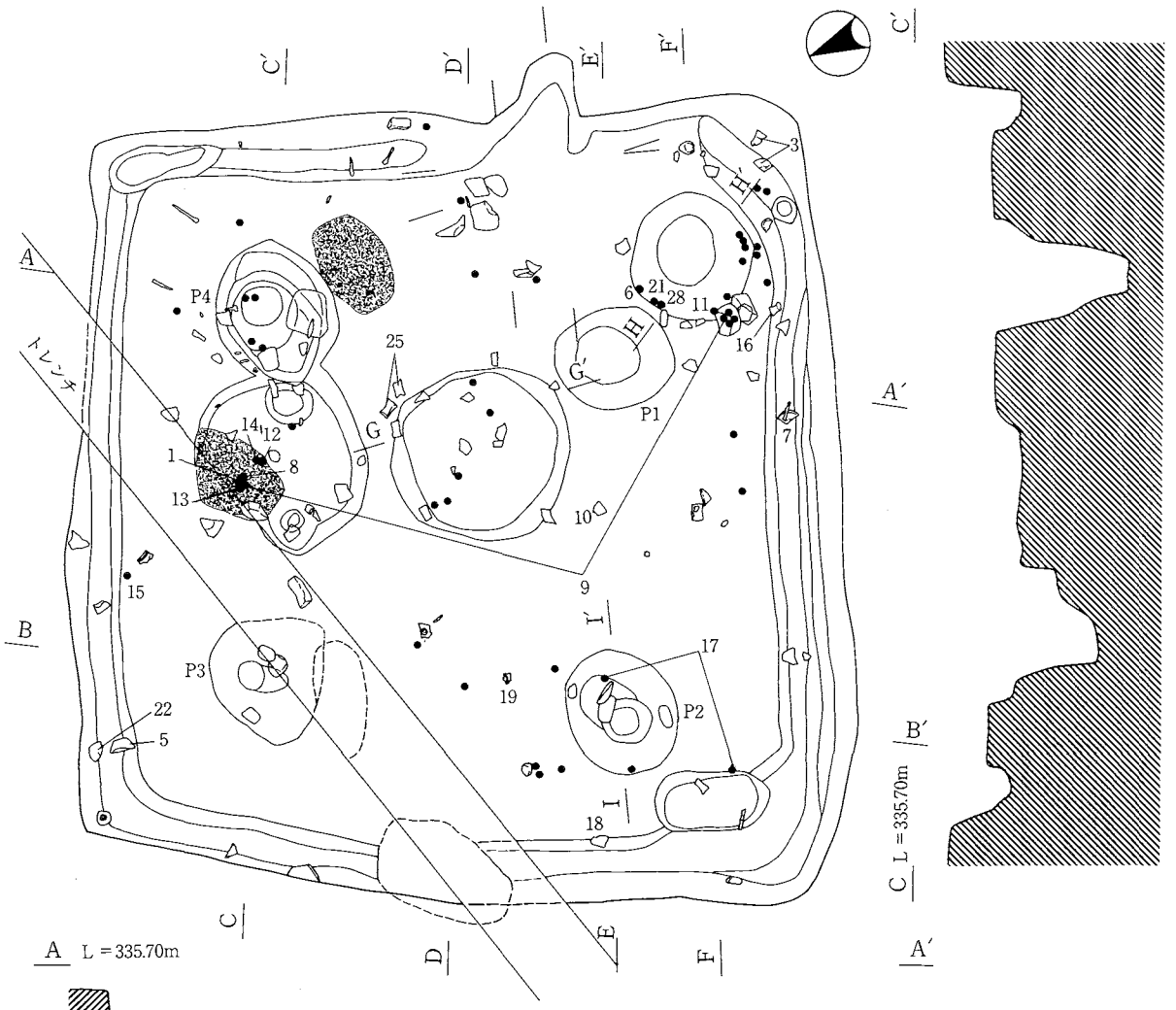
須恵器坏A（13）は箱形を呈し、坏B（14・15）は底部と高台との差がなく、蓋は摘みをリング状とし、口縁端部は反りの退化したもの（8）と端部で折れ曲がるもの（9～11）の二種とする。甕（19）は複合口縁となる古相のタイプである。その他棒状鉄製品（22）と鉄滓（23）が出土している。

土師器と須恵器の割合は須恵器が圧倒的で、坏底部の調整は回転ヘラ削り一種のみ見られる。性格は鉄滓・台石に類似する大礫なども見られる事からあるいは鍛冶に関わる遺構かもしれない。

3号住居跡

形　態　3トレンチに切られてカマド掘り方と西側部分の遺存である。復元すれば東西に長い方形を呈する。　規　模　東西4.20αｍ，南北3.40ｍ。　主柱穴　なし。　梯子柱穴　なし。　カマド　東壁のほぼ中央に位置するが掘り方での検出である。礫が多量に見られるがこれはカマド構築材である。　貯蔵穴　なし。

壁　溝　なし。　出土遺物　土師器武蔵型甕は口縁部を「コの字」状となる。須恵器坏A・Bは口径と底径の差が大きく、また皿Bと小型長頸瓶（壷M）が加わる。須恵器の底部調整は回転糸切りである。



4号住居跡柱穴

1．黒褐色土　炭化材、焼土粒子少量含む。しまりやや強く、粘性あり。
2．黒褐色土　ロームブロックφ30～50混入、炭化材、焼土粒子少量含む。しまりやや強く、粘性あり。
3．黒色土　しまりやや強く、粘性やや強い。

4号住居跡　P7

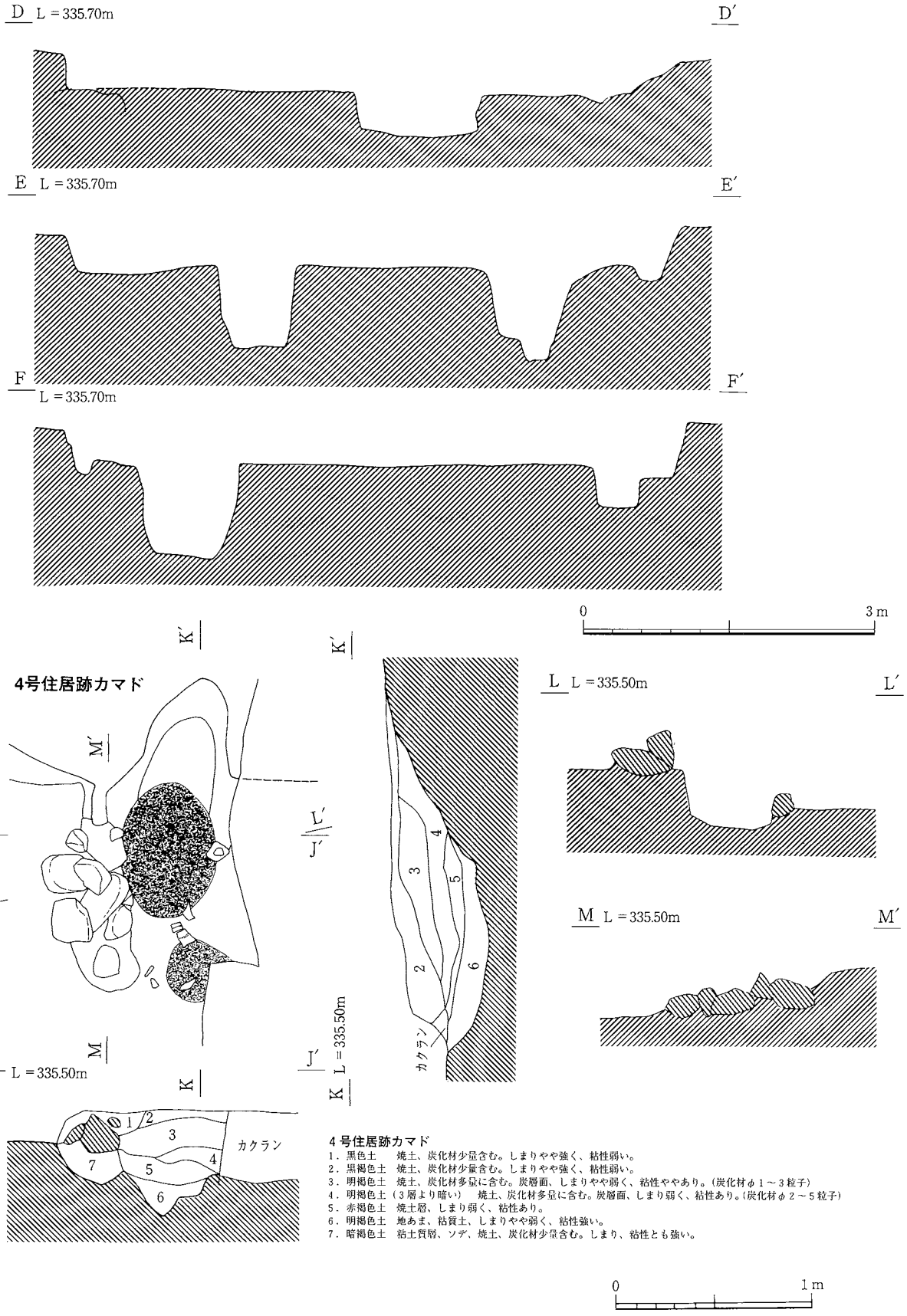
1．暗褐色土　ローム粒子、焼土、炭化粒子を少量含む。しまり良く、粘性強い。
2．黄褐色土　焼土、炭化粒子を少量、ローム粒子を多量に含む。しまり良く、粘性強い。
3．暗褐色土　焼土、炭化粒子を微量に含む。しまり良く、粘性強い。
4．黒褐色土　焼土、炭化粒子を微量に含む。しまり良く、粘性強い。
5．黒褐色土（4層より黒）　焼土、炭化粒子を微量に含む。しまり良く、粘性強い。

4号住居跡　P8

1．黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子、白色の軽石、ロームブロックを多く含む。しまり良く、粘性ややあり。
2．黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子、白色の軽石、ロームブロックをやや多く含む。しまり良く、粘性ややあり。
3．暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子、白色の軽石、ロームブロックを少量含む。しまり良く、粘性ややあり。

0　3 m

第9図　4号住居跡実測図（1）



第10図　4号住居跡実測図（2）

4号住居跡

形　態　ほぼ正方形に近い。　規　模　東西5.50ｍ，南北5.90ｍ。　主柱穴　４本を主体とし配列は四角形となるが、カマドの右側に位置する貯蔵穴を意識してかやや西側に偏る。掘り方は円形もしくは楕円形を呈し直径・深さ共に１ｍ前後を計る。Ｐ２の土層断面からは柱の抜き取りが看取される。　梯子柱穴　不明。

カマド　東壁のやや南側に偏在する。袖の右側は撹乱により欠落しているが、左側は遺存が良好である。掘り方は地山を掘窪め暗褐色の粘質土を基礎として芯材に円礫を複数使用している。燃焼～煙道は幅狭く40㎝を計り、火床部も同様の幅を有する。煙道部は地山を掘込み緩やかに傾斜する。　貯蔵穴　Ｐ１に近接して南東の隅角に位置する。円形を呈し規模は長軸・短軸ともに1.00ｍ，深さは0.30ｍである。　壁　溝　カマドを除き廻るが南側で壁溝と壁との間にわずかな隙間ができる。床面は中央より急に南下がりとなるため、床・壁の補修あるいは増改築を行なった可能性もある。この事は他の理由からも指摘され、主柱配列と住居形態が南東隅角でわずかながら突出する事、そこに貯蔵穴が位置する事、南側で壁溝と壁との間にわずかな隙間ができる事、以上より南東側で補修を行なった事がわかる。つまり当初貯蔵穴はなく、後で造られたものであろう。また柱の抜き取りなども補修に関わるものと思われる。

出土遺物　遺物は土師器非ロクロ坏・台付き甕・武蔵型甕、須恵器坏Ａ・坏Ｂ・蓋・鉢・甕、鉄製刀子・鉄製鏃・鉄製紡錘車・鉄滓が出土している。非ロクロ坏（1）はヘラ削りは口縁部付近まで及んでいない。台付き甕（22）は脚部のみであるがロクロ土師器である。武蔵型甕（25～28）は口縁部を「コの字」形にするタイプで胴部上位は横位のヘラ削り、下位は縦位のヘラ削りとなる。須恵器はここでも圧倒的な割合となる。坏Ａは口径と底径の差が５㎝以上のものが主体的で、器高は３㎝前後の浅いものである。底部の調整は回転糸切り未調整が大半で、回転ヘラ切り未調整、または回転ヘラ切り後ナデが客体的となる。坏Ｂは体部が高台より直線的に開くタイプ。底部調整はすべて回転糸切りである。鉄鏃は（34・37・38～40）長茎のものが多い。鉄滓（45～48）は鉄素地を残す。

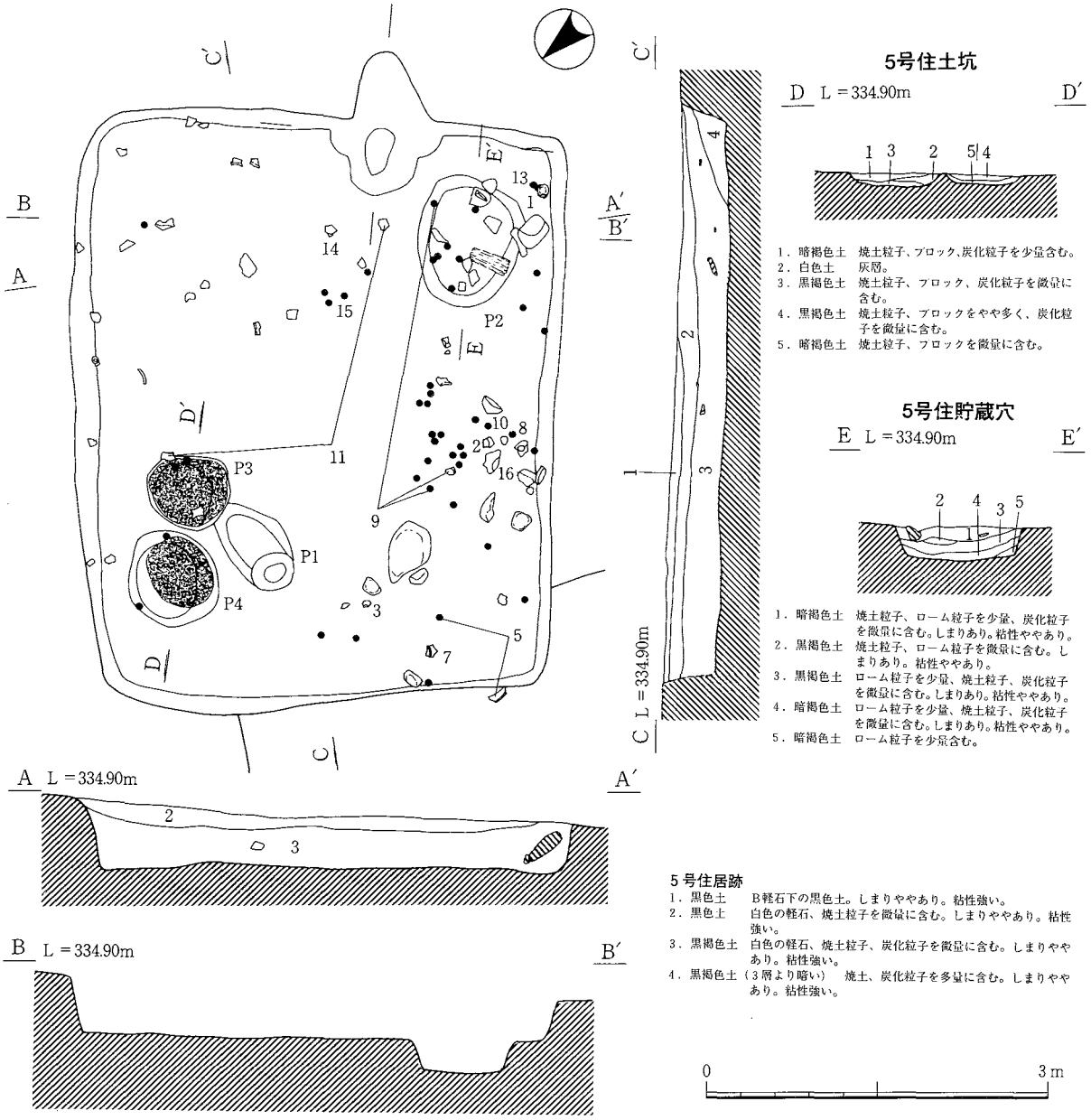
5号住居跡

形　態　長方形を呈する。　規　模　東西4.95ｍ，南北3.85ｍ。　主柱穴　床面には検出されていない。

梯子柱穴　Ｐ１が位置的にこれに相当すると思われる。　カマド　東壁のやや南側に偏在する。袖は黒褐色の粘土で被覆されているが芯には角礫を多用する。燃焼～煙道沿いには側壁に礫が充填され壁を補強し、懸架石は検出面と同レベルに遺存する。煙道部は地山を掘り込み、緩やかに傾斜する。　貯蔵穴　Ｐ２は南東の隅角に位置する。楕円形を呈し規模は長軸1.15ｍ・短軸0.90ｍ，深さは0.30ｍである。　壁　溝　なし。

床　面　Ｐ１の東側に接してＰ３・４が壁面に沿って位置する。Ｐ３は直径0.60ｍ，深さ0.15ｍ、Ｐ４は直径0.80ｍ，深さ0.15ｍを計る浅い土坑で、ともに上面に焼土を伴う。鉄滓等は検出されていないため鍛冶とは関係ないと思われるが火処とは異なる様相を呈している。　重複関係　２号住居跡が古い。

出土遺物　土師器小型甕・武蔵型甕、須恵器坏Ａ・坏Ｂ・皿Ｂ・小型甕・甕である。供膳具は土師器非ロクロ坏がなくなり主体は須恵器坏にかわる。須恵器坏の形態は須恵器坏Ａは口径と底径の差が５㎝以上のもの、口縁～体部は直線的に開くもの（3・4）と腰が張り気味となるもの（1・2）の二種類がある。坏Ｂは一体に腰が張り気味となり椀状（5・6）を呈し、この他に皿Ｂ（8）が加わる。底部の調整は回転糸切り未調整が主体的（1～8・15）である。小型甕（15）は回転糸切り後ナデとする。甕（16）は底部に低い高台を貼り付け、胴部は高台部より直線的に開く。土師器小型甕（10）は口縁端部を摘み上げ、調整は横位ヘラ削りとする。武蔵型甕（9・11～14）は口縁部を「コの字」形とし、胴部の調整は上位横位ヘラ削り、下位縦位

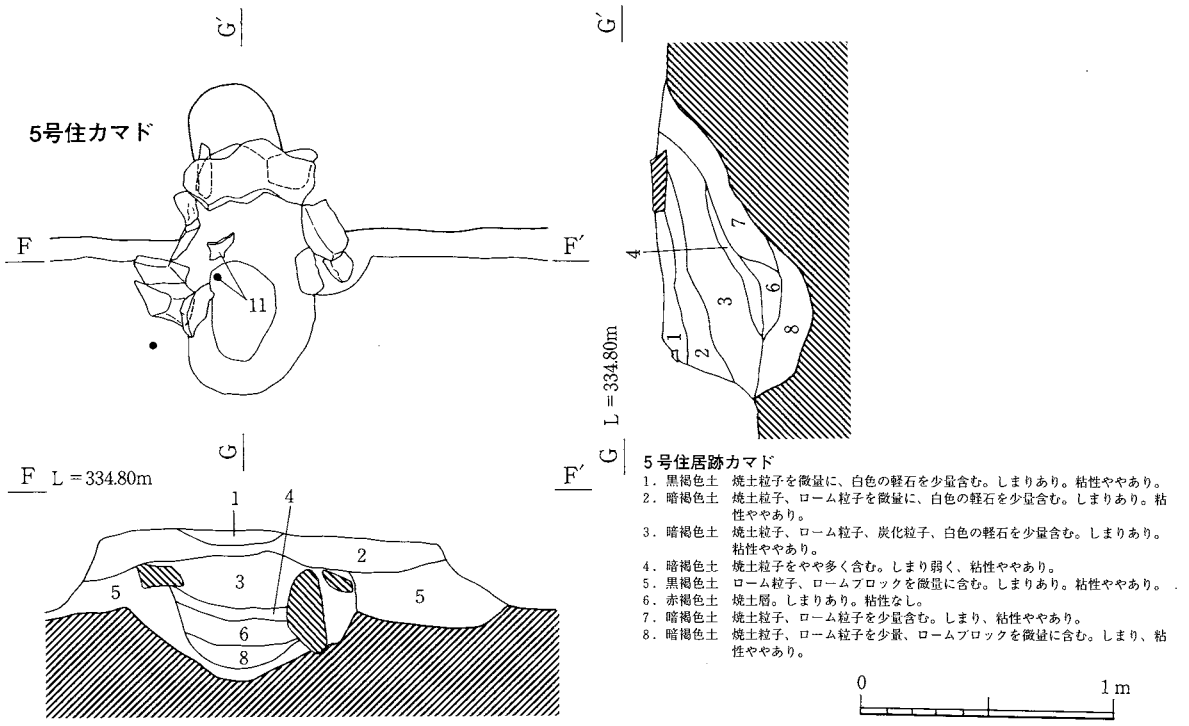


第11図　5号住居跡実測図（1）

ヘラ削りとする。土師器は煮沸具にのみ使用されている。

6号住居跡

形　態　長方形を呈する。　規　模　東西4.45ｍ，南北3.00ｍ。　主柱穴　床面には検出されていない。　梯子柱穴　検出されていない。　カマド　東壁のやや南側に偏在する。燃焼～煙道部は地山を大きく掘り込みカマド自体、地山内に位置する。カマド袖はなく燃焼～煙道部の側壁には板状の礫を貼り付け障壁としている。煙道部の奥壁の下位は垂直に立ち上がり、上位より緩やかに傾斜する。上がり切った所に煙出しが位置し、二枚の板状の礫で構成される。　貯蔵穴　検出されていない。　壁　溝　検出されていない。　床　面　北東隅角に礫が山積状態となっているが性格・用途などは不明である。　重複関係　1号掘立柱建物



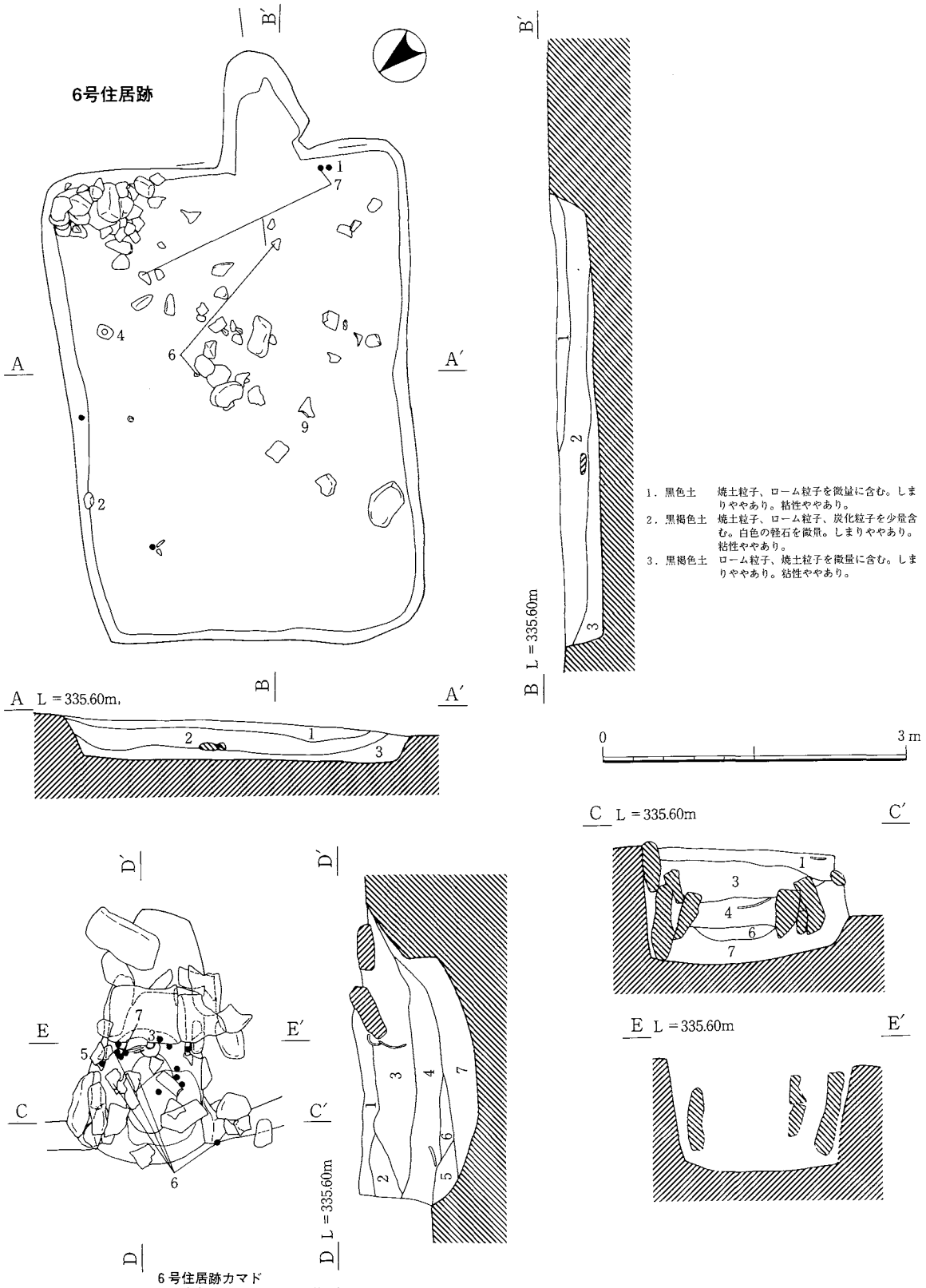
第12図　5号住居跡実測図（2）

跡と近接するが切り合いは物理的にはないものの、屋根の軒が当遺構と接するところから生じている。

出土遺物　須恵器坏A・椀B・皿B・甕、土師器甕・武蔵型甕で構成され、他には環状鉄製品がある。土器は供膳具・貯蔵具は須恵器で構成され、なかでも供膳具は全て須恵器となる。土師器は煮沸具にのみ使用されている。須恵器坏A（1）は口径・底径の差が5㎝を越えるもので外体部に火襷痕が窺える。椀B（2・4・5）は腰の張りは弱く高台は断面三角形を呈する。皿B（3）は口縁～体部は直線的に開き、口径は底部に比べて小さい。甕は鉢形のもの（7）と壷型のもの（9）がある。叩き・当具痕はいずれも外面は平行叩き、内面は無文当て具である。土師器甕は口縁部が「くの字」形（8）と「コの字」形（6）所謂武蔵型甕の二種がある。「くの字」口縁は胴部上位の調整は縦位ヘラ削り、武蔵型甕のそれは横位ヘラ削りとなる。環状鉄製品（10）は直径2.1cm，幅1.2cm，厚さ0.4cmである。工具等の締金具に類するものと思われる。

7号住居跡

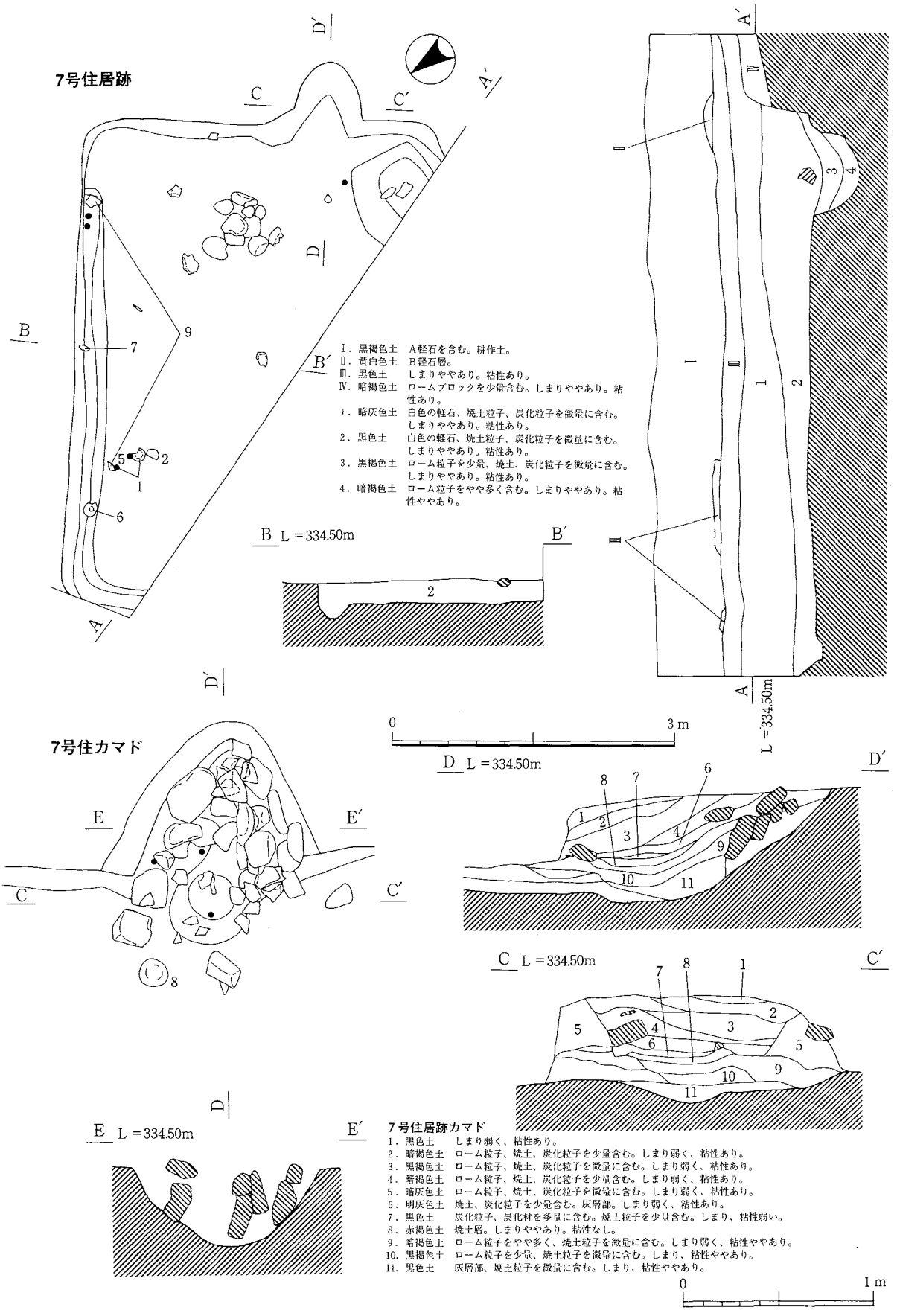
形　態　南西側は調査区外で全貌は確認されていないが、遺存部より長方形が推定される。　**規　模**　東西5.10m，南北3.80αm。　**主柱穴**　床面には検出されていない。　**梯子柱穴**　不明。　**カマド**　東壁のやや南側に偏在する。燃焼～煙道部は地山を大きく掘り込み、煙道部はやや緩やかに上り傾斜となる。煙道部の数個の礫は天井を構築したものが落下したものと思われる。燃焼～煙道部の側壁には板状の礫を貼り付け障壁としている。袖は暗灰色の粘質土で構築されているが造り替えが認められる。　**貯蔵穴**　南東隅角に検出されている。調査区外にかかるため全貌は不明であるが、略方形を呈し長軸0.90αm，短軸0.90m，深さ0.50mを計る。　**壁　溝**　遺存範囲の中では北・西側に検出され、カマド側にはない。　**床　面**　カマド前庭部左側に礫が数個まとまった状態で見られるが、おそらくカマドよりの流失であろう。



6号住居跡カマド

1．黒褐色土　焼土粒子、ローム粒子を微量に含む。しまりややあり。粘性あり。
2．暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子、炭化粒子を微量に含む。しまりややあり。粘性あり。
3．暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量に、ローム粒子を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
4．暗褐色土　焼土粒子を少量、ローム粒子を微量に含む。しまりややあり。粘性あり。
5．暗褐色土　しまりややあり。粘性強い。
6．赤褐色土　焼土。しまりややあり。粘性なし。
7．黒褐色土　しまりややあり。粘性あり。

第13図　6号住居跡実測図

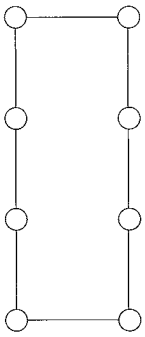


第14図　7号住居跡実測図

出土遺物　土器の構成は土師器非ロクロ坏・鉢、須恵器坏Ａ・蓋、棒状鉄製品である。非ロクロ坏（1～4）の形態は平たく納めるもの（1・2・4・5）、椀状になるもの（3）がある。外体部は口縁部近くまでヘラ削りされる。内部の調整は大半がナデであるが、（3～5）の様に放射・螺旋状暗文を施すものがある。（3～5）は金属写しの土器であるが搬入品ではなくいずれも在地の土器である。鉢（9）は大振りのもので復元口径は38.0㎝を計る。調整は内：ヘラナデ→縦位ヘラ磨き。外：体部上位縦位ヘラ削り・下位横位ヘラ削りである。須恵器坏Ａは口径と底径との差が５㎝未満のものである。底部の調整は静止糸切り（7）・回転糸切り未調整（8）がある。蓋は口縁端部を短く折り曲げ断面三角形とする。摘みは環状を呈する。

第２項　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡



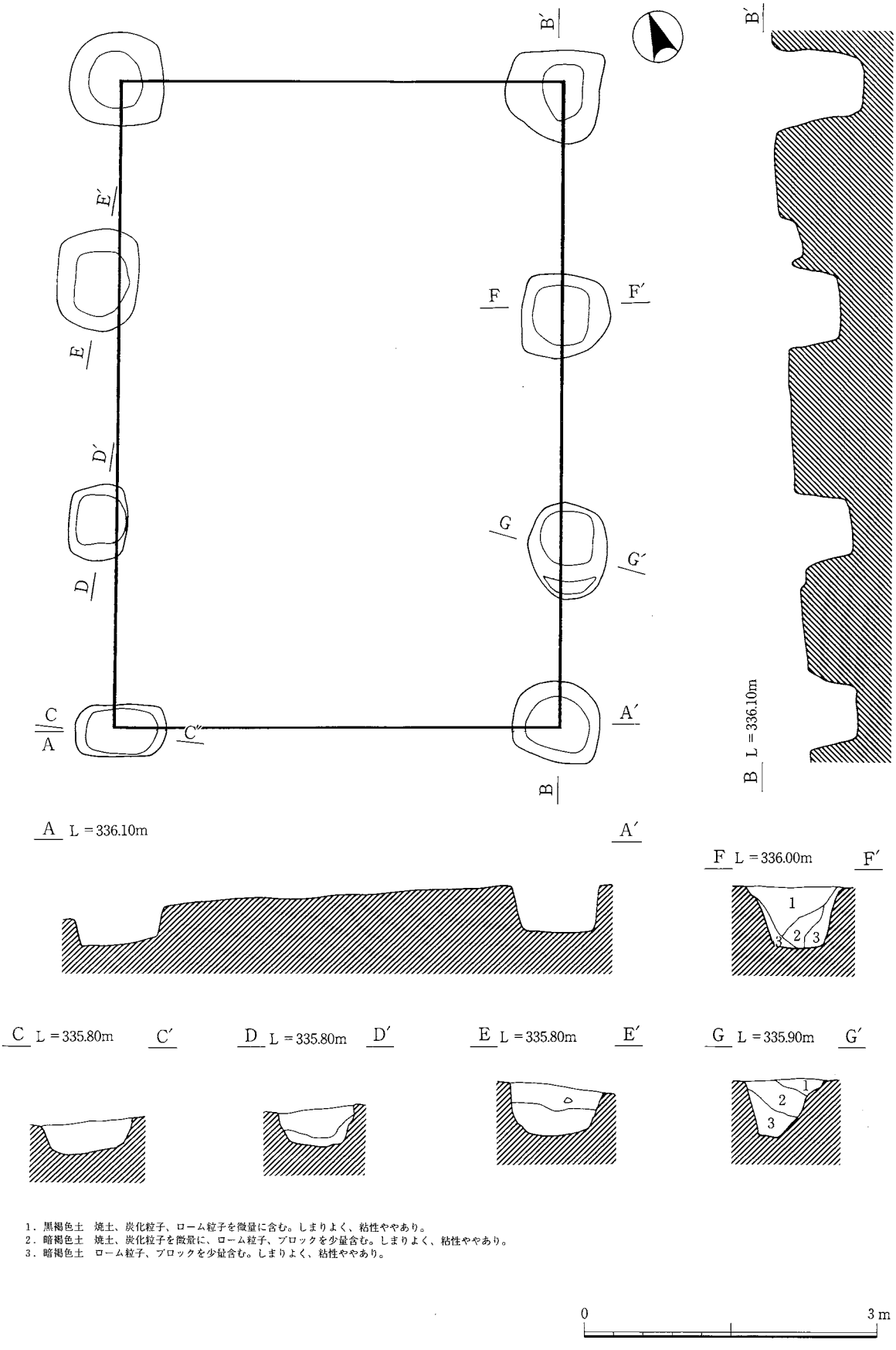
桁行３間、梁行１間の掘立柱側柱建物である。掘り方は楕円形を呈し、それぞれの形態はまちまちで、規模も0.64～0.36ｍと一定ではない。掘り方の深さは桁行で両妻側が深く掘られている。土層は当初土坑として取り扱ったため半截に終始し、柱痕は確認されていないが東桁筋妻側より２番目では抜き取りと思しき土層が見られる。柱痕は確認されていないため掘り方中央に復元して寸法を算出した。総長は桁行6.60ｍ、梁行4.50ｍであるが桁行は東・西側では柱間が異なり、北妻側より東桁は（2.40：2.40：1.80）西桁は（2.10：2.40：2.10）、長軸（桁行）の方向はＮ－10°－Ｅである。性格的には20ｍ四方に他の建物が見られない事、建物の妻側が１間である事、等間でない事から集落の倉庫と思われる。

第３項　土　坑

土坑は89基検出されたが、時期・性格を認定できるものはわずかである。２・３号土坑は頭大の礫とともに縄文中期の深鉢片が出土している。性格は浅いため明確でないが頭大の礫・締まった覆土などより墓坑の可能性も窺われる。形態より円形を呈し壁を垂直とする12号土坑は縄文時代の貯蔵穴に類似するが出土した遺物は弥生時代の壷形土器である。

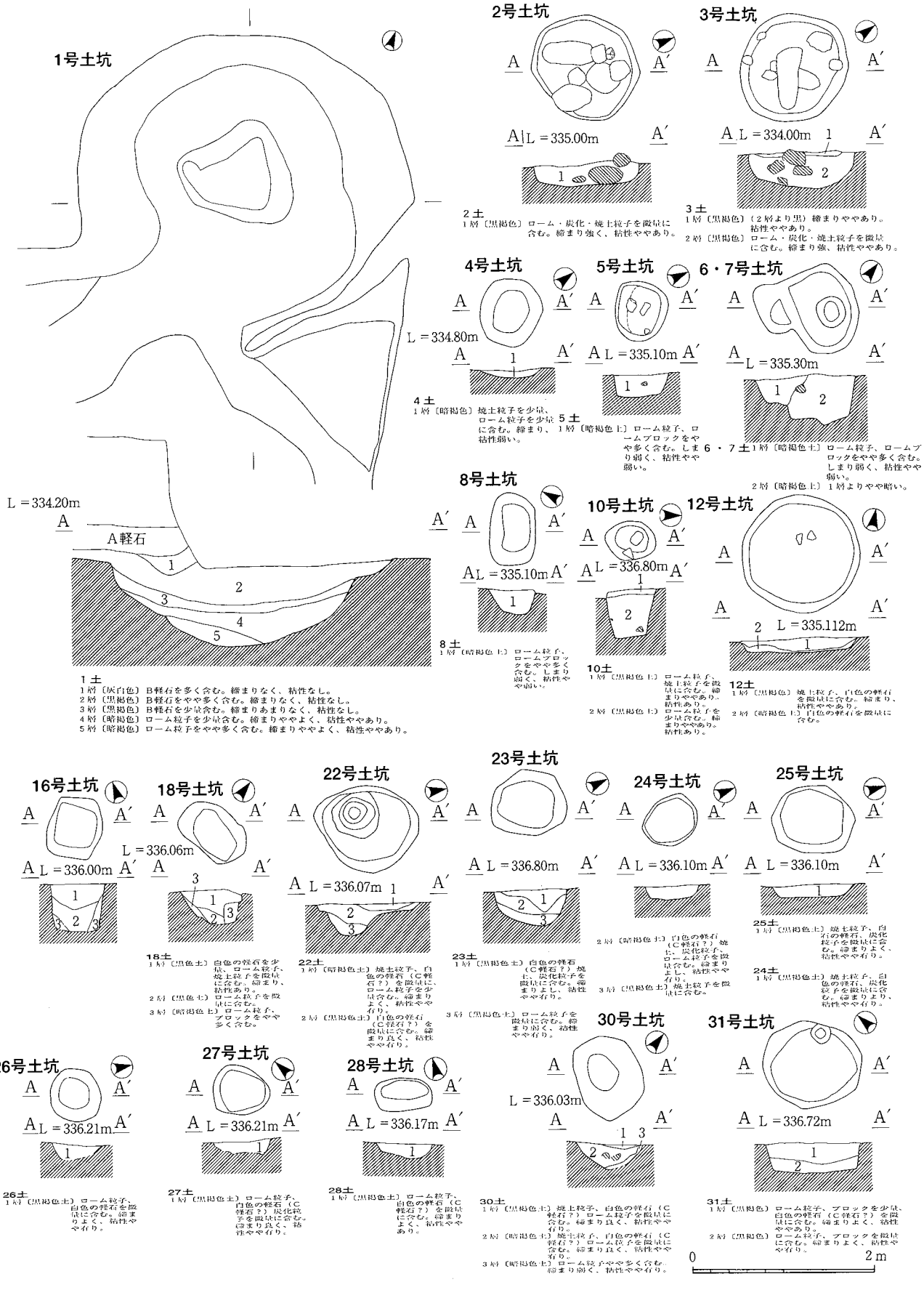
また13～15号土坑、19・20号土坑、59・60号土坑は１号掘立柱建物跡の掘り方である事がわかったため欠番とした。

他は覆土中に出土したものであり供伴か否かは微妙である。遺物１～６（第26図参照）は１号土坑よりの出土である。１は摘みを環状とし、２・３は体～底部を丸く納める古相のタイプで、６は灰釉陶器皿Ｂで釉は漬け掛けである。７・８は２号土坑、９は３号土坑からで縄文中期の深鉢片である。10は９号土坑からで須恵器坏Ａ底部の調整は手持ちヘラ削りである。11・12は10号土坑で須恵器の蓋と坏Ａである。蓋は口縁端部を短く折り曲げ、坏Ａの底部調整は回転糸切り未調整である。13は12号土坑からの弥生時代の壷形土器片である。14は17号土坑からの須恵器蓋で口縁端部を折り曲げる。15は21号土坑からの須恵器坏Ａで底部調整は回転糸切り未調整である。16・17は23号土坑からの土師器坏Ａと須恵器坏Ａである。土師器坏Ａは内部を黒色処理、底部調整は回転糸切り後、体部下端を回転ヘラ削りとする。19・20は29号土坑からの出土で須恵器坏Ａ・Ｂともに回転ヘラ切り未調整である。21は31号土坑からの出土で須恵器瓶である。瓶底部の調整は回転ヘラ切り未調整である。22は32号土坑からの出土である。須恵器短頸壷の蓋で肩部に鍔状の突帯を付ける所謂上野型と呼ばれる。23・24は33号土坑からの出土で須恵器蓋・坏Ａである。須恵器蓋の摘みは擬宝珠であり、口縁端部は折れ曲がる。坏Ａ底部調整は回転ヘラ切り周囲ヘラナデとする。25・26は37号土坑から

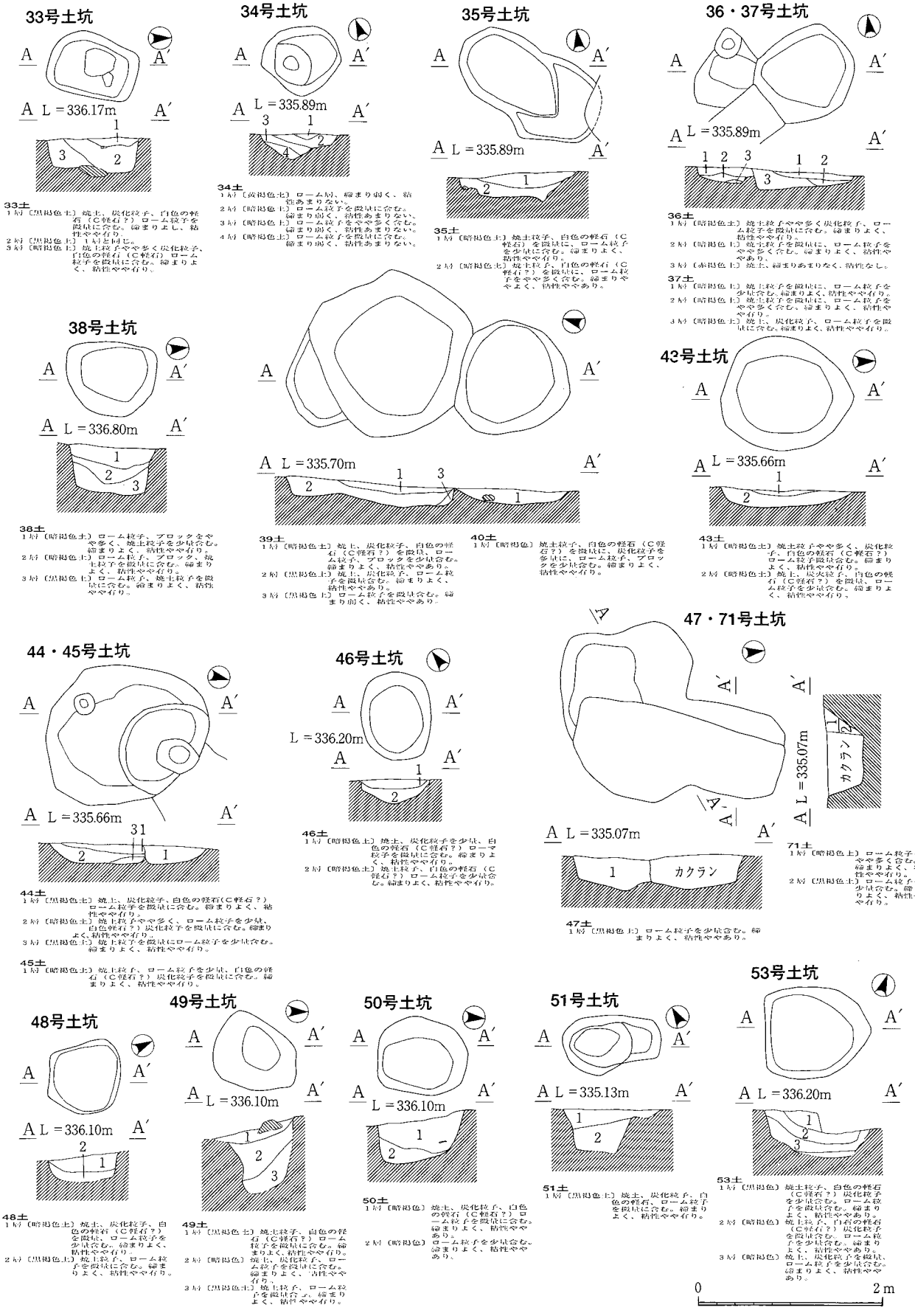


1．黒褐色土　焼土、炭化粒子、ローム粒子を微量に含む。しまりよく、粘性ややあり。
2．暗褐色土　焼土、炭化粒子を微量に、ローム粒子、ブロックを少量含む。しまりよく、粘性ややあり。
3．暗褐色土　ローム粒子、ブロックを少量含む。しまりよく、粘性ややあり。

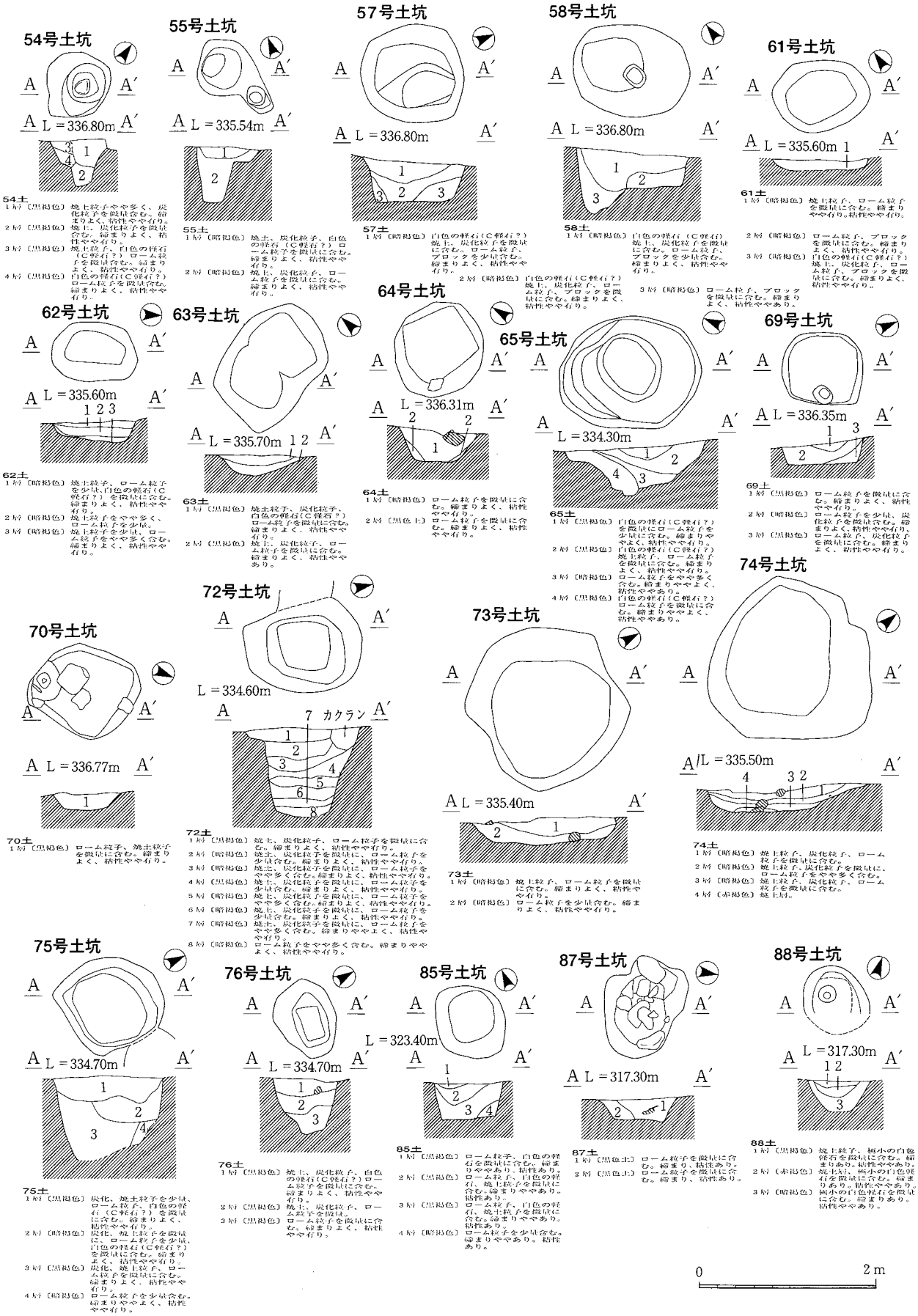
第15図　1号掘立柱建物跡実測図



第16図　土坑実測図（1～8・10・12・16・18・22～28・30・31号土坑）



第17図　土坑実測図（33～40・43～51・53・71号土坑）



第18図　土坑実測図（54・55・57・58・61～65・69～76・85・87・88号土坑）

の出土で須恵器蓋・椀Ｂである。蓋の摘みは環状を呈し、椀Ｂの底部は回転糸切り未調整である。27・28は39号土坑からの出土で土師器坏Ａと須恵器壷である。土師器坏Ａは内部を黒色処理され、底部調整は下端～底部回転ヘラ削りされる。須恵器壷の底部調整は回転糸切り未調整である。胴部の形状より短頸壷となる。29・30・31は40号土坑からの出土でともに須恵器坏Ａである。底部調整は29が回転ヘラ切り未調整、30が回転糸切り未調整である。31は須恵器広口甕である。32は42号土坑からの出土で須恵器皿あるいは盤状の高台・脚部が付くもので、接合部に透かし・穿孔状のものがある。33は48号土坑からの出土で須恵器坏Ａの底部調整は回転糸切り未調整である。34～38は49号土坑からの出土で須恵器蓋・坏Ａである。須恵器蓋は34が摘みが擬宝珠・口縁端部は折れ曲がる。35は摘みが環状となり口縁端部は内部に屈曲する。須恵器坏Ａは36・37が底部調整回転糸切り未調整、38は回転ヘラ切り未調整となる。39～43は50号土坑からの出土である。39は土師器非ロクロ坏で体部中位（横位）～底部はヘラ削りで、内部はヘラ磨きとなる。40の須恵器蓋は摘みが環状で、41・42は須恵器坏Ａで前者は底部切り離し後回転ナデ、後者は回転糸切り未調整である。43は棒状の鉄製品で断面方形を呈する。44は54号土坑からの出土で土師器坏Ａであるが調整はナデのみである。45は63号土坑からの出土で須恵器坏Ａ、底部回転糸切り未調整である。46は72号土坑からの出土で須恵器椀Ｂである。調整は底部切り離し後回転ヘラ削りである。47は75号土坑からの出土で須恵器坏Ａである。調整は底部回転糸切り未調整である。48は76号土坑からの出土で須恵器広口甕で、口縁部の開きは少なく端部は面をなす。49は77号土坑からの出土で須恵器高盤の脚部である。50・51は84号土坑からの出土である。前者は須恵器椀Ｂ、後者は土師器甕で口縁部は短く立ち上がり肩部は強く張る。胴部の調整は縦位ヘラ削りである。

土坑規模表（１）

土坑番号	形　態	規模：長軸×短軸×深さ(m)	方　位	備　考
１号	円　形	3.70　×3.40　×0.95	Ｎ－82°－Ｅ	
２号	円　形	1.18　×1.08　×0.20	Ｎ－74°－Ｅ	円礫
３号	円　形	1.20　×1.12　×0.40	Ｎ－40°－Ｅ	円礫
４号	円　形	0.75　×0.67　×0.70	Ｎ－10°－Ｗ	
５号	円　形	0.65　×0.55　×0.27	Ｎ－42°－Ｗ	円礫
６号	楕円形	0.57　×0.27α　×0.28	Ｎ－61°－Ｅ	円礫・７号土坑と重複（新旧は不明）
７号	楕円形	0.95　×0.85α　×0.56	Ｎ－63°－Ｅ	６号土坑と重複（新旧は不明）
８号	楕円形	0.80　×0.53　×0.27	Ｎ－64°－Ｅ	
９号	円　形	0.75　×0.70　×0.45	Ｎ－10°－Ｅ	円礫
10号	楕円形	0.55　×0.45　×0.48	Ｎ－10°－Ｅ	円礫
11号	楕円形	0.73α　×0.85　×　－	Ｎ－148°－Ｅ	円礫
12号	円　形	1.30　×1.28　×1.50	Ｎ－87°－Ｅ	遺物
13号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
14号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
15号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
16号	楕円形	0.71　×0.60　×0.52	Ｎ－30°－Ｅ	
17号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
18号	楕円形	0.78　×0.50　×0.38	Ｎ－84°－Ｅ	
19号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
20号	―――			１号掘立柱建築跡掘り方
21号	楕円形	1.30　×0.85　×0.40	Ｎ－12°－Ｗ	円礫
22号	楕円形	1.15　×0.95　×0.34	Ｎ－14°－Ｅ	
23号	楕円形	1.40　×1.35　×0.36	Ｎ－15°－Ｅ	
24号	円　形	0.60　×0.50　×0.14	Ｎ－11°－Ｗ	
25号	楕円形	0.98　×0.77　×0.13	Ｎ－39°－Ｅ	

土坑規模表（２）

土坑番号	形　態	規模：長軸×短軸×深さ(m)	方　位	備　考
26号	円　形	0.60　×0.55　×0.17	N－51°－E	
27号	円　形	0.63　×0.54　×0.18	N－20°－W	
28号	楕円形	0.64　×0.35　×0.17	N－85°－W	
29号	円　形	0.87　×0.85　×0.60	N－80°－W	
30号	円　形	0.90　×0.72　×0.27	N－70°－E	円礫
31号	円　形	1.07　×0.92　×0.22	N－25°－W	
32号	円　形	0.85　×0.74　×0.80	N－94°－E	
33号	楕円形	0.72α　×0.68　×0.60	N－13°－E	68号土坑と重複（新旧は不明）
34号	楕円形	0.85　×0.72　×0.26	N－27°－W	
35号	楕円形	2.64　×0.52　×0.25	N－70°－E	円礫
36号	楕円形	0.85　×0.65　×0.15	N－10°－E	37号土坑と重複（新旧は不明）
37号	楕円形	0.11α　×0.95　×0.22	N－85°－E	36号土坑と重複（新旧は不明）
38号	円　形	1.03　×1.00　×0.50	N－36°－E	
39号	円　形	1.25　×1.20α　×1.50	N－56°－W	40号土坑と重複（新旧は不明）
40号	円　形	2.20　×1.65α　×1.20	N－86°－W	円礫・39号土坑と重複（新旧は不明）
41号	――			欠番
42号	――			欠番
43号	円　形	1.35　×1.20　×0.18	N－22°－E	
44号	楕円形	1.70　×0.76　×0.22	N－53°－W	45号土坑と重複（新旧は不明）
45号	楕円形	1.10　×0.80　×0.20	N－59°－W	44号土坑と重複（新旧は不明）
46号	楕円形	0.95　×0.75　×0.17	N－40°－E	
47号	楕円形	1.38　×0.80α　×0.35	N－17°－E	71土坑と重複（新旧は不明）
48号	楕円形	1.10　×0.80　×0.28	N－36°－E	
49号	楕円形	0.90　×0.86　×0.70	N－7°－W	円礫
50号	円　形	0.97　×0.81　×0.43	N－7°－W	
51号	楕円形	1.10　×0.57　×0.48	N－46°－W	
52号	――			欠番
53号	楕円形	1.14　×0.95　×0.45	N－68°－E	
54号	楕円形	0.82　×0.69　×0.50	N－13°－E	
55号	楕円形	1.02　×0.50　×0.60	N－27°－W	
56号	――			欠番
57号	円　形	1.10　×1.08　×0.45	N－20°－E	
58号	楕円形	1.30　×1.00　×0.70	N－43°－W	
59号	――			１号掘立柱建築跡掘り方
60号	――			１号掘立柱建築跡掘り方
61号	楕円形	1.05　×0.77　×1.00	N－55°－W	
62号	楕円形	0.95　×0.65　×0.21	N－8°－E	
63号	楕円形	1.30　×1.00　×0.20	N－84°－W	
64号	円　形	1.00　×0.96　×0.34	N－54°－W	円礫
65号	楕円形	1.53　×1.20　×0.53	N－52°－W	
66号	楕円形	0.59α　×0.60　×0.33	N－30°－E	円礫
67号	楕円形	4.70α　×0.90　×0.38	N－40°－E	
68号	楕円形	0.87　×0.77α　×0.65	N－80°－W	33号土坑と重複（新旧は不明）
69号	円　形	0.88　×0.80　×0.20	N－26°－E	
70号	楕円形	1.15　×0.95　×0.18	N－7°－E	円礫
71号	楕円形			47号土坑と重複（計測不可）
72号	楕円形	1.60　×0.86　×0.95	N－73°－W	46号土坑と重複
73号	楕円形	1.74　×1.60　×0.27	N－75°－W	円礫
74号	楕円形	1.75　×1.70　×0.20	N－50°－W	円礫
75号	楕円形	1.15　×0.90　×0.90	N－12°－E	76号土坑と重複（新旧は不明）
76号	楕円形	0.82α　×0.59　×0.58	N－88°－E	75号土坑と重複（新旧は不明）
77号	楕円形	1.31　×1.10　×0.20	N－50°－E	
78号	楕円形	0.98　×0.63　×0.25	N－63°－E	
79号	楕円形	1.45　×0.90　×0.30	N－63°－W	
80号	楕円形	1.18　×0.91　×0.56	N－35°－E	
81号	楕円形	0.80　×0.75　×0.14	N－31°－W	
82号	楕円形	0.94　×0.75　×0.83	N－49°－E	
83号	円　形	0.92　×0.80　×0.38	N－83°－E	
84号	楕円形	0.64　×0.63　×0.14	N－33°－W	
85号	楕円形	1.17　×0.85　×0.32	N－22°－W	
86号	円　形	1.17　×0.85　×0.32	N－20°－W	
87号	楕円形	1.17　×0.85　×0.32	N－55°－W	
88号	楕円形	0.68α　×0.65　×0.34	N－38°－W	
89号	楕円形	1.60　×1.27　×0.17	N－83°－E	

第4項　溝　　跡

調査区の南端に1号溝、北端に2号溝、3号溝は欠番、4号溝は東端部にそれぞれ位置する。いずれも終始がはっきりしているものはなく削平により消滅しているものが多い。なかでも1・2号溝は遺存自体は悪いが、遺物は豊富である。また道路状遺構としての疑問が残るものである。

1号溝

規模は遺存長2.60m、幅2.40m、深さ0.80mを計る。方向はN－62°－Wを指す。土層1・2には浅間A軽石を含み、2は溝底まで至るため検出された遺物より新しく位置付けられる。特にしまりはない。遺物は、土師器非ロクロ坏（1）は内面に放射・螺旋状暗文が施される。須恵器坏A（2）は回転ヘラ切り後回転ヘラナデ、（3）は火襷が内外顕著で、回転糸切り未調整である。椀B（4）は回転ヘラ切り後・回転ヘラ削り、獣足（5）はおそらく三足となるもので盤Bの類であろう。

2号溝

規模は遺存長19m、幅4～5m、深さ0.30mを計る。方向はN－60°－Wを指し、具体的には西方向は五料茶屋本陣の方向に延びる様相を見せている。土層は自然堆積の様相はなく、地形の傾斜に対して平行に堆積し、全体的に焼土・炭化物を含む黒～黒褐色を呈し強く締まっている。遺物は須恵器を主体に豊富であり、土師器非ロクロ坏・鉢・甕、須恵器坏A、坏B、椀B・蓋・盤B・高盤・短頸壷蓋・短頸壷・長頸壷・甕・円面硯・鉄製刀子・棒状鉄製品・鉄滓が検出され主体的には8世紀前半のものが多い。

土師器非ロクロ坏（6～8）・鉢（22）は口縁端部に段を有する。甕（23・24）は口縁部を「くの字」形に外反するものである。須恵器坏A（12～14）は底部調整が回転ヘラ削り、坏B（15～18）・椀B（19）は底部と高台の差がなくなり底部調整が回転ヘラ削りである。蓋（9～11）は端部に反りが退化し、摘みは環状となる。盤B（20）は坏Bと形態・調整ともに同じである。高盤（21）は坏部の腰が強く残るもの。短頸壷蓋（25）は突帯を有する上野型である。短頸壷（26～28）は肩が緩やかとなるタイプ。長頸壷（29・30）は肩の張るタイプ。甕（31～36）は口縁端部が複合となり、大甕は内面同心円当て具・外面は平行叩きとなる。円面硯（37・38）は使用痕が顕著である。

4号溝

鉄製刀子（39）・棒状鉄製品（40・41）・鉄滓（42）がある。

第5項　集　　石

集石は5号を除き1～6号まで検出された。

1号集石

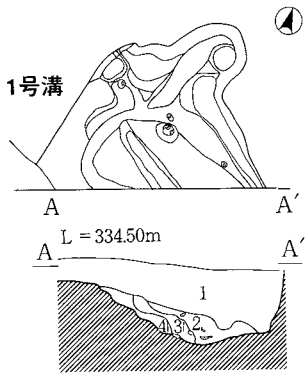
頭大の円礫と角礫で構成され直径1mの規模を有すが掘り込みはない。礫自体重なり合う事はなく被熱痕は見られない。遺物は1の須恵器椀Bである。底部の調整は回転糸切り未調整である。

2号集石

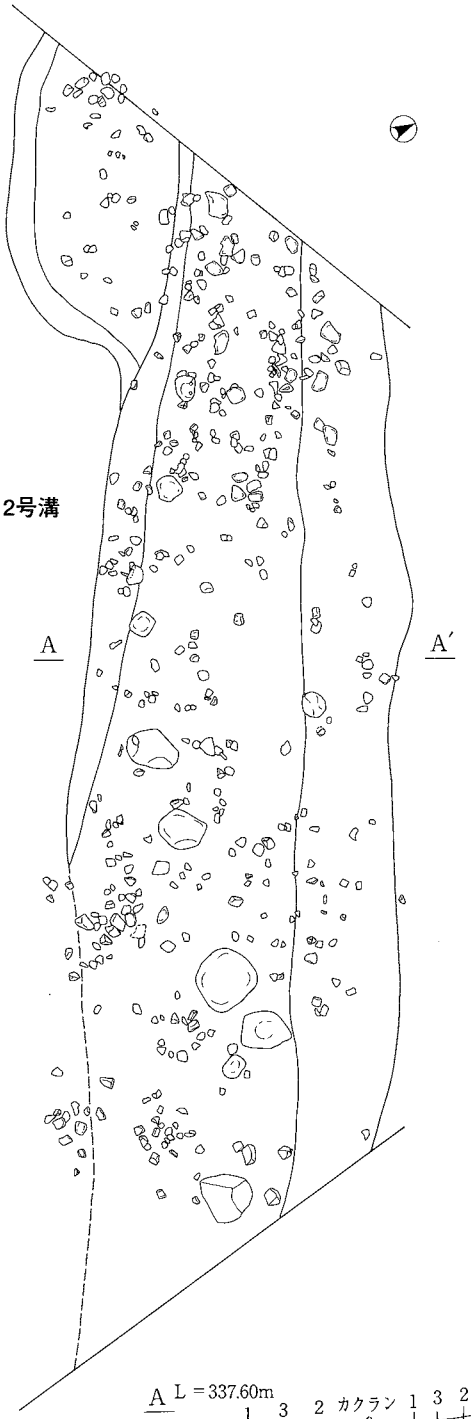
頭大から拳大までの円礫・角礫で構成されるが不揃いであり、掘り込みはない。礫の重なりは部分的に見られるが被熱痕は見られない。

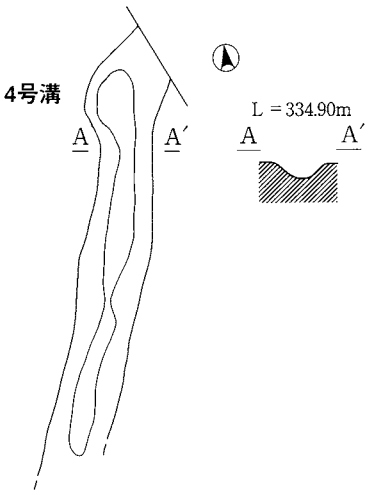
3号集石

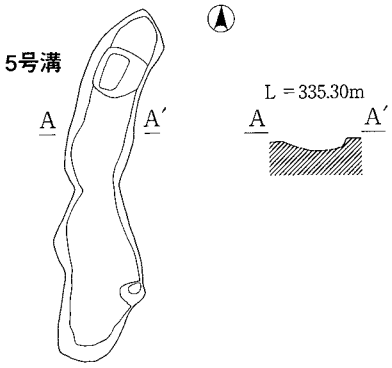
大小多様の円礫・角礫で構成され直径1.80mの規模を有し掘り込みはなく、礫の重なりが見られるが被熱痕は見られない。遺物は2の鉄滓が出土している。

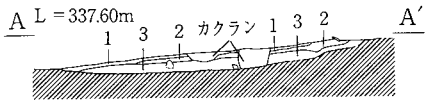


1．黒色土　A軽石を多量に含む。しまり、粘性よわい。
2．黒褐色土　A軽石を少量、ローム粒子を微量に含む。しまり、粘性ややり。
3．黒褐色土　ローム粒子を少量含む。しまり、粘性ややあり。
4．暗褐色土　ローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性ややあり。









1．黒色土　焼土、炭化材粒子微量に混入。B軽石少量含む。しまり強く、粘性弱い。
2．黒褐色土　焼土、炭化材粒子微量に混入。B軽石少量含む。しまり強く、粘性弱い。
3．黒色土　焼土、炭化材粒子少量混入。B軽石少量含む。しまり強く、粘性ややあり。

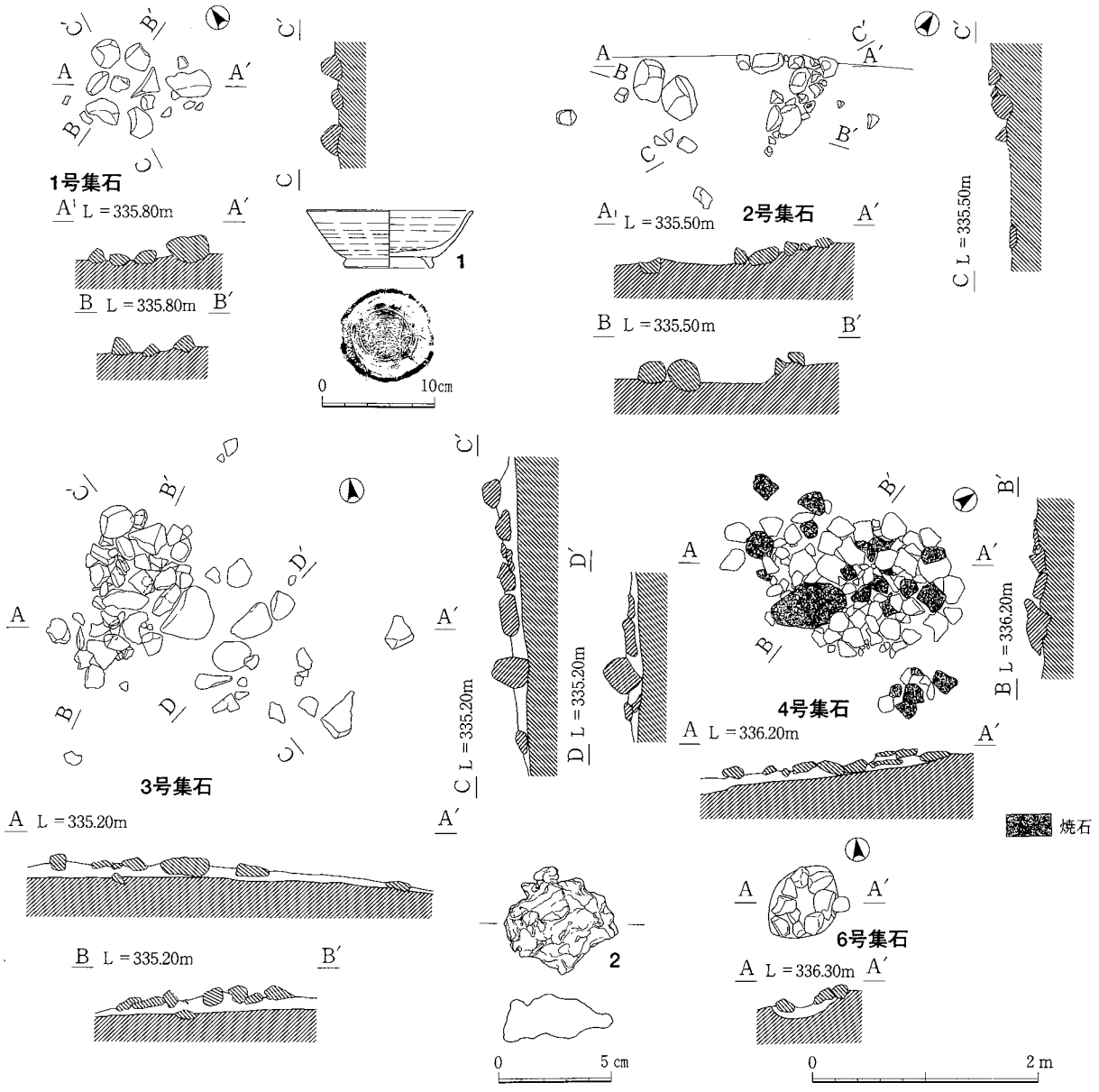
第19図　溝跡実測図　（1・2・4・5号溝跡）

4号集石

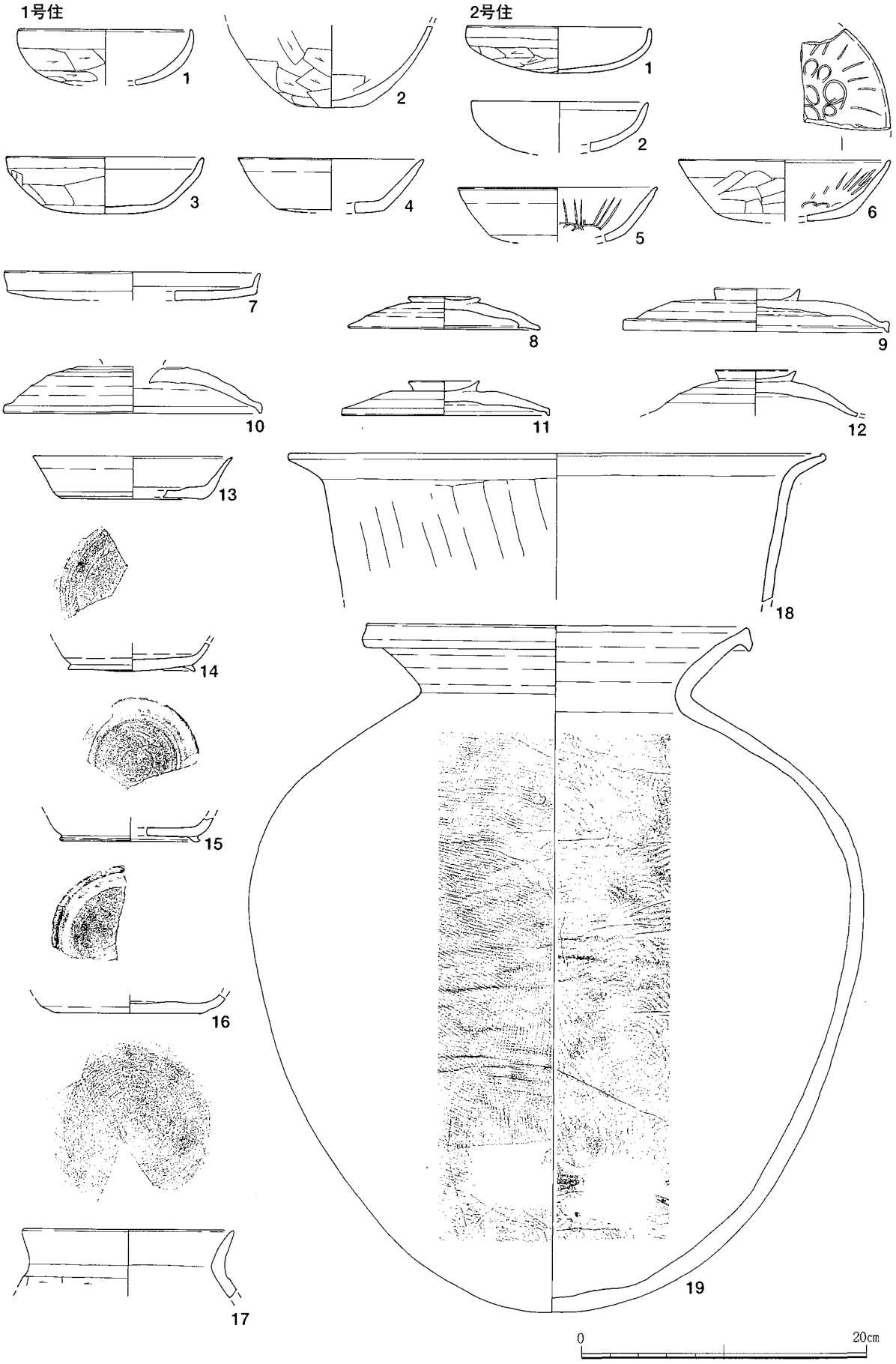
集石らしい集石で直径２ｍの規模を有すが掘り込みはない。礫の重なりが顕著に見られ被熱された礫がまばらにみられる。使用された礫が後に別な用途で集められたものと思われる。

6号集石

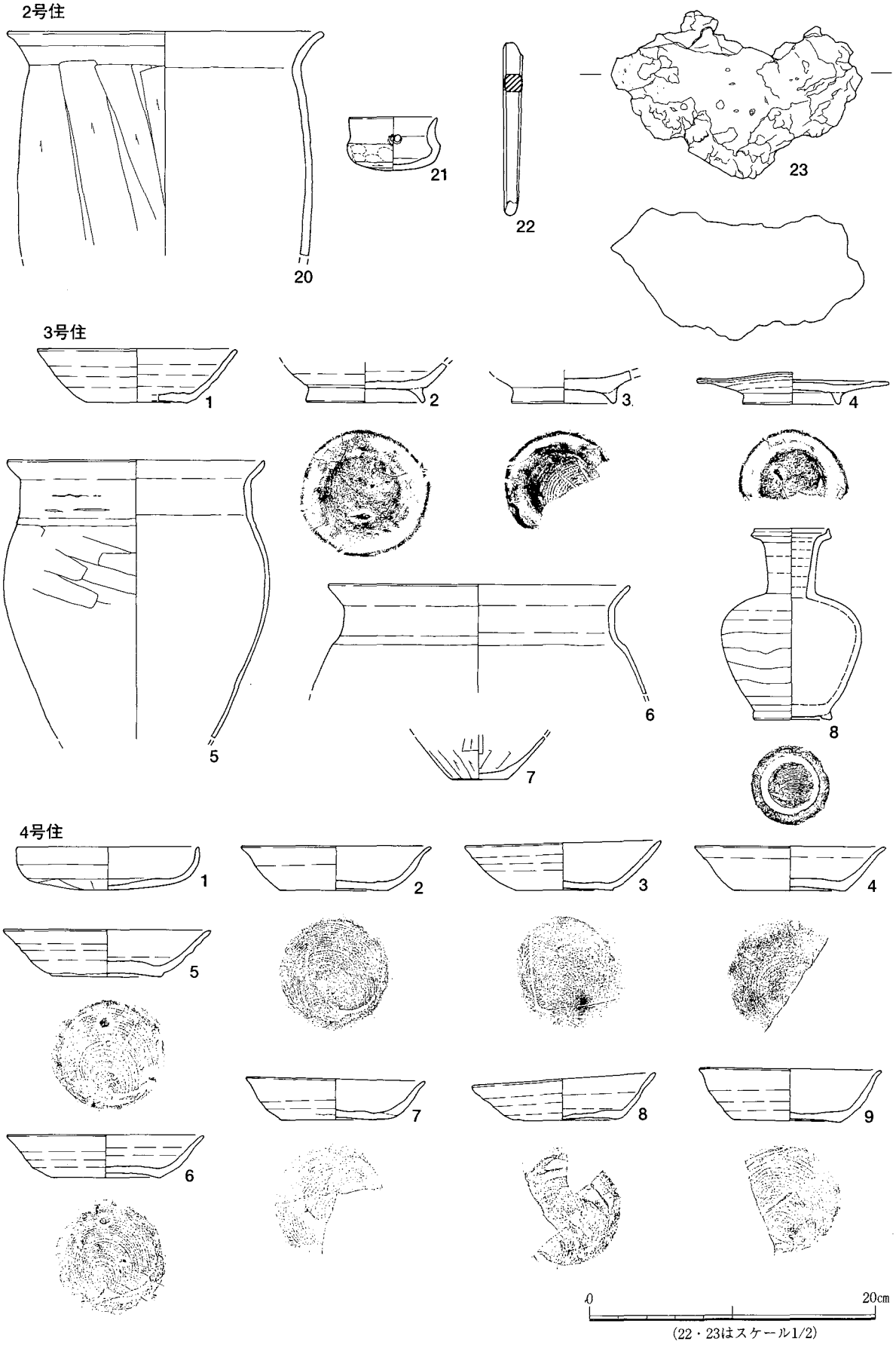
直径0.7ｍの浅い掘り込みに見られ、ほぼ環状に廻る様相を呈し、礎石建物の根固め石に類似する。礫の重なりと被熱痕は見られない。



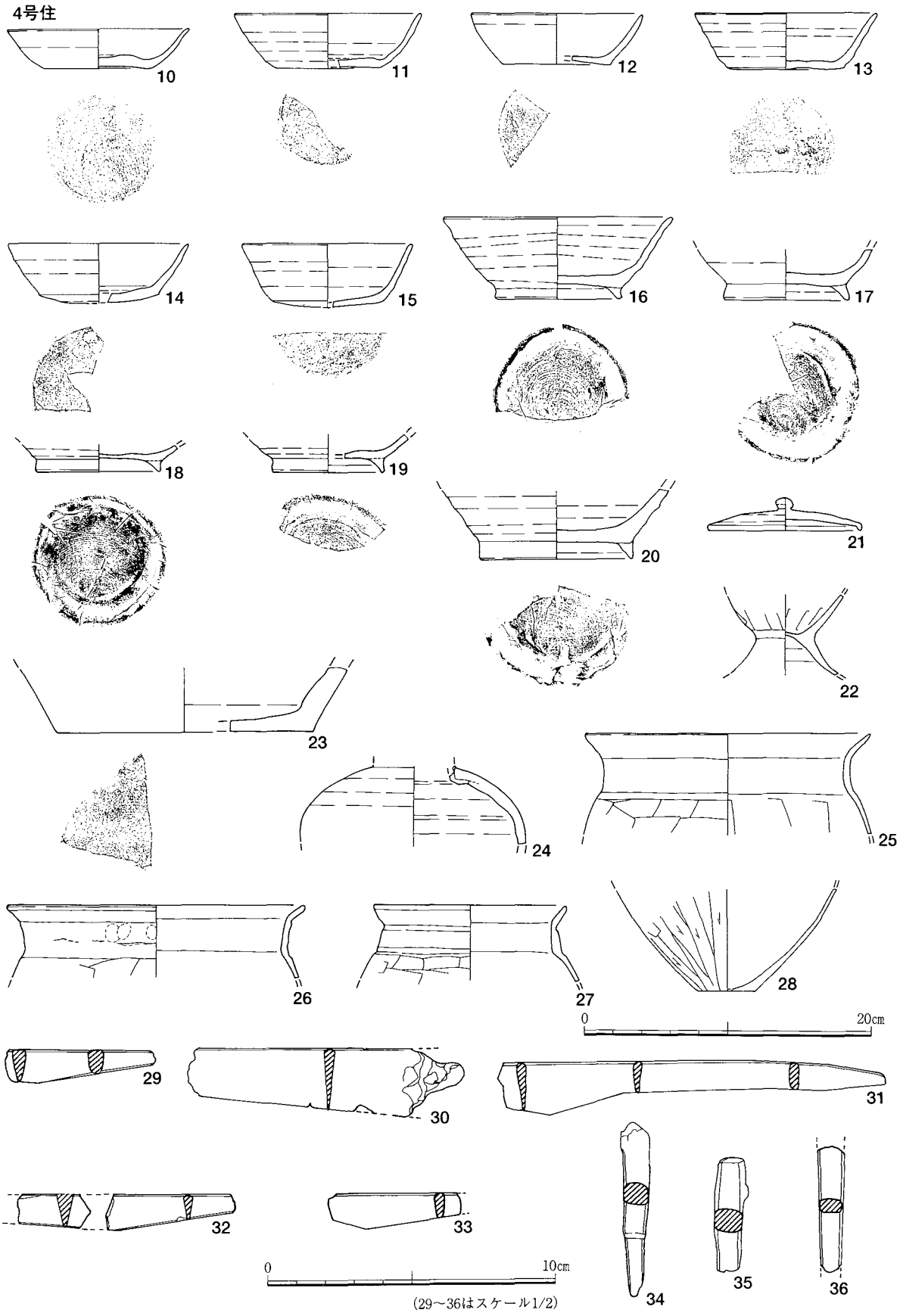
第20図　集石実測図　（１～４・６号集石）



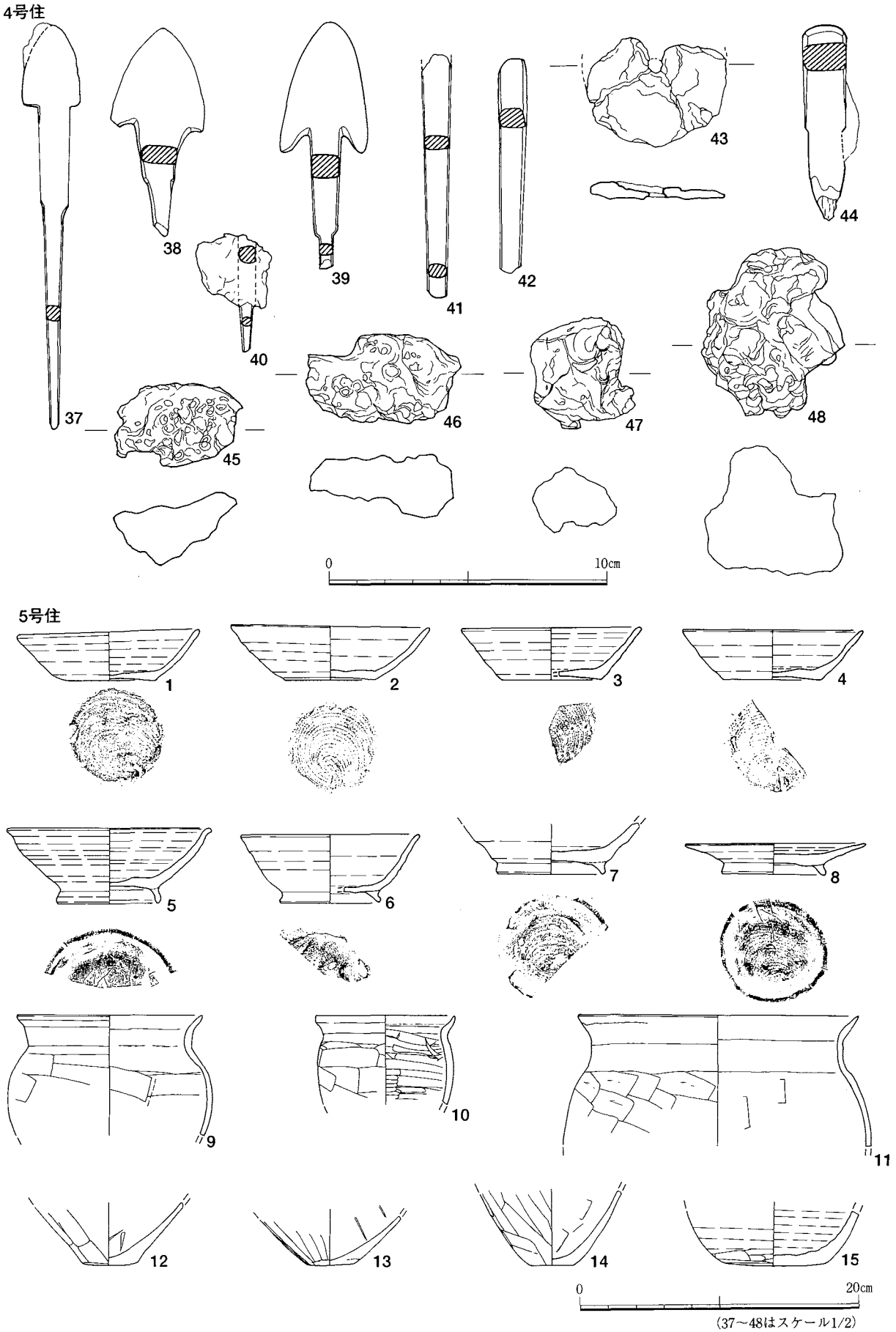
第21図　1・2号住居跡出土遺物実測図



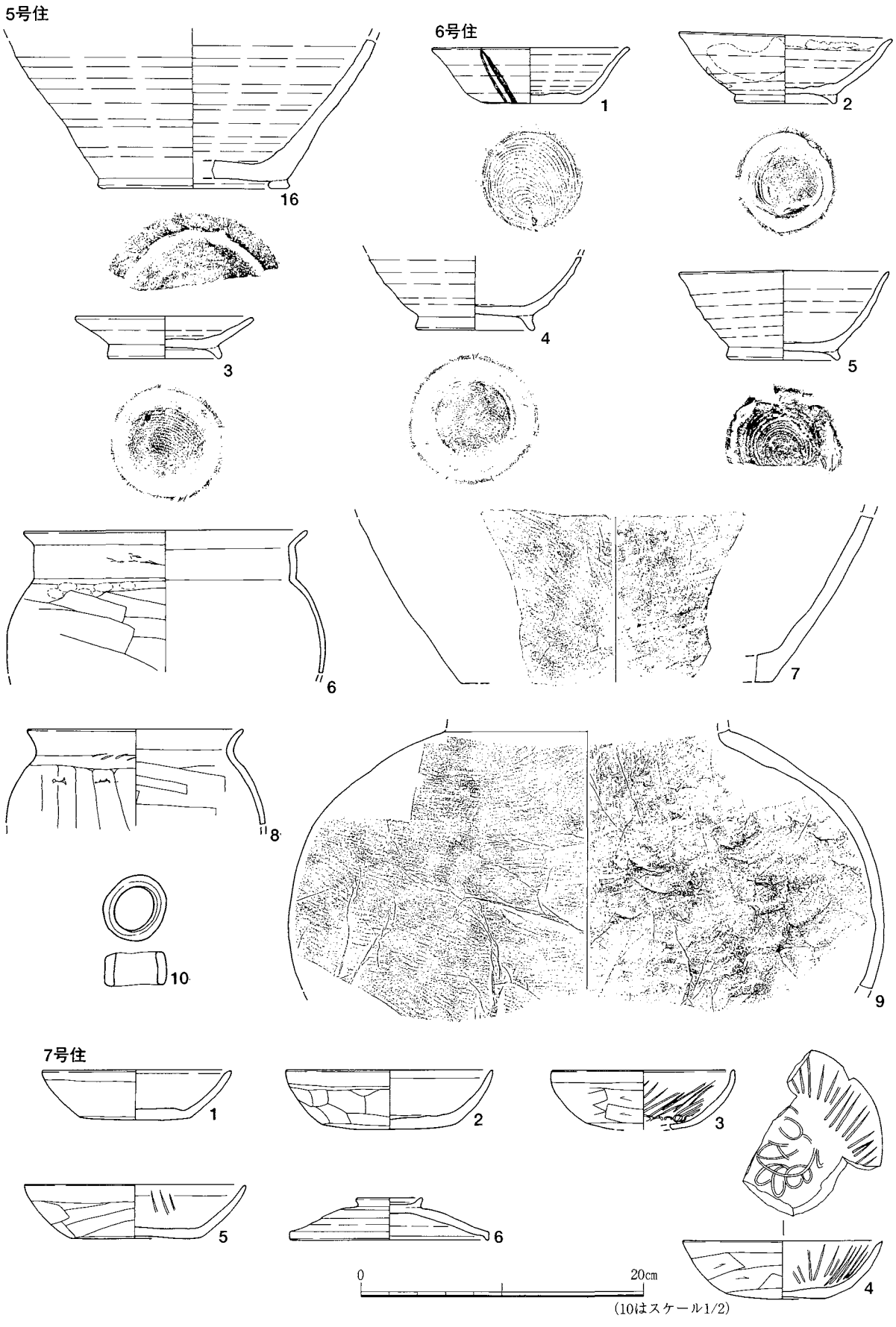
第22図　2～4号住居跡出土遺物実測図



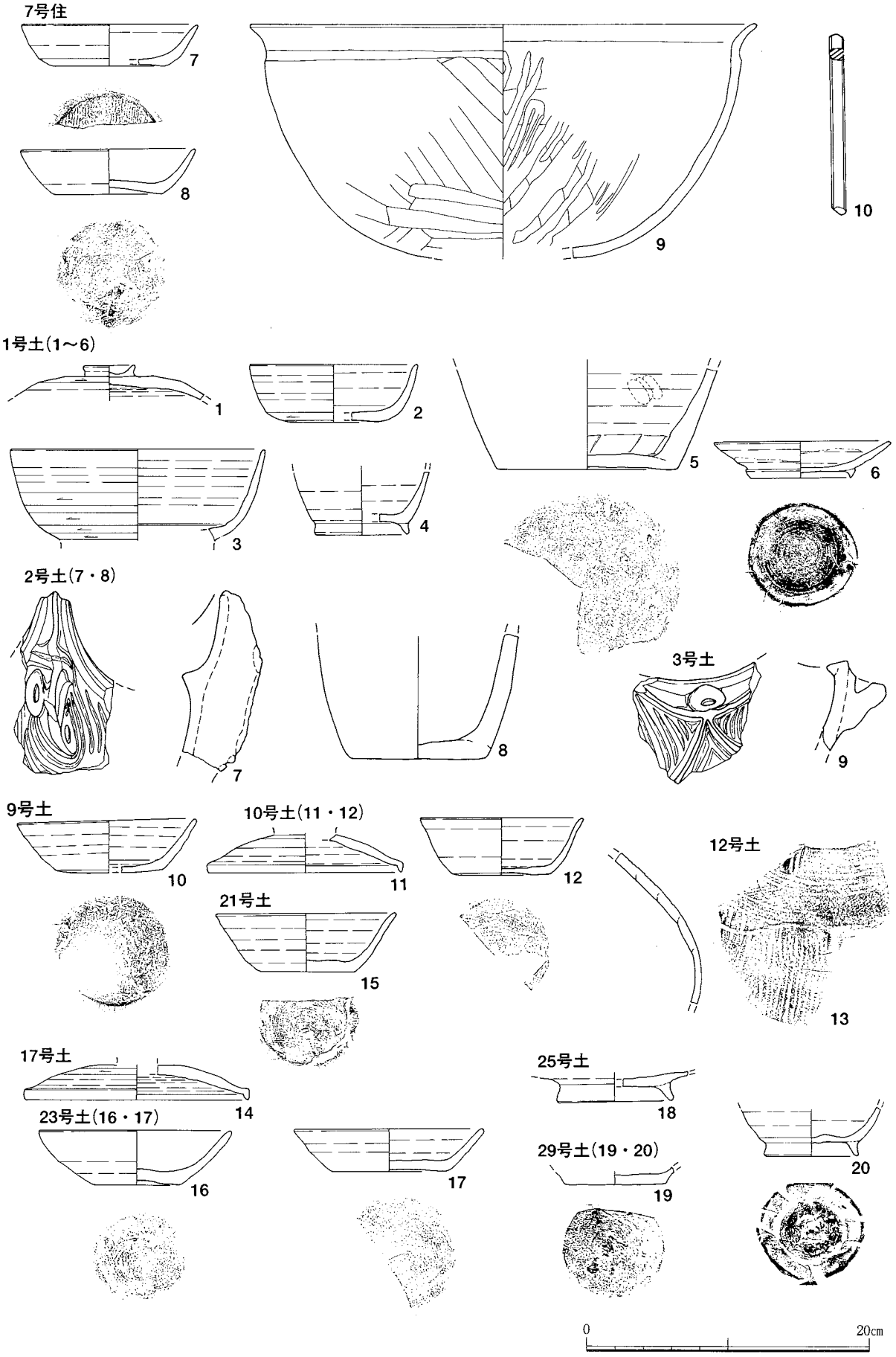
第23図　4号住居跡出土遺物実測図



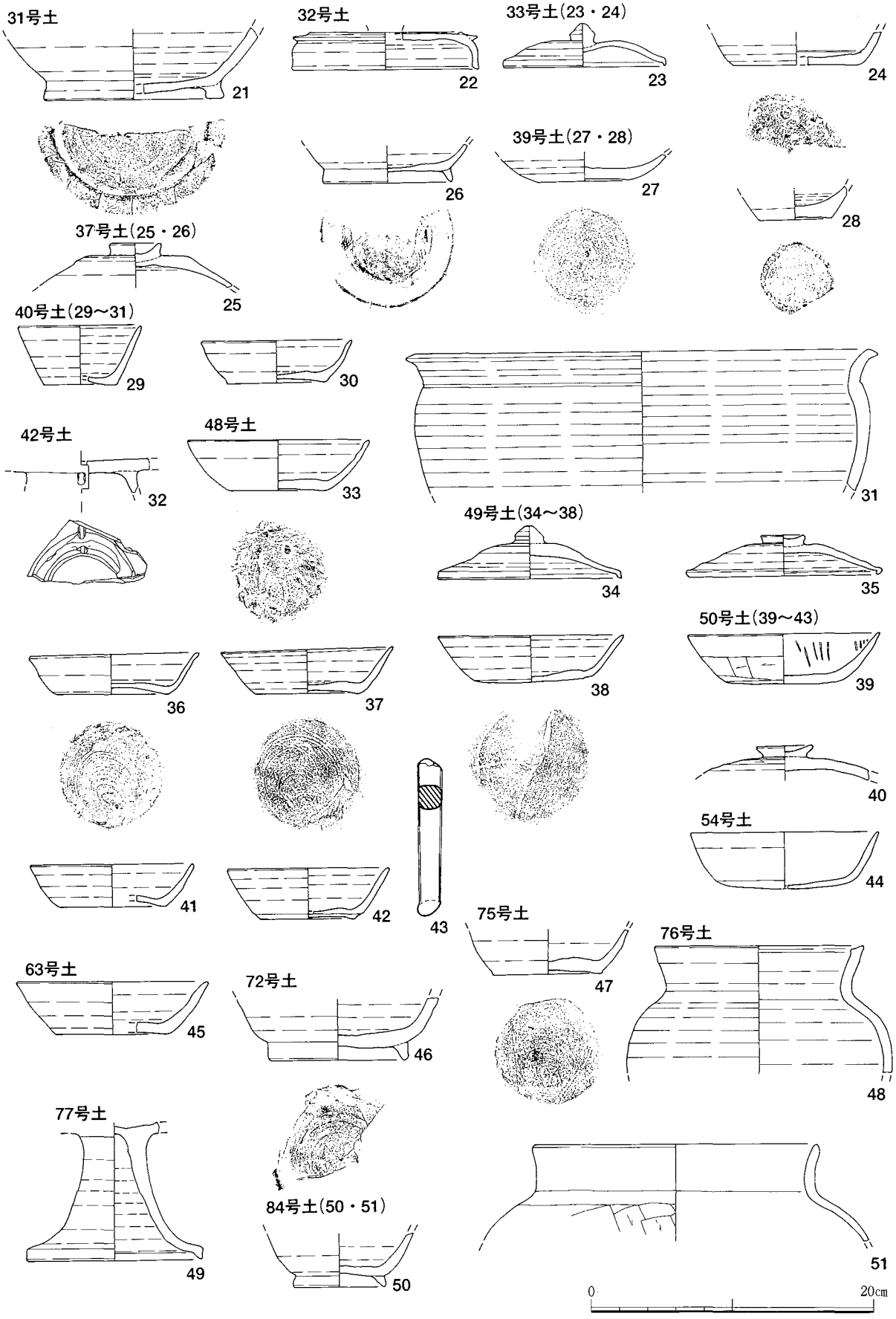
第24図　4・5号住居跡出土遺物実測図



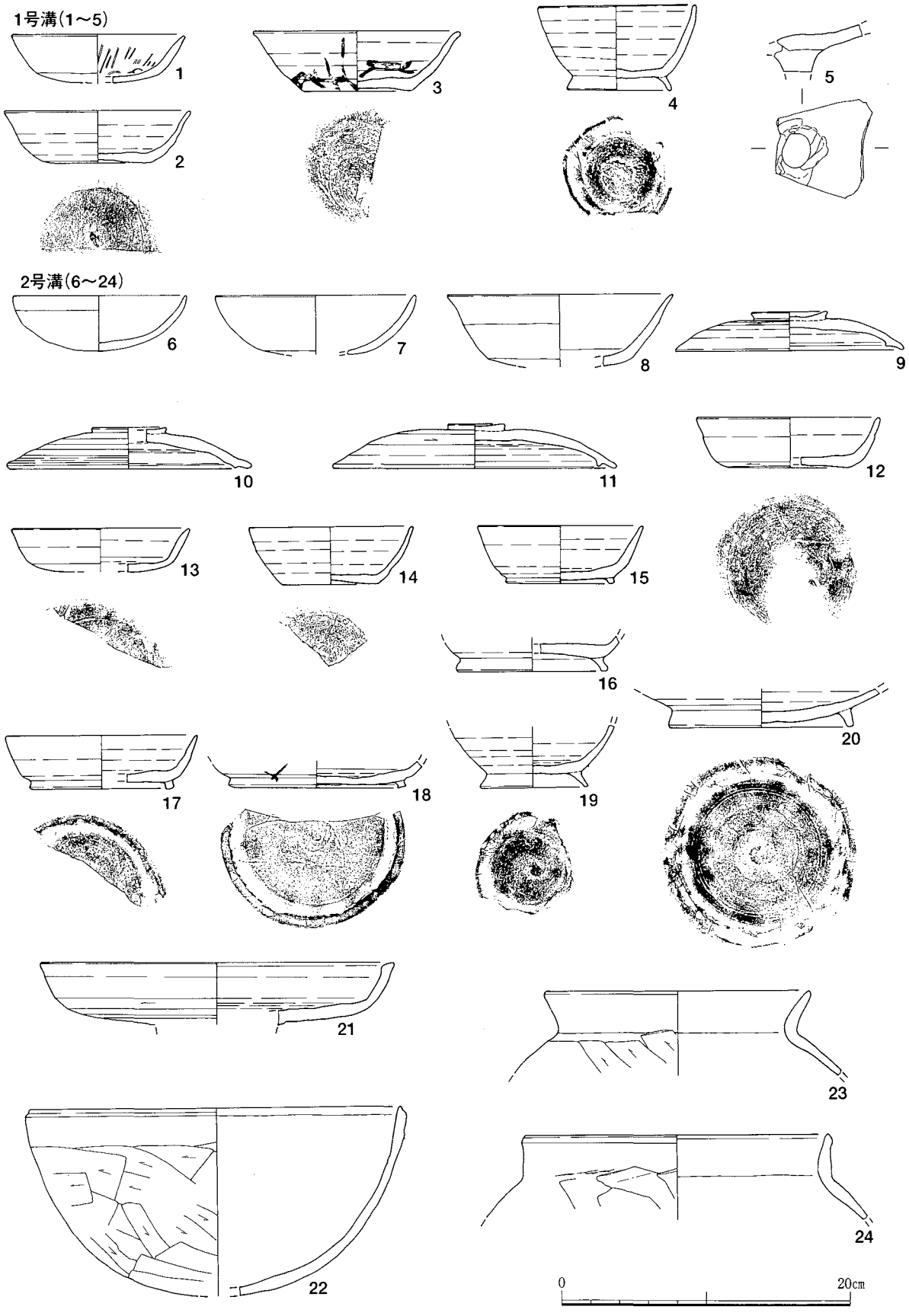
第25図　5～7号住居跡出土遺物実測図



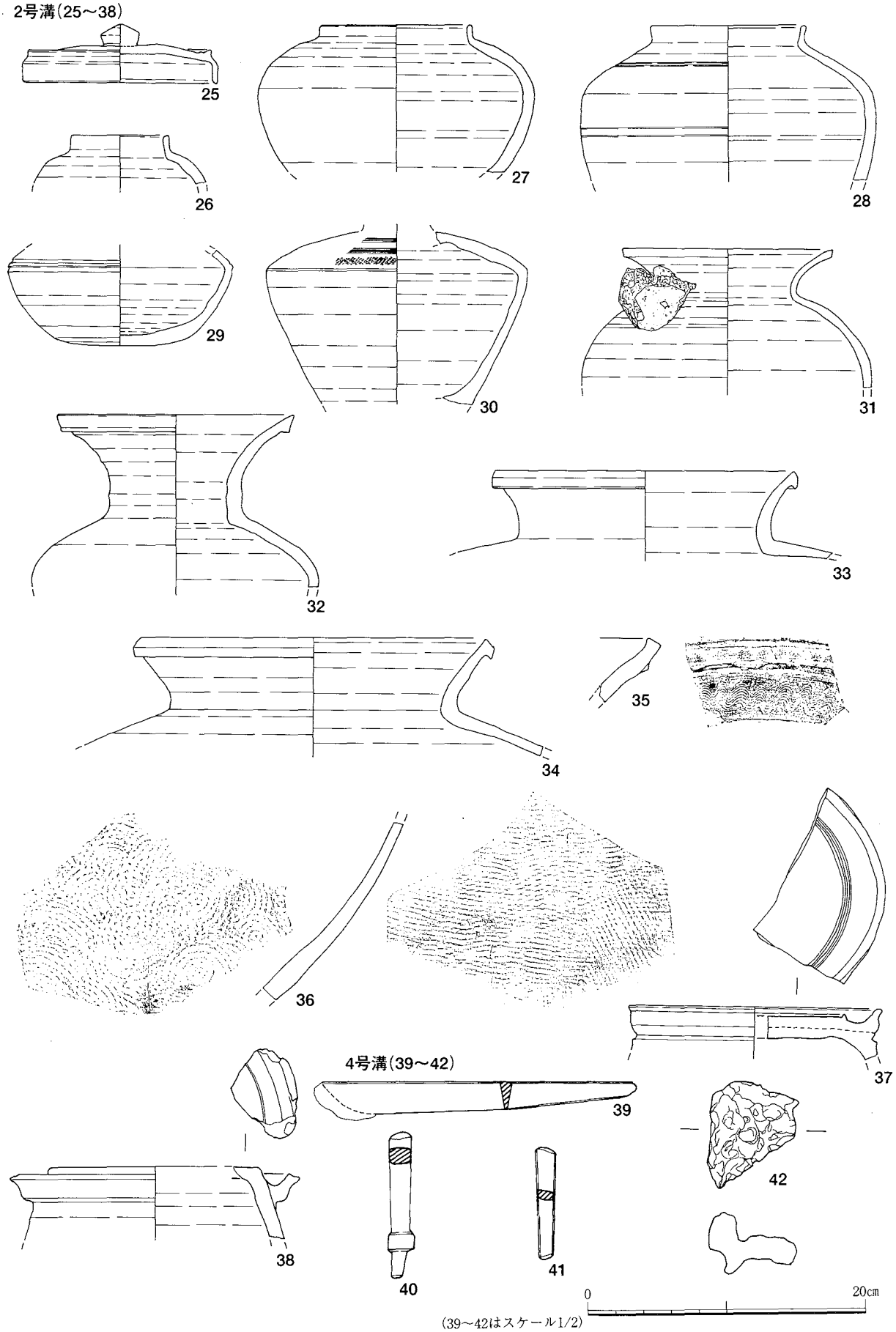
第26図　7号住居跡・1～3・9・10・12・17・21・23・25・29号土坑出土遺物実測図



第27図　31～33・37・39・40・42・48～50・54・63・72・75～77・84土坑出土遺物実測図



第28図　1・2号溝出土遺物実測図



第29図　2・4号溝出土遺物実測図

第5章　まとめ

五料平遺跡は、松井田町の市街地を流れる碓氷川沿いの河岸段丘上に立地する。遺跡のすぐ北側は山稜がまじかに迫り碓氷川との距離は五料茶屋～国道18号線間で250ｍと幅狭くなっている。

確かにこの間には、現在でも国道18号線をはじめとしてJR信越線が通り交通の要衝とならざるを得ない地形上にあり、古くは遺跡の西隣に位置する五料茶屋に関わる中山道、あるいは古代における東山道が存在し得る事が予想されていたが、それらに関わる明確な遺構は捉える事は出来なかった。

試掘調査の結果、トレンチNo.22～28間（平団地周辺～南側）の耕作土下は礫層となり遺構の存在は薄く、トレンチNo.１～21間に集約される事となり、なかでも遺構の密度の高いトレンチNo.１～４を拡張する事となった。地形の傾斜はトレンチNo.１～９が緩斜面となりトレンチNo.10～20は比較的平坦となる。現在のJR信越線は前者、国道18号線は後者に位置する。

調査の結果、住居跡７軒、掘立柱建物跡１棟、土坑77基、溝跡４条、集石４基が検出された。時期は間接的に縄文中期勝坂式をはじめとし、直接的には奈良・平安時代を主体とする集落跡で概ね二期に分けられる。

第Ⅰ期　（８世紀前半）

奈良・平安時代の須恵器は８世紀前半に成立する須恵器上野型短頸壷蓋（８世紀第２四半期）と環状坏蓋、坏Ａの口径と底径の差がなく所謂箱形を呈し、坏Ｂは底部と高台の差がなくなる。坏の底部調整は「ヘラ切り→回転ヘラ削り」と「下端回転ヘラ削りと静止糸切り・回転糸切り未調整」の二種が見られる。甕は肩の張る倒卵形を呈し、口縁部は折り返される。土師器は金属写しとされる放射状・螺旋状暗文を有する非ロクロ坏と断面「くの字」形口縁甕が加わる。これには２・７号住居跡と２号溝の遺物が相当する。１号住居跡は遺物が僅少であるため保留としたが、非ロクロ坏の器形・調整は同類である。

特に２号溝では須恵器の供膳具は云うまでもなく貯蔵具である短頸壷・文房具である円面硯が多く見られるが、煮沸具は僅少である。

第Ⅱ期　（９世紀前半～９世紀後半）

時期の特徴は、須恵器は坏Ａが口径と底径の差が大きくなり、椀Ｂの腰が「直線的となる」ものと「張るもの」の二種類がある。椀Ｂの腰が「直線的となる」ものに含まれる坏Ａの底部調整には「回転ヘラ切り後ナデ」と「底部切り離し後手持ちヘラ削り」「底部切り離し後周辺部回転ヘラ削り」「回転糸切り未調整」の四種類が観察され、それの「直線的となる」ものに含まれる坏Ａの底部調整にはすべて「回転糸切り未調整」となるため、Ａ・Ｂの二時期に別れる。土師器はすべて断面「コの字」形の武蔵型甕が加わる。３～６号住居跡の遺物がこれに相当する。第ⅡＡ期（９世紀前半）は４号住居跡、第ⅡＢ期（９世紀後半）は３・５・６号住居跡である。

いずれにしても一集落にしては須恵器の量が一般的ではなく、前述の２号住居、２号溝からのものと文房具とする円面硯と刀子、４号住居よりの鉄器類と鉄滓は周辺に官的な工房、あるいは須恵器の集積場などを想定するに足りる量である。近接する工事用道路の調査（松井田町教委）でも多量の須恵器が出土し、場所的に山際の谷沿いである事から周囲に窯跡が予想されている。

さらに表採資料より、縁釉椀片が出土するなど遺跡の特異性がみられる。

別表　遺物観察表（１）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1住1	土師器非ロクロ坏	口径(12.0) 底径 器高	口縁～体部は内湾しながら開き端部を内反させる。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	細・粗砂粒、褐色粒・片岩・小礫	酸化堅緻	橙色	残存：口縁～底部1/8
2	土師器甕	口径 底径　4.4 器高	胴部は球形を呈し底部は平たく納める。内：胴部～底部ヘラナデ。外：胴～底部ヘラ削り。外面に吹きこぼれの炭化物	粗砂粒、褐色粒・片岩・角閃石	酸化堅緻	橙色	残存：底部
2住1	土師器非ロクロ坏	口径　12.8 底径 器高　3.3	口縁～体部は内湾しながら開き端部を内反させる。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部横位ヘラ削り。	粗・細砂粒・角閃石	酸化堅緻	橙色	残存：1/2
2	土師器非ロクロ坏	口径　12.8 底径 器高　3.6	口縁～体部は内湾しながら開き端部を内反させる。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	粗・細砂粒	酸化やや軟質	橙色	残存：1/3
3	土師器非ロクロ坏	口径　13.8 底径　8.6 器高　4.0	口縁～体部は内湾しながら開き、底部は平たく納める。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	細砂粒・褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：2/3
4	土師器非ロクロ坏	口径(13.0) 底径（7.5） 器高	口縁～体部は内湾しながら開き、底部は平たく納める。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	白色細砂粒・褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：1/8
5	土師器非ロクロ坏	口径(14.9) 底径 器高	口縁～体部は内湾しながら開き、底部は平たく納める。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ、放射・螺旋状暗文。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：1/5
6	土師器非ロクロ坏	口径　14.8 底径　9.6 器高　4.3	口縁～体部は内湾しながら開き端部を内反させ、底部は平たく納める。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ、放射・螺旋状暗文。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	褐色粒	酸化堅緻	にぶい橙色	残存：1/5
7	土師器盤	口径(18.0) 底径(17.6) 器高（2.0）	口縁部は平たく納める底部より短く立ち上がる。調整は内外剥離が激しく明瞭でない。	白色細・粗砂粒	酸化堅緻	橙色	残存：1/6
8	須恵器蓋	口径　13.4 底径 器高　2.3	摘みは環状を呈し口縁端部は退化した反りが残る。天井部回転ヘラ削り。	白色粒	還元堅緻	灰色	残存：3/4
9	須恵器蓋	口径(18.6) 底径 器高（2.9）	大振りの蓋である。摘みは環状を呈し口縁端部は短く折れ曲がる。天井部回転ヘラ削り。外面全体に自然釉付着。	細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰黄色	残存：1/2
10	須恵器蓋	口径　18.0 底径 器高　3.2	大振りの蓋である。摘みは欠損、口縁端部は短く折れ曲がる。天井部回転ヘラ削り。	小礫	還元堅緻	明オリーブ灰色	残存：1/3
11	須恵器蓋	口径　14.6 底径 器高　2.4	摘みは環状を呈し口縁端部は短く折れ曲がる。天井部回転ヘラ削り。	黒色粒・白色粗砂粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/4
12	須恵器蓋	口径 底径 器高　3.2	摘みは環状を呈し口縁端部は欠損。天井部回転ヘラ削り。	白色細砂粒	還元堅緻	灰白色	残存：2/5
13	須恵器坏A	口径　14.0 底径　9.4 器高　3.0	口縁部は直線的に開き、端部は器肉が薄くなる。底部回転ヘラ削り。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	残存：1/6
14	須恵器坏B	口径 底径　9.0 器高	口縁部欠損。底部と高台部との差がないタイプ。底部は回転ヘラ削り。	白色細砂粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/3
15	須恵器坏B	口径 底径（9.8） 器高	口縁部欠損。底部と高台部との差がないタイプ。底部は回転ヘラ削り。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/4
16	須恵器坏A	口径 底径　10.2 器高	底部片。底部は回転ヘラ削り。	小礫	還元堅緻	灰色	残存：底部5/6
17	土師器甕	口径(14.8) 底径 器高	口縁部は「くの字」形に外反する。内：口縁部ナデ、外：口縁部ナデ・胴部横位ヘラ削り。	角閃石・雲母粒	酸化堅緻	褐灰色	残存：口縁部1/3
18	土師器甑	口径(37.6) 底径 器高	口縁部は「くの字」形に外反し、端部はわずかに摘み上げられる。内：口縁部ナデ、外：口縁部ナデ・胴部縦位ヘラ削り。	褐色粒・雲母粒	酸化堅緻	にぶい橙色	残存：口縁～胴部2/3
19	須恵器甕	口径　27.0 底径 器高　48.0	口縁部は端部で短く折れ曲がり垂下する。胴部は肩が張る倒卵形を呈す。内：口縁部ナデ、胴部同心円当て具、外：口縁部ナデ・胴部平行叩き。	白色細・粗砂粒・小礫	還元堅緻	灰白色	残存：口縁～胴部一部欠損
20	土師器甕	口径(22.4) 底径 器高	口縁部は「くの字」形に外反し、胴部は張りがなく長胴となる。内：口縁部ナデ・胴部ナデ、外：口縁部ナデ・胴部縦位ヘラ削り。	細・粗砂粒・小礫	酸化堅緻	橙色	残存：口縁～胴部1/6
21	ミニチュア土器	口径　6.0 底径　5.4 器高　3.7	口縁部～体部は内湾しながら開き端部を内反させ模倣坏に類似。口縁部に２孔（対）穿たれる。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	細・粗砂粒、褐色粒・片岩・小礫	酸化堅緻	橙色	残存：ほぼ完形
22	用途不明鉄製品	長さ：6.0幅：0.8重さ：5.6ｇ断面方形を呈する棒状の鉄製品。					残存：部分

別表　遺物観察表（２）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
23	鉄滓	長さ：8.8　幅：5.9　重さ：135.4ｇ					
3住1	須恵器坏A	口径(13.8) 底径 (7.0) 器高 (3.7)	口縁部はやや内湾気味に開き、口径と底径の差が大きいタイプ。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒	還元軟質	灰白色	残存：1/4
2	須恵器坏B	口径 底径 8.0 器高	高台部は断面三角形を呈する。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・黒色粒・小礫	還元堅緻	灰～黄色	残存：底部
3	須恵器坏B	口径 底径 (7.0) 器高	高台部は断面三角形を呈する。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・石英粒	還元堅緻	灰白色	残存：底部2/3
4	須恵器皿B	口径(13.5) 底径 (6.7) 器高 1.5	坏部は平たく高台部は断面三角形を呈する。底部は剥離が激しく不明。	細・粗砂粒・褐色粒	還元軟質	灰白色	残存：1/3
5	土師甕	口径(18.0) 底径 器高(20.0)	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型の甕である。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部横位ヘラ削り。	細・粗砂粒・褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：口縁部
6	土師甕	口径(24.0) 底径 器高	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型の甕である。内：口縁部ナデ、体部～底部ヘラナデ。外：口縁部ナデ、体～底部横位ヘラ削り。	細・粗砂粒・褐色粒	酸化堅緻	にぶい橙色	残存：口縁～胴部
7	土師甕	口径 底径 7.0 器高	武蔵型甕の底部である。内：底部ヘラナデ。外：底部縦位ヘラ削り。	細・粗砂粒・褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：口縁部
8	須恵器長頸壺	口径 5.2 底径 5.5 器高 13.3	壺Ｍである。口縁端部は若干摘み上げられ、胴部は肩が張るもの。調整は胴部下端回転ヘラ削り。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・白色粒・黒色粒	還元堅緻	灰オリーブ	残存：完形
4住1	土師器非ロクロ坏	口径 12.5 底径 器高 3.0	口縁部は内反気味に開き、底部は丸く納める。内：口縁部ナデ、体部～底部ナデ。外：口縁部ナデ、体～底部ヘラ削り。	白色粒・粗砂粒	還元堅緻	灰色	残存：1/5
2	須恵器坏A	口径 13.3 底径 7.4 器高 3.1	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：完形
3	須恵器坏A	口径 13.6 底径 6.8 器高 3.3	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	残存：ほぼ
4	須恵器坏A	口径 13.2 底径 7.8 器高 3.1	口縁部は直線的に開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り後周辺部ナデ。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	残存：1/2
5	須恵器坏A	口径 14.4 底径 7.5 器高 3.3	口縁部は直線的に開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	白色細・粗砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	残存：1/2
6	須恵器坏A	口径 12.3 底径 7.7 器高 2.9	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・黒色	還元堅緻	灰白色	残存：2/3
7	須恵器坏A	口径 12.6 底径 7.7 器高 2.9	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・黒色	還元堅緻	灰白色	残存：1/2
8	須恵器坏A	口径 12.6 底径 7.2 器高 3.7	口縁部は直線的に開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒・黒色	還元堅緻	灰白色	残存：1/2
9	須恵器坏A	口径 13.6 底径 7.5 器高 3.0	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：2/3
10	須恵器坏A	口径 12.6 底径 7.2 器高 2.8	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/3
11	須恵器坏A	口径 12.9 底径 7.0 器高 3.8	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り未調整。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白～灰黄色	残存：1/6
12	須恵器坏A	口径 11.8 底径 7.5 器高 3.5	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り後ナデ。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	残存：1/3
13	須恵器坏A	口径 12.5 底径 8.1 器高 4.0	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は回転糸切り後ナデ。	長石・小礫・白色細砂粒	還元堅緻	灰色	残存：2/5
14	須恵器坏A	口径 12.8 底径 8.2 器高 4.1	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は切り離し後回転ヘラ削り。	黒色粒	還元堅緻	灰色	残存：1/4
15	須恵器坏A	口径 11.6 底径 7.6 器高 4.4	口縁部は腰に丸みを持って開き、底部は平たく納める。底部は切り離し後手持ちヘラ削り。	黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/3

別表　遺物観察表（３）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
16	須恵器坏B	口径 15.6 底径 8.5 器高 7.7	口縁部は直線的に開き、底部は断面三角形の高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	小礫・白色細砂粒	還元堅緻	灰白色	残存：1/2
17	須恵器坏B	口径 底径 8.4 器高	底部は断面三角形の高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	黒色粒	還元堅緻	灰黄色	残存：1/4
18	須恵器坏B	口径 底径 8.5 器高	底部は断面三角形の高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	黒色粒	還元堅緻	灰白色	残存：底部
19	須恵器坏B	口径 底径 (7.6) 器高	底部は断面三角形の高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	黒色粒・白色細砂粒	還元堅緻	灰白色	残存：底部2/5
20	須恵器鉢	口径 底径(18.0) 器高	底部は断面三角形の高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	粗砂粒	還元堅緻	灰黄色	残存：底部2/5
21	須恵器蓋	口径 10.5 底径 器高 2.3	口縁部は端部で短く折れ曲がり、摘みは宝珠となる。器面が溶けて調整は不明。	黒色粒・石英	還元堅緻	灰黄色	残存：完形
22	土師器台付甕	口径 底径 器高	胴部の下位は縦位ヘラ削り。台は内外共に横位ナデ。	雲母	酸化堅緻	橙色	残存：底～台
23	須恵器瓶	口径 底径 器高 9.0	胴部は平底より直線的に開く。内外ナデ。	黒色粒・石	還元堅緻	灰色	残存：胴1/5
24	須恵器長頸壺	口径 底径 器高	胴部は肩が余り張らず丸く納める。内外ナデ。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	残存：底部片
25	土師器甕	口径 19.8 底径 器高	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型タイプ。内：口縁部ナデ・胴部ヘラナデ、外：口縁部ナデ・胴部横位ヘラ削り。	角閃石・褐色粒	酸化堅緻	橙色	残存：口縁～胴部1/2
26	土師器甕	口径 20.8 底径 器高	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型タイプ。内：口縁部ナデ・胴部ヘラナデ、外：口縁部ナデ・胴部横位ヘラ削り。	細・粗砂粒	酸化堅緻	にぶい橙色	残存：口縁～胴部1/5
27	土師器甕	口径 13.2 底径 器高	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型タイプ。内：口縁部ナデ・胴部ヘラナデ、外：口縁部ナデ・胴部横位ヘラ削り。	細・粗砂粒	酸化堅緻	橙色	残存：口縁～胴部1/5
28	土師器甕	口径 底径 4.0 器高	口縁部は「コの字」形に外反する武蔵型タイプの底部である。内：胴部ヘラナデ、外：胴部縦位ヘラ削り。	角閃石・粗砂粒	酸化堅緻	橙色	残存：胴部1/2
29	鉄製刀子	長さ：7.5幅：1.0重さ：7.6ｇ刃部はわずかで大半は柄部である。刃部と柄部の境には関はない。					残存：刃～柄部
30	鉄製刀子	長さ：9.7幅：2.4重さ：28.7ｇ刃部のみの出土であるが最大の刃幅が2.4㎝を計る大型のものである。					残存：刃部
31	鉄製刀子	長さ：13.5幅：1.8重さ：22.2ｇ刃部はわずかで大半は柄部である。刃部と柄部の境には関はない。					残存：刃～柄部
32	鉄製刀子	長さ：7.5幅：1.0重さ：7.2ｇ刃部はわずかで大半は柄部である。刃部と柄部の境には関はない。					残存：刃～柄部
33	鉄製刀子	長さ：4.6幅：1.2重さ：9.4ｇ刃部はわずかで大半は柄部である。刃部と柄部の境には関はない。					残存：刃～柄部
34	用途不明鉄製品	長さ：6.1幅：1.0重さ：7.2ｇ断面は方形を呈する棒状の製品で下位に段差を生ずる。					残存：
35	用途不明鉄製品	長さ：4.0幅：1.1重さ：8.6ｇ断面方形の棒状製品である。					遺存：部分
37	鉄製品鏃	長さ：14.5幅：2.1重さ：29.7ｇ長頸の三角鏃である。頭は平根の三角形を呈し、茎部は側面が段差を生じる。					遺存：ほぼ完形
38	鉄製品鏃	長さ：7.5幅：3.3重さ：29.2ｇ長頸の三角鏃である。頭は平根の三角形を呈する。					遺存：先端部
39	鉄製品鏃	長さ：8.9幅：3.1重さ：33.7ｇ長頸の三角鏃である。頭は腸抉を呈し、茎部は側面が段差を生じる。					遺存：先端部
40	鉄製品鏃	長さ：4.3幅：2.7重さ：16.0ｇ断面丸型である。					遺存：茎部

別表　遺物観察表（４）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
41	用途不明鉄製品	長さ：8.8幅：1.0重さ：12.5ｇ棒状の製品で断面上位は方形を呈し下位は若干丸みを帯びる。					遺存：部分
42	用途不明鉄製品	長さ：7.7幅：1.0重さ：17.6ｇ棒状の製品で断面方形を呈する。					遺存：部分
43	鉄製品紡錘車	長さ：3.6幅：5.1重さ：19.0ｇ紡輪の一部で半分は欠損し、遺存部も錆が激しい。					遺存：紡輪部分
44	鉄滓	長さ：7.0幅：1.6重さ：45.0ｇ頭は丸く断面方形を呈する。					遺存：部分
45	鉄滓	長さ：2.6幅：4.4重さ：31.9ｇ					遺存：
46	鉄滓	長さ：3.1幅：5.4重さ：47.4ｇ					遺存：
47	鉄滓	長さ：4.0幅：3.2重さ：36.7ｇ					遺存：
48	鉄滓	長さ：6.1幅：4.1重さ：149.8ｇ					遺存：
5住1	須恵器坏A	口径 13.0 底径 6.2 器高 3.7	口縁～体部は内湾気味に開き口径と底径の差があるタイプ。底部回転糸切り未調整	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	遺存：ほぼ完形
2	須恵器坏A	口径(14.2) 底径 6.5 器高 4.0	口縁～体部は内湾気味に開き口径と底径の差があるタイプ。底部回転糸切り未調整	細砂・黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/3
3	須恵器坏A	口径(12.8) 底径 (7.1) 器高 4.3	口縁～体部は内湾気味に開き口径と底径の差があるタイプ。底部回転糸切り未調整	白色細砂・黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/5
4	須恵器坏A	口径(12.9) 底径 (6.9) 器高 3.6	口縁～体部は内湾気味に開き口径と底径の差があるタイプ。底部回転糸切り未調整	白色細砂・黒色粒	還元堅緻	灰色	遺存：1/5
5	須恵器椀B	口径 14.8 底径 7.4 器高 6.5	口縁～体部は内湾気味に開き内反する短い高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	遺存：1/2
6	須恵器椀B	口径(12.8) 底径 (7.0) 器高 (4.9)	口縁～体部は内湾気味に開き「ハの字」形に開く短い高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整	細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/4
7	須恵器椀B	口径 底径 7.7 器高	口縁～体部は内湾気味に開き「ハの字」形に開く短い高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整	細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/2
8	須恵器皿B	口径 12.9 底径 9.4 器高 2.4	口縁～体部は水平に開き「ハの字」形に開く短い高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整	細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	遺存：1/3
9	土師器甕	口径(13.3) 底径 器高	口縁部は断面「コの字」形に外反する武蔵型甕である。内：横位ヘラナデ、外：上位横位ヘラ削り。	細砂粒	酸化堅緻	にぶい褐色	遺存：口縁～胴部1/4
10	土師器小型甕	口径(10.0) 底径 器高	口縁部は短く内反気味に開く。内：横位ヘラナデ、外：上位横位ヘラ削り。	細砂粒	酸化堅緻	にぶい橙色	遺存：口縁～胴部1/4
11	土師器甕	口径 20.0 底径 器高	口縁部は断面「コの字」形に外反する武蔵型甕である。内：横位ヘラナデ、外：上位横位ヘラ削り。	細砂粒	酸化堅緻	赤褐色	遺存：口縁～胴部
12	土師器甕	口径 底径 3.7 器高	武蔵型甕の底部である。内：斜位ヘラナデ、外：縦位横位ヘラ削り。	細砂粒	酸化堅緻	にぶい赤褐色	遺存：底部
13	土師器甕	口径 底径 3.3 器高	武蔵型甕の底部である。内：斜位ヘラナデ、外：縦位横位ヘラ削り。	細・粗砂粒・角閃石・褐色粒	酸化堅緻	にぶい褐色	遺存：底部
14	土師器甕	口径 底径 3.1 器高	武蔵型甕の底部である。内：斜位ヘラナデ、外：縦位横位ヘラ削り。	白色細砂・褐色粒	酸化堅緻	灰褐色	遺存：底部4/5
15	須恵器小型甕	口径 底径 (7.6) 器高	胴部下位は若干貼りのある小型の甕である。底部は回転糸切り後胴部下端不定方向のヘラ削り。	細・粗砂粒・角閃石・褐色粒	酸化堅緻	にぶい橙色	遺存：底部3/4
16	須恵器甕	口径 底径(13.4) 器高	胴部は大きく開くタイプである。底部は断面扁平な高台を貼り付ける。底部は切り離し後回転ナデ。	細砂・黒色粒	還元堅緻	灰色	遺存：胴～底部1/3

別表　遺物観察表（５）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
6住1	須恵器坏A	口径(14.0) 底径 (7.8) 器高 6.4	口縁～体部は外反し端部でさらに外反する。底部は回転糸切り未調整。外体部に火襷が顕著に見られる。	粗砂粒・黒色粒	還元堅緻	黄灰色	遺存：1/4
2	須恵器椀B	口径 14.4 底径 6.8 器高 4.9	口縁～体部は内湾気味に開き断面「三角形」の高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整。	細砂粒	還元堅緻	灰白色	遺存：完形
3	須恵器皿B	口径 12.4 底径 7.9 器高 3.0	口縁～体部は横に開き断面「三角形」の高台を貼り付ける。底部回転糸切り未調整	白色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：ほぼ完形
4	須恵器椀B	口径 底径 8.2 器高	口縁～体部は内湾気味に開き断面「三角形」の高台を貼りつける。底部回転糸切り未調整。	黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/2
5	須恵器椀B	口径(14.8) 底径 (7.8) 器高 6.4	口縁～体部は内湾気味に開き断面「三角形」の高台を貼りつける。底部回転糸切り未調整。	粗砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰白色	遺存：1/3
6	土師甕	口径 19.8 底径 器高	口縁部は断面「コの字」形に外反する武蔵型甕である。内：横位ヘラナデ、外：上位横位ヘラ削り。	白色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：口縁～胴部1/2
7	須恵器甕	口径 底径(22.0) 器高	内：無文当て具、外：平行叩き	黒色粒	還元堅緻	灰色	遺存：胴部1/3
8	土師甕	口径 15.2 底径 器高	口縁部は断面「くの字」形に外反する。内：横位ヘラナデ、外：上位縦位ヘラ削り。	片岩・細砂粒	酸化堅緻	灰褐色	遺存：口縁～胴部1/6
9	須恵器甕	口径 底径 42.0 器高	胴部は大きく張り偏球形を呈する。内：無文当て具、外：平行叩き	黒色粒・白色片岩・細粒	還元堅緻	灰色	遺存：頸～胴部1/4
10	鉄製品環状留め具	長さ：2.2幅：2.2重さ：8.0ｇ環状の鉄製品で工具類などの柄部にある留め金具状のものであろうか。					遺存：完形
7住1	土師器非ロクロ坏	口径 13.8 底径 7.8 器高 3.5	口縁～体部は内湾しながら開き底部を平たく納める。内外：剥離により調整痕は不明。	白色細砂粒	酸化堅緻	橙色	遺存：完形
2	土師器非ロクロ坏	口径 14.4 底径 9.4 器高 4.2	口縁～体部は内湾しながら開き底部を平たく納める。内：口縁～底部ナデ、外：口縁～体部は口縁部付近まで横位ヘラ削り、底部ヘラ削り。	褐色粒	酸化堅緻	にぶい黄橙色	遺存：1/2
3	土師器非ロクロ坏	口径(13.2) 底径 (8.2) 器高	口縁～体部は内湾しながら開き底部を丸く納める。内：口縁～底部ナデ・放射・螺旋状暗文、外：口縁～体部は口縁部付近まで斜横位ヘラ削り・底部ヘラ削り。	細・粗砂粒・片岩	酸化堅緻	にぶい黄橙色	遺存：1/5
4	土師器非ロクロ坏	口径 14.0 底径 6.2 器高 4.1	口縁～体部は内湾しながら開き底部を平たく納める。内：口縁～底部ナデ・放射・螺旋状暗文、外：口縁～体部は口縁部付近まで斜横位ヘラ削り・底部ヘラ削り。	褐色粒	酸化堅緻	にぶい黄橙色	遺存：1/3
5	土師器非ロクロ坏	口径 15.4 底径 8.8 器高 3.8	口縁～体部は内湾しながら開き底部を平たく納める。内：口縁～底部ナデ・放射・螺旋状暗文、外：口縁～体部は口縁部付近まで斜横位ヘラ削り・底部ヘラ削り。	褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/3
6	須恵器蓋	口径 13.8 底径 器高 3.3	口縁端部は折り曲がり断面三角形を呈す。摘みはリング状を呈し径を4.4㎝を計る。内：口縁～天井部ナデ、外：天井部回転ヘラ削り。	白色細砂粒	還元堅緻	灰褐色	遺存：ほぼ完形
7	須恵器坏A	口径(12.4) 底径 (7.8) 器高 (3.0)	口縁～体部は内湾しながら開き、口径と底径の差がないタイプ。内：口縁～底部はナデ、外：体部下端回転ヘラ削り・底部静止糸切り。	白色細・粗砂粒	還元	明オリーブ灰色	遺存：1/3
8	須恵器坏A	口径 12.2 底径 7.6 器高 3.2	口縁～体部は内湾しながら開き、口径と底径の差がないタイプ。内：口縁～底部はナデ、外：底部回転糸切り未調整。	黒色粒・白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	遺存：完形
9	土師器鉢	口径(38.0) 底径 器高(16.5)	口縁部は外反し胴～底部は丸く納める。内：口縁部ナデ・胴部縦位ヘラ研磨、外：口縁部ナデ、胴部上位縦位・下位斜横位ヘラ削り。	小礫	酸化堅緻	にぶい橙色	遺存：1/5
10	用途不明鉄製品	長さ：6.3幅：0.5重さ：5.0ｇ棒状製品で断面方形を呈する。					遺存：部分
1土1	須恵器蓋	口径 底径 器高	口縁端部は欠損、摘みはリング状を呈し径は3.6㎝を計る。内：口縁～天井部ナデ、外：天井部回転ヘラ削り。	粗砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/4
2	須恵器坏A	口径(11.8) 底径 (7.6) 器高 4.1	口縁～体部は下端を丸くして開く。底部回転糸切り後体部下端を回転ヘラ削り。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/4
3	須恵器坏B	口径(18.0) 底径 器高 (6.5)	口縁～体部は下端を丸くして立ち上がる。体部下端を回転ヘラ削り。	白色砂・細砂・黒色粒・礫	還元	灰～暗灰色	遺存：1/5
4	須恵器坏B	口径 底径 (6.4) 器高	口縁～体部は高台部より立ち上がる。高台部は断面三角形を呈す。底部回転糸切り未調整。	粗砂・黒色粒・礫	還元	暗灰色	遺存：1/5

別表　遺物観察表（６）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
5	須恵器 甕	口径 底径(12.7) 器高	胴～底部はバケツ状を呈す。内：胴～底部ナデ、外：平行叩き・下端～底部無調整。	粗砂・長石・白色粒・礫	還元	褐灰色	遺存：体～底部
6	灰釉陶器 皿B	口径 12.4 底径 7.1 器高 2.6	口縁～体部は内湾しながら開き、底部は高台を貼り付ける。高台は断面三日月状を呈す。釉は漬け掛けである。	白色細砂粒	還元	灰色 釉はオリーブ色	遺存：4/5
2土 7	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	沈線を主体とする勝坂式の深鉢である。	砂粒・雲母	酸化堅緻	赤褐色	遺存：口縁部片
8	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	胴～底部は無文帯となる。	砂粒・雲母	酸化堅緻	赤褐色	遺存：胴～底部
3土 9	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	沈線・三叉文を主体とする勝坂式の深鉢である。	砂粒・雲母	酸化堅緻	赤褐色	遺存：口縁部片
9土 10	須恵器 坏A	口径 12.6 底径 7.7 器高 3.7	口縁～体部は内湾気味に開く。底部切り離し後手持ちヘラ削り。	細砂・黒色粒・礫	還元	灰色	遺存：3/5
10土 11	須恵器 蓋	口径(13.7) 底径 器高 (2.7)	口縁端部は折れ曲がり摘みは欠損するがリング状を呈するものと思われる。内：口縁～天井部ナデ、外：天井部回転ヘラ削り。	細砂・白色・黒色粒	還元	灰色	遺存：口縁部片
12	須恵器 坏A	口径(11.4) 底径 7.0 器高 4.1	口縁～体部は開き端部でさらに外反する。底部回転糸切り未調整。	粗砂・黒色粒	還元	にぶい橙色	遺存：1/2
12土 13	弥生土器 壺	口径 底径 器高	壺型土器の胴部片である。	粗砂・小礫	酸化堅緻	明黄褐色	遺存：胴部片
17土 14	須恵器 蓋	口径(15.8) 底径 器高	口縁端部は折り曲がり摘みは欠損するが、扁平な摘みを呈するものと思われる。内：口縁～天井部ナデ、外：天井部回転ヘラ削り。	粗砂・小礫	還元	灰白色	遺存：1/4
21土 15	須恵器 坏A	口径 (12.8) 底径 (6.8) 器高 (4.3)	口縁～体部は外反する。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒	還元	灰～灰白色	遺存：1/4
23土 16	須恵器 坏A	口径 13.5 底径 6.0 器高 3.9	口縁～体部は内湾しながら開き底部は回転糸切り後周辺を回転ヘラ削り。	粗砂・小礫・角閃石	酸化堅緻	橙色	遺存：5/6
17	須恵器 坏A	口径(13.3) 底径 (8.0) 器高 3.0	口縁～体部は外反する。底部は回転糸切り未調整。	細砂・褐色粒	還元	灰～灰白色	遺存：1/2
25土 18	須恵器 皿B	口径 底径 (7.8) 器高	口縁部欠損、体部は平たく納め高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	細砂粒	還元	灰白色	遺存：1/2
29土 19	須恵器 坏A	口径 底径 7.1 器高	口縁～体部欠損、底部は回転ヘラ切り未調整。	細砂粒	還元	灰白色	遺存：5/6
20	須恵器 椀B	口径 底径 6.5 器高	口縁部欠損、体部は貼り付け高台部より内湾気味に開く。底部回転ヘラ切り未調整。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：体～底部
31土 21	須恵器 瓶	口径 底径 12.6 器高	底部は断面「コの字」形の高台を貼り付ける。底部は回転ヘラ削り。	粗砂・白色粒	還元	灰赤色	遺存：底部1/3
32土 22	須恵器 短頸壺蓋	口径(13.1) 底径 器高	摘み欠損。天井部肩部に突起を貼り付ける。	白色細砂粒	還元	灰色	遺存：破片
33土 23	須恵器 蓋	口径 11.3 底径 器高 3.1	口縁端部は折れ曲がり断面三角形を呈する。摘みは擬宝珠である。外：天井部は回転ヘラ削り。	粗砂・黒色粒	還元	灰赤色	遺存：ほぼ完形
24	須恵器 坏A	口径 底径 (8.8) 器高	口縁部欠損。外：底部回転ヘラ切り後周辺部ヘラナデ。	白色細砂粒	還元	灰色	遺存：1/3
37土 25	須恵器 蓋	口径 底径 器高	口縁端部は欠損する。摘みはリング状を呈し径は3.4cmを計る。外：天井部は回転ヘラ削り後回転ナデ。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/2
26	須恵器 椀B	口径 底径 (9.0) 器高	口縁端部は欠損する。体部は高台部より連続し断面三角形を呈する高台を貼り付ける。底部は回転糸切り未調整。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：底部1/2
39土 27	土師器 坏A	口径 底径 (6.3) 器高	口縁部欠損。外：体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切り。	細砂・白色粒・雲母・小礫	酸化堅緻	にぶい黄橙色	遺存：底部
28	須恵器 壺	口径 底径 5.0 器高	小型壺の底部で調整は回転糸切り未調整。	細砂・白色粒	還元	灰色	遺存：底部3/4

別表　遺物観察表（７）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
40土29	須恵器 坏A	口径（8.8） 底径（5.2） 器高 4.2	口縁～体部は直線的に開き口径と底径の差がないタイプである。底部は回転ヘラ切り未調整。	細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/6
30	須恵器 坏A	口径(10.7) 底径（7.0） 器高 3.0	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/4
31	須恵器 広口甕	口径(32.2) 底径 器高	口縁部は外反し端部は面をなす。胴部は貼りを有するが口径より小さい。内外ロクロ回転ナデ。	白色細砂粒	還元	灰色	遺存：胴部片
42土32	須恵器 高盤	口径 底径 器高	実際には器種は明確でなく高盤か皿のいずれかと思われる。脚（高台）と坏（皿）部の接点には方形の透かしが見られる。底部は回転ヘラ削り。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：底部1/2
48土33	須恵器 坏A	口径(12.9) 底径 7.0 器高 3.6	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	細砂・黒色粒・小礫	還元	灰色	遺存：1/4
49土34	須恵器 蓋	口径 13.0 底径 器高 3.7	口縁端部は折れ曲がり摘みは擬宝珠である。外天井部は回転ヘラ削り。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/2
35	須恵器 蓋	口径(12.5) 底径 器高 2.9	口縁端部は折れ曲がり摘みはレング状となり径3.0㎝である。外天井部は回転ヘラ削り。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：破片
36	須恵器 坏A	口径 12.0 底径 7.9 器高 2.9	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	白色細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：口縁部3/4
37	須恵器 坏A	口径 12.1 底径 7.4 器高 3.1	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	白色細砂粒	還元	灰色	遺存：口縁部1/2
38	須恵器 坏A	口径 13.2 底径 8.0 器高 3.3	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	白色細・粗砂・黒色・褐色粒	還元	灰色	遺存：口縁部1/3
50土39	土師器 非ロクロ坏	口径（13.5） 底径（8.4） 器高（3.3）	口縁～体部は内湾気味に開き底部は平たく納める。内：口縁～底部ヘラナデ後ヘラ研磨、外：体部横位ヘラ削り。	細砂粒・角閃石・褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/5
40	須恵器 蓋	口径 底径 器高	口縁端部は欠損、摘みはリング状となり径3.9㎝である。外天井部は回転ヘラ削り。	白色・粗砂粒	還元	灰白色	遺存：口縁部欠損
41	須恵器 坏A	口径(12.0) 底径（7.5） 器高（3.0）	口縁～体部は内湾気味に開き底部切り離し後回転ナデ。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/3
42	須恵器 坏A	口径(11.4) 底径 6.6 器高（3.5）	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/5
43	用途不明鉄製品	長さ：5.5幅：0.9重さ：11.2ｇ棒状の製品で断面丸みを帯びた方形を呈する。					遺存：
54土44	土師器 非ロクロ坏	口径(13.2) 底径（9.6） 器高（4.0）	口縁～体部は内湾気味に開き底部は平たく納める。内：口縁～底部ナデ、外：ナデ。	細砂・褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/5
63土45	須恵器 坏A	口径(13.6) 底径（8.0） 器高（3.8）	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/3
72土46	須恵器 椀B	口径 底径（9.4） 器高	口縁～体部は内湾気味に開き底部に高台を貼り付ける。底部は切り離し後回転ヘラ削り。	細砂粒	還元	灰白色	遺存：1/2
75土47	須恵器 坏A	口径 底径 7.6 器高	口縁～体部は内湾気味に開き底部は回転糸切り未調整。	細砂・黒色粒・白色小礫	還元	灰白色	遺存：口縁部欠損
76土48	須恵器 広口壷	口径(14.8) 底径 器高	口縁部は内反気味に開き端部は面をなす。胴部は肩部を最大径とする。	細砂粒・黒色粒	還元	灰～灰白色	遺存：1/5
77土49	須恵器 高盤	口径 底径(12.3) 器高	脚部は筒形で裾は「ラッパ」状に開き端部は摘み出され断面「三角形」を呈す。	細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：脚部のみ
84土50	須恵器 椀B	口径 底径（6.3） 器高	口縁～体部は内湾気味に開き底部には断面「三角形」の高台を貼り付ける。	細砂粒・黒色粒	還元	灰白色	遺存：体～底部1/2
51	土師器 甕	口径(20.0) 底径 器高	口縁部は短く立ち上がり肩の張る胴部となる。口縁部内外ヘラナデ、外胴部斜位ヘラ削り。	細砂粒・角閃石・雲母・石英・片岩	酸化堅緻	橙色	遺存：口縁部1/4
1溝1	土師器 非ロクロ坏	口径(11.8) 底径（8.6） 器高（3.3）	口縁～体部は内湾気味に開き底部は丸く納める。内：口縁～底部ヘラナデ後放射状ヘラ磨き、外：体部横位ヘラ削りと思われるが剥離激しく明確でない。	細砂粒・白色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/5

別表　遺物観察表（８）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
2	須恵器 坏　A	口径(12.8) 底径 (7.6) 器高 (3.6)	口縁～体部は内湾気味に開き底部の調整は回転ヘラ切り後ヘラナデ。	細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：2/5
3	須恵器 坏　A	口径(14.1) 底径 (7.5) 器高 (4.1)	口縁～体部は開き端部でやや外反する。底部の調整は回転糸切り未調整。内外面火襷痕顕著。	細砂粒・褐色粒・小礫	還元	灰色	遺存：2/5
4	須恵器 椀　B	口径　10.7 底径　7.0 器高　5.9	口縁～体部は高台部より直接内湾気味に立ち上がる。底部の調整は切り離し後回転ヘラ削り。	細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：ほぼ完形
5	須恵器 盤　B	口径 底径 器高	三足盤の破片であろう。盤はロクロ整形脚は獣足と思われるが全貌は不明である。断面は丸くなるが盤との貼り付け部にはヘラでナデ付け多面体になる様相が窺われる。	白色細砂粒・小礫	還元	灰色	遺存：破片
2溝6	土師器 非ロクロ坏	口径　11.7 底径 器高　3.8	口縁～体部は内湾気味に開き底部は丸く納める。調整は器面が溶解し不明。	細砂・褐色粒	酸化軟質	橙色	遺存：ほぼ完形
7	土師器 非ロクロ坏	口径　13.8 底径 器高	口縁～体部は内湾気味に開き底部は丸く納める。内：口縁～底部ヘラナデ、外：口縁部ヘラナデ、体～底部ヘラ削り。	細砂・褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/3
8	土師器 非ロクロ坏	口径(15.6) 底径(10.0) 器高	口縁～体部は外反し底部は稜を付け丸く納める。調整は器面が溶解し不明。	細砂・褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：1/8
9	須恵器 蓋	口径(15.8) 底径 器高 (2.7)	口縁部は内端部に退化した反りを有し摘みは環状となる。環状摘みは径5.2cmを計る。外天井部は回転ヘラ削りである。	細砂・白色・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/3
10	須恵器 蓋	口径(16.6) 底径 器高 (2.9)	口縁部は内端部に退化した反りを有し摘みは環状となる。環状摘みは径5.2cmを計る。外天井部は回転ヘラ削りである。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/5
11	須恵器 蓋	口径(19.6) 底径 器高　3.1	口縁部は内端部に退化した反りを有し摘みは環状となる。環状摘みは径4.0cmを計る。外天井部は回転ヘラ削りである。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/2
12	須恵器 坏　A	口径 (12.6) 底径　9.0 器高 (3.5)	口縁～体部は内湾気味に開き底部の調整は底部切り離し後下端～底部回転ヘラ削り。	細砂・黒色粒	還元	灰黄～浅黄色	遺存：1/3
13	須恵器 坏　A	口径(12.2) 底径 器高 (3.0)	口縁～体部は内湾気味に開き底部の調整は底部切り離し後回転ヘラ削り。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/3
14	須恵器 坏　A	口径(11.3) 底径 (6.6) 器高 (4.0)	口縁～体部は内湾気味に開き底部の調整は底部回転ヘラ切り後回転ナデ。	細砂・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/4
15	須恵器 坏　B	口径(13.4) 底径 (7.4) 器高 (4.0)	口縁～体部は内湾気味に開き底部に小さな角高台を貼り付ける。底部の調整は自然釉により不明。	細砂・黒色粒	還元	灰オリーブ～白色	遺存：1/3
16	須恵器 坏　B	口径 底径(10.2) 器高	口縁～体部は内湾気味に開き底部に長目の角高台を貼り付ける。底部の調整は回転糸切り未調整。	白色細砂粒	還元	灰オリーブ～白色	遺存：底部1/2
17	須恵器 坏　B	口径(14.2) 底径(10.1) 器高 (3.7)	口縁～体部は内湾気味に開き底部に小さな角高台を貼り付ける。底部の調整は切り離し後回転ヘラ削り。	細砂・白・黒色粒	還元	白灰色	遺存：1/3
18	須恵器 坏　B	口径 底径(12.2) 器高	体部は内湾気味に開き底部に小さな角高台を貼り付ける。また底部と高台の差がないタイプである。底部の調整は切り離し後回転ヘラ削り。	細砂・黒色粒	還元	白灰色	遺存：1/2
19	須恵器 椀　B	口径 底径　7.3 器高	口縁～体部は内湾気味に立ち上がり底部に長めの断面三角形の高台を貼り付ける。底部の調整は回転ヘラ切り後ナデ。	細砂・黒色粒	還元	白灰色	遺存：底部
20	須恵器 盤　B	口径 底径　12.7 器高	体部は内湾気味に立ち上がり底部に長めの角高台を貼り付ける。また底部と高台の差がないタイプである。底部の調整は回転ヘラ削り後回転ナデ。	細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：底部
21	須恵器 高盤	口径(24.6) 底径 器高	口縁～体部は丸みを帯びて開き端部は面をなす。体部下端～底部回転ヘラ削り。	白色細砂・黒色粒・小礫	還元	灰色	遺存：1/3
22	土師器 鉢	口径(25.6) 底径 器高(13.0)	口縁～体部は内湾気味に立ち上がり端部は摘み上げられる。底部は丸く納める。内：口縁部横位ナデ、体～底部横位ヘラナデ。外：口縁部横位ナデ、体～底部横位ヘラ削り	細砂粒・雲母	酸化堅緻	橙色	遺存：1/4
23	土師器 甕	口径(18.2) 底径 器高	口縁部は「くの字」状に外反する。内：口縁部横位ナデ、胴部ナデ。外：口縁部横位ナデ、胴部斜・縦位ヘラ削り	細・粗砂・白色粒・小礫・角閃石	酸化堅緻	橙色	遺存：口縁～胴部
24	土師器 甕	口径(20.8) 底径 器高	口縁部は立ち上がり端部を断面三角形とする。内：口縁部横位ナデ、胴部ナデ。外：口縁部横位ナデ、胴部斜・縦位ヘラ削り	細砂・白色粒・石英・褐色粒	酸化堅緻	橙色	遺存：口縁部1/3
25	須恵器 短頸壺蓋	口径(14.0) 底径 器高　4.2	口縁部は折れ曲がり肩部に断面三角形の突帯を巡らせ、摘みは擬宝珠を呈す上野型有蓋短頸壺の蓋である。ロクロ整形。	細砂・黒色粒	還元	灰色	遺存：1/4

別表　遺物観察表（９）

番号	器種	法量	器形・成整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
26	須恵器 短頸壺	口径（7.0） 底径 器高	口縁部は短く立ち上がり胴部は肩が張り偏球形を呈す。ロクロ整形。	細砂粒・白色粒	還元	灰色	遺存：1/4
27	須恵器 短頸壺	口径(10.7) 底径 器高	口縁部は短く立ち上がり胴部は肩が張り偏球形を呈す。ロクロ整形。	白色細砂粒・褐色粒	還元	灰色	遺存：1/4
28	須恵器 短頸壺	口径(11.0) 底径 器高	口縁部は短く立ち上がり胴部は肩が張り偏球形を呈す。ロクロ整形。	白色細砂粒	還元	黒褐色	遺存：口縁～体部
29	須恵器 長頸壺	口径（6.0） 底径 器高	胴部は肩が張り稜を有して沈線を巡らす。底部は丸く納め調整は回転ヘラ削り。ロクロ整形。肩部に自然釉付着。	白色細砂粒・黒色粒	還元	灰白～黒色	遺存：1/4
30	須恵器 長頸壺	口径 底径 器高	胴部は肩が張り稜を有してカキ目・連続刻み目文を施す。下位は逆台形を呈す。ロクロ整形。	白色細砂粒・黒色粒・褐色粒	還元	黒褐色	遺存：1/5
31	須恵器 甕	口径(15.0) 底径 器高	口縁部は外反し端部は断面三角形を呈す。胴部は肩が張るが丸く仕上げる。頚部に焼台？が付着する。ロクロ整形。	白色細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：口縁～胴部
32	須恵器 広口壷	口径(16.9) 底径 器高	口縁部は外反し端部は折り曲げ断面三角形を呈す。胴部は肩が張るタイプである。ロクロ整形。	白色細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：口縁部1/4
33	須恵器 甕	口径(21.5) 底径 器高	口縁部は外反し端部は折り曲げ突帯状となる。ロクロ整形。内：同心円当て具、外：平行叩き。	粗砂粒・黒色粒・小礫	還元	灰色	遺存：口縁部片
34	須恵器 甕	口径(19.0) 底径 器高	口縁部は外反し端部は折り曲げ突帯状となる。ロクロ整形。内：無文当て具、外：平行叩き。ロクロ整形。	白色細砂粒・黒色粒	還元	灰白色	遺存：口縁～頚部1/4
35	須恵器 甕	口径 底径 器高	口縁部は端部で面をなし外側に小突帯と下に櫛描き波状文を巡らせる。	細砂粒・黒色粒	還元	灰黄色	遺存：口縁部片
36	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部は卵倒形を呈するもので内：同心円当て具、外：平行叩きを格子目状に施す。ロクロ整形。	細砂粒・黒色粒	還元	にぶい黄橙色	遺存：胴部片
37	須恵器 円面硯	口径 底径 器高	周囲に突帯を巡らせ海部との境には小さな突帯を巡らせる。ロクロ整形。	細砂粒・黒色粒	還元	灰白色	遺存：1/3
38	須恵器 円面硯	口径 底径 器高	陸部は扁平で海部は周囲に突帯を貼り付けて作られる。ロクロ整形。	細砂粒・黒色粒	還元	灰色	遺存：破片
4溝 39	鉄製品 刀子	長さ：11.5幅：1.4重さ：21.9ｇ刃部と柄部との境には関はなく刃部側の傾斜が異なる。					遺存：ほぼ完形
40	用途不明 鉄製品	長さ：5.2幅：0.8重さ：6.9ｇ断面は方形を呈する棒状の製品である。工具の類か。					遺存：部分
41	用途不明 鉄製品	長さ：4.0幅：0.8重さ：4.5ｇ断面は方形を呈する棒状の製品である。					遺存：部分
42	鉄滓	長さ：3.9幅：3.0重さ：18.3ｇ精練滓である。					遺存：ほぼ完形

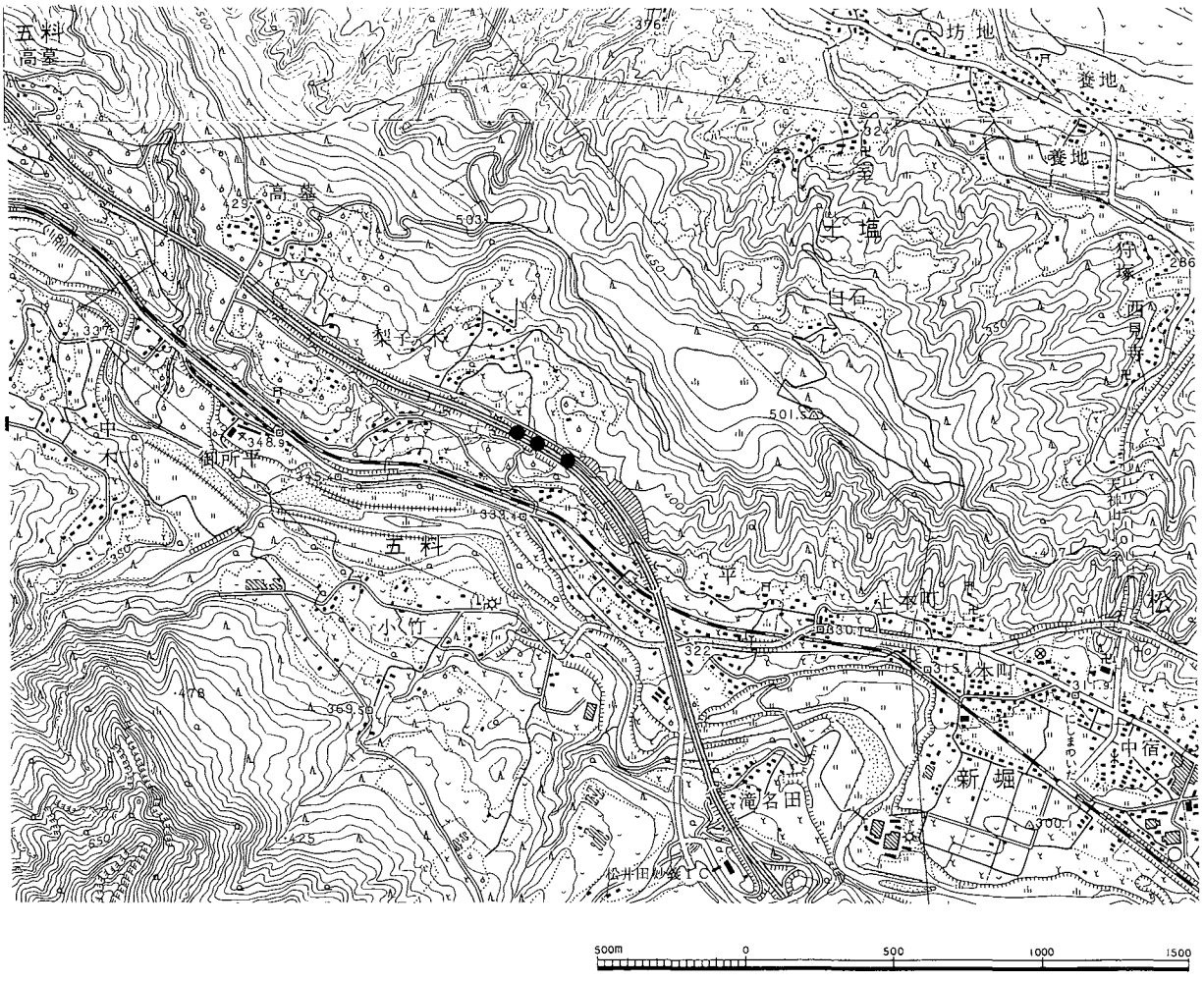
五料野ヶ久保遺跡

（五料Ⅱ遺跡）

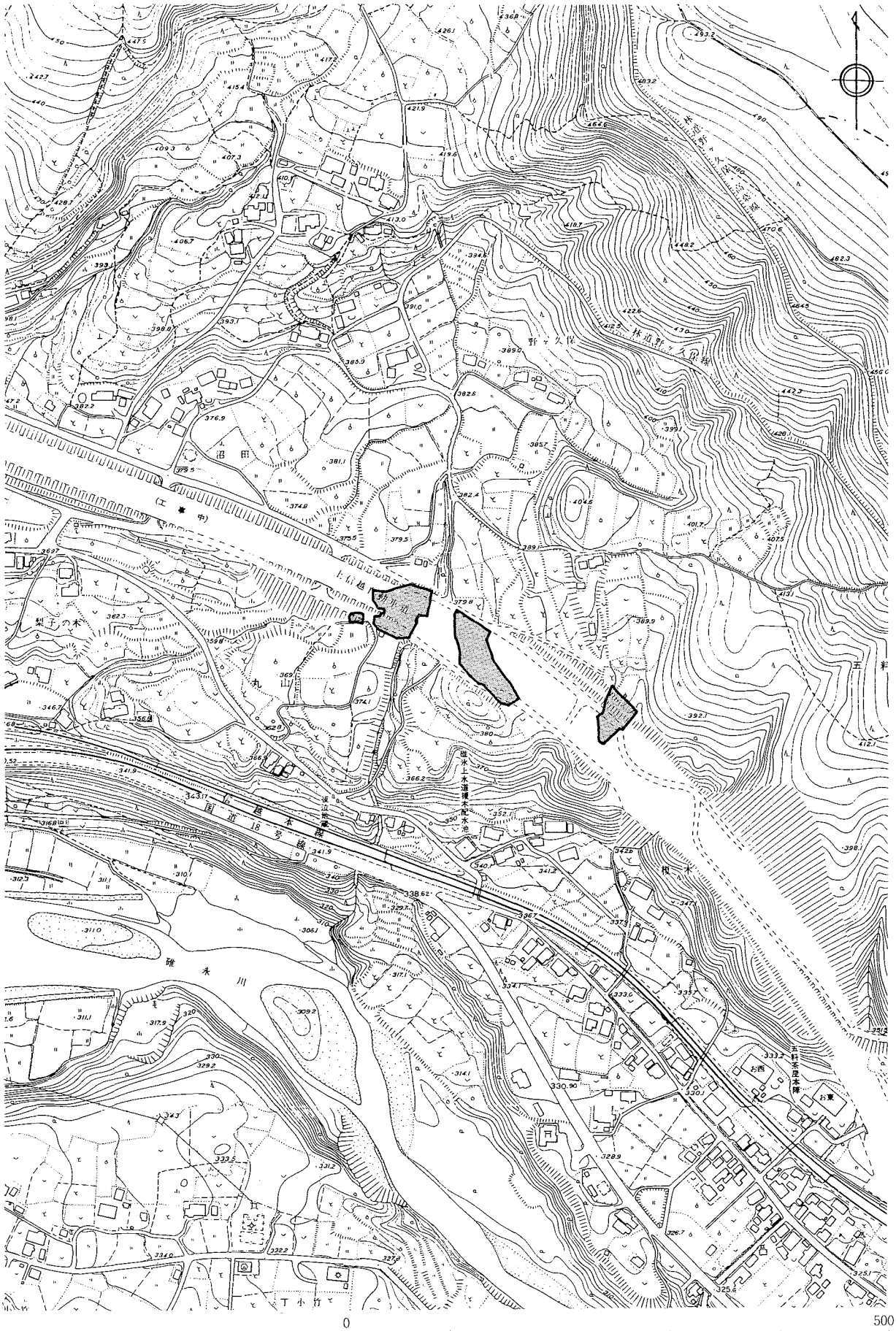
第１章　遺跡の立地

五料野ヶ久保遺跡は松井田町大字五料字野ヶ久保他に所在し、碓氷川左岸中位段丘と松井田丘陵裾部の境界付近に立地する。遺跡の南方を流れる碓氷川からは約500ｍを測り、中位段丘面であるその中間には国道18号線と信越本線が並走し、町民の居住・生産地域であると共に交通の要衝となっている。碓氷川は長野県境界付近の松井田町大字峠に源を発し、山麓の南より中尾川・入山川・中木川、北より水谷川・矢の沢・小山沢などの小河川と合流し、町内のほぼ中央を東流して安中市方向へと流下している。碓氷川の左岸には、御所平の町立臼井小学校付近から五料・新掘・松井田を経て安中市郷原・築瀬・悪途に至る中位段丘があり、河床からの比高は上流では20ｍ前後、下流では40ｍ前後を測る。

本遺跡はそれぞれに立地条件の異なる東・中央・西の３地区で調査を実施している。縄文時代前期の集落が検出された東調査区は、標高384ｍ～390ｍを測る東向きの急斜面に位置し、縄文時代中期～後期の遺構・遺物を主体とする中央調査区は、標高380ｍ前後の視覚的に平坦な地形を有している。本遺跡を特徴付ける縄文時代後期の配石遺構が検出された西調査区は、中央調査区の西側、窪地状を呈する部分に位置し、標高371ｍ～373ｍ、中央調査区との比高は８ｍ前後を測り、急崖と碓氷川に流入する小沢で画されている。西調査区は調査時に常に水が湧き出る状態で、野ヶ久保という地名も湧水により地面が窪んでいくことから命名されたものと考えられる。調査前の現況は山林・田畑及び宅地であった。尚、中央調査区の南側に一部が含まれていた雷電山（古墳）は自然地形であることが判明している。



第１図　遺跡位置図



第２図　周辺地形図

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

本遺跡は県教育委員会が昭和59年に実施した現地踏査によって、遺跡の所在が確認されたものである。したがって、発掘調査は遺構の分布状況・時期・性格を把握することより開始した。トレンチは調査区域に沿って概ね南北方向に設定し、調査対象面積に対して約20%の試掘を行った。

本調査は確認調査によって得られた成果に基づき、３地区の本調査範囲を決定した。各調査区には公共座標を基準とする10ｍ四方のグリッドを覆せて調査の基準とした。グリッドの名称は東西ラインを算用数字で西から１・２・３～、南北ラインを北からアルファベットでＡ・Ｂ・Ｃ～とし、各北西隅をグリッド呼称として使用した。

土層観察用ベルトを設定し、慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物は原則として出土地点・高さを記入して個別に取り上げた。遺構外出土遺物については各グリッド毎に一括して取り上げたが、配石遺構の検出された西側調査区では、出土地点・高さを記入して個別に取り上げを行った。実測図の縮尺は以下の通りである。

トレンチ設定図・地形図……1/500　遺構配置図……1/200・1/100　住居跡・土坑・配石遺構……1/20

溝跡……1/40　配石墓…1/10　配石遺構配置図……1/50　炉・カマド・集石……1/10

写真の撮影は３台のカメラ（白黒ブローニー６×７判、白黒35㎜、カラースライド35㎜）を使用し、各調査段階において随時実施した。更に、遺跡の全体写真はバルーンを使用して行った。

第２節　調査の経過

本遺跡の調査は、西調査区北側に住宅地が残されていた為、平成元年３月10日～９月７日までと平成３年５月８日～平成４年３月30日までの２回に分けて実施した。

平成元年度発掘調査の経過

平成元年

３月期　10日、重機によるトレンチ掘り下げを開始する。24日、トレンチ調査を終了し、本調査範囲を決定する。25日、東調査区の表土除去作業を開始する。

４月期　表土除去作業を継続し、４日より遺構確認作業・遺物包含層掘り下げを開始する。15日、水準測量・方眼測量を実施する。17日、表土除去作業を終了する。

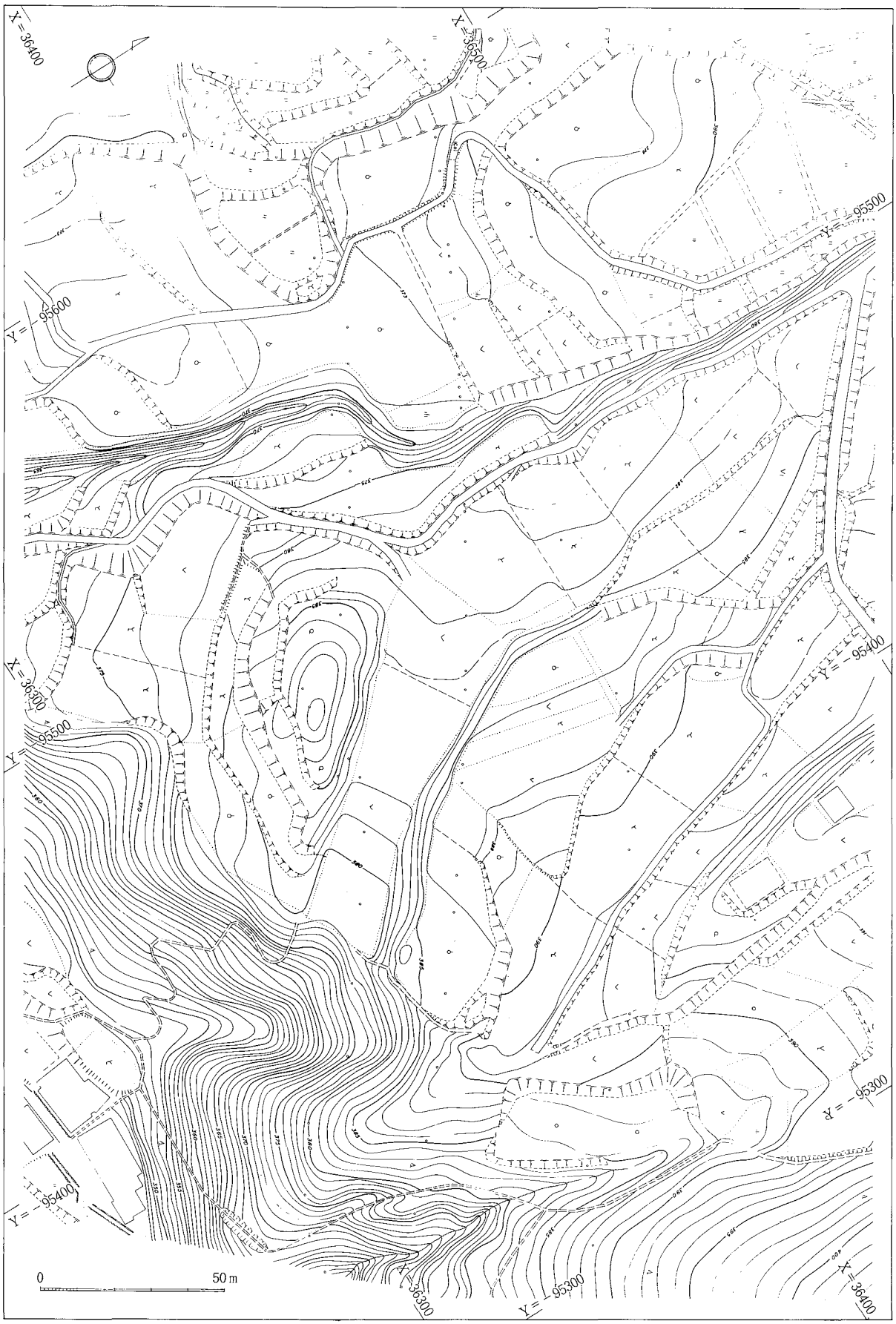
５月期　遺物包含層掘り下げを継続し、東調査区、中央調査区の遺構調査を開始する。16日、東調査区の遺構調査を終了し、遺構配置図を作成する。

６月期　中央調査区の遺物包含層掘り下げ・遺構調査を継続し、30日に終了する。

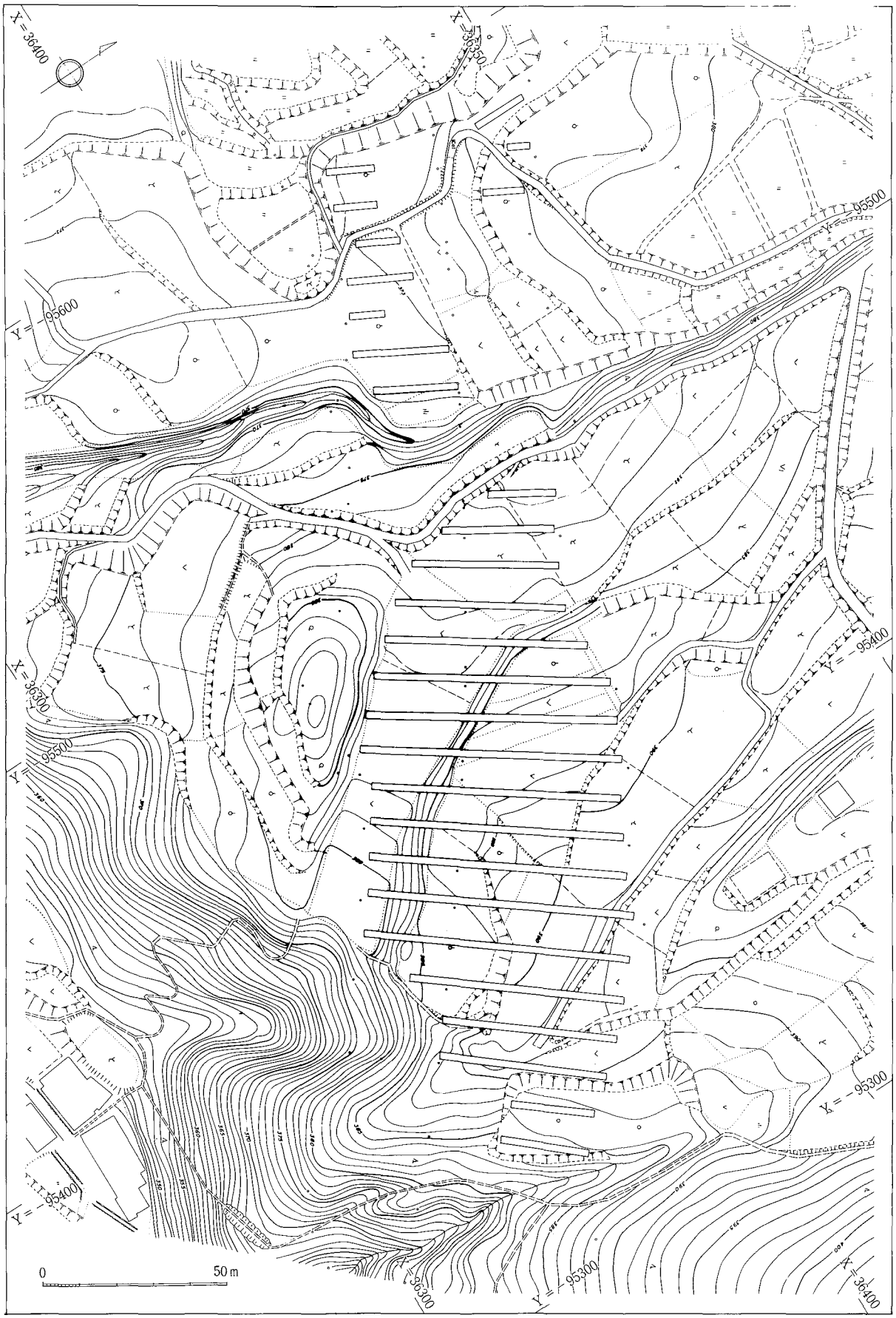
７月期　西調査区の遺物包含層掘り下げを開始する。西調査区からは縄文後期の遺物が大量に出土し、更に湧水の為、調査は遅れがちであった。17日、工事用道路部分の調査を開始する。

８月期　西調査区遺物包含層掘り下げ・遺構調査を継続する。６日、西調査区の住居跡掘り下げを開始する。31日、西調査区の調査を終了する。

９月期　１日より残務整理作業を開始する。４日、工事用道路部分の調査を終了する。７日、県教育委員会の承認を得て、元年度分の調査を終了する。



第３図　調査区地形図


X=36400
X=36350
Y=-95500
Y=-95600
X=36300
Y=-95400
Y=-95500
X=36300
Y=-95400
X=36300
Y=-95300
X=36400
0
50m

第4図　トレンチ設定図

平成２年度発掘調査の経過（西調査区北側）

平成２年

５月期　８日、調査開始、残土処理等の打ち合わせを行う。９日、重機による表土掘削作業を開始する。10日、配石遺構と考えられる石が出土し、慎重に表土除去を進める。11日、石の中に組まれた状態のものが検出され、配石遺構が展開することが確認される。22日、表土除去作業を終了し、人力による遺構調査を開始する。23日、水準測量、方眼測量を実施する。

６月期　６日、サブトレンチによる遺構範囲の確認作業を開始する。８日、調査区北側より遺物包含層の掘り下げを開始する。９日、調査区北側からの湧水量が増し、南側の窪地部分を掘り下げて、水中ポンプを使用することを決定する。13日、県教育委員会との打ち合わせを行い。前年度調査部分と本年度調査部分の中間部にも遺構が続く可能性がある為、調査を実施することに決定した。18日、残土処理にベルトコンベアを導入。26日、基本堆積土層のサンプリング作業を実施する。

７月期　遺物包含層の掘り下げを継続し、遺物取り上げも順次実施する。２日、平安時代の遺構調査を開始する。16日、配石遺構の実測を開始する。31日、平安時代の遺構調査を終了する。大雨による湧水の為、調査区内が水没状態になり、調査は遅れがちであった。

８月期　遺物包含層掘り下げ、遺物取り上げを継続する。３日、配石墓調査を調査区西側より開始する。17日、配石墓の実測を開始する。配石東側に位置する敷石遺構の遺物取り上げを行う。27日、配石配置図の作成を行う。先月に引き続いて雨天が多く、調査は遅れがちであった。

９月期　遺物包含層の掘り下げ、遺物取り上げを継続する。５日、町文化財審議委員の視察を受ける。11日、バルーンによる空撮を実施する。17日、敷石遺構の敷石取り上げ作業を開始する。21日、配石遺構の断面図作成を開始する。

10月期　10日、敷石遺構調査、遺物包含層掘り下げを終了する。15日、配石遺構下の遺構確認作業を開始する。24日、調査区中央部の配石取り上げを終了する。30日、立石、組石の調査を終了する。

11月期　５日、調査区中央部の配石墓調査を開始する。19日、配石遺構上部の調査を終了し、下部の配石墓を中心に調査を進める。21日、配石墓配置図を作成する。27日、バルーンによる空撮を実施する。

12月期　配石墓調査を継続する。11日・17日、県教育委員会との打ち合わせを行う。13日、配石墓展開図作成を開始する。14日、配石墓完掘作業を開始する。19日、蓋石取り上げを終了する。26日、配石墓内土層観察・サンプリングを終了する。

平成３年

１月期　５日、調査区内全体清掃を実施する。17～21日、事務所移転を行う。23日、最終全測図を作成する。24日、配石墓の調査を終了する。25日、県教育委員会の承認を得て、調査を終了し、ＪＶによる作業道路切り替え作業が開始される。

２月期　18日、作業道路切り替え作業が終了し、未調査区域の表土除去作業を開始する。21日、調査区域確認作業を行う。21日、遺物包含層の掘り下げを開始する。

３月期　６日、表土除去作業を終了する。12日、配石・土坑の調査を開始する。24日、遺物包含層の掘り下げを終了する。26日、配石調査を終了し、全測図を作成する。29日、遺構調査を終了し、調査終了写真を撮影する。30日、県教育委員会の承認を得て、調査を終了する。

第３章　遺跡の土層

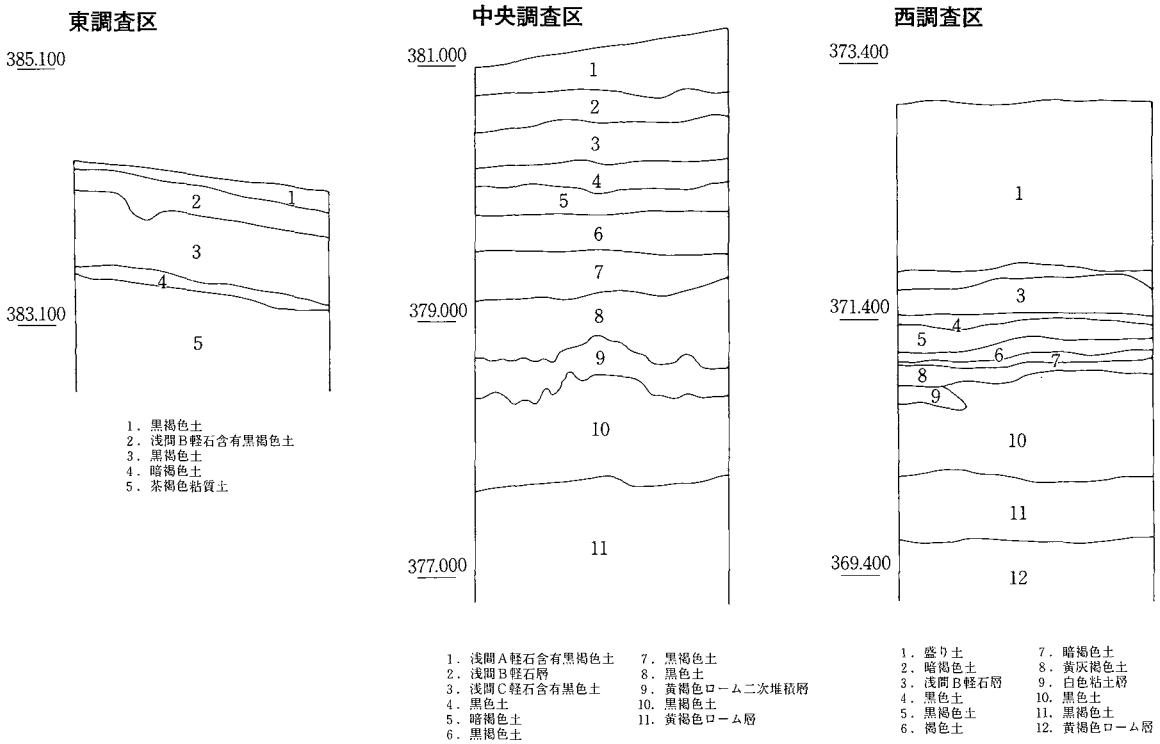
本遺跡の土層については各調査区においてそれぞれ調査・観察を実施している。基本的にはいずれもほぼ同様の堆積を示し、表土及び表土下層に浅間Ａ軽石層、黒色土を挟んで浅間Ｂ軽石層が確認され、黒色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色のローム漸移層、ローム層の順で堆積している。

南調査区では縄文時代前期の住居跡覆土中に黄色軽石層が堆積し、浅間山を供給源とする軽石層であることが確認されている。

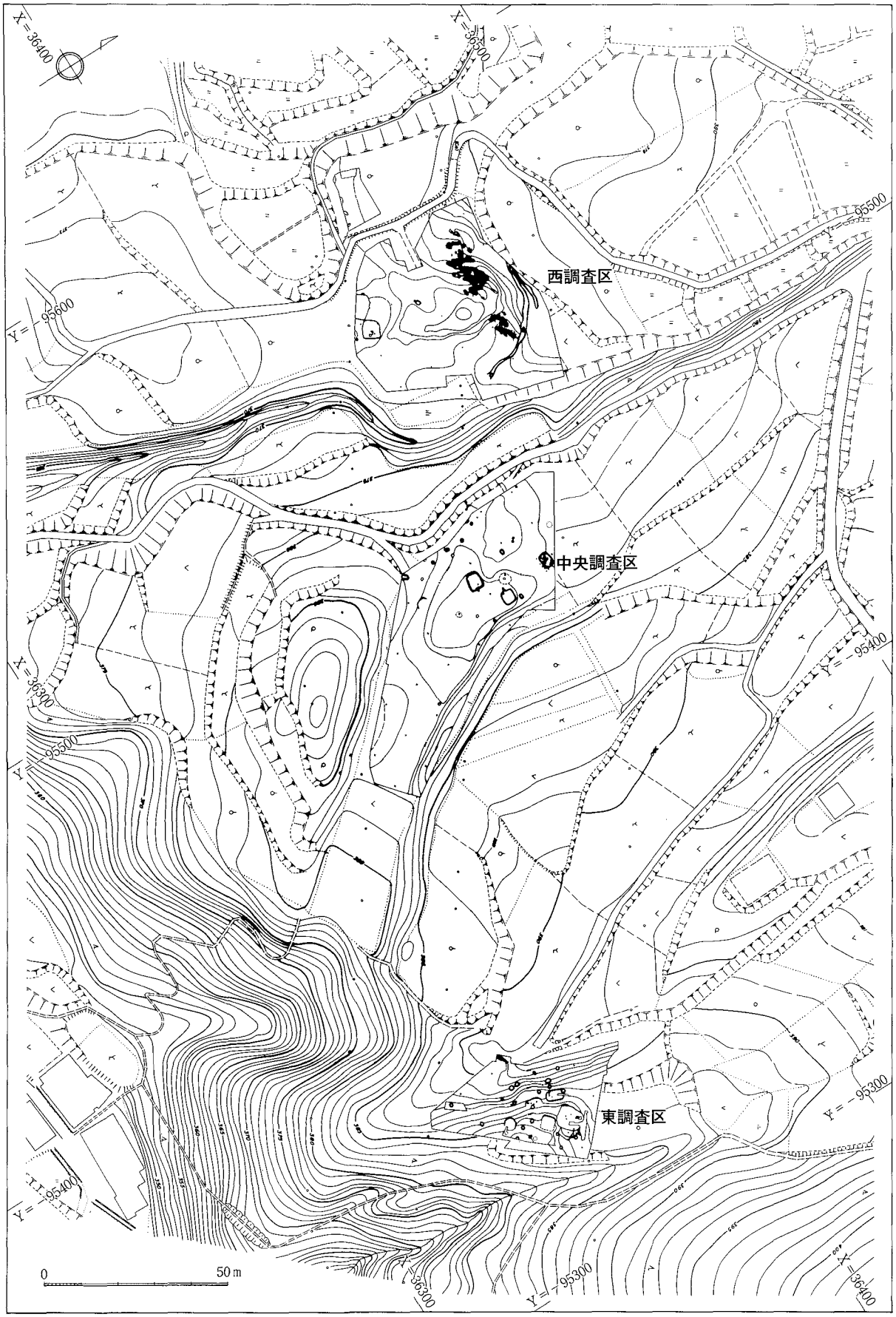
中央調査区では黒色土・黒褐色土間にロームを主体とする二次堆積層が観察される。この二次堆積層は横川大林遺跡、五料稲荷谷戸遺跡でも確認されているが、遺跡北側に位置する松井田丘陵からの大規模崩落によるものと推測され、時期的には縄文時代早期末の可能性が高い。

西調査区では縄文時代後期の遺物を大量に包含する褐色～黒色土が、湧水によって粘土質・シルト質になり、ローム層上面まで粘質土に変化している。又、包含層中に白色を呈する粘質土層も観察されている。

西調査区の基本堆積土層、東調査区の黄色軽石層については自然科学分析を実施している。又、中央地区のローム二次堆積層については横川大林遺跡で自然科学分析を実施している。詳細については自然科学分析編を参照されたい。



第５図　基本堆積土層図


X=36400
X=36300
Y=-95600
Y=-95500
Y=-95400
Y=-95300
西調査区
中央調査区
東調査区
0
50m

第6図　調査区配置図

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概観

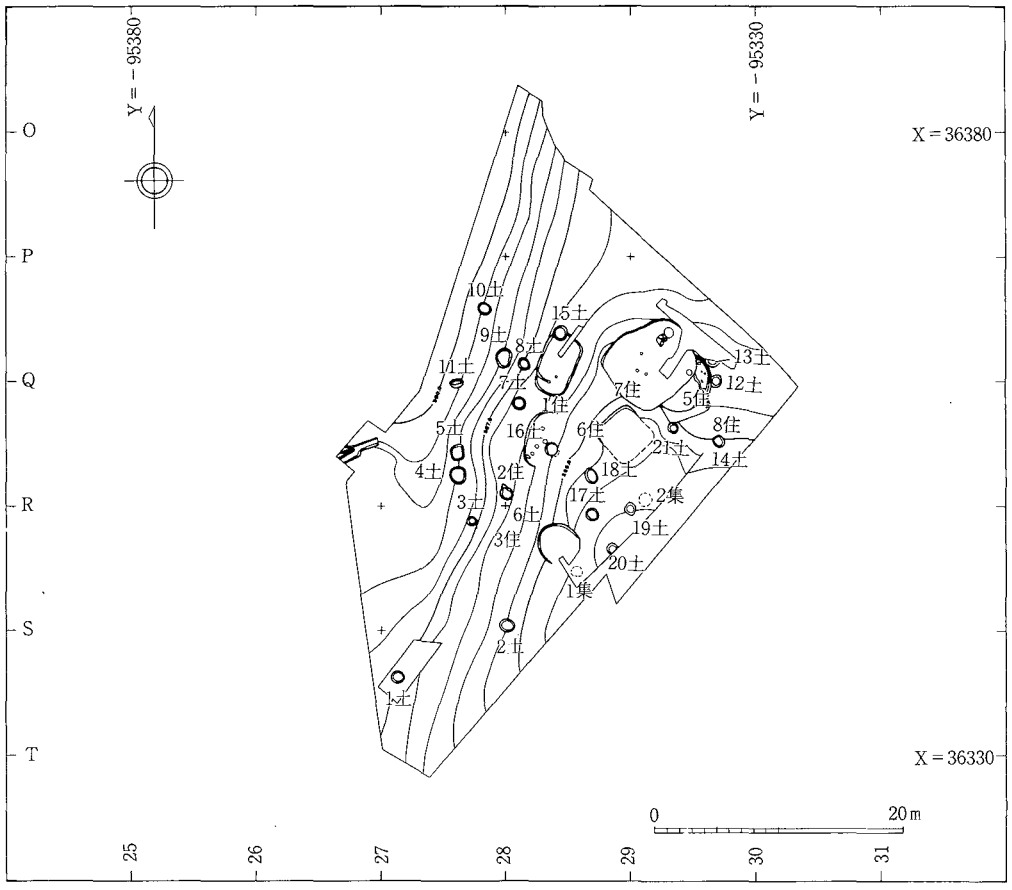
五料野ヶ久保遺跡は東・中央・西の３調査区で本調査を実施し、調査の結果、各調査区から時期・性格の異なる遺構と遺物が検出されている。東向きの急斜面に位置する東調査区からは、縄文時代前期中葉～後半の集落が検出され、視覚的に平坦な中央調査区からは、縄文時代中期後半の住居跡・土坑・埋設土器と後期前半の集石・配石等が検出されている。用地の都合により南側と北側の分割調査を実施した西調査区からは、本遺跡を特徴付ける縄文時代後期中葉を主体として形成された配石遺構・配石墓群が検出され、同時期の住居跡・土坑と中期末～後期後半に至る大量の遺物が出土している。他に、奈良・平安時代の遺構として中央調査区から住居跡２軒、西調査区から溝跡３条が検出されている。

第２節　縄文時代

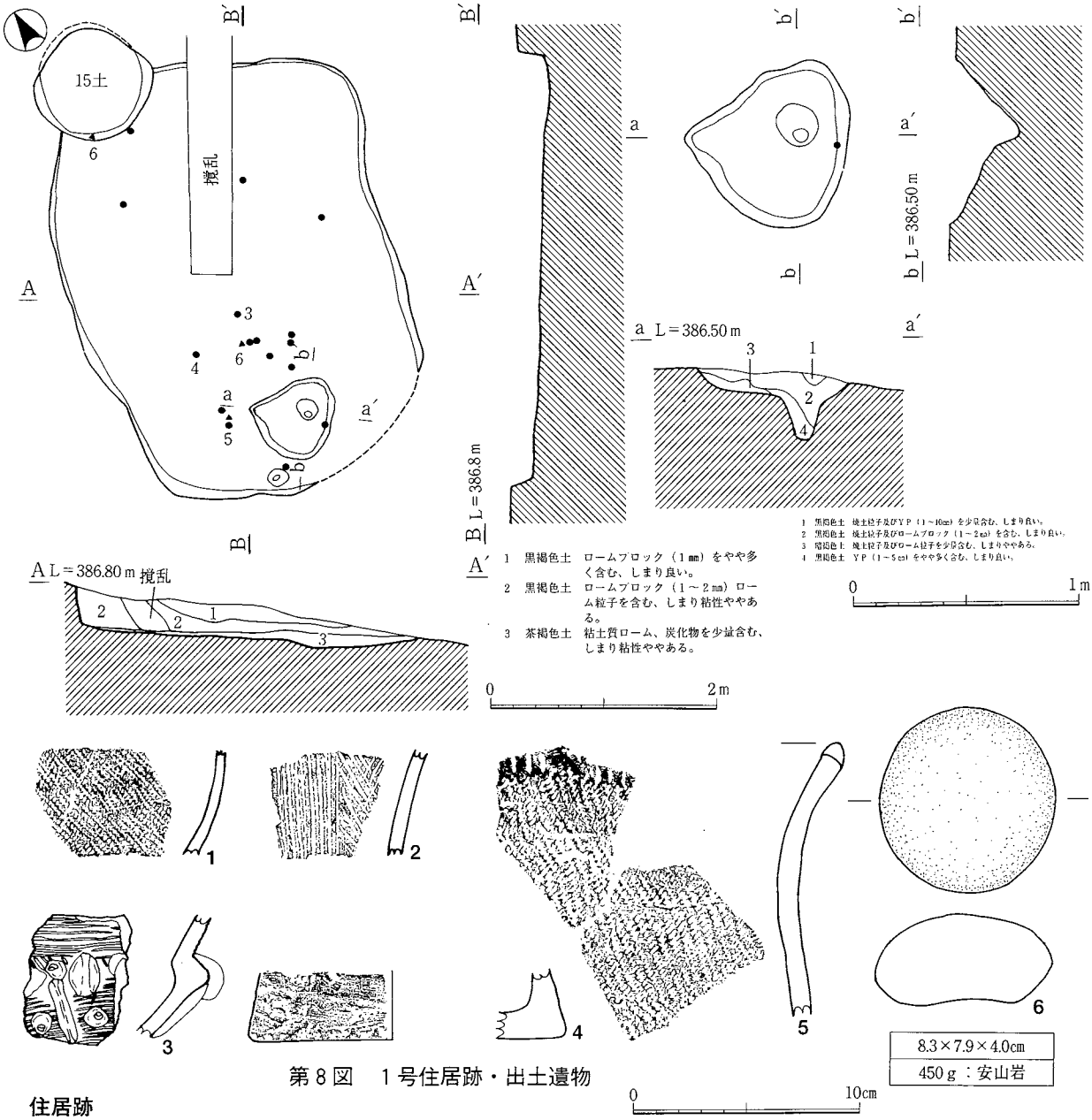
縄文時代の遺構・遺物は、各地区ごとに時期・性格の異なるものが検出されている為、地区別で説明を加えていく。グリッド・遺構外出土遺物については、前期初頭～中期初頭の遺物が出土している東調査区を遺構外出土遺物として単独で掲載し、中期末～後期前半の遺物が出土した中央調査区と、中期末～後期後半の遺物が出土した西調査区についてはグリッド出土遺物として一括掲載した。

東調査区

東向き急斜面に位置する東調査区からは、前期中葉～後半の住居跡７軒、土坑21基、集石２基が検出されている。遺物は早期末・前期初頭～中期初頭の土器片（塚田式・花積下層式・黒浜式・諸磯ａ～ｃ式・五領ヶ台式）と石器類（磨石・凹石・石鏃・石匙・石錐・石斧・石皿・軽石製品等）が出土している。



第７図　東調査区全測図



第8図　1号住居跡・出土遺物

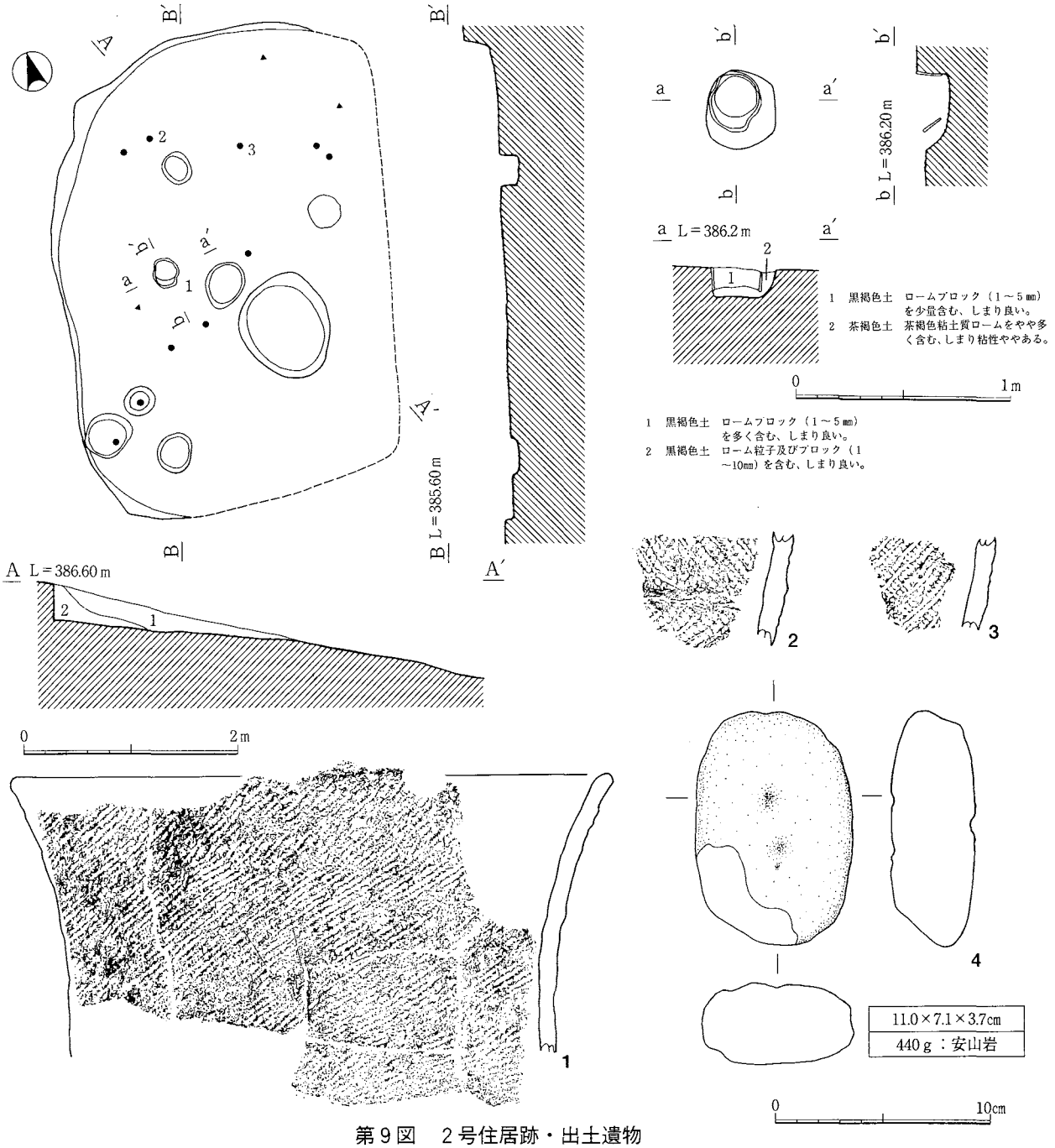
住居跡

東調査区から検出された前期中葉～後半と推測される住居跡7軒は、調査区東側の傾斜が緩む斜面部に集中して構築されている。斜面部の為、掘り込みが不明瞭なものが多く、遺構と認定されなかった4号・9号住居跡については欠番とした。

1号住居跡　（第8図、図版3・29）

位　置／P－28、Q－28グリッドに位置する。　形　態／隅丸長方形を呈する。　規　模／長軸3.90m、短軸2.90m、深さ36cmを測る。　炉／南側中央壁部分に近接して焼土が検出されている。　床　面／凹凸があり、特に硬質化した部分は検出されていない。　柱穴・壁溝・埋設土器／なし。　重　複／北コーナー部分で15号土坑と重複するが、新旧は不明瞭である。　遺物出土状況／少量の前期後半土器細片と石器、自然石が出土し、炉跡付近にやや集中している。　時　期／出土遺物から諸磯c式期の可能性が高い。

出土遺物／1は附加条第1種縄文が施文される諸磯a式の胴部破片、2～4は諸磯c式の破片である。2は集合沈線が施文される胴部破片、3は集合沈線に棒状・ボタン状の貼り付けが施される。4は外側に張り出す底部の破片である。5は単節縄文が施文され、小波状を呈する口縁の口唇部に刻みが加えられる。時期的には諸磯b～c式と推測される。6は安山岩の磨石。

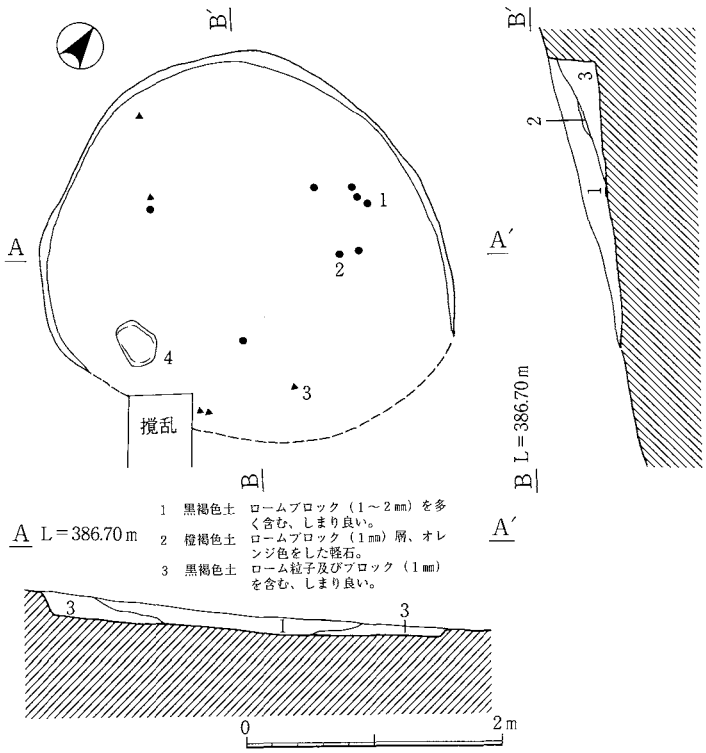


第9図　2号住居跡・出土遺物

2号住居跡　（第9図、図版3・29）

位　置／Q－28グリッドに位置する。　形　態／東及び南壁が消失しているが、隅丸長方形基調と考えられる。　規　模／長軸4.40m＋α、短軸3.10m＋α、深さ32cmを測る。　炉／不明。　床　面／遺存部分は面をなしている。　柱　穴／不規則な小ピットが5基検出されたが、柱穴と断定できるものはない。　壁　溝／なし。　埋設土器／中央西側から1基検出されている。　重　複／住居範囲内から時期的に古い16号土坑が検出されている。　遺物出土状況／少量の縄文前期土器片と石器、自然石が全体に散在して出土している。　時　期／諸磯a式期。

出土遺物／1は諸磯a式の埋設土器で下半部を欠損している。2・3は胎土に繊維を含む黒浜式の土器片である。4は安山岩の磨石である。

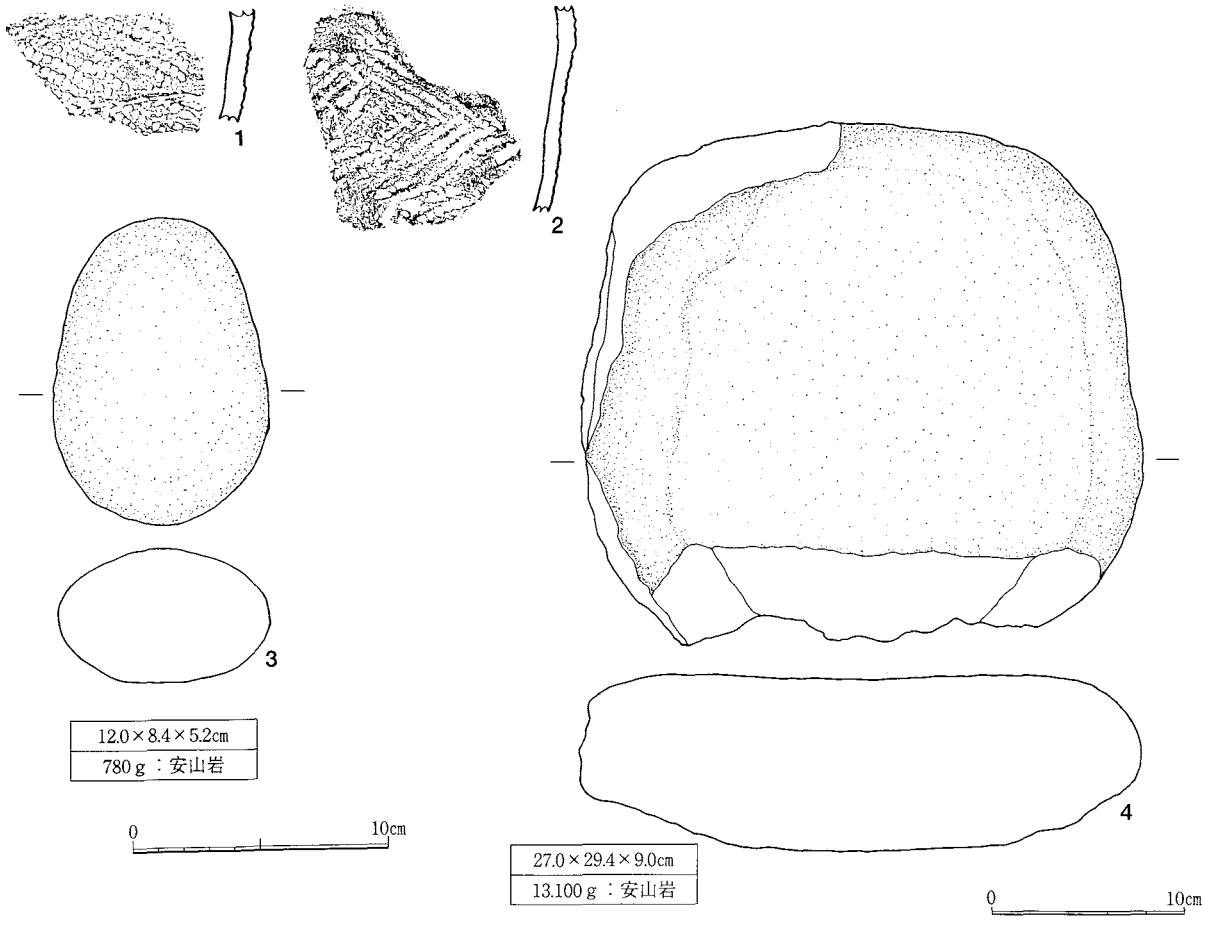


3号住居跡　（第10図、図版4・29）

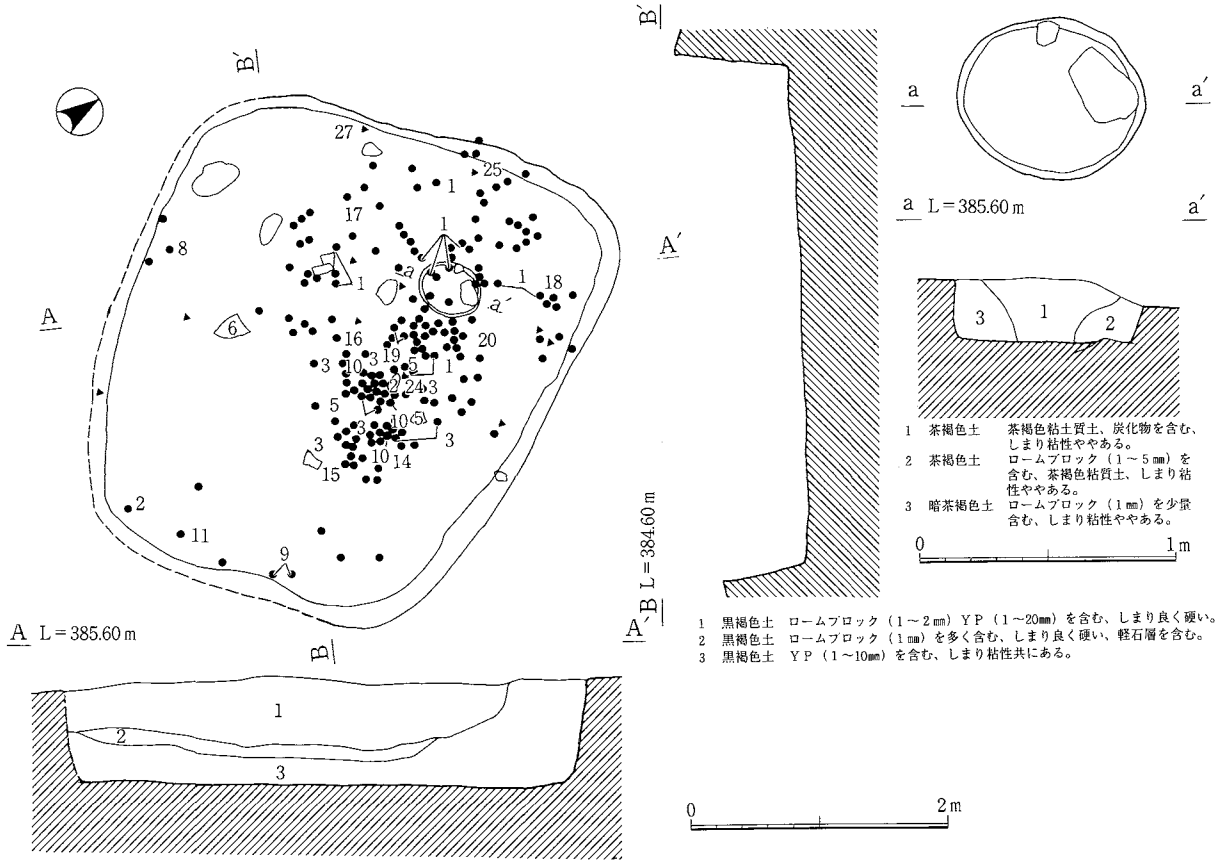
位　置／R－28グリッドに位置する。形　態／東側の壁が消失しているが、円形基調と考えられる。　規　模／径2.95m～3.30m、深さ30cmを測る。　炉／不明。　床面／全体的に軟質。　柱穴・壁溝・埋設土器／なし。

遺物出土状況／極少量の縄文前期土器片、石器類が散在して出土し、安山岩の石皿が南側壁に接して出土している。　時　期／黒浜式～諸磯a式期の所産と推測される。

出土遺物／1・2は胎土に繊維を含む黒浜式の胴部破片、3は安山岩の磨石、4は石皿である。



第10図　3号住居跡・出土遺物

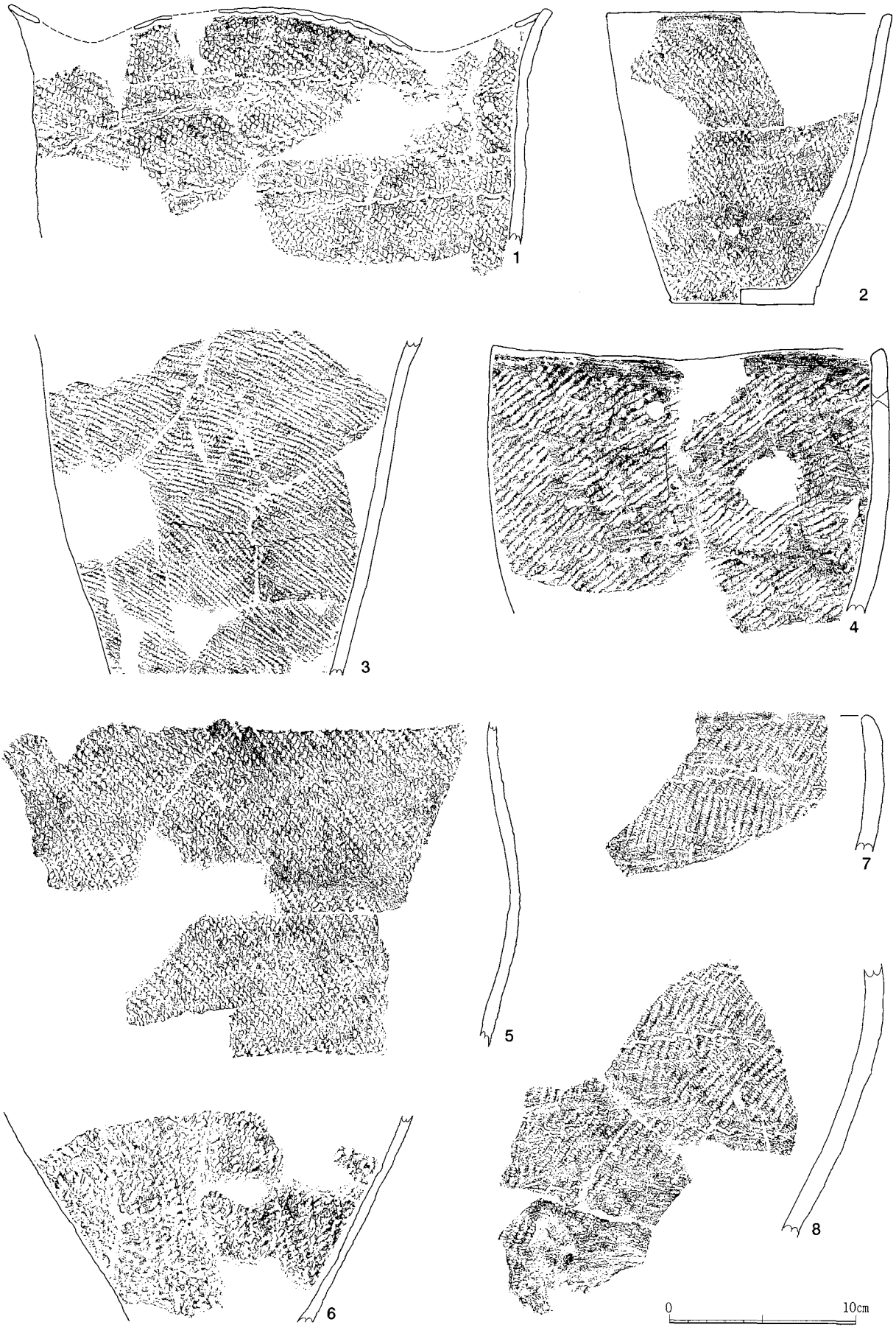


第11図　6号住居跡

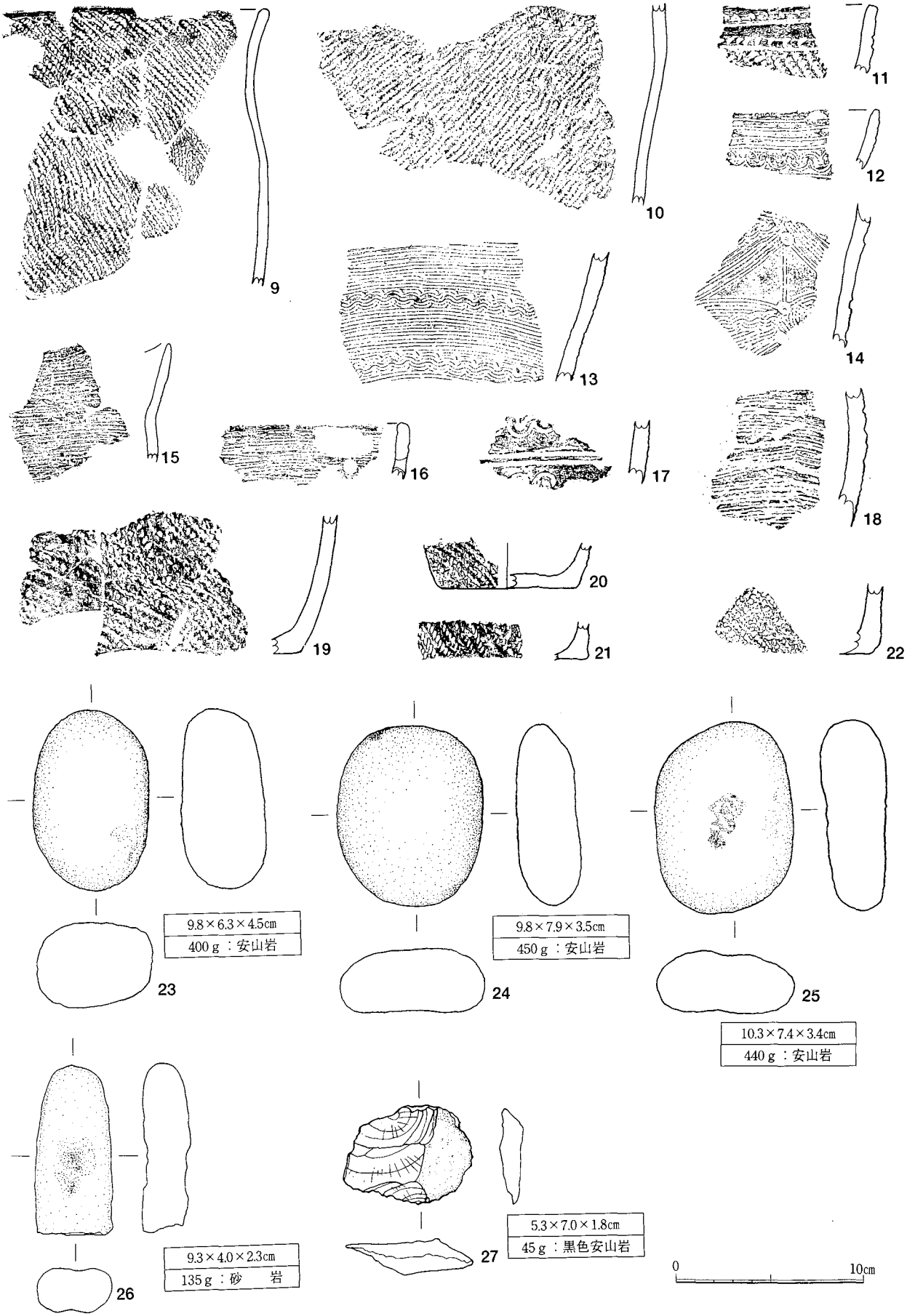
6号住居跡　（第11～13図、図版4・29・30）

位　置／Q－28・29グリッドに位置する。　形　態／隅丸台形～方形を呈する。　規　模／現状では長軸3.90ｍ、短軸3.50ｍ、深さ80㎝を測るが東側～南側の壁は不明瞭である。　炉／中央部北側から焼土跡1基を検出している。　床　面／面をなし、全体に硬質。　柱穴・壁溝・埋設土器・重複／なし。　遺物出土状況／覆土中から縄文前期後半土器片、石器類が多量に出土している。　時　期／諸磯ａ式期。

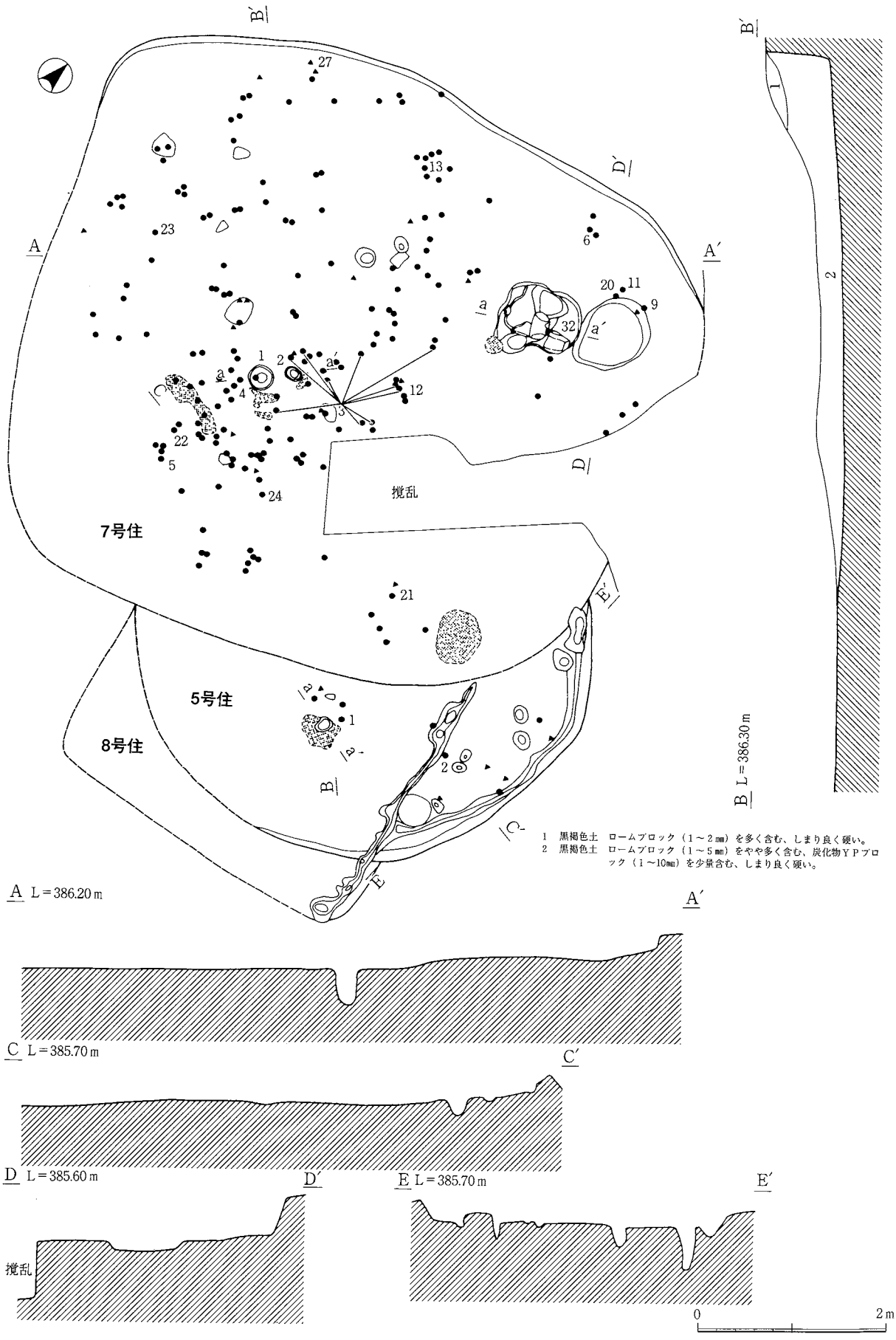
出土遺物／1～11は地文に縄文が施文される諸磯ａ式で、単節縄文、附加条第1種縄文、結節縄文、無節縄文等が施文されている。12～15は半截竹管・櫛歯状工具による沈線で文様が描かれる諸磯ａ式の破片で、横位沈線、波状文、コンパス文を主として文様が構成されている。16～18は胎土に繊維を含む黒浜式の土器片。19～22は諸磯ａ式の底部片でいずれも単節斜縄文が施文されている。23・24は安山岩の磨石、25は安山岩の磨石兼凹石、26は砂岩の凹石、27は黒色安山岩の剥片石器である。



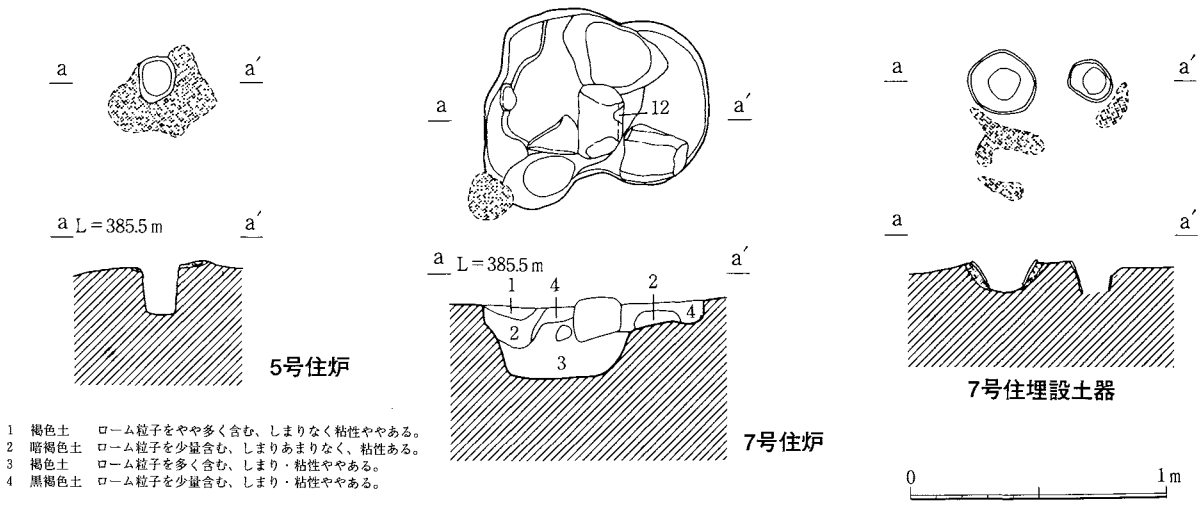
第12図　6号住居跡出土遺物（1）



第13図　6号住居跡出土遺物（2）



第14図　5・7・8号住居跡



第15図　5号住居跡炉、7号住居跡炉・埋設土器

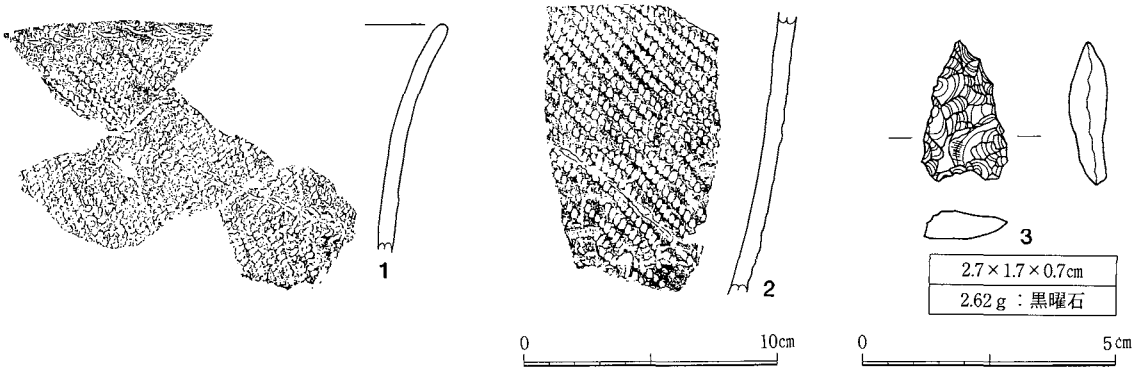
5・7・8号住居跡

5・7・8号住居跡は重複して検出され、調査時には4軒として調査を実施したが、結果的には3軒の重複として捉えられた。出土遺物及び切り合い関係から8号住居跡⇨5号住居跡⇨7号住居跡の順で構築されたと考えられ、8号住居跡が黒浜式期、5号住居跡が諸磯a式期、7号住居跡が諸磯c式期と推測される。

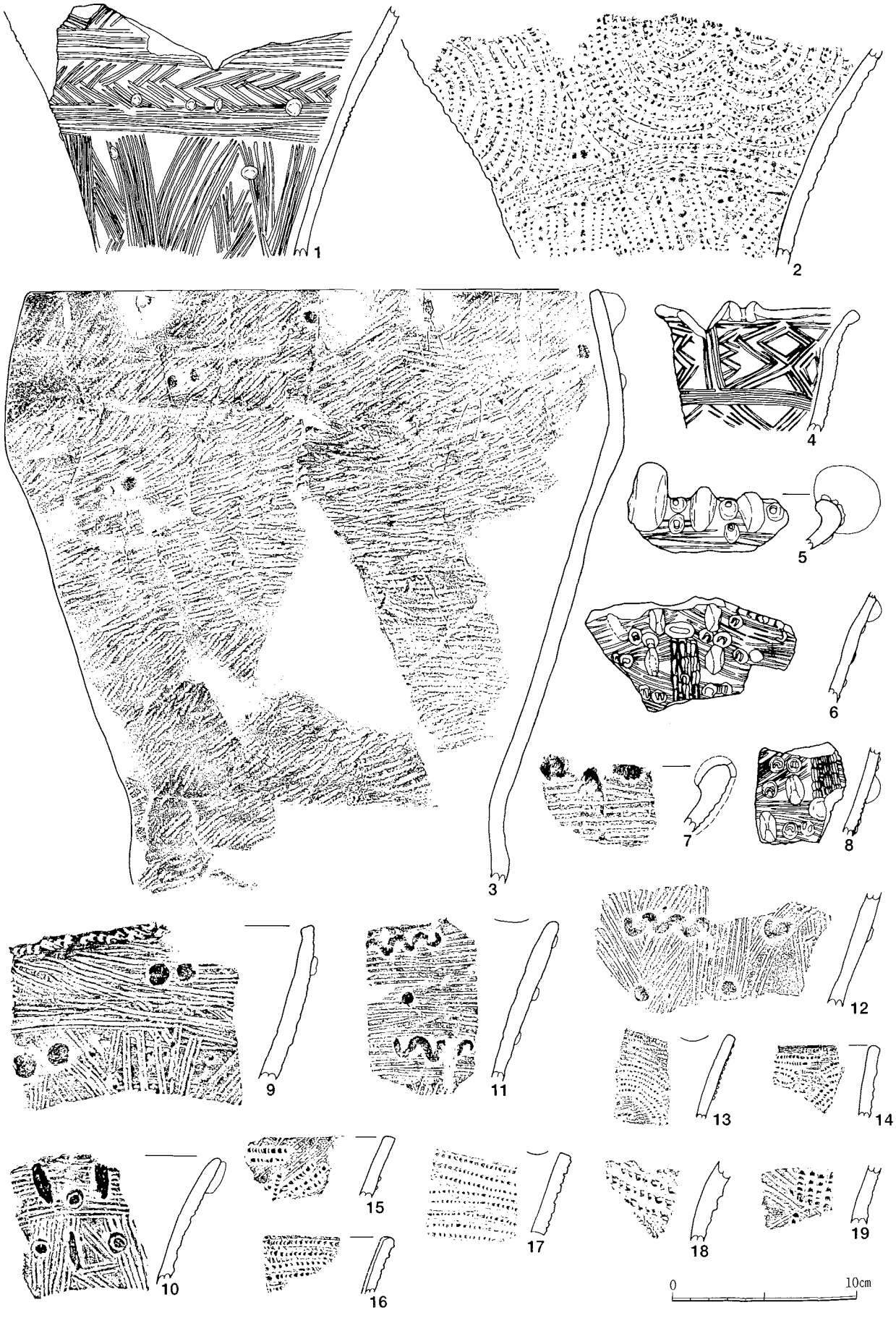
5号住居跡　（第14～16図、図版4・5・30）

位　置／P－29、Q－29グリッドに位置する。　形　態／円形と推測される。　規　模／径約4.80mと推定され、深さ20cmを測る。　炉／中央西側から焼土跡が検出されている。　床　面／面をなすが、軟質。壁　溝／西側の一部に確認され、幅10cm、深さ5cm前後を測る。　遺物出土状況／焼土跡周辺から少量の縄文前期後半土器片が出土している。　時　期／出土遺物、重複関係から諸磯a式と考えられる。

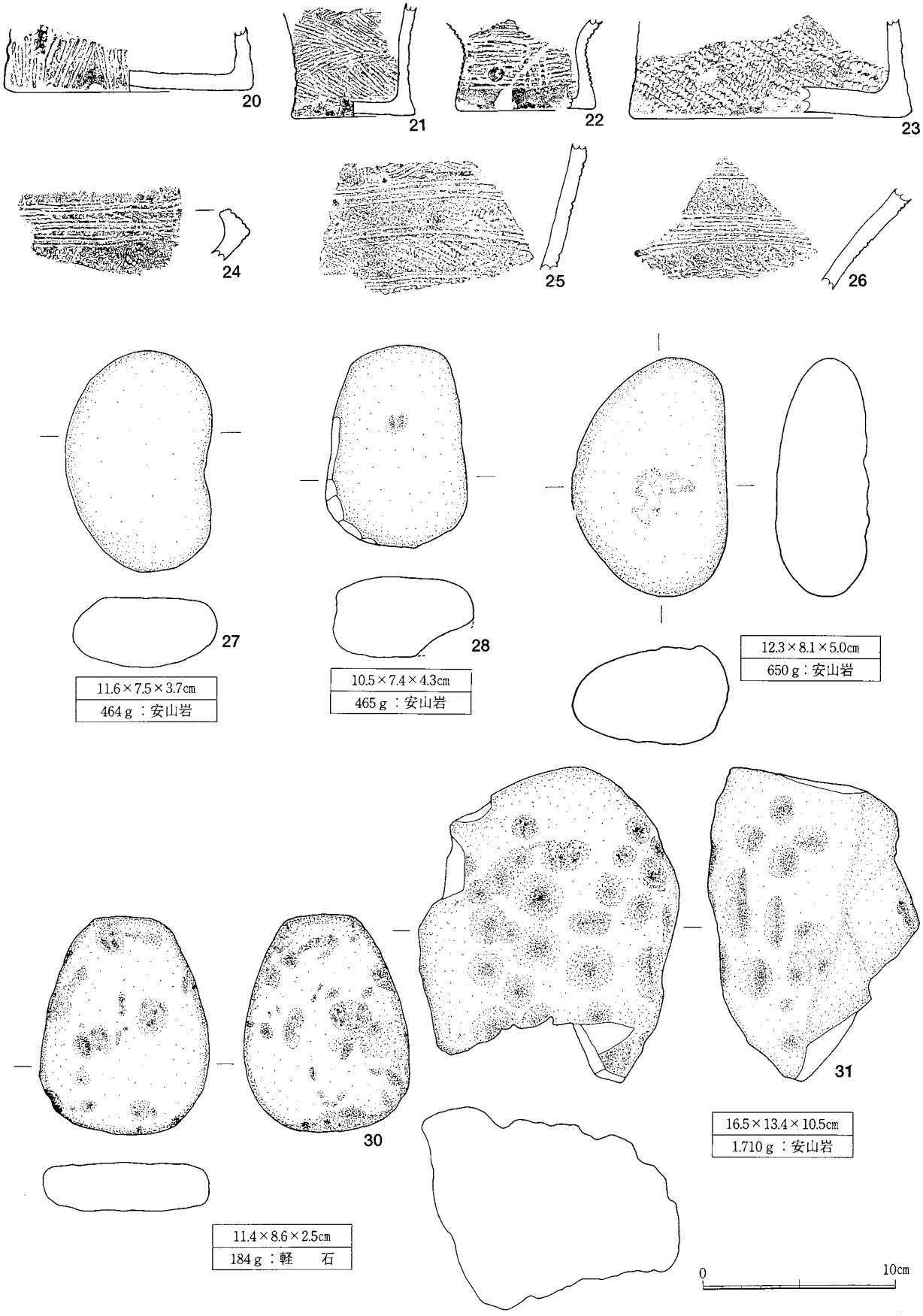
出土遺物／1・2は諸磯a式の口縁部・胴部の破片で単節縄文が施文されている。3は黒曜石の石鏃。



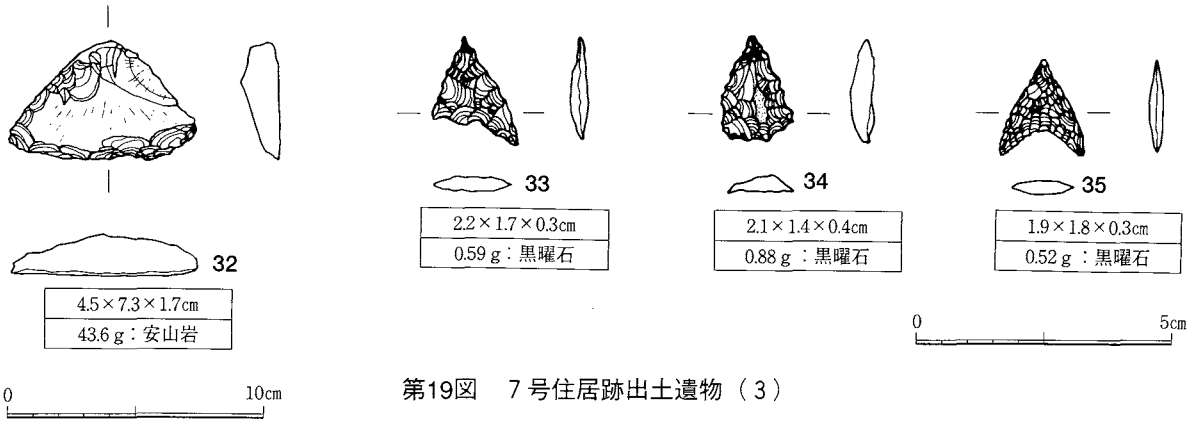
第16図　5号住居跡出土遺物



第17図　7号住居跡出土遺物（1）



第18図　7号住居跡出土遺物（2）

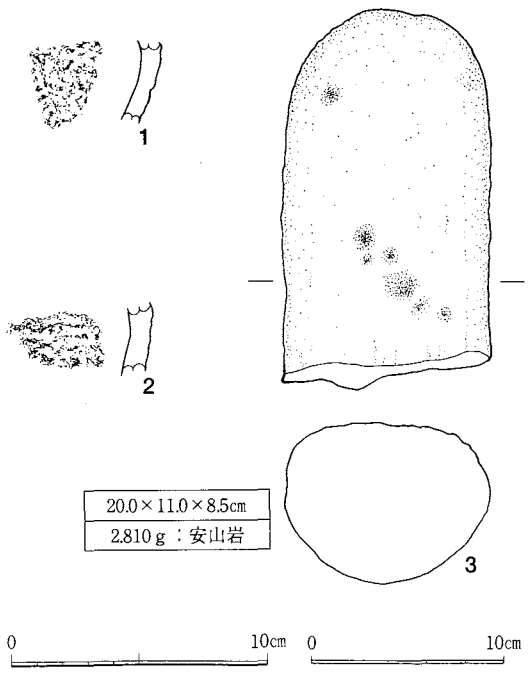


第19図　7号住居跡出土遺物（3）

7号住居跡　（第14・15・17～19図、図版4・5・31・32）

位　置／P－28・29、Q－28・29グリッドに位置する。　形　態／隅丸方形基調と推測されるが、北壁のみ遺存する為、明確ではない。　規　模／遺物の分布範囲として長軸6.80m、短軸6.40mが推測され、深さ70cmを測る。　炉／北東コーナー付近から検出され、他に中央部と東南部から焼土跡が検出されている。床　面／面をなす。　埋設土器／中央部から検出され、諸磯c式の深鉢が並んで埋設されていた。　柱　穴／小ピット2基が検出されている。　壁　溝／なし。　遺物出土状況／2基の埋設土器の他、諸磯c式を主体とする土器片が覆土中から多量に出土している。　時　期／諸磯c式期。

出土遺物／1は諸磯c式の埋設土器、2は結節浮線文が施される諸磯c式新段階の埋設土器。3は諸磯c式の深鉢接合資料で地文に撚り戻しと思われる縄文が施文され、ボタン状の貼り付けが施されている。4～12は地文に集合沈線が施文される諸磯c式の破片で、5～12には棒状・ボタン状の貼り付けが施され、11・12には大木系の影響と考えられる鋸歯状の粘土紐貼り付けが見られる。13～19は結節浮線文が施される諸磯c式新段階の破片である。20～23は諸磯c式の底部片で、20～22は集合沈線、23は単節縄文が施文されている。24～26は諸磯b式の破片である。27は磨石、28・29は磨石兼凹石、30は無穿孔の軽石製品である。31は多孔石、32は安山岩の剥片石器、33～35は黒曜石の石鏃。



第20図　8号住居跡出土遺物

8号住居跡　（第14・20図、図版4・32）

位　置／Q－29グリッドに位置する。　形態・規模／東側壁溝のみの検出であり、5号・7号住居跡に住居範囲の大部分が切られている。壁溝が直線的に掘り込まれており、方形基調の可能性がある。　炉・床面・柱穴／不明。　壁　溝／東側のみ検出された。幅10～20cm、深さ20cmを測る。　遺　物／覆土中から微量の前期中葉土器片が出土している。　時　期／出土遺物及び重複関係から黒浜式期と考えられる。

出土遺物／1・2は覆土に繊維を多量に含む黒浜式の破片である。3は安山岩の凹石で覆土中から出土している。

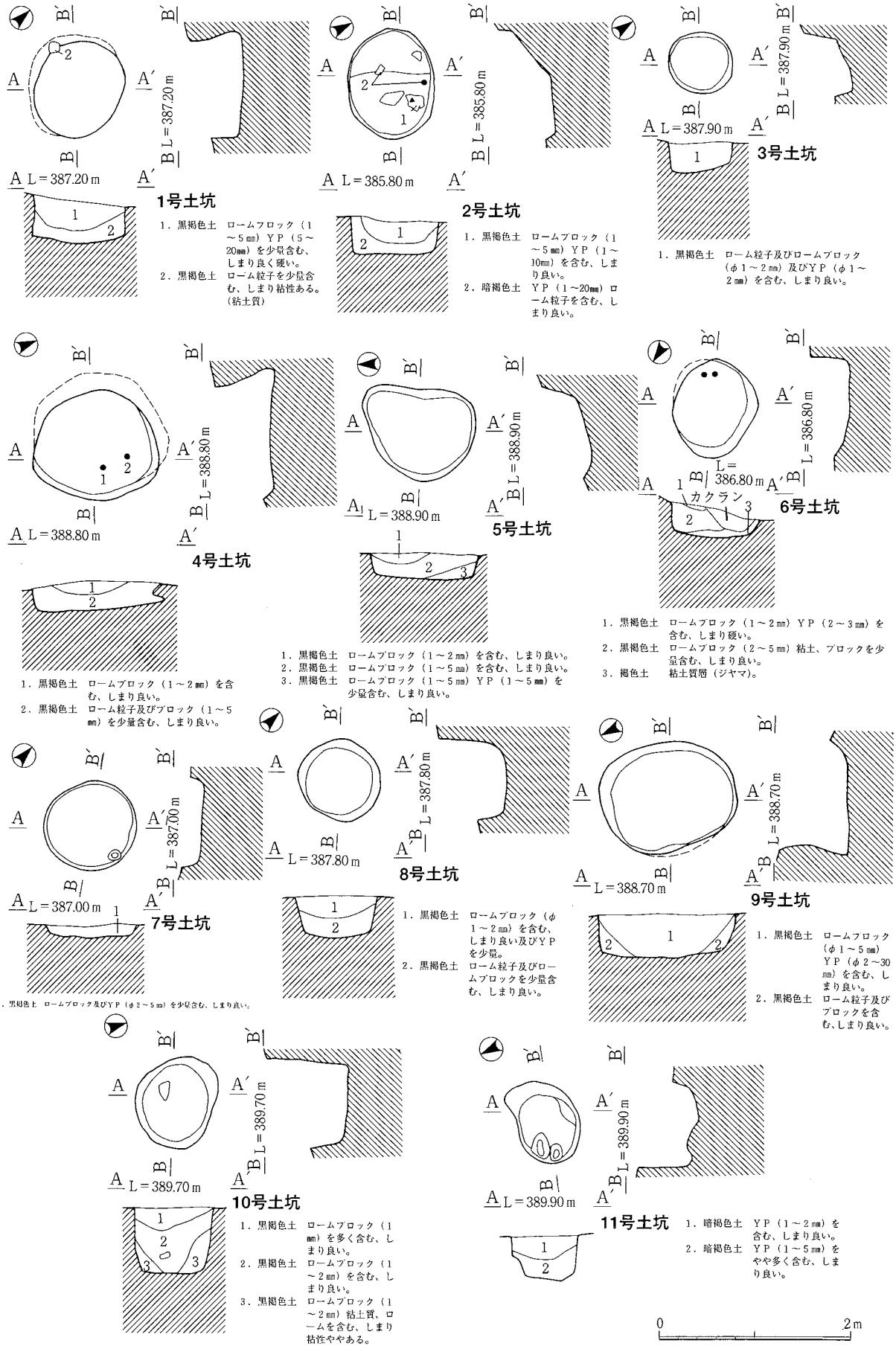
土　坑　（第21～24図、表－１、図版５・32・33）

21基検出された土坑は、調査区内に粗密に分布し、住居跡付近に集中する傾向が見られる。時期的には黒浜式の遺物が出土した土坑５基、黒浜式・諸磯ａ式の遺物が出土した土坑４基、諸磯ａ式の遺物が出土した土坑２基、諸磯ｃ式の遺物が出土した土坑１基が確認され、他の土坑からも前期中葉～後半の土器細片が出土している。個々の土坑の規模・形態については一覧表にまとめて提示する。

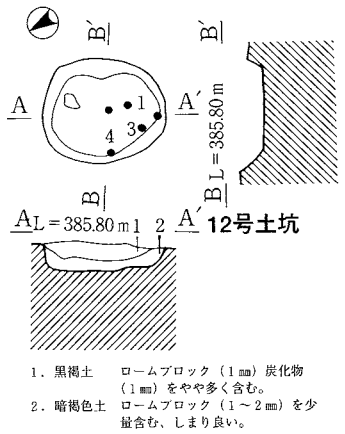
表－１　東調査区土坑一覧表

（cm）

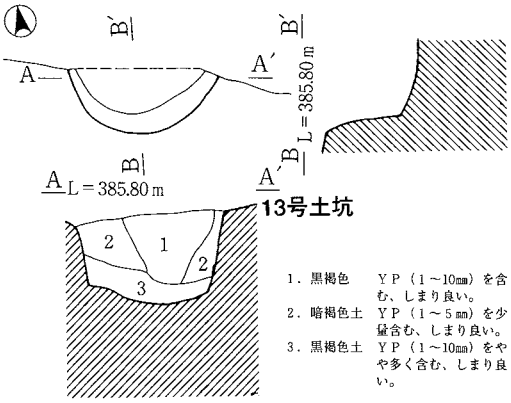
番号	位置（グリッド）	平面形状	断面形状	長軸	短軸	深さ	備　　考
1	S－27	円形	鍋　底　状	102	90	58	黒浜式土器片
2	S・R－27・28	楕円形	鍋　底　状	113	92	67	黒浜式土器片、磨石
3	R－27	円形	鍋　底　状	68	57	38	黒浜式土器片
4	Q－27	円形	袋　　状	134	114	70	黒浜式土器片
5	Q－27	不整形	鍋　底　状	123	102	67	
6	Q－27・28	円形	鍋　底　状	103	84	46	黒浜式、諸磯ａ式土器片
7	Q－28	円形	皿　　状	100	98	29	
8	P－28	円形	鍋　底　状	88	86	84	
9	P－27・28	楕円形	鍋　底　状	148	106	76	
10	P－27	円形	逆　台　形	100	70	90	
11	Q－27	不整形	鍋　底　状	97	60	78	ピット２
12	P・Q－29	楕円形	皿　　状	98	82	30	諸磯ａ式土器片、５号住居重複
13	P－29	円形？	逆　台　形	118	31＋α	70	
14	Q－29	楕円形	鍋　底　状	104	78	48	黒浜式、諸磯ａ式土器片
15	P－28	円形	逆　台　形	110	100	84	１号住居重複
16	Q－28	円形	U　字　状	99	85	111	黒浜式土器片、磨石
17	R－28	円形	U　字　状	94	92	100	黒浜式、諸磯ａ式土器片
18	Q－28	不整形	鍋　底　状	122	64	90	
19	R－28・29	不整形	鍋　底　状	88	74	64	黒浜式、諸磯ａ式土器片
20	R－28	円形？	鍋　底　状	94＋α	56＋α	174	諸磯ｃ式土器片
21	Q－29	円形	鍋　底　状	74	74	59	諸磯ａ式土器片
22	欠　番						



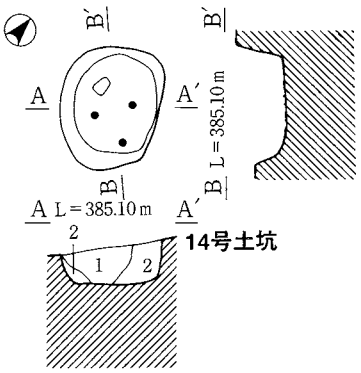
第21図　東調査区土坑（1）



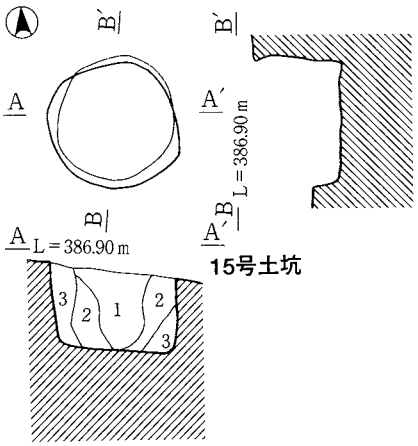
1．黒褐土　ロームブロック（1㎜）炭化物（1㎜）をやや多く含む。
2．暗褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を少量含む、しまり良い。



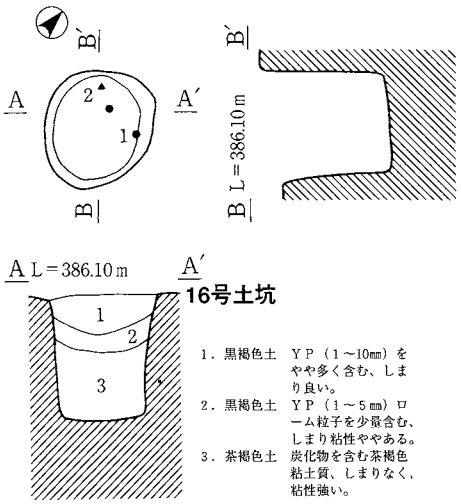
1．黒褐色　ＹＰ（1～10㎜）を含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ＹＰ（1～5㎜）を少量含む、しまり良い。
3．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）をやや多く含む、しまり良い。



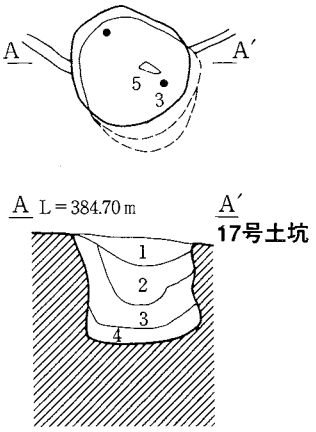
1．黒褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を含む、しまり良い。



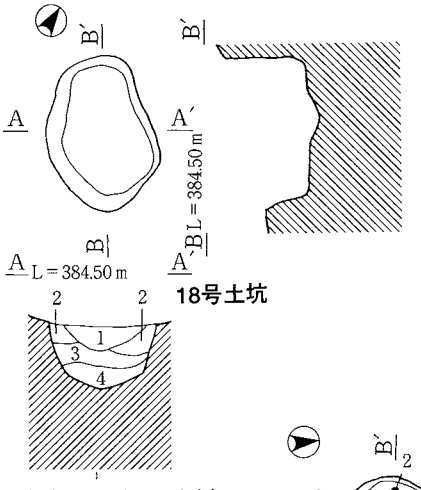
1．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）を含む、しまり良い。
2．黒褐色土　ＹＰ（1～2㎜）を少量含む、しまり良い。
3．茶褐色土　茶褐色ローム粒子及びＹＰブロック（1～2㎜）を少量含む、しまり粘性ある。



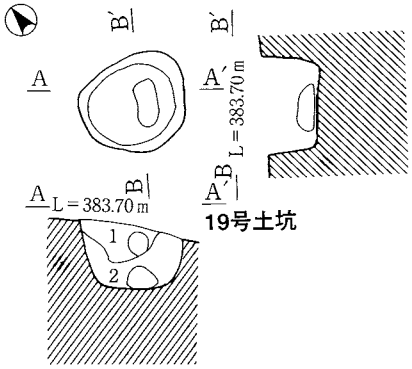
1．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）をやや多く含む、しまり良い。
2．黒褐色土　ＹＰ（1～5㎜）ローム粒子を少量含む、しまり粘性ややある。
3．茶褐色土　炭化物を含む茶褐色粘土質、しまりなく、粘性強い。



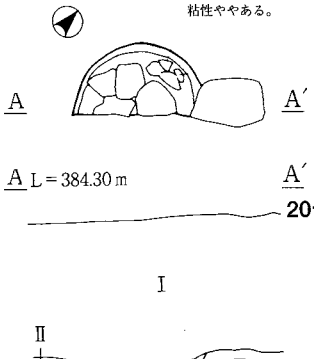
1．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）を含む、炭化物を少量含み、しまり良く硬い。
2．暗褐色土　ＹＰ（1～15㎜）をやや多く含む、炭化物を少量含む、しまり良く硬い。
3．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）及び炭化物を少量含む、しまり良く硬い。
4．暗褐色土　茶褐色粘質ロームを含む、しまり粘性ややある。

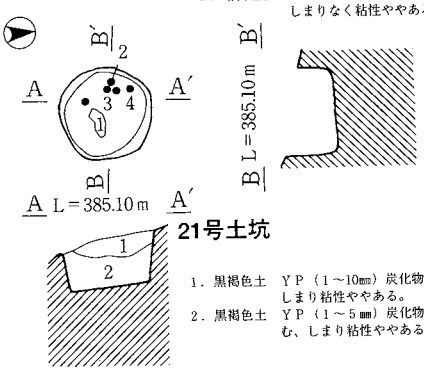


1．暗褐色土　ＹＰ（1～10㎜）を含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ＹＰ（1～5㎜）を少量含む、しまり良い。
3．黒褐色土　ＹＰ（1～5㎜）を少量含む、しまり良い。
4．暗褐色土　ローム粒子を含む、しまり粘性共にややある。

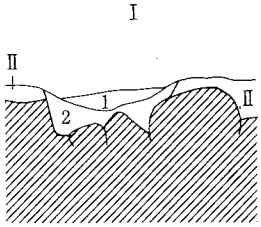


1．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）を含む、しまり粘性ややある。
2．暗褐色土　ローム粒子及びブロック（1～5㎜）を含む、しまりなく粘性ややある。

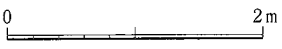




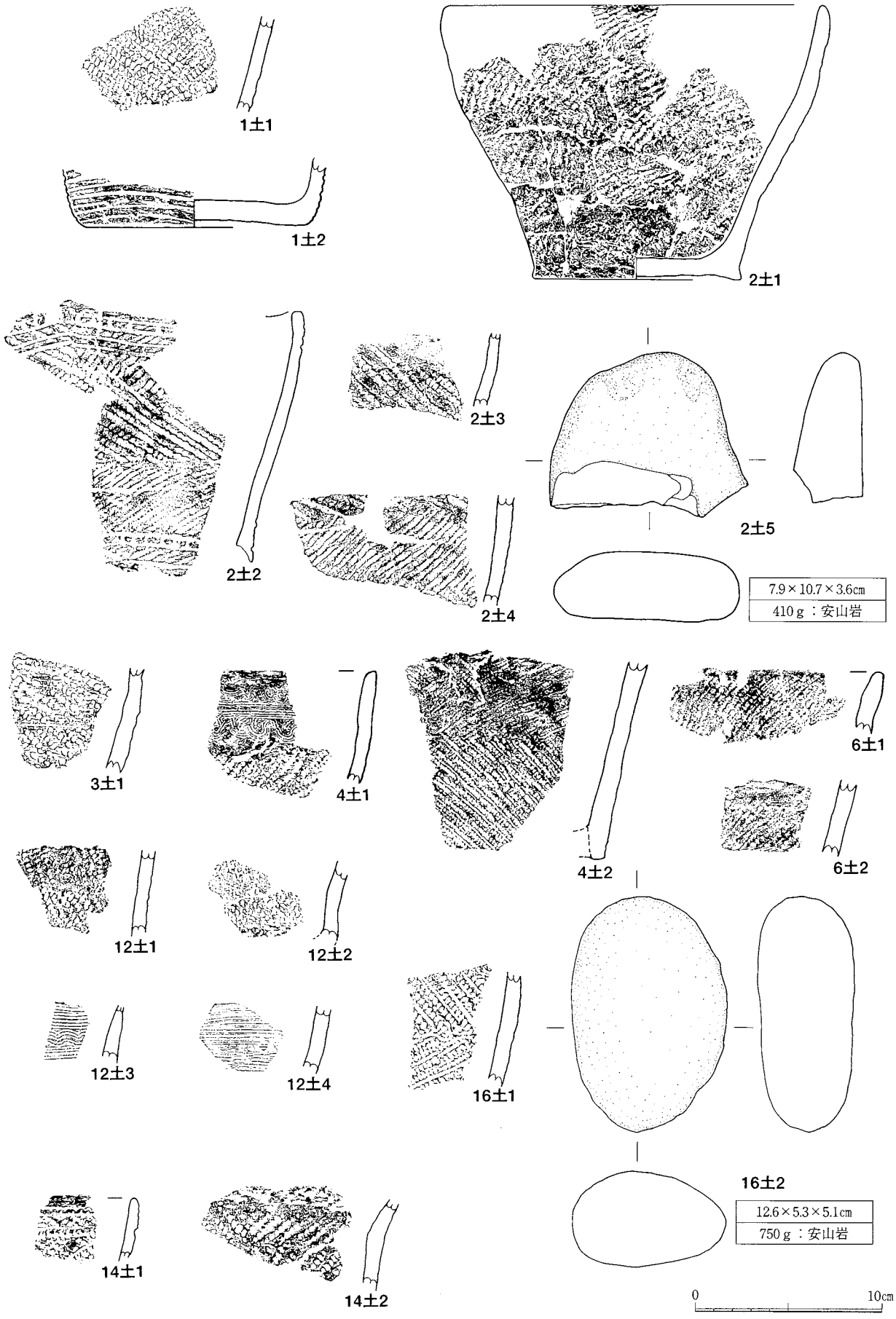
1．黒褐色土　ＹＰ（1～10㎜）炭化物を含む、しまり粘性ややある。
2．黒褐色土　ＹＰ（1～5㎜）炭化物を少量含む、しまり粘性ややある。



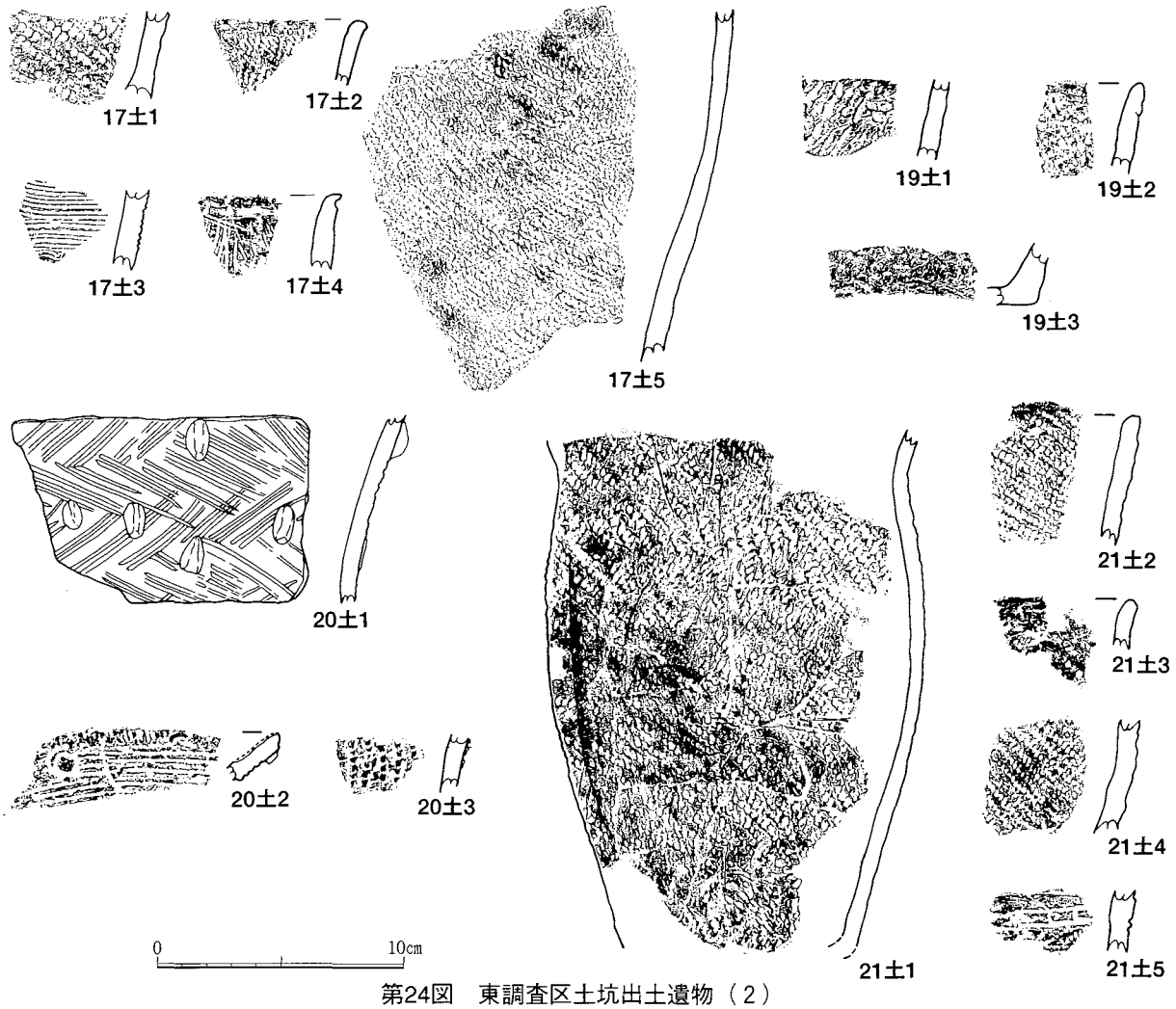
Ⅰ．黒褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を少量含む、しまり良い。
Ⅱ．黒褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を少量含む、しまり粘性ややある。
1．黒褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を含む、しまり粘性ややある。
2．黒褐色土　（1～2㎜）を少量含む、しまりあまりなく、粘性ややある。



第22図　東調査区土坑（2）



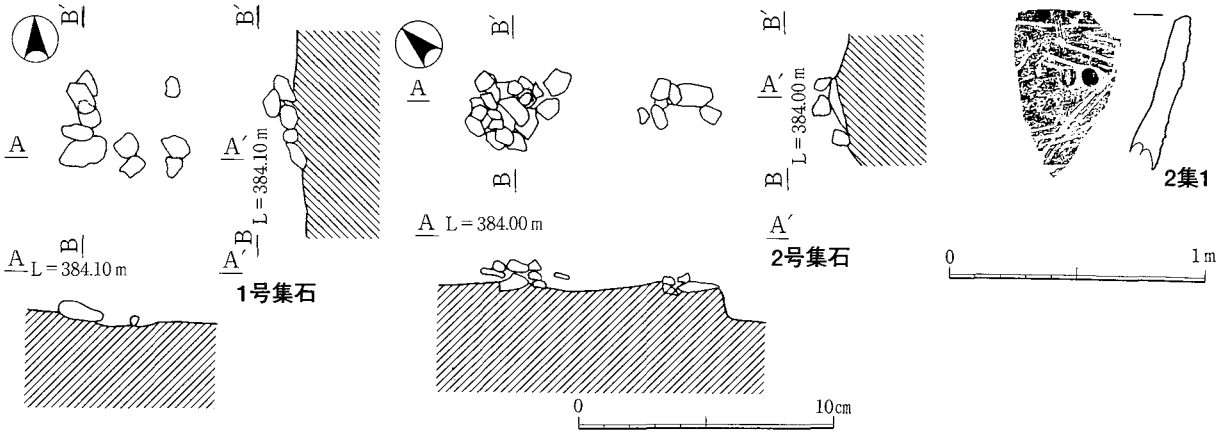
第23図　東調査区土坑出土遺物（1）



第24図　東調査区土坑出土遺物（２）

東調査区土坑出土遺物　（第23・24図、図版32・33）

１号土坑－１・２は胎土に繊維を含む黒浜式の遺物で、１は単節縄文が羽状もしくは菱形に施文される。２は底部で横位の沈線が底部直上まで施されている。２号土坑－１～４は胎土に繊維を含む黒浜式の遺物で、１は全体に不鮮明な縄文が施文されるほぼ完形の鉢型土器。２は地文に単節縄文・無節縄文が施文され、波状の口縁に沿って半截竹管の押し引き文、口縁と胴部の境部分にも横位の押し引き文が施されている。口縁部の縄文は羽状に施文されている。３・４は胴部の破片で縄文が施文されている。５は安山岩の磨石。３号土坑－１は胎土に繊維を含む黒浜式の胴部破片。４号土坑－１・２は胎土に繊維を含む黒浜式の破片で、１は櫛状工具による横位集合沈線、コンパス文と単節縄文で文様が構成される。２は底部から胴部の破片で、附加条第１種縄文が羽状に施文されている。６号土坑－１は胎土に繊維を含む黒浜式、２は諸磯ａ式。12号土坑－１～４はいずれも諸磯ａ式の胴部破片で、１・２には縄文が施文され、３・４は集合沈線で文様が描かれている。14号土坑－１は諸磯ａ式の口縁部破片、２は胎土に繊維を含む黒浜式の胴部破片である。16号土坑－１は附加条第１種縄文が羽状に施文され、胎土に多量の繊維を含む黒浜式の胴部破片、２は安山岩の磨石。17号土坑－１～５はいずれも諸磯ａ式の破片。19号土坑－１は胎土に繊維を含む黒浜式の胴部破片、２・３は諸磯ａ式。20号土坑－１～３は諸磯ｃ式の破片で、１は半截竹管による平行沈線が横位羽状に引かれ、棒状の貼り付け文が施されている。21号土坑－１～５はいずれも諸磯ａ式である。１は完形に近い細身の深鉢で、全体に単節縄文が施文されている。



第25図　東調査区集石・出土遺物

集　石　（第25図、図版５・33）

集石は２基検出されている。１号集石は３号住居跡南側、Ｒ－28グリッドから検出され、安山岩礫10個がまばらに集中していた。被熱痕、出土遺物はない。２号集石はＱ－29グリッド南西端から検出され、安山岩礫が円形に積まれた集石と南東約30cm離れて小集石がある。被熱痕はなく、遺物は円形の集石部分から諸磯ｃ式の口縁部破片が出土している。時期的には両集石とも明確ではないが、周辺の住居跡・土坑とほぼ同時期の所産と考えられる。

遺構外出土遺物

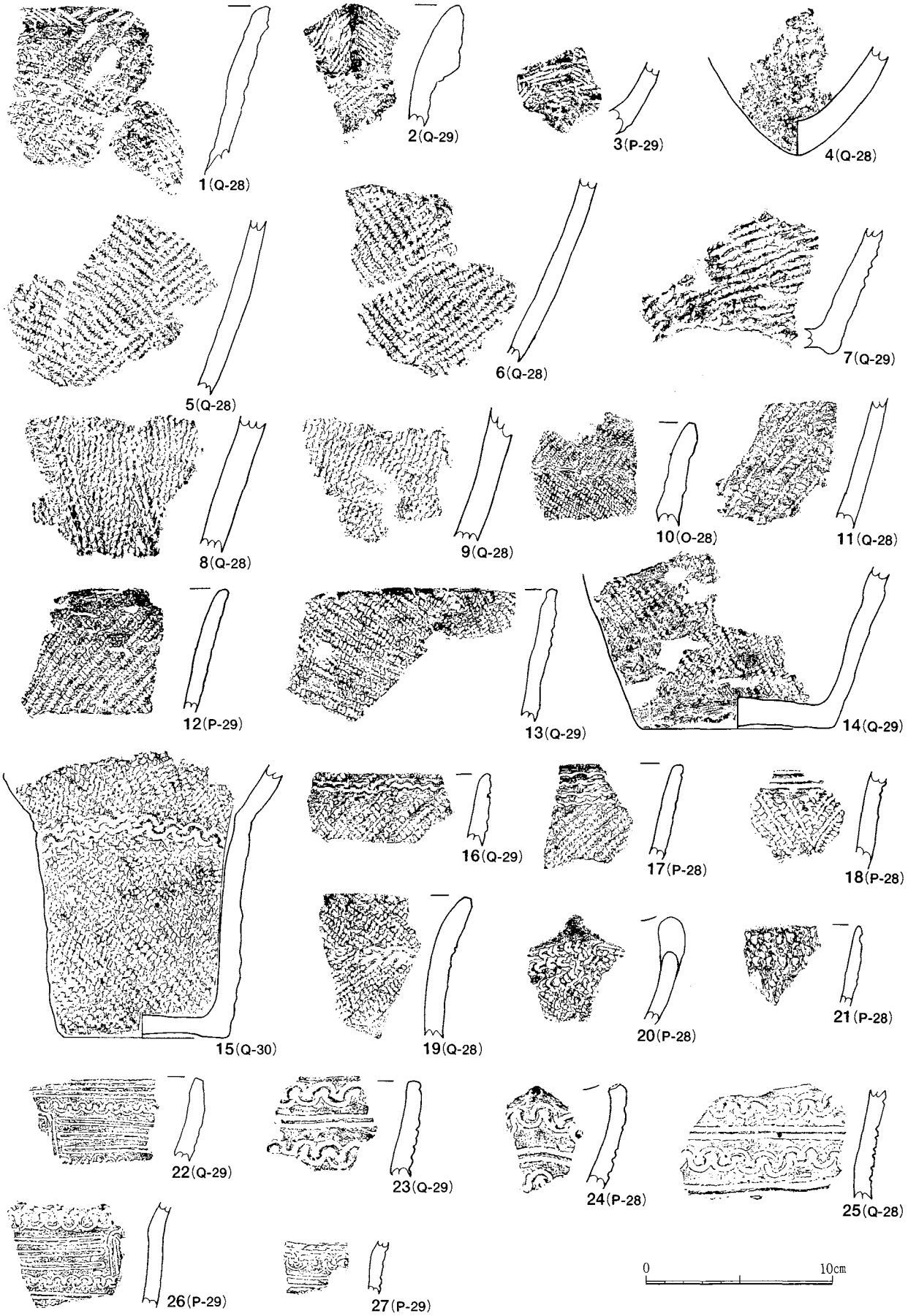
土　器　（第26～28図、図版33～35）

東調査区からは黒浜式、諸磯ａ式、諸磯ｃ式を主体として若干量の塚田式、花積下層式、諸磯ｂ式、五領ヶ台式の土器が出土している。遺構外出土の土器については以下の６群に大別して68点を図示した。

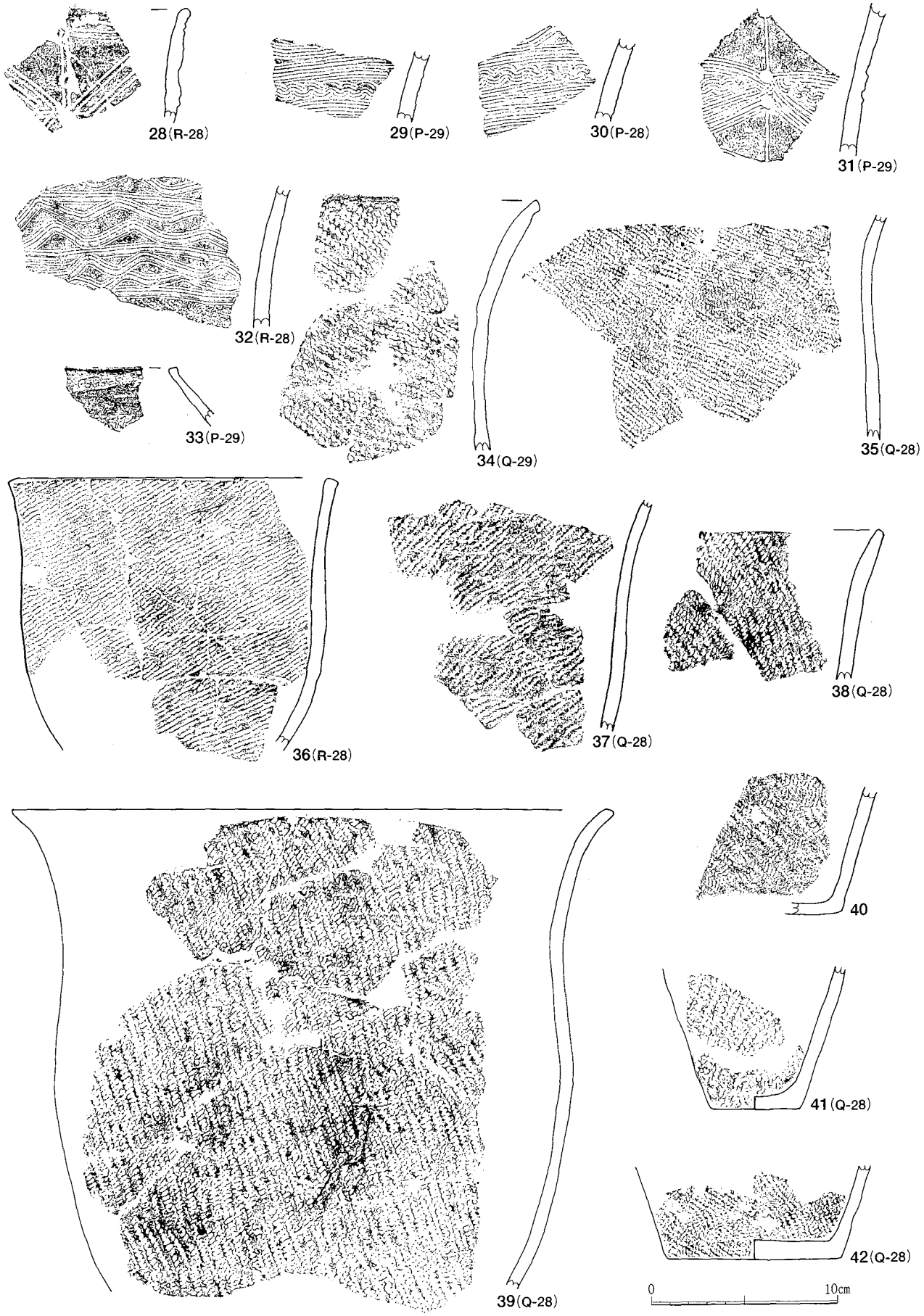
第１群　塚田式・花積下層式　　第２群　黒浜式　　第３群　諸磯ａ式
第４群　諸磯ｂ式　　第５群　諸磯ｃ式　　第６群　五領ヶ台式

第１群土器（１～９）　塚田式・花積下層式の範疇と考えられる土器を一括した。いずれも胎土に繊維を含み、内面はよく磨かれている。１・２は口縁部の破片で、１は口唇部に無節細縄文が施文され、僅かな段を有する。口縁以下には単節細縄文が施文されている。２は波状口縁の破片で波頂部から隆帯が垂下し、地文には無節と思われる不明瞭な縄文が施文される。３・４は縄文が施文される尖底部分である。５・６は０段多条の単節縄文が羽状に施文される胴部破片、７は平底の底部～胴部で不明瞭な縄文が施文されている。８・９は縦位気味に縄文が施文される胴下部の破片で尖底になると考えられる。

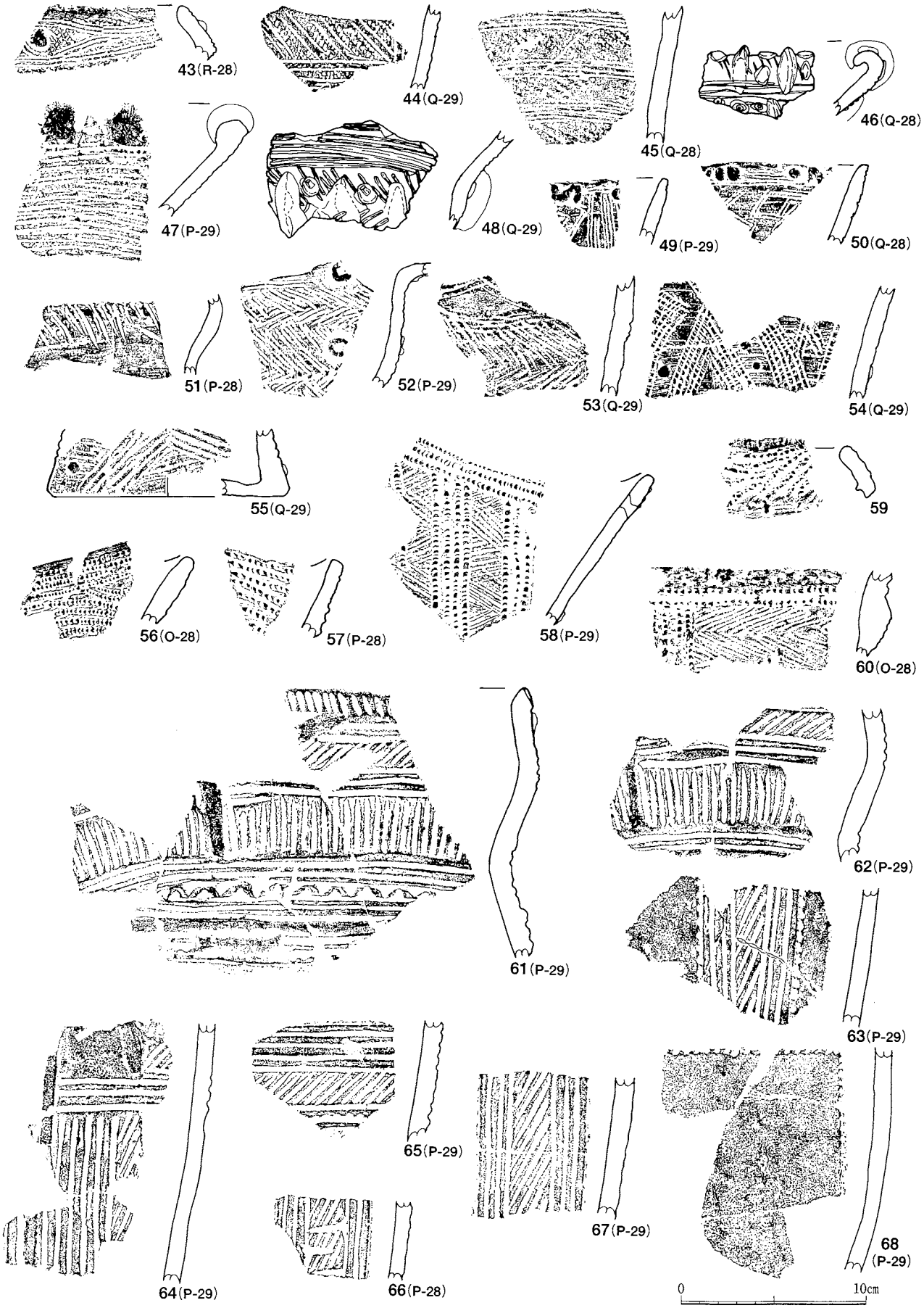
第２群土器（10～27）　胎土に多量の繊維を含む黒浜式を一括した。10～14は縄文のみ施文される。15は口縁部を欠損するほぼ完形の小形深鉢で、地文に単節斜縄文が施文され、口縁部と胴部の境にコンパス文が施されている。16は地文に附加条第１種縄文が施文され、口縁に沿ってコンパス文が施されている。17は単節縄文にコンパス文、18は附加条第１種縄文に横位の沈線で文様が構成されている。19は羽状縄文が施文される口縁部の破片である。20・21は縄文を地文として半截竹管によるＣ字状の爪形文が施文されている。22～27は沈線とコンパス文で文様が構成される類である。



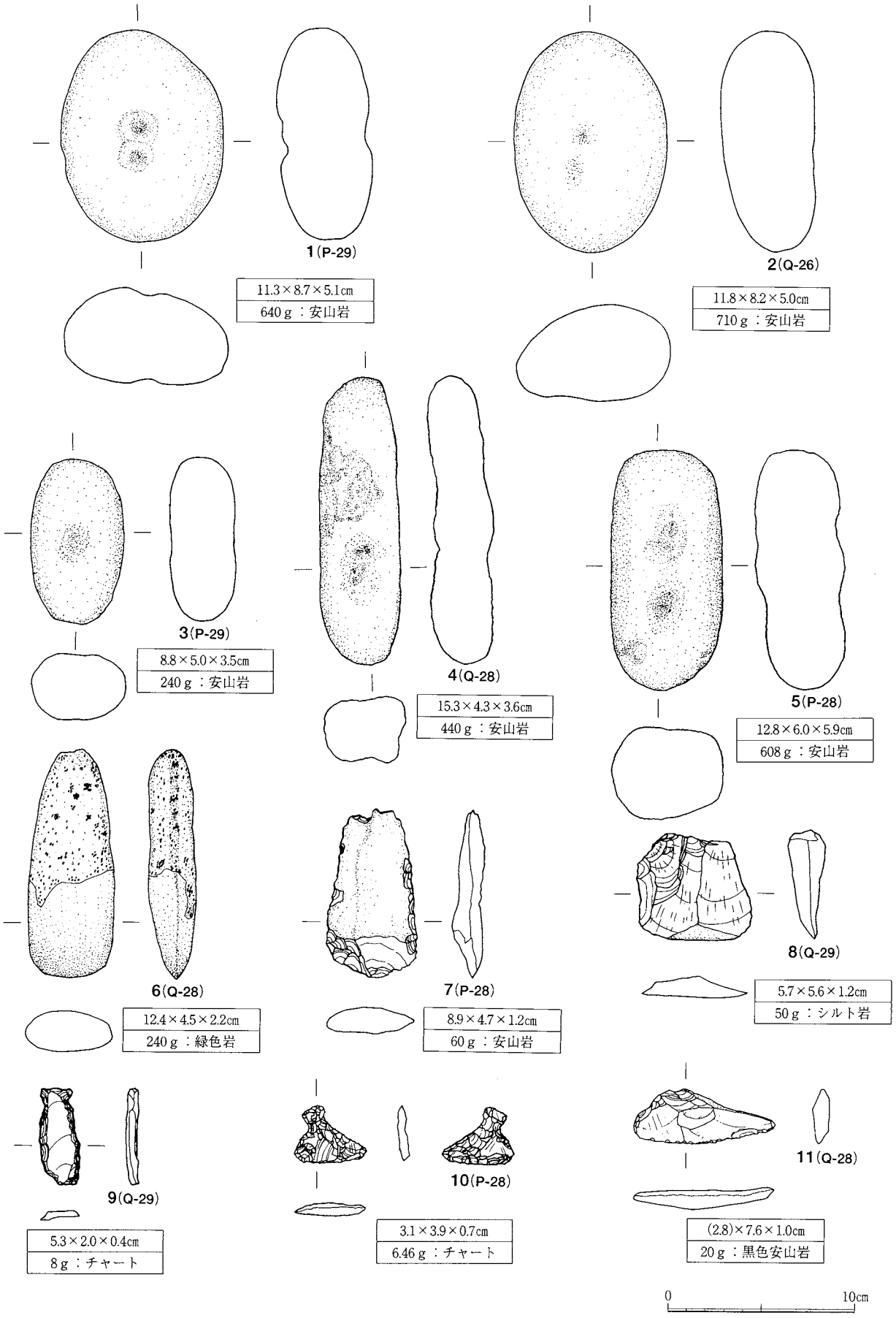
第26図　東調査区遺構外出土遺物（１）



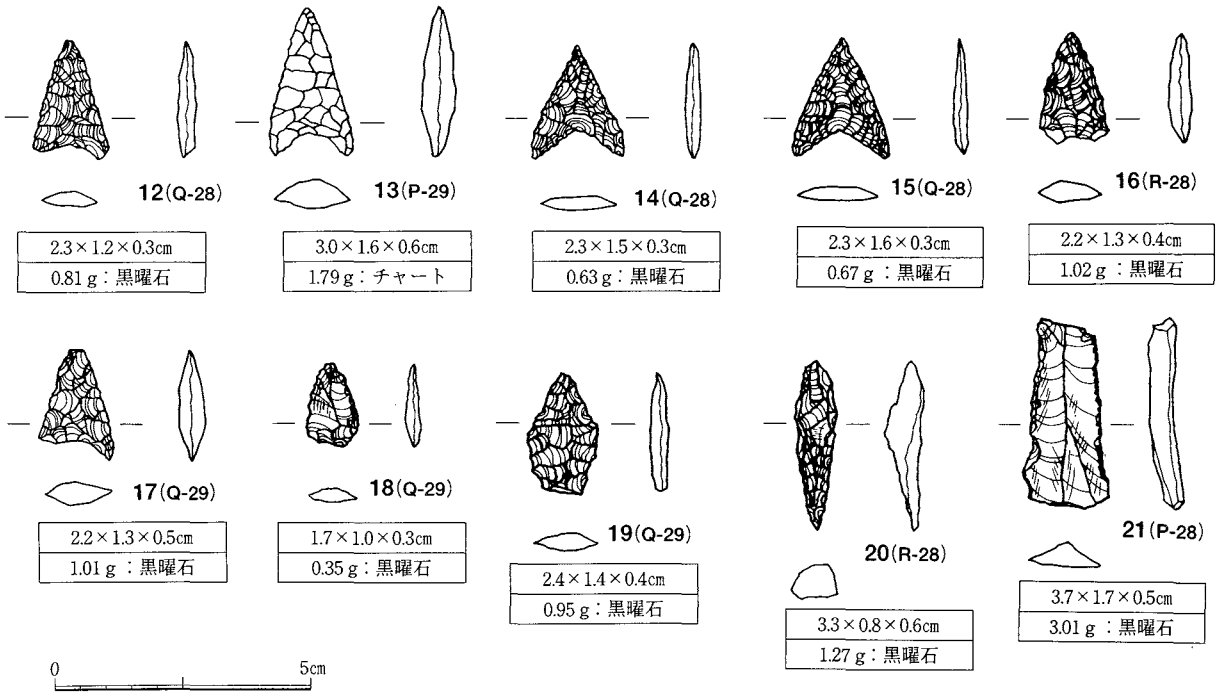
第27図　東調査区遺構外出土遺物（２）



第28図　東調査区遺構外出土遺物（３）



第29図　東調査区遺構外出土遺物（4）



第30図　東調査区遺構外出土遺物（５）

第３群土器　諸磯ａ式土器（28～42）　28～32は櫛状工具・半截竹管による沈線・コンパス文、円形刺突等で文様が構成される。33は浅鉢口縁部片で半截竹管による爪形文が施文されている。34～42は縄文のみ施文されている。

第４群土器　諸磯ｂ式土器（43～45）　本群土器は出土量が少なく、実測可能な遺物３点を掲載した。いずれも地文に単節縄文が施文され、半截竹管による沈線で文様が描かれている。

第５群土器　諸磯ｃ式土器（46～60）　46～55は櫛状工具・半截竹管による沈線・集合沈線が施文され、円形・ボタン状・棒状等の貼り付けが施される類で、54の沈線は結節状に施文されている。56～60は半截竹管による結節浮線文が施される類で、58～60は地文に集合沈線が施文されている。

第６群土器　五領ヶ台式土器（61～68）　本群土器はＰ－28・29グリッドから出土し、同一個体と考えられる。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成は非常に良好であった。61は直線的な沈線で文様が描かれる口縁部の大破片で、頸部には交互刺突文が施文されている。頸部・胴部の破片も沈線で文様が描かれ、胴部の沈線文様帯と無文帯は結節状沈線で分けられている。

石器（第29・30図、図版35）

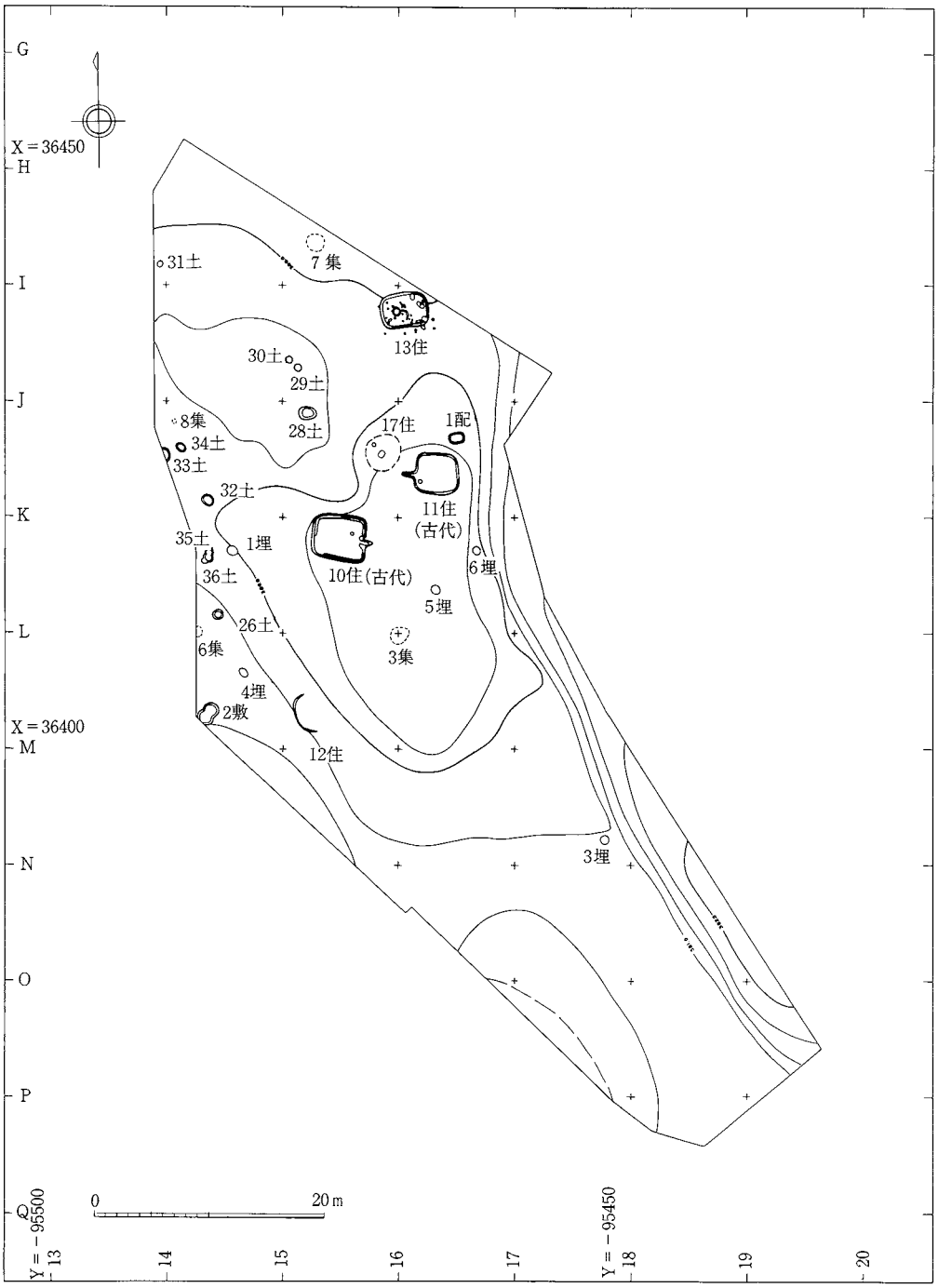
東調査区から出土した石器類は比較的少量である。完形品に近いもの、全体の形状が窺えるものを主として21点を図示した。１～５は安山岩の磨石兼凹石。６は緑色岩の磨製石斧で、上半部に製作時の敲打痕を明瞭に残している。７は篦状石器の可能性がある安山岩の剥片石器。８はシルト岩のスクレーパー。９～11は石匙で、９はチャートの縦型石匙、10はチャートの横型石匙、11は黒色安山岩の横型石匙である。12～19は石鏃類で、石材は13のみチャート、他は黒曜石である。20は黒曜石の石錐。21は黒曜石の剥片で両側縁に細かい剥離が加えられている。

中央調査区

中央調査区は視覚的に平坦な丘陵上に立地し、中期末の住居跡３軒、中期末～後期前半の土坑９基、集石４基、配石１基、敷石遺構１基、屋外埋設土器５基が検出されている。遺物は、中期末を主体として後期前半（称名寺式・堀ノ内式・加曽利Ｂ式）の土器と少量の中期初頭土器片が出土している。石器では石皿・多孔石・磨石・凹石・石匙・石鏃・石錐・石錘・打製石斧・磨製石斧・石棒等が出土し、特に打製石斧の出土が目立っている。

住居跡

３軒（12・13・17号）検出された住居跡は、いずれも中期末の所産と推測され、調査区北側に分布している。掘り込みが浅く形態的に不明瞭な12号・17号住居跡は石組炉を有し、方形基調の17号住居跡からは地床炉が検出されている。尚、16号住居跡は遺構と判断されなかった為、欠番とした。



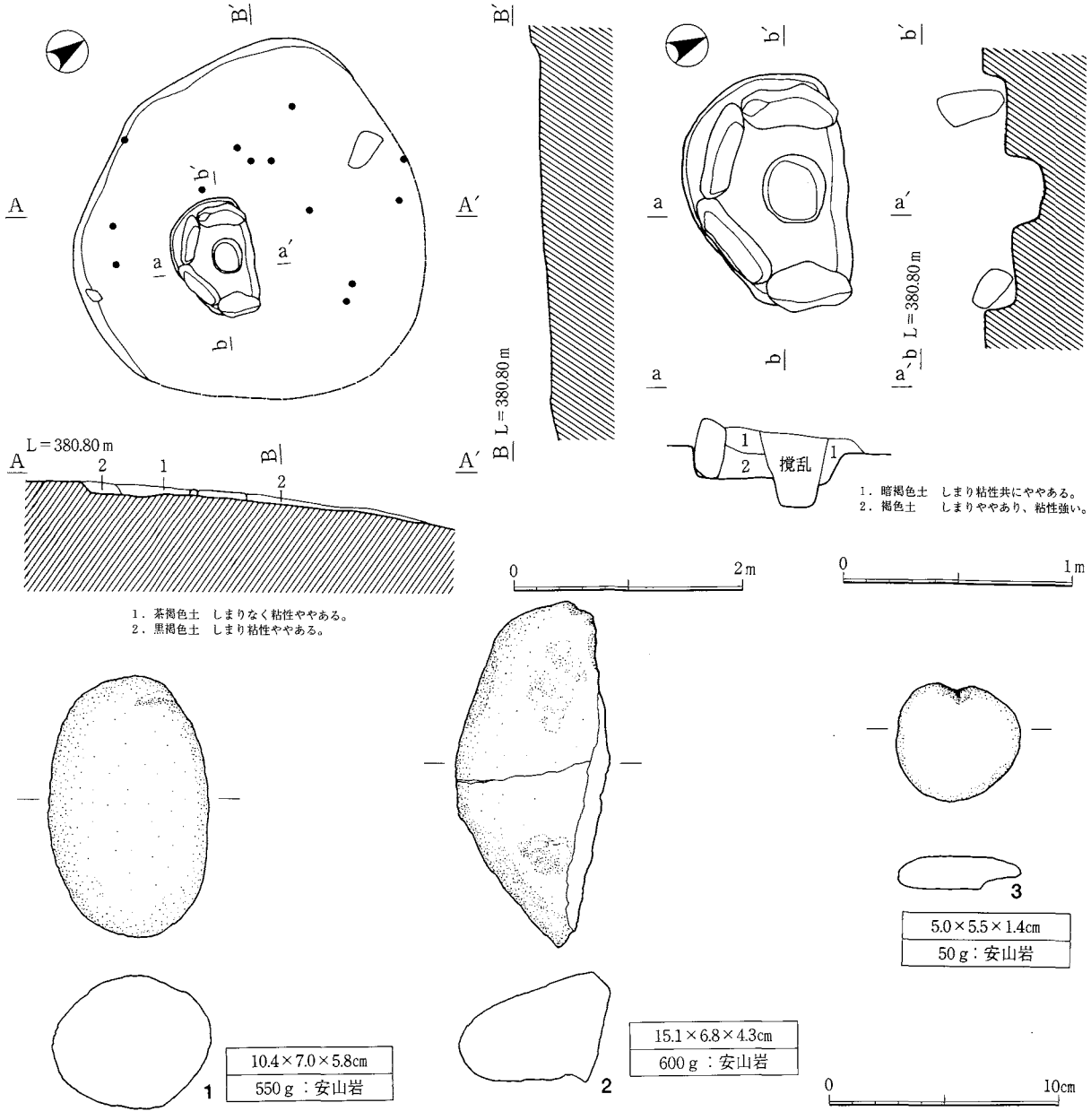
第31図　中央調査区遺構配置図

12号住居跡　（第32図、図版６・36）

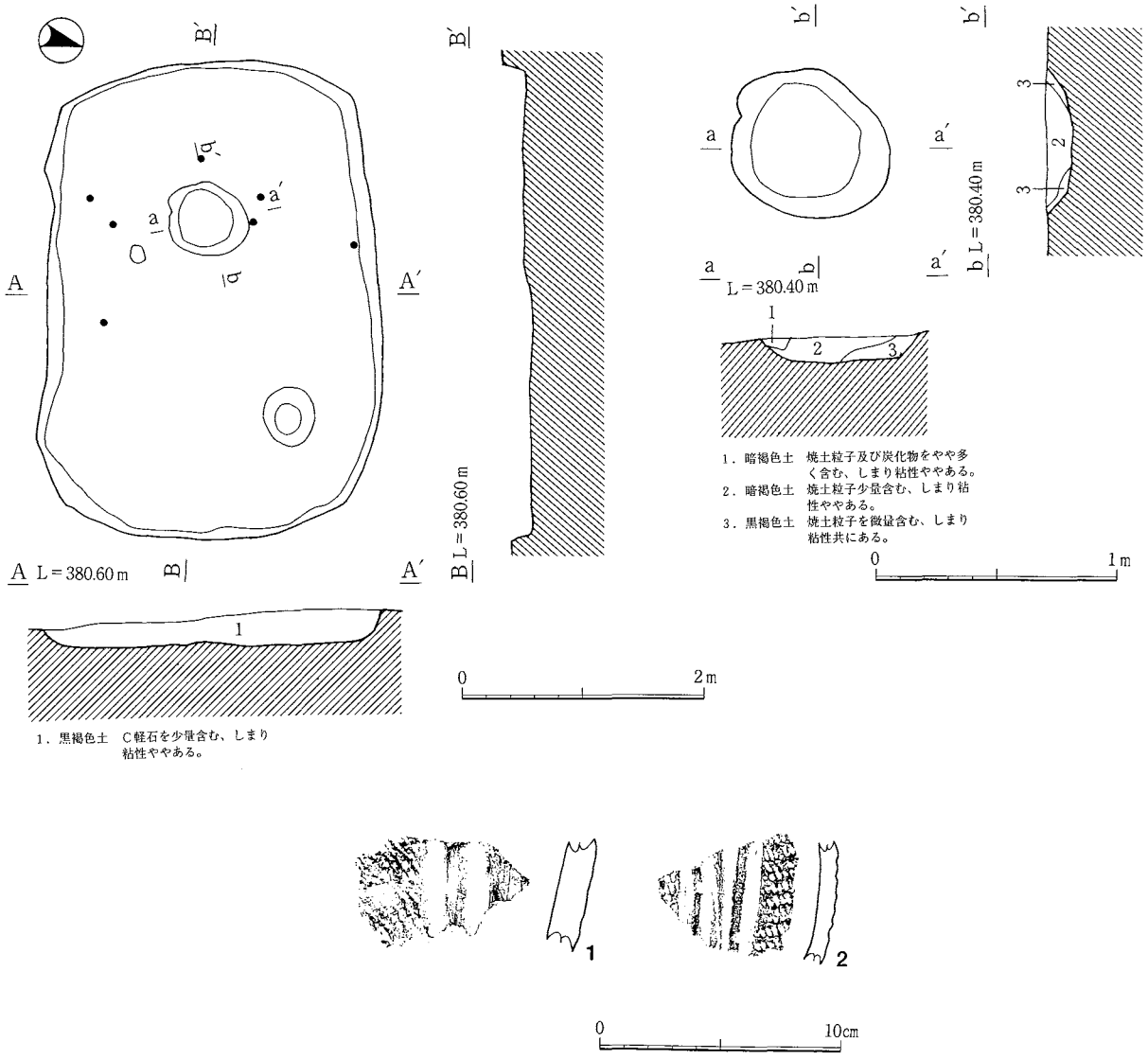
位　置／Ｌ－15グリッドに位置する。　形　態／不明、円形基調の可能性が高い。　規　模／遺存部で径3.20ｍ＋α、深さ10㎝を測る。　床　面／北～東方向に低くなり、全体に軟弱。　炉／石組炉が検出されている。炉石は北側を除いて長方形に組まれた安山岩礫４個が遺存し、規模は長軸1.04ｍ、短軸0.70ｍ、床面からの掘り込みは14㎝を測る。顕著な被熱痕・焼土は確認されなかった。　遺物出土状況／少量の中期土器細片が散在して出土している。

時　期／中期末と推測されるが、明確ではない。

12号住居跡出土遺物／図示出来る土器片はなく、覆土出土の石器３点を掲載した。いずれも安山岩で１は磨石、２は凹石、３は石錘と考えられる。



第32図　12号住居跡・出土遺物



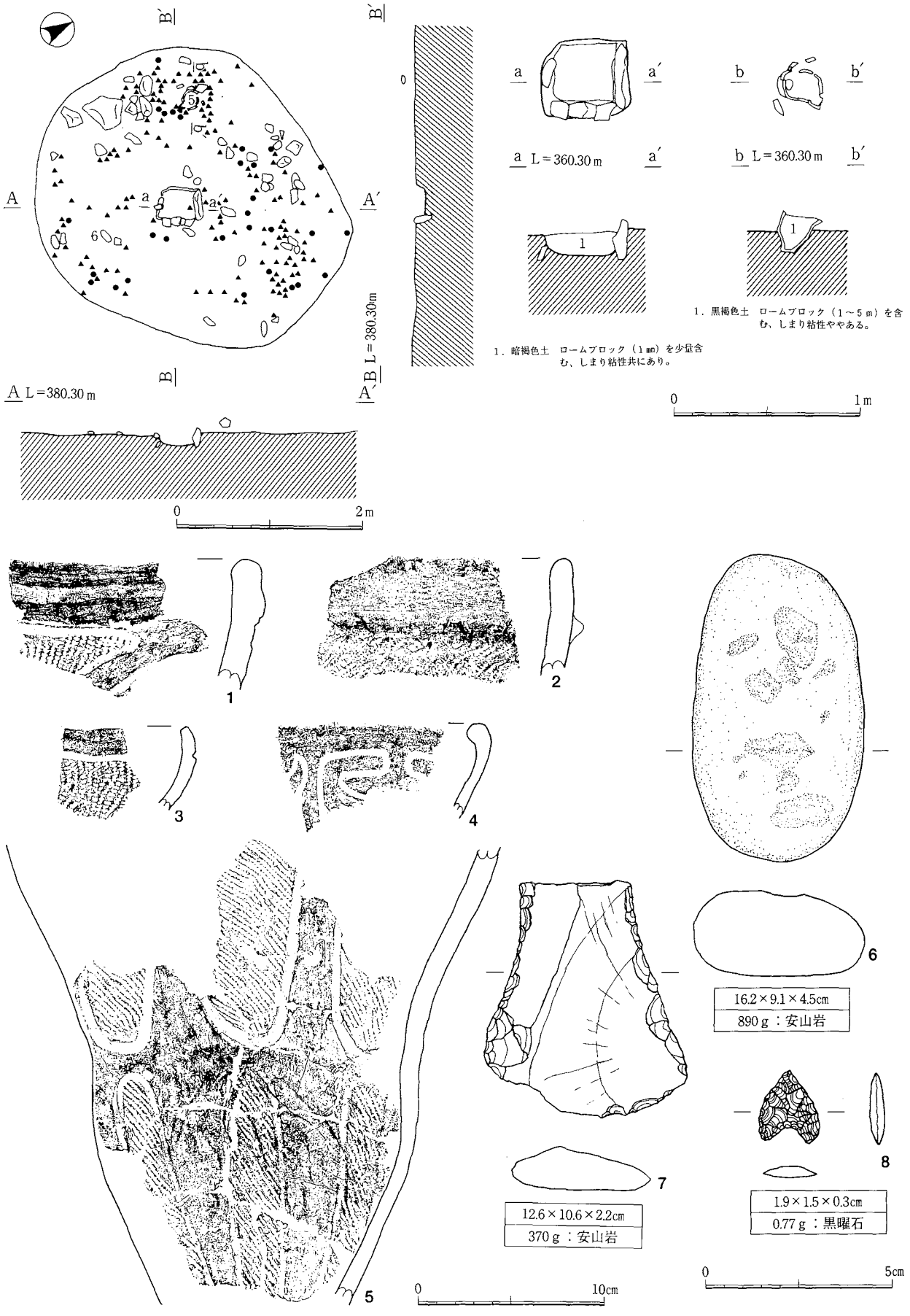
第33図　13号住居跡・出土遺物

13号住居跡　（第33図、図版６・36）

位　置／Ｉ－15・16グリッドに位置する。　形　態／隅丸長方形を呈する。　規　模／長軸3.98ｍ、短軸2.84ｍ、深さ30cmを測る。　床　面／全体に軟弱。　炉／中央西側から地床炉が検出されている。径60cm～70cm程度の円形を呈し、炭化粒・焼土粒を少量含んでいた。顕著な披熱痕は検出されなかった。　遺物出土状況／炉の周辺から少量の中期土器細片が散在して出土している。　柱　穴／明確な柱穴は検出されていない。北東コーナー部分からピット１基が検出されている。径50cm、深さ40cmを測る。

時　期／中期末。

出土遺物／１・２はともに胴部の破片で、地文に縄文が施文され、隆帯と沈線が施されている。色調褐色、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好。時期は加曽利Ｅ３～４式と考えられる。



第34図　17号住居跡・出土遺物

17号住居跡　（第34図、図版７・36）

位　置／Ｊ－15・16グリッドに位置する。　形態・規模／不明。石組炉を中心として土器片、石器、自然石が多量に出土し、遺物分布範囲を住居跡とした。遺物分布範囲は径約3.50ｍを測る。　炉／方形に組まれた石組炉が検出されている。安山岩礫で構築され、長軸48cm、短軸42cm、掘り込みは14cmを測る。顕著な披熱痕は検出されなかった。　埋設土器／炉の西側約１ｍの地点から加曽利Ｅ４式期の埋設土器が検出されている。　遺物出土状況／中期末～後期初頭の土器片、石器類が自然石に混在する状況で出土している。

時　期／中期末～後期初頭。

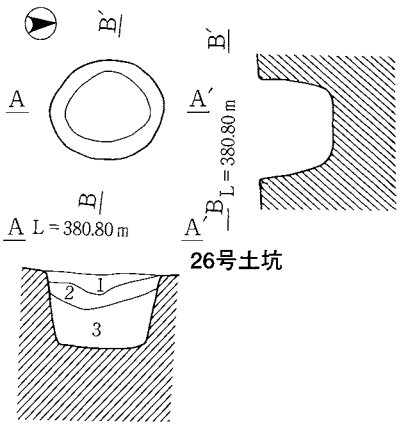
出土遺物／１～３は加曽利Ｅ４式の口縁部破片である。１は口縁部無文、胴部に沈線で区画された磨り消し縄文が施文されている。２は無文の口縁部と胴部の縄文帯を隆帯で分ける。３は無文の口縁部と胴部の縄文帯を沈線で分けている。４は沈線のみでＪ字文が描かれる称名寺式の口縁部片。５は加曽利Ｅ４式の埋設土器である。キャリパー形を呈し、括れ部を境として上下に沈線で区画されたＵ字もしくは楕円の磨り消し縄文が施文されている。６は安山岩の磨石兼凹石。７は基部側を欠損する安山岩の打製石斧。８は黒曜石の凹基無茎鏃である。

土　坑　（第36・36図、表－２、図版７・36・37）

土坑は９基が調査区北側に散在して検出されている。形態的には円形が主体を占め、35号土坑のみ不整楕円形を呈している。遺物は後期前半を主体として中期末土器片、磨石、棒状礫等が出土している。各土坑の特徴については一覧表にまとめて提示する。

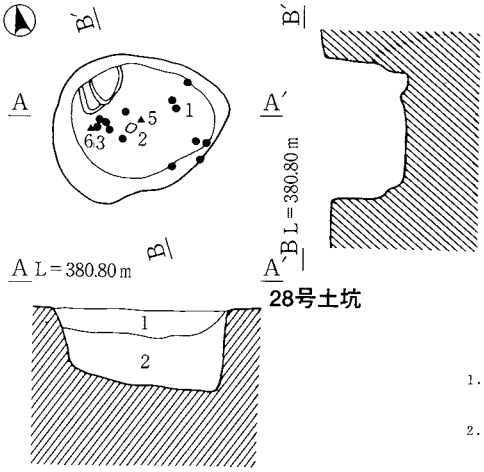
表－２　中央調査区土坑一覧表　　※23～25・27号土坑は西調査区　　(cm)

番号	位置(グリッド)	平面形状	断面形状	長軸	短軸	深さ	備　　考
26	Ｋ－14	円形	逆　台　形	90	78	60	中期末
28	Ｊ－15	不整円形	鍋　底　状	140	110	62	後期前半、磨石、凹石
29	Ｉ－15	円形	逆　台　形	50	46	42	
30	Ｉ－15	円形	鍋　底　状	52	50	28	
31	Ｈ－13	円形	凹　字　状	54	48	62	
32	Ｊ－14	円形	鍋　底　状	100	88	64	加曽利Ｂ２式粗製土器
33	Ｊ－13	円形？	鍋　底　状	130	60＋α	60	堀之内２、加曽利Ｂ１式、棒状礫
34	Ｊ－14	円形	Ｕ　字　状	70	62	70	堀之内２式
35	Ｋ－14	不整楕円形	凹　字　状	110	52	76	上部攪乱、中期末
36	欠　番						



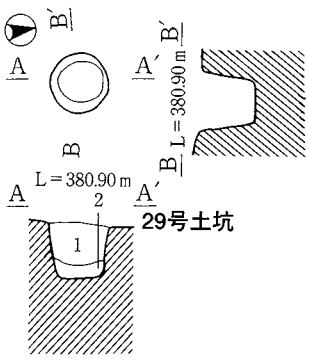
26号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ2㎜～5㎜）及びローム粒子、ＹＰ（φ2㎜～5㎜）を少量含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ2㎜～5㎜）及びローム粒子、ＹＰ（φ2㎜～10㎜）をやや多く含む、しまり良い。
3．暗褐色土　ロームブロック（φ2㎜～5㎜）及びローム粒子、ＹＰ（φ2㎜～10㎜）を多く含む、しまり良い。



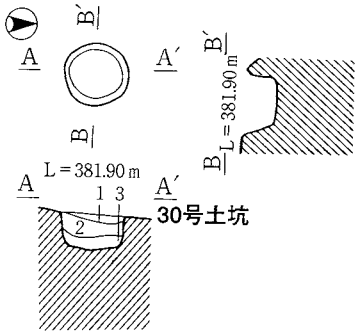
28号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2㎜～3㎜）を含む、しまり良い炭化材を多く含む。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ2～10㎜）及びＹＰ（2㎜～5㎜）を含む、しまり良い炭化材を含む。



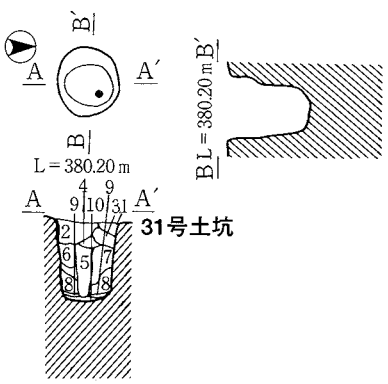
29号土坑

1．暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック（φ2㎜～5㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を少量含む、しまり良い。



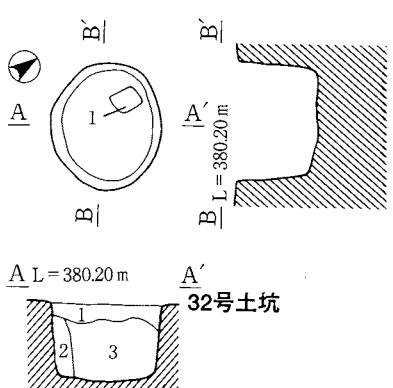
30号土坑

1．ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を少量含む、しまり良い。
2．ローム粒子　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を含む、しまり良い。
3．黒褐色土　ロームブロック（φ2～10㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を少量含む、しまり良い（地山）。



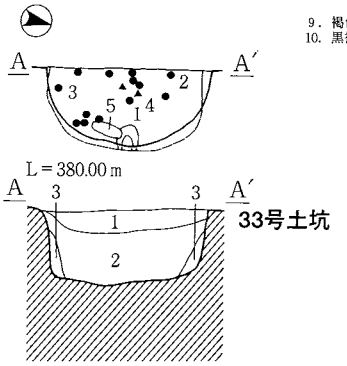
31号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を含む、しまりやや有る。
3．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）多量のローム粒を含む、しまりやや良い。
4．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）及びローム粒を含む、しまりやや良い。
5．暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2～3㎜）を含む、しまり良い。
6．暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2～10㎜）を多量に含む、しまりやや有る。
7．暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2～10㎜）をやや多く含む、しまりやや有る。
8．暗褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）及びＹＰ（φ7～10㎜）を含み、多量のローム粒を含む、しまりやや有る。
9．褐色土　ローム貼り底。
10．黒褐色土　ロームブロック（φ2～3㎜）を少量含む、しまり強。



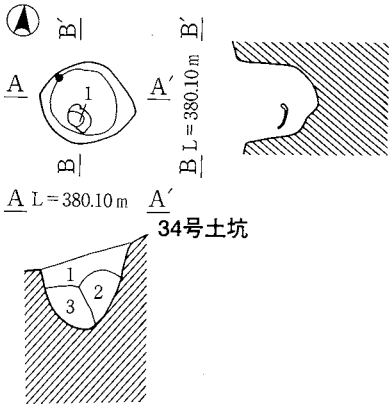
32号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2～10㎜）を多く含む、しまり良い、炭化材を少量含む。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ2～10㎜）及びＹＰ（φ2～5㎜）を多く含む、しまり良い、炭化材を少量含む。（埋め戻し土？）
3．暗褐色土　ロームブロック（φ2～20㎜）及びＹＰ（2～20㎜）を多量に含む、しまり良い、炭化材をやや多く含む。（埋め戻し土？）



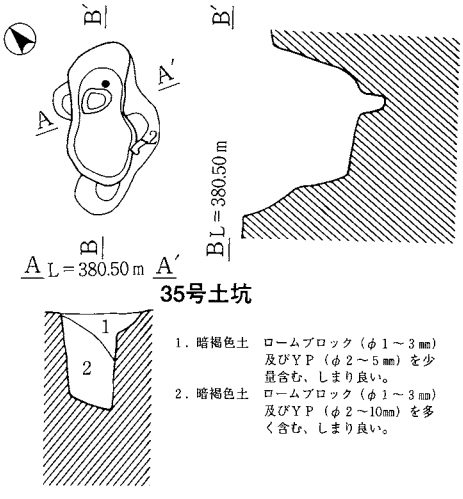
33号土坑

1．黒褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を少量含む、しまり粘性ややある。
2．黒褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を含む、しまり良く粘性ややある。
3．暗褐色土　ロームブロック（1～10㎜）を含む、しまりややあり、粘性ある。



34号土坑

1．暗褐色土　ＹＰ（1～10㎜）を少量含む、しまり粘性ややある。
2．暗褐色土　ＹＰ（1～10㎜）をやや多く含む、しまり粘性ややある。
3．黒褐色土　ＹＰ（1～5㎜）を含む、しまり良く粘性ややある。

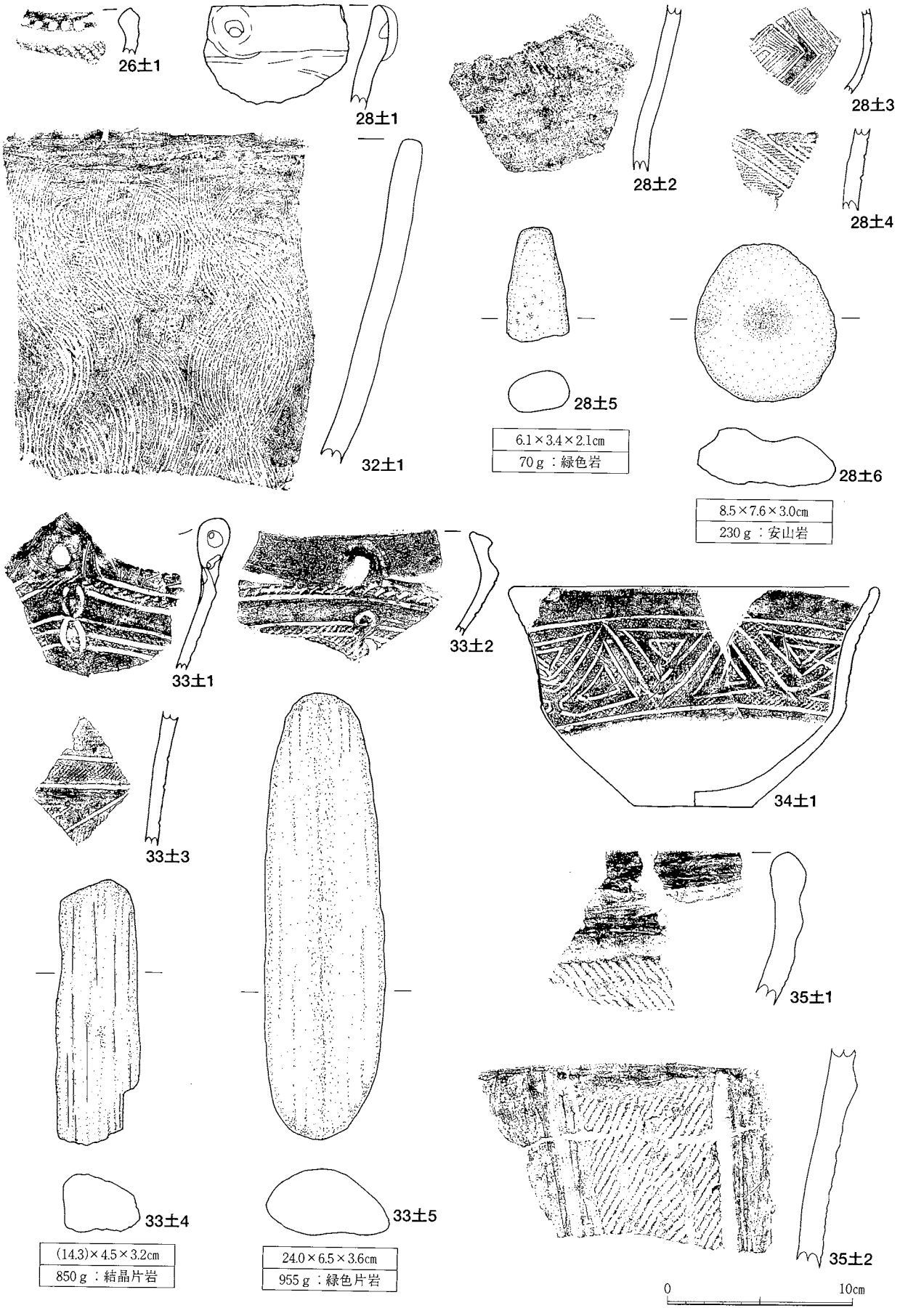


35号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ1～3㎜）及びＹＰ（φ2～5㎜）を少量含む、しまり良い。
2．暗褐色土　ロームブロック（φ1～3㎜）及びＹＰ（φ2～10㎜）を多く含む、しまり良い。

0　2m

第35図　中央調査区土坑



第36図　中央調査区土坑出土遺物

土坑出土遺物　（第36図、図版36・37）

26号土坑－1は口縁部の小破片で口唇部にD字刺突文が施文され、口縁の無文部以下に単節斜縄文が施文されている。時期は中期末と考えられる。28号土坑－1は貼り付けの口縁部に円形刺突が加えられる。時期は加曽利B1式と考えられる。2は無文の胴部破片、3・4は沈線による幾何学状の文様が描かれる堀之内2式の胴部破片である。3の区画内部は櫛状工具の細沈線、4の区画内部は細縄文が施文されている。5は緑色岩の小形磨製石斧。6は安山岩の磨石兼凹石である。32号土坑－1は口縁部の大形破片で加曽利B2式の粗製土器と考えられる。胴部全面に櫛状工具による弧線が縦方向に重複して施されている。33号土坑－1は加曽利B1式の3単位把手深鉢の把手部分で、沈線で区画された横位の縄文帯と無文帯が組み合わされ、把手部下に対弧文が施されている。2も基本的に1と同様の手法で文様が構成され、無文の口縁部に円形の刺突、横位の刻みと沈線で無文帯・縄文帯が分けられている。無文帯・縄文帯の区切り文は「の」の字状＋対弧文が施文されている。3は堀之内2式の胴部破片で沈線による幾何学状の文様が描かれ、区画内に細縄文が施文される。4・5は片岩類の棒状礫である。34号土坑－1は口縁～胴部の3分の1を欠損する堀之内2式の鉢形土器で、器高12㎝、口径19.8㎝、底径6.5㎝を測る。口縁～胴部上位に沈線で区画された幾何学状の三角連続文が帯状に施文され、区画内は細縄文が施文される。胴部下位は無文になっている。色調は黒色を呈し、焼成は概良好。35号土坑－1は口縁部の破片で口縁部無文、縄文が施文される胴部とは太い沈線で区切られている。2は胴部の破片で口縁とは太い沈線で区切られ、沈線で区画された磨り消し縄文が施文されている。1・2ともに中期末の所産と考えられる。

集　石　（第37・38図、図版7・37）

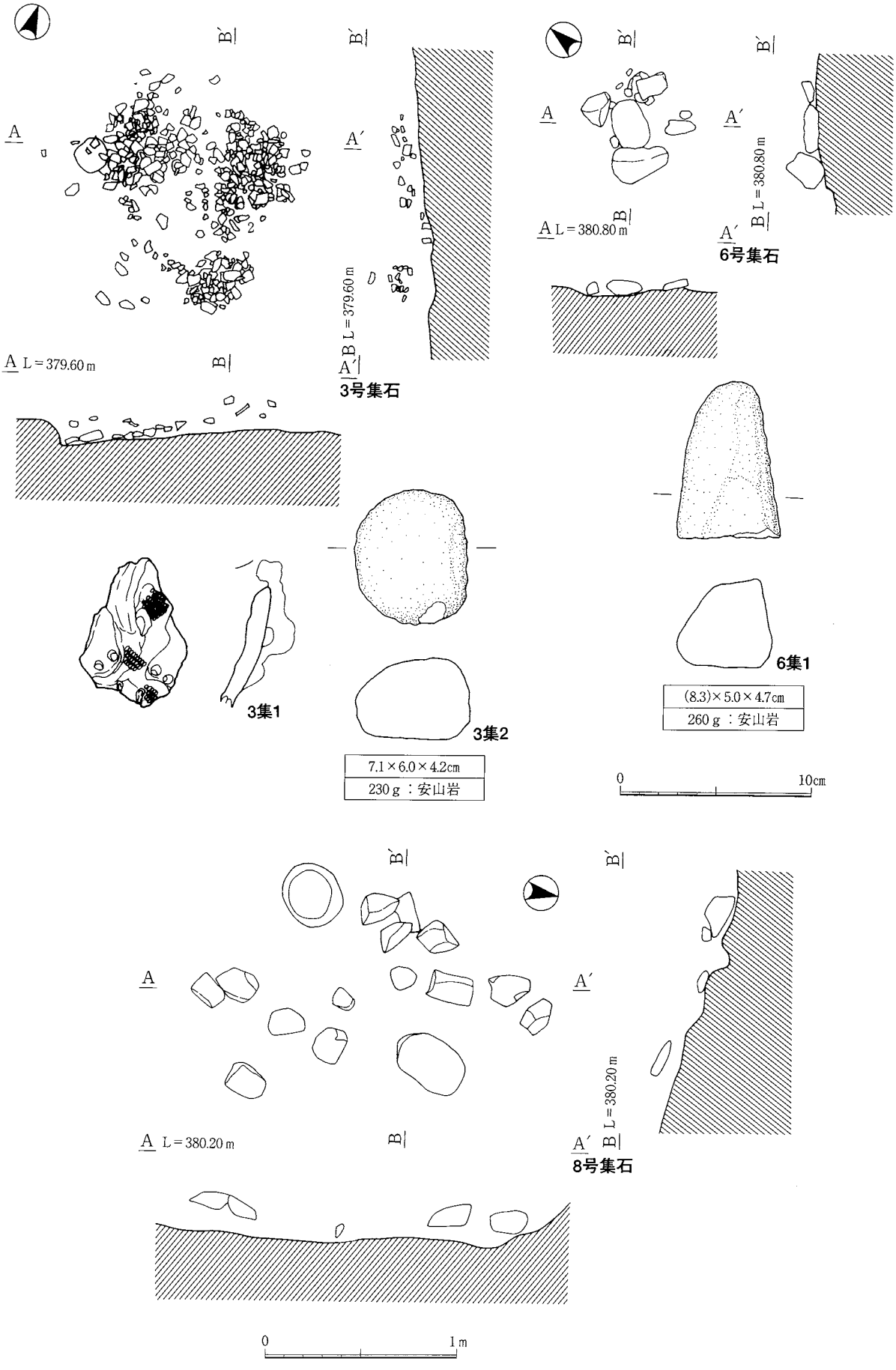
中央調査区では集石4基（3・6・7・8号）が検出されている。この内、大量の小石を集めた状況の3号集石のみ意図的な集石として捉えられ、安山岩礫が散在気味に集中する形態の6・7・8号集石は周辺の状況から集石と判断したものである。尚、4号集石は形態的に敷石遺構に分類して報告し、5号集石は遺構と判断されなかった為、欠番とした。

遺物は3号集石から後期前半と思われる土器の把手部分と安山岩の磨石、6号集石から安山岩の磨石兼敲石が出土し、7号集石からは、頸部部分に押圧を加えた隆帯が貼り付けられる堀之内式の粗製土器口縁部片、磨石兼凹石、大形の石皿が出土している。

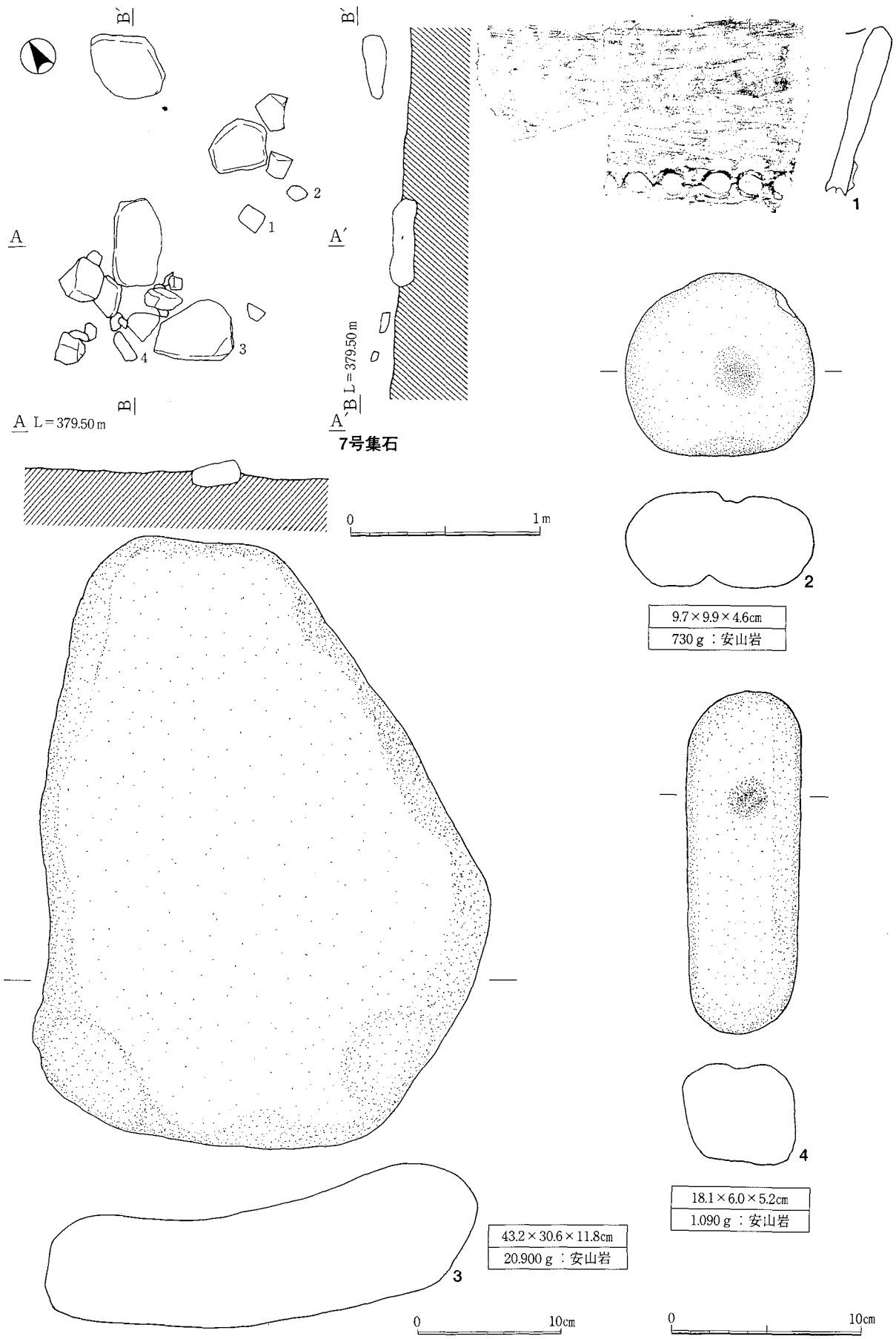
3号集石　位　置／L－16グリッド北西端部　　形　態／拳大以下の石が3ヶ所に集中し、円形を呈する。
6号集石　位　置／K－14グリッド南側　　形　態／5個の石と小石数個が集石されている。
7号集石　位　置／H－15グリッド　　形　態／15個の石が散在気味に集石される。
8号集石　位　置／J－14グリッド　　形　態／2ヶ所に石が集中して検出されている。

配　石　（第39図、図版7）

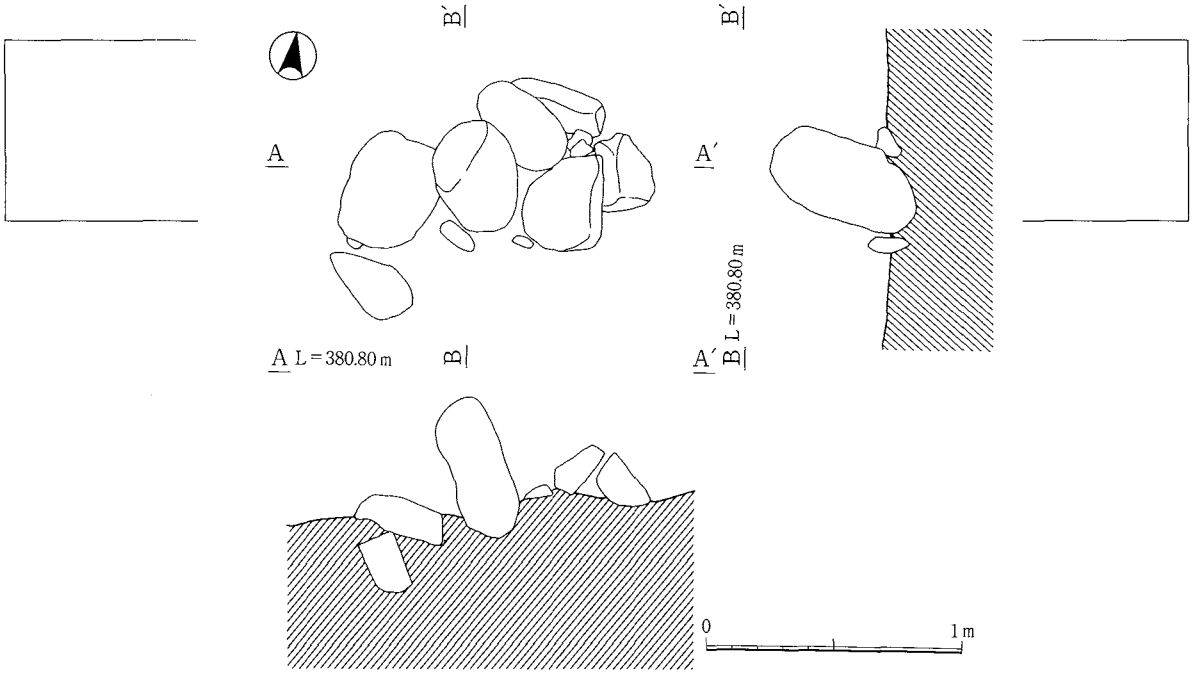
配石としたものは1号配石1基のみであった。J－16グリッド中央北側から検出され、安山岩の立石を中心として6個の石と小石が周囲に配されている。配石下及び周辺からの掘り込みは検出されなかった。時期的には周辺から中期末～後期前半の遺物が出土しており、該期の所産の可能性が高く、西調査区から検出された配石遺構との関連も考えられよう。尚、立石下の土を採取し、リン・カルシウム分析を実施したが、明確な違いは検出されなかった。詳細は自然科学分析編を参照されたい。



第37図　3・6・8号集石・出土遺物



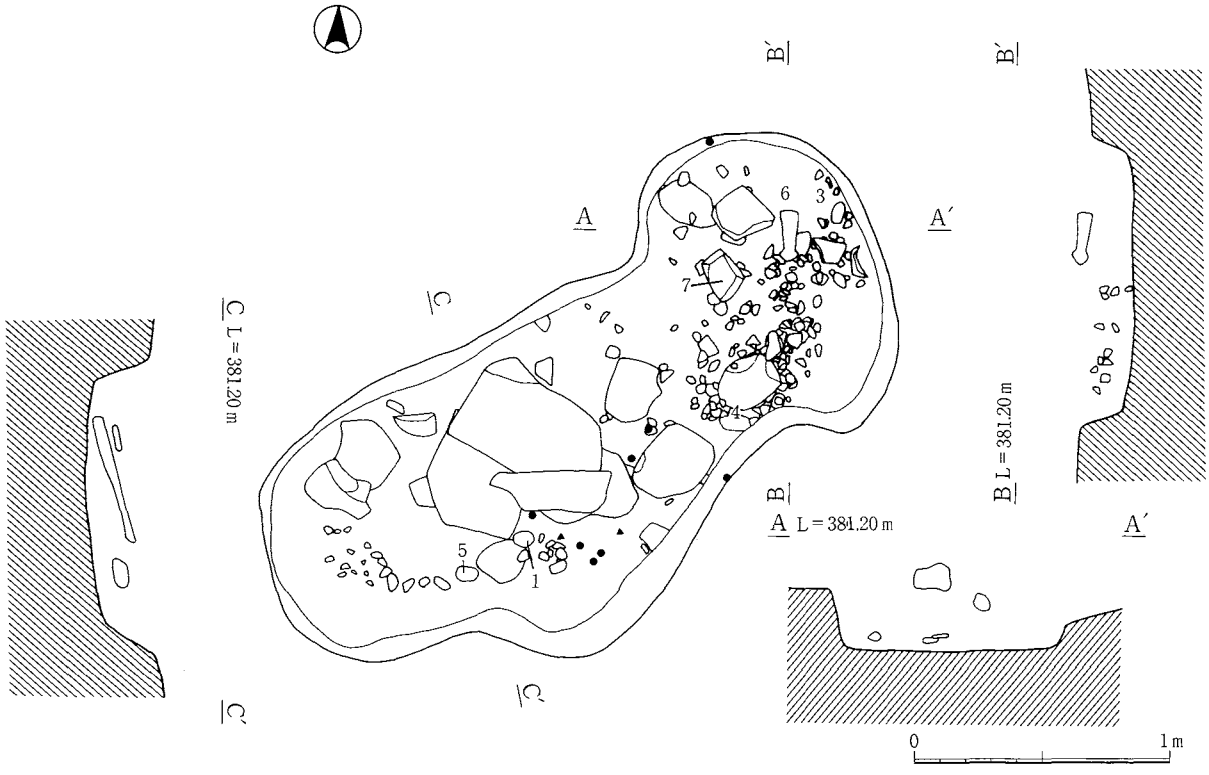
第38図　7号集石・出土遺物



第39図　1号配石

敷石遺構　（第40・41図、図版7・8・37）

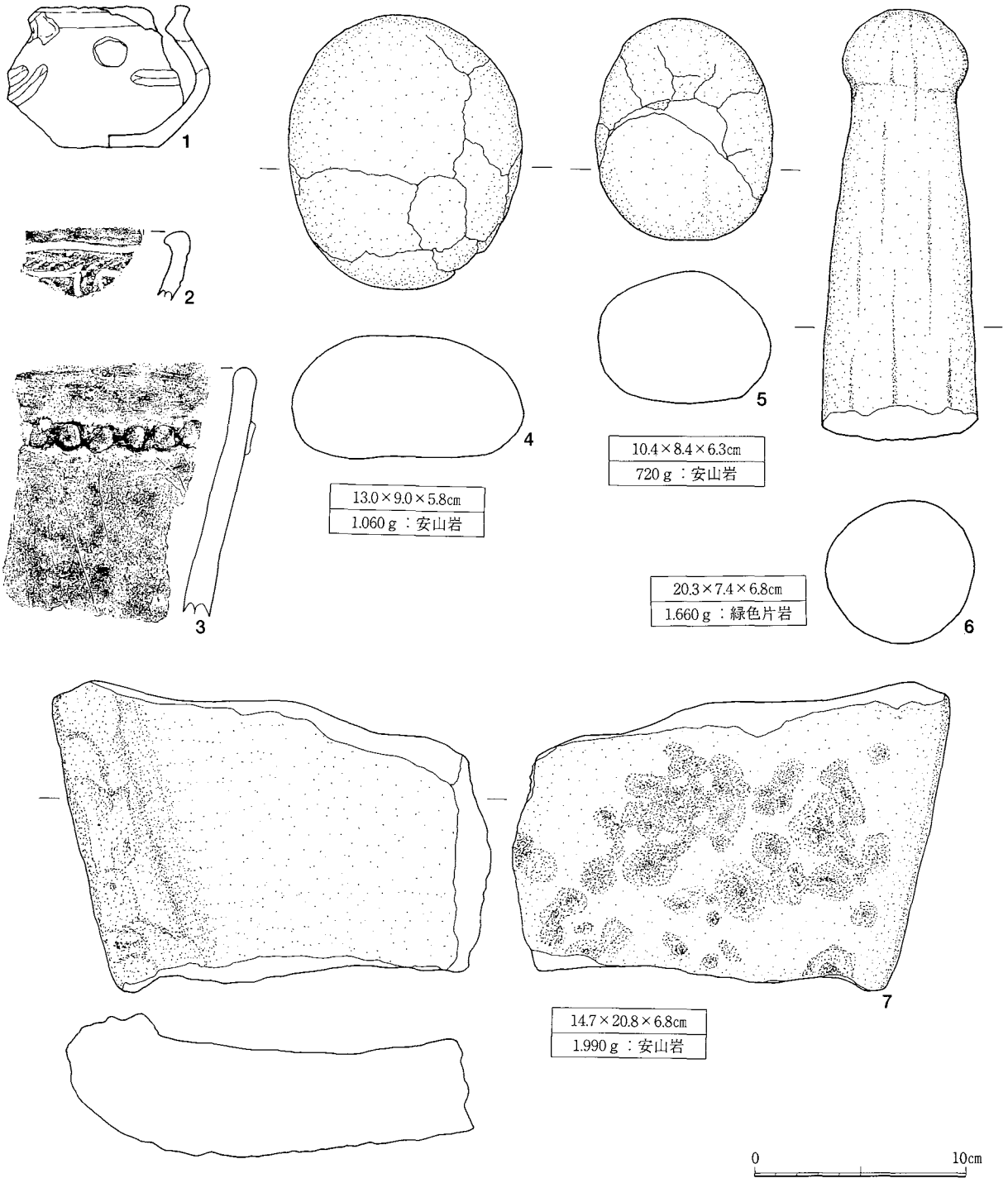
L－14グリッドから2号敷石遺構1基のみ検出されている。形態は北東側が膨らむ松茸状を呈し、括れ部から北東に小石が集石され、南西には板状礫が敷かれている。規模は長軸2.80m＋α、短軸1.30m、抉れ部分0.90m、深さ24cmを測り、南西調査区外に遺構が延びる可能性がある。遺物は小形注口土器、堀之内式粗製土器片等と覆土上層から石棒が出土し、出土遺物から堀之内式期の所産と考えられる。



第40図　2号敷石遺構

2号敷石遺構出土遺物　（第41図、図版37）

1は板状礫が敷かれた部分から出土した小形の注口土器である。器形は算盤玉状を呈し、胴部に粘土紐の貼り付けが施される。色調黄白色、胎土は緻密で焼成は良好。2は沈線で文様が描かれ、沈線内に細縄文が施文される口縁部の破片で堀之内式と考えられる。3は頸部部分に押圧が加えられた隆帯が貼り付けられる堀之内式の粗製土器口縁部である。内外面ともよく磨かれ、焼成は非常に良好。4・5は安山岩の磨石。6は覆土上層から出土した緑色片岩の石棒。7は安山岩の石皿破片で裏面は多孔石になっている。



第41図　敷石遺構出土遺物

屋外埋設土器　（第42・43図、図版８・38）

中央調査区からは５基の屋外埋設土器が散在して検出されている。４号埋設土器のみ逆位に埋設され、他の４基は正位に埋設されていた。

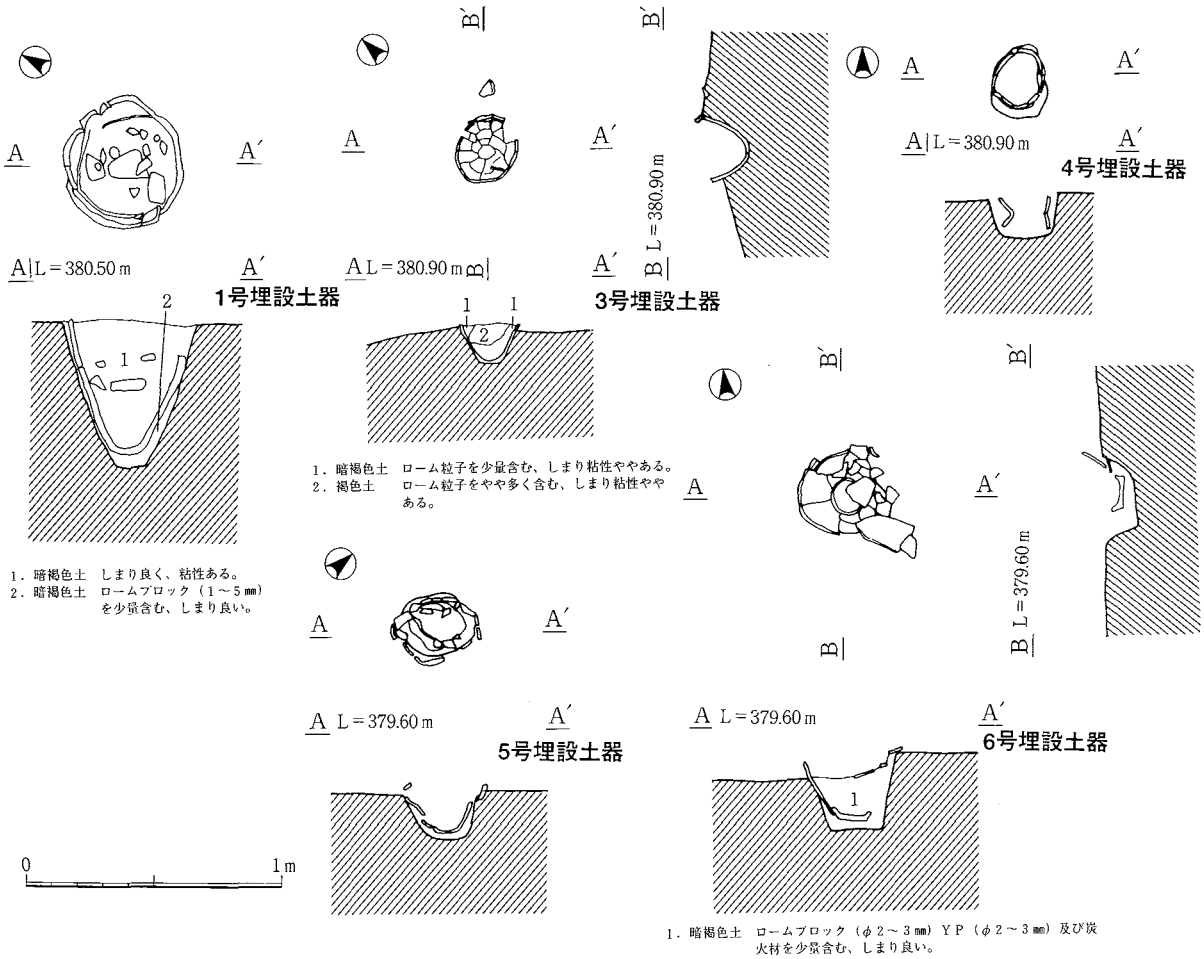
１号埋設土器／Ｋ－14グリッドから検出された口縁部を欠損する大形の深鉢で、残高55㎝、最大径50㎝を測る。微隆帯で区画されたＵ字状の磨り消し縄文が施文される。加曽利Ｅ４式。

３号埋設土器／Ｍ－17グリッドから検出された上半部を欠損する無文の深鉢で、色調黄白色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好。器形・胎土から堀之内式と考えられる。

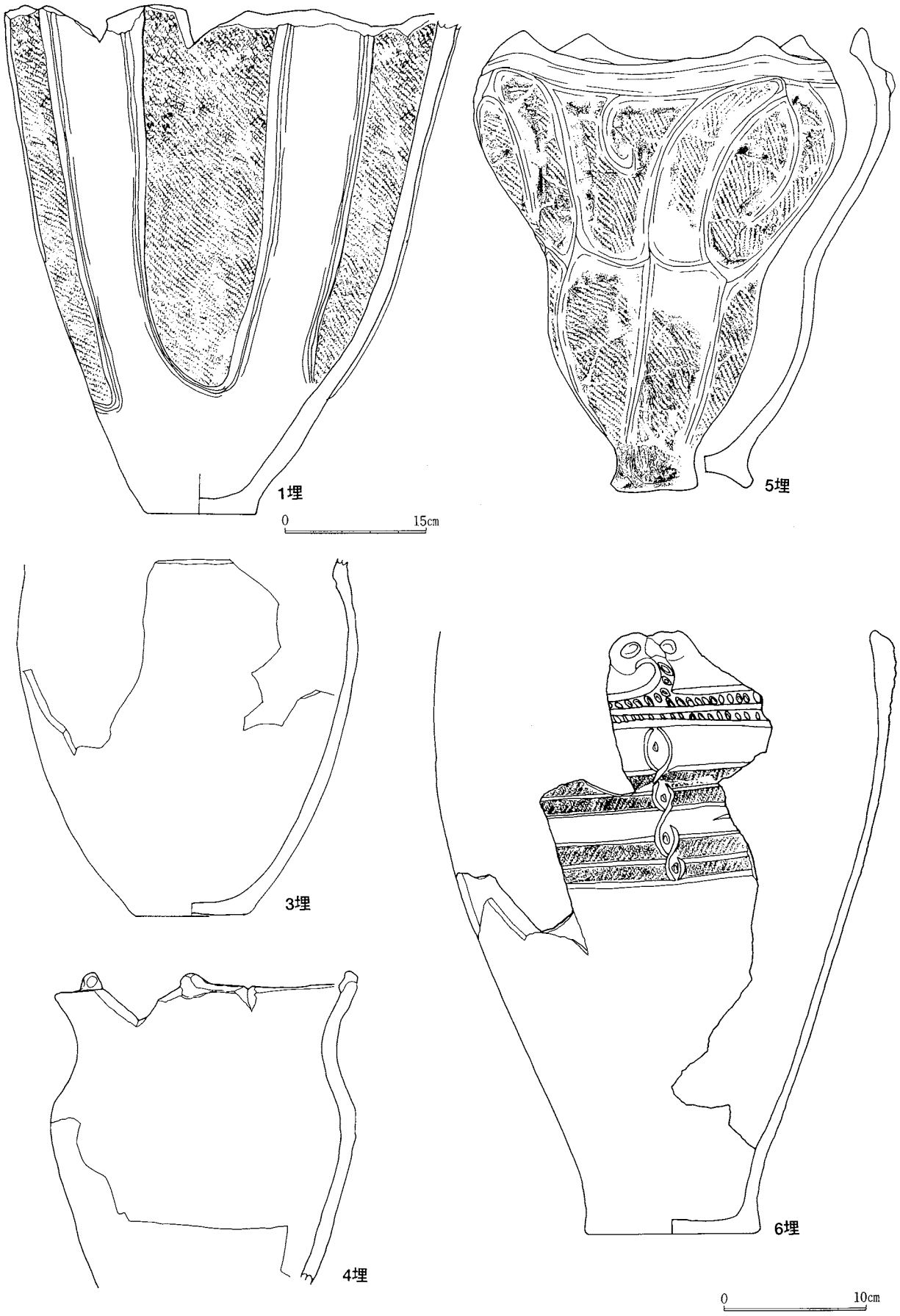
４号埋設土器／Ｌ－14グリッドから検出された頸部が括れる無文の深鉢で、口縁に３単位の突起が付されている。堀之内式。

５号埋設土器／Ｋ－16グリッドから検出されたほぼ完形の深鉢で、器高33㎝を測る。４単位の小波状口縁を呈するキャリパー形の深鉢で底部は小さく上げ底になっている。文様は地文に単節縄文が施文され、曲線の微隆帯で文様が構成される。加曽利Ｅ３式。

６号埋設土器／Ｋ－16グリッドから検出された口縁の一部を欠損する深鉢で、器高43㎝を測る。口縁に突起が付されて小波状を呈し、文様は上半部のみ施文され、横位の沈線で文様帯が分けられている。突起部から連続する刻みが２列施され、その下には無文帯と２列の縄文帯が交互に廻り、突起部の下には縦に連続する対弧状文の中央に円形刺突が加えられている。加曽利Ｂ２式。



第42図　中央調査区埋設土器



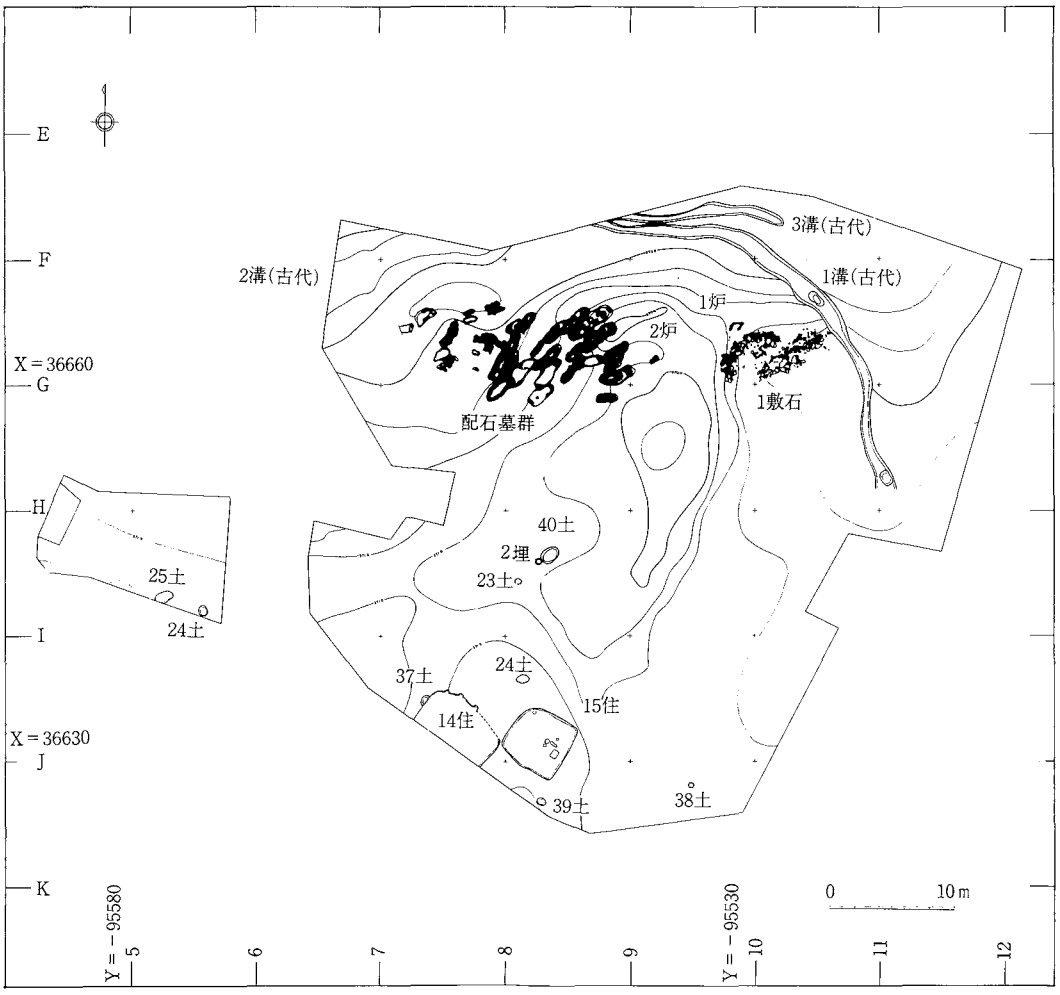
第43図　1・3～6号埋設土器

西調査区

窪地状を呈する西調査区は、北側に宅地が残されていた為、南側と北側に分割して調査を実施した。先行して調査を実施した南側からは後期中葉～後半の住居跡２軒が検出され、北側からは後期中葉を主体として形成された配石遺構が検出されている。その他、後期初頭～中葉の土坑８基が全体に散在する形で検出され、調査区中央の窪地部分からは後期後半高井東式の埋設土器１基（３個体）が検出されている。

遺物は、配石遺構を覆う包含層から大量に出土し、本遺跡全体の出土量（遺物整理箱320箱）の３分の２以上を占めている。土器では堀ノ内式、加曽利Ｂ式、高井東式を主体として加曽利Ｅ４式・称名寺式・曽谷式・安行Ⅰ式等の中期末～後期後半に至るものが出土し、土偶、脚付石皿形土製品、耳栓、ミニチュア土器等の土製品、石斧、石剣、石錐、石鏃、石匙、磨石、石皿、凹石、石棒、丸石、多孔石、石錘、軽石製品、砥石等の石器類と微量の骨片も検出されている。

調査区北側から検出された配石遺構は弧状配石、集石、立石、組石、炉、敷石遺構等で形成される上部配石と、配石墓28基、土坑墓３基の下部配石で構成されている。尚、本調査区内において配石墓、土坑のリン・カルシウム分析、脂肪酸分析、基本堆積土層の土壌分析、花粉分析、珪藻分析、テフラ分析、プラント・オパール分析、^{14}C年代測定等を実施している。詳細については自然科学分析編を参照されたい。



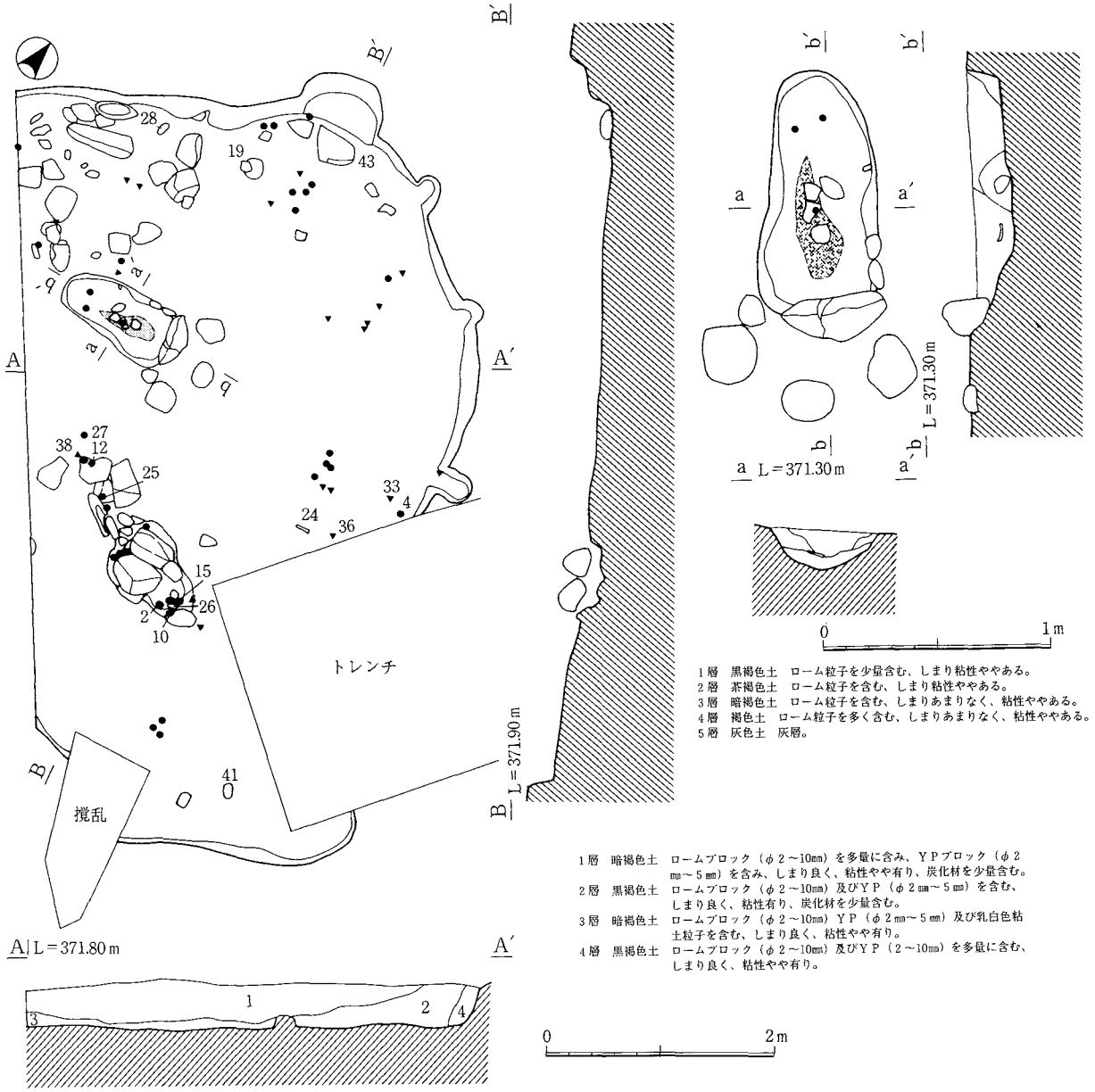
第44図　西調査区遺構配置図

住居跡

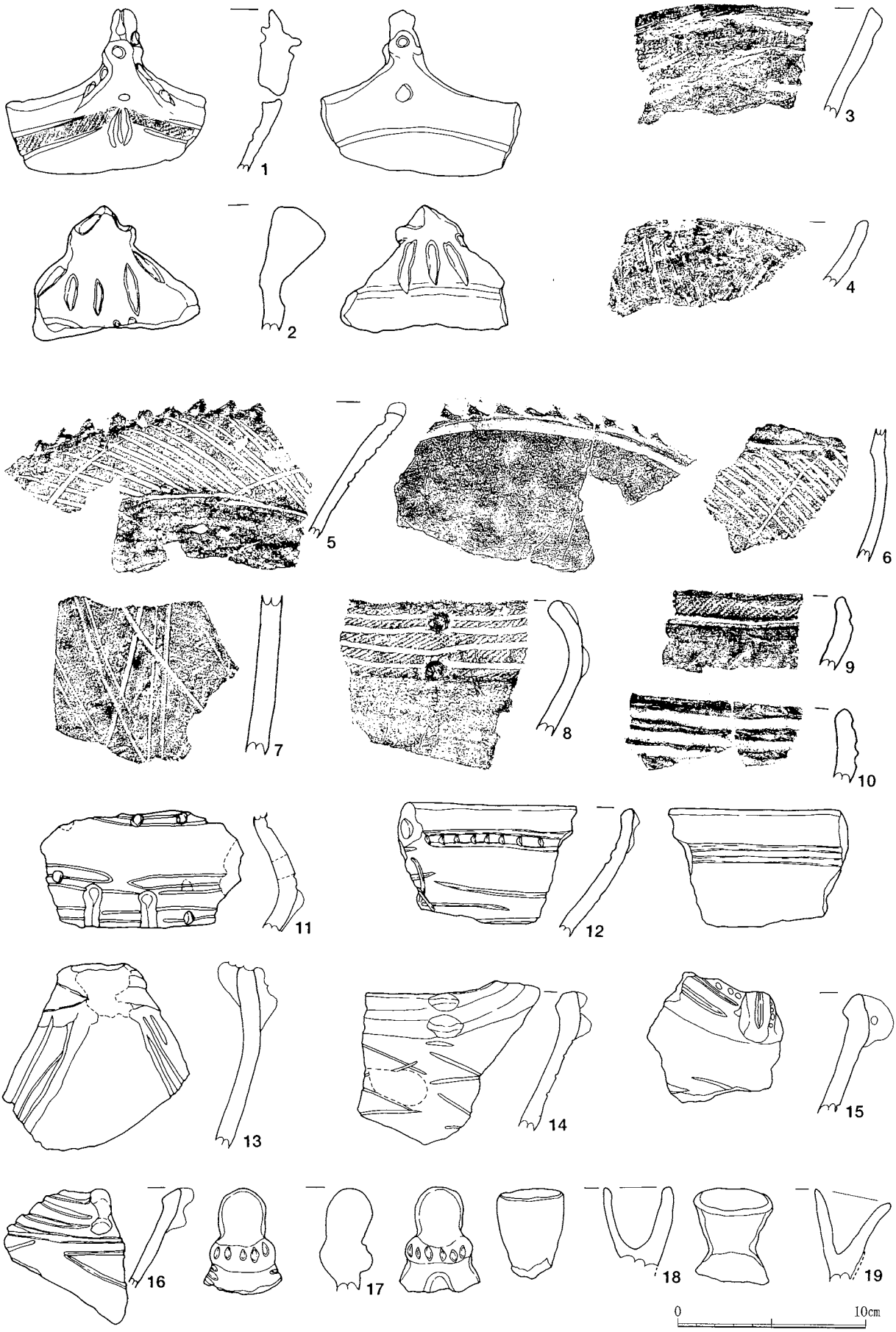
西調査区からは平成元年度調査において、調査区南端部から後期中葉の住居跡２軒が検出されている。西調査区の北側に展開する配石遺構・配石墓群とほぼ同時期の所産であり、墓域に伴う集落の一部である可能性が高い。

14号住居跡　（第45～49図、図版９・39・40）

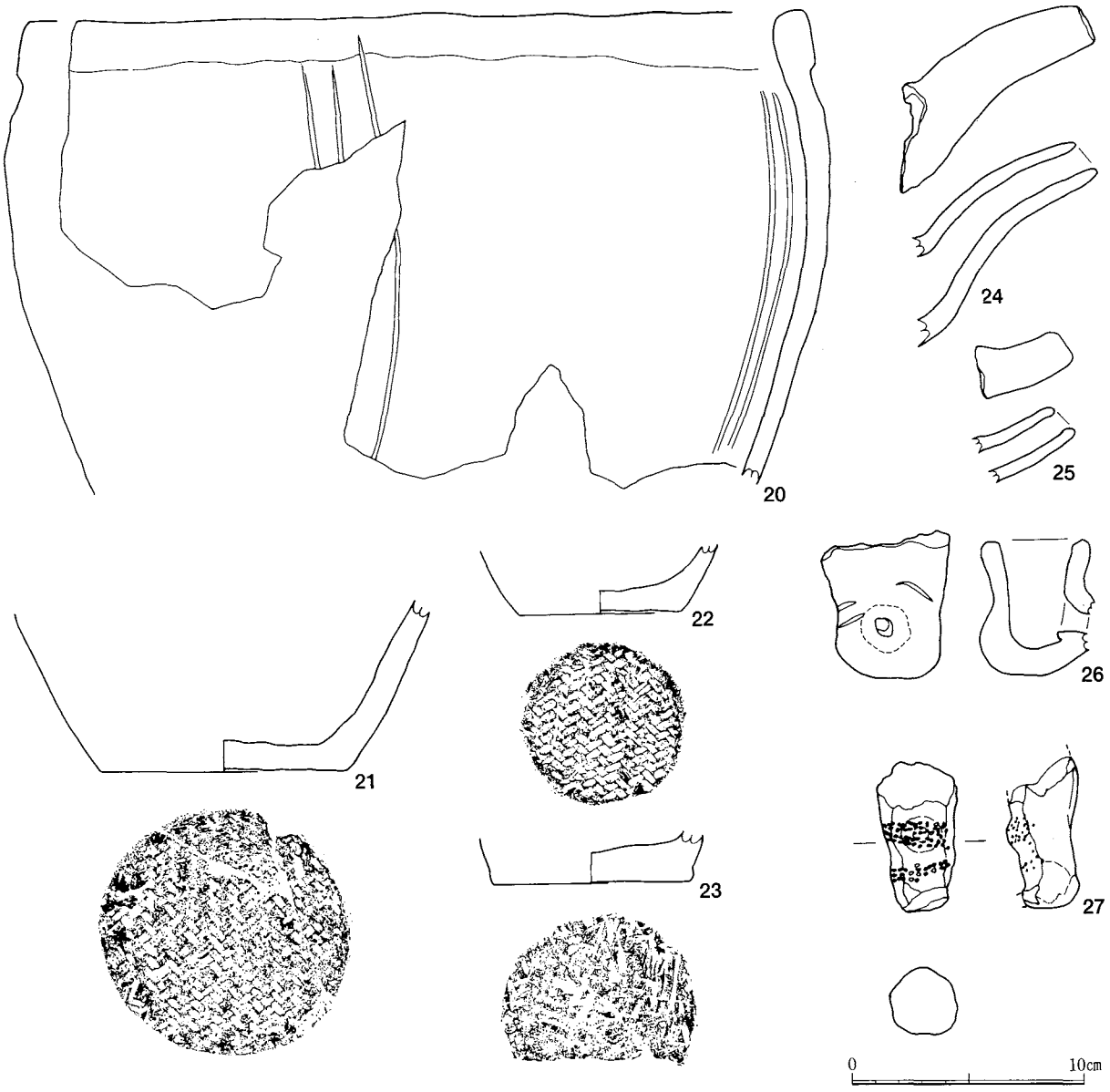
位　置／Ｉ－７グリッドに位置し、南側は調査区外になっている。　形　態／隅丸方形基調と推測されるが、明確ではない。　規　模／調査範囲での最大長6.50ｍ、深さは40㎝を測る。　炉／中央部北西から検出されている。東西に長い長楕円形に掘り込まれ、東端部に炉石一個が配されている。規模は長軸1.10ｍ、短軸0.50ｍ、深さ18㎝を測る。　床　面／凹凸があるが比較的硬質であった。　柱穴・壁溝／なし。　遺物出土状況／加曽利Ｂ２・３式、高井東式の土器片、土偶脚部、小形注口土器等が出土し、磨石、凹石、敲石、有溝砥石、石斧、石鏃、石錐、石皿等の石器類が多量の礫に混在して出土している。　時　期／加曽利Ｂ２・３式期。　備　考／出土遺物から住居内の礫は高井東式期の配石の可能性が考えられる。



第45図　14号住居跡



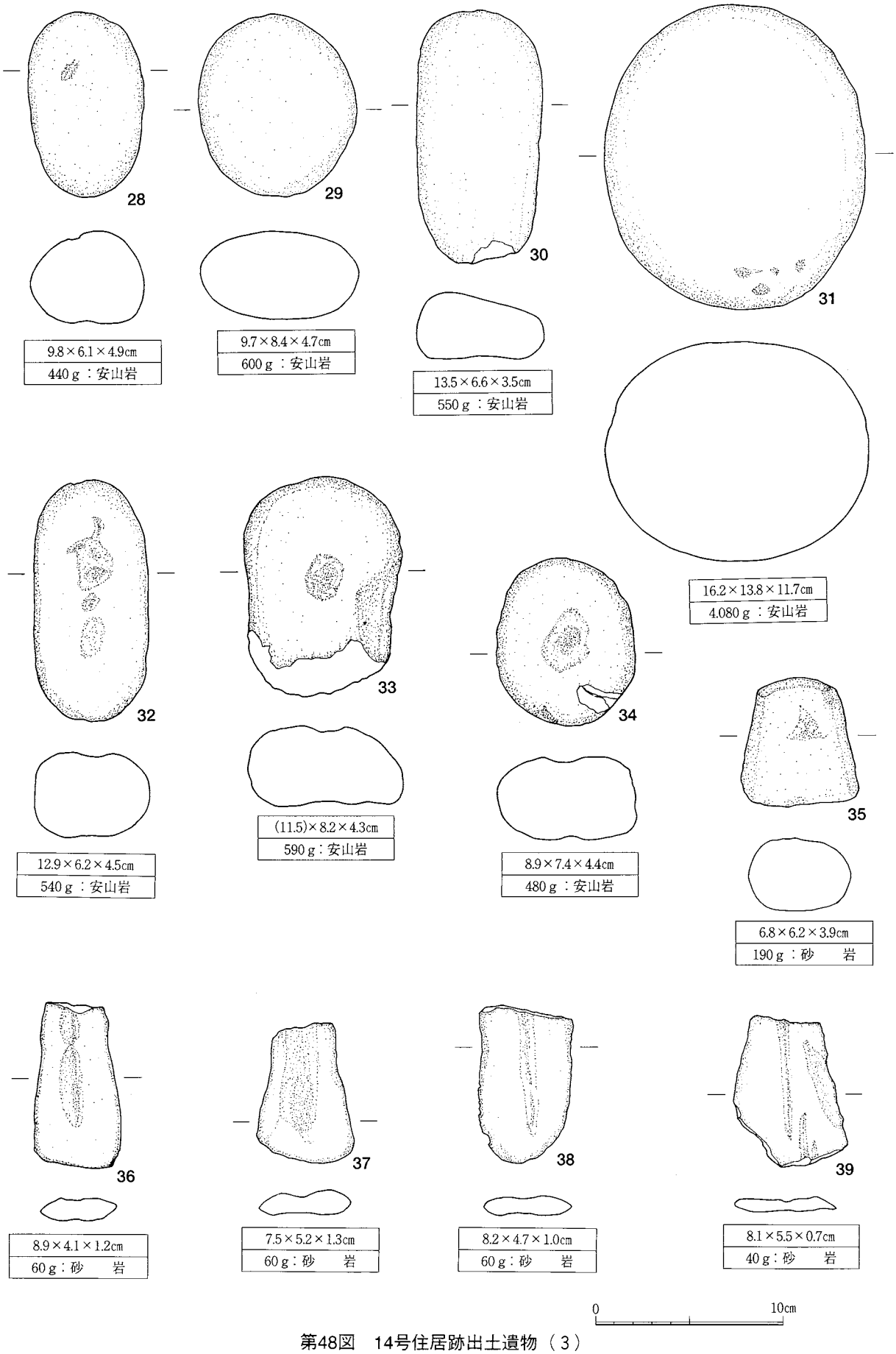
第46図　14号住居跡出土遺物（1）



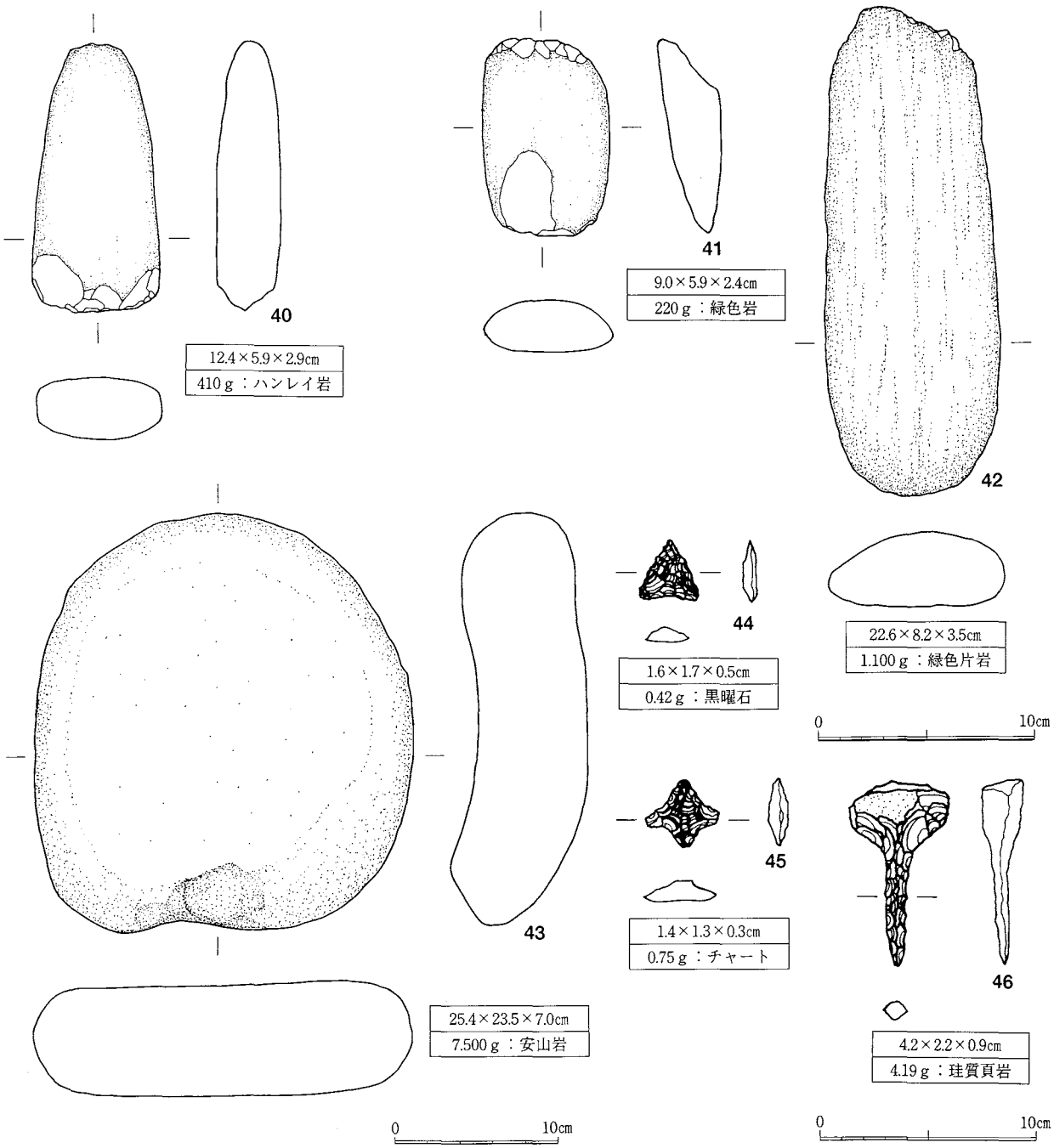
第47図　14号住居跡出土遺物（２）

14号住居跡出土遺物（土器）

１・２は加曽利Ｂ２式の３単位把手深鉢把手部分。３・４は無文の口縁部片。５は斜方向の沈線が引かれる加曽利Ｂ２～３式の口縁部。６・７は斜方向の沈線のみ引かれる加曽利Ｂ２～３式の胴部片である。８～10は加曽利Ｂ３～高井東式の口縁部片と考えられる。11は注口土器の胴部破片。12は高井東式の平口縁深鉢口縁部と考えられる。13～19は高井東式の大波状口縁深鉢口縁部である。13は先端部を欠損する波頂部。14～16は波底部でいずれも胴部に斜方向の沈線が引かれ、14・15は口縁波底部分に貼り瘤状の突起、16は橋状の突起が付されている。17～19は波頂部に付される突起部分で17は楕円形と突起下部に刻みが施される膨らみを持ち、18・19はコップ状を呈している。20は折り返し気味に肥厚する口縁を有し、胴部に３本一組の沈線のみ垂下する粗製土器の大破片。21～23は網代痕が観察される底部。24・25は注口土器の注口部分。26は注口部分を欠損する小形注口土器。27は土偶の脚部である。膝部分を瘤状の高まりで表現し、細かい刺突が膝部分とその下部に施されている。



第48図　14号住居跡出土遺物（３）



第49図　14号住居跡出土遺物（4）

14号住居跡出土遺物（石器）

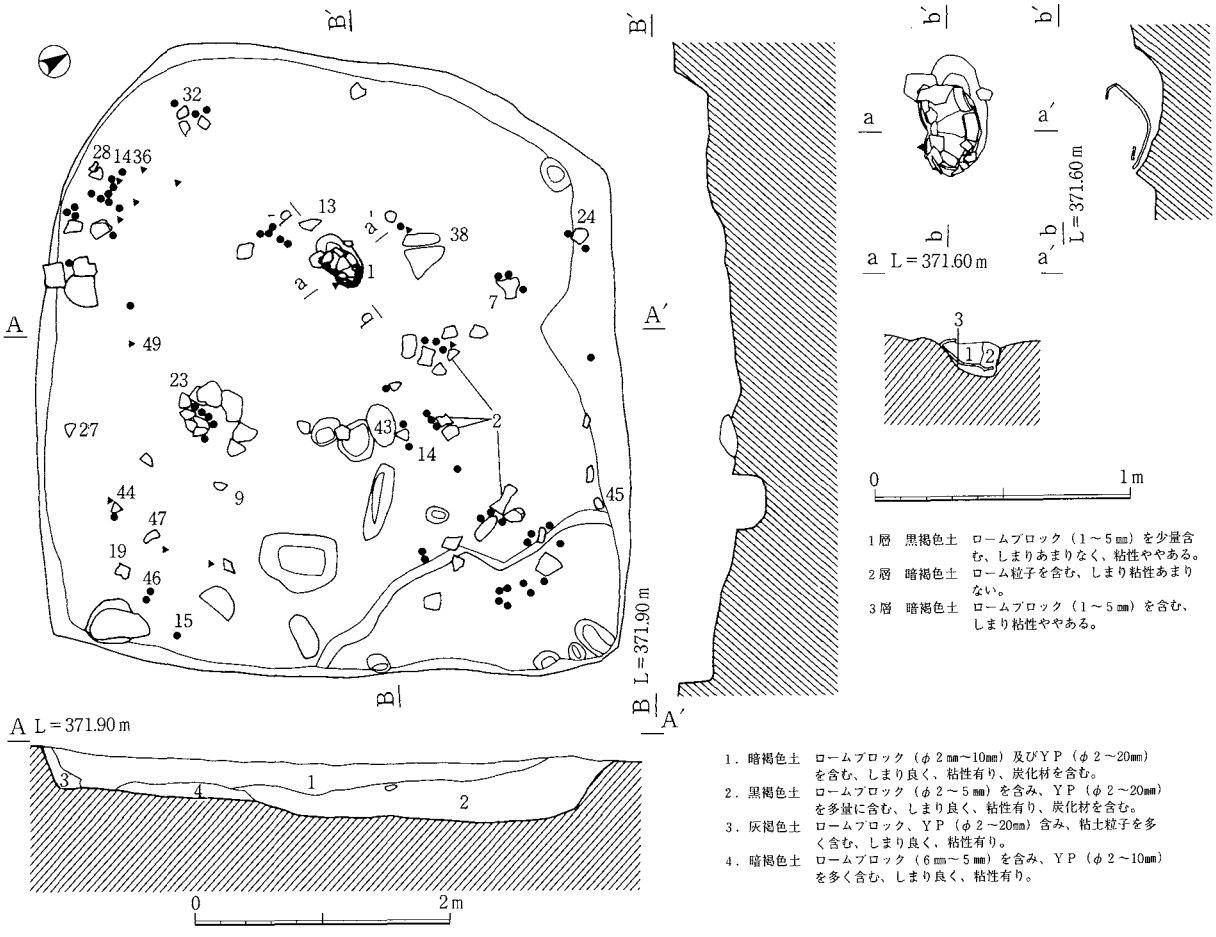
27～31は安山岩の磨石。32～34は安山岩の磨石兼凹石。35は砂岩の砥石兼敲石。36～39は有溝砥石でいずれも軟質の砂岩を使用している。40・41は磨製石斧。石材は40がハンレイ岩、41は緑色岩類。42は緑色片岩の棒状礫で下端に敲打痕が観察される。43は安山岩の石皿。44は黒曜石の三角鏃。45はチャートの有茎鏃。46は珪質頁岩の石錐である。

15号住居跡　（第50～56図、図版10・41・42）

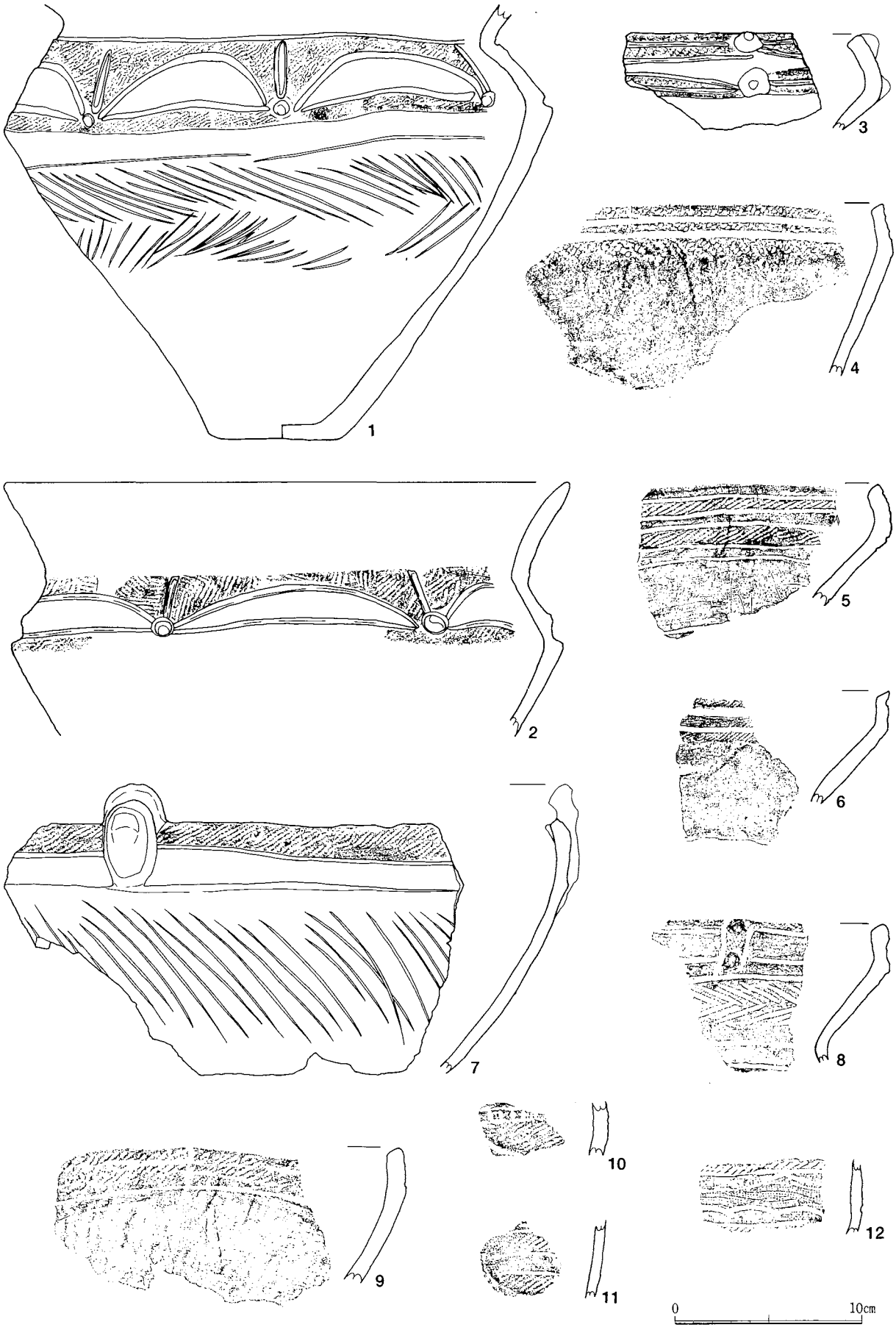
位　置／Ｉ－８グリッド南西端に位置し、14号住居跡に近接している。　形　態／方形～台形を呈する。規　模／長軸4.90ｍ、短軸4.60ｍ、深さ48㎝を測る。　炉／なし。　床　面／凹凸があり、東コーナー部分が僅かに高くなっている。　柱　穴／不規則な小ピットが検出されているが、明確な柱穴は検出されなかった。　壁　溝／なし。　遺物出土状況／覆土中から加曽利Ｂ２・３式を主体とする土器片と磨石、凹石、有溝砥石、軽石製品、打製石斧、小形石斧、石鏃、石皿等の石器類、自然石・礫が混在して出土し、中央部西側から体部算盤玉状を呈する深鉢が埋設された状態で出土している。　時　期／加曽利Ｂ２・３式期。

15号住居跡出土遺物（土器）

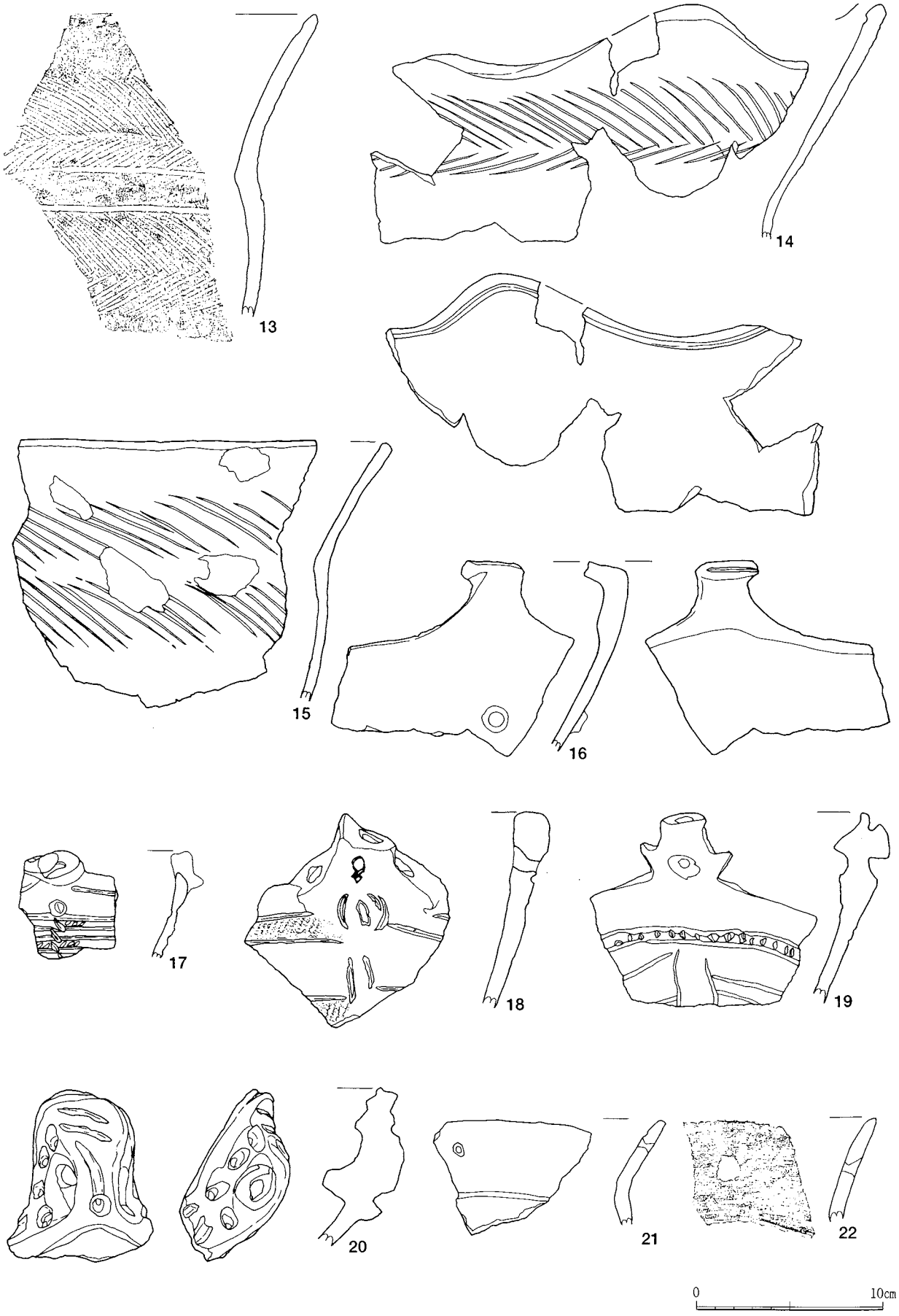
１は住居跡中央西側から出土した体部算盤玉状を呈する深鉢で口縁部を欠損している。口縁部は外傾する考えられ、肩部の文様は上向きの弧線文、連結部の円形文・短沈線と地文の細縄文で構成され、屈曲部にも細縄文が施文される。胴部は矢羽状の沈線が引かれている。２の器形・文様構成も１と同様である。１・２ともに加曽利Ｂ２式。３は体部算盤玉状深鉢の口縁部が省略されたタイプと考えられ、弧線文を円形の貼り付け文で連結している。時期は加曽利Ｂ３式。４～９は口縁部に縄文が施文され、横位の沈線が引かれる加曽利Ｂ２～３式の土器片で、４～６・９は口縁以下が無文になる。



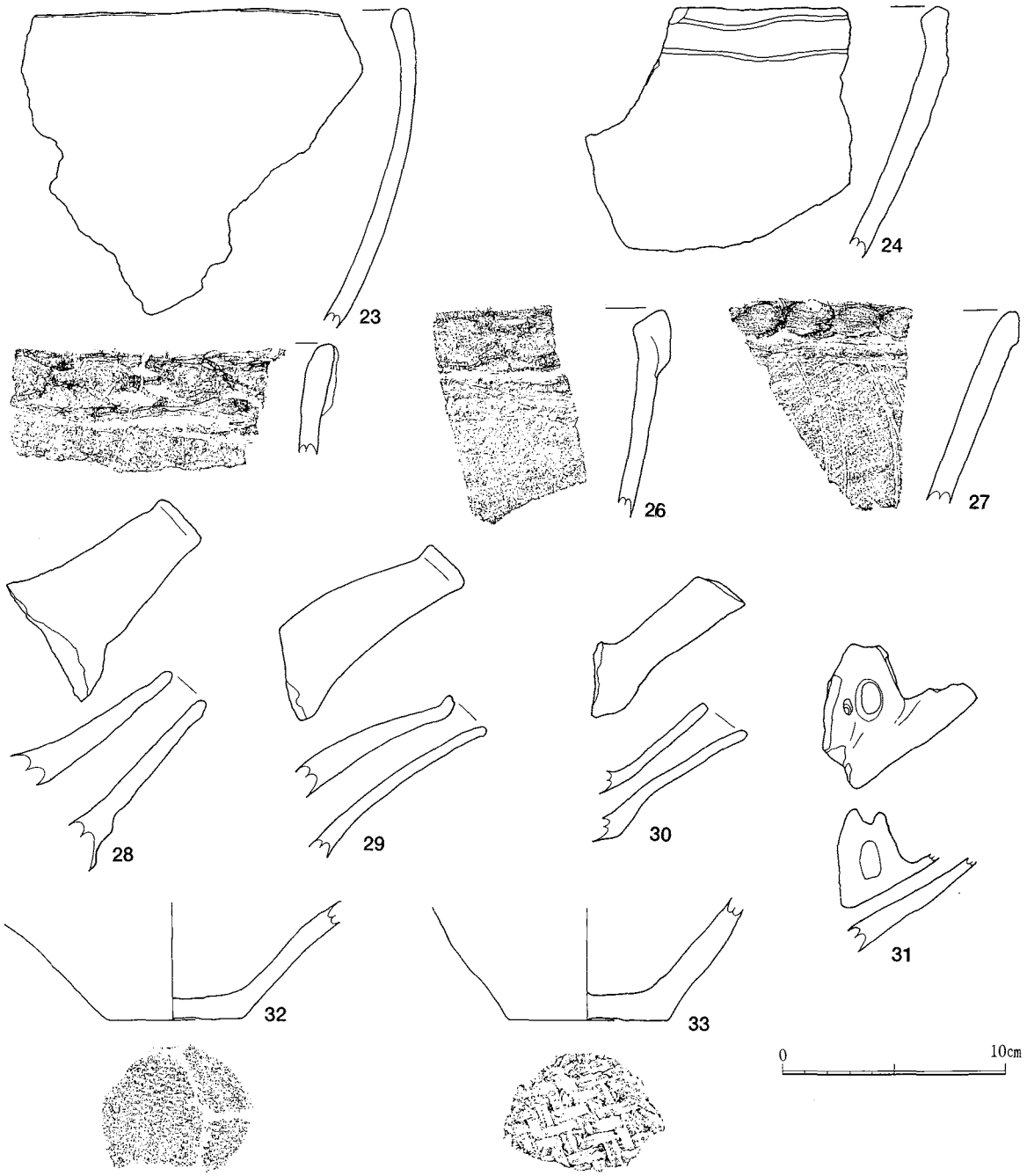
第50図　15号住居跡



第51図　15号住居跡出土遺物（1）

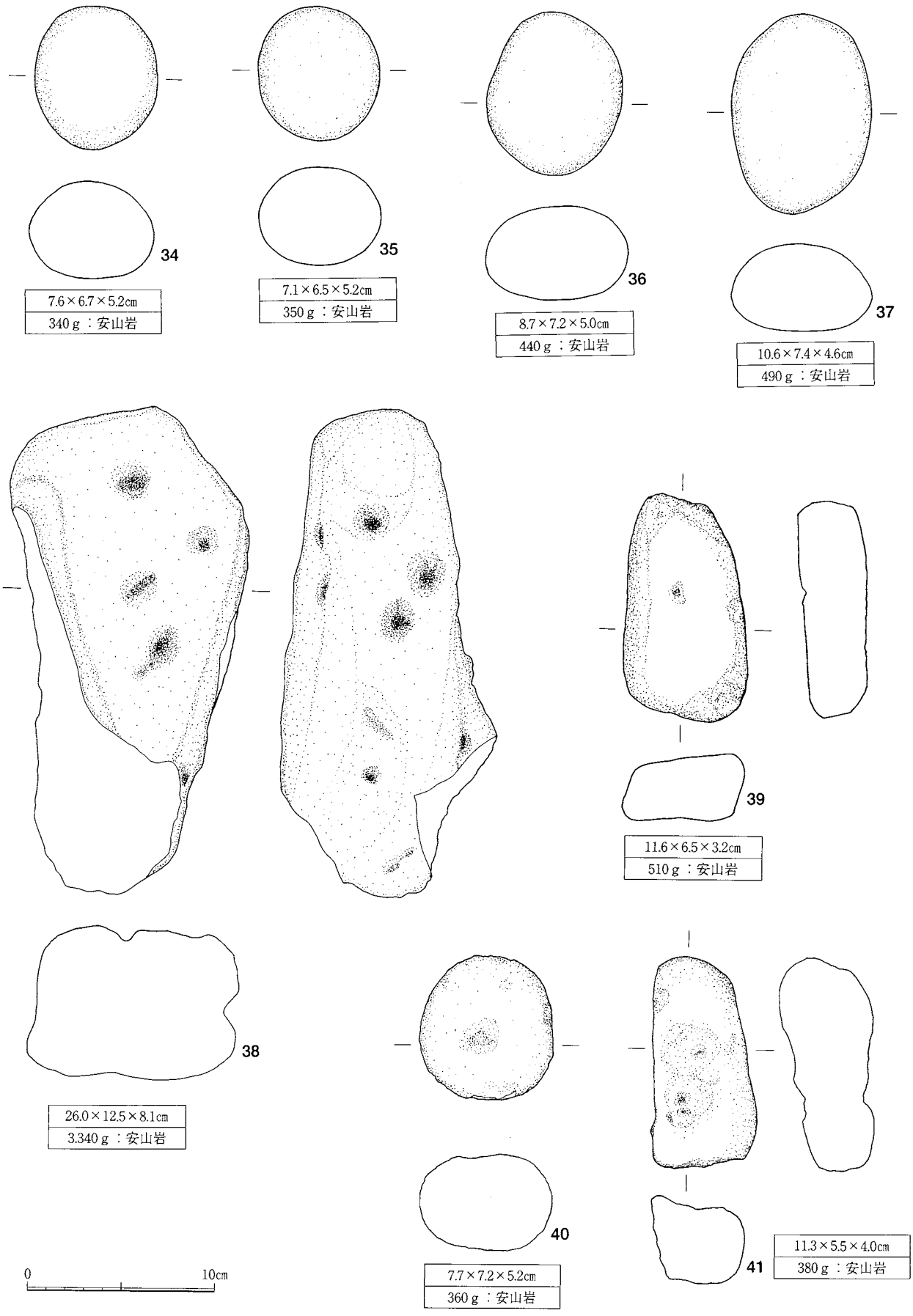


第52図　15号住居跡出土遺物（２）

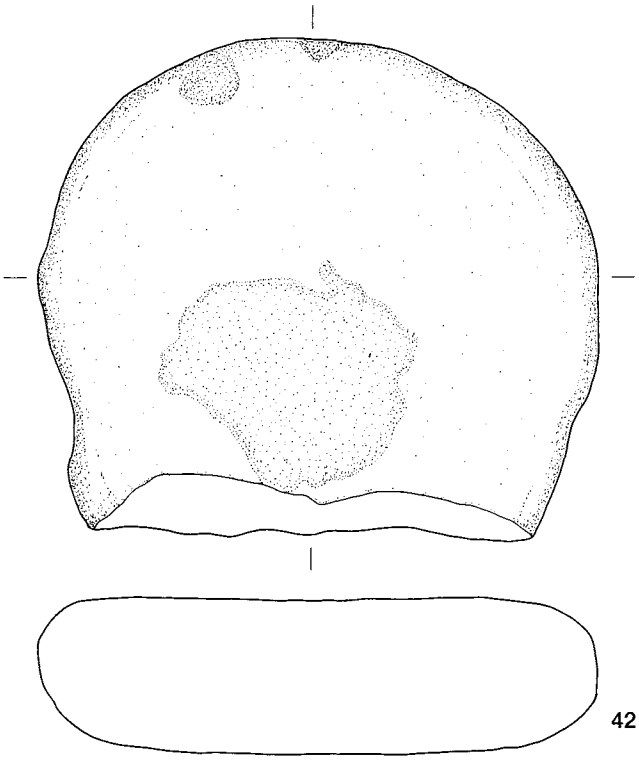


第53図　15号住居跡出土遺物（３）

７は口縁部に縄文が施文され、楕円形の貼り付けが施される鉢型土器で、胴部には斜方向の沈線が引かれている。８は口唇部の縄文帯と屈曲部の縄文帯を円形貼り付け文を基点とする縄文帯で連結させ、屈曲部以下は矢羽状の沈線が引かれている。10・11は赤彩の土器片。12は沈線・刻みと弧線文で文様が描かれ、擬縄文が施文されている。13・14は羽状沈線で文様が描かれる加曽利Ｂ２～３式。13は無文帯を横位の沈線で分けている。15は斜方向の沈線のみ施文される加曽利Ｂ３式の口縁部。16～17は三単位把手深鉢の把手部分で16は堀之内２式、17は加曽利Ｂ１式、18は加曽利Ｂ２式、19は加曽利Ｂ３式と考えられる。20は立体的な把手である。21・22は孔が穿たれる無文の口縁部片。23は無文の粗製土器片と考えられる。24は口縁に２条の沈線が引かれる口縁部片で加曽利Ｂ３～高井東式の範疇と考えられる。25～27は口縁部に折り返し気味の押圧隆帯が加えられる加曽利Ｂ２～３式の粗製土器で、27は弧状の沈線が加えられている。28～31は注口土器の注口部分。32・33は網代痕が観察される底部である。

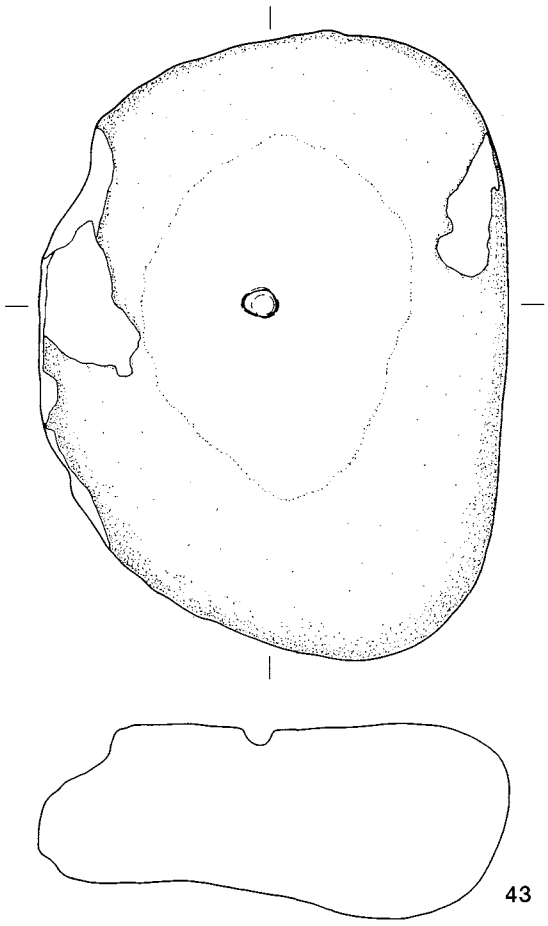


第54図　15号住居跡出土遺物（4）



26.0×29.4×8.1cm
12.200g：安山岩

42

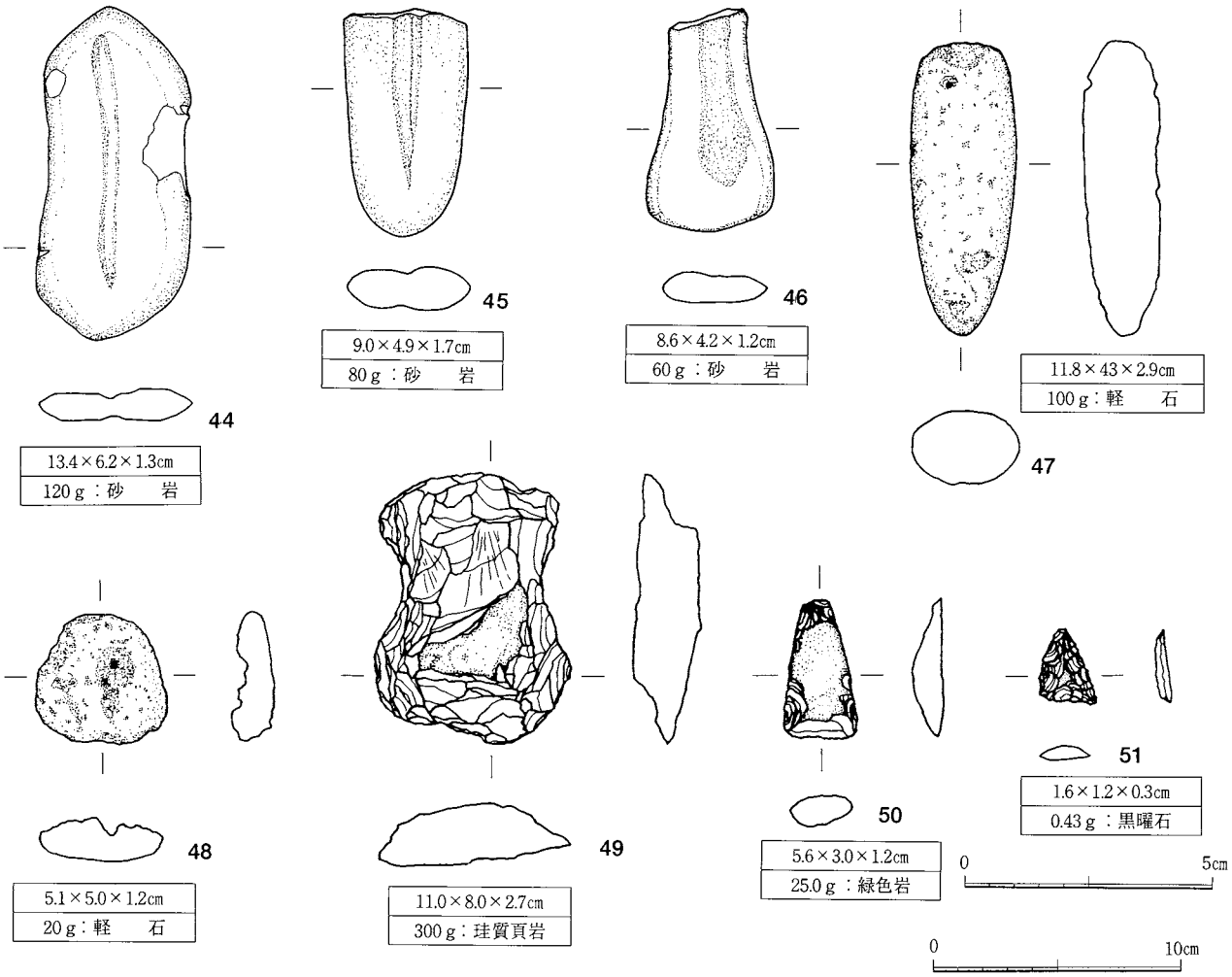


32.7×24.7×10.2cm
12.500g：

43

0 10cm

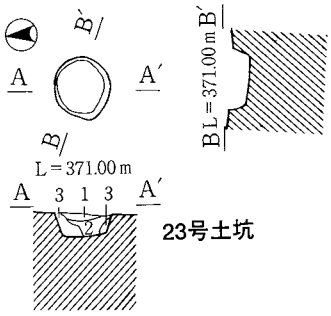
第55図　15号住居跡出土遺物（5）



第56図　15号住居跡出土遺物（6）

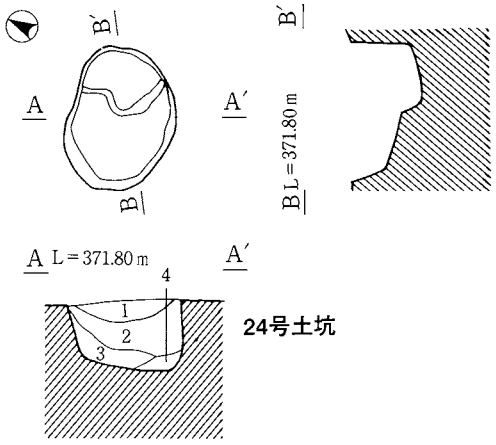
15号住居跡出土遺物（石器）

34～37は磨石、38は多孔石、39～41は磨石兼凹石で石材はいずれも安山岩である。42・43は安山岩の石皿で43は中央部に孔1個が穿たれている。44～46は軟質の砂岩を使用した有溝砥石で、46は上半部を欠損するが、撥形もしくは分銅形を呈すると考えられる。47・48は軽石製品で、47は整った鰹節型を呈し、上端部に孔を穿とうとした形跡がある。48は台形を呈し、中央上部に孔を穿とうとした形跡がある。49は珪質頁岩の分銅形打製石斧。50は磨製石斧型の小形石器で、緑色岩を使用している。51は黒曜石の関東型局部磨製石鏃と考えられる。



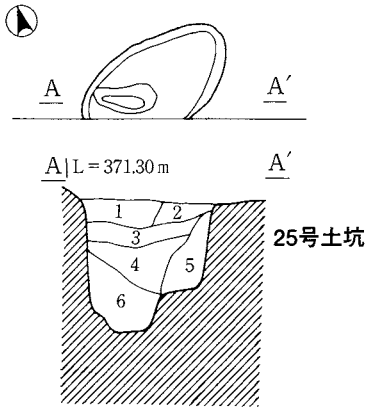
23号土坑

1層　黒褐色土　焼土粒子を少量含む、しまりややあり、粘性ある。
2層　暗褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を少量含む、しまりややあり、粘性ある。
3層　黒褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を少量含む、しまりややあり、粘性ある。



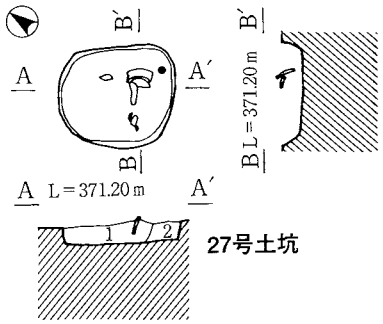
24号土坑

1．暗褐色土　ロームブロック（φ2～10㎜）及びＹＰ（φ2～5㎜）を含む、しまり良く、粘性やや有る、炭化材を少量含む。
2．黒褐色土　ロームブロック（φ2～10㎜）及びＹＰ（2～10㎜）を含む、しまり良く、粘性有り、炭化材を少量含む。
3．暗褐色土　ロームブロック（φ2～20㎜）及びＹＰ（2～5㎜）を含む、しまり良く、粘性やや有り、炭化材を含む。
4．暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）含み、ＹＰ、粘土粒子を多量に含む、しまり良く、粘性有り。



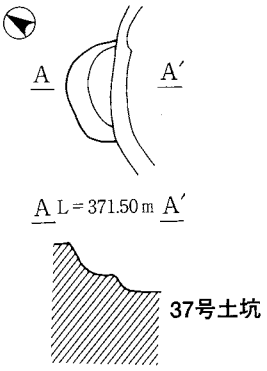
25号土坑

1層　暗褐色土　ロームブロック（1～2㎜）を少量含む、しまり良く、粘性ややある。
2層　茶褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を少量含む、しまり粘性あまりない。
3層　暗褐色土　ロームブロック（1～12㎜）を含む、しまり粘性ややある。
4層　暗褐色土　ロームブロック（1～10㎜）を少量含む、しまり粘性ややある。
5層　黒褐色土　ロームブロック（1～10㎜）をやや多く含む、しまり良く、粘性ややある。

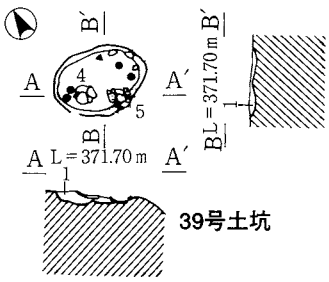


27号土坑

1層　暗褐色土　ロームブロック（φ2～5㎜）及びＹＰ（φ2㎜～10㎜）を含む、しまりやや有り、粘性有る。
2層　暗褐色土　ロームブロック（2～5㎜）及びＹＰ（φ2～10㎜）を多量に含む、しまりやや有り、粘性有る。

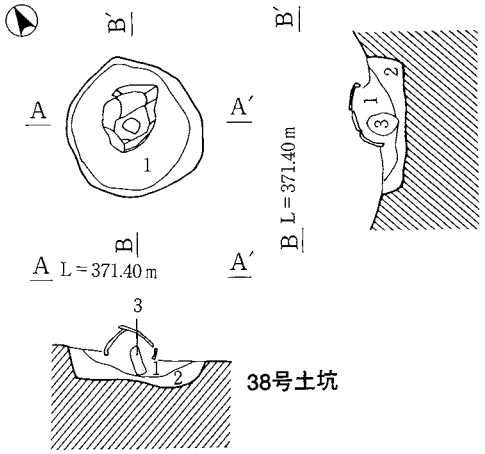


37号土坑



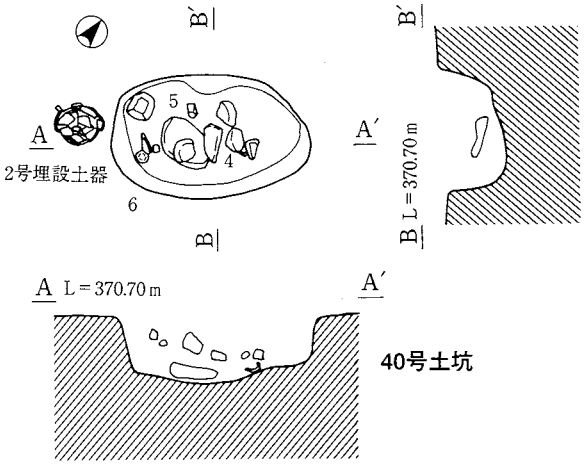
39号土坑

1層　暗褐色土　ロームブロック（φ1～3㎜）ＹＰ（φ1～5㎜）を多く含む、しまり粘性あり。



38号土坑

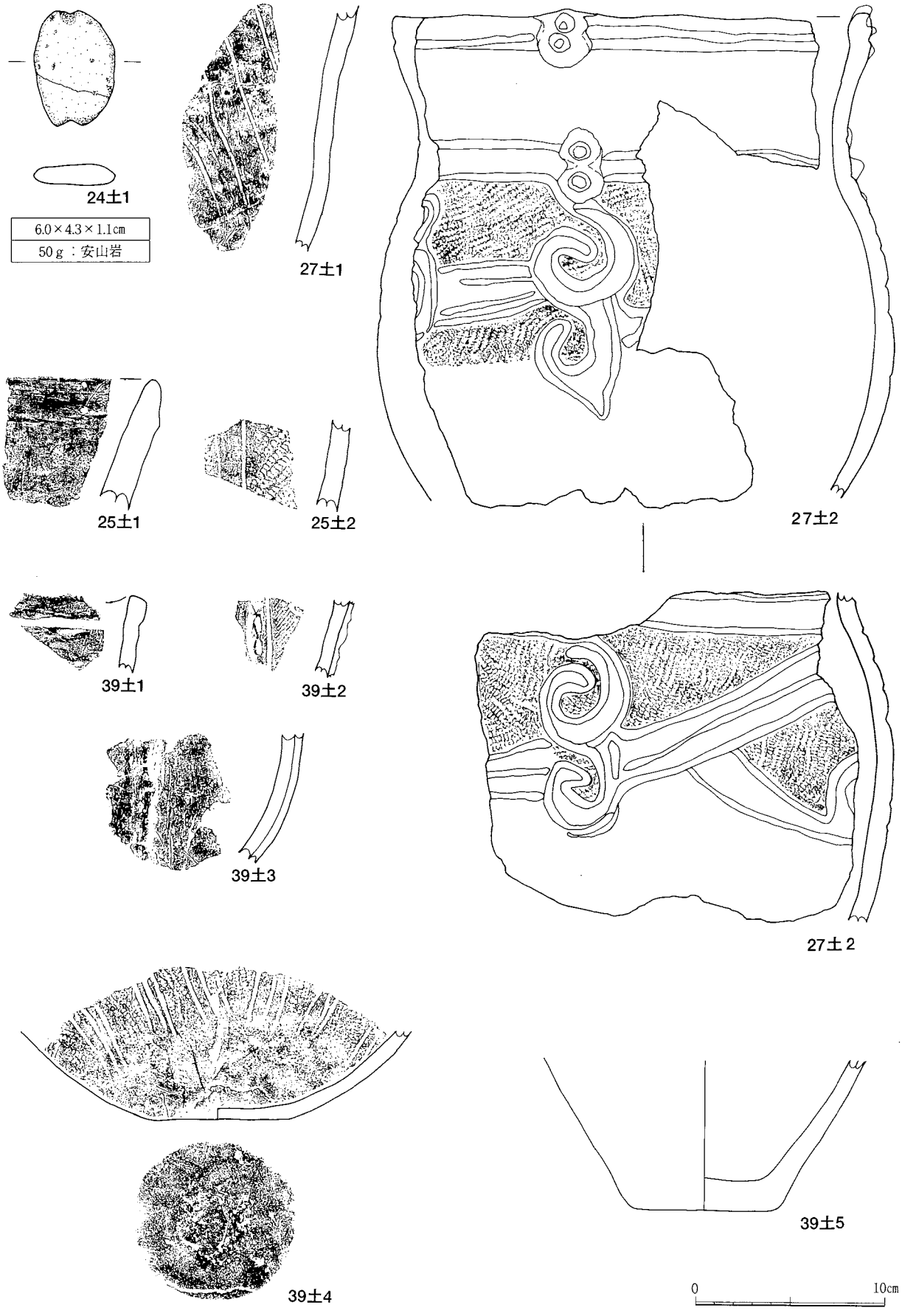
1層　黒褐色土　ロームブロック（1～5㎜）を少量含む、しまりあまりなく、粘性ややある。
2層　暗褐色土　ローム粒子及びブロック（1～5㎜）を含む、しまり粘性ややある。
3層　暗褐色土　黄褐色土、多量に混入、ロームブロック（φ1～5㎜）を含む、しまり良く、粘性ある。



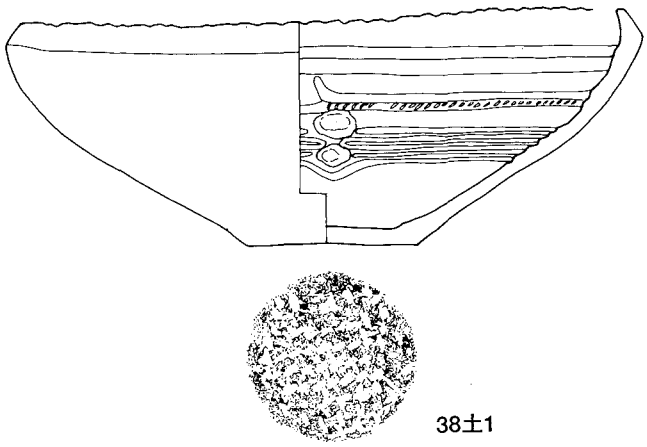
40号土坑

0　1ｍ　2ｍ

第57図　西調査区土坑



第58図　西調査区土坑出土遺物（1）



38土1

40土1

40土2

40土3

40土4

40土5

27.0×12.6×6.8cm
4.010g：安山岩

40土6

6.6×8.6×6.2cm
540g：安山岩

0 10cm

第59図　西調査区土坑出土遺物（2）

土　坑　（第57～59図、表－３、図版10・43）

土坑は14号・15号住居跡周辺に散在して８基検出されている。いずれも性格的に明確ではないが、加曽利Ｂ１式の浅鉢が伏せられた状態で出土した38号土坑、石皿、磨石等が底面直上から出土した40号土坑には墓坑としての機能が考えられ、自然科学分析の結果、多量のリンとカルシウムが検出されている。詳細は自然科学分析編を参照されたい。尚、配石遺構の範囲内から検出された土坑３基（41・42・43号）については、土坑墓の可能性が高い為、配石を構成する遺構として後述する。

土坑出土遺物

24号土坑－１は石錘。25号土坑出土遺物は中期末。27号土坑－２は堀之内１式の大形破片で、１も同時期の破片と考えられる。39号土坑出土遺物は堀之内式。38号土坑－１は加曽利Ｂ１式の外面無文浅鉢で全高９㎝、口径24㎝、底径７㎝を測る。発達した内面文様が施文され、底部には網代痕が残されている。40号土坑１・３は堀之内式、２・４は加曽利Ｂ２式の範疇と考えられ、１～３は口縁部の破片、４は網代痕を残す底部である。５は安山岩の石皿兼多孔石。６は磨石。５・６ともに全体の約半分を欠損している。

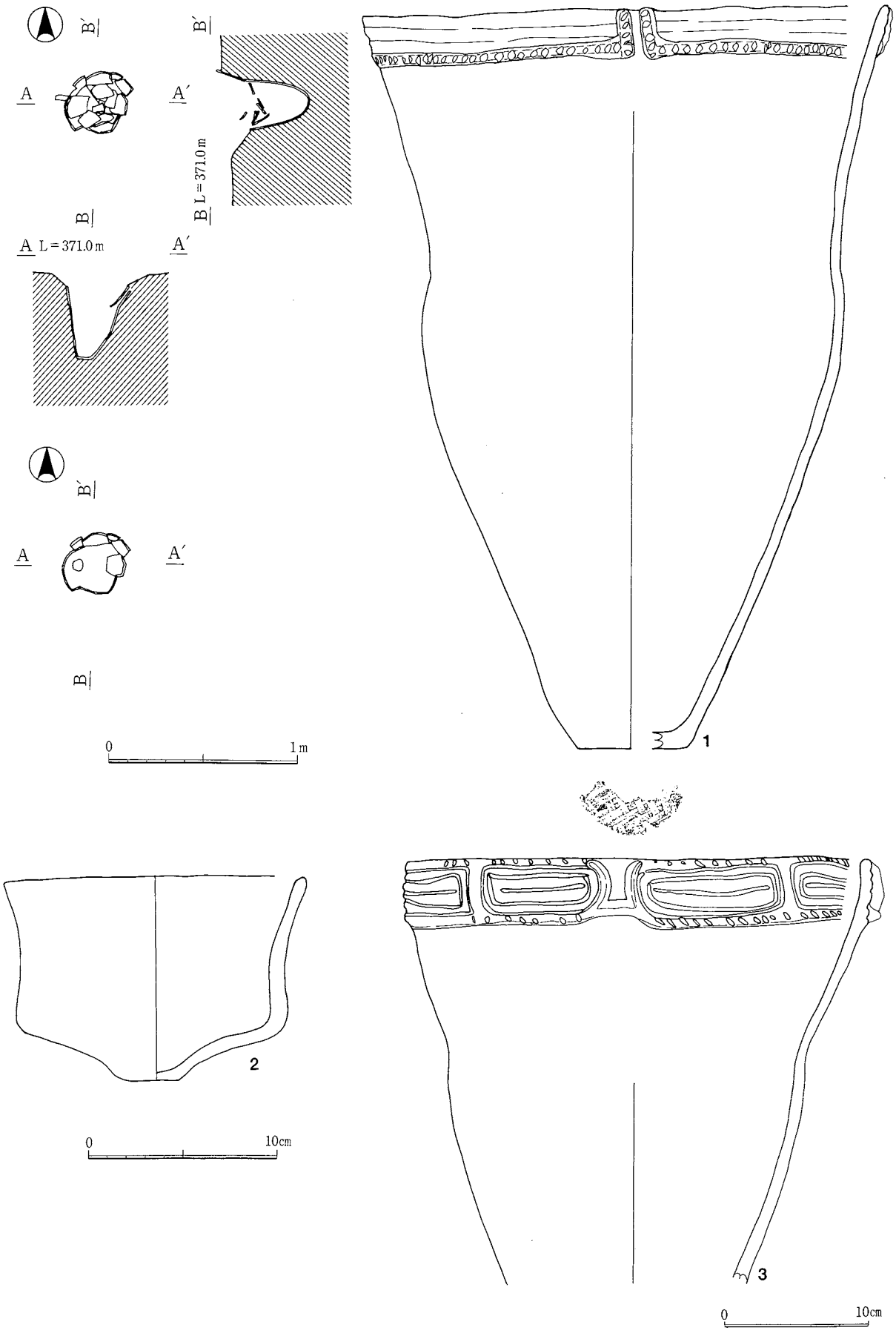
表－３　西調査区土坑一覧表　※41～43号土坑は配石内土坑に分類　（㎝）

番号	位置(グリッド)	平面形状	断面形状	長軸	短軸	深さ	備　　考
23	Ｈ－８	円形	鍋　底　状	50	44	20	
24	Ｉ－８	楕円形	鍋　底　状	110	88	56	２段掘り込み、石錘
25	Ｈ－５	楕円形	鍋　底　状	98＋α	72	90	中期末
27	Ｈ－５	隅丸方形	鍋　底　状	90	80	18	堀之内１式
37	Ｉ－７	円形？	不　　明	80	38＋α	28	14号住居跡重複
38	Ｊ－９	円形	鍋　底　状	55	52	15	加曽利Ｂ１式浅鉢
39	Ｊ－８	楕円形	皿　　状	74	52	12	堀之内式
40	Ｈ－８	楕円形	鍋　底　状	158	96	50	堀之内式、加曽利Ｂ式、石皿、磨石

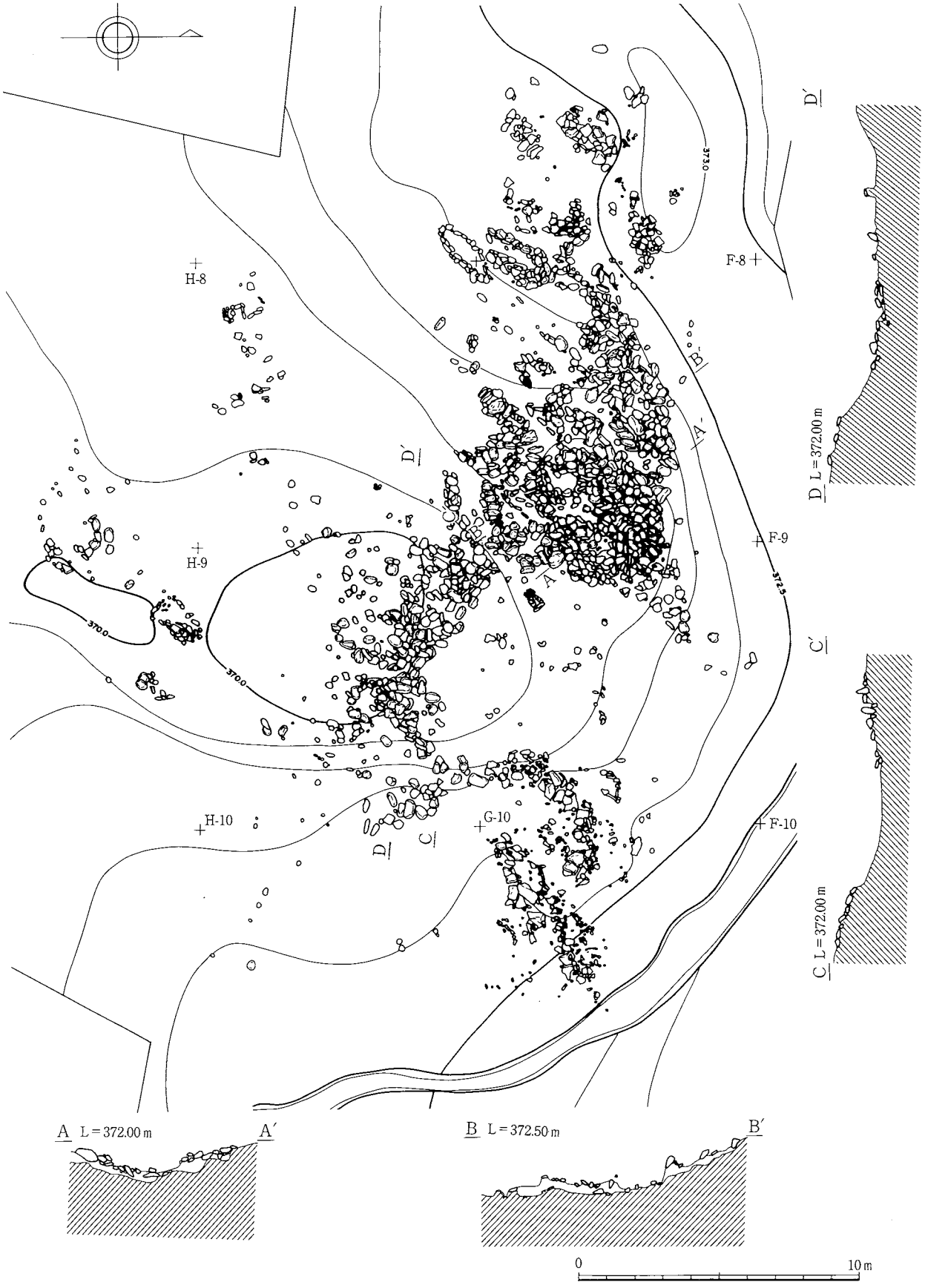
２号埋設土器　（第60図、図版10・44）

平成元年度調査で検出された２号埋設土器は、西調査区中央部Ｈ－８グリッドに位置し、高井東式の正位の深鉢２点が入れ子の状態で埋設され、深鉢の中から椀型土器１点が出土している。調査時には湧水によって調査が困難な状況であったが、遺物の遺存状態は非常に良好である。

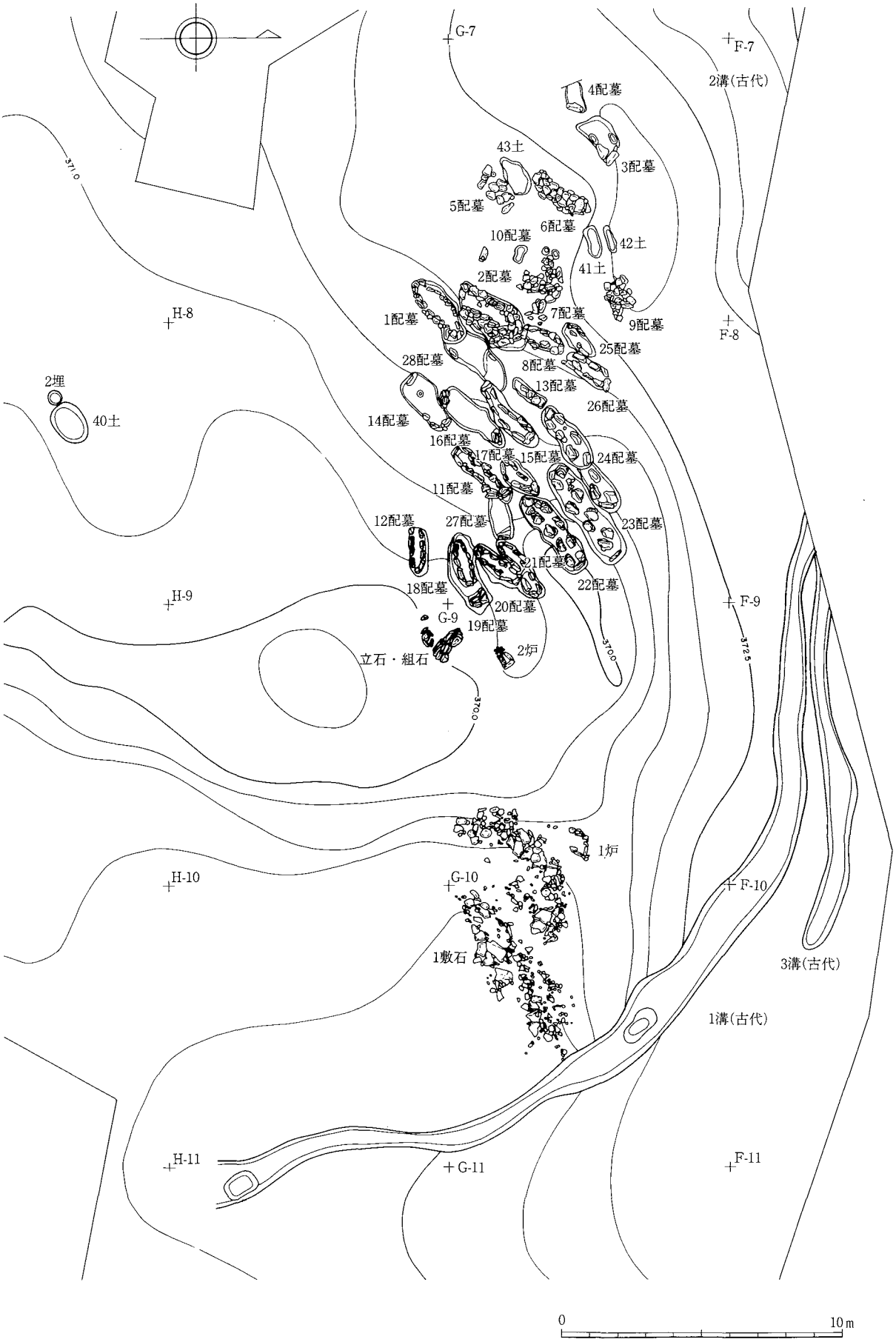
１は完形の深鉢で全高52㎝、口径37㎝、括れ部径29㎝、胴部最大径30㎝、底部径８㎝を測る。文様は口縁部のみに施文され、押圧を加えた隆帯で長方形に区画された中に太く浅い沈線状の調整が加えられている。底部には網代痕が残されている。２は特徴的な器形の無文椀型土器で全高11㎝、口径16㎝、胴中央径14㎝、胴下部最大径15㎝、底部径３㎝を測る。底部の約３分の２を欠損するが、僅かに網代痕が観察される。３は口縁の一部と底部を欠損する深鉢で残高31㎝、口径33㎝、括れ部径25㎝、胴部最大径25.5㎝を測る。文様は１と同様に口縁部のみに施文され、刻みを加えた隆帯で長楕円形に区画された中に沈線で長方形を基調とした文様が描かれている。１～３は時期的に安行１式期まで下る可能性が考えられる。



第60図　2号埋設土器



第61図　配石遺構全体図


G-7
F-7
2溝(古代)
4配墓
43土
3配墓
5配墓
6配墓
10配墓
42土
41土
2配墓
H-8
1配墓
7配墓
9配墓
F-8
25配墓
28配墓
8配墓
2埋
13配墓
26配墓
40土
14配墓
16配墓
17配墓
15配墓
24配墓
11配墓
12配墓
27配墓
23配墓
21配墓
22配墓
H-9
18配墓
G-9
20配墓
F-9
19配墓
2炉
立石・組石
1炉
H-10
G-10
F-10
1敷石
3溝(古代)
1溝(古代)
H-11
G-11
F-11
0
10m

第62図　配石墓配置図

配石遺構

平成３年度調査で検出された配石遺構は西調査区の北側に集中して構築され、安山岩の川原石を主体とする総数4,000個を超える石が使用されている。配石は上部配石と下部配石で形成され、上部配石の主要部分は南北15ｍ、東西35ｍの範囲に展開し、下部の配石墓群は東西20ｍ、南北10ｍの範囲に密集して構築されていた。

上部配石は敷石遺構、集石、組石、立石、弧状配石、炉で構成され、西側に位置する配石墓群の上部に積まれた集石・配石と、東側に位置する敷石遺構を南側に張り出す弧状の配石で連結した形状を呈する。弧状配石自体は崩落していると考えられるが、Ｆ－９グリッド南西からＧ－９グリッド北西にかけて４段の積石が遺存し、その南側に立石と組石、北側には２号炉跡が付随していた。又、弧状配石の北側山寄り部分には石が配されない空白地帯が存在している。Ｇ－９グリッド北西端部に位置する立石・組石は立石のみのものと、立石下部を長方形の石４個で方形に囲んだ組石が並立しているが、下部及び周辺に土坑等の掘り込みはなく、配置状況から墓域を示す境界的な配石の可能性が指摘される。配石遺構の東側を占める敷石遺構は円形基調の堀之内１式のものと、方形基調の堀之内２式期のものの重複と考えられ、祭祀色の濃い遺物が散見されている。

下部配石は28基の配石墓と墓坑の可能性が高い土坑３基で構成され、いずれも北～東－南～西に長軸方向を指向する偏重傾向が見られる。主体となる配石墓は長楕円形・隅丸長方形の掘り込みに石が配されるポピュラーなタイプが大半を占め、遺存状態は比較的良好であったが、後世の湧水による地盤沈下で崩落・変形し、間延びした形状を呈するものが多い。

検出された配石墓については以下の３形態に分類して報告する。

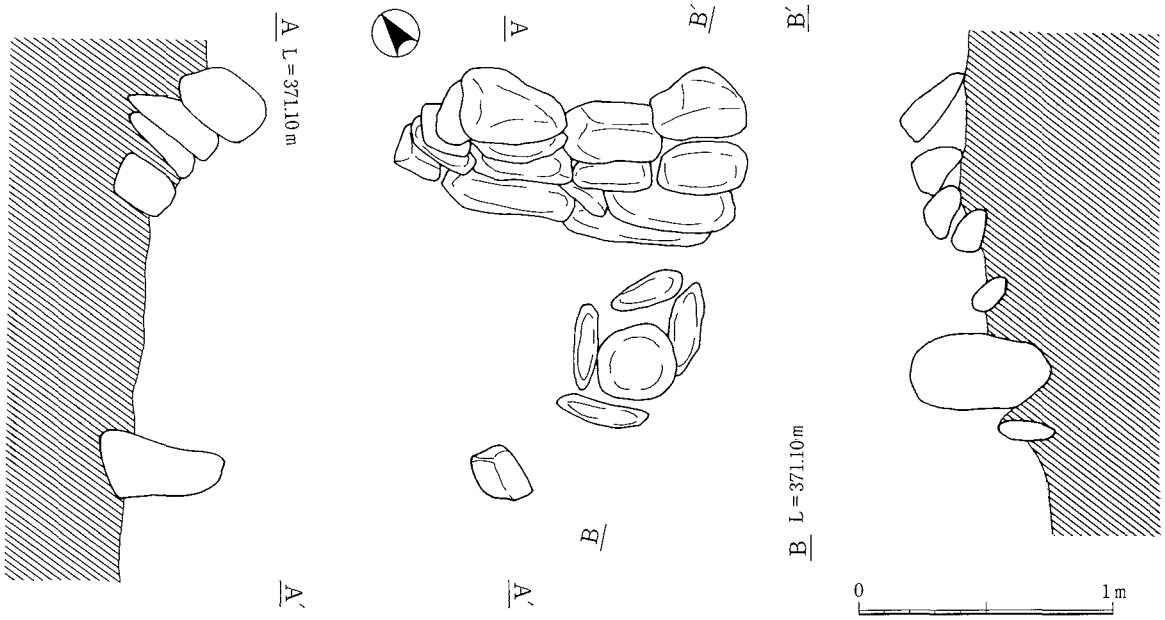
Ⅰ　石棺状組石を有するもの　　ａ…平積み
　　ｂ…平積み＋小石・横積み
　　ｃ…横積み
　　ａ～ｃに蓋石有…１類、蓋石無…２類

Ⅱ　長軸端部に石が配されるもの　　ａ…端部に枕石状の石を配す。　ｂ…端部に組石状の石を配す。
　　両端部に配す…１類、片側のみ配す…２類

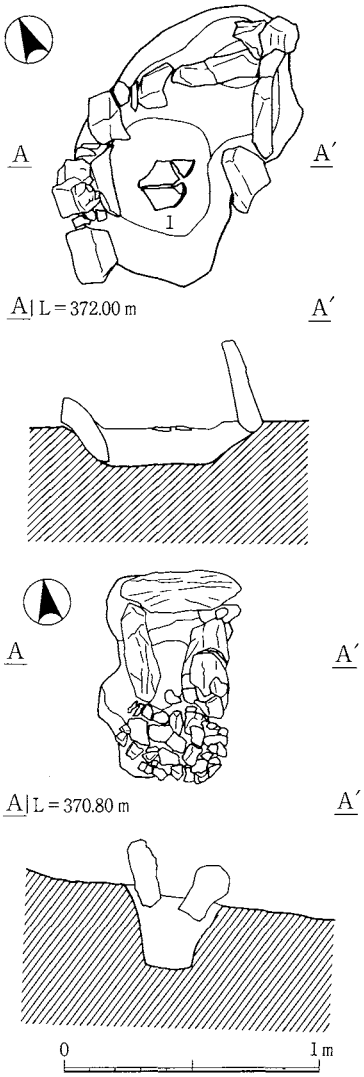
Ⅲ　底面に石が配されるもの　　ａ…枕石状の石を有し、底石が敷かれるもの
　　ｂ…土坑上場に石が配され、底面に石が置かれるもの

この中でⅢａ類については一部に壁石が遺存するものがあり、本来石棺状の組石を有する可能性も考えられる。

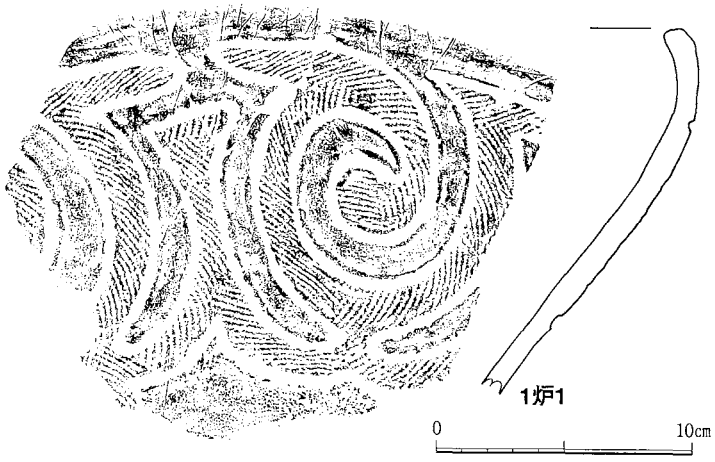
遺物は配石遺構を覆う包含層及び配石南側の窪地部分から堀之内式・加曽利Ｂ式・高井東式を主体とする土器・土製品と石器類が大量に出土し、加曽利Ｅ４式・称名寺式・曽谷式・安行１式等の土器片も少量出土している。配石墓内からは少量の土器片・石器類が出土しているにすぎないが、16号配石墓と28号配石墓から各１点の小形赤彩耳栓、19号配石墓の覆土上部から加曽利Ｂ１式の浅鉢が伏せられて出土し、28号配石墓からは微量の骨片も検出されている。石皿・磨石・丸石等の石器類は配石墓の構築材として使用されるものが目立ち、６号配石墓の枕石付近には無頭石棒と棒状礫が配されていた。出土遺物から推測される配石遺構の構築時期は堀之内１式期に始まり、加曽利Ｂ式期を主体として高井東・曽谷・安行１式期まで継続したと考えられる。尚、前述した14号・15号住居跡、２号埋設土器、土坑についても時期的に関連性が伺えるが、配石遺構の主要範囲外の遺構として報告を行った。



第63図　上部配石（立石・組石）



第64図　1号炉、2号炉・出土遺物



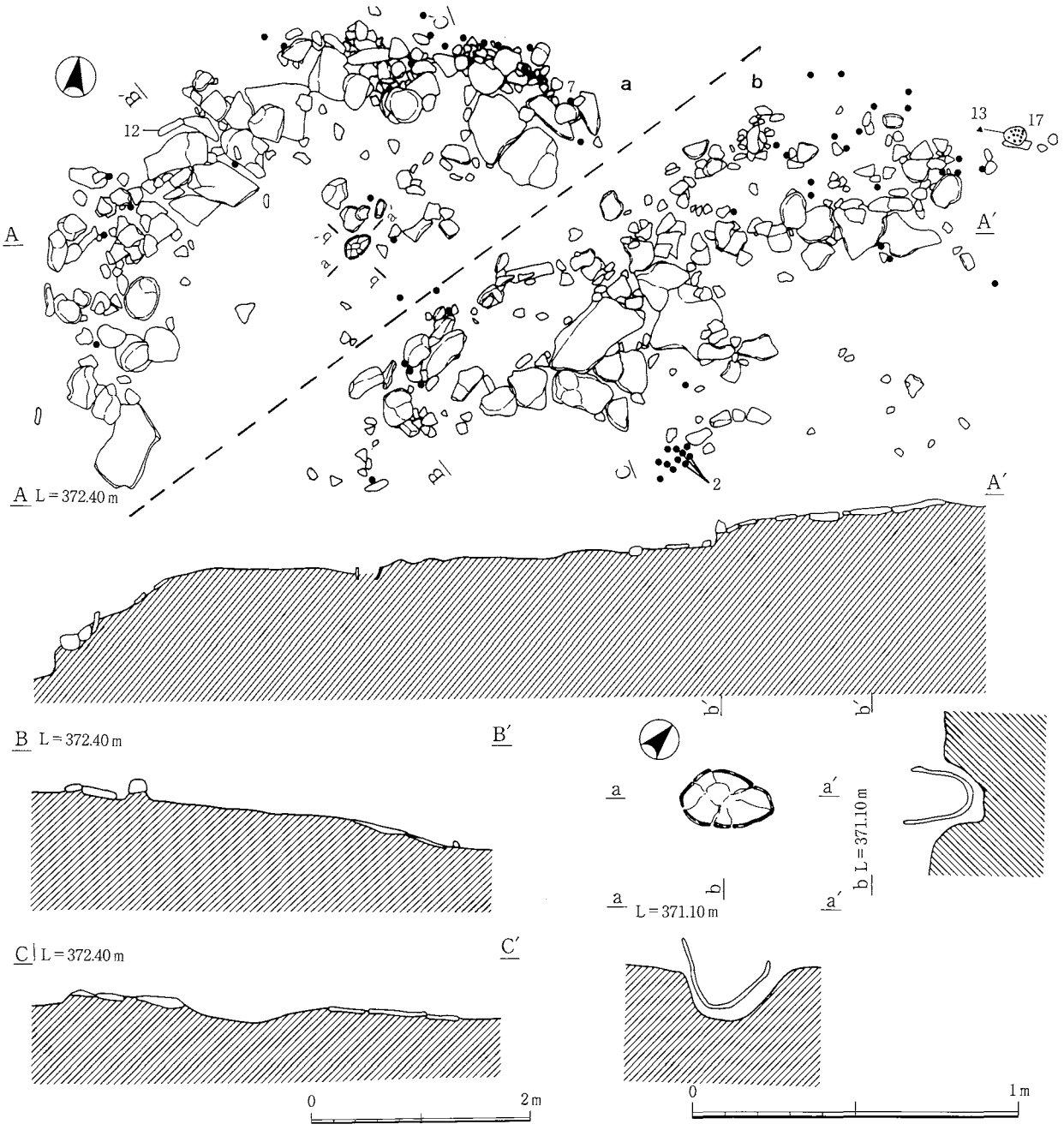
炉　跡　（第64図、図版15・45）

1号炉

F－9グリッド東側に位置し、1号敷石遺構に近接している。現状では南側が解放するコの字状に組まれ、構築材は安山岩の板状礫片を使用している。遺物は中央部から称名寺Ⅰ式の口縁部破片が出土し、該期の住居跡が存在していた可能性が高い。

2号炉

F－9グリッド南西に位置する。安山岩の川原石で南北方向に長軸を持つ長方形に組まれ、南側の石は細かく砕けた状態で検出された。出土遺物はない。



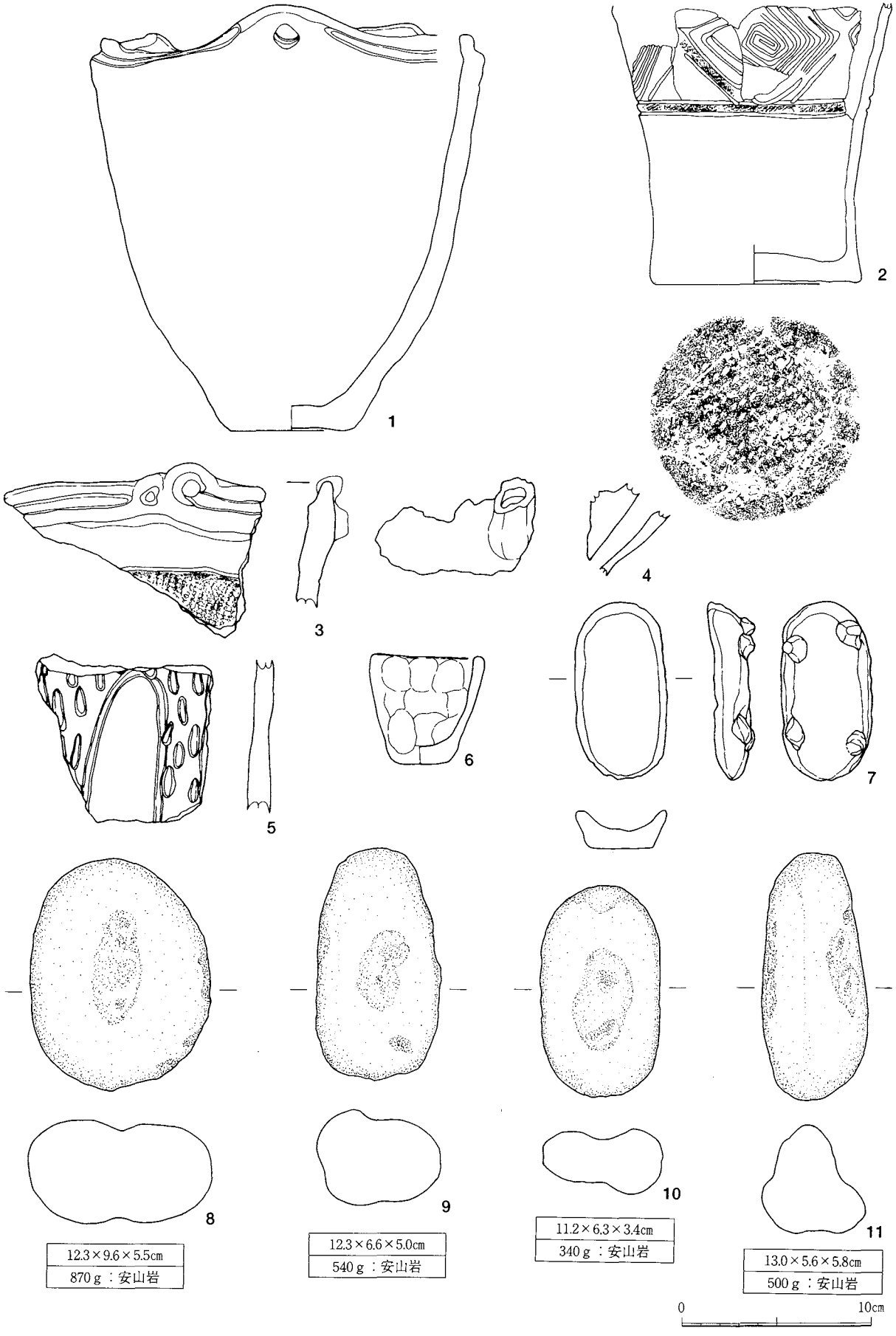
第65図　1号敷石遺構

1号敷石遺構　（第65～67図、図版16・45）

F－10グリッド南西及びF－9グリッド南東に位置する。本遺構は現地調査時に1基の敷石遺構として調査を行ったが、出土遺物・形態から2基の重複と捉えられ、西側の1号敷石遺構aを切って東側の1号敷石遺構bが構築されていると考えられる。敷石構築材は共に安山岩の板状礫を主体とし、遺構の遺存状態は非常に悪い。円形基調の1号敷石遺構aは径約5.7mを測り、中央部から土圧によって楕円形に変形した1の堀之内1式埋設土器と7の脚付石皿形土製品、12・14の石棒等が出土している。方形基調の1号敷石遺構bは残存長約6.8mを測り、2の堀之内2式土器、16の軽石製品と東端部から17の多孔石とその直下から13の小形石棒が出土している。他に遺構範囲から称名寺2式土器片とコップ形土器、石剣破片等が出土している。尚、1号敷石遺構aは1号炉跡の一部を切って構築された可能性がある。

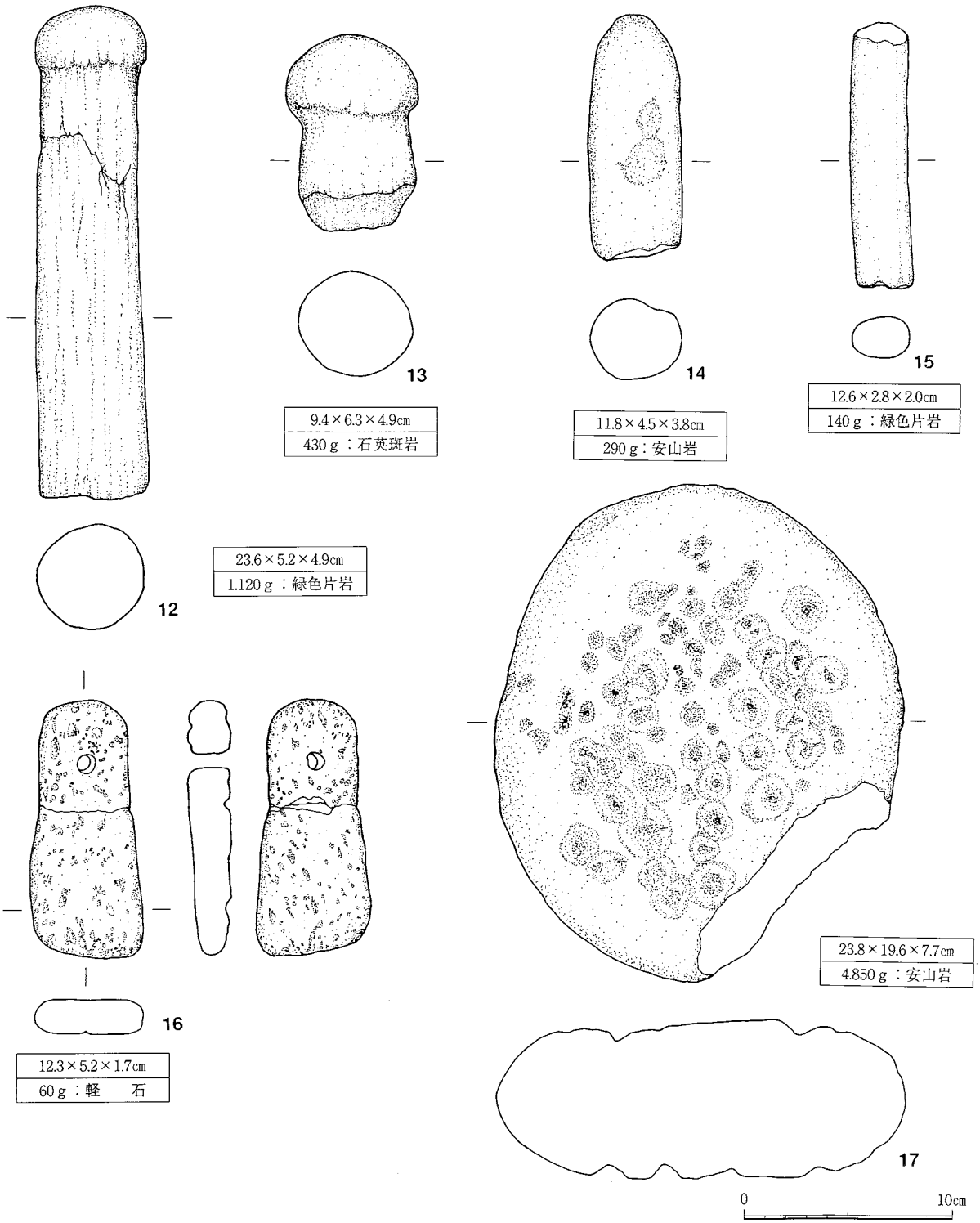
出土遺物

1は堀之内1式の埋設土器である。波状を呈する口縁の波頂部下に円孔が穿たれ、口縁に沿って浅い沈線が引かれている。色調は黄白色を呈する。2は幾何学文が描かれる堀之内2式の深鉢下半部である。

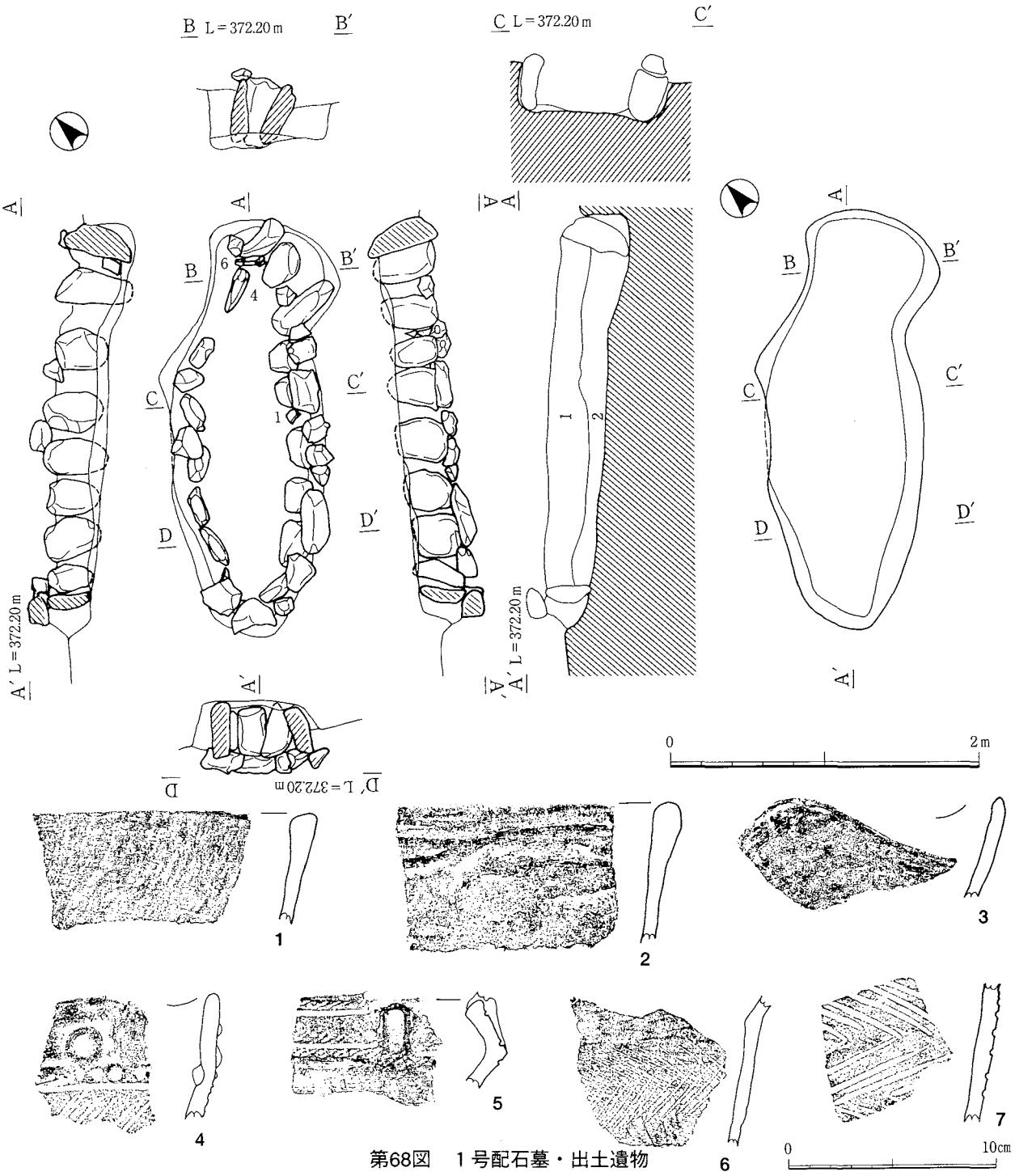


第66図　1号敷石遺構出土遺物（1）

3は堀之内1式の口縁部片。4は注口土器の注口部。5は称名寺Ⅱ式の胴部破片で沈線による区画の中に列点状の刺突が施されている。6は無文のコップ形土器。7は黒色を呈する脚付石皿形土製品である。8～11は安山岩の凹石。12は一部に被熱痕が観察される緑色片岩の石棒。13は多孔石（17）の直下から出土した石英斑岩の小形石棒である。14の石棒破損品は全体に顕著な被熱痕が観察される。15は緑色片岩の石剣破片と考えられる。16は短冊形の軽石製品で上部中央に貫通孔が開けられている。17の多孔石は表裏面にタールの付着が観察される。石材は安山岩。



第67図　1号敷石遺構出土遺物（2）

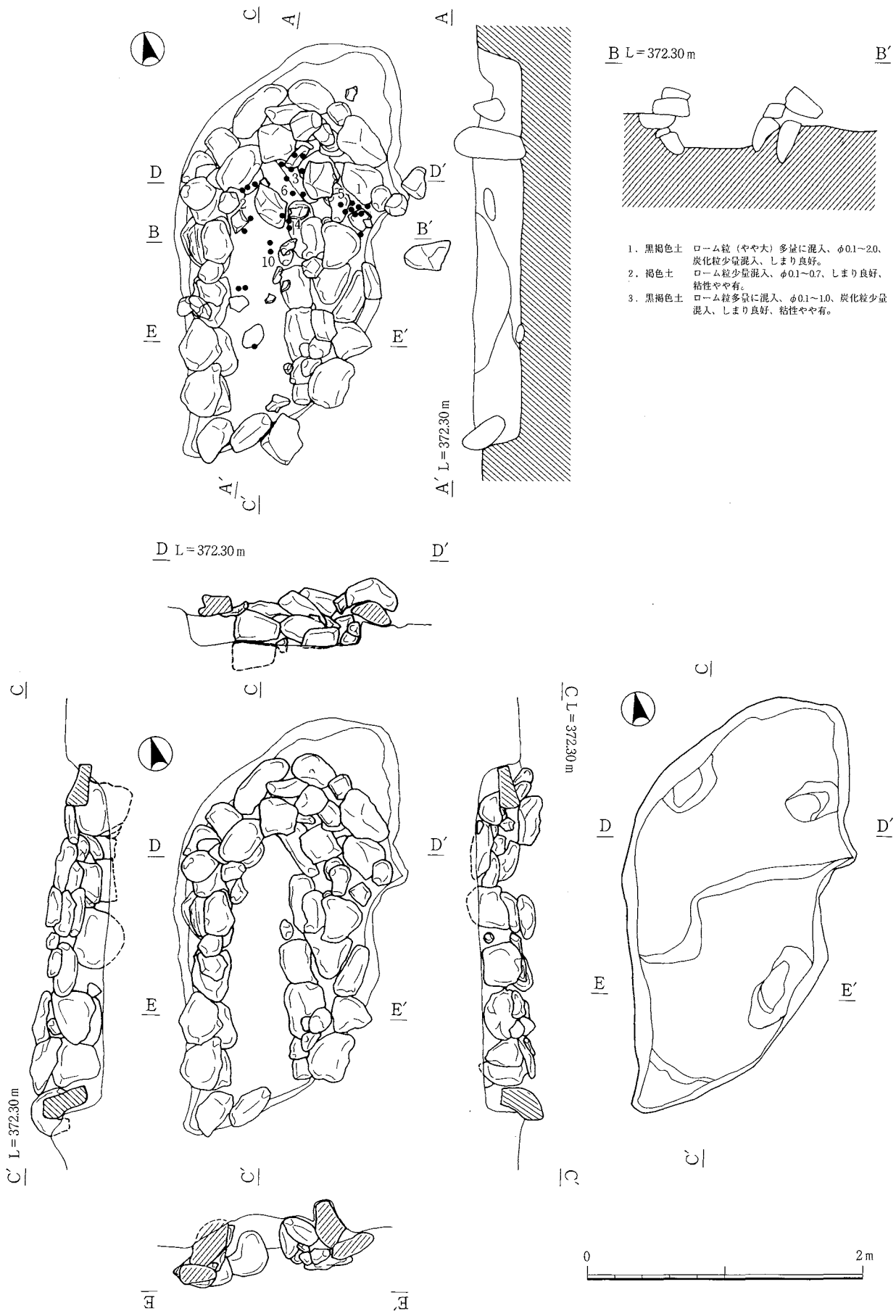


第68図　1号配石墓・出土遺物

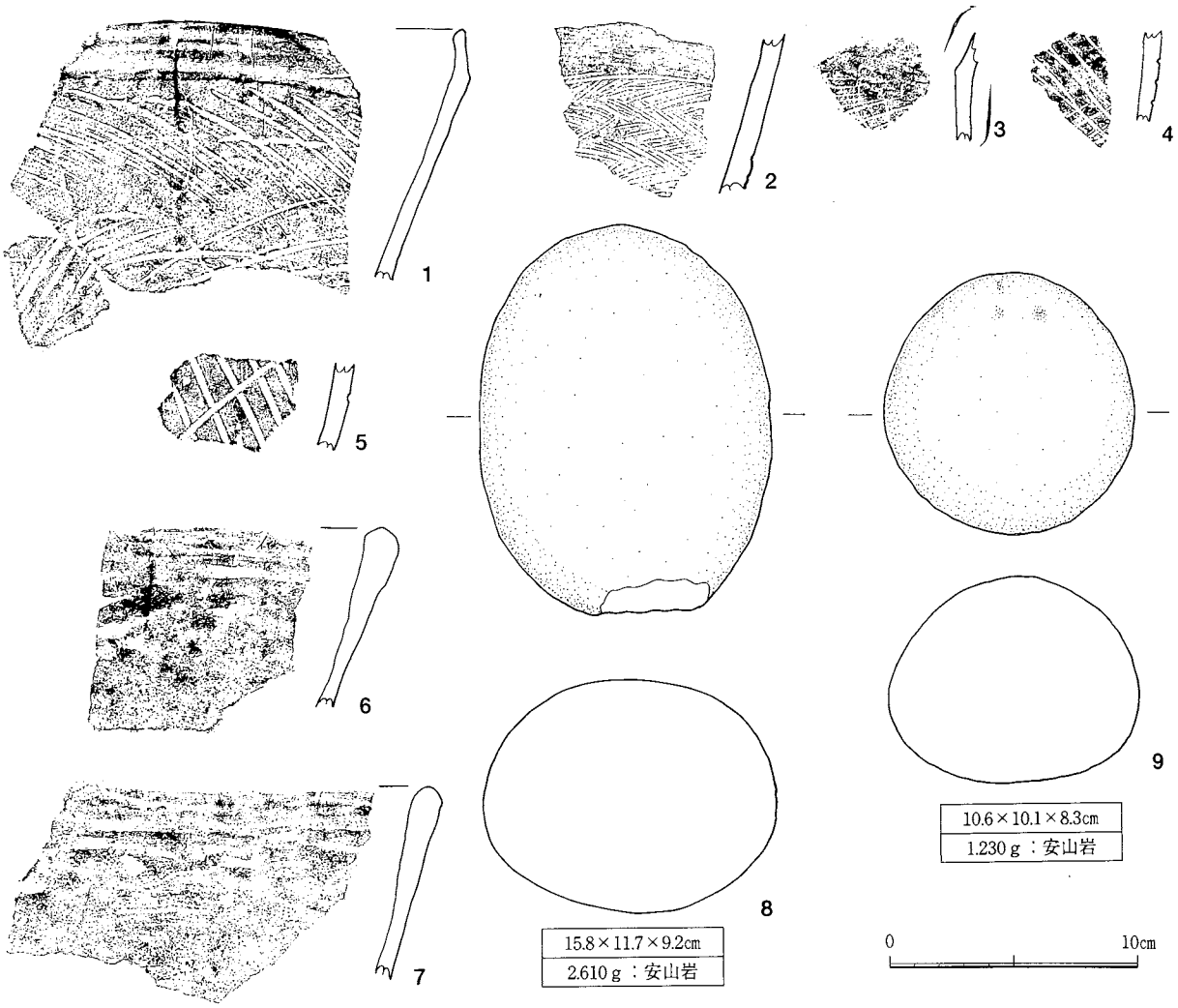
1号配石墓　（第68図、図版19・46）

位　置／G－7グリッド北東端部に位置する。　形　態／Ⅰb2類　不整長楕円形の掘り込みに石が配され、東側の壁石上部に小石・横積みの石が遺存している。　規　模／内法で長軸2.20m、短軸0.54m、深さ43cm、掘り形は長軸2.70m、短軸1.00m、深さ48cmを測る。　長軸方向／N－45°－E。　遺　物／覆土及び壁面に接して加曽利B3式の土器片が少量出土している。　重　複／2号配石墓、28号配石墓に接している。　時　期／加曽利B3式期。

出土遺物／1・2は無文の口縁部破片。3は波状口縁を呈する無文の口縁部破片。4・5は口縁部の破片で、4は口縁部に円形の貼り付けと直下に横位の押圧隆帯が付され、下部には横位の沈線と斜位の沈線が施文されている。5は口唇部と屈曲する口縁下端に沈線で区画された縄文帯が廻り、口縁部に楕円形の貼り付けが施される。7・8は胴部の破片で羽状の沈線が施文されている。時期的にはいずれも加曽利B3式の範疇と考えられる。


A
A′ L=372.30m
B L=372.30m
B′
1．黒褐色土　ローム粒（やや大）多量に混入、φ0.1～2.0、炭化粒少量混入、しまり良好。
2．褐色土　ローム粒少量混入、φ0.1～0.7、しまり良好、粘性やや有。
3．黒褐色土　ローム粒多量に混入、φ0.1～1.0、炭化粒少量混入、しまり良好、粘性やや有。
D L=372.30m
D′
C L=372.30m
C′ L=372.30m
0
2m

第69図　２号配石墓

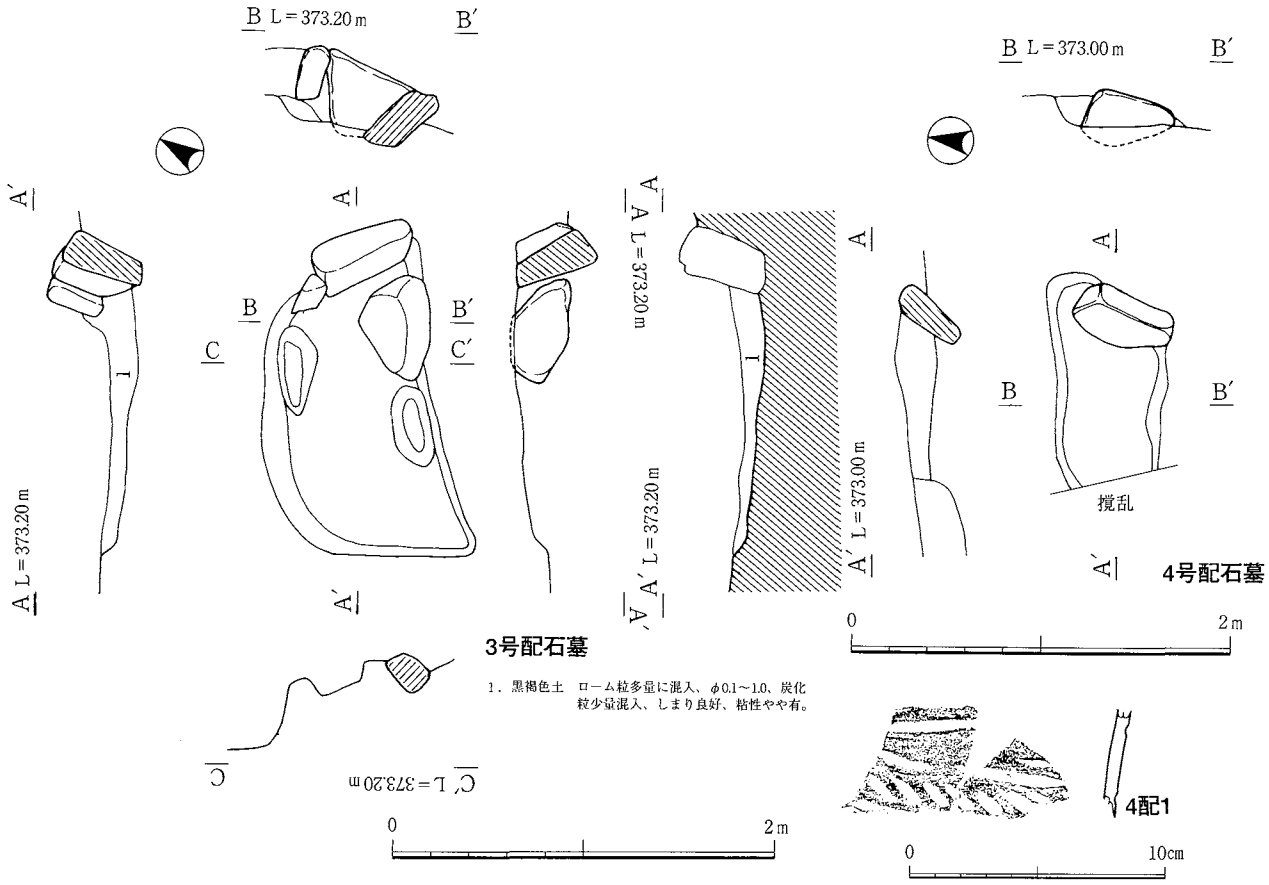


第70図　2号配石墓出土遺物

2号配石墓　（第69・70図、図版19・20・46）

位　置／F－7グリッド南東端部に位置する。　形　態／Ⅰb2類　不整楕円形の掘り込みに大量の石を用いて構築され、平積みの壁石上部に横積み1～3段の石と小石が遺存しているが、長軸南端部にはほとんど石が配されていない。　規　模／内法で長軸1.80m、短軸0.45m、深さ36cm、掘り方は長軸3.08m、短軸1.45m、深さ36cmを測る。　長軸方向／N－20°－E。　遺　物／覆土の北側にやや集中して加曽利B3～高井東式の土器片が出土し、構築材の中に丸石が含まれていた。　重　複／2号配石墓、8号配石墓、7号配石墓、28号配石墓に接している。　時　期／高井東式期。

出土遺物／1は屈曲する口縁部に浅い沈線状の調整が加えられ、胴部に羽状沈線が施文される口縁部大形破片。2は胴部の破片で横位の沈線以下に密な羽状沈線が施文される。3～5も斜位・羽状の沈線が施される小破片。6・7は口縁部が肥厚する無文の口縁部破片である。時期は1～5が高井東式、6・7は加曽利B3式～高井東式に存在する粗製土器と考えられる。8・9は安山岩の丸石。



第71図　3号配石墓、4号配石墓・出土遺物

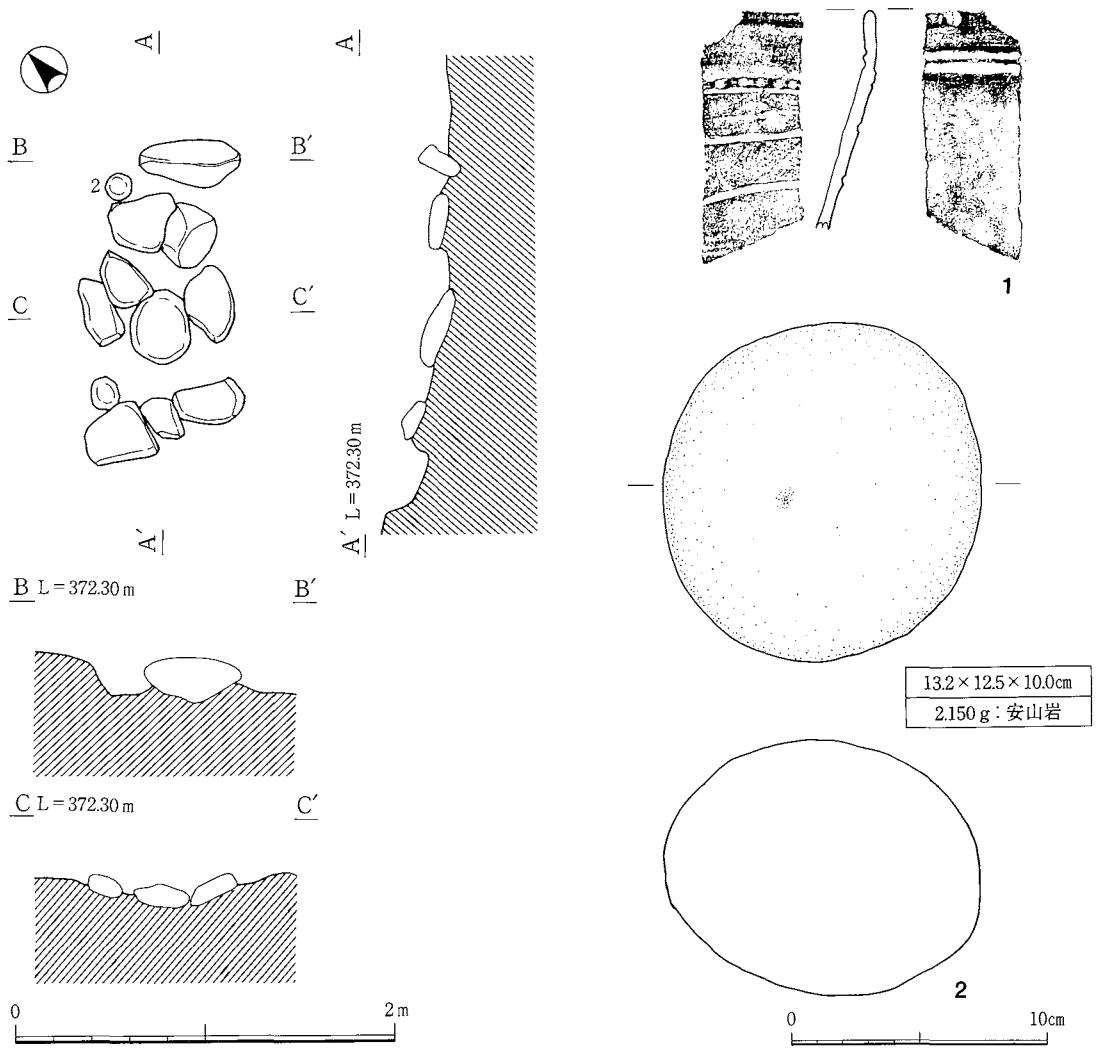
3号配石墓　（第71図、図版20）

位　置／F－7グリッド西側に位置する。　形　態／Ⅱa2類に含まれるが、東側に配される枕石の南に壁石が遺存し、石の抜けた痕跡も検出されている。　規　模／内法長軸1.50m、短軸0.90m、深さ30cm、掘り方長軸1.65m、短軸0.90m、深さ30cmを測る。　長軸方向／N－50°－E。　遺　物／なし。　重　複／なし。4号配石墓に近接する。

4号配石墓　（第71図、図版20・46）

位　置／F－7グリッド中央西側に位置する。　形　態／Ⅱa2類　枕石の対面にあたる長軸西側が攪乱によって消失している。　規　模／内法で長軸0.95m＋α、短軸0.56m、深さ20cm、掘り方長軸1.14m＋α、短軸0.56m、深さ20cmを測る。　長軸方向／N－80°－E。　遺　物／覆土中から加曽利B式の土器片1点が出土している。　重　複／なし。3号配石墓に近接している。　時　期／加曽利B1～2式期。

出土遺物／1は横位の沈線で区画され、斜位の短沈線が引かれる胴部の破片である。色調黒色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好。時期は加曽利B1～2式と思われる。

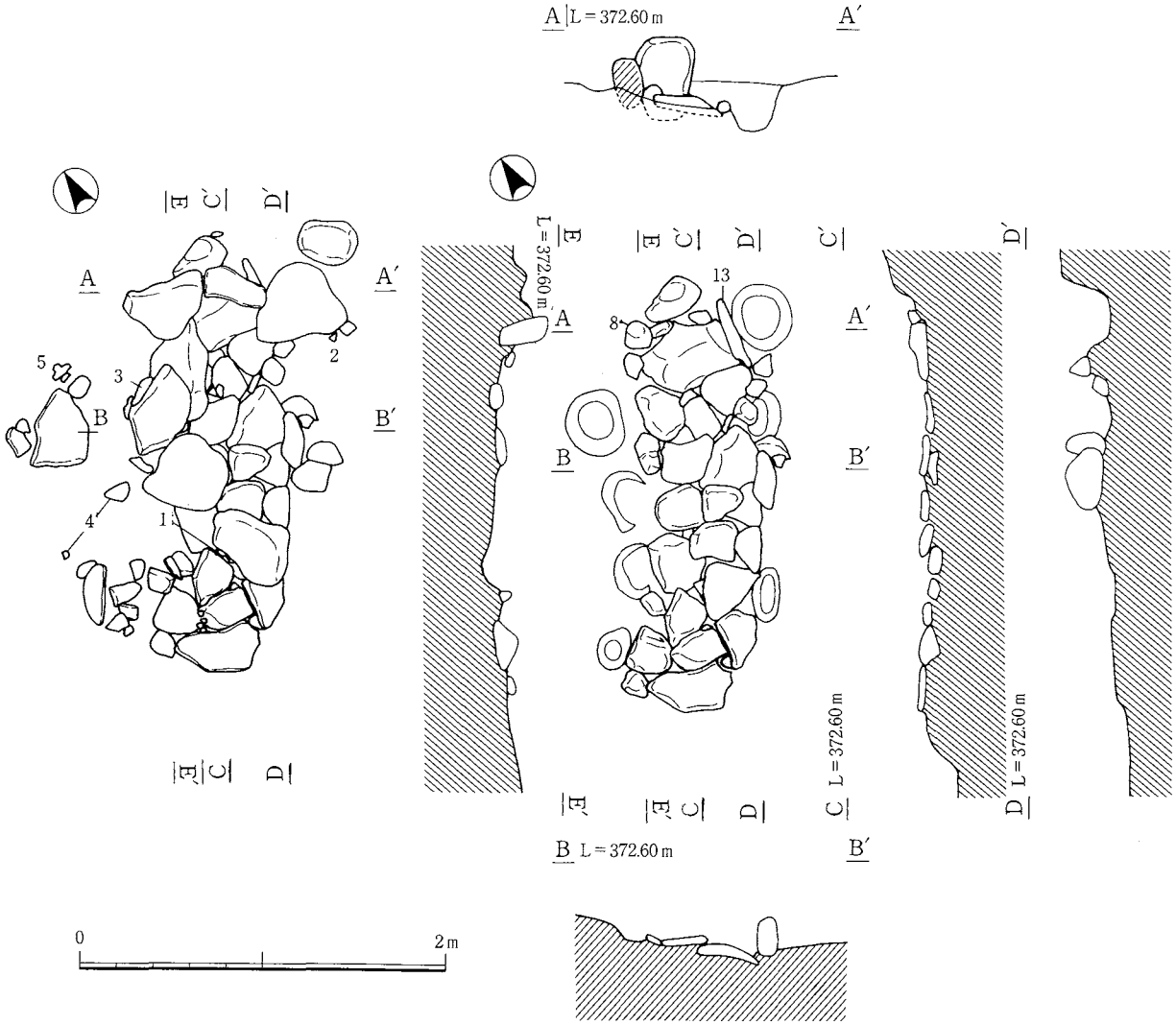


第72図　5号配石墓・出土遺物

5号配石墓　（第72図、図版21・46）

位　置／F－7グリッド南端部に位置する。　形　態／Ⅲa類　11個の石が敷かれ、長軸北東端部には枕石状の石が配される。　規　模／敷石・枕石は長軸1.65m、短軸0.85mの範囲に長方形に配されている。長軸方向／N－38°－E。　遺　物／覆土中から加曽利B2式の口縁部破片1点が出土し、敷石の中に丸石が含まれていた。　重　複／43号土坑と重複する。　時　期／加曽利B2式期。

出土遺物／1は覆土出土の口縁部破片である。無文の口縁部は内屈し、屈曲部外面に細い押圧帯と沈線が廻り、内面には2条の沈線が引かれている。体部文様は沈線による横位の弧線文と考えられ、弧線文内は調整痕のみ施文されている。色調は黒色を呈し、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好。時期は加曽利B2式の後半、B3式に近い段階と考えられる。2は敷石に使用されていた安山岩の丸石で、枕石の横から出土している。

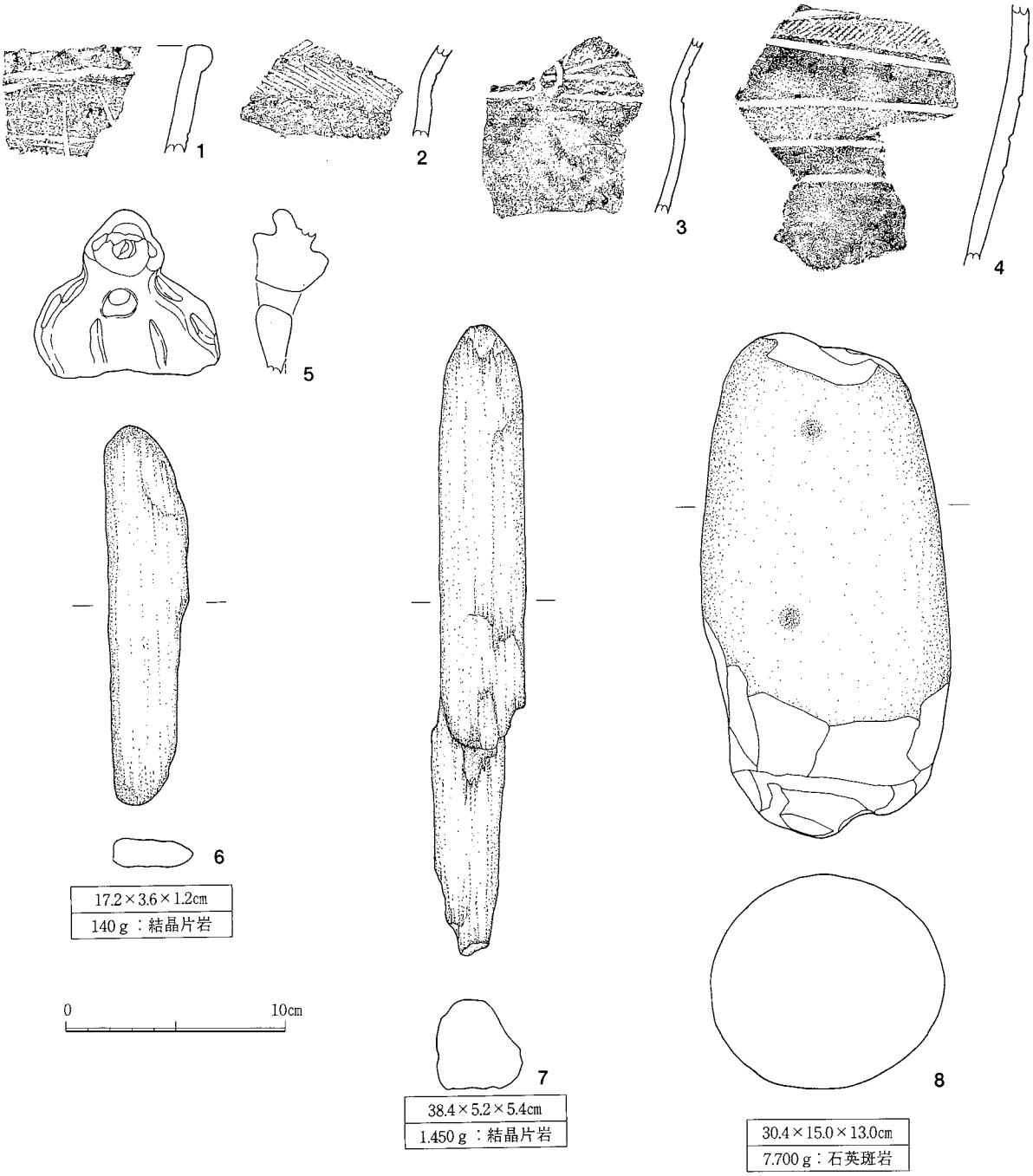


第73図　6号配石墓

6号配石墓　（第73・74図、図版21・46）

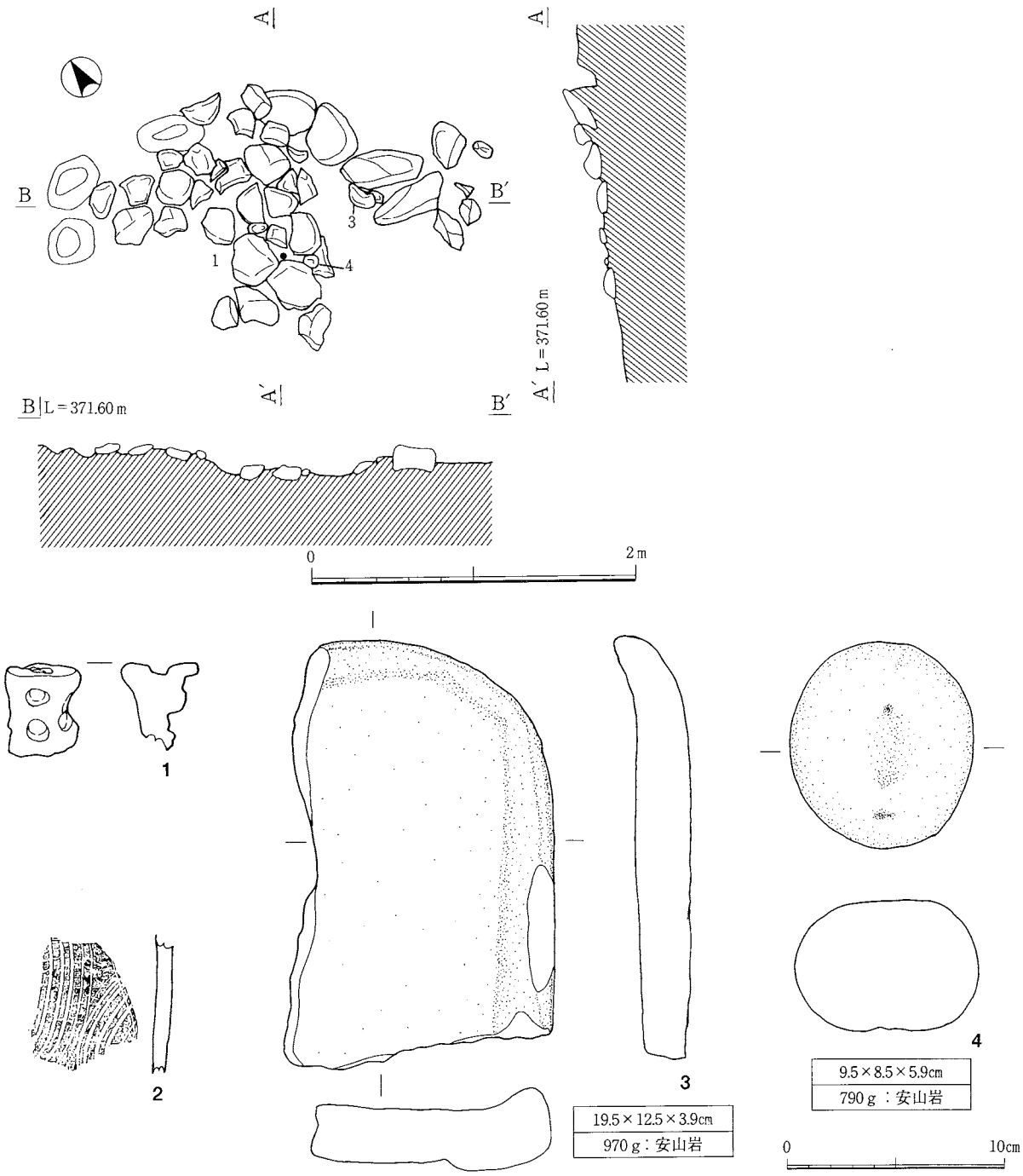
位　置／F－7グリッド中央南側に位置する。　形　態／Ⅲa類　18個の平石・板状礫が敷かれ、隙間に小石が入れられている。北側には枕石と石棒が立てられ、その東側には棒状礫が配されていた。又、長軸東壁に沿って壁石が2個遺存していた。尚、検出時には安山岩の平石等によって被覆されており、石棺型を呈するものが崩れ、敷石と壁石・枕石の一部のみ遺存している可能性が考えられる。　規　模／敷石及び枕石は長軸2.37m、短軸0.70mの長い長方形に配され、深さ26cmを測る。　長軸方向／N－30°－E。

遺　物／敷石面から加曽利B2～3式の土器片が少量出土し、枕石の西側から石棒、東側からは棒状礫が出土している。　重　複／43号土坑と接している。　時　期／加曽利B2～3式期。



第74図　6号配石墓出土遺物

出土遺物／1は折り返しの口縁に押圧が加えられ、体部に縦方向の沈線が引かれる加曽利B2式期の粗製土器でB3式に近い段階の所産と考えられる。2は羽状の沈線が施される加曽利B2～3式の胴部破片。3・4は3単位把位把手深鉢の胴部破片と思われる。3は屈曲部上位に沈線で文様が描かれ、対弧文が施文される。沈線間には縄文が施文されず、器面調整のみ施されている。4は横位及び弧状の沈線で区画され、上部の沈線間のみ細縄文が施文されている。3・4ともに時期は加曽利B2式。5は加曽利B2式の3単位把手深鉢把手部分である。6・7は結晶片岩の棒状礫で6が覆土出土。7は枕石横から出土している。8は枕石横に立てられていた石英斑岩の石棒で上下端部に整形痕が残されている。

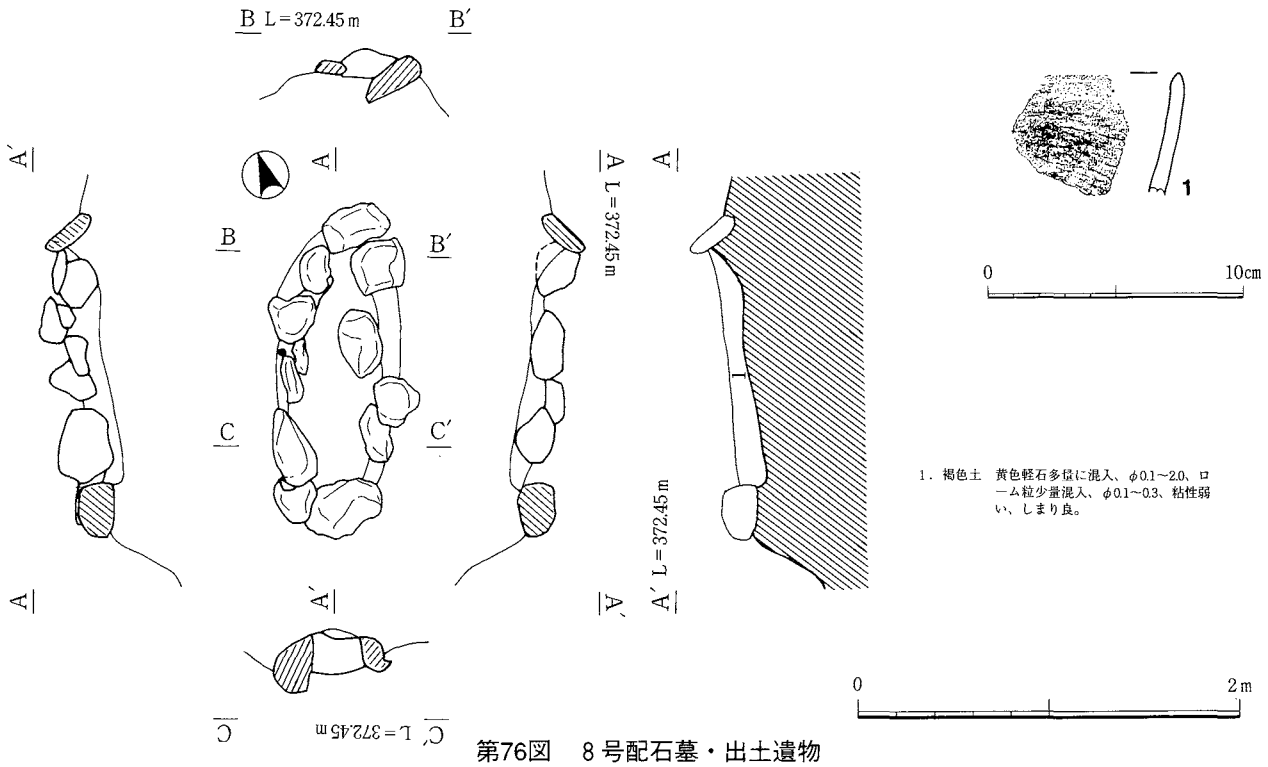


第75図　7号配石墓・出土遺物

7号配石墓　（第75図、図版21・47）

位　置／F－7グリッド南東に位置する。　形　態／Ⅲa類　現状ではコの字状に石が敷かれ、枕石状の石が北東端部に配されている。　規　模／敷石部分で南北方向1.50m、東西方向1.40mを測る。　長軸方向／明確ではないが、北東端部の枕石状の石を基準とするとN－38°－Eを指向する。　遺　物／敷石部分から土器把手部分と磨石が出土し、枕石横の石の間から石皿の破損品が出土している。　重　複／なし。時　期／加曽利B2式期。

出土遺物／1は把手部分で円形の盲孔が穿たれる。2は胴部の破片で櫛状工具による弧状の沈線が縦方向に引かれている。1・2ともに加曽利B2式の範疇と考えられる。3は安山岩の石皿破損品。4は安山岩の磨石である。

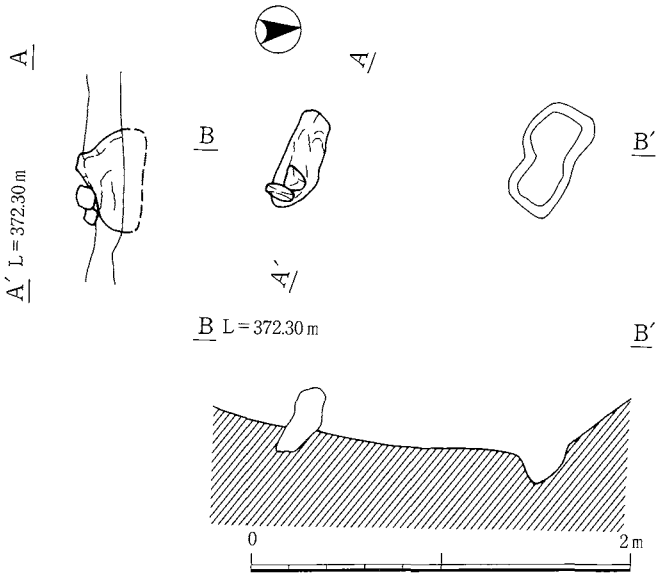


第76図　8号配石墓・出土遺物

8号配石墓　（第76図、図版21・47）

位　置／F－8グリッド南西端に位置する。　形　態／平積み1段のⅠa2類。　規　模／内法で長軸1.20m、短軸0.40m、掘り方長軸1.50m、短軸0.65m、深さ20cmを測る。　長軸方向／N－22°－E。　遺　物／掘り方部分壁面に接して無文土器の口縁部破片が出土している。　重　複／南端部が2号配石墓と接している。　時　期／明確ではないが加曽利B2～3式期か。

出土遺物／1は無文の口縁部破片で、加曽利B2～3式の粗製土器と考えられる。



第77図　10号配石墓

10号配石墓　（第77図、図版21）

位　置／F－7グリッド南西に位置する。

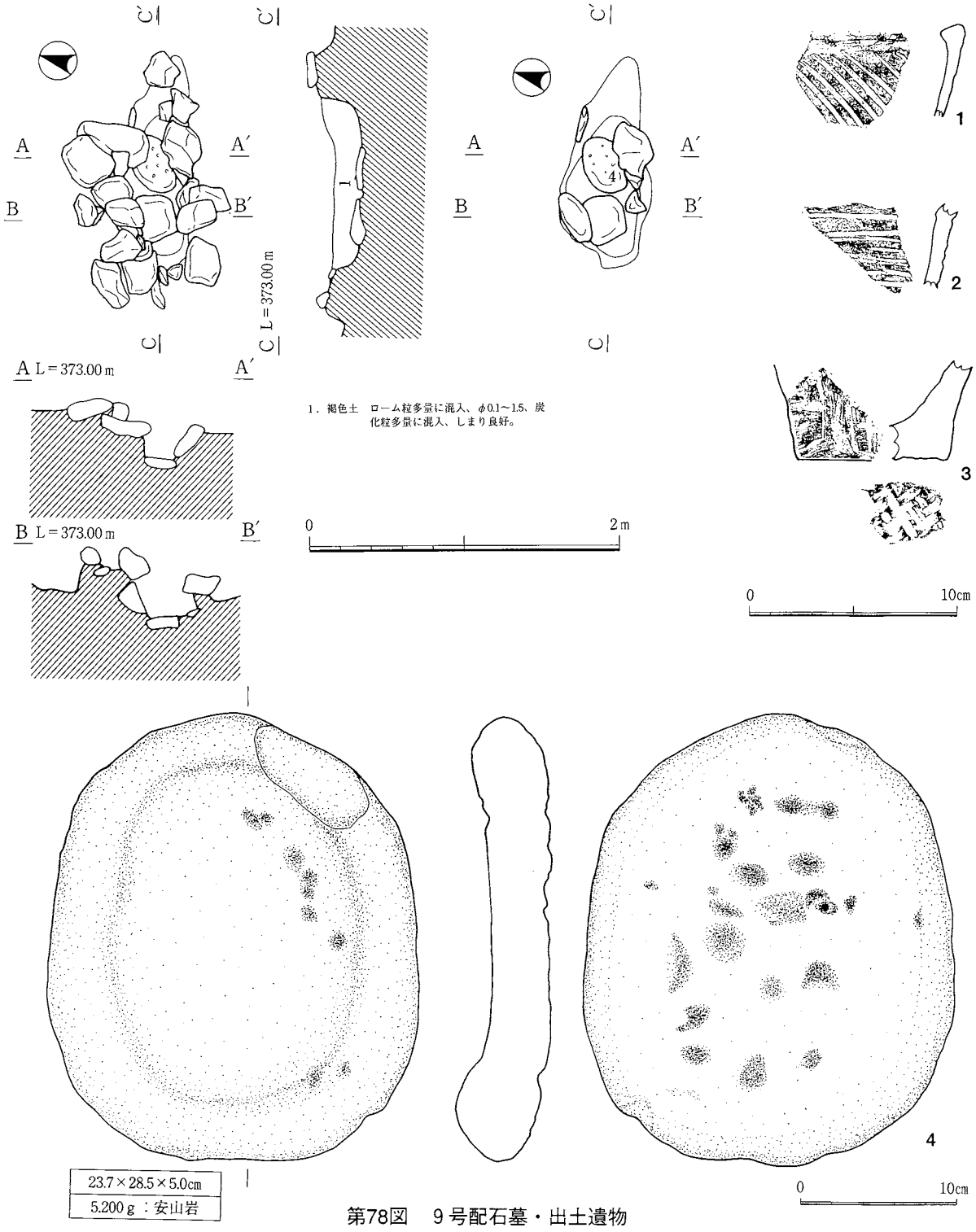
形　態／現状ではⅡa2類だが、枕石の対面に当たる位置から石の抜けた痕跡が検出されており、Ⅱa1類の可能性が高い。

規　模／枕石と対面の小土坑間で1.50mを測る。短軸・深さは不明。

長軸方向／N－10°－E。

遺　物／なし。

重　複／なし。

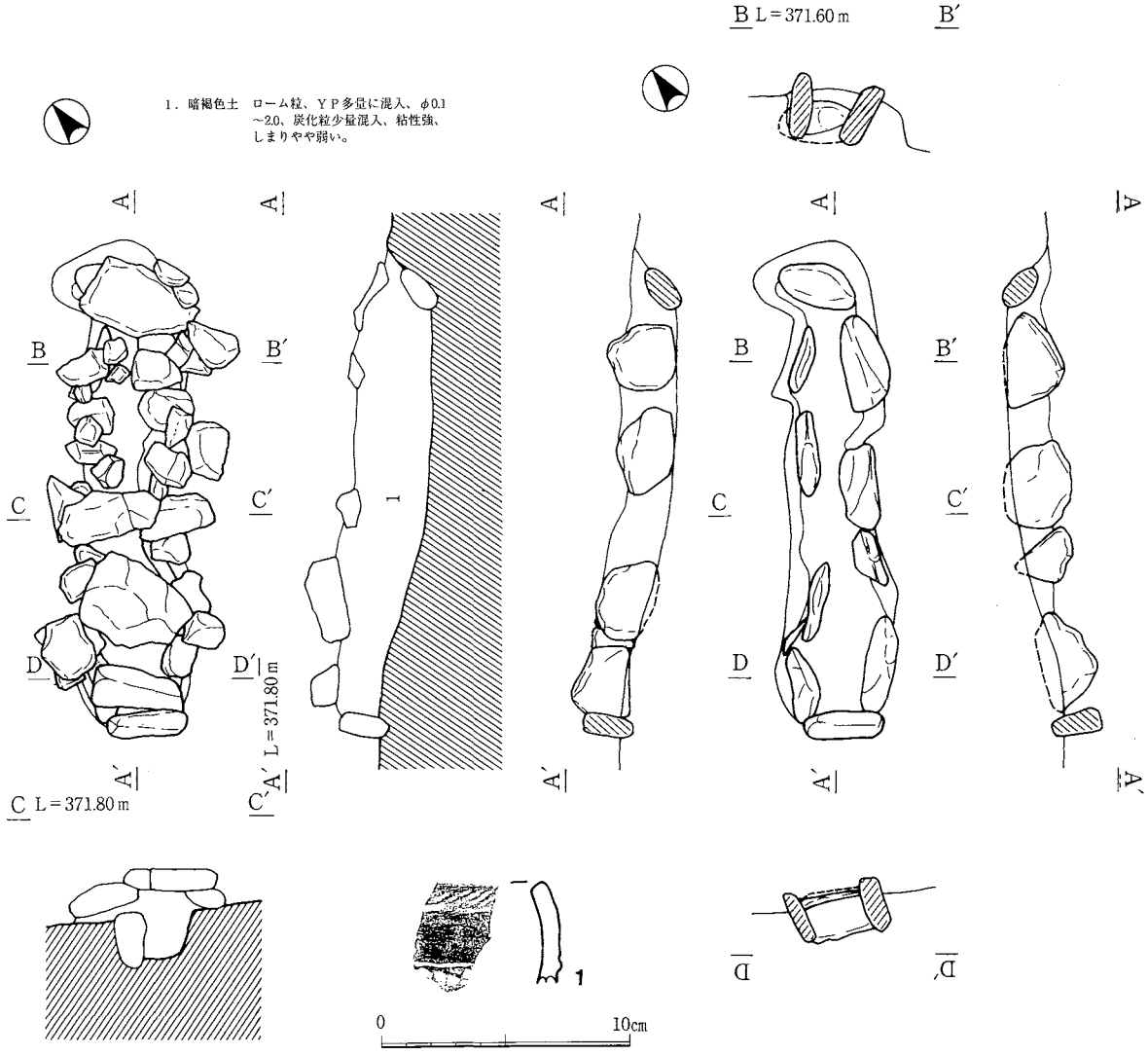


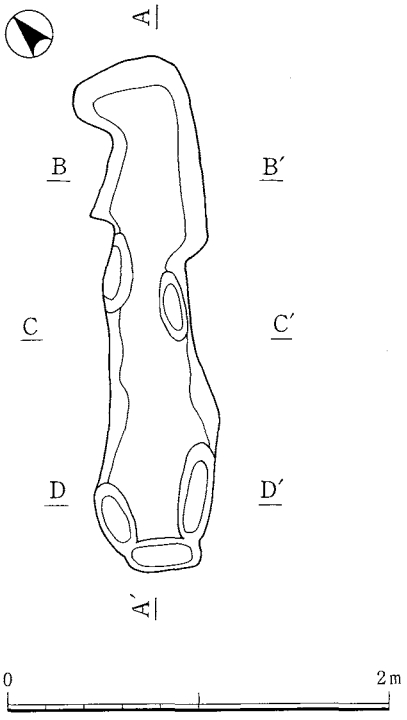
第78図　9号配石墓・出土遺物

9号配石墓　（第78図、図版21・47）

位　置／F－7グリッド東端に位置する。　形　態／Ⅲb類　楕円形の土坑底面に石皿を含む平石2個が置かれ、土坑の上場に沿って石が配されている。　規　模／土坑長軸1.35m、短軸0.60m、深さ25cmを測る。長軸方向／N－78°－E。　遺　物／覆土中から少量の土器片が出土し、底面から石皿が出土している。重複／なし。　時期／加曽利B3式期。

出土遺物／1は口縁部が内側に把厚し、外面に斜方向の沈線のみ施文される加曽利B3式の口縁部破片。2は横位の沈線が施文される胴部破片。3は網代痕のある底部の破片である。4は底面出土の石皿兼多孔石で、石材は安山岩である。





11号配石墓　（第79図、図版22・47）

位　置／Ｆ－８グリッド南端部に位置する。

形　態／Ｉｂ１類だが、平積みの上に置かれる小石・横積みはやや不規則に配され、蓋石は板状礫と平石で４枚が遺存している。掘り方は隅丸長方形。

規　模／内法で長軸2.35ｍ、短軸0.40ｍ、深さ40cmを測るが、壁石と壁石が離れており、間延びした形態の可能性がある。現状での掘り方は長軸2.70ｍ、短軸0.60ｍを測り、石のくい込み痕が残る。

長軸方向／Ｎ－30°－Ｅ。

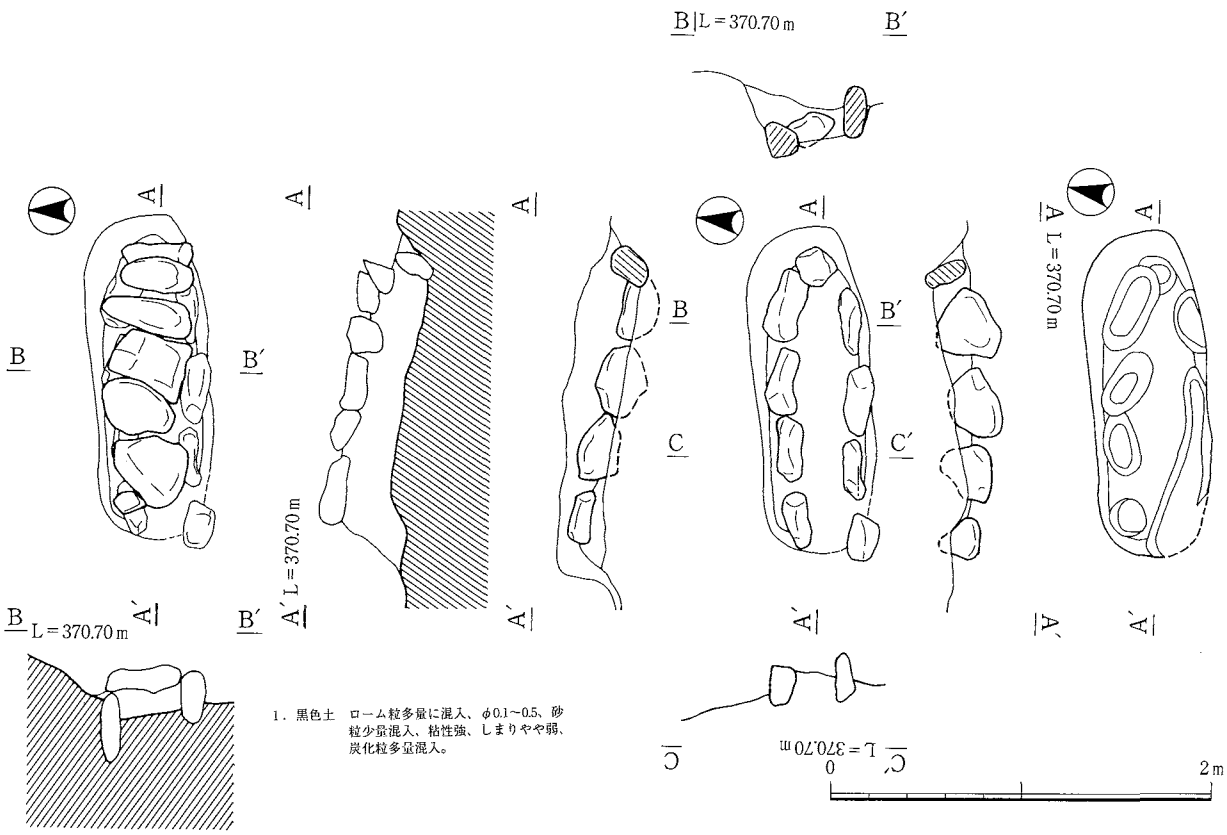
遺　物／覆土中から口縁部片１点のみ出土している。

重　複／北東端部が27号配石墓と接している。

時　期／加曽利Ｂ２～３式期。

出土遺物／１は覆土出土の口縁部片で、横位の沈線で区切られた口唇部に細縄文が施文され、口縁の無文部下位に沈線と押圧が加えられた隆帯が廻ると考えられる。時期は加曽利Ｂ２～３式。

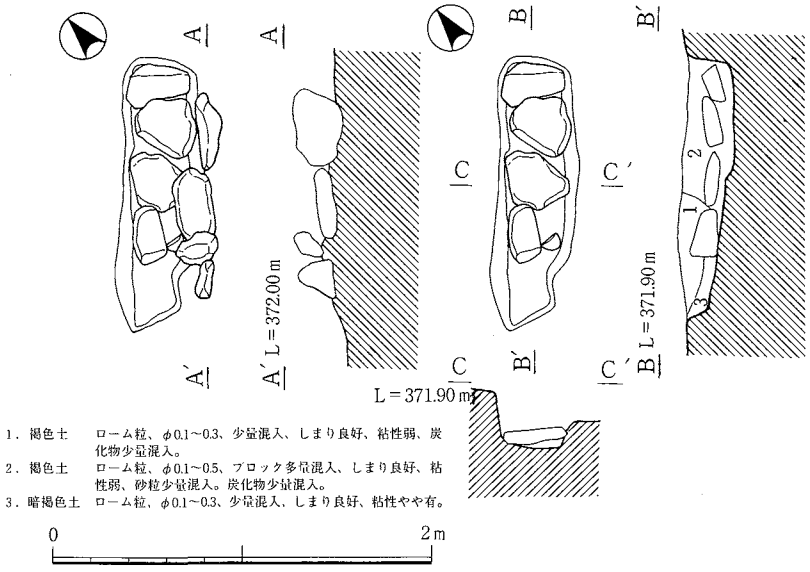
第79図　11号配石墓・出土遺物



第80図　12号配石墓

12号配石墓　（第80図、図版22）

位　置／G－8グリッド北東端部に位置する。　形　態／Ⅰa1類　壁石9個が楕円形に配され、川原石を用いた密な蓋石6枚が検出されている。長軸西端部は湧水により崩落している。　規　模／内法で長軸1.40m、短軸0.30m、深さ30cm、楕円形を呈する掘り形は長軸1.70m、短軸0.60mを測り、石のくい込み痕が残る。長軸方向／N－83°－E。　遺　物／なし。　重　複／なし。



第81図　13号配石墓

13号配石墓　（第81図、図版22）

位　置／F－8グリッド南西に位置する。

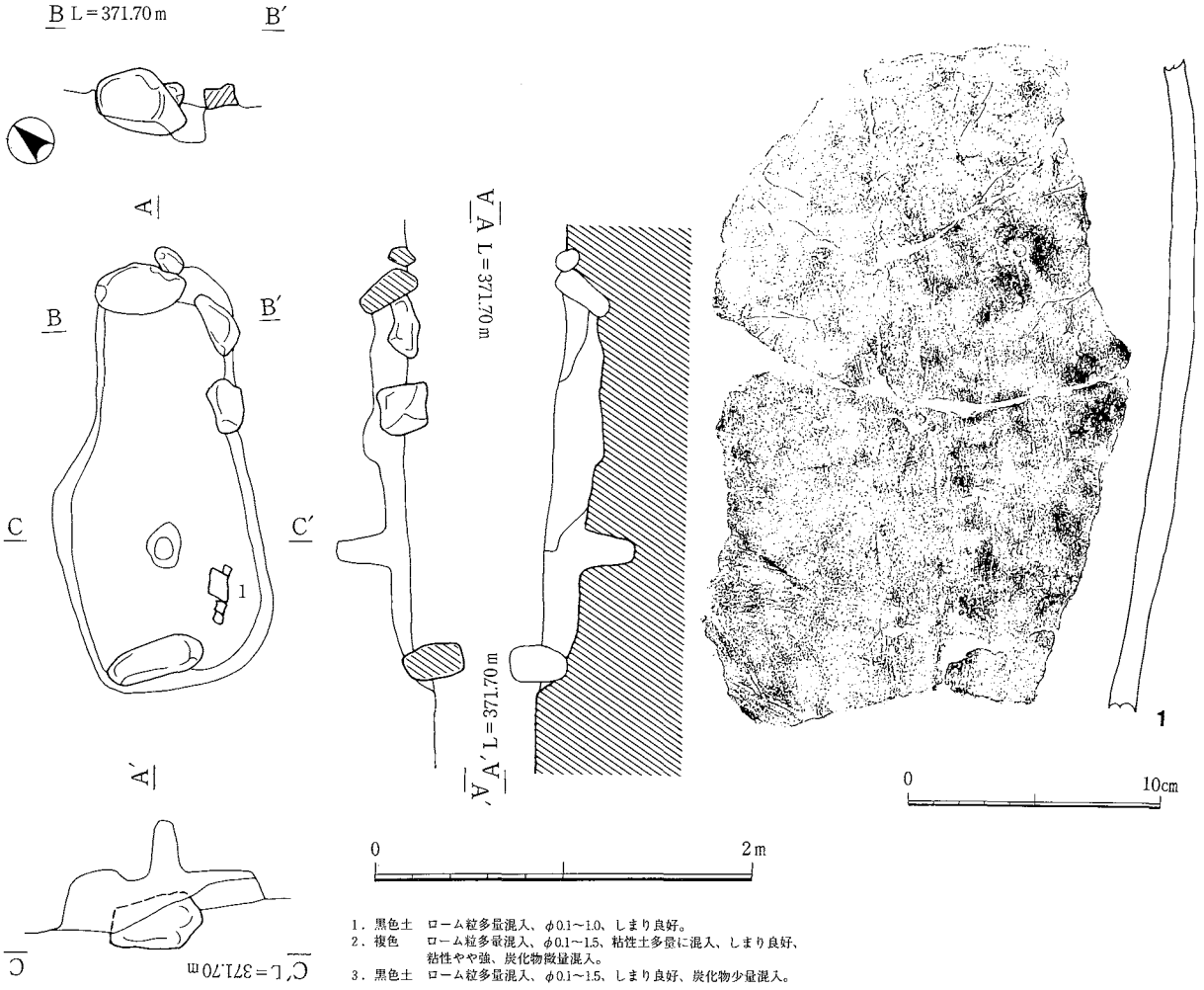
形　態／Ⅲb類　隅丸長方形の掘り込み東側の上場に沿って4個の石が配され、底面に4個の平石が置かれていた。

規　模／長軸1.45m、短軸0.44m、深さ26cmを測る。

長軸方向／N－35°－E。

遺　物／なし。

重　複／なし。



第82図　14号配石墓・出土遺物

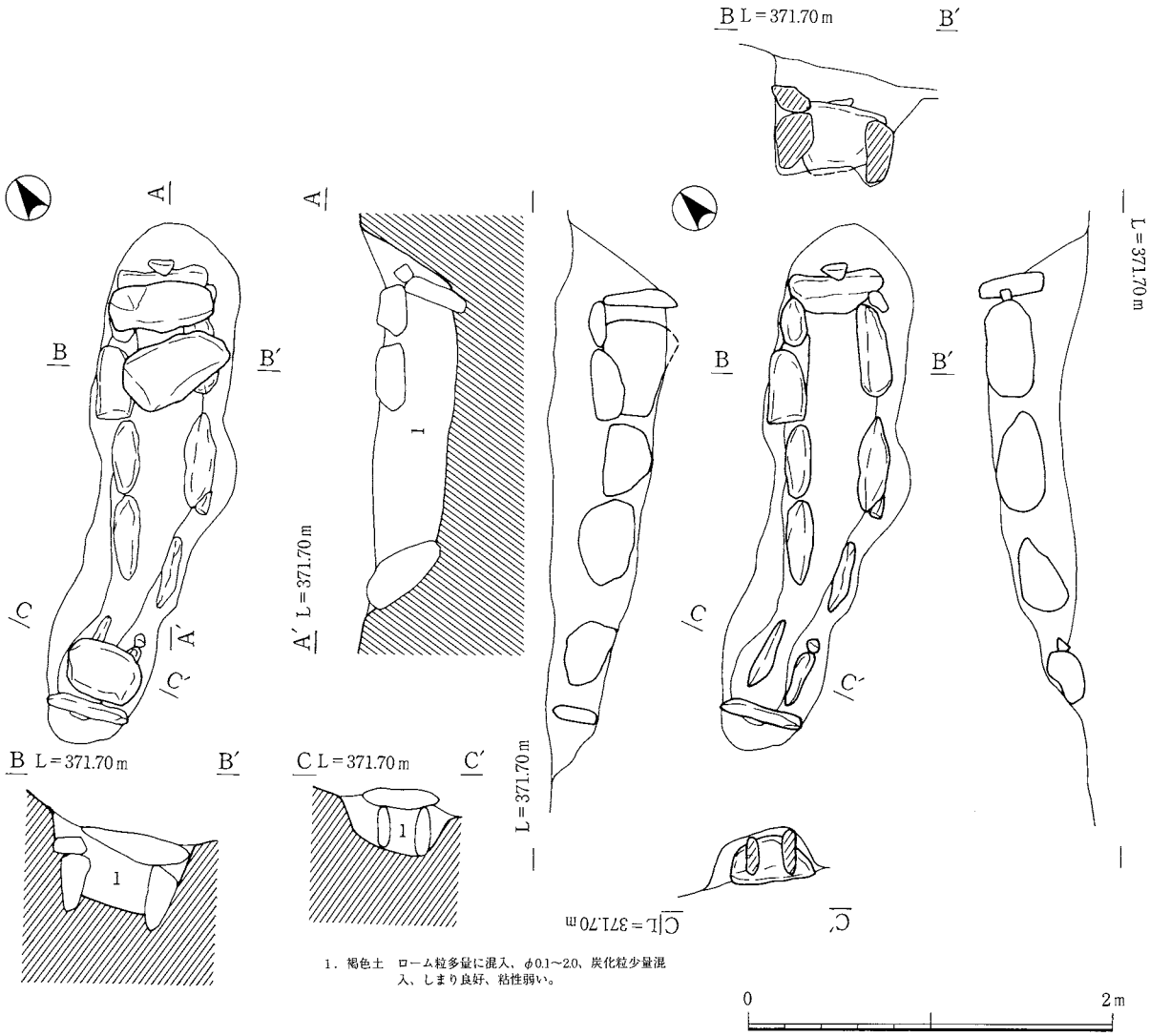
14号配石墓　（第82図、図版22・47）

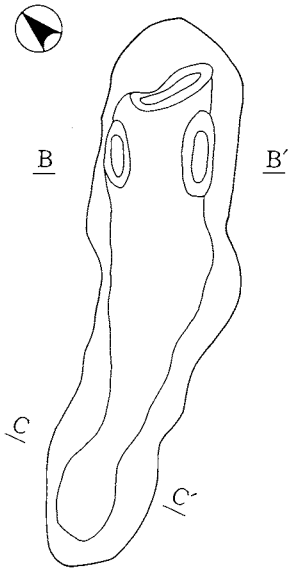
位　置／G－8グリッド北西に位置する。　形　態／Ⅱａ1類　不整隅丸長方形を呈する掘り込みの長軸両端部に石が配され、壁石状の石2個とピット1基が検出されている。　規　模／内法で長軸1.70m、短軸北東0.70m、南西1.05m、深さ37cm、掘り込みは長軸2.20mを測る。ピットは径20cm、深さ30cmを測る。　長軸方向／N－46°－E。　遺　物／南側コーナー付近から無文粗製土器の大形破片が出土している。

重　複／北側コーナーから北西壁部分にかけて16号配石墓と接している。

時　期／加曽利B3式～高井東式期。

出土遺物／1は無文の胴部大形破片で、外面下半部には縦方向のナデ・ミガキのみ加えられている。時期的には加曽利B3式～高井東式に伴う無文粗製土器と考えられる。





第83図　15号配石墓

15号配石墓　（第83図、図版23）

位　置／Ｆ－８グリッド南西に位置する。

形　態／Ｉａ１類　くの字状に湾曲する長楕円形の掘り込み長軸両端部に枕石状の石を配し、壁石は両壁に４個づつ配される。蓋石は中央部を除いて３枚検出されている。くの字状を呈する掘り込みは、湧水によって間延び・変形したものと推測される。

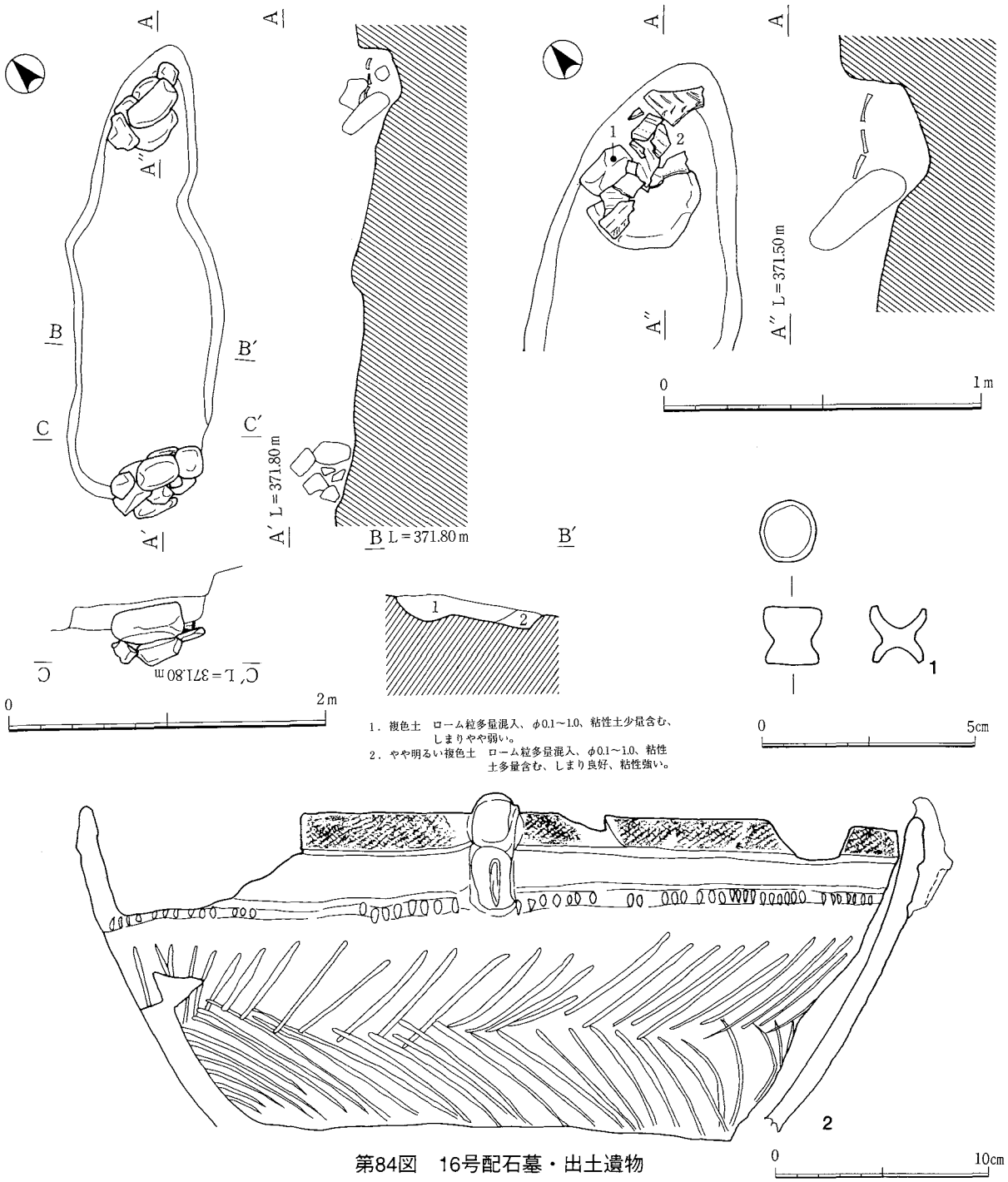
尚、北側コーナー部の壁石１個のみ上部に横積みが施されるが、積極的なものではなく、その部分の蓋石を安定させる為のものと判断し、Ｉａ１類に分類した。

規　模／内法長軸2.30ｍ、短軸0.30ｍ、深さ60㎝、掘り方長軸2.95ｍ、短軸0.65ｍを測る。

長軸方向／Ｎ－38°－Ｅ。

遺　物／なし。

重　複／17号配石墓・28号配石墓と接している。

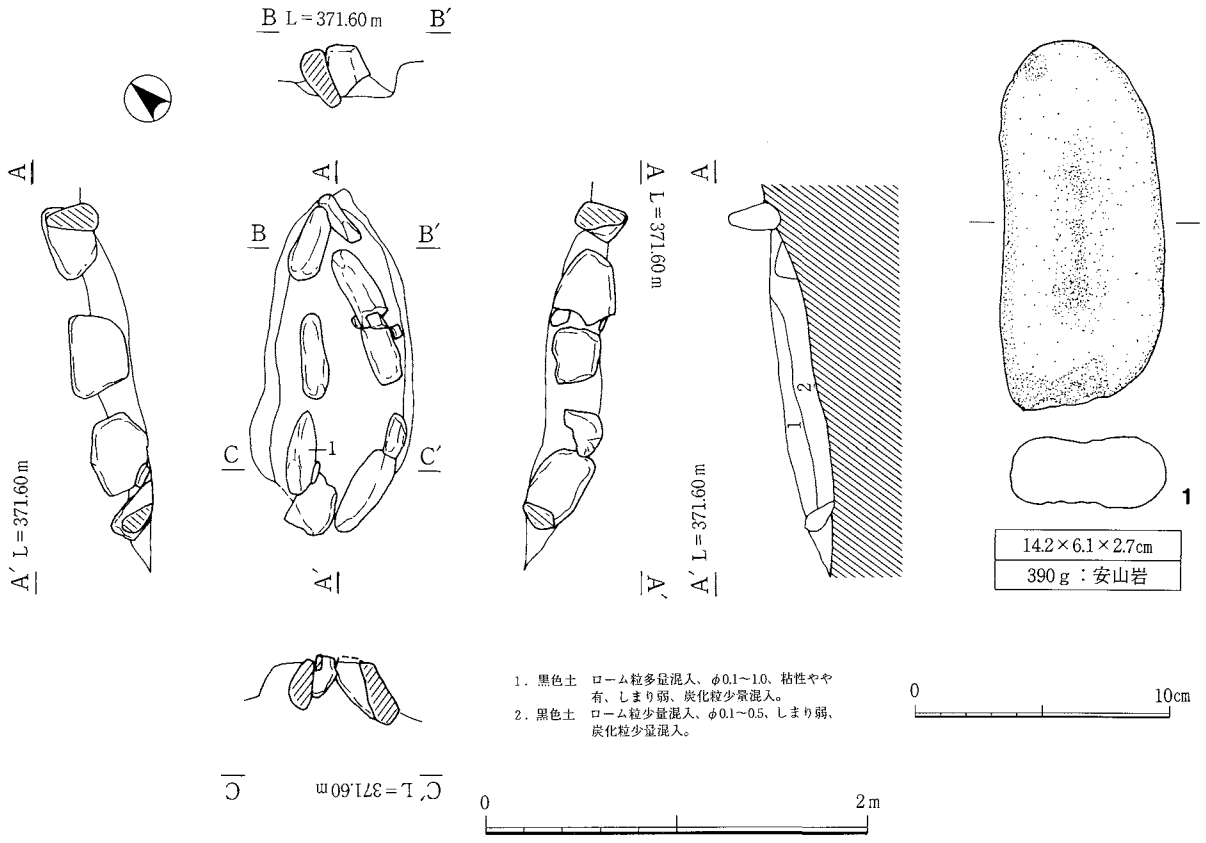


第84図　16号配石墓・出土遺物

16号配石墓　（第84図、図版24・47）

位　置／Ｆ－８グリッド南西に位置する。　形　態／Ⅱｂ１類　長楕円形を呈する掘り込みの長軸両端部に組石状の石が配されている。　規　模／内法で長軸1.85ｍ、短軸0.95ｍ、深さ20cm、掘り方長軸2.35ｍを測る。長軸方向／Ｎ－40°－Ｅ。　遺　物／北西端部の組石内から小形赤彩耳栓と鉢型土器の大破片が潰れた状態で出土している。　重　複／14号配石墓・15号配石墓と接している。　時　期／加曽利Ｂ３式期。

出土遺物／１は鼓形を呈する小形赤彩耳栓で長1.8cm、最大幅1.8cm、抉れ部幅1.2cmを測る。２は加曽利Ｂ３式の鉢型土器である。口唇部に横位の沈線で区画された細縄文帯が廻り、４単位と思われる楕円形の貼り付けが施される。口縁部には無文帯と刺突列が廻り、体部には羽状沈線文が横位に施文されている。



第85図　17号配石墓・出土遺物

17号配石墓　（第85図、図版24・47）

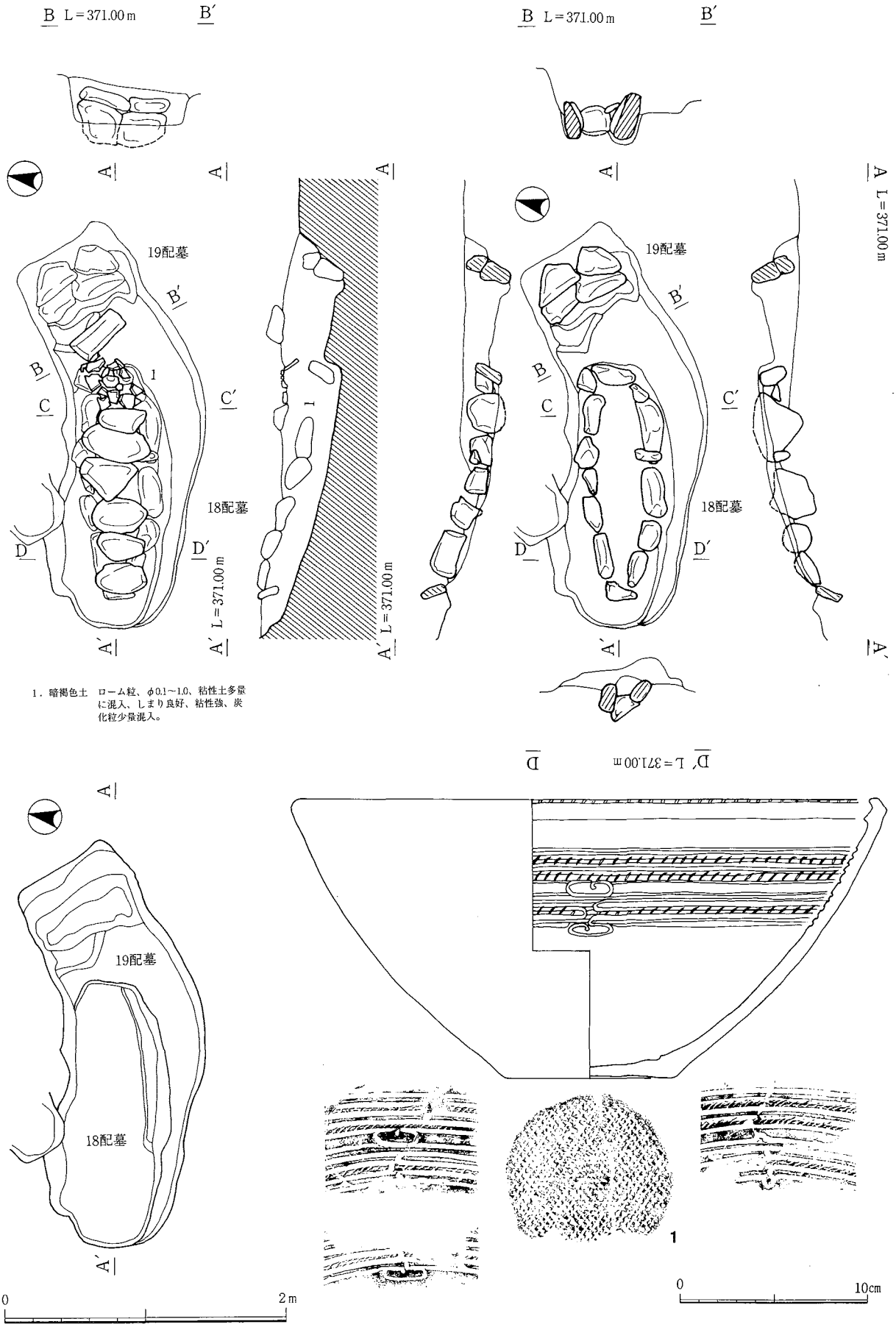
位　置／Ｆ－８グリッド南側に位置する。　形　態／Ⅰａ２類　楕円形の掘り込みに８個の壁石と小石が配されるが、湧水により変形していると考えられる。　規　模／内法で長軸1.50ｍ、短軸0.40ｍ、深さ30㎝、掘り方長軸1.70ｍ、短軸0.85ｍを測る。　長軸方向／Ｎ－40°－Ｅ。　遺　物／南西端部の壁石に接する床面から凹石一点が出土している。　重　複／21号配石墓に接している。

18号・19号配石墓　（第86図、図版26・47）

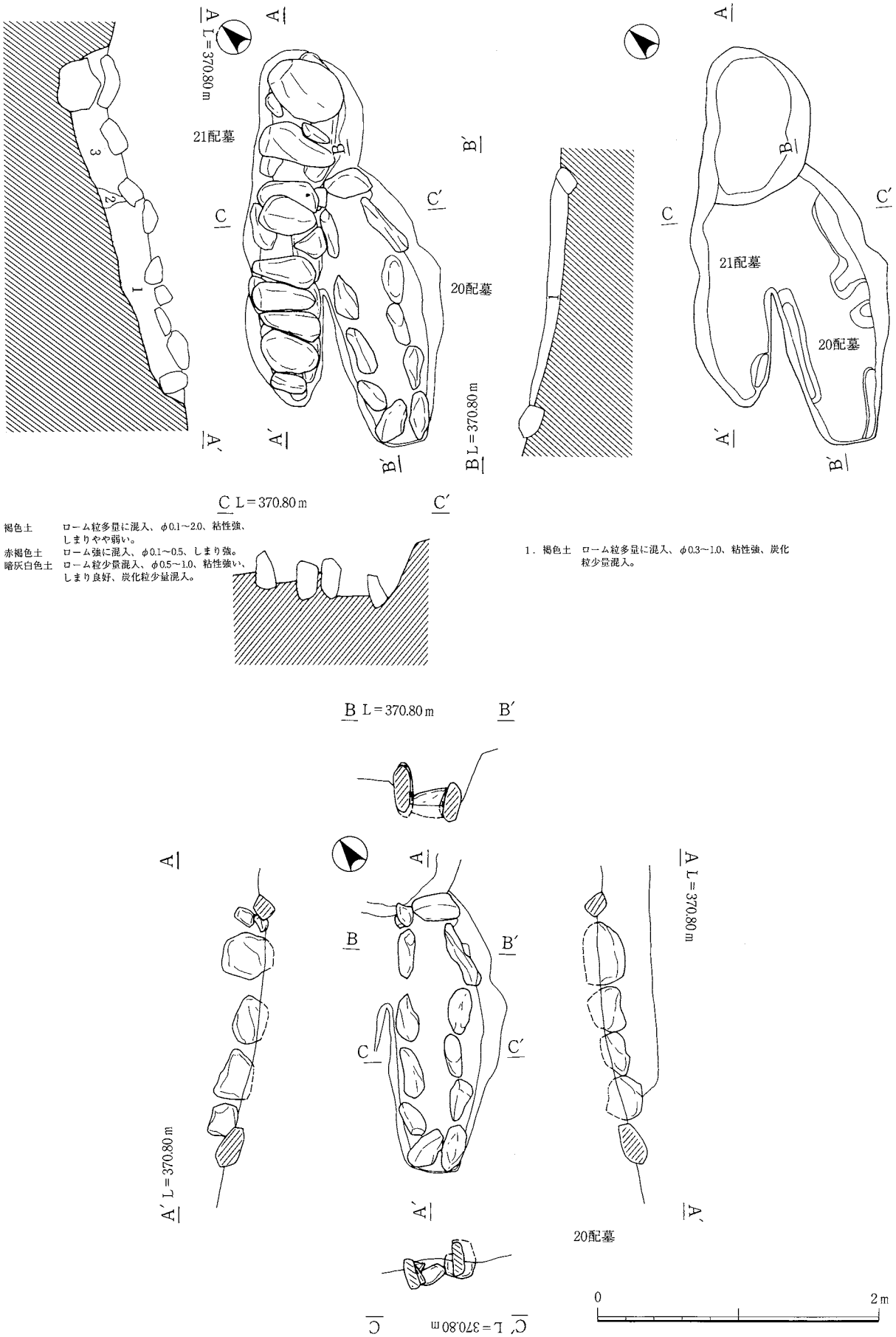
位　置／Ｆ－８グリッド南東端部より重複して検出され、19号配石墓が古い時期の所産と考えられる。

18号配石墓　形　態／Ⅰａ１類　隅丸長方形の掘り込みに枕石と壁石が配され、蓋石は浅鉢が伏せられていた長軸東端部を除いて密に被せられている。　規　模／内法で長軸1.40ｍ、短軸0.30ｍ、深さ40㎝、掘り方長軸1.90ｍ、短軸0.80ｍを測る。　長軸方向／Ｎ－67°－Ｅ。　遺　物／長軸東端部上から浅鉢が伏せられた状態で出土している。　時　期／加曽利Ｂ１式期。　出土遺物／１は加曽利Ｂ１式の外面無文浅鉢である。発達した内面文様が描かれ、底部には網代痕が明瞭に残る。

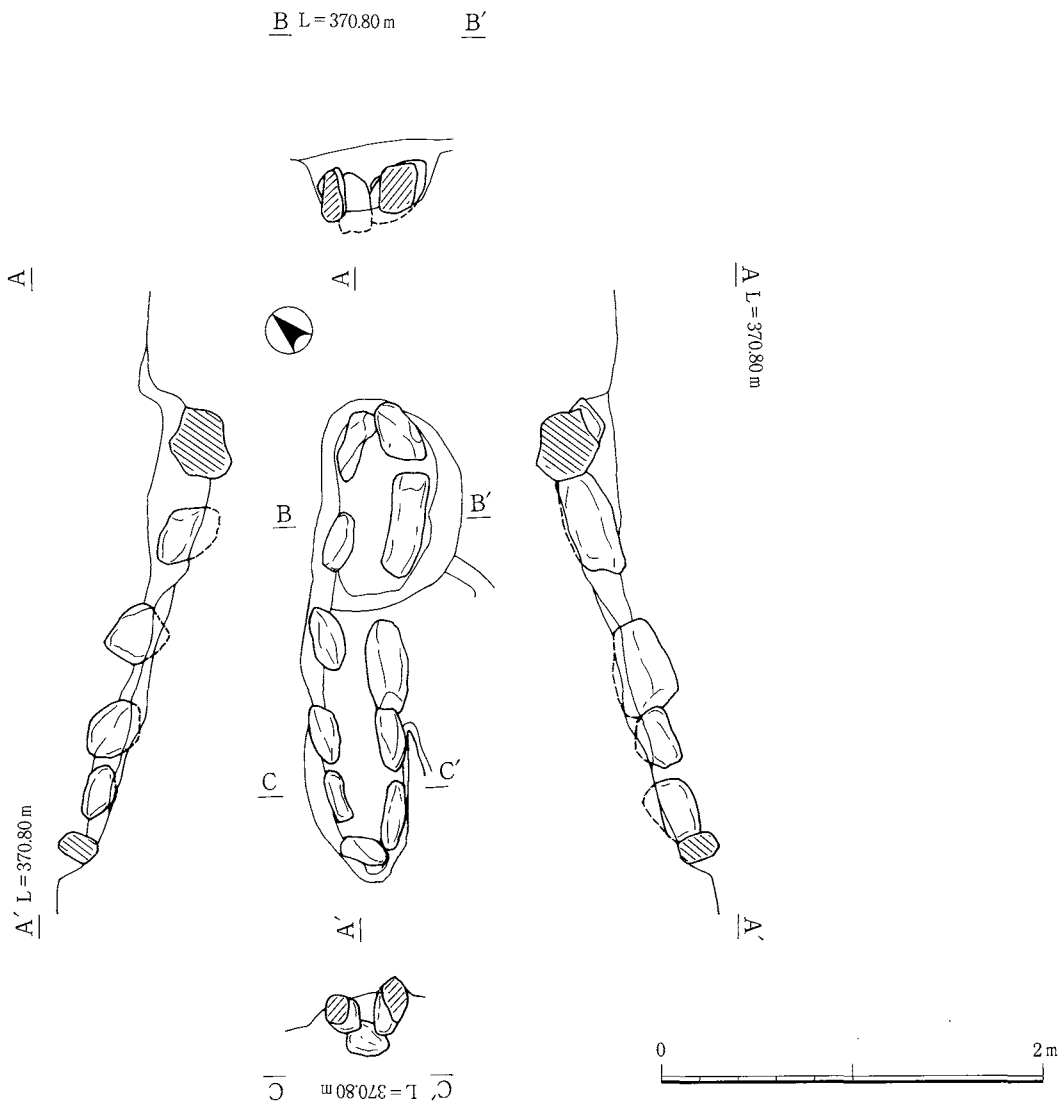
19号配石墓　形　態／Ⅱｂ２類　長軸東端部に横積み２段の組石が配される。　規　模／内法で長軸1.50ｍ±α、短軸0.85ｍ、深さ40㎝、掘り込み長軸1.90ｍ±αを測る。長軸方向／Ｎ－52°－Ｅ。
遺　物／なし。　時　期／加曽利Ｂ１式以前か？



第86図　18号、19号配石墓・出土遺物



第87図　20号・21号配石墓



第88図　21号配石墓

20号配石墓　（第87図、図版26）

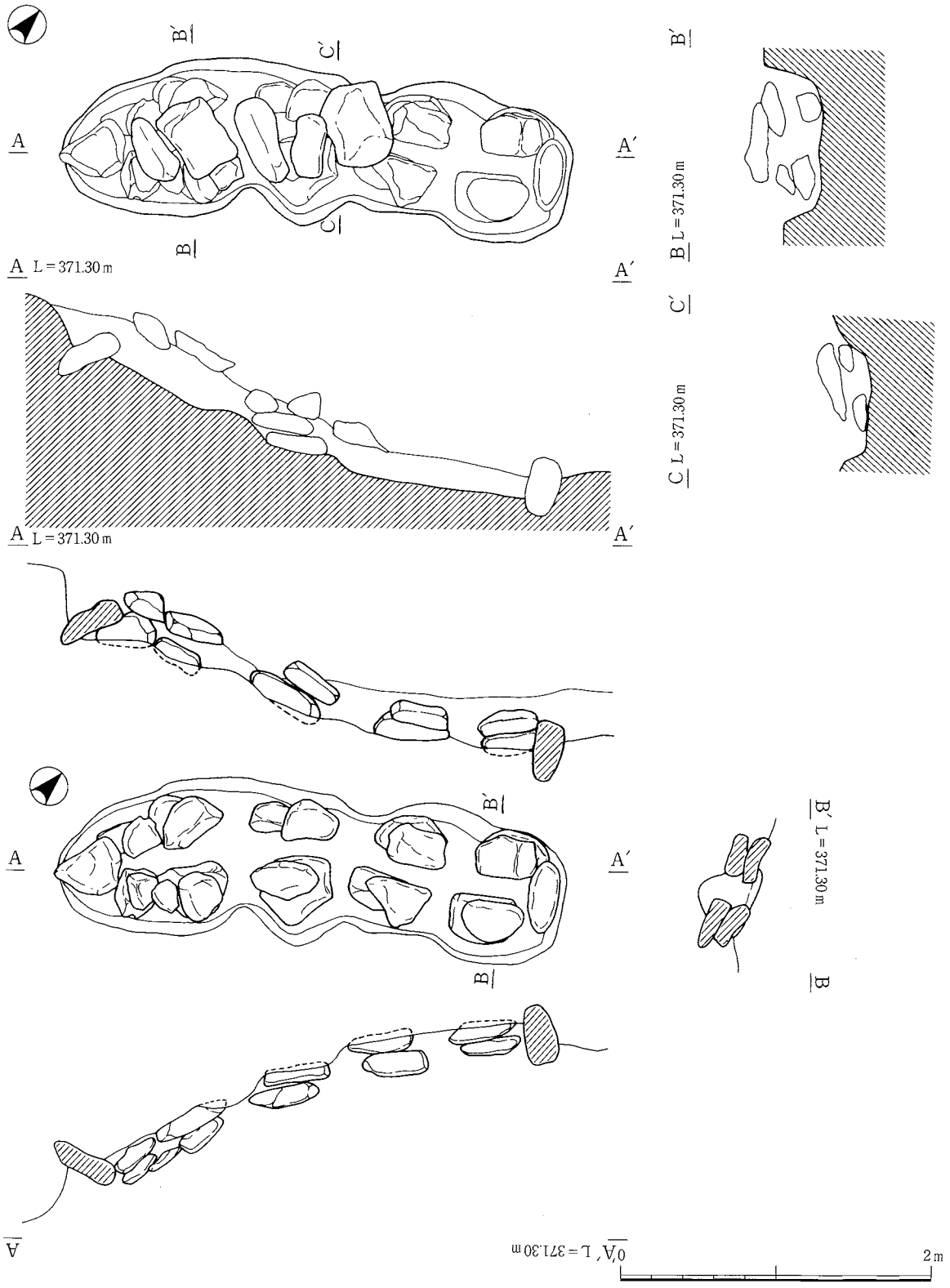
位　置／Ｆ－８グリッド南東端部に位置する。　形　態／Ｉａ２類　隅丸長方形の掘り込みに11個の石が平積み１段に配される。　規　模／内法で長軸1.50ｍ、短軸0.35ｍ、深さ38㎝、掘り方長軸1.90ｍ、短軸0.80ｍを測るが、若干間延びしている可能性が高い。　長軸方向／Ｎ－33°－Ｅ。　遺　物／なし。　重　複／北コーナー部分で21号配石墓と接し、掘り方部分が重複する。

21号配石墓　（第87・88図、図版26）

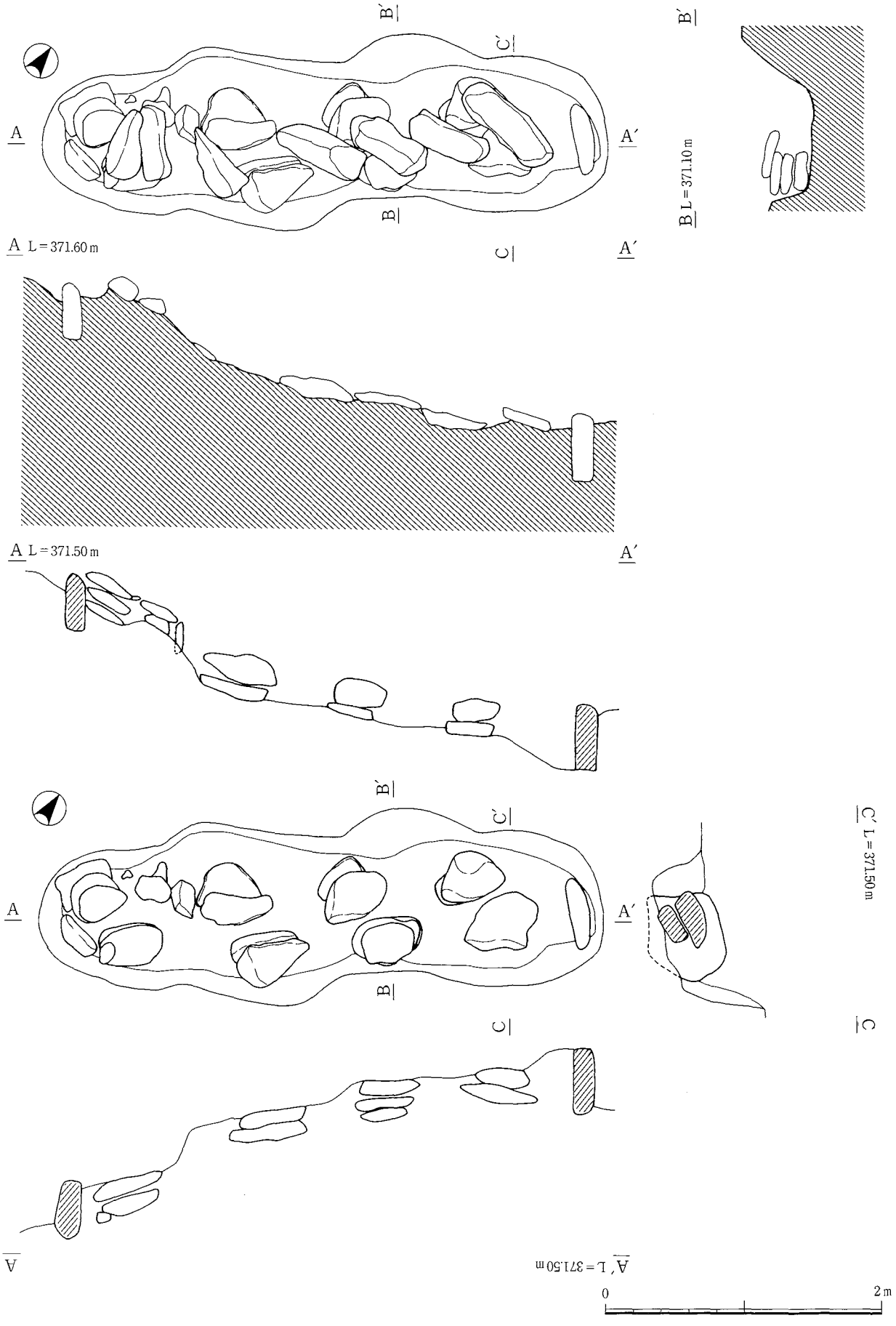
位　置／Ｆ－８グリッド南東端部に位置する。　形　態／Ｉａ１類　長楕円形の掘り込みに11個の石が平積み１段に配され、蓋石は安山岩の川原石を使用し、８枚被せられている。　規　模／内法で長軸2.10ｍ、短軸0.25ｍ、深さ34㎝、掘り方長軸2.55ｍ、短軸0.75ｍを測るが、間延び・変形していると考えられる。長軸方向／Ｎ－42°－Ｅ。　遺　物／なし。　重　複／20号配石墓・27号配石墓と接する。

22号配石墓　（第89図、図版26・27）

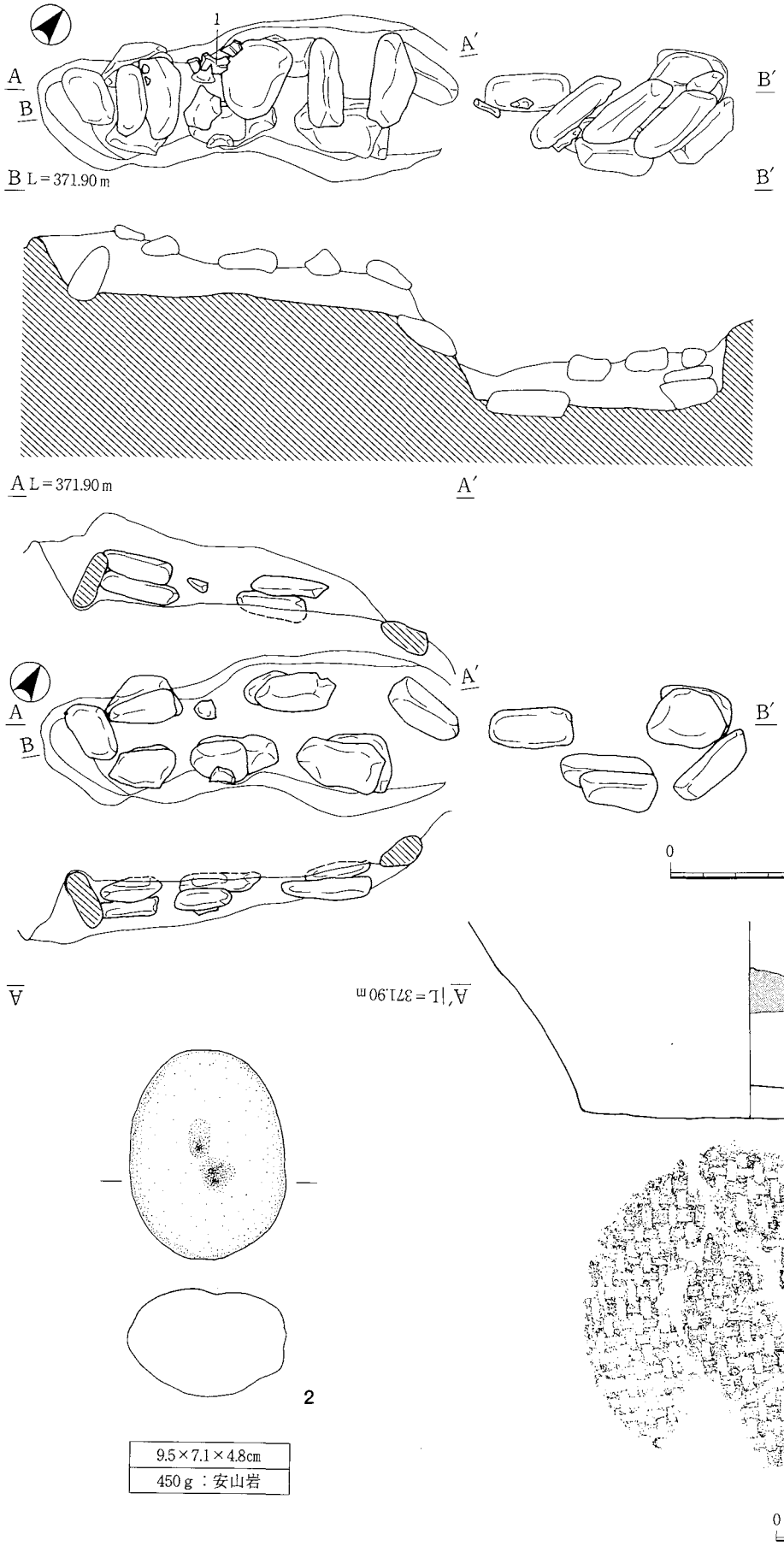
位　置／Ｆ－８グリッド南西に位置する。　形　態／Ｉｃ１類　横積み２段の壁石と長軸両端部に枕石状の石が検出され、５枚の蓋石が確認されている。形態的には湧水により全体が崩落し、間延びしている状況である。　規　模／現状で長軸3.30ｍ、短軸0.80ｍの範囲に石が検出され、最大90㎝の高低差がある。　長軸方向／Ｎ－47°－Ｅ。　遺　物／なし。　重　複／なし。



第89図　22号配石墓


B´
C´
A
A´
B
C
A L=371.60m
A´
B´
B L=371.10m
A L=371.50m
A´
B´
C´
A
A´
B
C
C´ L=371.50m
A´ L=371.50m
0
2m

第90図　23号配石墓



第91図　24号配石墓・出土遺物

23号配石墓　（第90図、図版26・27）

位　置／Ｆ－８グリッド東側に位置する。　形　態／Ｉｃ１類　横積み２～３段の壁石と長軸両端部に枕石状の石が検出され、安山岩の板状礫を主体とする蓋石７枚が確認されている。形態的には湧水により全体が崩落し、間延びしている。　規　模／現状で長軸3.80ｍ、短軸0.90ｍの範囲に石が検出され、高低差は最大100㎝を測る。　長軸方向／Ｎ－57°－Ｅ。　遺　物／なし。　重　複／なし。

24号配石墓　（第91図、図版26～28）

位　置／Ｆ－８グリッド中央に位置する。　形　態／Ｉｃ１類　横積み２段の壁石と長軸両端部に枕石状の石が検出され、安山岩の川原石を使用した蓋石8枚が確認されている。形態的には湧水により全体が間延びし、東側半分が著しく崩落している。　規　模／現状で長軸4.20ｍ、短軸0.80ｍの範囲に石が検出され、高低差は最大70㎝を測る。　長軸方向／Ｎ－60°－Ｅ。　遺　物／土器底部と凹石が出土している。

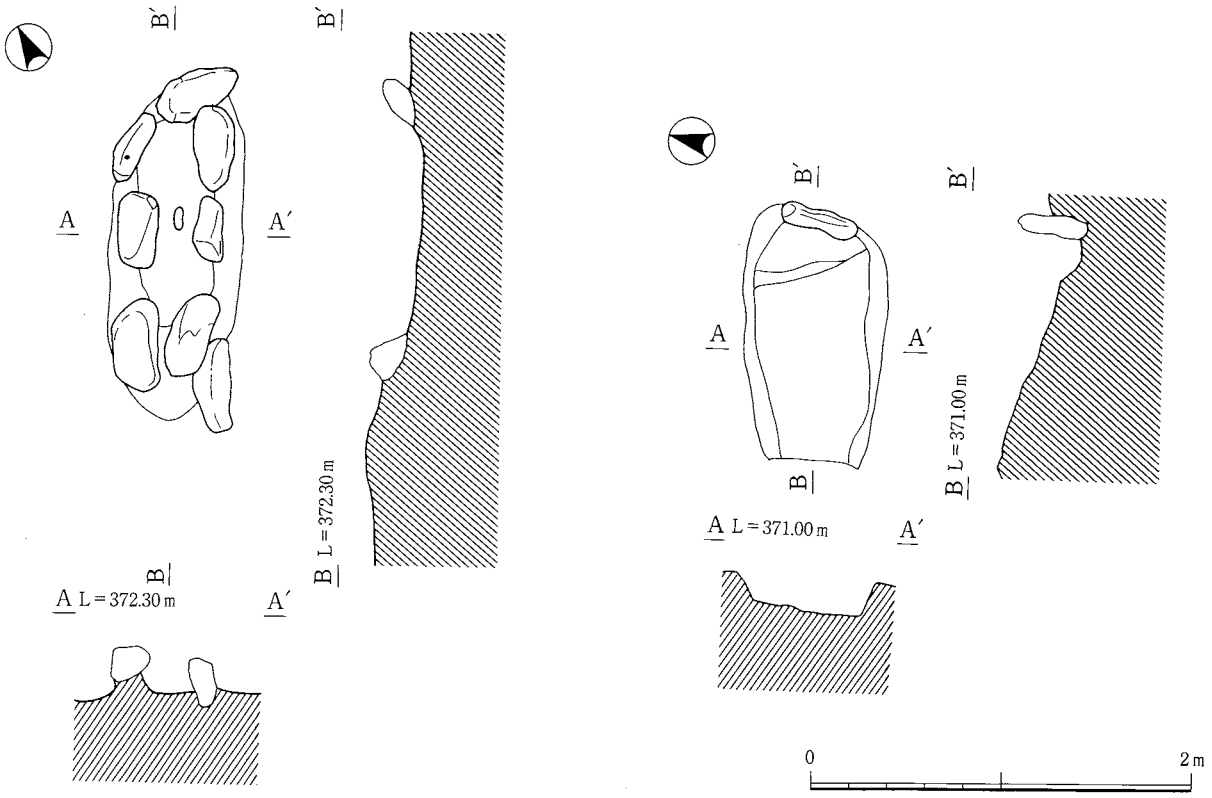
重　複／なし。　出土遺物／１は加曽利Ｂ２～３式と考えられる深鉢底部で、内面に煤が付着し、底部には網代痕が観察される。２は安山岩の凹凸である。時期／加曽利Ｂ２～３式期。

26号配石墓　（第92図、図版28）

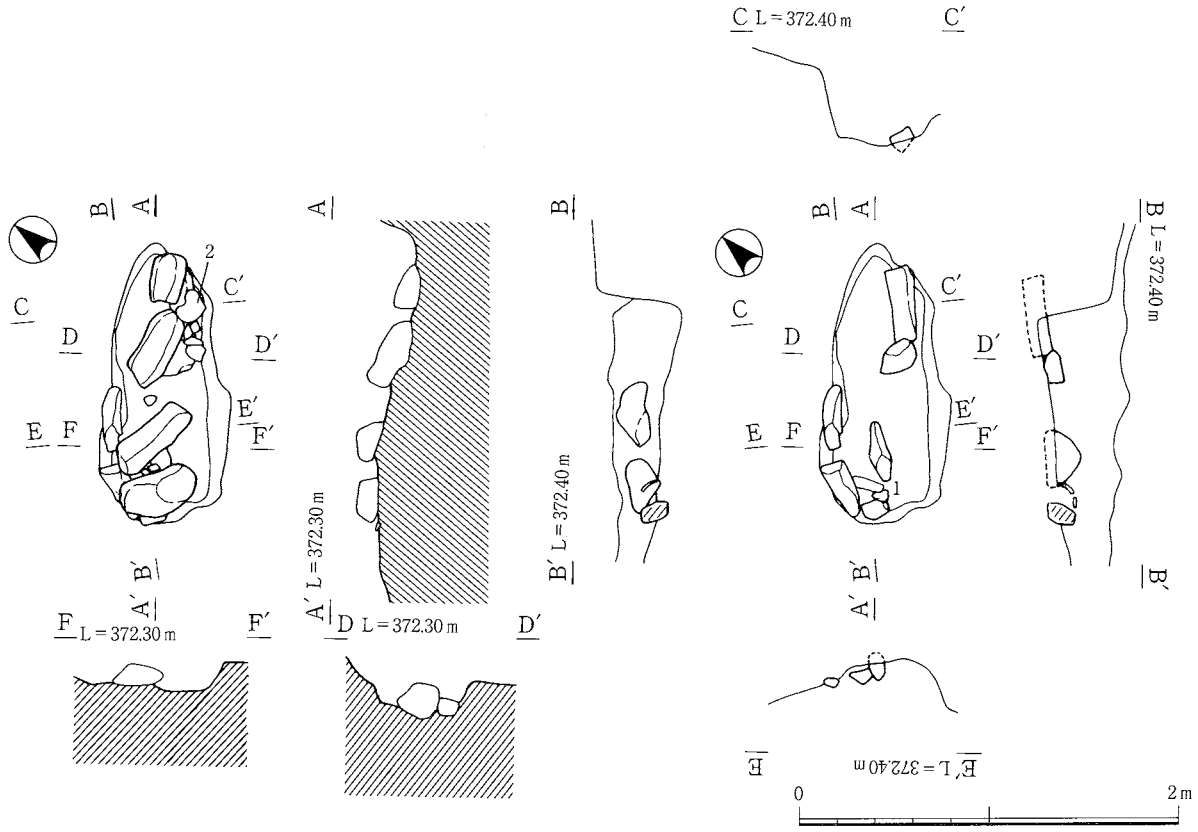
位　置／Ｆ－８グリッド西側に位置する。　形　態／Ｉａ２類　長楕円形の掘り込みに沿って石が配されている。　規　模／内法で長軸1.20ｍ、短軸0.30ｍ、掘り方長軸1.75ｍ、短軸0.72ｍ、深さ15㎝を測る。長軸方向／Ｎ－34°－Ｅ。　遺　物／なし。　重　複／25号配石墓と接する。

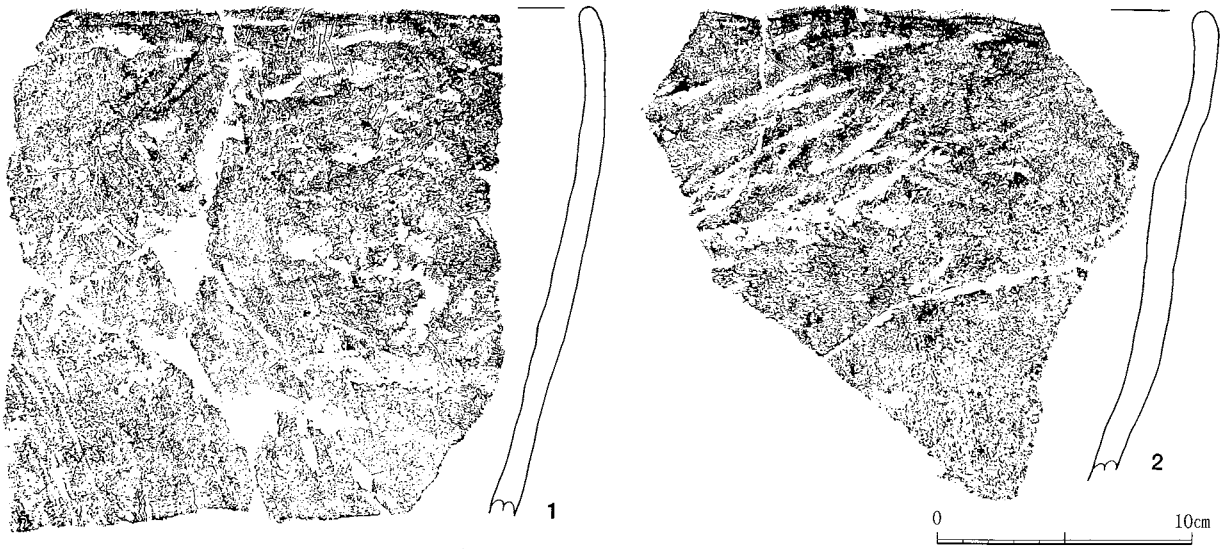
27号配石墓　（第92図）

位　置／Ｆ－８グリッド南東側に位置する。　形　態／Ⅱａ２類　長軸東端部に枕石状の石が配される。規　模／長軸1.35ｍ＋α、短軸0.72ｍ、深さ20㎝を測る。　長軸方向／Ｎ－73°－Ｅ。　遺　物／なし。　重複／11号配石墓と重複し、枕石部分が21号配石墓と接している。



第92図　26号・27号配石墓



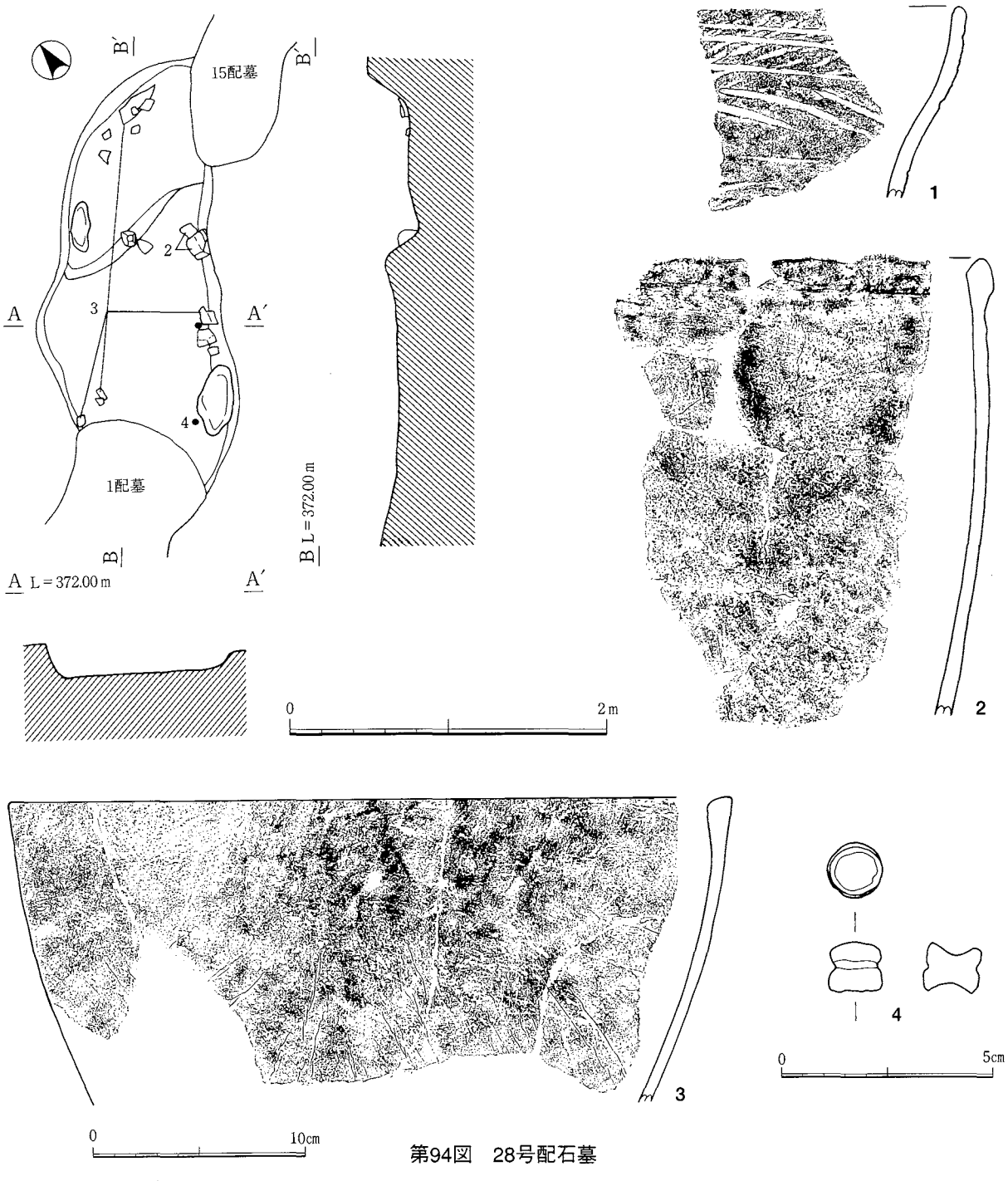


第93図　25号配石墓・出土遺物

25号配石墓　（第93図、図版48）

位　置／Ｆ－８グリッド西端部に位置する。　形　態／Ｉａ１類の範疇と考えられる。遺存状態が悪く形態的には不明瞭であるが、卵形の掘り込みに平積み１段の壁石と蓋石４枚が検出されている。　規　模／長軸1.50ｍ、短軸0.68ｍ、深さ40cmを測る掘り込み内に石が配される。　長軸方向／Ｎ－42°－Ｅ。　遺　物／蓋石の上下から無文土器の口縁部大形破片が出土している。　重　複／25号配石墓と接している。　時　期／加曽利Ｂ３式～高井東式期。

出土遺物／１・２ともに無文の口縁部大形破片である。時期的には加曽利Ｂ３式～高井東式に存在する粗製土器と考えられる。



第94図　28号配石墓

28号配石墓　（第94図、図版48）

位　置／Ｆ－８グリッド南西端部に位置する。　形　態／Ⅱａ１類の範疇と考えられる。枕石状の石が長楕円形の掘り込み長辺に沿って北側に１個、西側に１個配されるが、現状では対面する位置にはなく、斜方向に配されている。尚、覆土の状況から単一の掘り込みと判断したが、北側が深い２段掘り込みになっており、重複の可能性も考えられる。　規　模／長軸2.40ｍ＋α、短軸1.16ｍ、深さは南側18㎝、北側30㎝を測るが、湧水により間延びした可能性がある。　長軸方向／Ｎ－38°－Ｅ。　遺　物／南側に位置する石の横から小形赤彩耳栓が出土し、掘り込み全体に散在して無文粗製土器の破片が出土している。小形赤彩耳栓の出土位置から南側の石は枕石の可能性が高いと考えられる。　重　複／11号配石墓・15号配石墓と重複している。　時　期／加曽利Ｂ３～高井東式期。

出土遺物／１は覆土出土の口縁部破片で横位及び羽状の沈線が粗雑に引かれている。２は口縁部が肥厚する無文の粗製土器大形破片。３も無文の大形破片で鉢型土器の可能性がある。１～３は加曽利Ｂ３式～高井東式の所産と考えられる。４は鼓形の小形赤彩耳栓で長1.6cm、幅1.7cm、抉れ部幅1.3cmを測る。

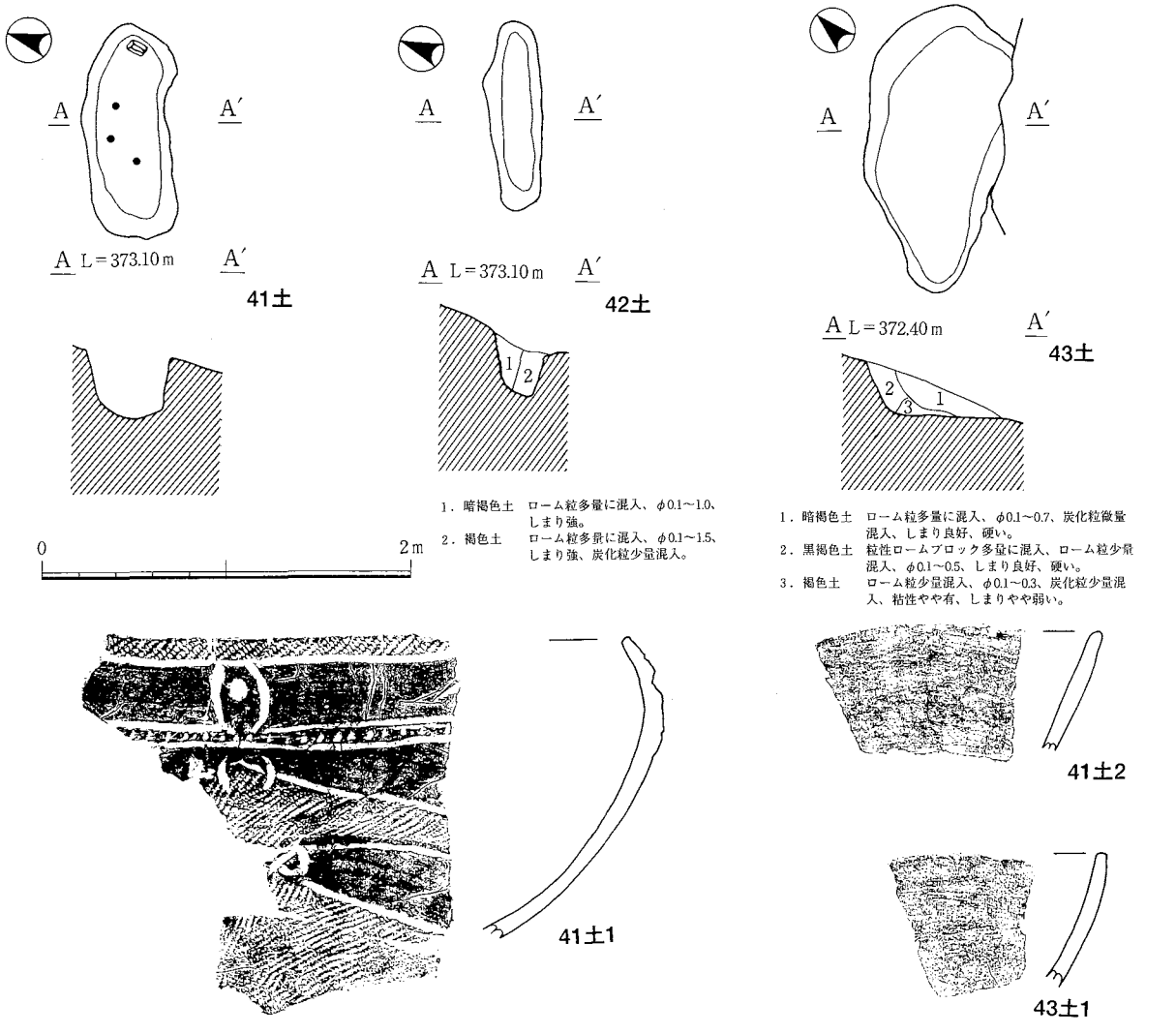
配石内土坑　（第95図、図版28・48）

配石遺構の主要範囲内からは墓坑の可能性が指摘される土坑３基が検出されている。

41号土坑／Ｆ－７グリッド中央東側に位置する。平面形は隅丸長方形、断面形は鍋底状を呈し、長軸1.16ｍ、短軸0.48ｍ、深さ40cmを測る。長軸方向はＮ－68°－Ｅを指向する。遺物は覆土上層から加曽利Ｂ２式の鉢型土器口縁部大破片と無文の口縁部片が出土している。１の鉢型土器は沈線で区画された横位の縄文帯・無文体・刺突列で文様が構成され、体部の斜沈線頂部と口縁部には対弧文が施文されている。

42号土坑／Ｆ－７グリッド中央東側に位置する。平面形は長楕円形、断面形は凹状を呈し、長軸1.02ｍ、短軸0.32ｍ、深さ24cmを測る。長軸方向はＮ－68°－Ｅを指向する。遺物は出土していない。

43号土坑／Ｆ－７グリッド南側に位置し、５号配石墓と重複する。平面形は卵形、断面形は浅い鍋底状を呈し、長軸1.55ｍ、短軸0.74ｍ、深さ23cmを測る。長軸方向はＮ－54°－Ｅを指向する。遺物は無文土器の口縁部片１点のみ出土している。



第95図　配石内土坑・出土遺物

グリッド出土遺物

西調査区からは後期中葉を主体とする大量の土器・土製品と石器類が出土している。出土遺物は配石遺構を覆う遺物包含層から出土したグリッド遺物として報告する。紙面の都合上、代表的なものを抽出し、中央調査区のグリッド遺物（グリッドライン13～19）も同時に掲載しているが、中央調査区からは後期中葉以降の遺物は出土しておらず、加曽利Ｅ３・４式、称名寺式と少量の堀之内式、加曽利Ｂ式と中期初頭五領ヶ台式の遺物が散見される状況であった。西調査区では加曽利Ｂ式を中心として堀之内式、高井東式の出土が目立ち、加曽利Ｅ３・４式、称名寺式、曽谷式、安行１式が散見される。

土器・土製品　（第96～112図、図版49～59）

西及び中央調査区のグリッド出土土器・土製品は以下の７群に大別して報告する。

第１群　中期初頭土器（五領ケ台式）
第２群　中期末葉～後期初頭土器（加曽利Ｅ３・４式、称名寺Ⅰ・Ⅱ式）
第３群　後期前半土器（堀之内１・２式）
第４群　後期中葉土器（加曽利Ｂ１・２・３式）
第５群　後期後半土器（高井東式、曽谷式、安打１式）
第６群　注口土器片・土器底部・赤彩片・土製品等
第７群　土偶

第１群土器（１～５）

五領ヶ台式土器は、中央調査区Ｊ－16グリッドより一括出土した口縁～胴部にかけての破片である。口縁部には集合沈線で文様が描かれ、胴部は縦方向の結節縄文と沈線で文様が構成されている。

第２群土器（６～20）

加曽利Ｅ３・４式、称名寺Ⅰ・Ⅱ式土器を本群とした。６・７は加曽利Ｅ３式の口縁部破片で微隆帯で文様が構成され、地文には単節縄文が施文される。９の胴部以下を欠損する深鉢も微隆帯により曲線的な文様が構成され、地文に単節縄文が施文されている。口縁は４単位の小波状口縁になっている。８・10～15は加曽利Ｅ４式と思われる口縁部である。10は地文に単節縄文が施文され、微隆帯によるＶ字状の無文区画が施される。11は無文の口縁部と単節縄文が施文される胴部文様帯を、刺突が加えられる隆帯で分けている。８・12・13は逆Ｕ字状文が施文され、13は口縁部に円形刺突列が廻る。14は上下にＵ字状文、逆Ｕ字状文が施文される胴部中位の破片である。15は加曽利Ｅ４式の粗製的土器の大形破片で、口縁部と胴部文様帯は縄文が加えられた隆帯で分けられ、胴部は微隆帯で無文部と縄文部を分けている。16・18は称名寺Ⅰ式、17・19・20は称名寺Ⅱ式の破片で、いずれも沈線による区画文が施文されている。18の区画文内には縄文が充填され、17は縄文と列点、19は列点が充填されている。20は沈線のみで文様が描かれている。

第３群土器（21～35）

堀之内１・２式土器を本群とした。21～27は堀之内１式である。太い沈線による懸垂文・曲線文・短沈線と刺突等で文様が構成されている。26はほぼ完形の鉢型土器で口縁は二対４単位の波状を呈し、口縁から続く刺突が加えられた隆帯による胴部区画内に沈線が充填される異質な土器で、文様構成的に中部～北陸の影響を受けていると考えられる。28～35・54は堀之内２式である。28は無文の口縁部に刻みの加えられた隆帯が垂下し、更に頸部にも廻っている。胴部は沈線による渦状文が描かれている。29・30・31は幾何学文が施文される類である。32は浅鉢の口縁部片で内外面ともに文様が加えられる。33・34は口縁下位に刻み・刺突が加えられた隆帯が廻る粗製土器で、34は隆帯と胴部中位の沈線で区画した中に縄文を充填している。35は

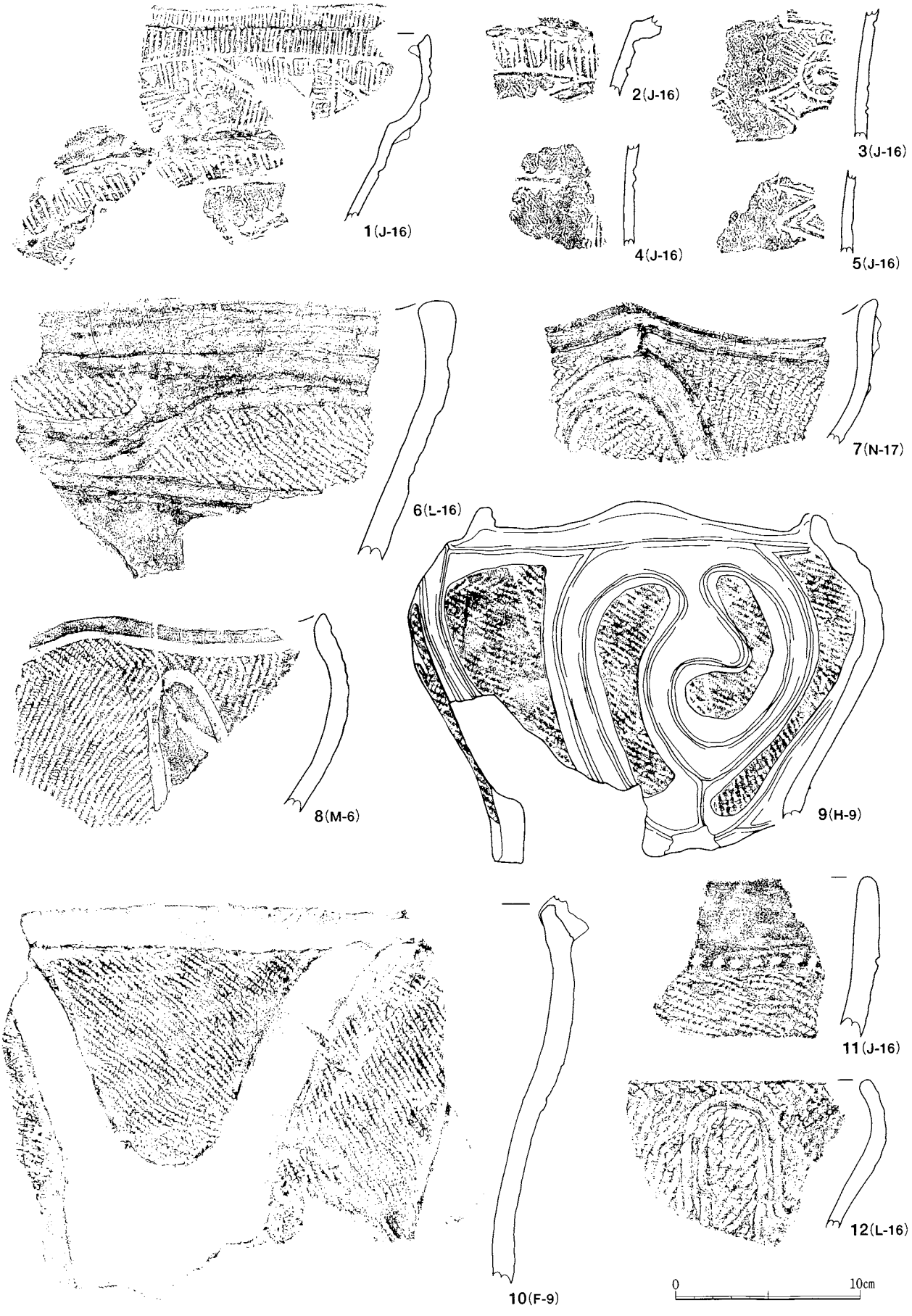
堀之内２式終末期の３単位把手深鉢の接合資料で、胴部上位の隆帯と沈線で区画された中に縄文が充填される。

第４群土器（36～103）

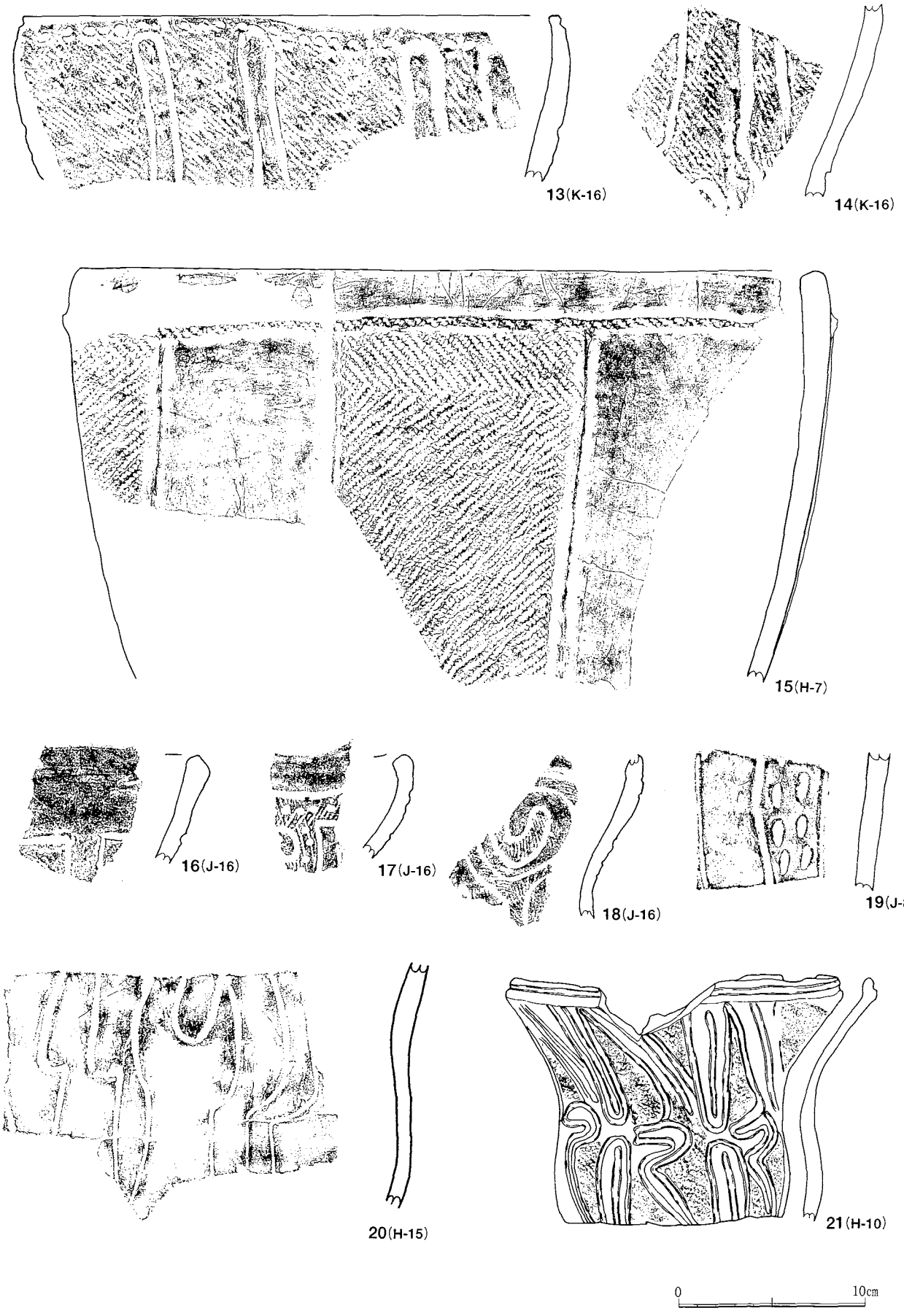
加曽利Ｂ１・２・３式土器と該期に伴い後期後半まで継続すると思われる粗製土器を本群とした。西調査区の主体となる土器群である。36～66は加曽利Ｂ１式に比定され、外面は平行沈線に区切り文・単位文が施文され、内面に沈線帯を有するものが主体となっている。40は舟形を呈するほぼ完形の台付浅鉢で、区切り文と変形した「の」字状文が施文されている。42は「の」の字状文が施文される口縁部の破片である。「の」の字状文は43の粗製土器にも見られる。44・45は胴部に櫛歯状工具による横位の集合沈線が引かれている。48は同下半部を欠損する３単位把手深鉢で、緩い波状口縁を呈する波頂部把手下と波底部下に区切り文が施文される。50は縄文帯が櫛歯状工具による横位調整痕になっている。54・55は内面に発達した文様が施文される外面無文の浅鉢で、直線的に立ち上がる54は堀之内２式終末期から加曽利Ｂ１式初頭の所産である。56は口縁部に押圧隆帯が貼り付けられる粗製土器である。60はＵ字状の単位文が施文される深鉢、61は区切り文が施文される３単位把手深鉢、62は口縁部を欠損する注口土器である。67～91は加曽利Ｂ２～３式に比定される。69～75は加曽利Ｂ２式の単位把手深鉢で、胴部に羽状沈線が施文される75は加曽利Ｂ２式末と考えられる。76～78は体部算盤玉状の深鉢類で、83は口縁部が省略されたタイプと考えられる。80～82は加曽利Ｂ３式の鉢形土器で口縁部に沈線区画の縄文帯を有し、胴部は羽状沈線が施文される。82の口縁部には楕円形の貼り付けが施されている。84は加曽利Ｂ３式の口縁部が大きく朝顔形に開く深鉢口縁部片である。85～90は加曽利Ｂ３式の５単位波状口縁深鉢類である。91は南関東に多く見られる加曽利Ｂ３式の紐線文系粗製土器で１点のみ出土している。92～103は加曽利Ｂ２式以降の粗製土器である。器形は砲弾形を呈するものと胴部で括れるものがあり、92・94～97は加曽利Ｂ２式に伴うものと考えられる。92は口縁部に横位の沈線と胴部に斜位の沈線のみ施文され、94は口唇部と口縁部に刻み列が廻り、胴部には縦位の櫛描文が施文される。95～97は口唇部に貼り付けの押圧隆帯、胴部に縦位の櫛描文が施文されている。93・99～102は撫で調整のみ施される無文粗製土器類で、加曽利Ｂ３式～高井東式に伴うものと考えられる。

第５群土器（104～128）

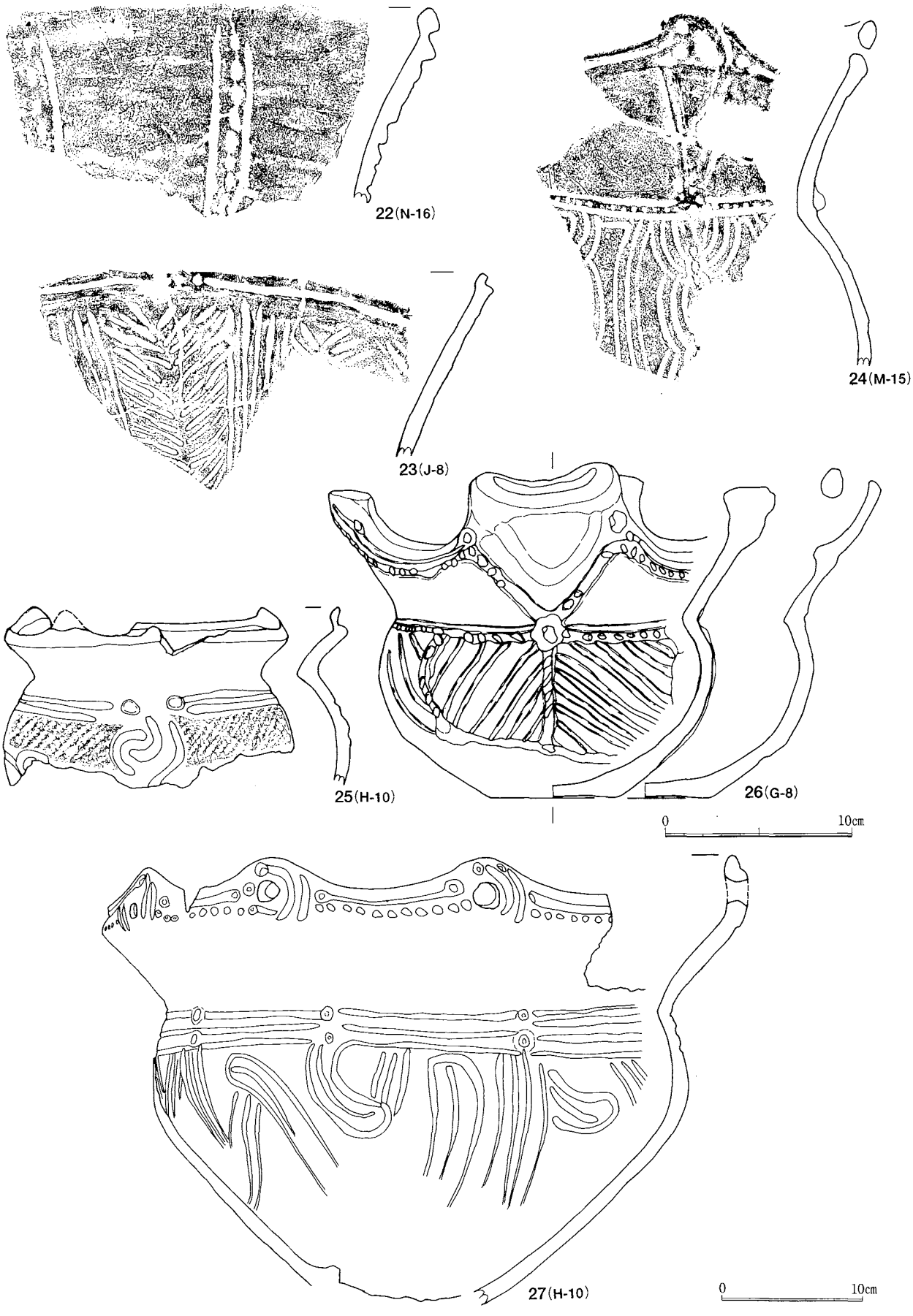
高井東式土器を主体として併行する曽谷式・安行１式土器を本群とした。104・105は加曽利Ｂ３式末～高井東式と思われる波状口縁の口縁部で、105の胴部には稲妻状の沈線が施文されている。106～118は高井東式大波状口縁深鉢類である。波頂部に扇状・篦状の突起を付す106・107、円柱状を呈する108、円柱状の突起に粘土紐を巻き付ける109・110・111、コップ状の突起が付される113・114等があり、内屈気味の口縁部の文様は沈線・刺突・刻みで構成され、114・115は波頂部、116は波底部に橋状の把手か付けられている。胴部は稲妻状の沈線が施文されるものが目立っている。118は下半部を欠損するが全体の器形が伺える大波状口縁深鉢である。波頂部は小さく横に広がる形状を呈し、肥厚する口縁部には列点状の刺突列が２条廻り、胴部は稲妻状の沈線が施文されている。時期的には安行１式期まで下る可能性がある。119～124は高井東式期の平口縁深鉢類である。いずれも内屈する口縁部に横位の沈線が引かれ、胴部は羽状もしくは稲妻状の沈線が施文され、124のみ無文になっている。120の口縁部破片は口唇部には縄文が施文される比較的古い時期の所産と思われる。119は円形の瘤、124は２個一組の縦長の瘤で口縁部の横位沈線が区画され、123は刻みが付される隆帯で窓枠状の区画が施され、区画内に横位３条の沈線が引かれている。125は赤彩の土器片で異形台付土器の口縁部片と思われる。126は曽谷式瓢形土器の口縁部片である。126・127は安行１式の口縁部片で、126の口縁部には縦長の瘤が付される。127は隆起帯に帯縄文が施文される波状口縁の口縁部片で、波頂部下に縦長の瘤が３個付けられている。



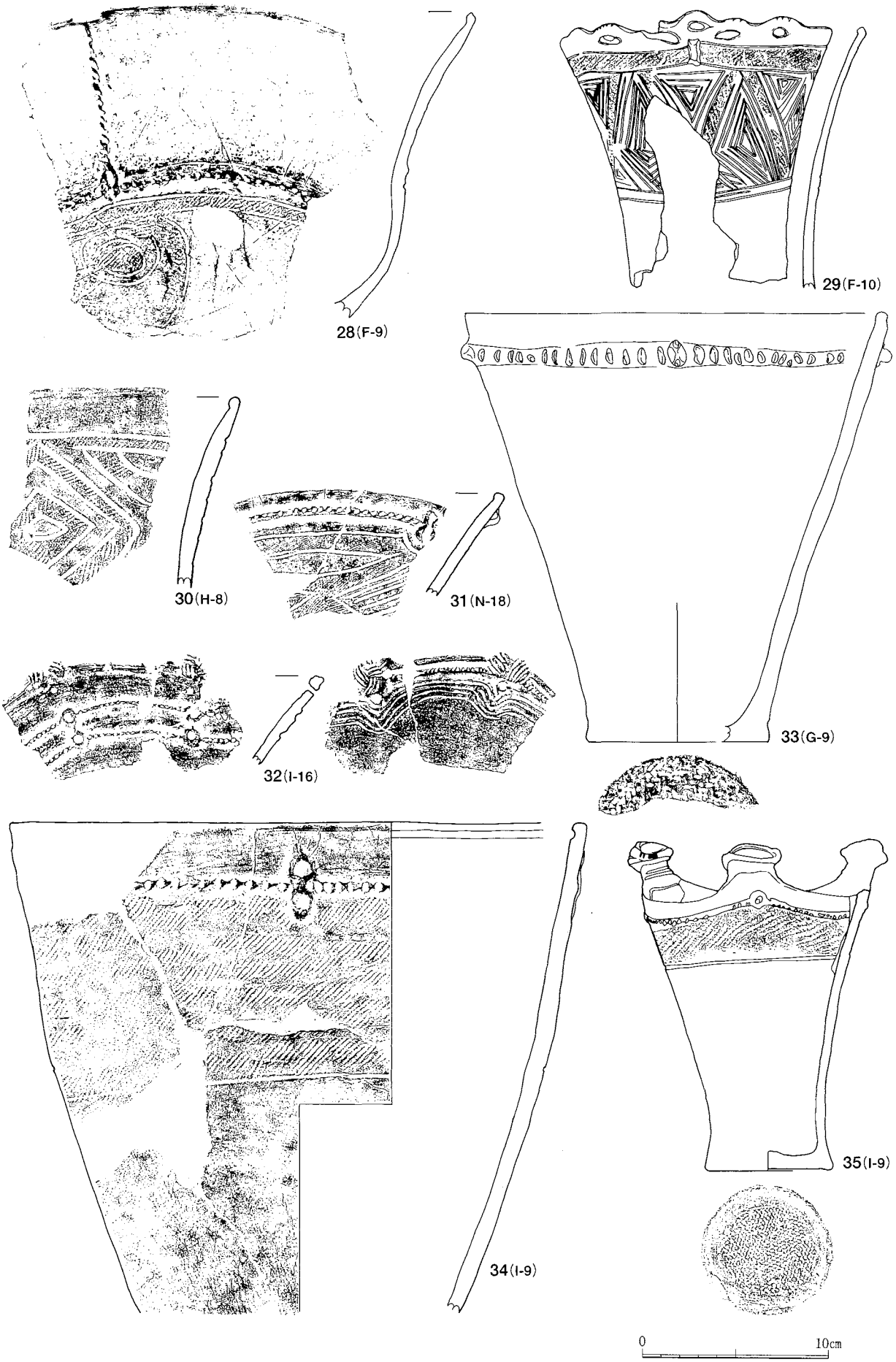
第96図　グリッド出土遺物（1）



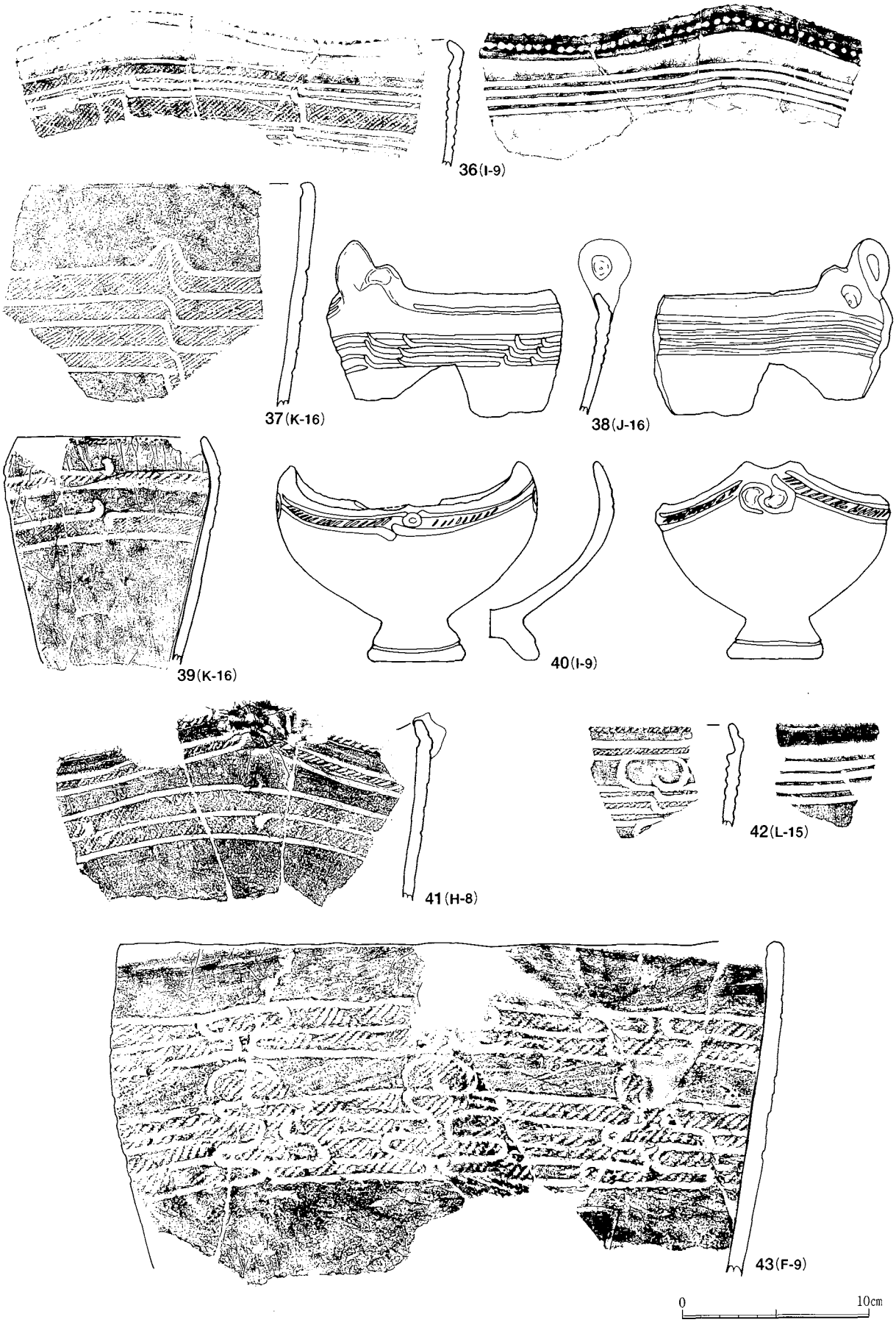
第97図　グリッド出土遺物（２）



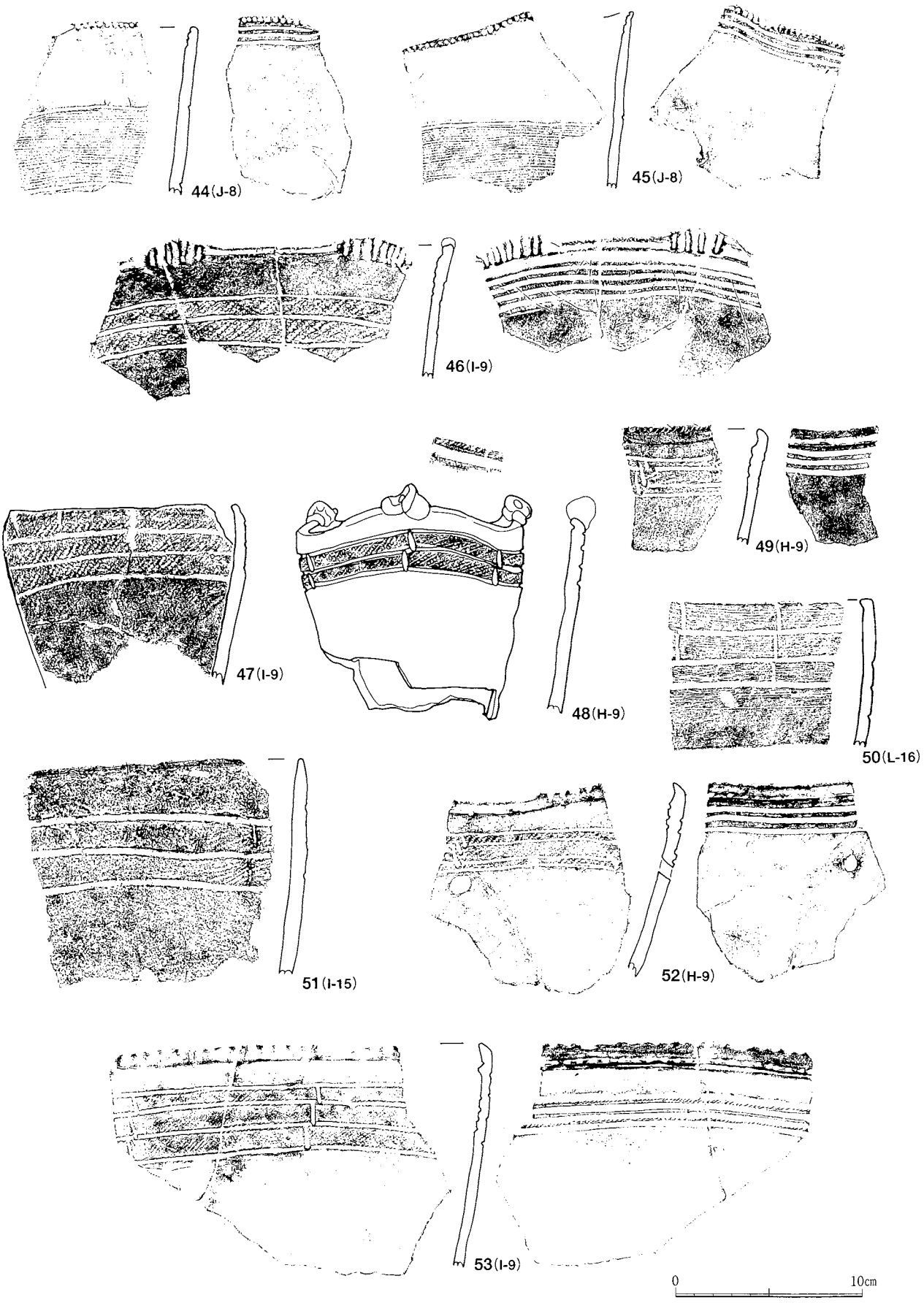
第98図　グリッド出土遺物（３）



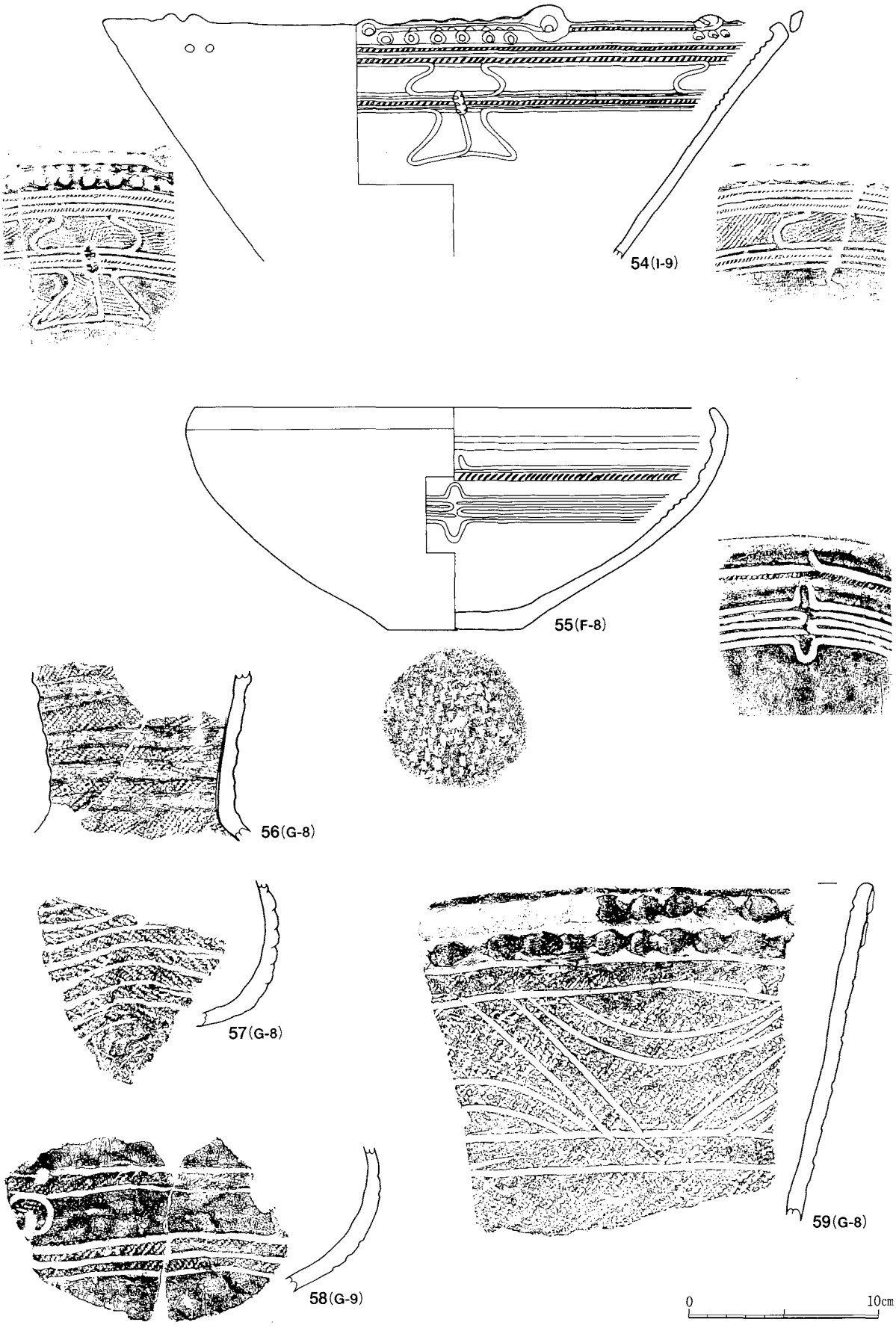
第99図　グリッド出土遺物（４）



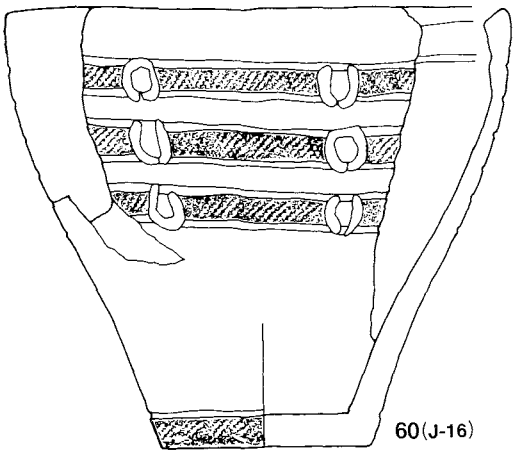
第100図　グリッド出土遺物（５）

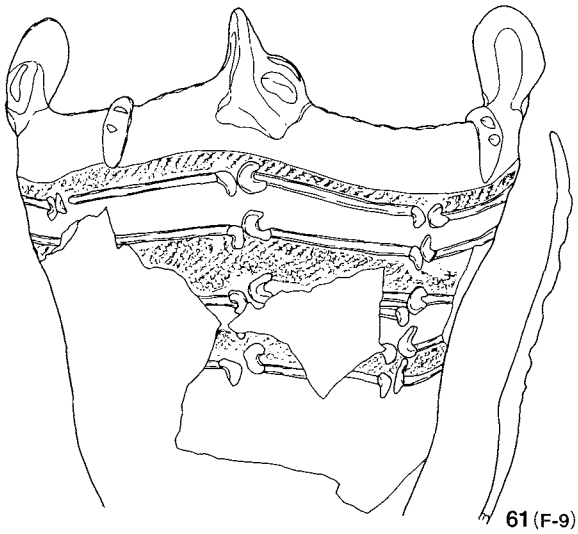


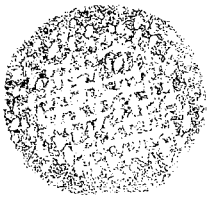
第101図　グリッド出土遺物（6）

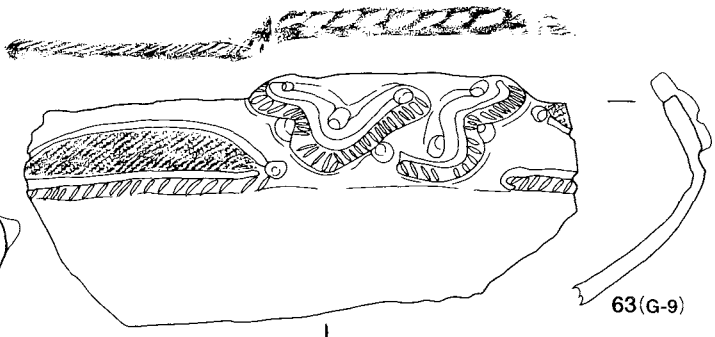


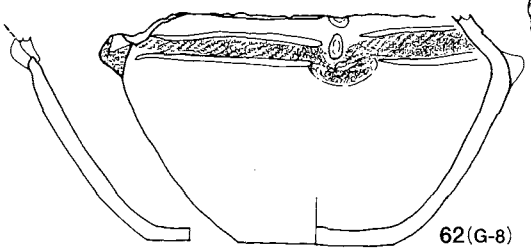
第102図　グリッド出土遺物（７）

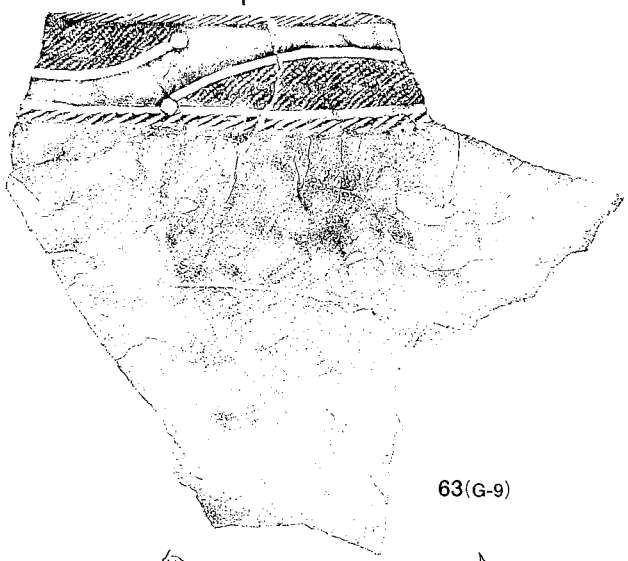

60(J-16)

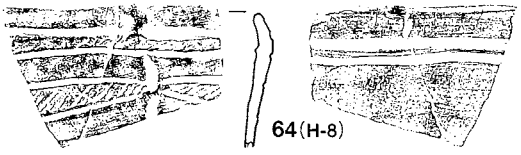

61(F-9)

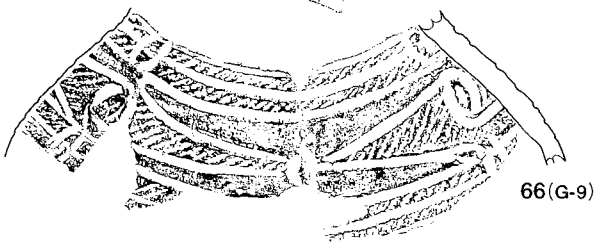


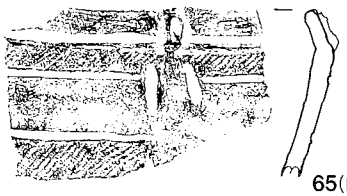

63(G-9)

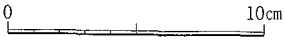

62(G-8)


63(G-9)

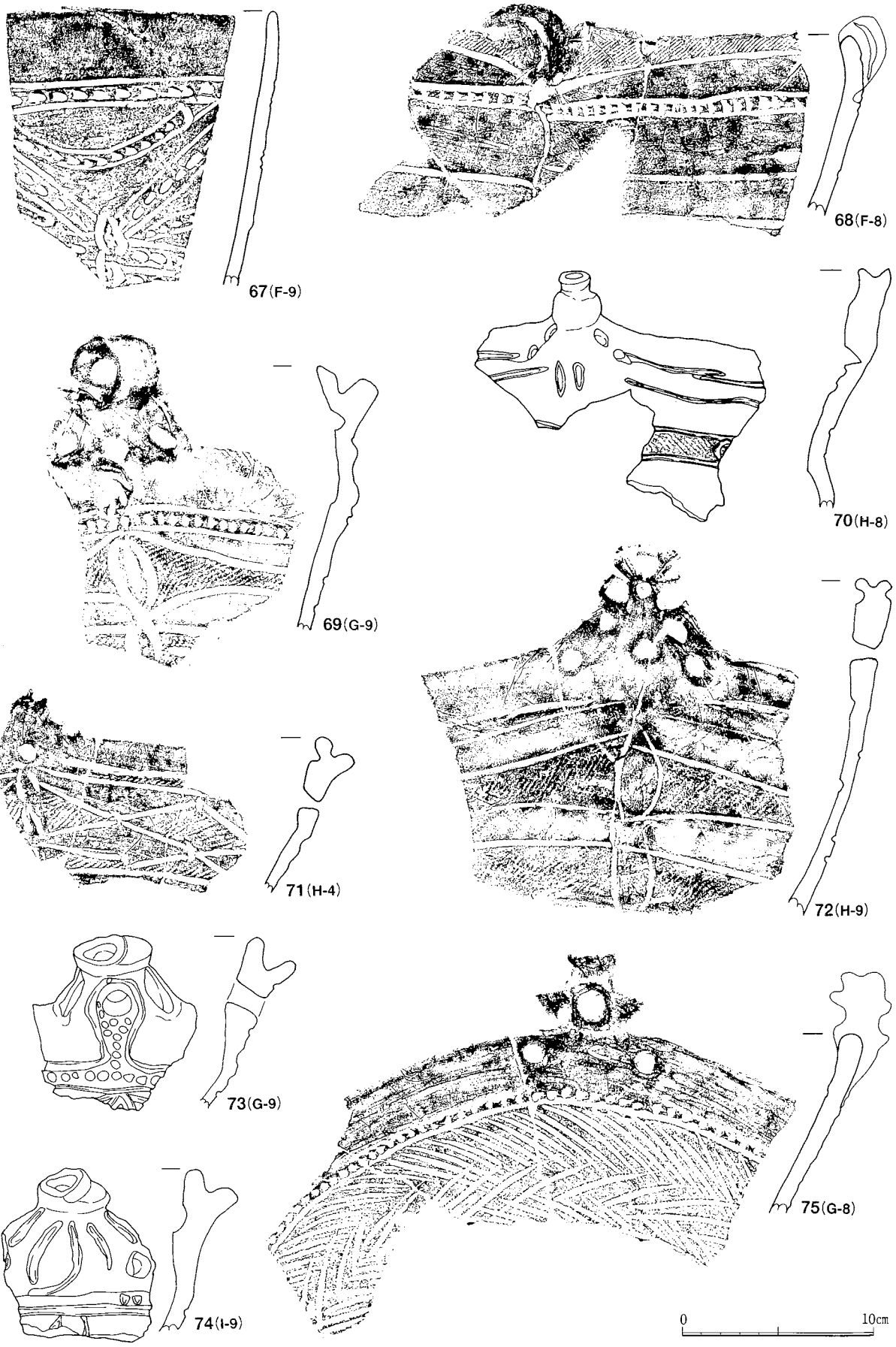

64(H-8)


66(G-9)

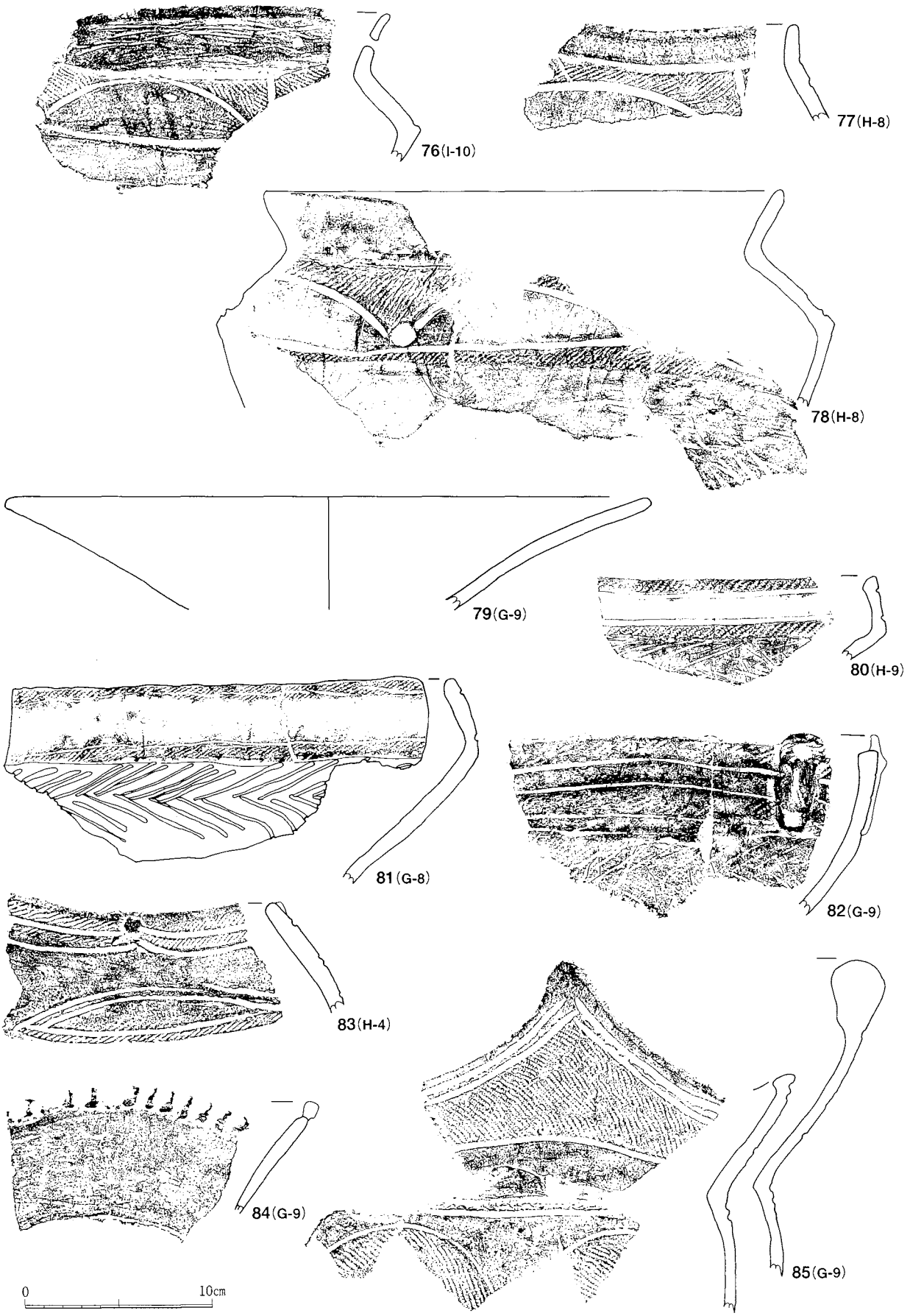

65(F-7)



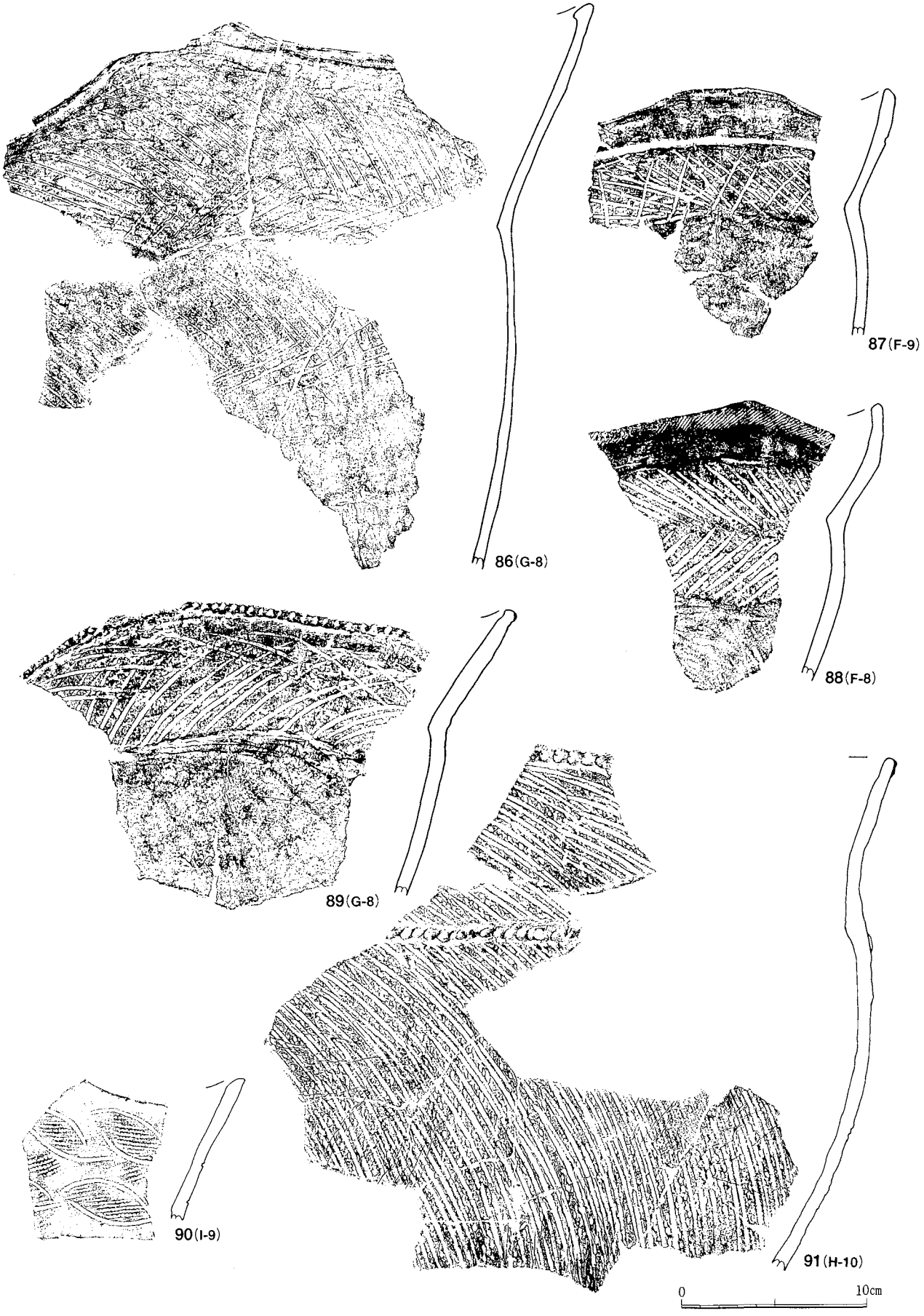
第103図　グリッド出土遺物（８）



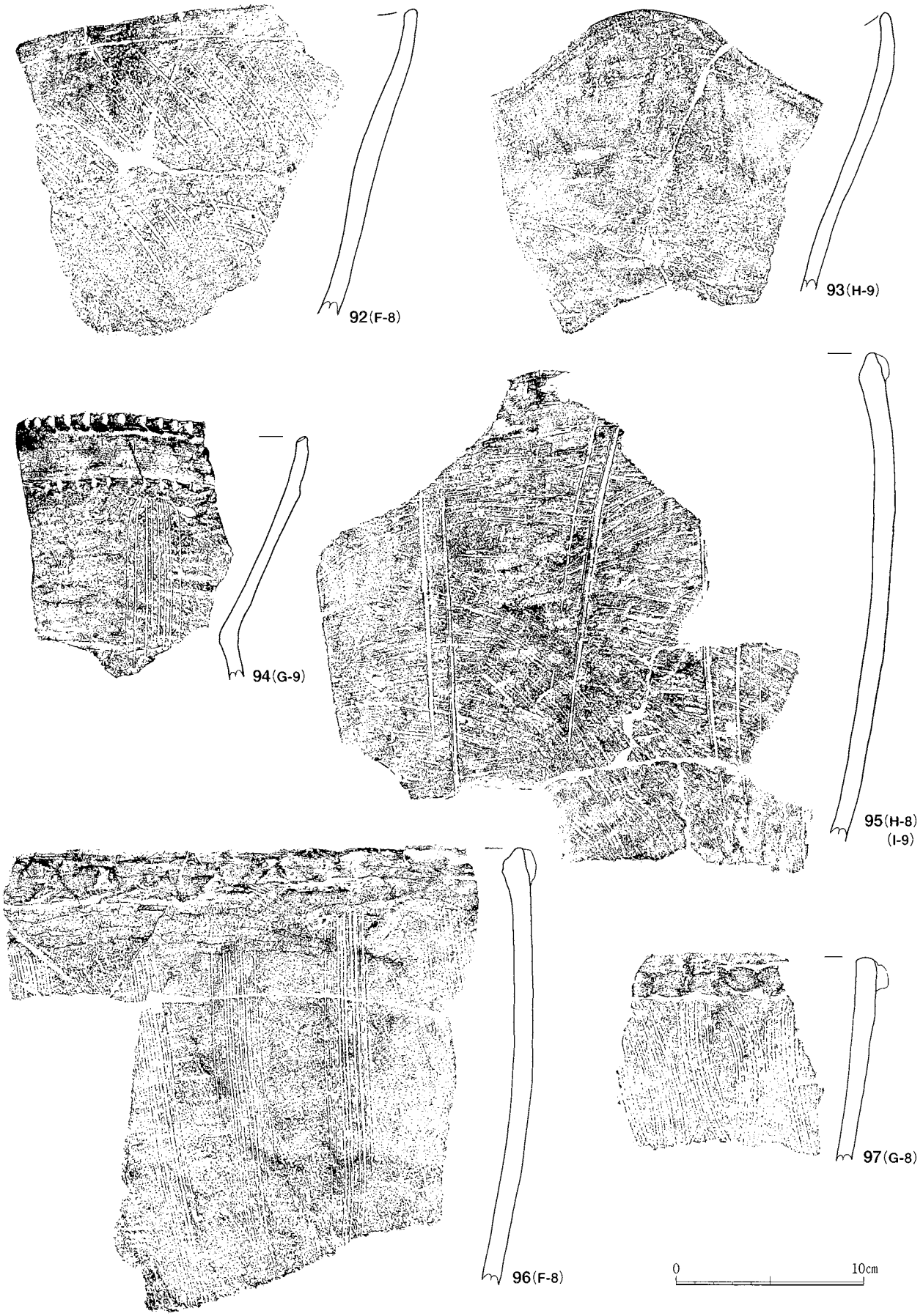
第104図　グリッド出土遺物（９）



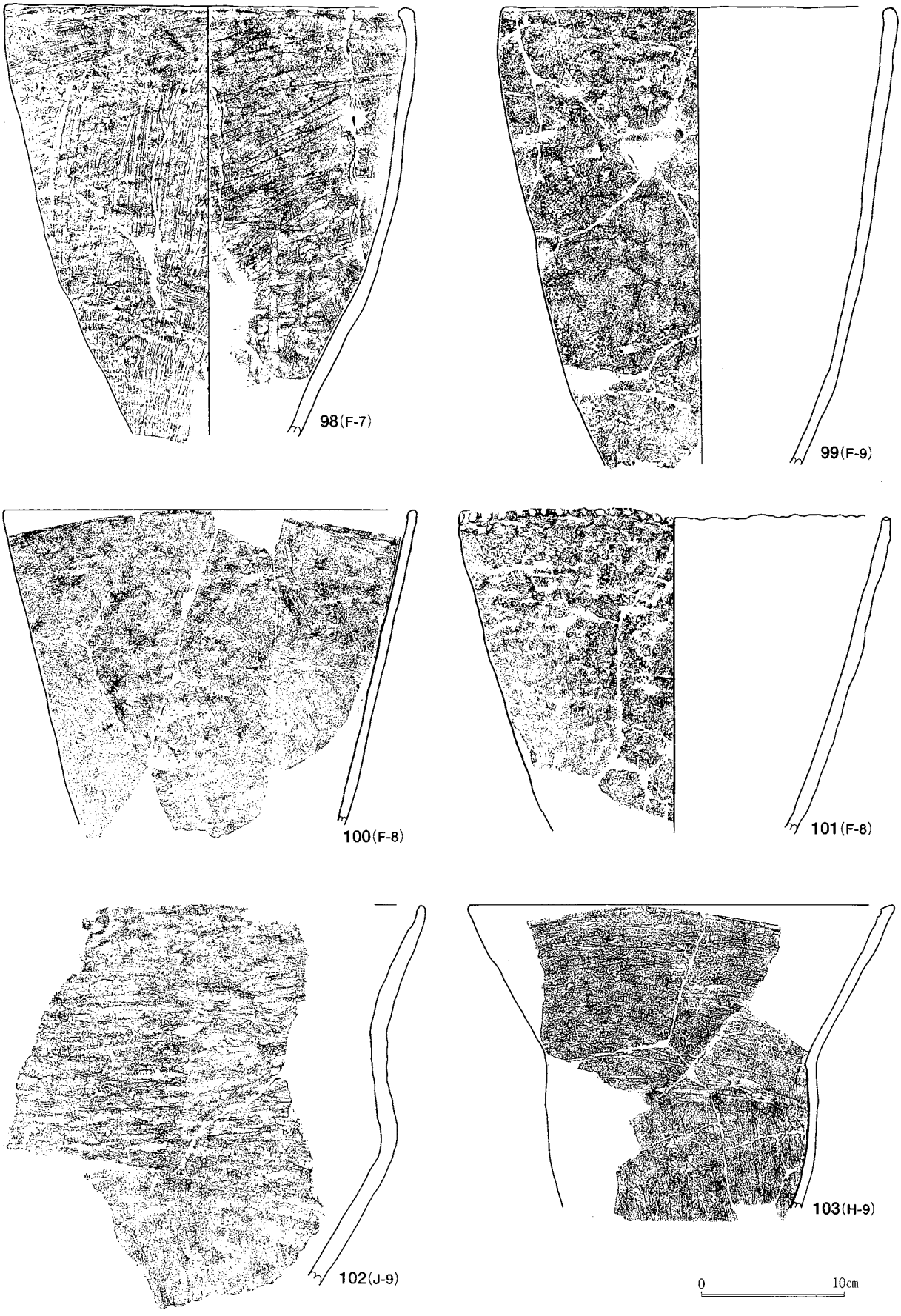
第105図　グリッド出土遺物（10）



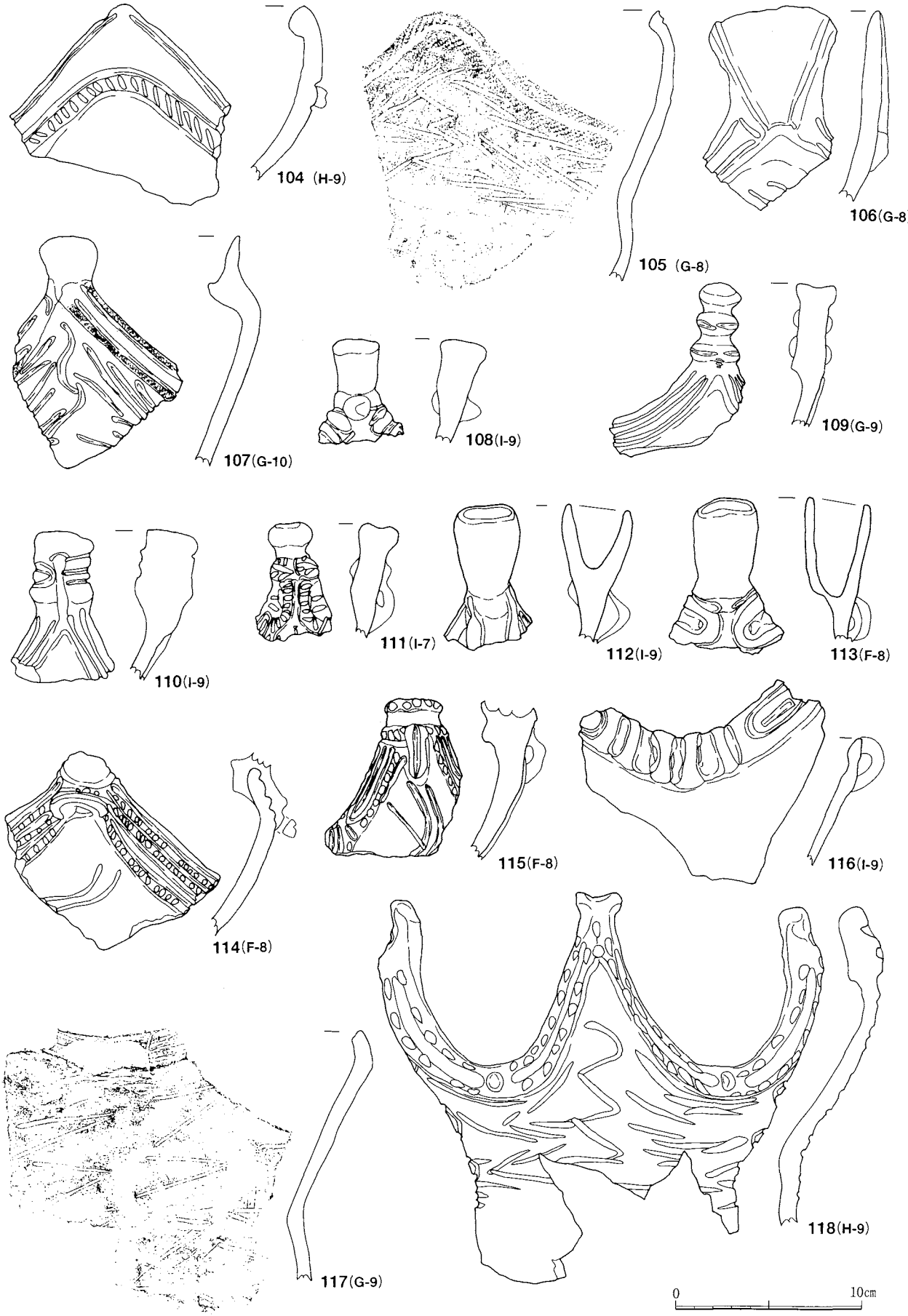
第106図　グリッド出土遺物（11）



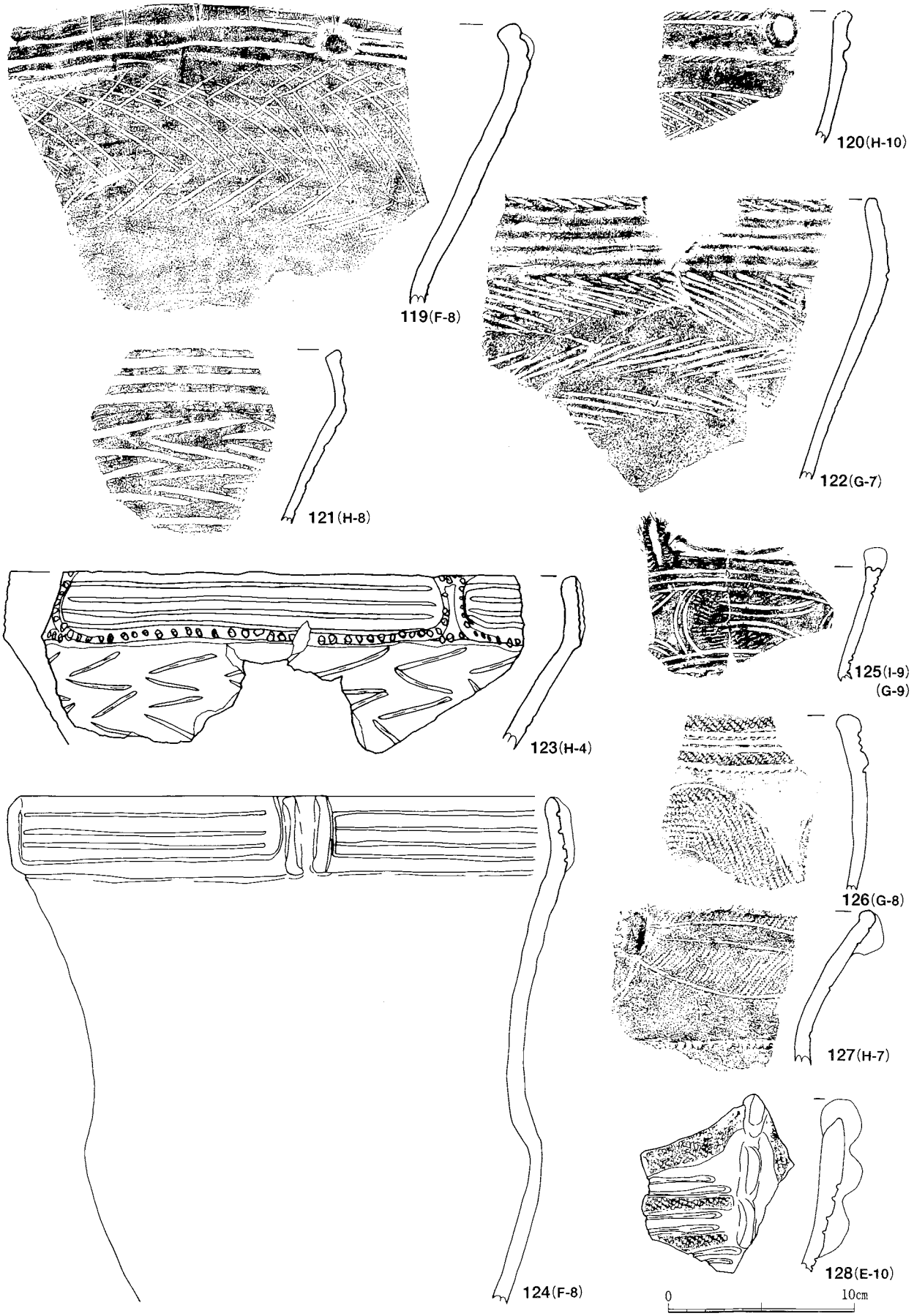
第107図　グリッド出土遺物（12）



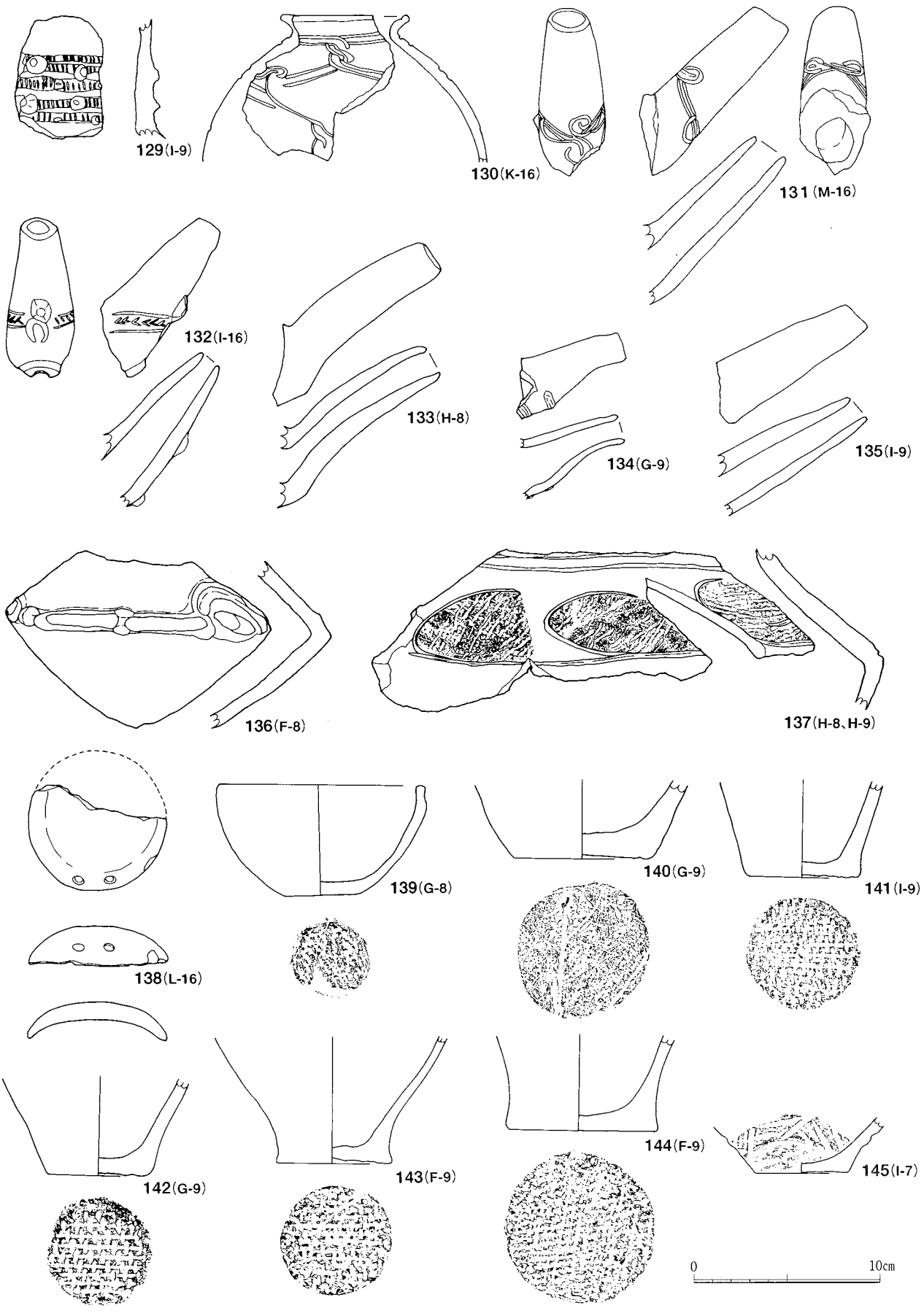
第108図　グリッド出土遺物（13）



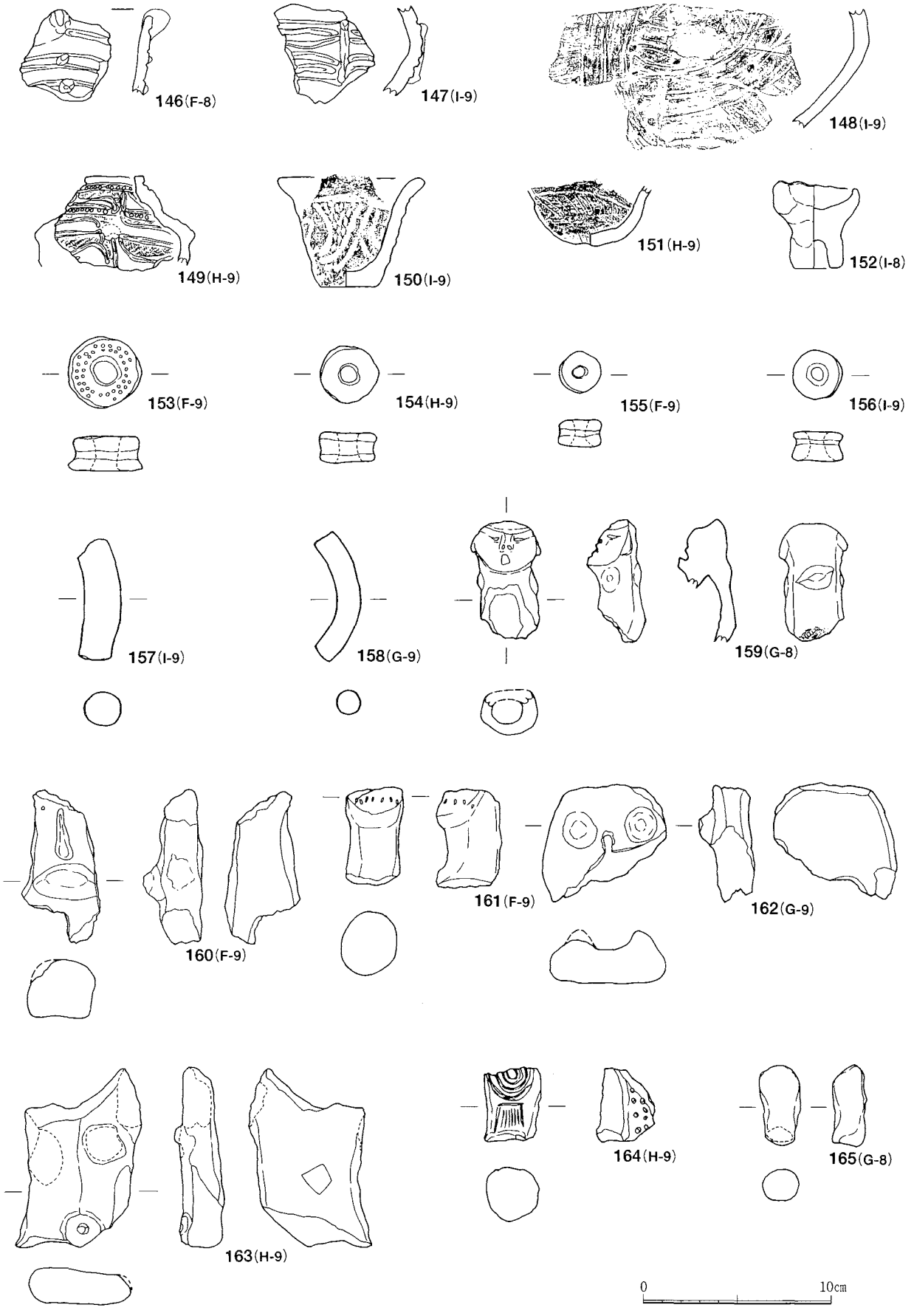
第109図　グリッド出土遺物（14）



第110図　グリッド出土遺物（15）



第111図　グリッド出土遺物（16）



第112図　グリッド出土遺物（17）

第6群土器（129～158）

注口土器片と赤彩土器片、土器底部、土製品等を本群とした。129は瘤付土器の系統と思われる破片で刻み列が廻り円形の突起が付けられている。130は注口土器体部の破片。131～135は注口部で、131・132には沈線で文様が描かれている。136・137は注口土器体部の大破片である。138は全体の約3分の1を欠損する蓋形土器で2個の円孔が開けられている。139は完形の無文埦形土器で底部に網代痕が観察される。140～145は底部で、140は木葉痕、141～144には網代痕が見られる。146～148は赤彩の土器片。149～152は小形土器である。149は注口土器と思われ、150はコップ形を呈している。152は杯形を呈する手捏土器。153～156は耳栓、157・158は棒状の土製品である。

第7群土器（159～165）

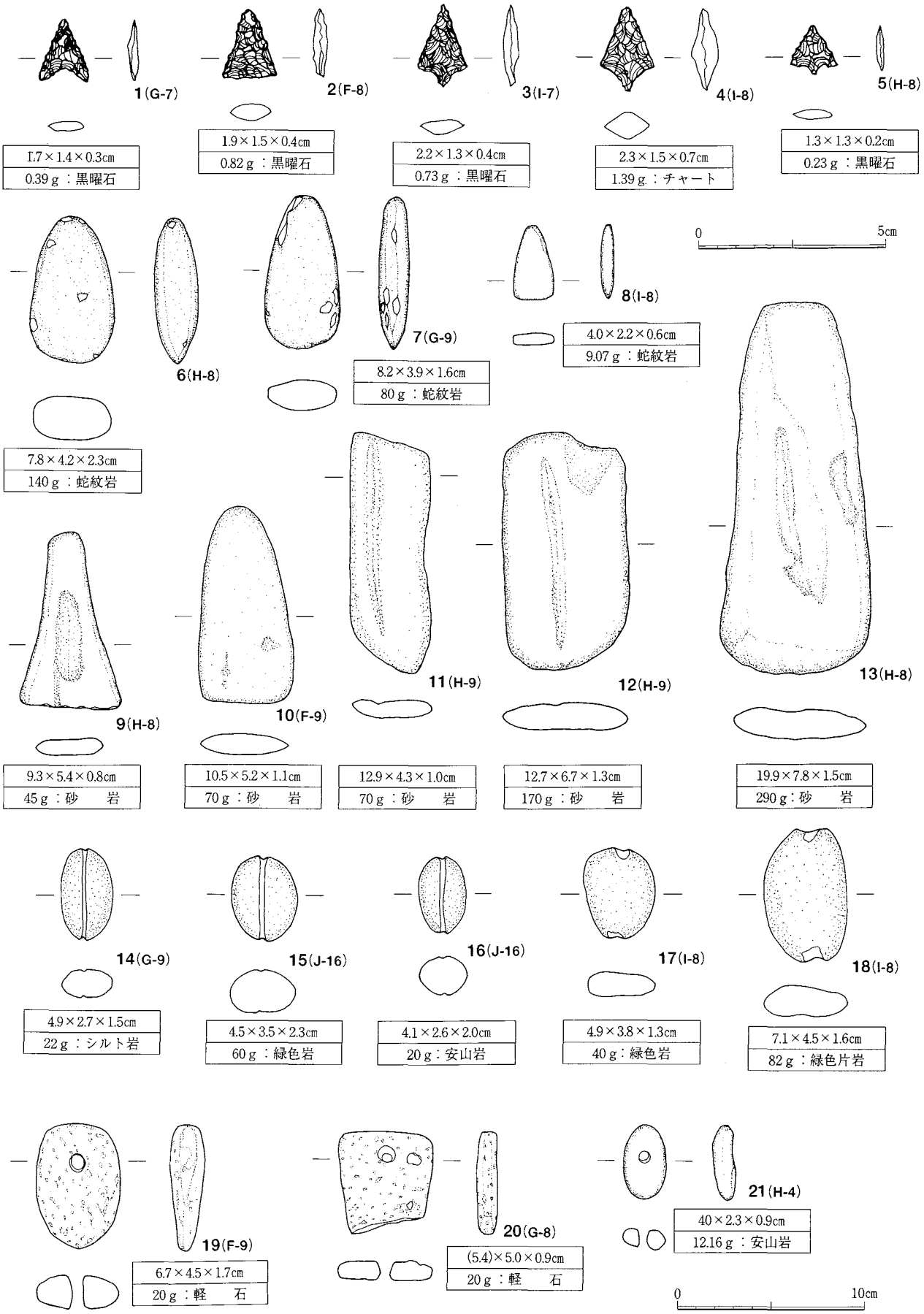
土偶はグリッド遺物として7点出土し、14号住居跡出土の脚部1点を合わせて、総数8点出土している。159は筒形土偶の範疇と思われ、胴部以下を欠損している。斜め上方向を見る顔面部分の目・鼻・口は沈線・孔で表現され、口部分は貫通しない。両腕部分と背面には瘤状の盛り上がりがある。160・162・163はいずれも板状土偶の胴部である。160は腹部の楕円形の盛り上がりで妊娠を表現している。162・163は乳房を円形の盛り上がりで表現し、163は臍を円孔で表現している。161・164は脚部で、161は膝部分の盛り上がりに刺突が加えられ、164は表面に沈線で重円文が描かれ、下部には方形区画の沈線内に縦位の沈線が充填されている。165は腕部分の破片と考えられる。

石　器　（第113～115図、図版59～62）

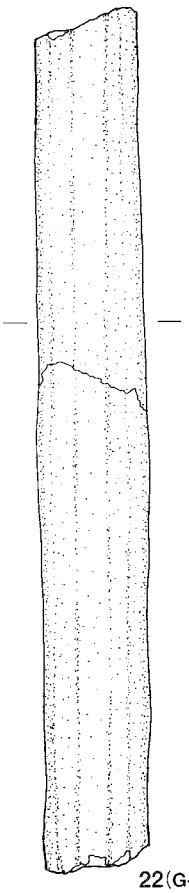
グリッド出土の石器類については代表的なものを抽出して図示し、中央調査区出土の石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧等と、西調査区出土の丸石・磨石等は写真のみ掲載している。

遺構出土を含む石器類を概観すると、中央調査区では打製石斧等の生活用具が多く、西調査区では特殊遺物の出土が目立っている。この出土状況は、中期末主体の中央調査区に対し、西調査区は後期中葉主体である時期的な差異よりも、居住域と墓域の性格的な相違を表わす出土傾向と捉えられよう。又、中央・西調査区ともに出土している石鏃は、西調査区で有茎石鏃の比率が非常に高く、後期の特徴的な様相を呈しているといえよう。西調査区のみ砂岩製の有溝砥石が大量に出土していることも特徴的である。尚、28～30の埦形を呈する凹石は配石遺構部分から出土しており、祭祀行為に使用された可能性が指摘される。

1～5は石鏃で1は凹基無茎鏃、2は平基無茎鏃、3～5は有茎石鏃。石材は4がチャート、他は黒曜石である。6・7は磨製石斧で石材は蛇紋岩系の石と思われ、8の小形磨製石斧も同様の石材と考えられる。9～13は軟質砂岩の砥石類で9は撥形、10・13は磨製石斧形、11・12は板状を呈し、10以外は中央に溝を有する有溝砥石である。14～18は石錘である。14～16は縦方向中央に溝を廻らし、17・18は上下端部を打ち欠いている。19・20は軽石製品で上部に円孔が開けられている。21は楕円形を呈する安山岩製の垂飾で中央部分に円孔が開けられている。22～27は石棒類である。23・24は基部の破片で、23は刻みによる文様が加えられ、24には鍔状の調整が加えられている。26・27は中央調査区から出土した緑色片岩製の有頭石棒である。28～29は埦形を呈する特徴的な凹石で配石部分から出土している。31・32は脚付石皿の破片で裏面に長方形の脚が付けられ、多孔石になっている。33・34は多孔石である。

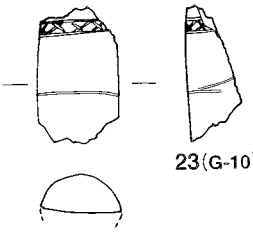


第113図　グリッド出土遺物（18）



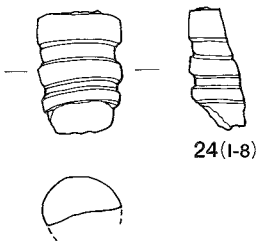
22(G-9)

(33.8)×4.2×4.9cm
1.220g：緑色片岩



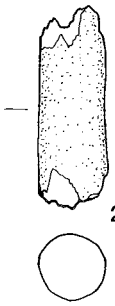
23(G-10)

(5.3)×3.2×(1.6)cm
30g：ハンレイ岩



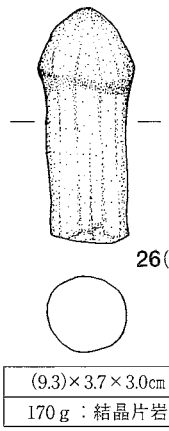
24(I-8)

(4.8)×3.3×(1.9)cm
30g：ハンレイ岩



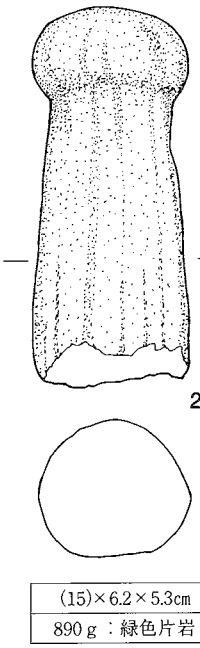
25(G-9)

(7.9)×2.7×2.6cm
80g：粘板岩



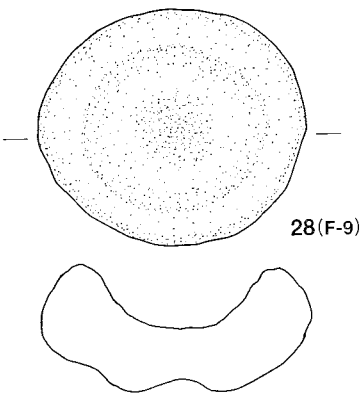
26(中央調査区)

(9.3)×3.7×3.0cm
170g：結晶片岩



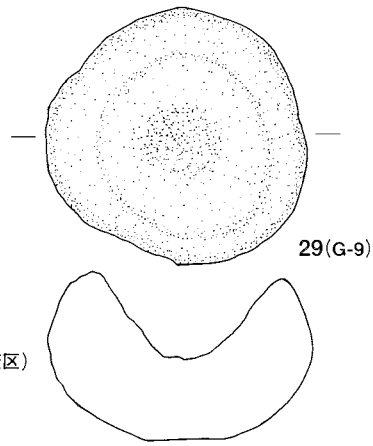
27(中央調査区)

(15)×6.2×5.3cm
890g：緑色片岩



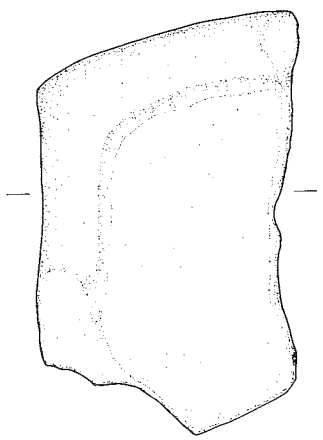
28(F-9)

9.2×10.5×5.0cm
540g：安山岩



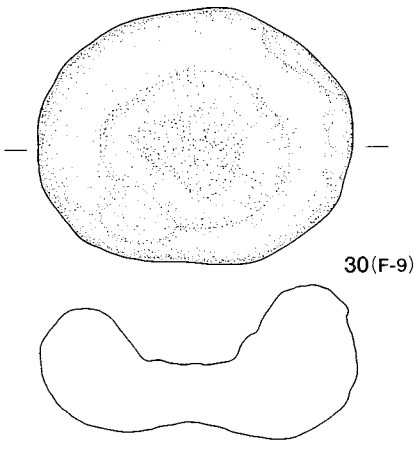
29(G-9)

10.1×10.3×6.6cm
630g：安山岩



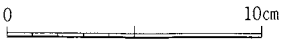
31(O-18)

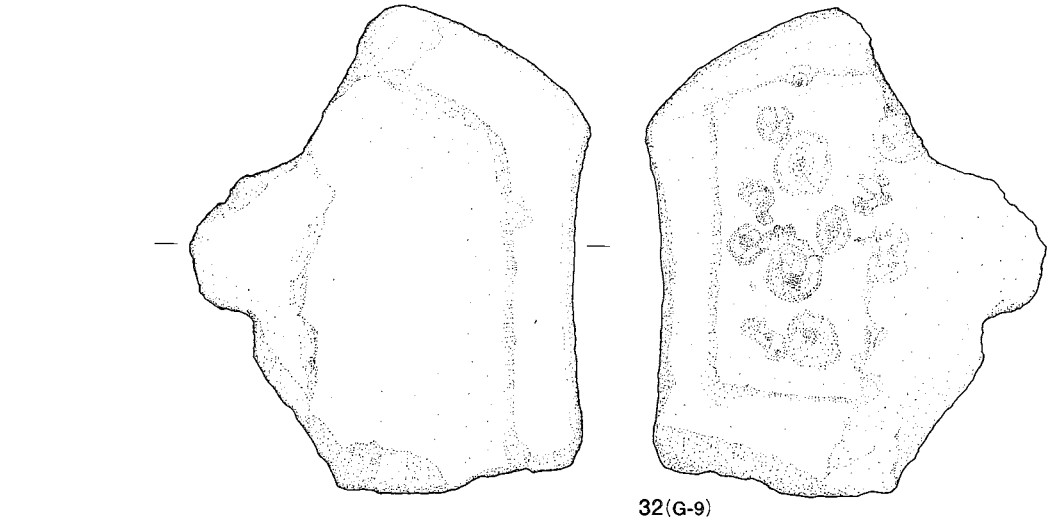
(18.1)×(9.4)×4.3cm
950g：安山岩



30(F-9)

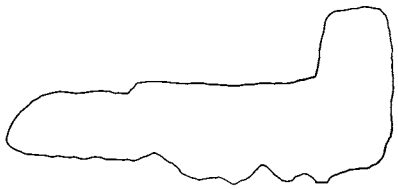
10.1×12.4×6.1cm
510g：砂　岩

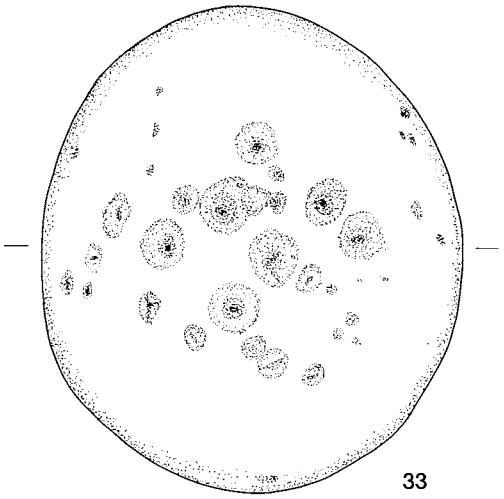




32(G-9)

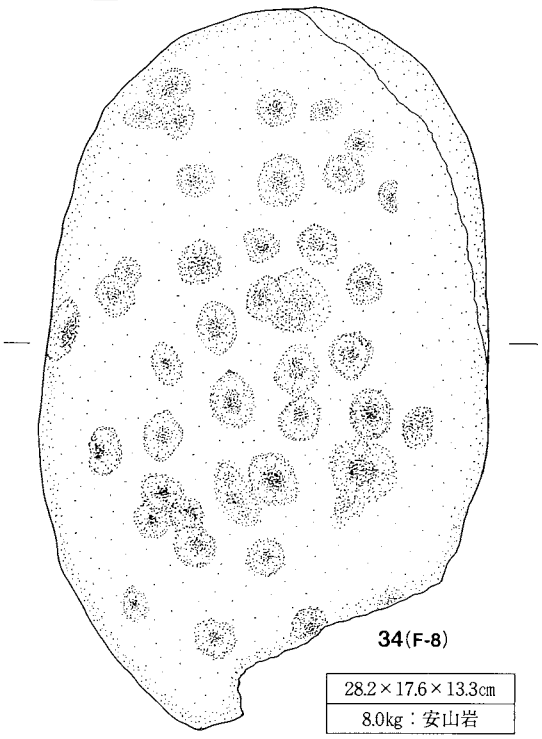
(19.2)×(15.8)×7.0cm
1.120g：安山岩





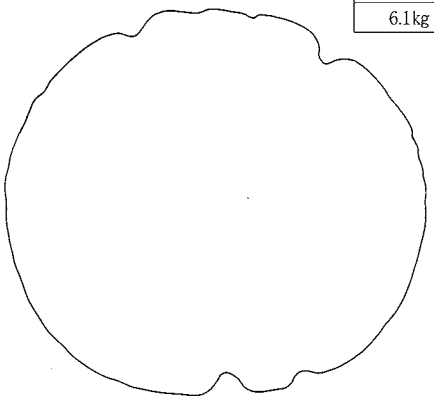
33

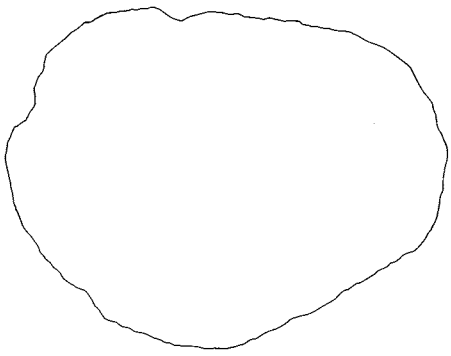
19×16.7×15.2cm
6.1kg：安山岩



34(F-8)

28.2×17.6×13.3cm
8.0kg：安山岩





第115図　グリッド出土遺物（20）

第3節　古代

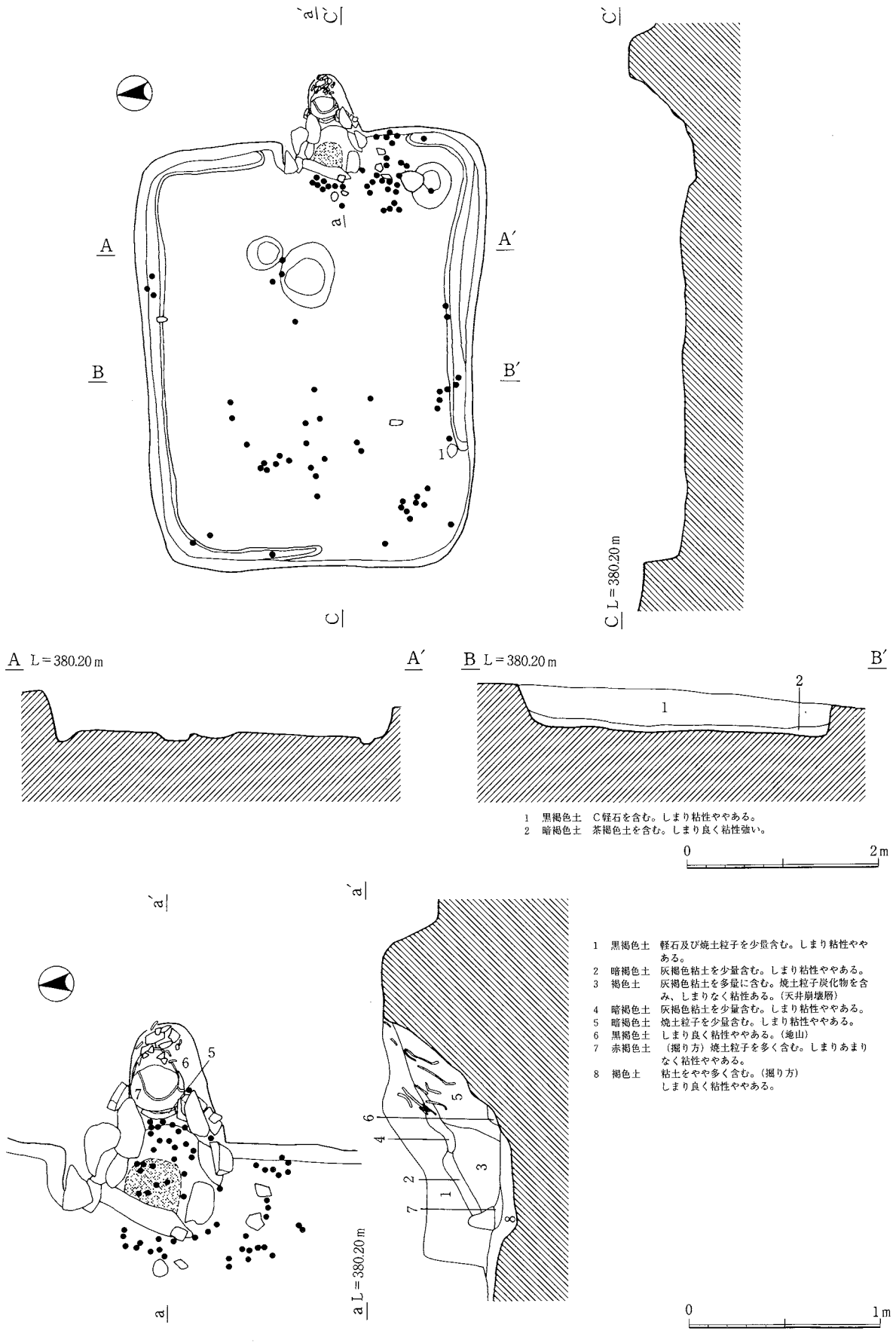
古代の遺構・遺物は中央調査区から2軒の住居跡、西調査区から溝跡3条が検出されている。中央調査区から検出された2軒の住居跡は8世紀代の所産と考えられ、本遺跡の西側に隣接する五料稲荷谷戸遺跡から検出された該期の集落と一連のものとして捉えられる。遺構の状況と立地的に見て五料稲荷谷戸遺跡に集落の中心が想定され、比較的小規模な集落が五料周辺に展開していたと推測される。

10号住居跡　（第116・117図、表－4、図版63・64）

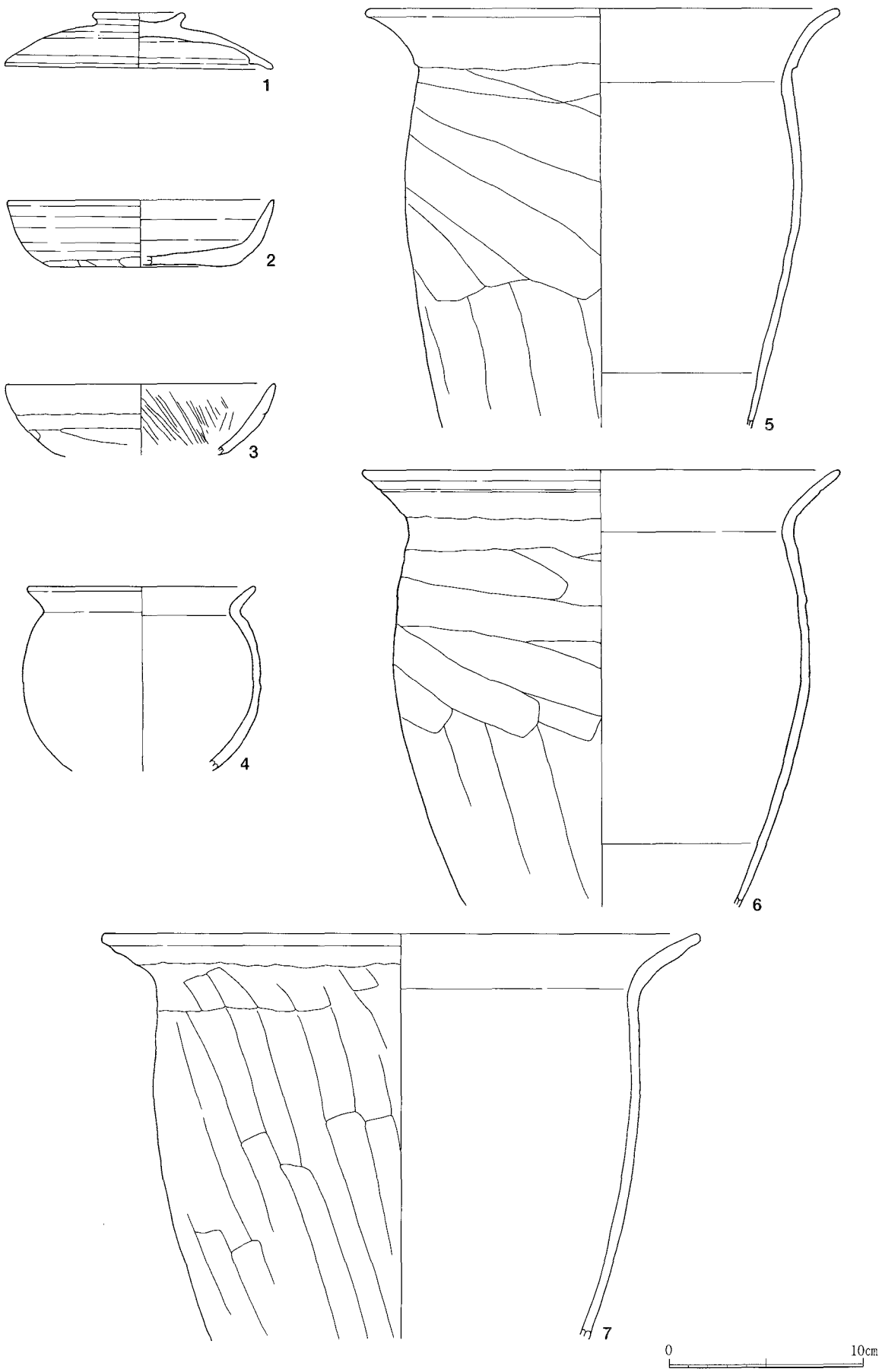
位　置／中央調査区K－15グリッド北側に位置する。　形　態／東西に長い隅丸長方形を呈し、東壁にカマドが付設される。　規　模／東西4.55m、南北3.70m、深さ50cmを測る。　床　面／面をなし、中央部東側に浅いピットが2基検出されている。　カマド／粘土と石を用いて構築され、底部を欠いた土師器長胴甕3個体を重ねた煙道部が付設されていた。　貯蔵穴／南東コーナーから円形の浅い掘り込みが検出されている。　壁　溝／南西コーナー部分とカマド部分を除いて検出された。幅20cm～30cm、深さ14cmを測る。　遺物／煙道部から3個体の長胴甕と、全体に散在して土師器片・須恵器片が出土し、須恵器蓋が北側壁に接して出土している。　時　期／8世紀前半～中葉

表－4　10号住居跡出土遺物観察表

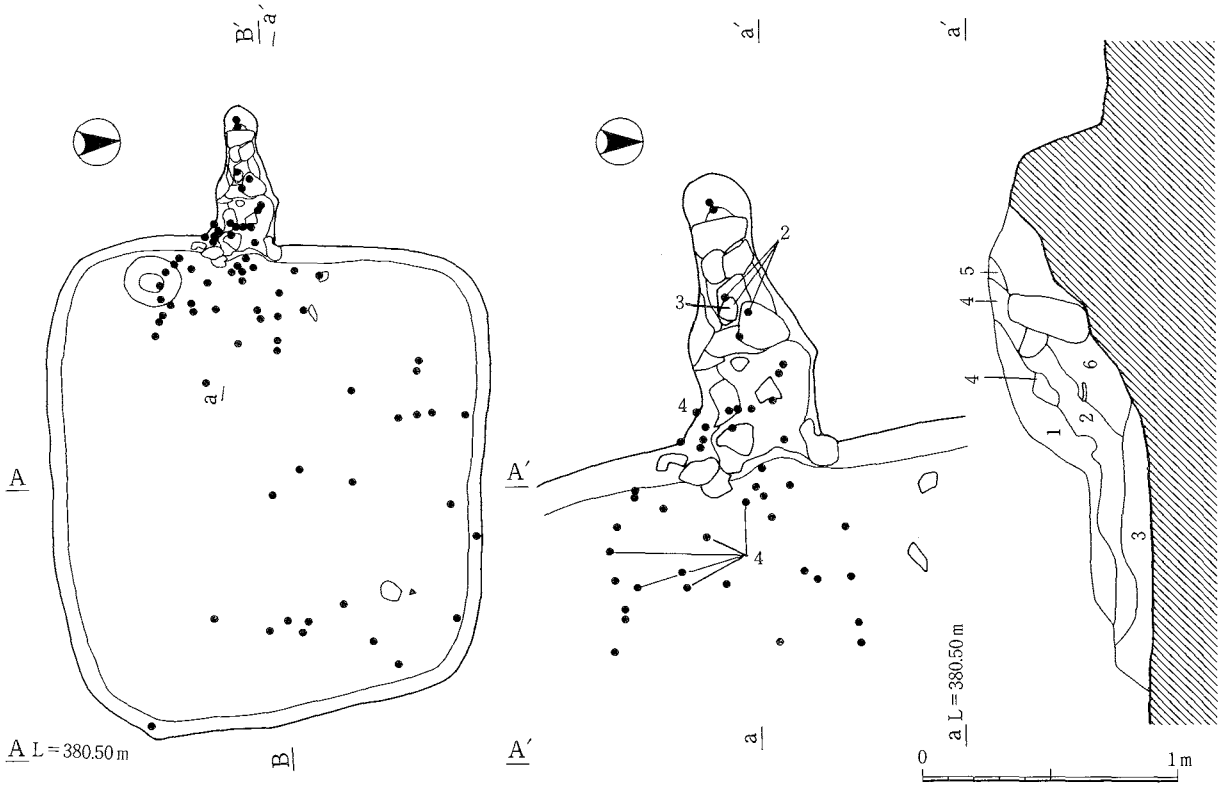
番号	器　種	法　量(cm)	器形・成整形の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1	須恵器蓋	口径　14.0 摘み　4.9 器高　2.9	外面　体部轆轤整形、天井部回転篦削り後回転撫で 内面　体部轆轤整形	暗灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	完　形
2	須恵器坏	口径　(13.8) 底径　(9.5) 器高　(3.4)	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後篦撫で 内面　体部轆轤整形	灰白色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	3分の2欠
3	土師器坏	口径　(13.8) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面　放射状暗文	暗橙色	細砂粒 白色粒	普　通	口縁部破片
4	土師器 小型甕	口径　(11.8) 底径 器高	外面　器面が荒れて調整不明瞭 内面　口縁部横撫で、胴部撫で	暗赤褐色	細砂粒 白色粒	普　通	3分の2欠
5	土師器甕	口径　24.8 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上半斜横位篦削り、下半縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	淡赤褐色	細砂粒 白色粒	普　通	底部欠 カマド煙道部分出土
6	土師器甕	口径　(25.0) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上半横位篦削り下半縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	淡赤褐色	細砂粒 白色粒	普　通	3分の2欠 カマド煙道部分出土
7	土師器甕	口径　31.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	淡赤褐色	細砂粒 白色粒	普　通	底部欠 カマド煙道部分出土

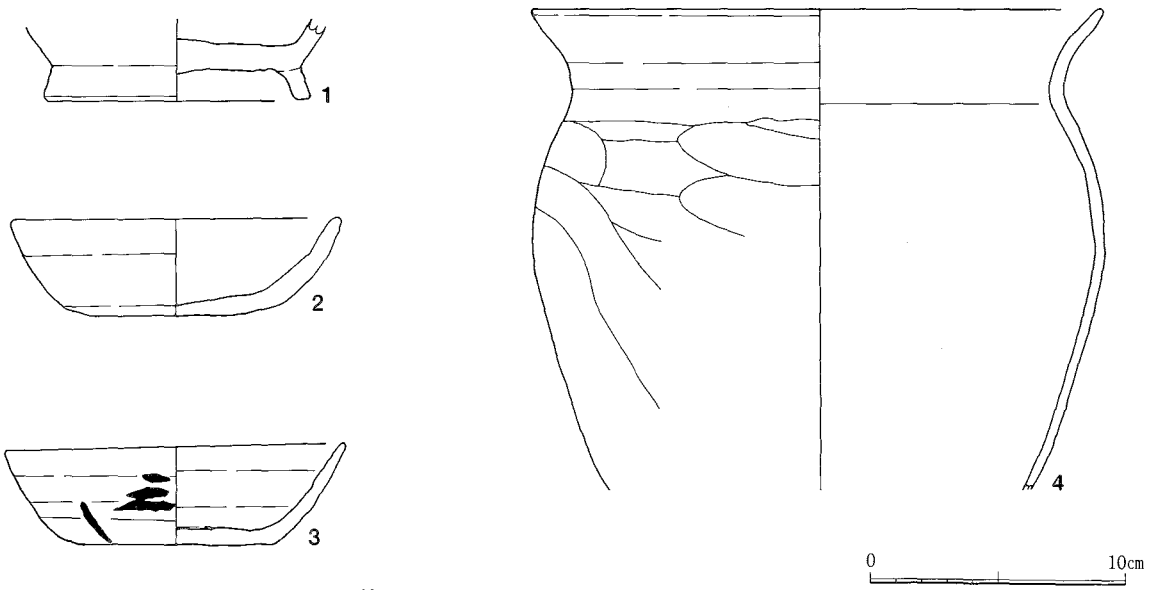


第116図　10号住居跡



第117図　10号住居跡出土遺物





第118図　11号住居跡・出土遺物

11号住居跡　（第118図、表－５、図版63・64）

位　置／中央調査区Ｊ－16グリッド南西に位置する。　形　態／東西に長い隅丸台形を呈し、西壁にカマドが付設されている。　規　模／東西南辺3.80ｍ、北辺3.20ｍ、南北3.40ｍ、深さ40cmを測る。　床　面／面をなす。　カマド／粘土と石で構築され、住居外に約１ｍ細長く突出している。　貯蔵穴／カマド脇の南側に位置する。　壁　溝／なし。　遺　物／カマド周辺と住居南側に散在して土師器片・須恵器片が出土し、カマド煙道部から土師器坏と須恵器坏（墨書）が出土している。　時　期／８世紀中葉～後半。

表－５　11号住居跡出土遺物観察表

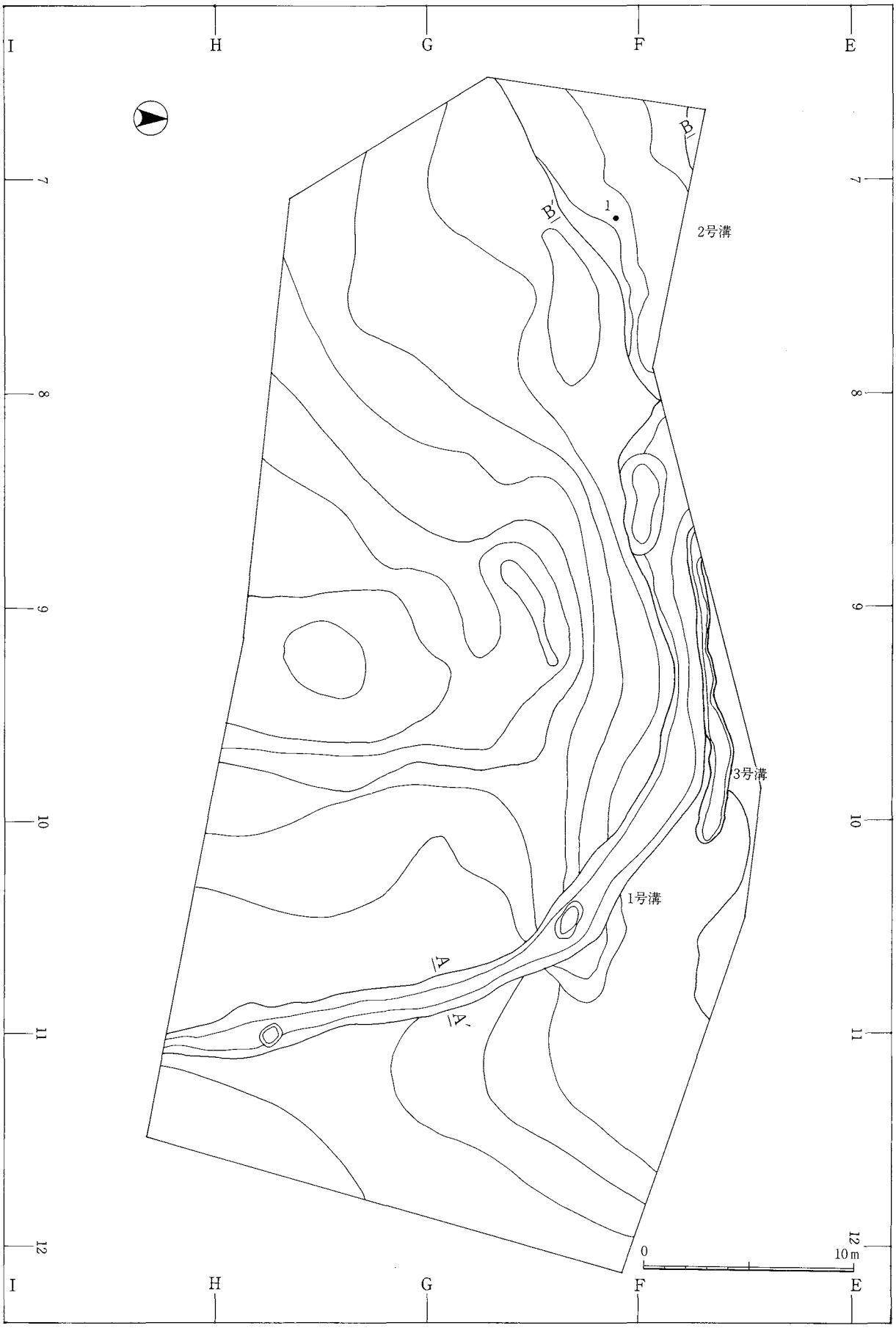
番号	器　種	法　量(cm)	器　形　・　成　整　形　の　特　徴	色　調	胎　　土	焼　成	備　　考
1	須恵器 高台付塊	口径 底径　10.6 器高	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り 内面　体部轆轤整形	灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	体部欠・付高台
2	土師器坏	口径　13.0 底径　7.6 器高　3.8	外面　器面が溶けて調整不明瞭、口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　器面が溶けて調整不明瞭	橙色	細砂粒 白色粒	普　通	完　形
3	須恵器坏	口径　13.6 底径　8.0 器高　4.0	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り 内面　体部轆轤整形	暗灰色	砂粒 白色粒	還　元	ほぼ完形 体部外面墨書
4	土師器甕	口径 底径　(22.6) 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上半横位篦削り下半縦斜位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	赤褐色	細砂粒 白色粒	普　通	３分の２欠

溝　跡　（第119～121図、表－６、図版63・64）

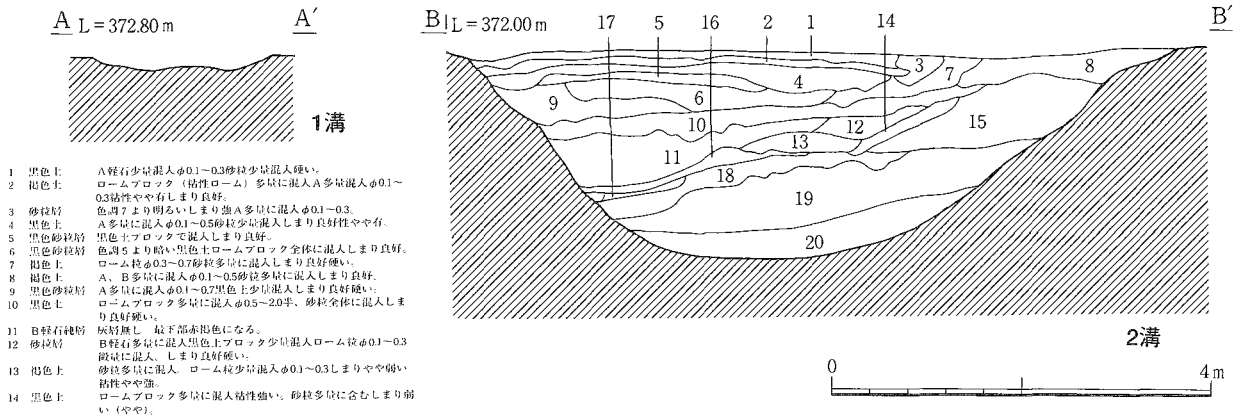
奈良・平安時代の所産と考えられる溝跡は西調査区から３条検出されている。断面皿状を呈する１号溝は幅0.80ｍ～1.80ｍ、深さ10cm～40cmを測り、西調査区の北側から東側にかけて弧状に走行する。調査区北西端部から検出された２号溝は幅６ｍ前後、深さ2.20ｍを測り、覆土の状況から自然流路の可能性が高い。３号溝は調査区北端を１号溝と重複して一部のみ検出されている。遺物は１号溝から９世紀後半の土師器片・須恵器片と石製紡錘車、２号溝から８世紀後半と推測される小形甕が出土している。

表－６　溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	法　量(cm)	器　形　・　成　整　形　の　特　徴	色　調	胎　　土	焼　成	備　　考
１溝 －１	土師器坏	口径　(13.1) 底径　(8.0) 器高　(4.1)	外面　器面が溶けて調整不明瞭 内面　器面が溶けて調整不明瞭	橙色	細砂粒	普　通	４分の３欠
１溝 －２	須恵器坏	口径　13.4 底径　8.3 器高　3.6	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元	４分の１欠
１溝 －３	須恵器 高台付塊	口径　15.6 底径　9.2 器高　6.0	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	３分の１欠
１溝 －４	須恵器甕	口径　(26.0) 底径 器高	外面　轆轤整形 内面　轆轤整形	暗灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	口縁部破片
１溝 －５	土師器甕	口径　(19.6) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横斜位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	淡橙色	細砂粒 白色粒	普　通	口縁部破片
１溝 －６	須恵器甕	口径　(23.4) 底径 器高	外面　轆轤整形、胴部撫で 内面　轆轤整形、叩き後撫で	灰色	細砂粒 黒色鉱物粒 白色粒	還　元 堅　徴	口縁部破片
１溝 －７	石製品 紡錘車	上径2.9cm　下径4.0cm　厚さ1.3cm　孔径0.7cm　重量40cm　緑色岩（ハンレイ岩）					
２溝 －１	土師器 小型甕	口径　13.8 底径　6.2 器高　12.4	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り、篦撫で	淡赤褐色	砂粒 白色粒	普　通	ほぼ完形

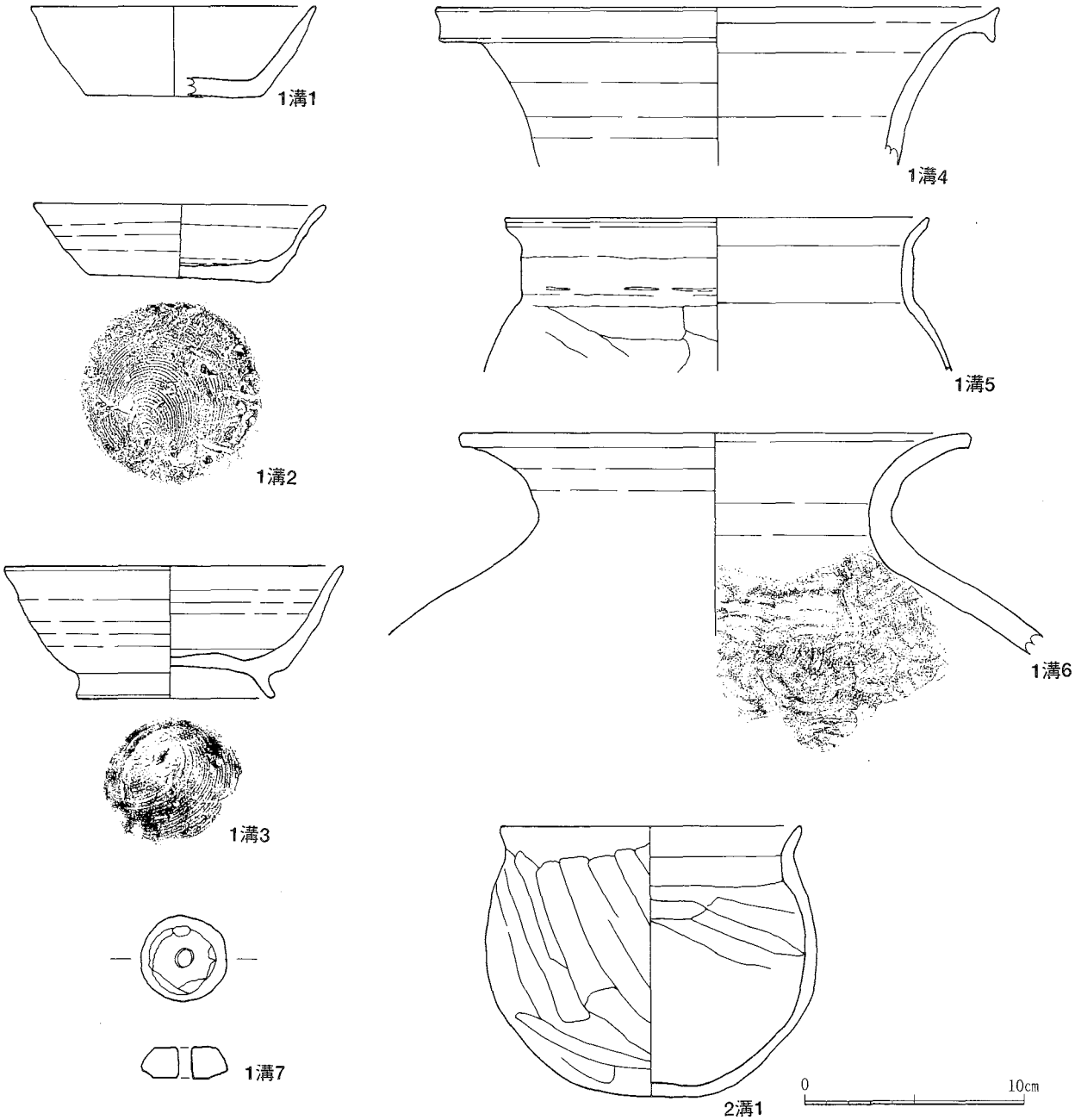


第119図　溝　跡



1 黒色土 A軽石少量混入φ0.1～0.3砂粒少量混入硬い。
2 褐色土 ロームブロック（粘性ローム）多量に混入A多量混入φ0.1～0.3粘性やや有しまり良好。
3 砂粒層 色調7より明るいしまり強A多量に混入φ0.1～0.3。
4 黒色土 A多量に混入φ0.1～0.5砂粒少量混入しまり良好性やや有。
5 黒色砂粒層 黒色土ブロックで混入しまり良好。
6 黒色砂粒層 色調5より暗い黒色土ロームブロック全体に混入しまり良好。
7 褐色土 ローム粒φ0.3～0.7砂粒多量に混入しまり良好硬い。
8 褐色土 A、B多量に混入φ0.1～0.5砂粒多量に混入しまり良好。
9 黒色砂粒層 A多量に混入φ0.1～0.7黒色土少量混入しまり良好硬い。
10 黒色土 ロームブロック多量に混入φ0.5～2.0半、砂粒全体に混入しまり良好硬い。
11 B軽石純層 灰層無し 最下部赤褐色になる。
12 砂粒層 B軽石多量に混入黒色土ブロック少量混入ローム粒φ0.1～0.3微量に混入、しまり良好硬い。
13 褐色土 砂粒多量に混入、ローム粒少量混入φ0.1～0.3しまりやや弱い粘性やや強。
14 黒色土 ロームブロック多量に混入粘性強い、砂粒多量に含むしまり弱い（やや）。

第120図　溝跡断面図



第121図　溝跡出土遺物

第５章　調査の成果

調査の結果、縄文時代前期・中期・後期の集落、後期の配石遺構等が検出されている。その中で本遺跡を特徴付ける遺構は、西調査区から検出された配石遺構・配石墓群であり、遺構を覆う包含層からは当該期の大量の遺物が出土している。本章では検出された配石遺構・配石墓群に補足の説明と若干の考察を加え、調査のまとめとしたい。

配石遺構は、敷石遺構・炉跡・弧状配石・立石・組石・積石等で構成される上部配石と、下部配石の配石墓群で構成されている。配石の形成は堀之内式期に始まり、加曽利Ｂ式期を中心とし、高井東式期まで継続して構築・使用された後、廃棄されたものと推測され、検出された配石遺構の状態はその最終形態と捉えられよう。地形的に湧水によって中央部が沈下し、上部配石・配石墓ともに徐々に崩壊・変形した状態ではあったが、全体の形状、個々の配石・配石墓も旧状の推定が可能な状況であり、遺存状態は非常に良好といえる。又、配石の南側からは配石遺構に伴うと考えられる住居跡２軒も検出されている。

28基検出された下部配石の配石墓は、大きく３形態に分類され、構築方法等によって更に細分される。Ⅰ形態の石棺状組石を有するものは半数以上を占める15基、Ⅱ形態の土坑状の掘り込み長軸端部に石が配されるものは８基、Ⅲ形態の底面に石が配されるものは５基が検出されている。これらの配置状況を見ると、石棺状組石を有するものでは、平積みに蓋石を有するⅠａ１類の12・15・18号配石墓、横積み２～３段に蓋石を有するⅠｃ１類の22・23・24号配石墓が位置的に小群を形成し、ほぼ確実に同時性を示していると考えられ、平積み＋小石・横積みに蓋石のないⅠｂ２類の１・２号配石墓も小群として捉えられる。対して平積みに蓋石のないⅠａ２類は配石墓群西側に散在し、他の配石墓と接しているものが目立っている。土坑状の掘り込み長軸端部に石を配するものでは、両端部に配するⅡａ１類、Ⅱｂ１類の14・16・28号配石墓が小群を形成し、片側のみ配するⅡａ２類、Ⅱｂ２類は西端部に３・４号配石墓、東端部に19・27号配石墓が分散している。底面に石が配されるものは、配石墓群の西側のみに分布し、特に枕石状の石を有し、底石が敷かれるⅠａ類の５・６・７号配石墓が小群を形成している。これらの配置状況から配石墓は２・３基ごとの小群として把握され、各小群はほぼ同時期に構築された可能性が高い。

次に各配石墓の構築時期について出土遺物から推測すると、石棺状組石を有するものでは平積みに蓋石を有するⅠａ１類が加曽利Ｂ１式期、平積みに蓋石のないⅠａ２類、平積み＋小石積みに蓋石を有するⅠｂ１類、横積み２～３段に蓋石を有するⅠｃ１類は加曽利Ｂ２～３式期、平積み＋小石・横積みに蓋石のないⅠｂ２類は加曽利Ｂ３～高井東式期に概比定されよう。長軸端部に石を配するものでは片側のみに配するⅡａ２類、Ⅱｂ２類が加曽利Ｂ１～２式期、両側に配するⅡａ１類、Ⅱｂ１類は加曽利Ｂ３～高井東式期に比定され、底面に石が配されるⅢ類は加曽利Ｂ２～３式期に概比定されるようである。尚、高井東式期の遺構として配石遺構の南側に２号埋設土器（３個体）が存在している。１基のみの検出であるが配石遺構に関連するものとして検討を要する遺構である。

近年、群馬県内では配石遺構の検出例が増加し、本遺跡と同時期の配石遺構が検出された代表的な遺跡として、月夜野町深沢遺跡（下城他　1987）、榛東村下新井遺跡（新藤・小宮　1987）、前橋市大道遺跡（近江屋　1991）等があり、碓氷川流域においても後期前半の松井田町行田梅木平遺跡（間宮　1997）、後期前半～晩期前半に至る安中市天神原遺跡（大工原・林他　1994）等が存在している。本遺跡はこれらの遺跡との比較検討を要する遺跡であるとともに、県内では資料の少ない加曽利Ｂ式・高井東式の好資料も出土しており、紙面を改めて再検討をしたいと考えている。

参考文献

安孫子昭二　1988「加曽利Ｂ様式土器の変遷と年代（上）」『東京考古』６　東京考古談話会

安孫子昭二　1989「加曽利Ｂ様式土器の変遷と年代（下）」『東京考古』７　東京考古談話会

安孫子昭二　1993『「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分析』『東京考古』11　東京考古談話会

大塚達朗　1986「型式学的方法・加曽利Ｂ式土器」『季刊考古学』第17号　雄山閣

鈴木正博・鈴木加津子　1979『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－（上）』取手市教育委員会

鈴木正博・鈴木加津子　1981『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－（下）』取手市教育委員会

鈴木正博　1981『「曽谷式」研究序説』『古代探叢』　早稲田大学出版会

百瀬長秀　1984「羽状の沈線文を持つ土器の系統と展開」－長野県の縄文時代後～晩期土器概観－
『長野県考古学会誌』49　長野県考古学会

新津　健　1992「金生遺跡出土の土器　１（後期）」『研究紀要』８　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

林　克彦　1996「群馬県における加曽利Ｂ式土器の変遷と地域性」『群馬考古学手帳』６　群馬土器観会

縄文セミナーの会編　1990『縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会

縄文セミナーの会編　1996『後期中葉の諸様相』・同－記録集－　縄文セミナーの会

『土偶とその情報』研究会編　1995『関東地方後期の土偶』－山形土偶の終焉まで－　『土偶とその情報』研究会

宮下健司　1995「長野県における縄文時代後期の土偶」『長野県立歴史館研究紀要』　長野県立歴史館

鈴木保彦　1980「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』第９号　神奈川考古同人会

鈴木保彦　1986「続・配石墓の研究」『神奈川考古』第22号　神奈川考古同人会

下城　正他　1989「縄紋時代後期における配石墓の構造」－深沢遺跡の形成過程を中心として－
『研究紀要』６　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

山梨県考古学協会編　1990『シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷　－地域的特色とその画期－」』
山梨県考古学協会・山梨学院大学

大工原豊・林　克彦　1995「配石墓と環状列石」－群馬県天神原遺跡の事例を中心として－
『信濃』第47巻　第４号　信濃史学会

三沢正善　1982『乙女不動原北浦遺跡』発掘調査報告書　小山市教育委員会

下城　正他　1987『深沢遺跡　前田原遺跡』－縄文時代後期配石墓の調査－
群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社

雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一　1988「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』第２号　山梨県考古学協会

藤巻幸男・能登　健　1988「布施遺跡」『群馬県史　資料編１』　群馬県

新藤　彰・小宮俊久　1988「下新井遺跡」『群馬県史　資料編１』　群馬県

石井克巳　1988「押手遺跡」『群馬県史　資料編１』　群馬県

岡屋英治　1988「大原道東遺跡」『群馬県史　資料編１』　群馬県

小林敏夫　1988「北米岡遺跡」『群馬県史　資料編１』　群馬県

新津　健　1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』－県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－　山梨県教育委員会

大江正行　1990『仁田遺跡　暮井遺跡』　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

近江屋成陽　1991『横俵遺跡群Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査事業団

平林　彰他　1993『北村遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11－明科町内－
日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター

大工原豊・林　克彦他　1994『中野谷地区遺跡群』
－県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　安中市教育委員会

大内千年　1994『上高津貝塚Ａ地点』　土浦市教育委員会

小川和博他　1995『中妻貝塚』－発掘調査報告書－　取手市教育委員会

縄文セミナーの会編　1989『縄文中期の諸問題』　縄文セミナーの会

縄文セミナーの会編　1993『縄文終末の諸様相』　縄文セミナーの会

縄文セミナーの会編　1994『早期終末・前期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

縄文セミナーの会編　1995『中期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

関根真二他　1986『糸井宮前遺跡Ⅱ』　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

田口　修　1991『五料山岸遺跡』～上信越自動車道（工事用道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査～松井田町教育委員会

田口　修　1990『松井田工業団地遺跡』　松井田町教育委員会・群馬県企業局

松井田町誌編さん委員会編　1985『松井田町史』　松井田町誌編さん委員会

長野県編　1982『長野県史　考古資料編　全１巻（２）主要遺跡（北・東信）』㈱長野県史刊行会

長野県編　1988『長野県史　考古資料編　全１巻（４）遺構・遺物』㈱長野県史刊行会

五料稲荷谷戸遺跡
(高墓遺跡)

第１章　遺跡の立地

本遺跡は松井田町大字五料字梨の木に所在し、碓氷川左岸の中位段丘と松井田丘陵の裾部の境界付近に立地する。碓氷川は長野県境界付近の松井田町大字峠に源を発し、山麓の南より中尾川・入山川・中木川、北より水谷川・矢の沢・小山沢などの小河川と合流し、町内のほぼ中央を東流して安中市方向へと流下している。碓氷川の左岸には、御所平の町立臼井小学校付近から五料・新掘・松井田を経て安中市郷原・築瀬・悪途に至る中位段丘があり、河床からの比高は上流では20ｍ前後、下流では40ｍ前後を測る。

基盤層は安山岩の段丘砂礫であり、上位を主に浅間火山の噴出物である上部ローム層（層厚６ｍ前後）が被覆し、その上に耕作土である黒褐色土が堆積している。したがって、中位段丘は第四期洪積世後期以前に形成されたと考えられる。

調査区内における地勢は緩やかに西から東へと高さを減じ、標高は378～410ｍの範疇にある。古代の集落跡は主に標高378ｍ前後の平坦地に所在し、１号溝状遺構は標高408ｍ前後の等高線に沿って検出されている。

また、南方を流れる碓氷川からは約500ｍを測り、同じ中位段丘面であるその中間には国道18号線と信越本線が並走し、町民の居住・生産地域であると共に交通の要衝となっている。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法（１～４図）

確認調査）

遺跡は県教育委員会が昭和59年に実施した現地踏査によって、遺跡の所在が確認されたものである。したがって、発掘調査は遺構の分布状況・時期・性格を把握することより開始した。トレンチは調査区域に沿って概ね南北方向に設定し、調査対象面積に対して20%の試掘を行った。

本調査）

確認調査によって得られた成果に基づき、県教育委員会の指導の基に本調査の範囲を決定した。

調査区には公共座標を基準とする10ｍ四方のグリッドを覆せて調査の基準とした。グリッドの名称は東西ラインを算用数字で西から１～100、南北ラインを北からアルファベットでＡ～Ckとし、各北西隅をグリッド呼称として使用した。

各遺構の掘り下げは土層観察の為のベルトを設定し、慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物については、原則として出土地点・高さを記入して個別に取り上げ、遺構外出土遺物については各グリッド毎に一括して取り上げた。

実測図の縮尺は以下の通りである。

トレンチ設定図－－－１／500　　遺構配置図－－－１／200　　住居跡・井戸・土坑－－－１／20

溝・道跡－－－１／40　　カマド－－－１／10　　掘立柱建物跡－－－１／20

写真の撮影は３台のカメラ（白黒ブローニー６×７、白黒35㎜、カラースライド35㎜）を使用し、各調査段階において随時実施した。更に、遺跡の全体写真はバルーンを使用して行った。

基本層序は１号溝状遺構が検出されたＧ－９グリッドと集落跡が構成されているBo・Bp－73グリッドにて実施し、掘り下げは板鼻黄色軽石層以下までとした。

第２節　調査の経過

平成元年３月期

16日、Ａ区より発掘調査を開始する。試掘を開始するにあたり任意にテストピットを設定し、堆積状況及び遺構確認面の把握に勤める。併せて作業用のテント・トイレ等を設営する。22日、テストピットの成果を踏まえトレンチによる試掘調査を開始する。その結果、調査区東西方向に浅間Ｂ軽石純層を遺構覆土とする溝状の遺構を確認する。

４月期

６日、先月の試掘調査結果を踏まえ、調査区北方向より遺構確認面までの表土除去を開始し、併せて遺構検出作業に努める。その結果、溝状の遺構は上面幅が１～６ｍの範疇であることが確認される。また、二次堆積の浅間Ｂ軽石を覆土中に混入する畠跡を４枚確認する。21日、溝状遺構の掘り下げを開始する。

５月期

先月に引き続き、溝状遺構の掘り下げを継続。１日、１・２号畠跡の調査を開始。15日、Ａ区に10ｍスパンの公共座標と水準点を設定する。16日、溝状遺構の断面実測及び写真撮影を実施。

６月期

先月に引き続き、溝状遺構の掘り下げを継続。調査が進展するにつれ、溝状遺構の規模が明らかにされていく。確認現長は直線で165ｍ、確認面よりの掘り込みは0.6～２ｍを測り、底面には部分的に人の往来によると思われる硬化面が認められる。東山道の推定地に近いことより、東山道へのアクセス道路との論が持ち上がる。13日、溝状遺構の視察が文化庁・県教育委員会・町教育委員会によって実施され、遺構の性格について論議される。

７月期

先月に引き続き、溝状遺構の掘り下げを継続。４日、古代以降の道跡（幅0.5ｍ程）を確認し、調査を開始する。６日、３・４号畠跡の調査を開始する。15日・16日、現地説明会を実施し、一般参加者170名が参加する。17日、溝状遺構の平面実測を開始する。

８月期

トレンチによる試掘を進めた結果、Ｎ～Ｒ－19～23・Be～Bj－57～65・Bh～Br－70～82グリッド内において古代の住居跡が確認された。試掘結果に基づき遺構確認面までの表土除去を行い、併せて遺構検出作業を行う。８日、実測を含み溝状遺構の調査を終了する。上記の地区において確認された遺構は、竪穴式住居跡が主体であり、遺構数は23軒を数える。９日、１号住居跡より掘り下げを開始する。

９月期

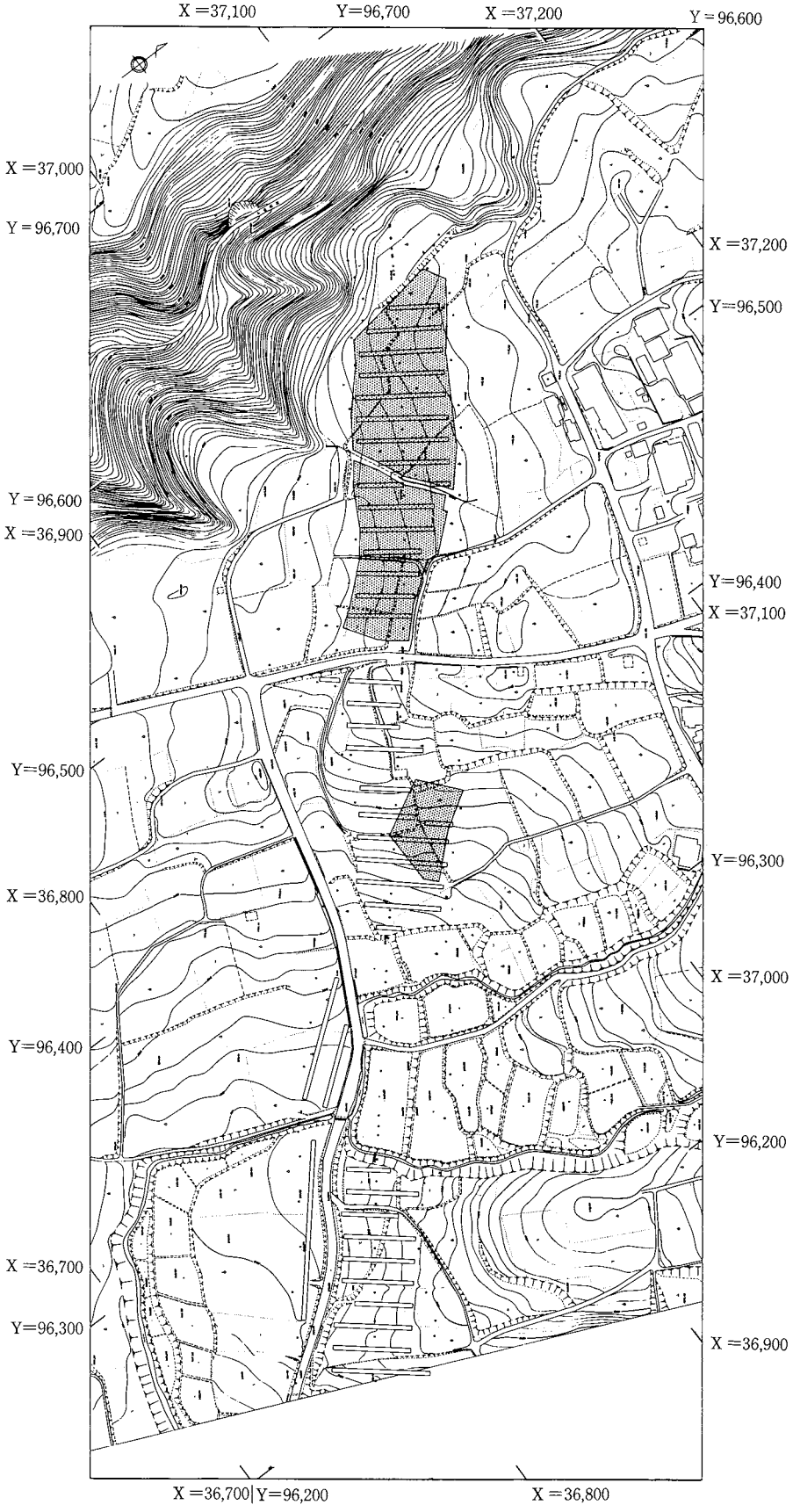
本月は荒天のため、現場の実質稼働日数が11日に落ち込む。先月に引き続き住居跡の遺構調査を継続。１～９号住居跡の調査を終了する。

10月期

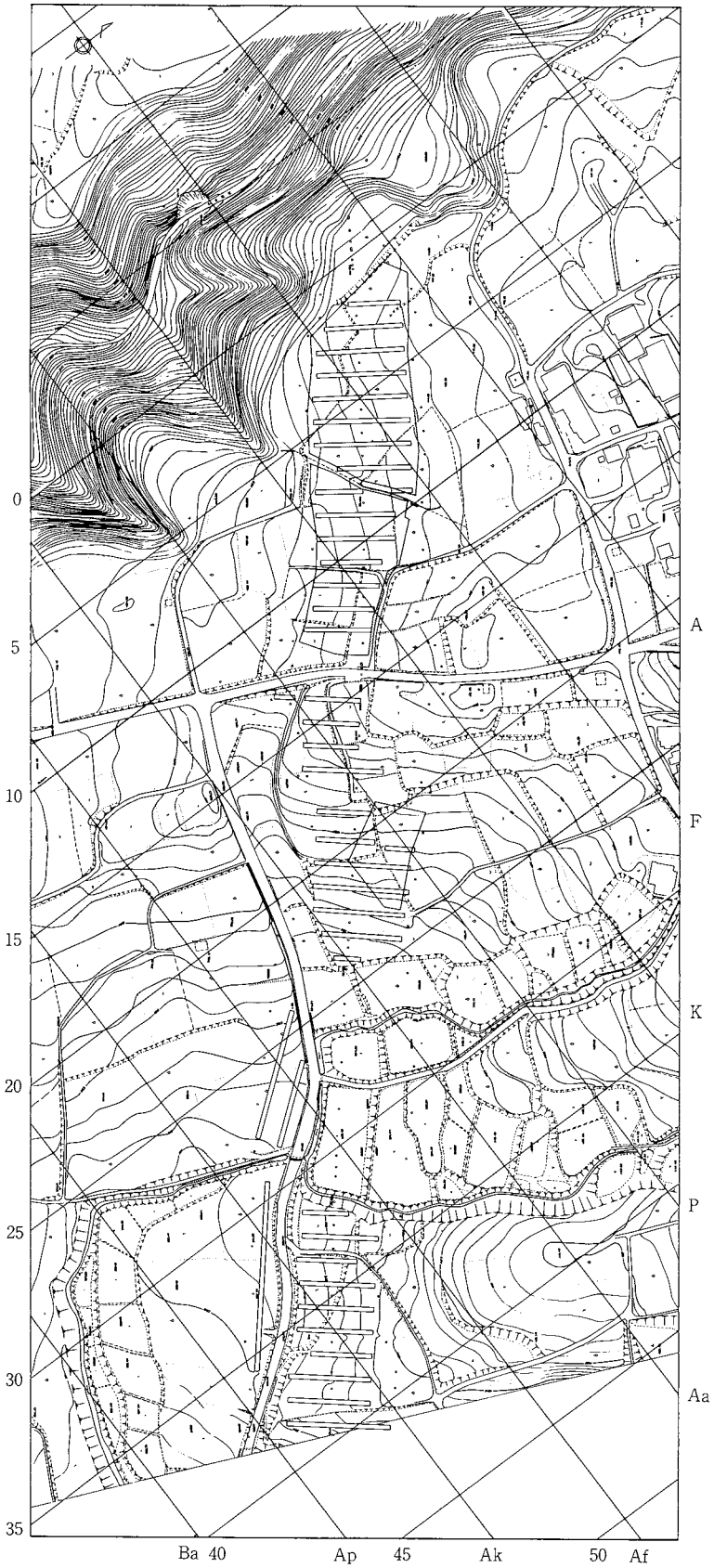
先月に引き続き、住居跡の遺構調査を継続。Bl・Bm－74・75グリッドにおいて、２間×２間の建物に４個の柱穴が囲繞する堂的建物跡が検出される。20日、床下調査を含み１～23号住居跡の調査を終了する。31日、県教育委員会の発掘調査終了確認を得る。

11月期

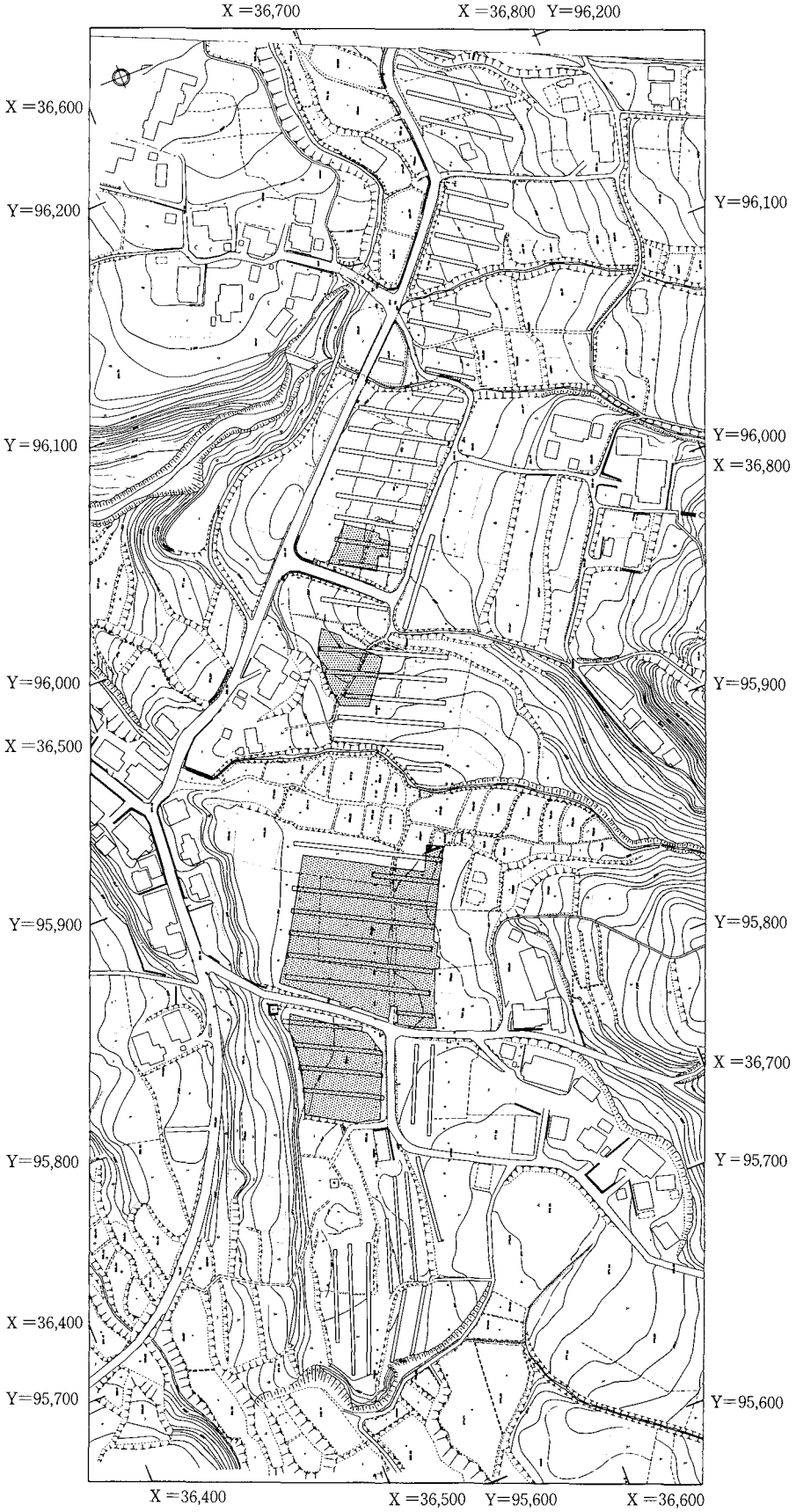
３日、バルーン使用による航空撮影を実施。８・９日、プレハブ及び発掘器材を撤収し、併せて借地の整備を行い現場調査の全てを終了する。



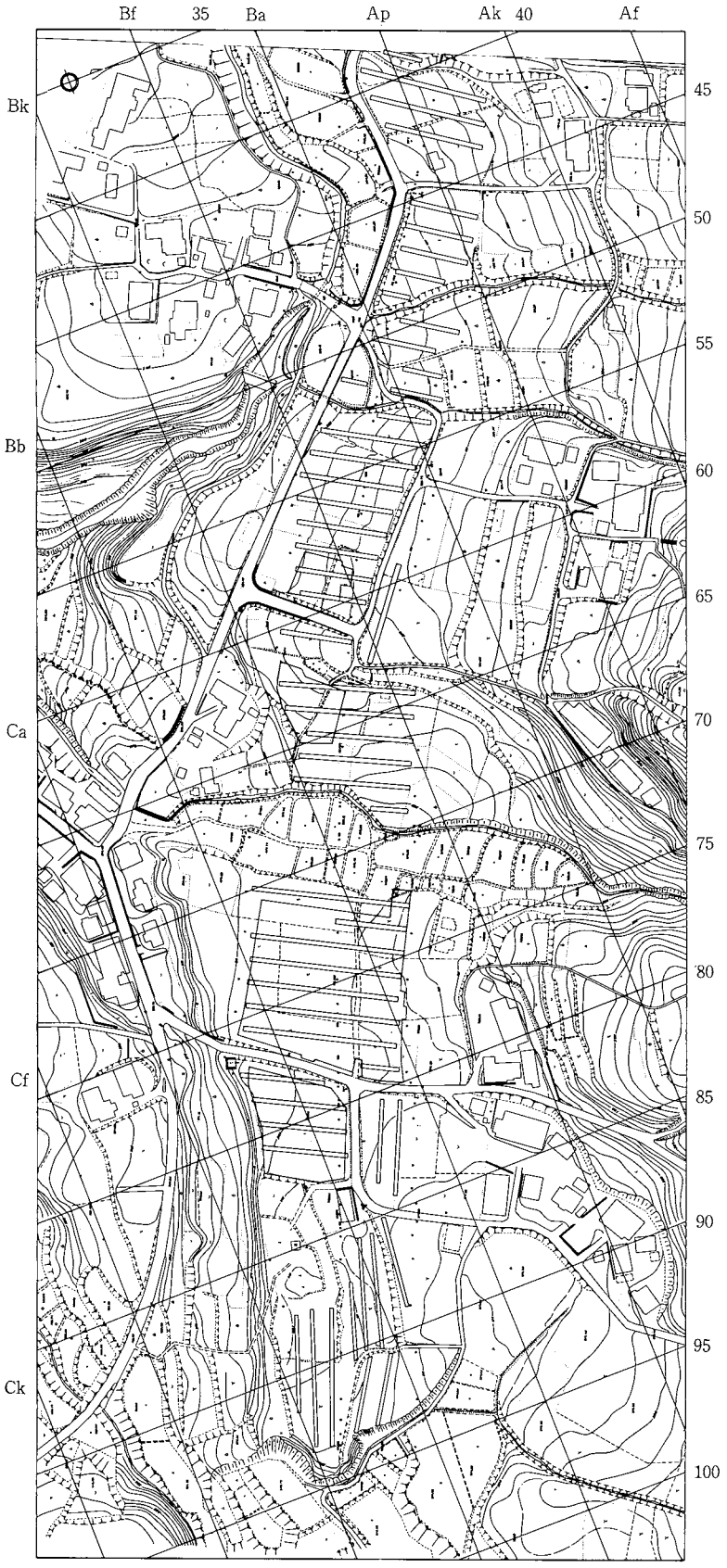
第１図　トレンチ設定・調査区分図（西地区）　１／3000



第２図　グリッド設定図（西地区）　１／3000



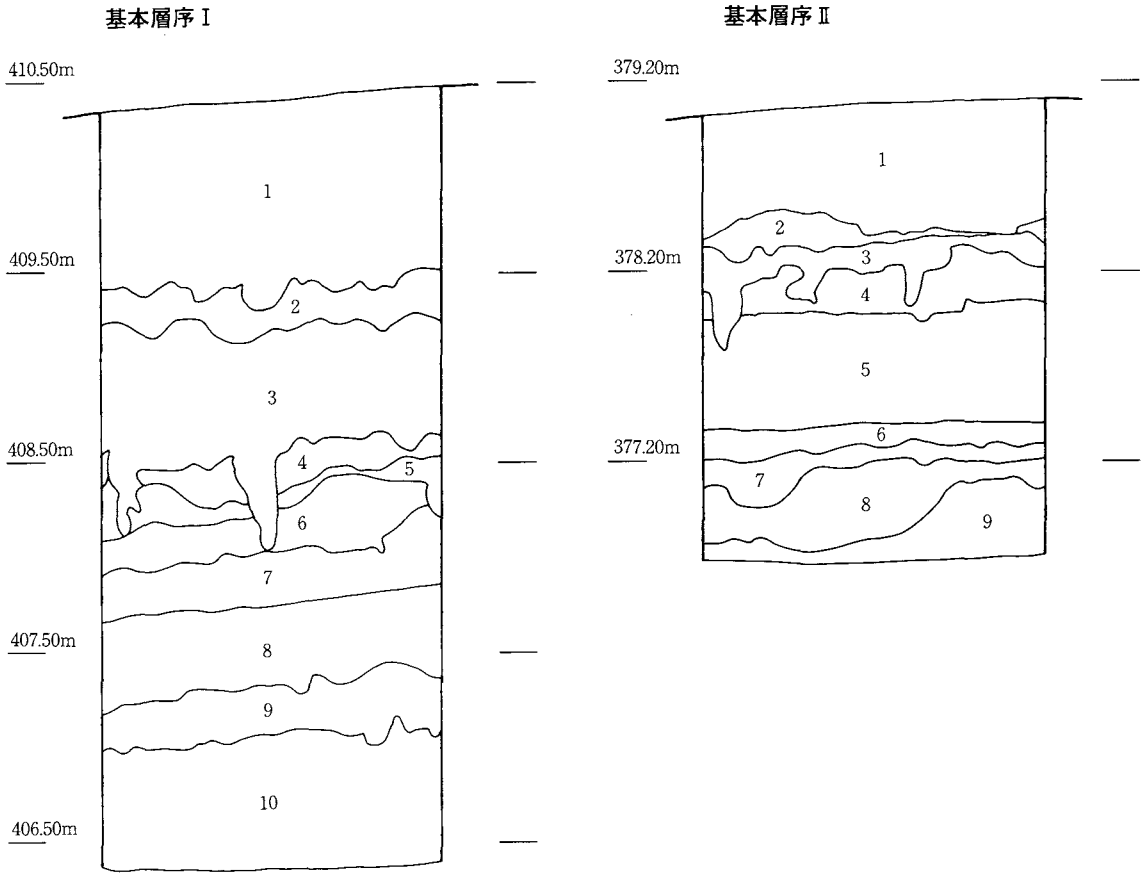
第３図　トレンチ設定・調査区分図（東地区）　１／3000



第４図　グリッド設定図（東地区）　１／3000

第３章　基本層序　（第５図　図版８－４）

溝状遺構が検出されたＧ－９グリッド（基本層序Ⅰ）と古代の集落跡が構成させるBo・Bp－73グリッド（基本層序Ⅱ）に於て実施した。各地区における古代の遺構確認面は概ね一様であり、層序第３層とした褐色土が相当する。また、基本層序Ⅰが示す通り、溝状遺構が検出されたＡ～Ｎ－１～13グリッド付近では、板鼻黄色軽石層（Ｙ・Ｐ層）降下以後、古代以前の地殻変動等に起因すると思われる地滑性堆積層（６～８層）が観察される。



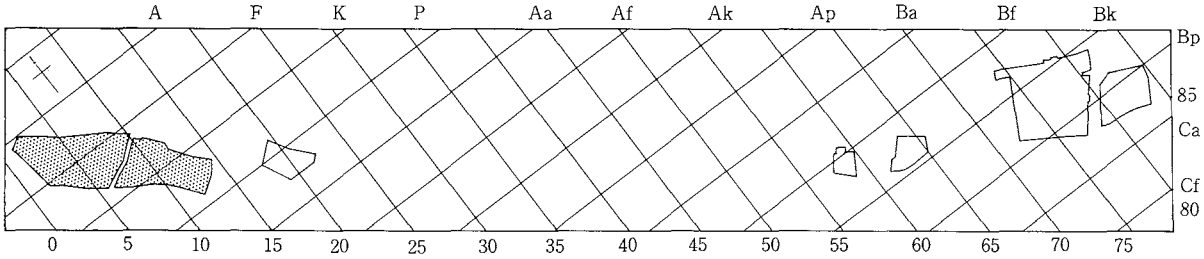
基本層序Ⅰ　土層説明

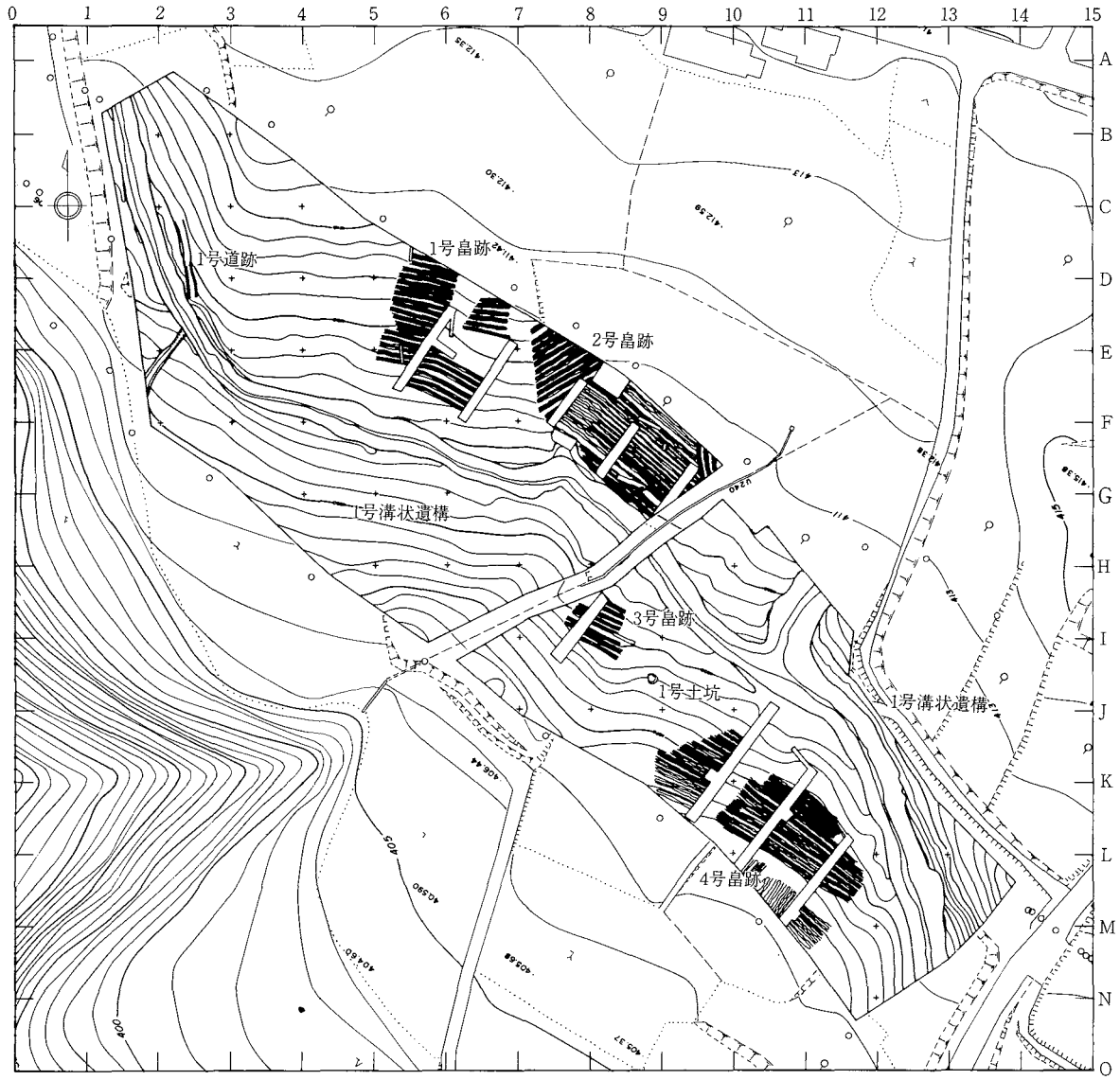
1	暗褐色土	Ａ軽石（φ２～30㎜）含む。（耕作土）
2	黒褐色土	Ｂ軽石（φ２～20㎜）含む。（耕作土）
3	褐色土	締まり良好。（古代遺構確認面）
4	暗褐色土	黄褐色軽石（φ２～10㎜）を若干含む、締まり強。
5	暗褐色土	ロームがブロックで（φ２～20㎜）入る。
6	黄褐色土	二次堆積ローム層、シルト質で強く締まる。
7	橙褐色土	二次堆積ローム層、強く締まる。
8	黒色土	橙褐色軽石（φ２～10㎜）を若干含む。
9	黄褐色土	上部ローム層。
10	板鼻黄色軽石層	（Ｙ・Ｐ層、φ２～40㎜）

基本層序Ⅱ　土層説明

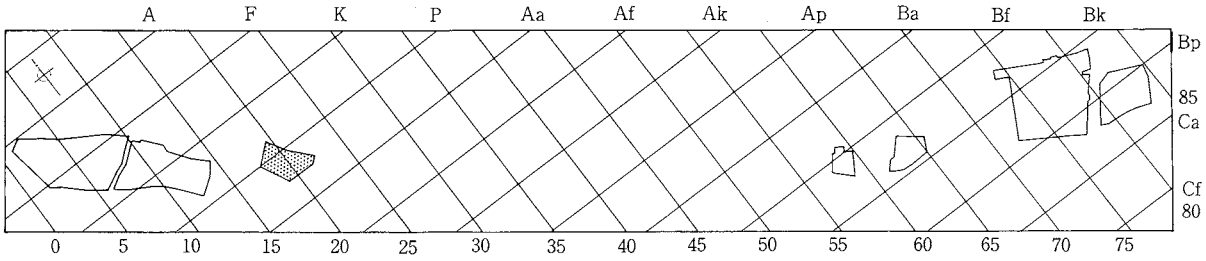
1	黒褐色土	Ｂ軽石（φ２～20㎜）二次的に混入。
2	黒褐色土	１層より色調明るい、締まり強い。
3	褐色土	ローム斬移層。（古代遺構確認面）
4	黄褐色土	上部ローム層。
5	板鼻黄色軽石層	（Ｙ・Ｐ層、φ２～40㎜）
6	黄褐色土	上部ローム層、締まり強く　粘性強。
7	暗色帯	中部ローム層、締まり強く粘性強。
8	暗褐色粘質土	締まり強く粘性強。
9	灰白色粘質土	粘土化が進む。

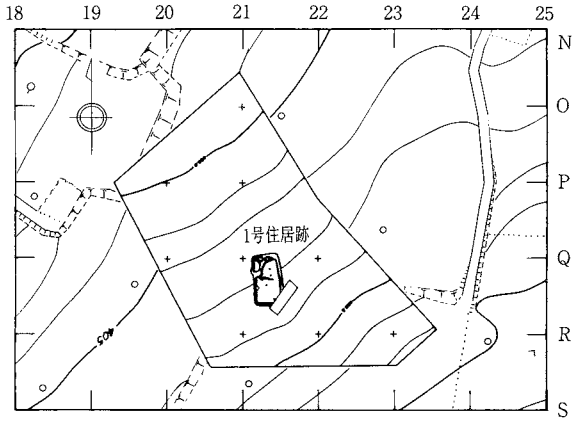
第５図　基本層序

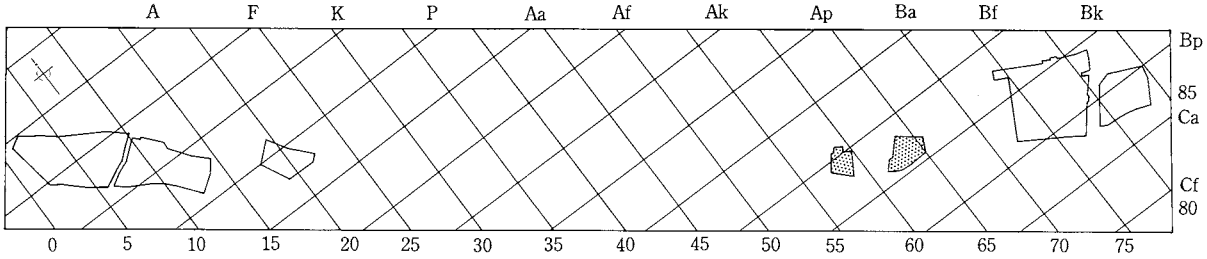


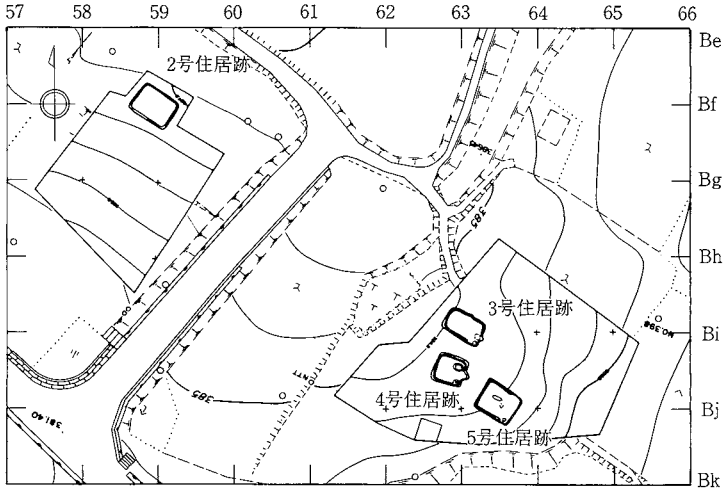


第6図　遺構配置図（1）　1／1000

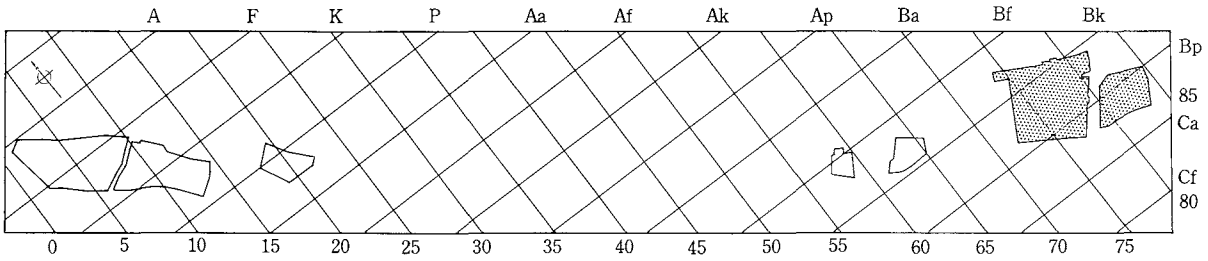


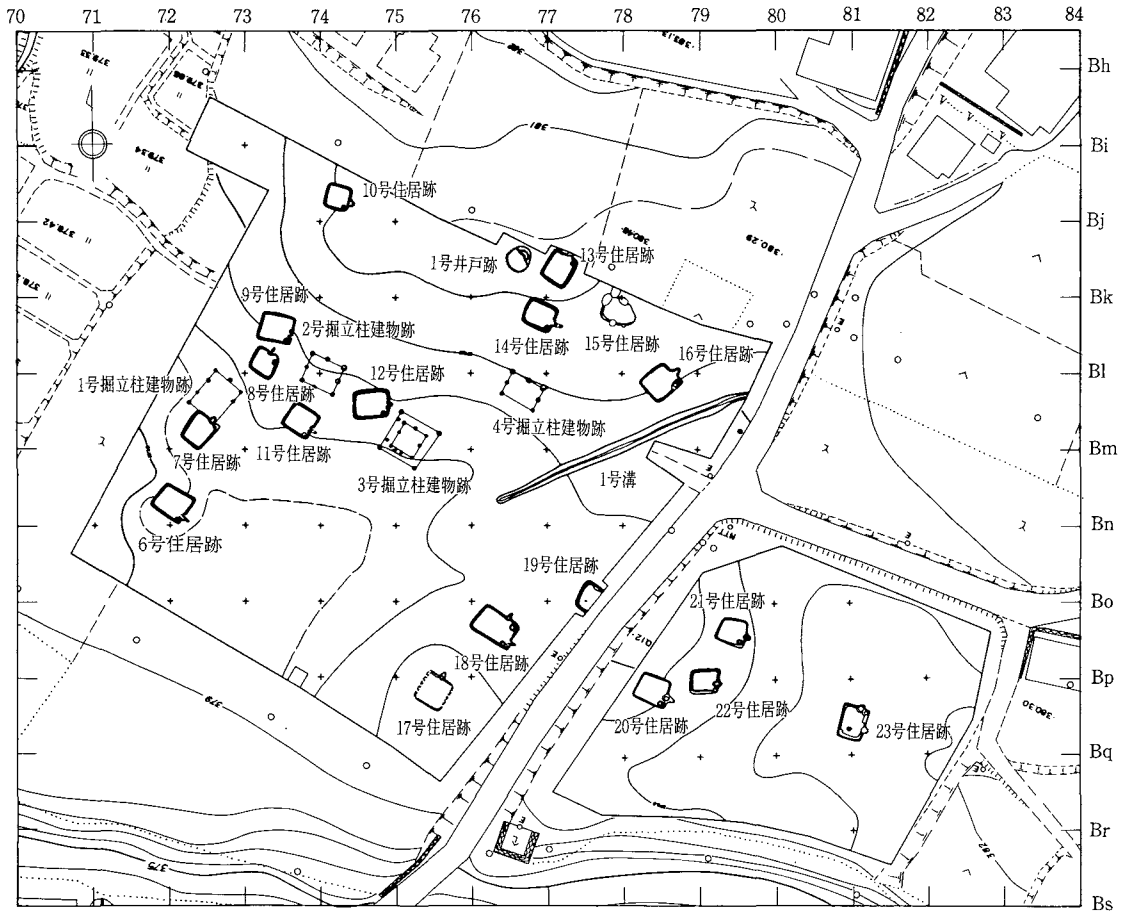






第7図　遺構配置図（2）　1／1000





第8図　遺構配置図（3）　1／1000

第４章　検出された遺構・遺物

第１節　各時代の概観

本遺跡は、碓氷川左岸の標高408～412ｍの段丘上に存在する。この台地は南に緩やかに傾斜しており、今回の調査区の南方では急な斜面となっている。調査区は東地区・中央地区・西地区の３地区に分かれており、遺構・遺物は中央地区においては極めて薄く、東西両地区に集中している。検出された遺構・遺物は縄文時代から近世に至る長期間に亘るが、その中心となるのは奈良・平安時代である。

縄文時代では、縄文土器と石器が出土したが、遺構は検出されていない。縄文土器は花積下層式・黒浜式・諸磯ｂ式・五領ヶ台式・阿玉台式・曽利式・加曽利Ｅ３式・加曽利Ｅ４式・称名寺式・堀之内式・加曽利Ｂ式が存在し、石器には打製石斧・石匙・凹石・磨石などがある。

弥生時代では、西地区のＧ－９グリッドを中心に再葬墓の可能性のある中期初頭の土器と土器片が出土している。いずれの土器も基本層序Ⅰの第３層の上位から中位にかけて包蔵されており、遺物に伴う落ち込みは確認されなかった。

奈良・平安時代では、東西両地区に於て検出された遺構の様相が大きく異なり、それぞれ異なる性格の遺跡として把握することができる。東地区においては竪穴式住居跡23軒・掘立柱建物跡４棟・井戸跡１基・土坑１基・溝１条が存在する集落跡が検出されている。遺物は８～９世紀代の土師器・須恵器を中心として、この他に刀子・編石・砥石などが出土しており、須恵器の中には墨書土器も存在する。西地区においては溝状遺構１条と畠跡１枚が確認されている。いずれも浅間Ｂ軽石を覆土中に含むが、溝状遺構では覆土の上層もしくは中層に純層で入るのに対し、畠跡は直接覆われていたため両遺構は時期的に異なると思われる。なお、溝状遺構はその性格をめぐり最も注目される遺構の一つであり、第５章ではその性格について、群馬県史・松井田町史・東山道考に依拠しつつ論じて行きたい。

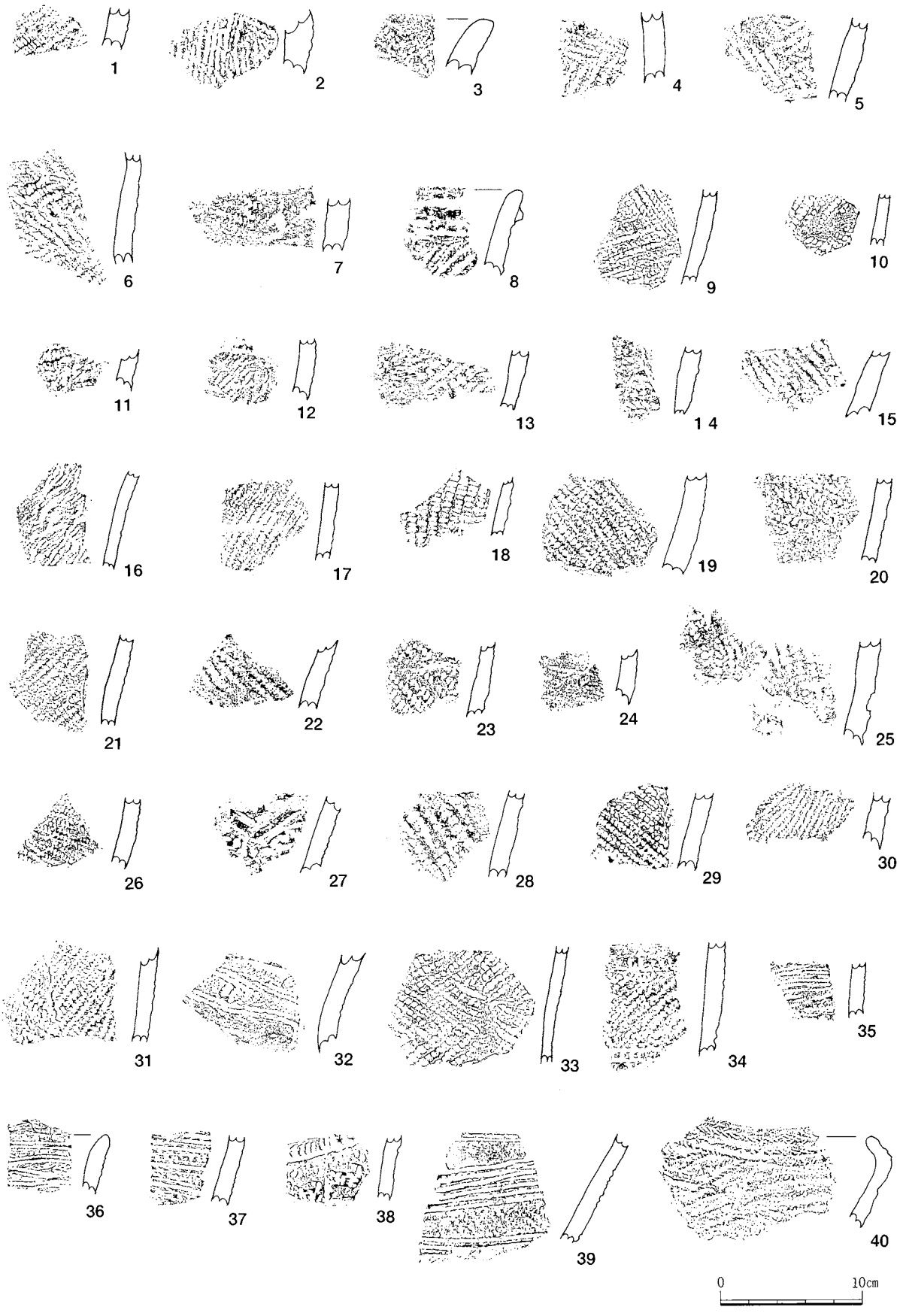
中・近世では、西地区において道路状遺構１条と畠跡３枚が検出されている。いずれも浅間Ａ軽石を覆土としており、道路状遺構では二次的に混入し、畠跡では直接覆われていた。道路状遺構は顕著な硬化面を有し、部分的に古代の溝状遺構と交差する。確認された道跡の北端以北では、確認面における落ち込みや硬化面が判然としないため、延びについては不明である。しかし、検出状況より溝状遺構と交差した後は、同溝と並走して調査区外へ走ることが予想される。

第２節　縄文時代　（第９～13図　表１～８　図版９～11）

縄文時代は、前期から後期にかけての遺物が出土したにすぎず、遺構は検出されていない。その出土量もさほど多くなく、大部分が縄文土器の細片である。

第１表　縄文時代出土遺物観察表（１）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
1	①中粒（白色粒）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	斜縄文０段３条（ＲＬ）	深鉢	花積下層
2	①中粒（白色粒）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴下部	撚糸	深鉢、丸底の可能性あり	花積下層？
3	①中粒、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	斜縄文（ＲＬ）	深鉢、平縁、口縁端部平坦	花積？
4	①中粒、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	羽状縄文０段３条（ＬＲ）	深鉢、横位の羽状	花積？
5	①中粒、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	羽状縄文０段多条（ＲＬ）	深鉢、横位の羽状	花積
6	①細粒、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	羽条縄文（ＬＲ）	深鉢、単一の原体で横・縦方向に回転させ羽状とする。	花積？
7	①中粒（白色粒・黒色粒）、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	花積？
8	①中粒、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	隆帯、爪形文、縄文（ＬＲ）	口縁部が緩やかに外反する深鉢。口縁直下に隆帯と竹管による爪形文。縄文施文後平行沈線で区画。	黒浜
9	①細粒（白色粒）、繊維　②極良好　③にぶい褐色　④胴部	羽状縄文（ＬＲ）	深鉢、横位の羽状	黒浜
10	①細粒（白色粒）、繊維　②良好　③灰褐色　④胴部	羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）	深鉢、横位の羽状	黒浜
11	①中粒（石英）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	斜縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
12	①中粒（白色粒・黒色輝石）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文無節（Ｌ）	深鉢	黒浜
13	①中粒（白色粒・石英）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
14	①中粒（白色粒）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）	深鉢	黒浜
15	①中粒（白色粒）、繊維　②良好　③にぶい黄橙色④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜



第９図　縄文時代出土遺物（１）

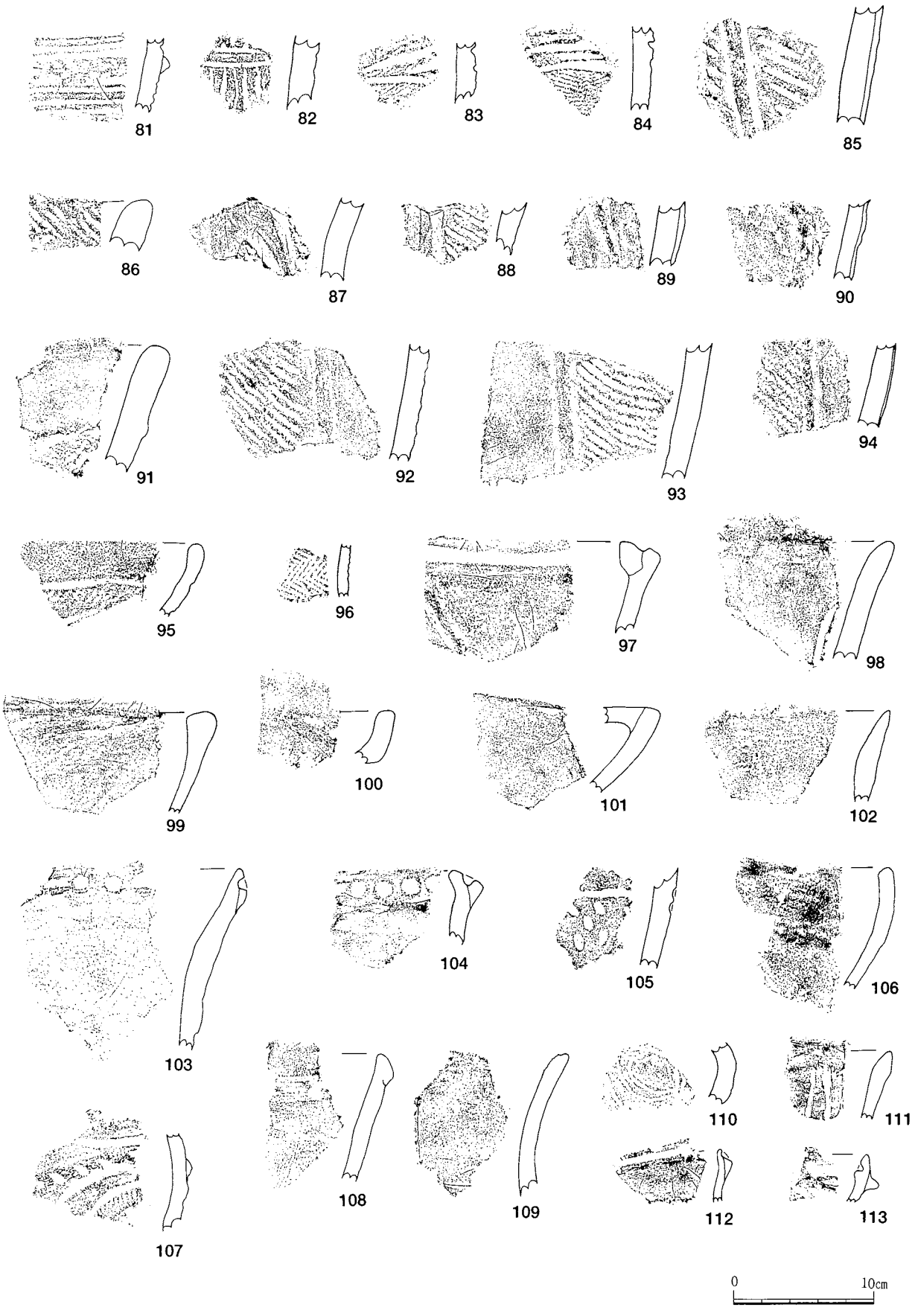
第２表　縄文時代出土遺物観察表（２）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
16	①中粒（白色粒・石英)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文無節（Ｌ）	深鉢	黒浜
17	①中粒、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	斜縄文（ＬＲ）	深鉢、横位の羽状	黒浜
18	①中粒（白色粒・石英)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	羽状縄文（ＬＲ）	深鉢	黒浜
19	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	斜縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
20	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	斜縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
21	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	斜縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
22	①中粒（白色粒・石英)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
23	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
24	①中粒（白色粒・石英)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）	深鉢	黒浜
25	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい褐色　④胴下部	羽状縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
26	①中粒、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	？	深鉢	黒浜
27	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文、平行沈線	深鉢、縄文施文後半截竹管の平行沈線	黒浜
28	①中粒（石英)、繊維　②良好　③橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）	深鉢	黒浜
29	①中粒（白色粒)、繊維　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）	深鉢	黒浜
30	①中粒、繊維　②良好　③橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）	深鉢	黒浜
31	①中粒、繊維　②良好　③にぶい橙色　④胴部	羽状縄文（ＲＬ）	深鉢、縦位の羽状	黒浜
32	①中粒、繊維　②良好　③褐色　④胴部	縄文（ＲＬ)、絡条体圧痕	深鉢、縄文の地文の上に縦方向に絡条体押圧か	黒浜
33	①中粒（石英)、繊維　②極良好　③にぶい橙色　④胴部	羽状縄文（ＬＲ）	器壁の薄い深鉢、横位の羽状	黒浜
34	①中粒（片岩)、繊維　②良好　③にぶい褐色　④胴部	縄文（ＬＲ)、爪形文	深鉢、縄文施文後半截竹管による爪形文	黒浜
35	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、縄文	鉢、縄文を地文とした上に集合沈線を施す	諸磯ｂ

第10図　縄文時代出土遺物（２）

第３表　縄文時代出土遺物観察表（３）

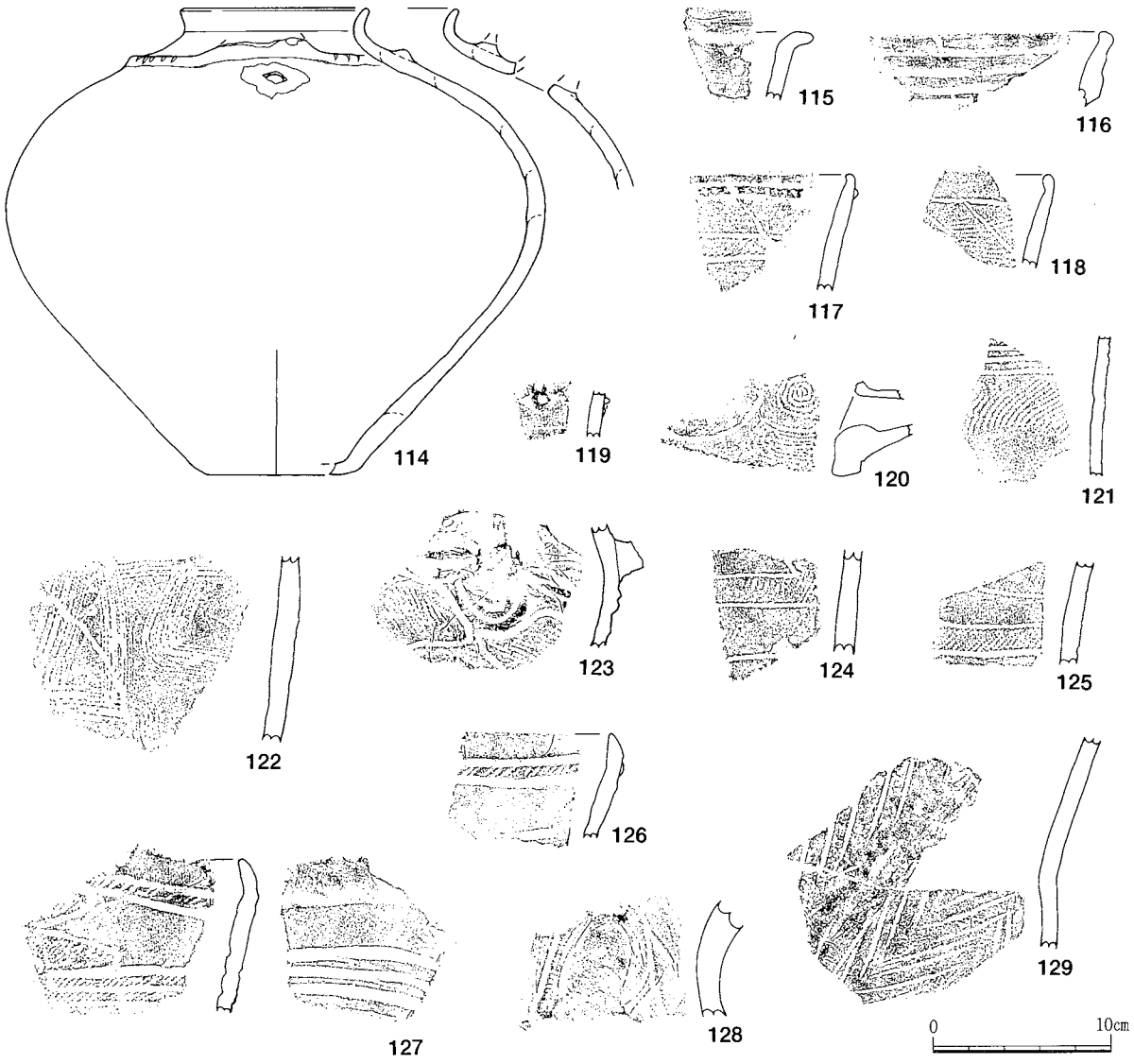
番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
36	①中粒（石英・白色粒）　②良好　③黒褐色　④口縁部	縄文（ＲＬ）、沈線	緩やかな波状を呈する口縁部の深鉢。口縁部直下より縄文施文、直線と波状を組み合わせた平行沈線文	諸磯ｂ
37	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	深鉢、縄文施文後沈線を横位に充填	諸磯ｂ
38	①中粒（白色粒多）　②良好　③褐灰色　④胴部	縄文（ＲＬ）、爪形文	器壁の薄い深鉢。粗い縄文施文後半截竹管による爪形文	諸磯ｂ
39	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	深鉢、縄文を地文とし数条、数段の平行沈線を巡らす	諸磯ｂ
40	①中粒（白色粒）　②良好　③灰黄褐色　④口縁部	浮線、縄文（ＬＲ）	口縁部がくの字に内折し、緩やかな波状を呈する深鉢。体部の浮線には縄文施文。口縁部の浮線には刻み	諸磯ｂ
41	①中粒（白色粒）　②良好　③灰黄褐色　④口縁部	浮線、縄文	口縁部がくの字に内折し、緩やかな波状を呈する深鉢。体部は縄文施文、口縁部の浮線には刻み	諸磯ｂ
42	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	浮線	口縁部がくの字に内折する深鉢。浮線上に綾杉状の刻み、体部の地文は縄文	諸磯ｂ
43	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	浮線	口縁部が緩やかに内折する深鉢。浮線文上を地文の工具でおさえ、刻みの効果	諸磯ｂ
44	①中粒　②良好　③にぶい褐色　④胴部	浮線、縄文（ＬＲ）	口縁部がくの字に内折する深鉢。地文に縄文。浮線文上に縄文	諸磯ｂ
45	①中粒（白色粒多）　②良好　③褐灰色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	深鉢、縄文を地文とし、数条の平行沈線を竹管によって施文	諸磯ｂ
46	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	深鉢、縄文を地文とし、数条の平行沈線を竹管によって施文	諸磯ｂ
47	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線、刺突	深鉢、縄文を地文とし、半截竹管による沈線文及びＣ字状の刺突文	諸磯ｂ
48	①中粒（白色粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、羽状縄文（ＲＬ）	胴部下位に丸い膨らみをもつ深鉢。地文に羽状縄文、巾の広い浮線上に綾杉状の刻みと鋸歯状の刻み	諸磯ｂ
49	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）、貼付文	くの字に内折した波状口縁の深鉢。縄文を地文とし、浮線上に刻み。口縁波頂部に貼付文	諸磯ｂ
50	①中粒（石英・黒色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	深鉢、縄文を地文としてやや巾の広い浮線を貼り、浮線上にも縄文	諸磯ｂ
51	①中粒（石英・白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	深鉢、縄文を地文として浮線を巡らせ、浮線上にも縄文を施す	諸磯ｂ
52	①中粒（白色粒）　②良好　③褐灰色　④胴部	浮線、撚糸？	深鉢、撚糸？を地文とし、やや巾の広い浮線を貼付し、綾杉状の刻みを施す	諸磯ｂ
53	①中粒（白色粒多）　②良好　③明黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	深鉢、縄文を地文とするが、浮線部分の撫でが強く、地文がうすれる。やや巾の広い浮線の上には綾杉状の刻みを施す	諸磯ｂ



第11図　縄文時代出土遺物（３）

第４表　縄文時代出土遺物観察表（４）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
54	①中粒（白色粒）　②良好　③橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	胴部がやや外反する深鉢。縄文を地文とし、巾の広い浮線上には刻みを綾杉状に施す	諸磯ｂ
55	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＬＲ）	深鉢、縄文を地文とし、浮線貼付。浮線上には刻みを施す	諸磯ｂ
56	①中粒（白色粒）　②良好　③暗赤褐色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	深鉢、地文に縄文を施すが、巾の広い浮線貼付による撫でで、無文化の部分があり、浮線上に縄文施文	諸磯ｂ
57	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄褐色　④胴部	浮線	器壁の薄い鉢。撫でによる器面調整。浮線上に綾杉状の刻みを施文	諸磯ｂ
58	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線	深鉢、浮線を密に巡らし、綾杉状に刻みを施す	諸磯ｂ
59	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	竹管爪形、浮線	体部で区切りをもって外反する鉢。竹管爪形文によって曲線と直線を組合わせ、浮線上に刻み	諸磯ｂ
60	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、爪形、刺突	口縁端部に細い隆帯をわたす。口縁部直下に爪形文を施し、平行沈線の交点に円形刺突	諸磯ｂ
61	①中粒（片岩）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	竹管爪形、沈線	鉢、爪形文を巡らし、空間に斜めの沈線を充填	諸磯ｂ
62	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙・褐灰色　④胴部	竹管爪形、Ｃ字、沈線	深鉢、胴部に爪形、平行沈線、Ｃ字状を充填	諸磯ｂ
63	①中粒（砂粒多）　②良好　③黒褐色　④胴部	竹管爪形、沈線	鉢、爪形、沈線ともに浅い施文。沈線、爪形、刻みで１単位の文様を構成。曲線的モチーフもあり	諸磯ｂ
64	①中粒（白色粒・石英）　②良好　③灰褐色　④胴部	撚糸か	深鉢	諸磯？
65	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	浮線、縄文（ＲＬ）	深鉢。地文を縄文で施し、やや巾の広い浮線を巡らす。浮線上に綾杉状の刻み	諸磯ｂ
66	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	刺突、沈線、貼付文	口縁部が外反する鉢。口縁部直下より６条の連続刺突沈線を巡らし、釦状の貼付。貼付文の上にも刺突を施す	十三菩提？
67	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線	深鉢、半截竹管による集合沈線	五領ヶ台
68	①粗粒（雲母・石英）　②良好　③にぶい赤褐色　④胴上部	集合沈線、隆帯、三角刻	深鉢	五領ヶ台
69	①中粒（石英・雲母）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	隆帯、竹管、刻目、格子目沈線	深鉢	五領ヶ台
70	①中粒（雲母）　②良好　③暗褐色　④胴部	隆帯、竹管による格子目	深鉢	五領ヶ台
71	①中粒（雲母・石英）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	隆帯、格子目	深鉢	五領ヶ台
72	①中粒（雲母・石英）　②良好　③褐色　④胴部	格子目	深鉢	五領ヶ台



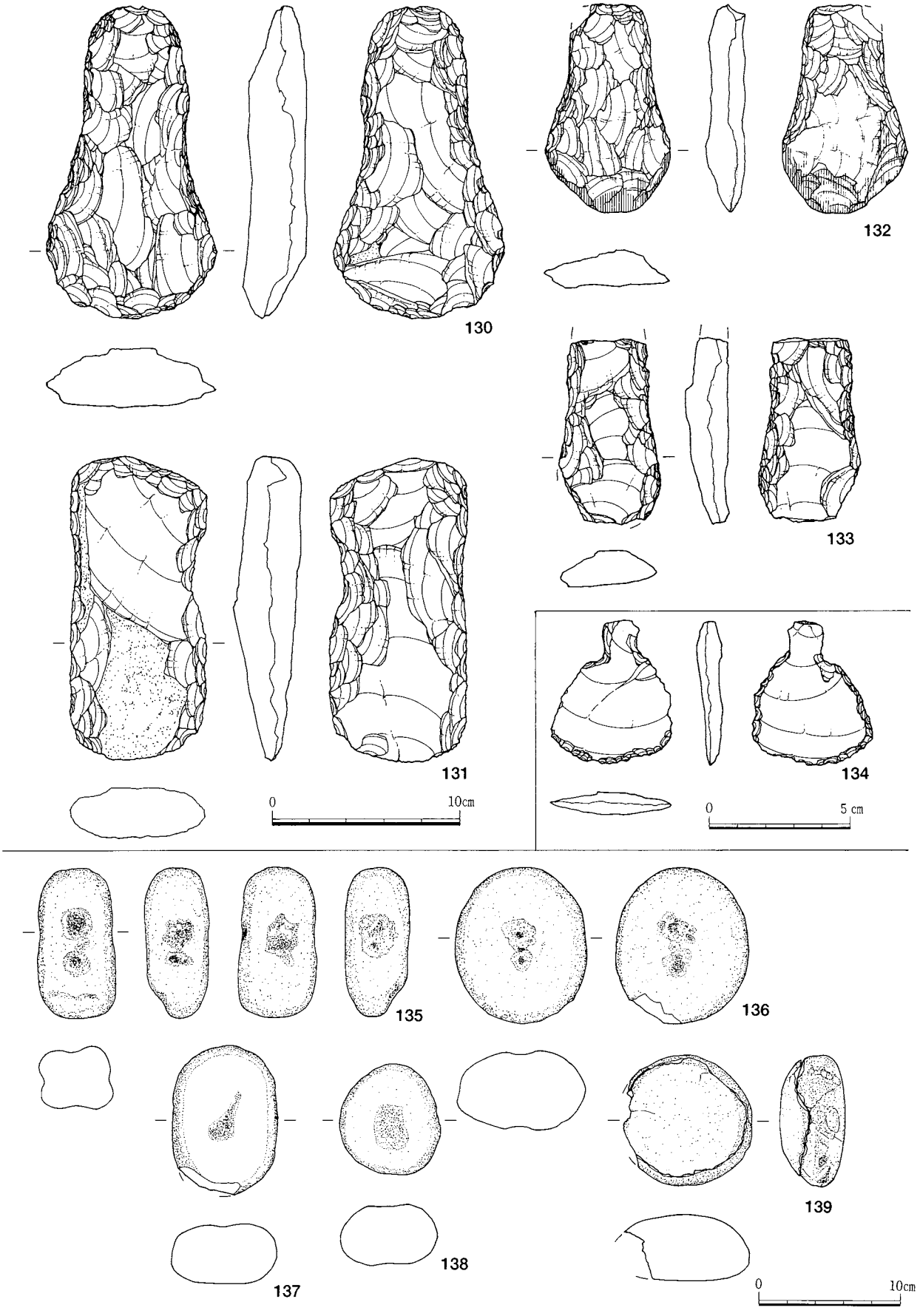
第12図　縄文時代出土遺物（４）

第５表　縄文時代出土遺物観察表（５）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
73	①中粒（雲母・石英）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	沈線、刺突	深鉢、沈線間に円形刺突	五領ヶ台
74	①中粒（雲母・白色粒）　②良好　③明褐色　④胴部	沈線	深鉢、半截竹管による集合沈線	五領ヶ台
75	①中粒（雲母・白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線	深鉢、竹管外縁による渦巻文	五領ヶ台
76	①中粒（石英多）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	沈線	深鉢、縦位の施文、数条の沈線を垂下、巾の広い沈線間に交互に刻み。沈線帯の両側には篦状工具押し引きによる刻み	五領ヶ台
77	①中粒（雲母・石英）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	沈線、刺突	頸部に区切りをもって口縁部が内湾する深鉢。口縁端部より数条の沈線を垂下、下端部に刺突文、頸部に刺突文と２条の沈線を巡らす	五領ヶ台 78と同一個体

第６表　縄文時代出土遺物観察表（６）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
78	①中粒（雲母・石英）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	沈線	直線的に立ち上がる胴部の深鉢。縦位の文様、数条の沈線間に交互に刻みを入れ、文様帯の外側は結節沈線で区切る	五領ヶ台 77と同一個体
79	①中粒（細粒多・石英）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	深鉢、縄文施文後、平行沈線による縦区画に接して半円形を連続させる	五領ヶ台
80	①中粒（灰白色粒）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	隆帯	深鉢、断面が三角形の隆帯を曲線的に垂下	阿玉台
81	①中粒（雲母）　②良好　③明赤褐色　④胴部	隆帯、沈線	深鉢、断面三角形の隆帯と沈線及び刻目による施文	中期中葉
82	①中粒（白色粒・黒色輝石）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	沈線、刺突	深鉢、直線的な集合沈線と小さな円形刺突文	中期中葉
83	①中粒（石英）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	深鉢、縄文施文後、沈線と刻目	中期中葉 84と同一個体
84	①中粒（石英）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	深鉢、縄文施文後、沈線による曲線的区画	中期中葉 83と同一個体
85	①中粒（砂粒・石英多）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	隆帯、沈線	大形の深鉢。断面が蒲鉾状の隆帯を垂下し、綾杉状に沈線を施文	曽利
86	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	縄文（ＲＬ）	大形の鉢。口縁部直下より縄文施文、口縁端部に丁寧な調整	加曽利Ｅ３
87	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、縄文	緩やかに外反する胴部の深鉢。巾の広い凹線によって曲線的に区画し、区画内に縄文を充填	加曽利Ｅ３
88	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、縄文（ＬＲ）	深鉢、巾の広い凹線区画内に縄文を充填	加曽利Ｅ３
89	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	隆帯	深鉢、断面が三角形の隆帯を曲線的に垂下	加曽利Ｅ４？
90	①中粒（石英・白色粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	隆帯	深鉢、断面が三角形の隆帯を曲線的に垂下	加曽利Ｅ４？
91	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	隆帯、縄文（ＲＬ）	大形の深鉢。口縁部無文帯下に断面が三角形の隆帯を巡らし、縄文を施す	加曽利Ｅ４
92	①中粒（石英）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	隆帯、縄文（ＬＲ）	大形の深鉢。断面が低い蒲鉾形の隆帯を垂下して、縄文を充填	加曽利Ｅ４
93	①中粒（石英）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	隆帯、縄文（ＬＲ）	大形の深鉢。断面が蒲鉾形の隆帯を垂下して、縄文を充填	加曽利Ｅ４
94	①中粒（石英）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	隆帯、縄文（ＬＲ）	大形の深鉢。断面が蒲鉾形の隆帯を垂下して、縄文を充填	加曽利Ｅ４
95	①中粒（砂粒多・石英）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	内湾する口縁部の鉢。口縁部直下に無文帯。沈線で曲線的に区画し、区画内に縄文充填	称名寺
96	①中粒（砂粒多）　②良好　③灰黄褐色　④胴部	竹管、沈線	小形の鉢。竹管沈線による綾杉文を施す	？
97	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	沈線、微隆起線	波状口縁で頸部より大きく広がる深鉢。口縁端部に沈線、波頂部より懸垂文	称名寺



第13図　縄文時代出土遺物（５）

第７表　縄文時代出土遺物観察表（７）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
98	①中粒（石英）　②良好　③浅黄橙色　④胴部	沈線、微隆起線	胴部より開く深鉢、懸垂文	称名寺
99	①中粒　②極良　③にぶい黄橙色　④口縁部	無文	平縁で体部に丸味をもつ浅鉢。口縁端部は丸く、内側には稜をもつ	称名寺
100	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	口縁部に刻み	口縁部がくの字に内湾する平縁の浅鉢。	称名寺
101	①中粒（雲母）　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	無文	口縁部が強くくの字に内曲する平縁の浅鉢。	称名寺
102	①中粒（黒色輝石）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	無文	平縁の深鉢。口縁端部に刻み目	称名寺
103	①中粒（白色粒・黒色輝石）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	円形刺突文、沈線	深鉢、外側に肥厚する口縁部上に刺突文と沈線。頸～胴部無文。内面に削り、撫で、研磨	称名寺
104	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	円形刺突、沈線	くの字に内屈する口縁部の甕。口縁端部外側に回転による円形刺突文	称名寺
105	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、刺突	沈線による区画内に細い竹管状工具による楕円の刺突文を充填	称名寺
106	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	円形刺突、微隆起線	内湾する鉢、口縁端部内側に稜をもつ、胴上部に微隆起線と円形刺突列が巡る	称名寺、外面に煤
107	①中粒（石英・白色粒・黒色輝石）　②やや不良　③にぶい橙色　④胴部	隆帯、沈線、縄文（ＬＲ）	深鉢、刻みを施した隆帯を垂下し、沈線で曲線的に区画し、縄文を充填	称名寺
108	①細粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	条線文	口縁部が開く深鉢、口縁部外側に肥厚、口縁直下より条線を直線的に施文	称名寺
109	①中粒（片岩）　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	頸部無文帯	頸部より外反する深鉢、口縁端部に釦状貼付と沈線	称名寺
110	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線	口縁部が緩く内湾する浅鉢か。沈線により同心円状の文様を施す。	称名寺
111	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	沈線	口縁部が直線的に開く小形の深鉢、口縁部が僅かに肥厚し、直下より沈線垂下	称名寺
112	①細粒　②良好　③橙色　④口縁部	沈線、円形刺突、頸部無文帯	頸部よりくの字に外反して、口縁部外側に肥厚する小形の深鉢。小さな波状を呈する口縁部外側に沈線と円形刺突	称名寺
113	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	沈線、刺突	小さな波状を呈する小形の鉢、波状部の内側に円形の刺突	称名寺
114	①中粒（細砂粒多）　②良好　③灰黄褐色　④口～底部	隆帯	胴部中位に最大径をもって口縁部が小さく立ち上がる壺形の注口土器。肩部に隆帯を巡らし、刻みを施す。注口部と把手は分離して立ち上げている。内面胴部～底部は器面が荒れている。	堀之内？外面胴部～底部に煤付着
115	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	無文	注口か。頸部が括れて口縁部が短く立ち上がる壺のタイプ。１個の焼成前の穿孔	堀之内？
116	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	凹線	浅鉢、胴上部で緩いくの字に内湾する。口縁部直下にやや巾の広い凹線	堀之内？
117	①細粒　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	微隆帯、沈線、縄文（ＬＲ）	直線的に開く精製の深鉢、口縁端部内屈、口縁直下に微隆帯を巡らせ、刻目を施す。胴上部に沈線による直線的な区画と区画内に縄文充填	堀之内

第８表　縄文時代出土遺物観察表（８）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
118	①細粒　②良好　③にぶい黄橙色　④口縁部	沈線、縄文（ＬＲ）	直線的に開く精製の深鉢、口縁端部内屈、沈線様におさえる。口縁部外面狭い無文帯下より沈線による直線的区画と縄文充填	堀之内
119	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④胴部	８字状貼付、微隆帯	口縁直下に微隆帯を巡らし、８字状を貼付する小形の深鉢	堀之内
120	①中粒（砂粒多）　②良好　③灰褐色　④胴部・注口	沈線、縄文（ＬＲ）	注口、胴部で強く内折し、注口は把手と分離するタイプ。沈線による曲線と直線による組み合わせ。内部を沈線で充填し、外部は縄文を充填	堀之内
121	①細粒（石英・黒色輝石）　②良好　③褐灰色　④胴部	沈線、縄文（ＬＲ）	直線的に開く小形の深鉢。胴中央部に平行沈線による文様、下部に縄文	堀之内
122	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	条線	バケツ形の深鉢。８本の櫛状工具による施文。菱形を基本とするモチーフと考えられる	堀之内？
123	①細粒（白色粒）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	微隆帯、沈線、縄文（ＬＲ）	くの字に外反する口縁部をもつ鉢、体部は丸く、くの字に屈曲する頸部は無文で、胴上部より隆帯と沈線で文様を施す。	堀之内 煤付着 把手あり
124	①中粒（白色粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、縄文（ＲＬ）	深鉢、沈線による直線的な区画と縄文による区画内充填	堀之内
125	①細粒（白色粒・黒色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線、縄文（ＬＲ）	深鉢、胴部に直線的な区画文様、縄文充填	堀之内
126	①中粒（石英・片岩）　②良好　③褐灰色　④口縁部	沈線、Ｃ字状	深鉢、口縁、胴部内面に段と沈線、外面に沈線による区画、刻みを充填、Ｃ字状文	加曽利Ｂ 127と同一個体か
127	①中粒（石英・片岩）　②良好　③黒色　④口縁～胴部	沈線、縄文（ＬＲ）	波状口縁の深鉢、口縁部は緩やかに内湾、内側に段、胴上部内側に４本の沈線、口縁端部に刻目、外面に沈線による平行及び斜めの区画。区画内に刻目と縄文充填	加曽利Ｂ
128	①中粒（白色粒）　②良好　③橙色　④把手	沈線、縄文（ＬＲ）	深鉢の把手。頂部を欠く。両側に１条の沈線、外側に縄文を施す	加曽利Ｂ？
129	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	沈線	胴部中位で括れて外反する深鉢。箆状工具により大ぶりの綾杉沈線文を巡らす	加曽利Ｂ

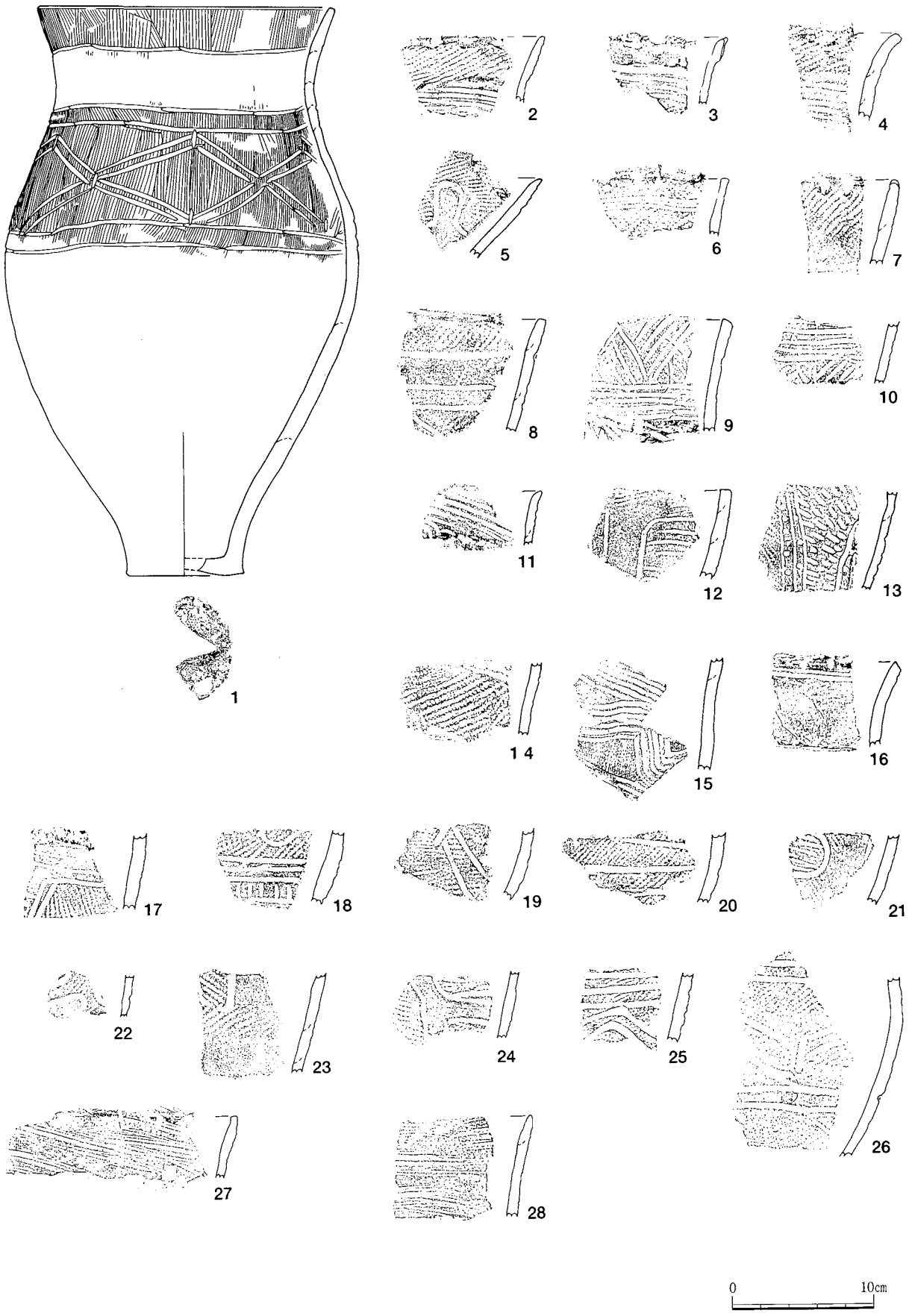
130	打製石斧	長さ16.6　幅9.1　厚さ8.0
131	打製石斧	長さ16.1　幅7.3　厚さ3.3
132	打製石斧	長さ11.6　幅6.7　厚さ2.1
133	打製石斧	長さ 9.8　幅5.2　厚さ2.3
134	石　　匙	長さ 5.1　幅4.3　厚さ0.9
135	凹　　石	長さ10.7　幅5.6　厚さ4.4
136	凹　　石	長さ11.1　幅9.4　厚さ5.7
137	凹　　石	長さ10.6　幅7.6　厚さ4.2
138	凹　　石	長さ 7.8　幅7.2　厚さ4.3
139	磨　　石	長さ 9.3　幅9.2　厚さ4.7

第２節　弥生時代　（第14・15図　表９～11　図版11）

弥生時代では西地区のＧ－９グリッドより再葬墓の可能性のある甕（１）が出土しているが、他は全て小破片で、出土量も少量である。

第９表　弥生時代出土遺物観察表（１）

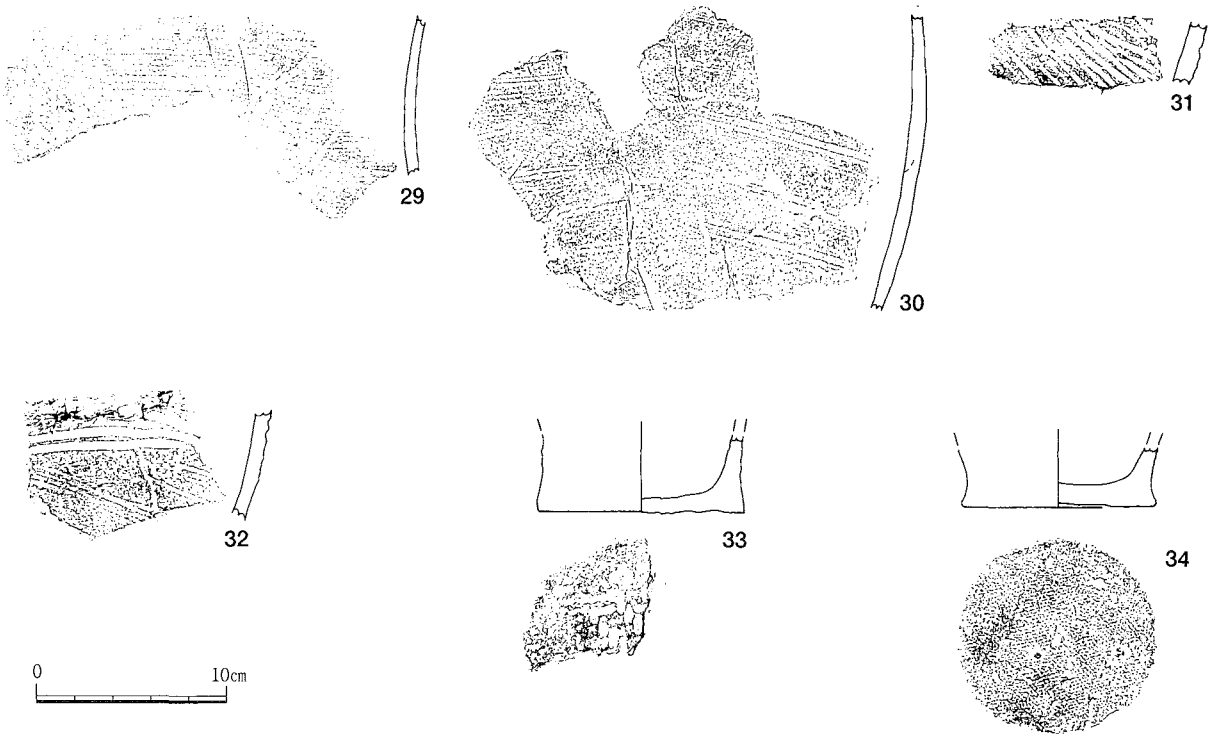
番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
1	①中粒（石英・砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④口～底部	擬縄文、沈線	胴部上位に最大径をもつ甕。口縁部と胴部に文様帯を設け、棘状の突起のある工具で擬縄文を施文後、沈線による横線と菱形文を形成。内面は丁寧な調整、胴部下位内面に焦げ有り、底面に布痕（平織）	弥生中期 外面に煤付着
2	①中粒にやや大粒の石を混入　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	折返し口縁の甕。口縁端部に刻み、口縁部外側に縄文を施し、頸部は沈線を巡らす	弥生中期 煤付着
3	①中粒（石英）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	沈線	折返し口縁の甕。口縁部の外側は無文、口縁端部に刻み、頸部に沈線を巡らす	弥生中期
4	①中粒（白色粒）　②良好　③橙色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	折返し口縁の甕。口縁部の外側と口縁端部に縄文、頸部に沈線を施す	弥生中期
5	①細粒　②良好　③黄橙色　④口縁部	縄文（ＲＬ）、沈線	波状口縁の鉢か。口縁部の外側に曲線的な沈線による磨消し縄文、口縁端部に縄文、波頂部に刻み	弥生中期
6	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕、口縁部外面に縄文施文後平行沈線を巡らす。口縁部は小さく波うつ。	弥生中期
7	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい橙色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕。口縁端部に刻みを入れ、口縁部の外面上部に縄文、下部に無文帯をもつ。頸部には沈線を巡らす	弥生中期 縄文３本撚り合わせか
8	①中粒（石英）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	縄文（ＬＲ）、沈線	口縁部が緩く外反する甕。沈線と縄文による区画と菱形のモチーフ	弥生中期
9	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい橙色　④頸部	沈線	頸部が細く括れる壷。頸部に数条の沈線を巡らし、三角形の区画に沈線を充填	弥生中期
10	①中粒（砂粒）　②良好　③にぶい褐色　④頸部	沈線	頸部がしまって立ち上がる壷。数条の沈線を巡らし、三角形の中に沈線を充填	弥生中期
11	①中粒（白色粒）　②良好　③灰黄褐色　④口縁部	沈線	甕、口縁端部に刻みを施す。口縁部外側に沈線による直線と曲線の組み合わせ文	弥生中期
12	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	沈線	壷、胴部中位の方形の囲みに沈線を充填	弥生中期
13	①中粒（石英）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線、刺突	壷、胴部の沈線による曲線的な区画に縄文、円形刺突文、列点文を充填	弥生中期



第14図　弥生時代出土遺物（１）

第10表　弥生時代出土遺物観察表（２）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
14	①中粒（砂粒多）　②良好　③褐色　④胴部	羽状縄文（ＬＲ）、沈線	甕。胴部に沈線による区画と羽状縄文	弥生中期 煤付着
15	①中粒　②良好　③にぶい褐色　④胴部	沈線	甕。胴部中位に数条の沈線を上下に巡らせ、中間に波状の沈線を充填	弥生中期
16	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④頸部	縄文（ＬＲ）、沈線	頸部が緩く外反する甕。縄文施文後沈線を巡らす	弥生中期
17	①細粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	甕。胴部に磨消し縄文。沈線による方形区画	弥生中期
18	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	壷。胴部中位に縄文、磨消し。沈線による円形、平行線、刻みを施す	弥生中期
19	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい赤褐色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕。胴部中位に縄文を施した文様帯中に数条の横線を巡らし、交点に縦線を入れる	弥生中期
20	①中粒（砂粒多）　②良好　③灰褐色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕。中位に文様帯。	弥生中期 19と同一個体
21	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい赤褐色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	壷。胴部に縄文と円形の区画。区画中に沈線を充填	弥生中期
22	①中粒　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	小形の壷。胴部は磨消し縄文	弥生中期
23	①中粒　②良好　③褐色　④胴部	縄文（ＲＬ）、沈線	小形の甕。胴下部の縄文上に方形の区画	弥生中期 内外面に煤付着
24	①中粒　②良好　③にぶい褐色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	壷。頸部は縄文施文後沈線によって区画し、磨消しを施す	弥生中期
25	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕。胴部上位に縄文施文後平行線を巡らし、波状の平行線を施す	弥生中期
26	①中粒（砂粒多）　②良好　③褐色　④胴部	縄文（ＬＲ）、沈線	甕。胴部に文様帯を構成。２本の沈線。交点に縦に刻み線を施す	弥生中期
27	①中粒（砂粒多）　②良好　③褐色　④口縁部	条痕	頸部で僅かに括れて外反する口縁部の甕 外面は1.3cm程の巾の狭い工具による条痕。 内面は篦撫で	弥生中期 外面に煤付着
28	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい褐色　④口縁部	条痕	頸部で僅かに括れて外反する口縁部の甕 内外面に煤付着	弥生中期 27と同一個体
29	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい褐色　④頸部	条痕	頸部で僅かに括れて外反する口縁部の甕 外面に条痕を充填	弥生中期 外面に煤付着
30	①中粒（砂粒多）　②良好　③にぶい褐色　④胴部	条痕	甕。胴下部外面は篦撫で後条痕を施す。 内面は丁寧な篦撫でで、焦げ付着	弥生中期 27・28と同一個体、外面煤付着



第15図　弥生時代出土遺物（２）

第11表　弥生時代出土遺物観察表（３）

番号	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文　様　要　素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備　　考
31	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④胴部	条痕	甕。粗い条痕を施す	弥生中期
32	①中粒（石英・砂粒多）　②良好　③にぶい橙色　④胴部	沈線、縄文（ＬＲ）	甕。胴部中位に縄文と沈線による文様帯をもつ。下位は条痕で調整。内面は丁寧な篦撫で	弥生中期 外面に煤付着
33	①中粒（石英・砂粒）　②良好　③にぶい褐色　④底部		腰部に張りをもつ甕。底部の内外面に撫で調整、底面に綾杉状の組み物痕、内面焦げ有り	弥生中期
34	①中粒（白色粒）　②良好　③にぶい黄橙色　④底部	条痕	腰部に張りをもつ甕の底部。外面は粗い条痕で調整。内面は撫で、底面に布痕（平織、１cm巾、７～８本）	弥生中期

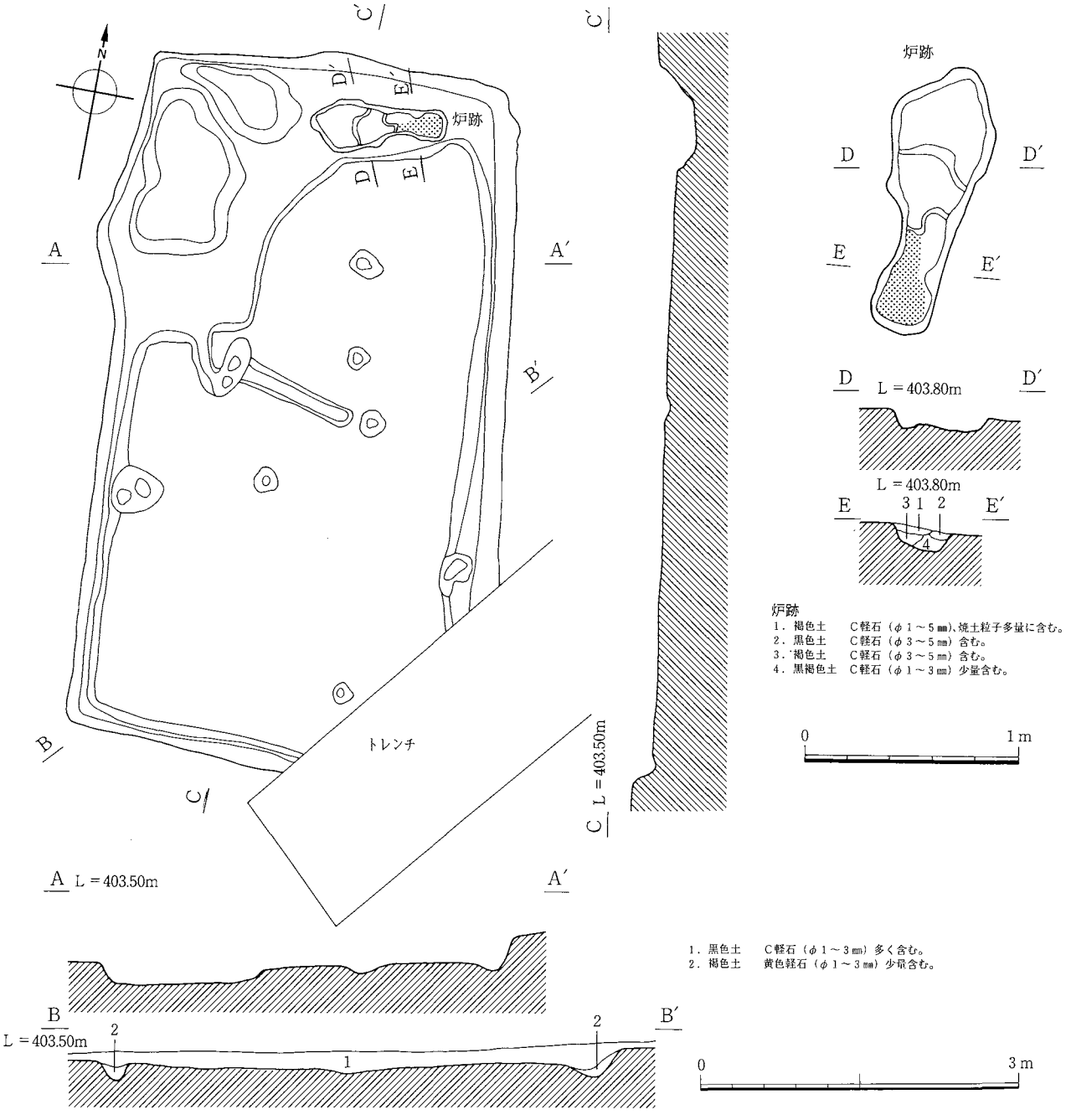
第4節　古代

当節では、奈良・平安時代の所産と捉えられる遺構について「古代」として取り扱った。該期遺構は住居跡23軒、掘立柱建物跡4棟、溝状遺構1条、畠跡1枚、溝跡1条、井戸跡1基である。

住居跡を除く他の遺構は、土器等の出土が皆無であり、帰属年代については不明瞭である。しかし、遺構埋土が住居跡に近似する事や位置関係より古代の遺構として取り扱った。

住居跡

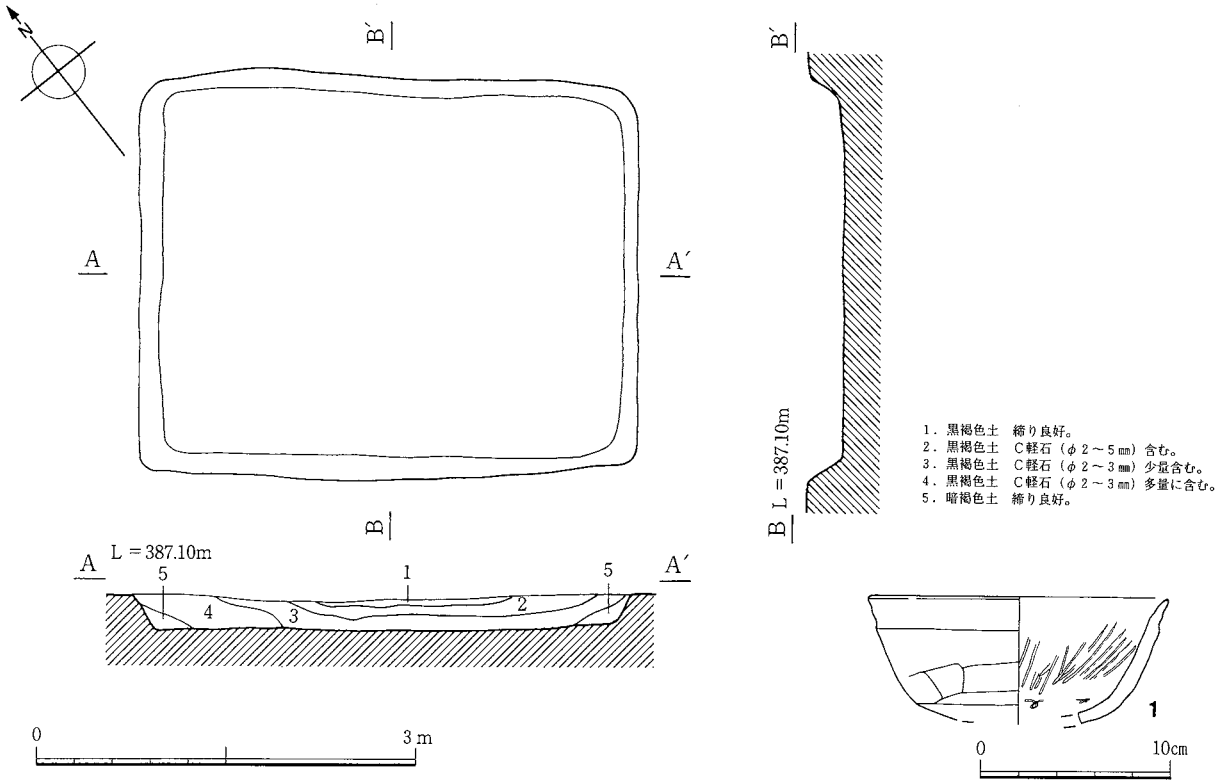
東地区に於て検出された8世紀～9世紀代の竪穴式住居跡で、標高378m前後を測る平坦地に構成されている。調査区内に於ける分布状況は、概して粗密的で重複関係にあるものは認められない。



第16図　1号住居跡・炉跡

1号住居跡　（第16図　図版1－2）

Q－21グリッドに位置し、主軸はN－5°－Wを指向する。**形態**　南辺がやや広い略長方形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長6.3m×短軸長3.1mを測り、平面積は約19.5㎡である。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。**炉跡**　北壁中央部付近に位置し、長方形を基調とする。掘り込みは約30cm前後を測り、埋土の上位には多くの焼土粒子・炭化粒子が観察される。**床面**　ほぼ平面であるが、北西隅に撹乱による浅い凹凸が認められる。**壁溝**　北西隅を除き確認されている。西壁のほぼ中央部の周溝より分岐した溝は間仕切りであろうか。形状は幅28～60cm・深さ7～17cmの「U」字状の断面となる。**遺物**　検出されない。



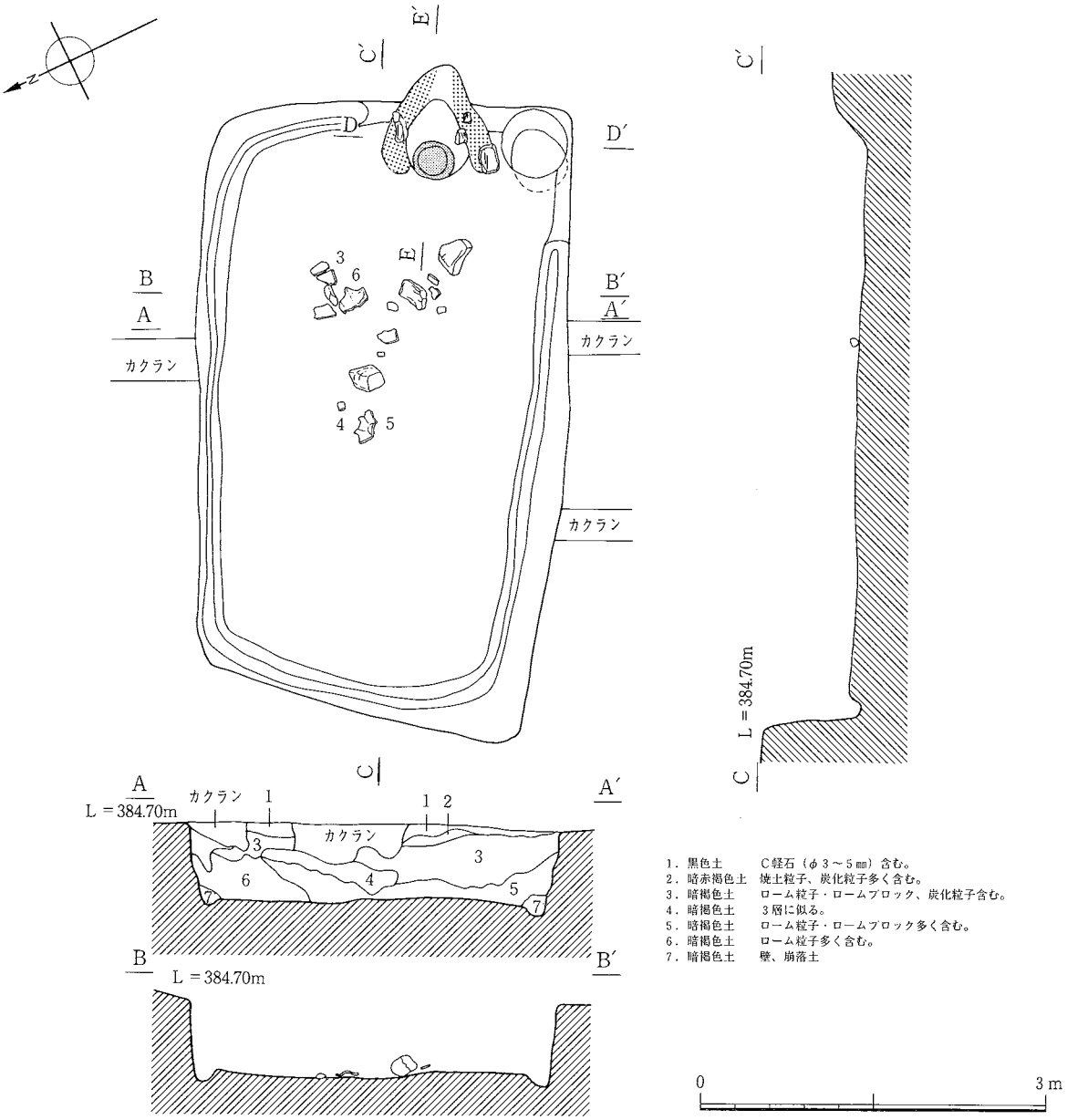
第17図　2号住居跡・出土遺物

2号住居跡　（第17図　表12　図版1－3・12）

Be・Bf－58・59グリッドに位置し、主軸はN－58°－Wを指向する。**形態**　定形化した長方形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.65m×短軸長2.9mを測り、床面積は約10.6㎡である。カマド・柱穴・壁溝・貯蔵穴は検出されていない。**埋土**　黒褐色を基調とした自然堆積土で、5層に分層される。**壁**　確認面よりの掘り込みは15～20cmを測り、約32°前後の角度で立ち上がる。**床面**　面を成し、顕著な硬化部分は認められない。**遺物**　土師器坏が4層と5層の交わりより1点出土した。

第12表　2号住居跡出土遺物観察表

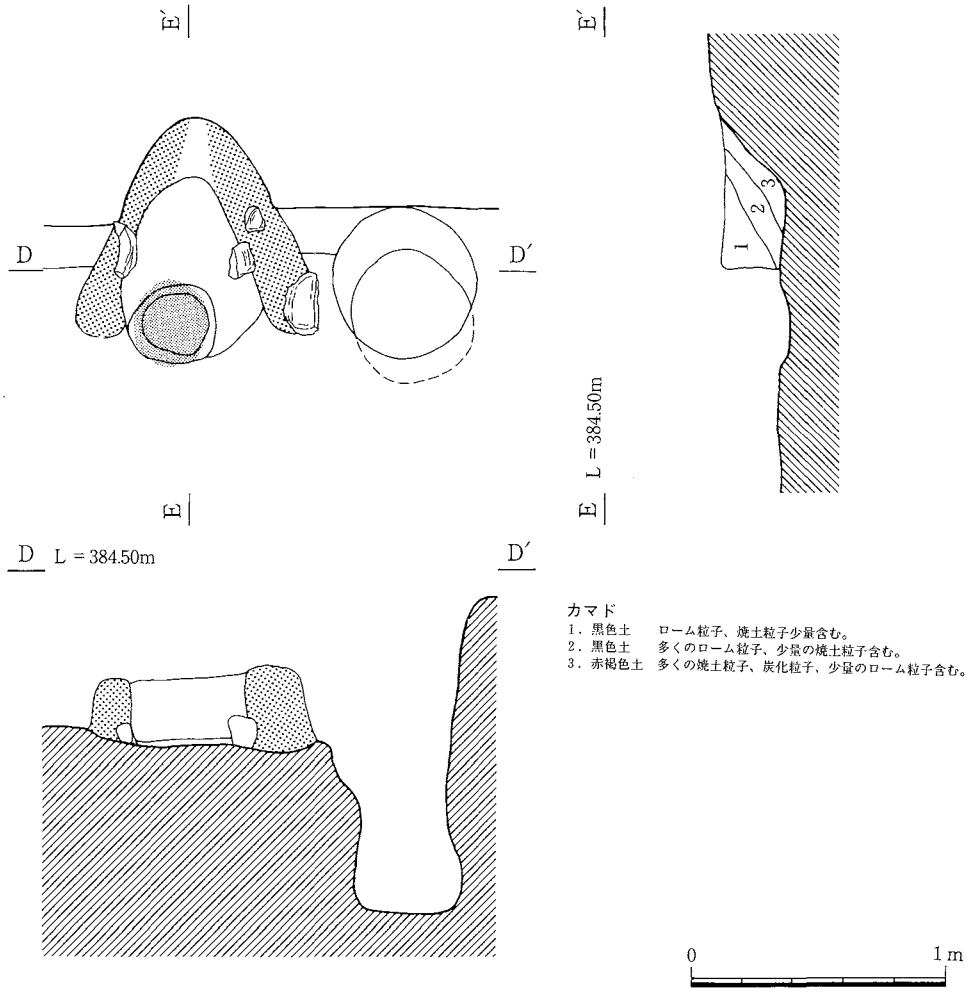
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径 15.6 底径 器高	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細・粗砂粒 ②にぶい橙色 ③普通	1/5残存



第18図　3号住居跡

3号住居跡　（第18～20図　表13・14　図版1－4・12）

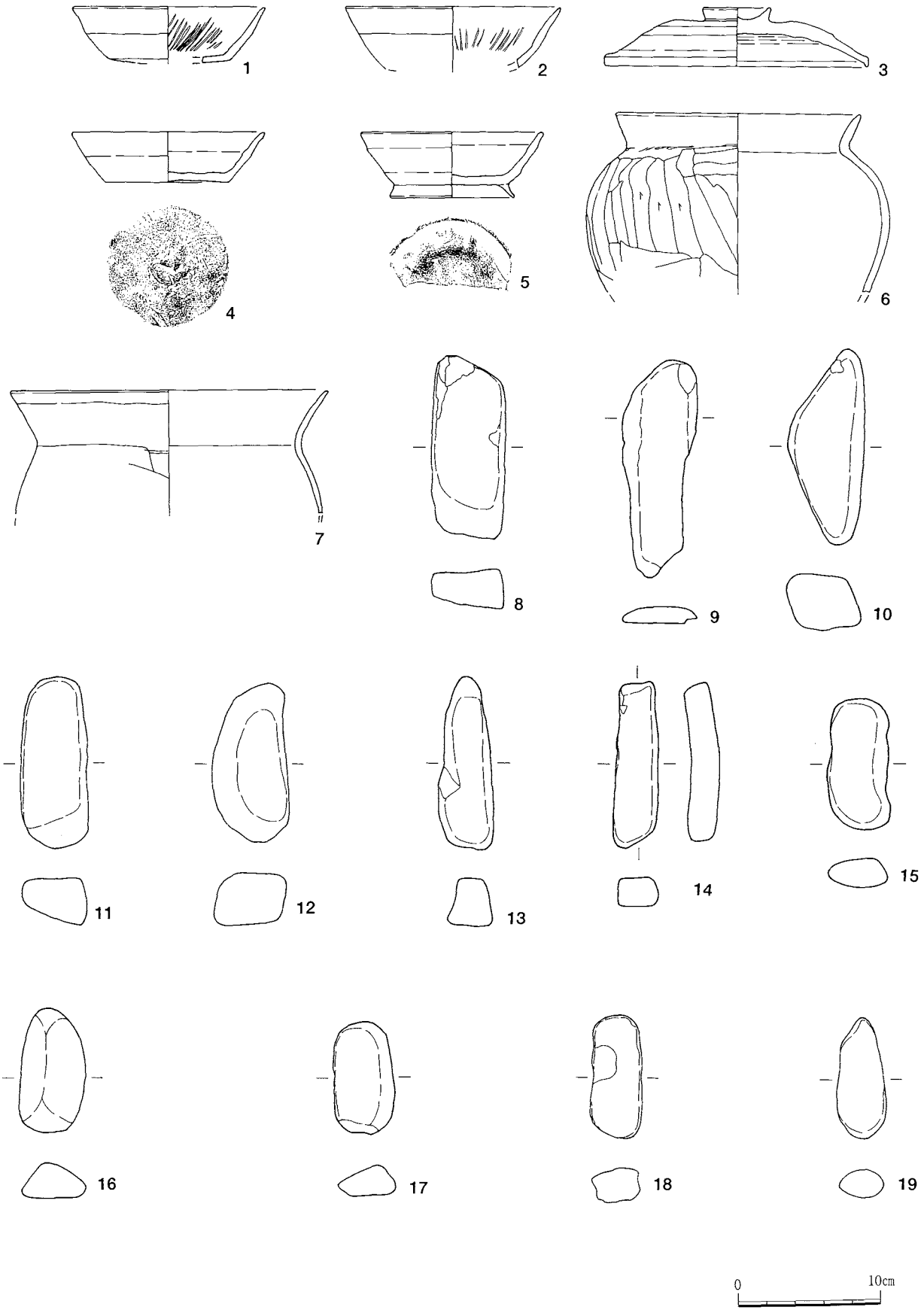
Bh・Bi－62～63グリッドに位置し、主軸はN－120°－Eを指向する。**形態**　南西の隅が鈍角となるため北辺よりも南辺が長くなり、南北に細長い台形に類する長方形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.75ｍ×短軸長2.75ｍを測り、床面積は約13.1㎡である。柱穴は検出されていない。**埋土**　7層に分層される人為堆積土。**カマド**　東壁中央やや南寄りに付設する。火床部は住居内に存在し、その周辺と住居中央部に石材が散乱していることより、袖及び天井は石により構築されていたものと思われる。煙道は住居外へ「U」字形平面に掘り込まれており、高い角度で立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　南東隅を除き全周している。形状は幅8～20cm・深さ7～14cmの「U」字状の断面となる。**貯蔵穴**　南東隅のカマド脇に付設される。平面形状は上面径56cm・下面径49cmの円形平面で、底面は平坦となっている。断面形は中位の高さで径34cmと狭くなるフラスコ形を呈し、深さが74cmである。**遺物**　5層を中心に、土師器・須恵器・石製品が包蔵されていた。



第19図　3号住居跡カマド

第13表　3号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(14.4) 底径 (9.2) 器高 4.1	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②橙色 ③普通	1/8残存
2	土師器 坏	口径(15.6) 底径 器高	外面　器面が溶けて調整不明瞭 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②橙色 ③普通	1/4残存
3	須恵器 蓋	口径 18.3 摘み 4.8 器高 4.1	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①白色粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	1/2残存
4	須恵器 坏	口径 13.4 底径 8.7 器高 3.5	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後周辺部篦撫で 内面　体部轆轤整形	①小礫、細砂粒 ②灰白色 ③還元	3/4残存
5	須恵器 高台付椀	口径 12.6 底径 8.7 器高 4.7	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り後周辺部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①小礫 ②灰色 ③還元	2/5残存
6	土師器 甕	口径 16.9 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上端横位篦削り、胴部縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部撫で	①雲母、小礫 ②にぶい褐色 ③普通	口～胴部中位 1/4残存



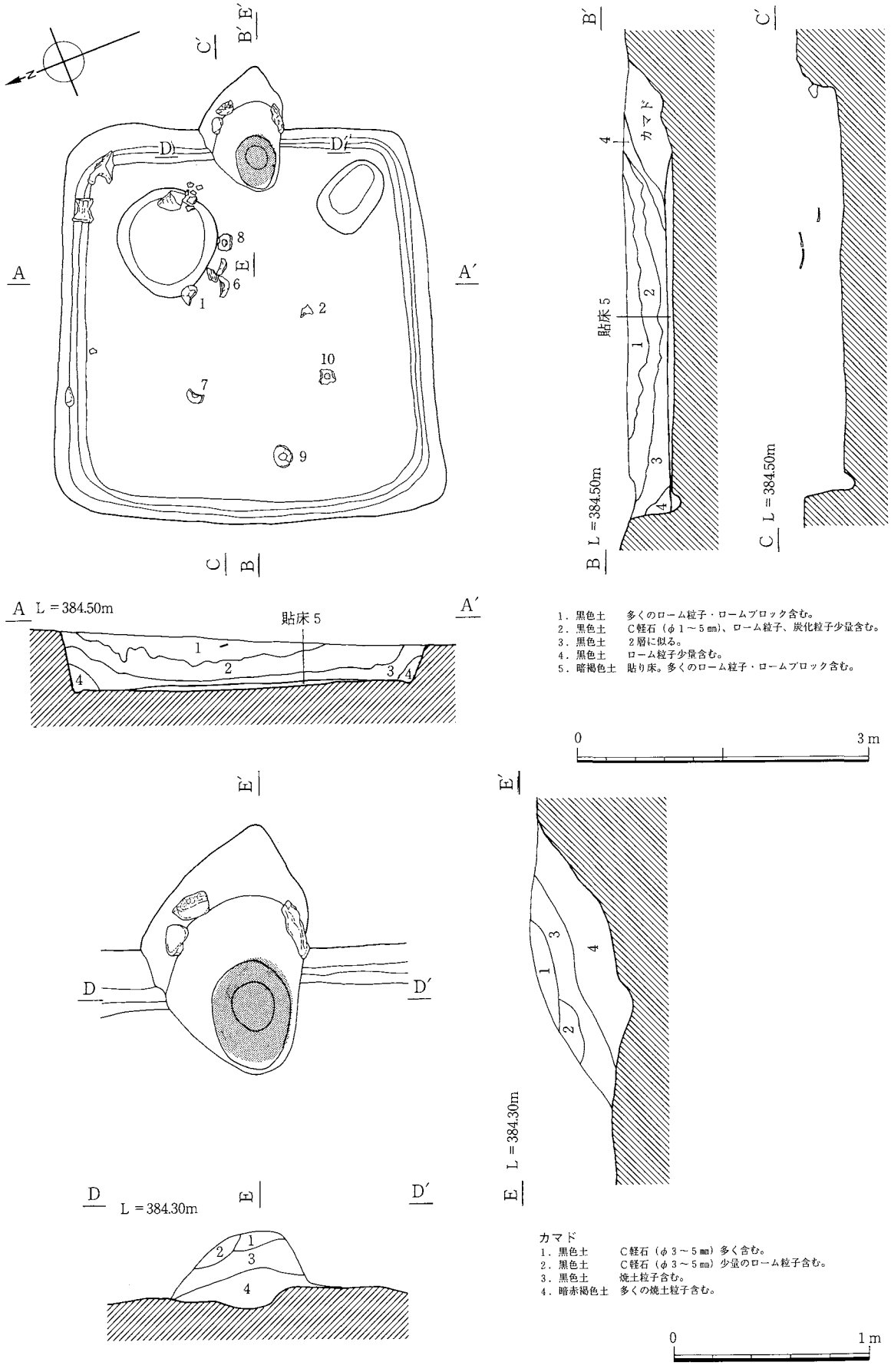
第20図　3号住居跡出土遺物

第14表　3号住居跡出土遺物観察表（2）

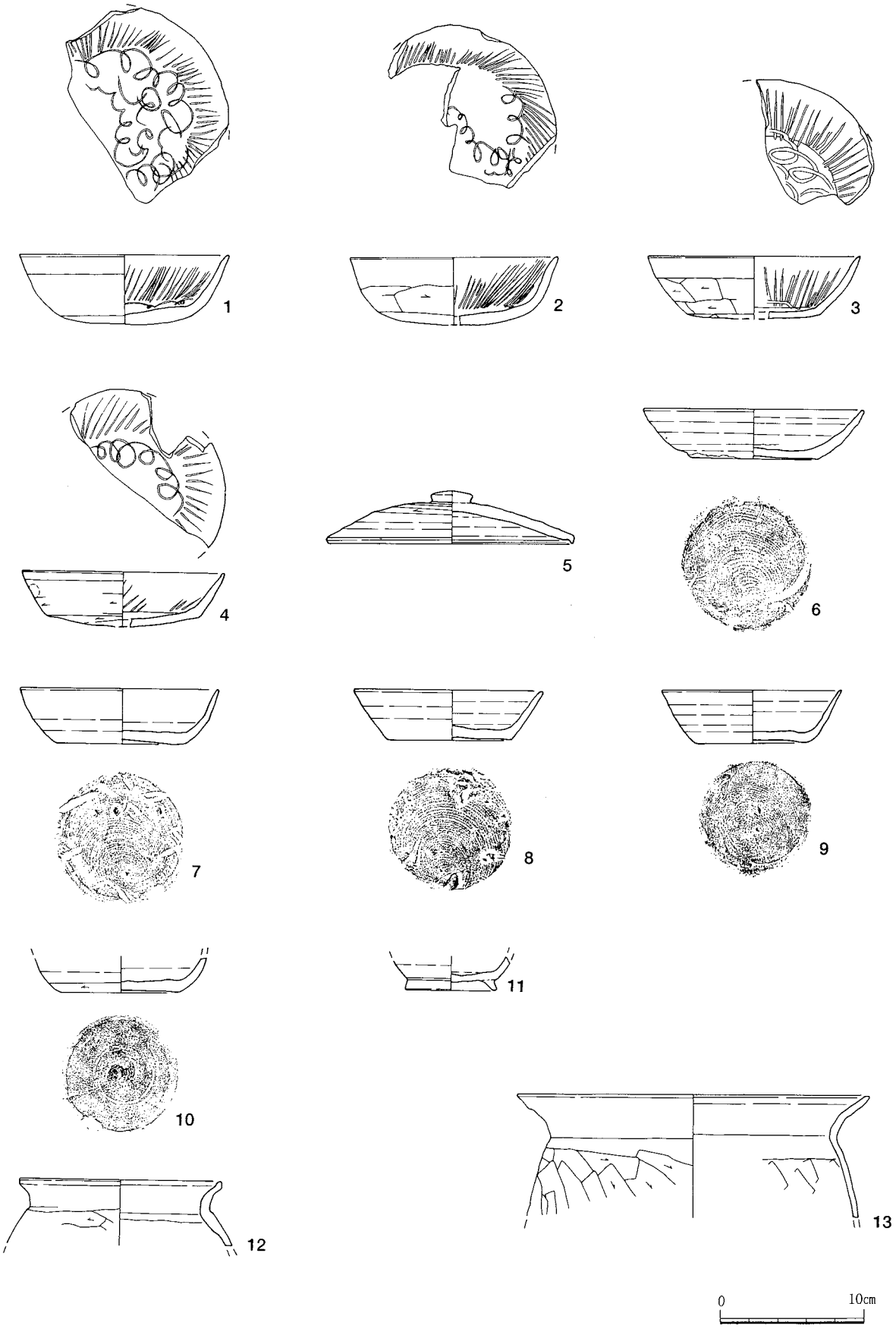
番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
7	土師器 甕	口径(22.0) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で	①細・粗砂粒 ②にぶい橙色 ③普通	口～胴部上位 1/4残存
8	砥石	長さ12.4　幅5.2　厚さ2.8			
9	石	長さ14.5　幅5.2　厚さ1.1			
10	石	長さ13.6　幅5.3　厚さ3.8			
11	石	長さ12.0　幅4.7　厚さ3.3			
12	石	長さ11.0　幅5.3　厚さ3.6			
13	石	長さ11.9　幅3.9　厚さ3.8			
14	石	長さ11.5　幅3.1　厚さ2.1			
15	石	長さ 9.1　幅4.3　厚さ2.1			
16	石	長さ 8.7　幅4.6　厚さ2.5			
17	石	長さ 7.8　幅4.2　厚さ2.1			
18	石	長さ 8.7　幅3.6　厚さ2.3			
19	石	長さ 8.5　幅3.5　厚さ2.0			

4号住居跡　（第21・22図　表15　図版1－5・12）

Bi－62グリッドに位置し、主軸はN－110°－Eを指向する。**形態**　西壁辺が長い略台形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.55m×短軸長3.35mを測り、床面積は約12㎡である。柱穴は検出されていない。**埋土**　4層に分層され、1層は人為堆積土、2～4層は自然堆積土と考えられる。**カマド**　東壁中央部に付設される。火床部は住居内に存在し、煙道部は幅87cm・長さ63cmの「V」字状に住居外に掘りこみ、緩やかに立ち上がる。壁体より石材が出土していることより、袖と天井部は石材によって構築されていたと思われる。**床面**　ほぼ平坦となっており、一部に貼床が認められる。住居北東部の貼り床の下には土坑が検出されており、土坑は径104～114cmの円形平面で、深さが25cmの鍋底状断面を呈する。**壁溝**　全周し、幅10～17cm・深さ4～8cmの「U」字状断面を呈する。**貯蔵穴**　南東隅に存在し、平面形は楕円形で長軸長79cm・短軸長55cm・深さ30cmを測る。**遺物**　床面よりやや浮いた状態で、土師器・須恵器が多数出土した。



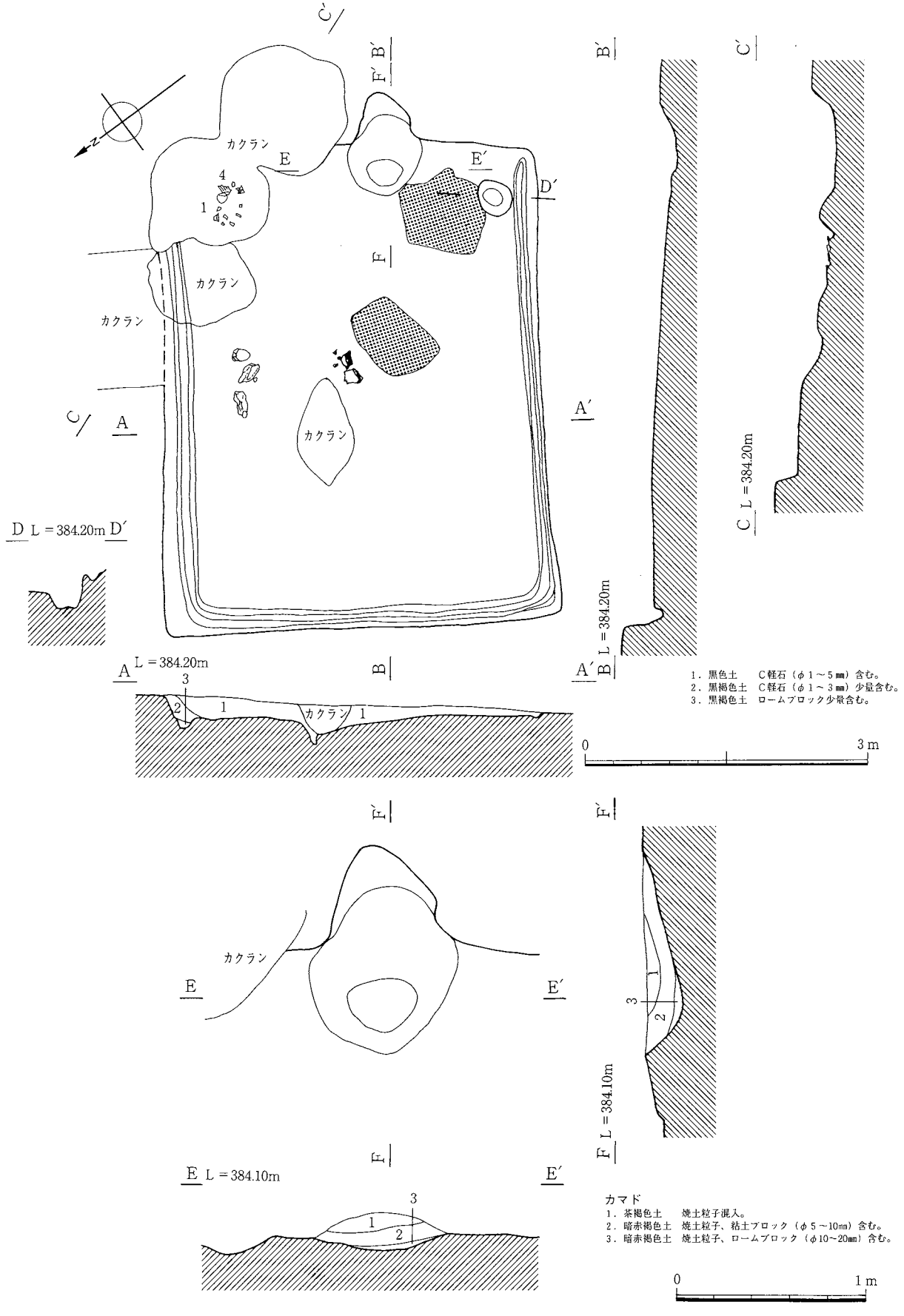
第21図　4号住居跡・カマド



第22図　4号住居跡出土遺物

第15表　4号住居跡出土遺物観察表

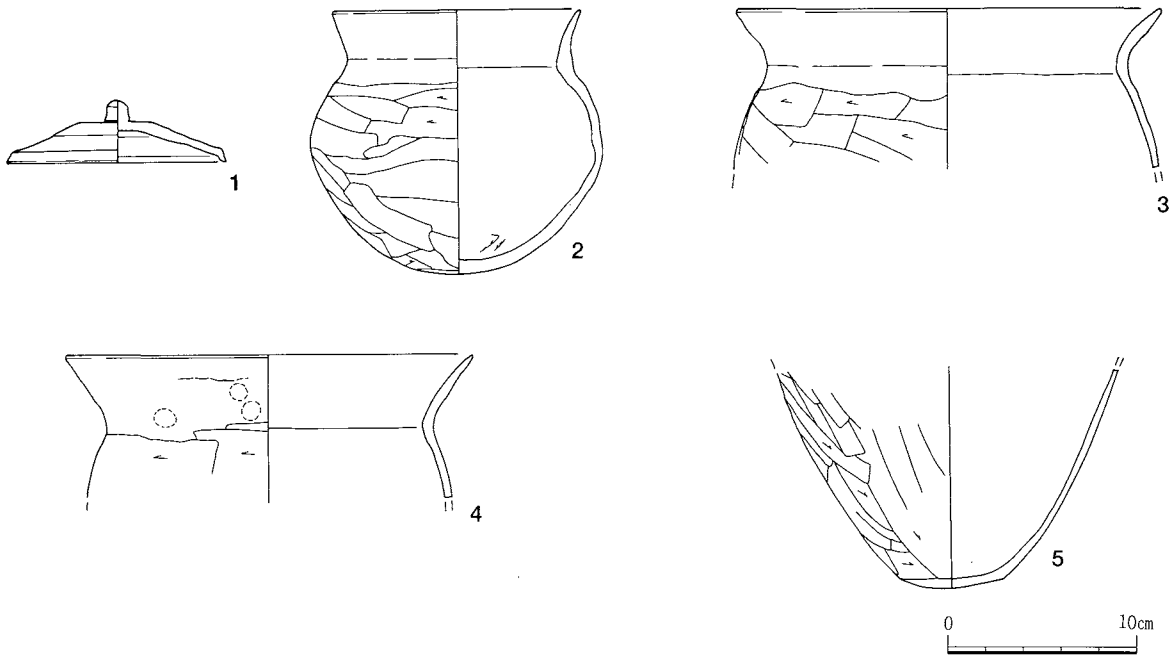
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(14.4) 底径(11.0) 器高 (9.2)	外面　口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細砂粒、雲母、白色粒 ②橙色 ③普通	1/3残存
2	土師器 坏	口径(14.4) 底径(11.0) 器高 (4.7)	外面　口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細砂粒 ②にぶい褐色 ③普通	1/3残存
3	土師器 坏	口径(14.6) 底径 (9.2) 器高 (4.3)	外面　口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②にぶい褐色 ③普通	1/4残存
4	土師器 坏	口径(14.0) 底径(10.6) 器高 (3.8)	外面　口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細・粗砂粒 ②にぶい橙色 ③普通	1/3残存
5	須恵器 蓋	口径 17.1 摘み 2.8 器高 3.7	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰黄色 ③還元	ほぼ完形
6	須恵器 坏	口径 15.4 底径 8.9 器高 3.4	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	完形 内面に紐造り痕
7	須恵器 坏	口径 13.8 底径 8.9 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り後周辺部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	ほぼ完形
8	須恵器 坏	口径 13.1 底径 8.6 器高 3.5	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	完形 外面に自然釉
9	須恵器 坏	口径 12.4 底径 7.7 器高 3.6	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元	ほぼ完形
10	須恵器 坏	口径 底径 8.0 器高	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後周辺部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細・粗砂粒、小礫、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	底～体部中位残存
11	須恵器 高台付椀	口径 底径 (6.2) 器高	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後周辺部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②灰色 ③還元	体部下位1/4残存
12	土師器 甕	口径(14.0) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、雲母 ②褐色 ③良好	口縁部3/4残存
13	土師器 甕	口径 24.4 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②橙色 ③普通	口～胴部上位1/4残存



第23図　5号住居跡・カマド

5号住居跡　（第23・24図　表16　図版2－1・12）

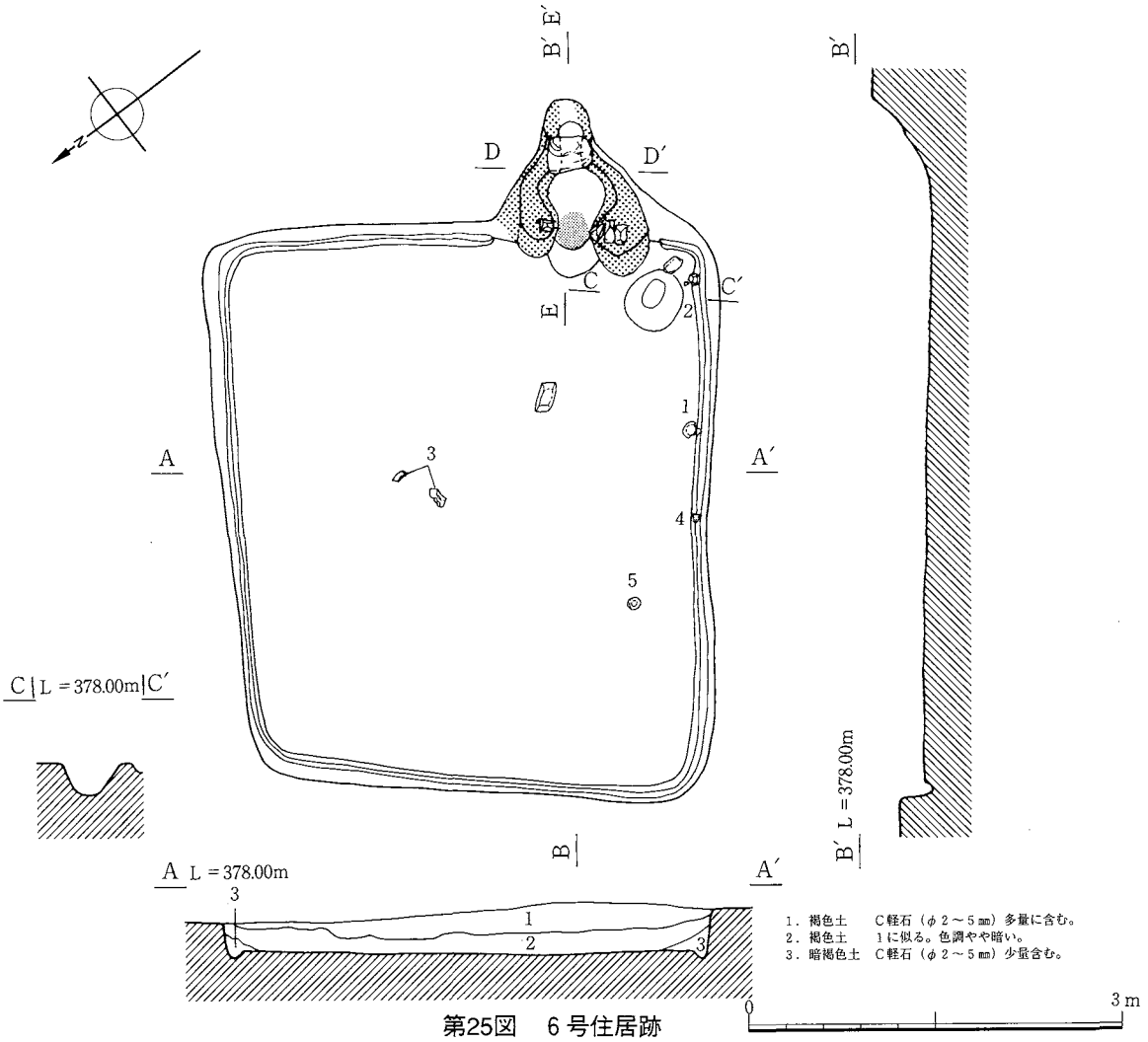
Bi・Bj－63グリッドに位置し、主軸はN－125°－Eを指向する。**形態**　均整のとれた長方形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.55ｍ×短軸長3.50ｍを測り、床面積は約15.9㎡である。北東隅は攪乱により消滅し、柱穴は検出されていない。**カマド**　北壁中央やや東寄りに位置する。火床部は住居内に存在しており、煙道は幅70cm・長さ52cmの「U」字形に壁を掘りこみ、緩やかな立ち上がりとなる。袖と天井部の構造は不明である。**床面**　ほぼ平坦であり、南東隅と中央部の床面上には焼土が存在する。**壁溝**　東壁を除き全周し、断面形は幅8～21cm・深さ3～10cmの「U」字状を呈する。**貯蔵穴**　南東隅に存在する。平面形は長軸長40cm・短軸長35cmの楕円形を呈し、断面形は深さ20cmの鍋底状を呈す。**遺物**　土師器・須恵器が床面よりやや浮いた状態で出土している。



第24図　5号住居跡出土遺物

第16表　5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口径 11.4 摘み 1.2 器高 3.2	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰白色 ③還元	ほぼ完形
2	土師器 小型甕	口径 12.4 底径 器高 13.9	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①白色粒、小礫 ②褐灰色 ③普通	3/4残存
3	土師器 甕	口径 22.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②橙色 ③普通	口～胴部上位 1/3残存
4	土師器 甕	口径 21.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②にぶい褐色 ③普通	口縁部破片
5	土師器 甕	口径 底径 5.6 器高	外面　胴部斜縦位篦削り 内面　胴部横位篦撫で	①黒色鉱物粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	胴部下位5/6 残存



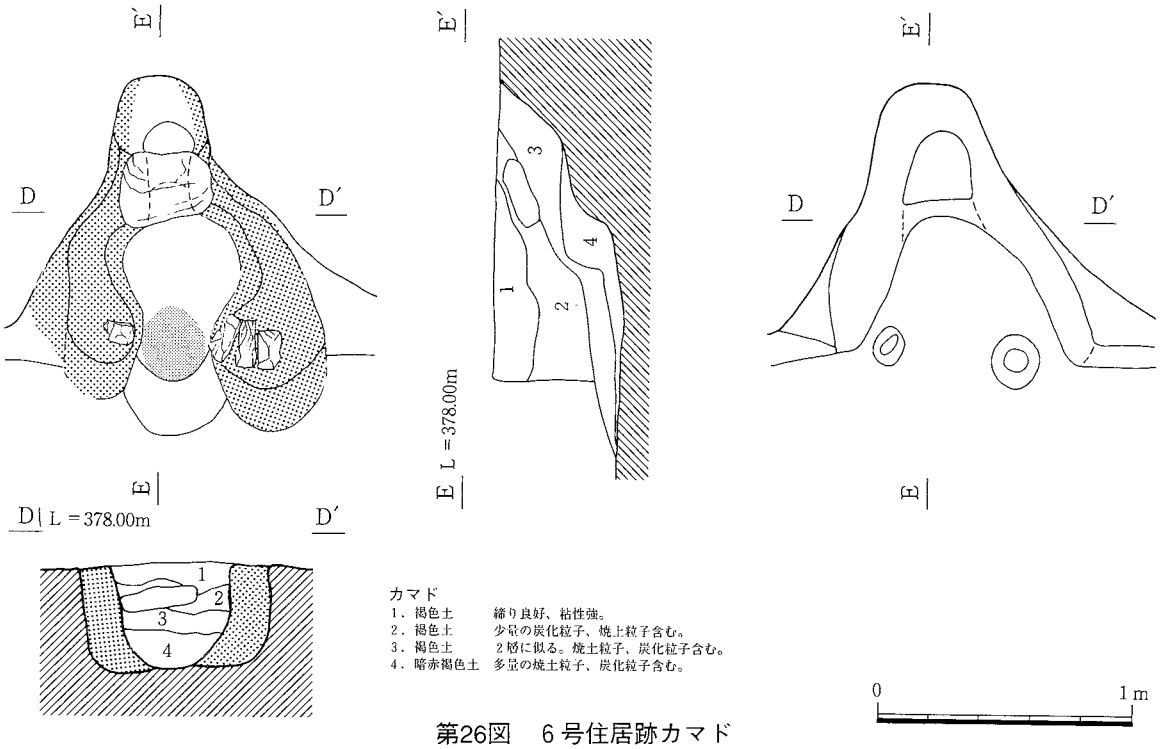
第25図　6号住居跡

6号住居跡　（第25～27図　表17・18　図版2－2・12）

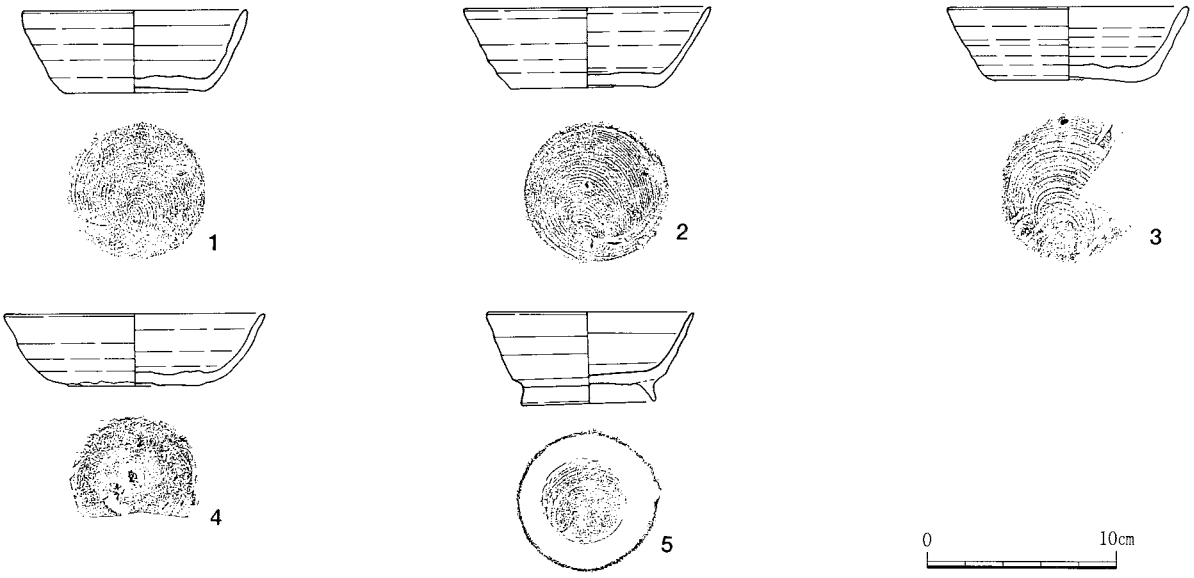
Bm－71・72グリッドに位置し、主軸はN－128°－Eを指向する。形態　長方形を基調とするが、南壁辺がやや長くなるために略台形となる。規模　床面の中軸線上で長軸長4.33ｍ×短軸長3.60ｍを測り、床面積は約15.6㎡である。柱穴は検出されていない。埋土　2層に分層される自然堆積土。カマド　東壁南寄りに付設される。カマド全体は壁外に存在し、幅145cm・長さ100cmの三角形の平面を呈する。焚口の左右には立ち石が存在し、天井部の最奥部にも石材が架構されていることより天井・袖部等は石材により構築されていたと思われる。煙道部は燃焼部との境に段を有し、わずかに水平に延びた後に急な角度で立ち上がる。床面　ほぼ平坦である。壁溝　カマドの前面を除き全周する。断面形は幅5～13cm・深さ4～6cmの「U」字状を呈する。貯蔵穴　東壁の南隅に存在し、平面形は不整円形で長軸長50cm・短軸長45cm・深さ35cmを測る。遺物　土師器・須恵器が出土しているが、掲載したのは遺存の良い須恵器5点である。

第17表　6号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量（cm）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 坏	口径 11.9 底径 7.4 器高 4.3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、小礫 ②灰白色 ③還元	完形
2	須恵器 坏	口径 13.0 底径 7.7 器高 4.2	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、雲母、小礫 ②浅黄～黒色 ③還元、軟質	ほぼ完形



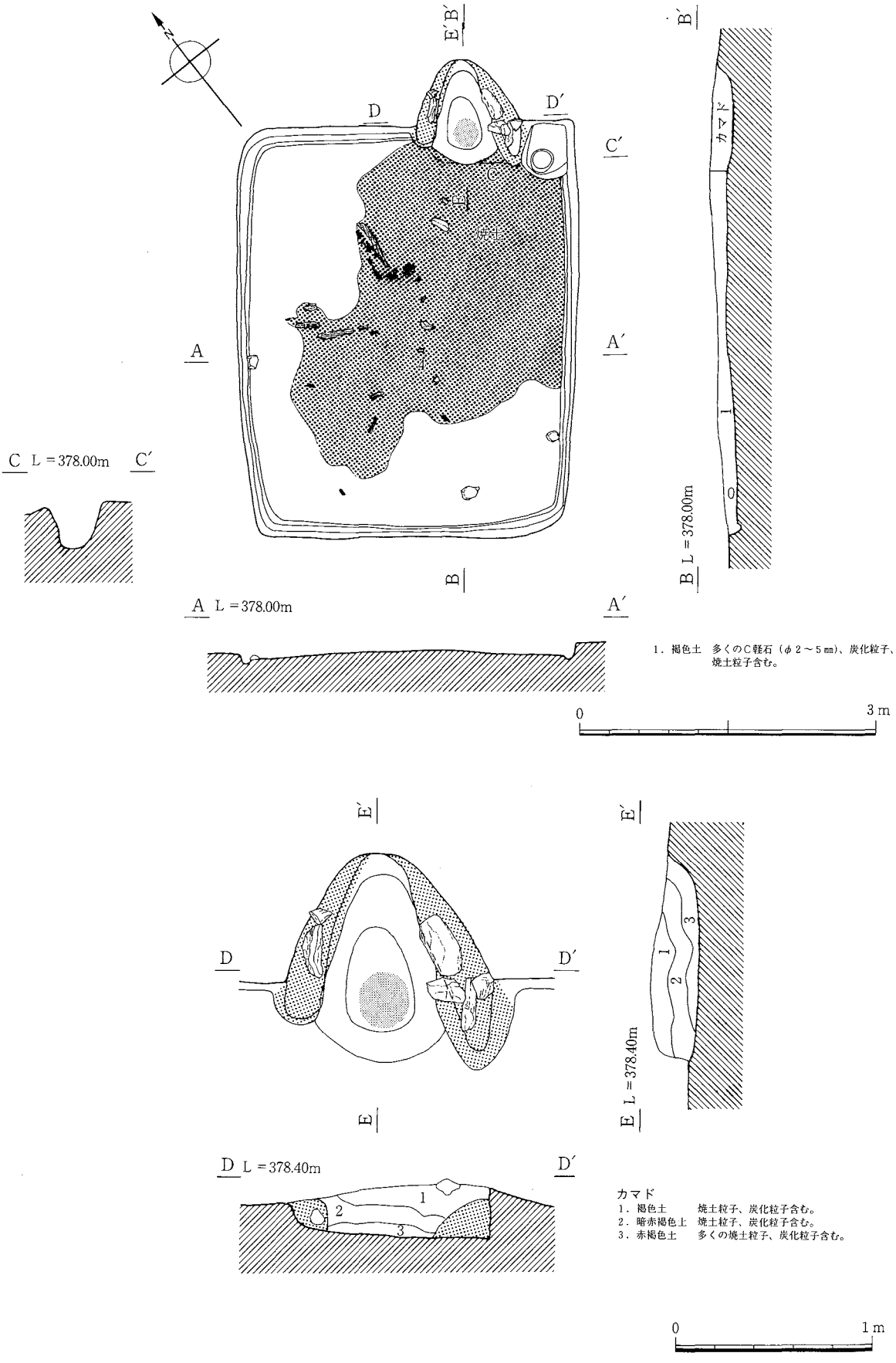
第26図　6号住居跡カマド



第27図　6号住居跡出土遺物

第18表　6号住居跡出土遺物観察表（2）

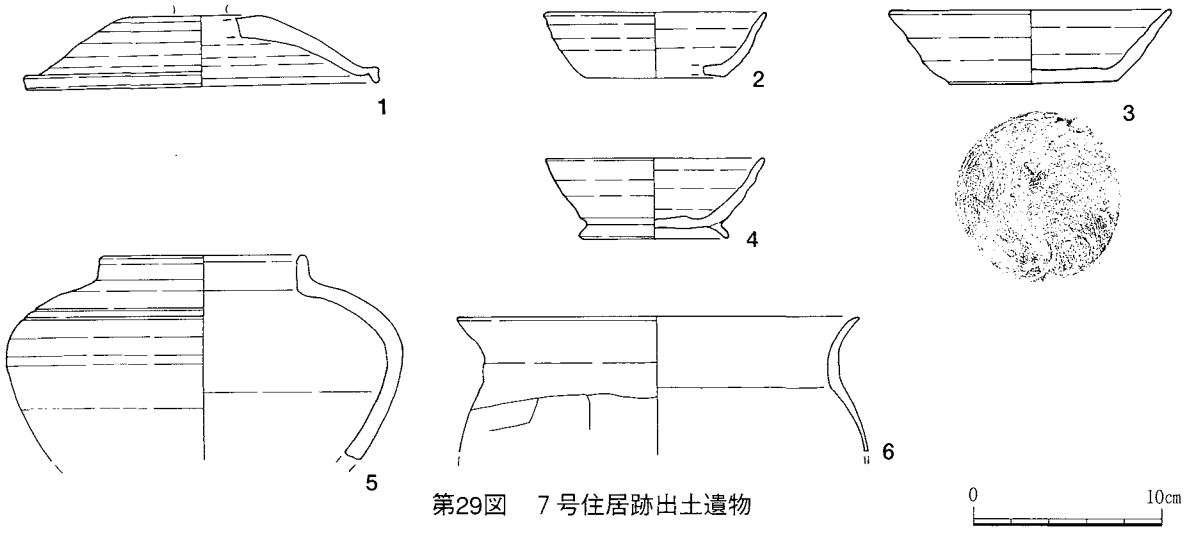
番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
3	須恵器 坏	口径 12.7 底径 7.5 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	3/4残存
4	須恵器 坏	口径 13.7 底径 6.8 器高 3.8	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰黄色 ③還元	1/3残存
5	須恵器 高台付椀	口径 10.9 底径 7.0 器高 4.8	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白・黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	ほぼ完形



第28図　7号住居跡・カマド

7号住居跡　（第28・29図　表19　図版2－3・12・13）

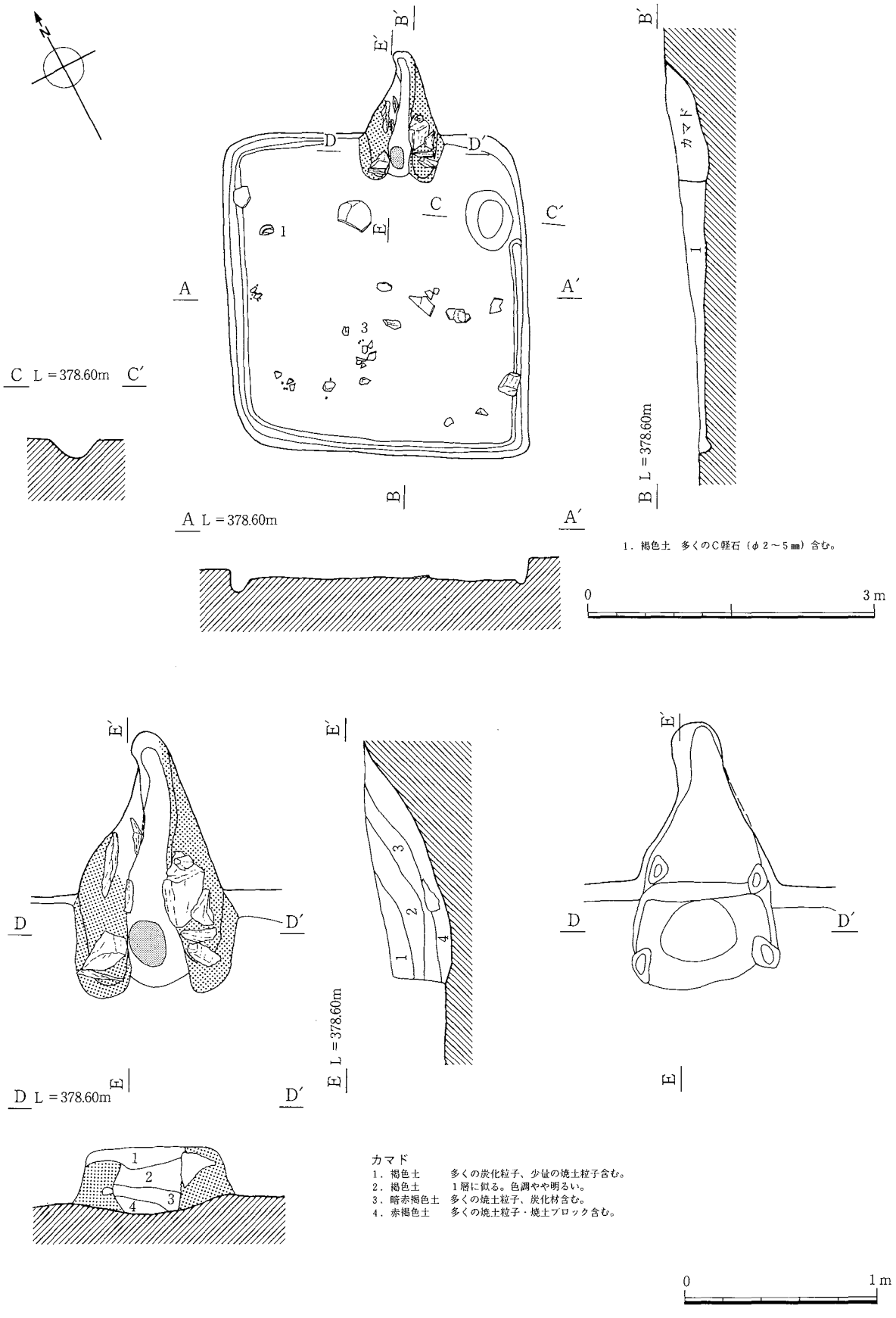
Bl－72グリッドに位置し、主軸はN－40°－Eを指向する。検出状況より焼失家屋と判断される。形態　均整のとれた長方形を呈する。規模　床面の中軸線上で長軸長3.95m×短軸長3.35mを測り、床面積は約13.2㎡である。柱穴は検出されていない。埋土　人為堆積と判断される単層である。カマド　北東壁の東よりに付設する。燃焼部は壁のライン上に中心を有し、壁外に掘り込まれた部分の全体は幅が120cm、長さが62cmの「U」字状平面を有する。袖には石材が用いられており、天井部にも石材が使用されていたものと思われる。煙道部はやや急な角度で立ち上がる。床面　ほぼ平坦である。焼土は床面直上の中央部より北東部にかけて濃厚に分布する。遺存する炭化材は、総じてカマド中軸線の中央に向かい放射状に確認されており、主に垂木と思われる。壁溝　全周し、断面形は幅5～8cm・深さ5～15cmの「U」字状を呈する。貯蔵穴　カマドの北東隅に位置する。平面形は長軸長58cm・短軸長46cmの不整方形を呈し、断面形は深さ40cmの「U」字状を呈する。遺物　埋土の最下部より、土師器・須恵器が出土した。



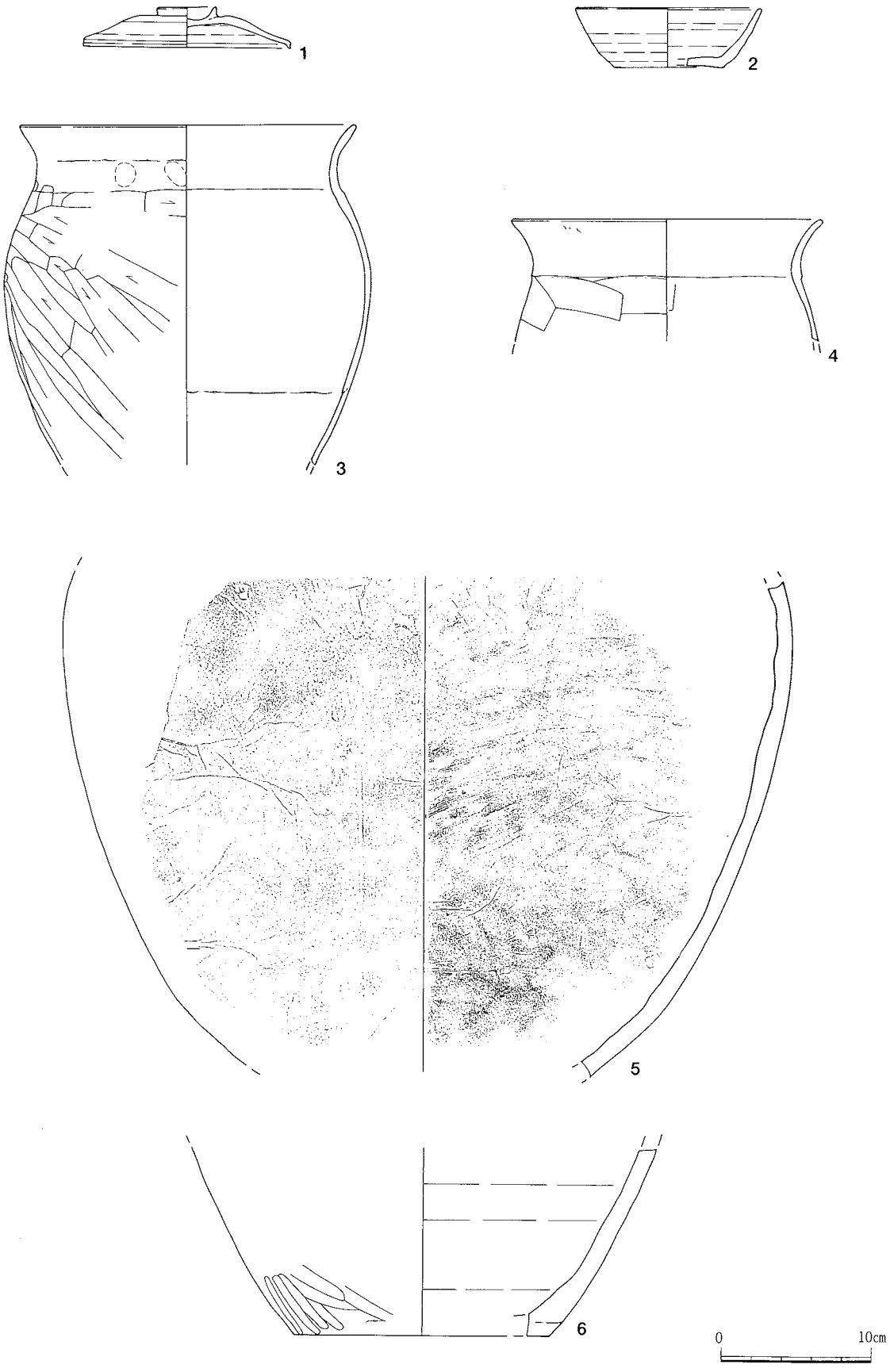
第29図　7号住居跡出土遺物

第19表　7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口径 18.5 摘み 器高	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	摘み部欠損
2	須恵器 坏	口径 10.7 底径 (7.4) 器高 3.4	外面　体部轆轤整形、底部不明 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	1/4残存
3	須恵器 坏	口径(14.9) 底径 8.9 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰白～灰色 ③還元、やや軟質	2/3残存
4	須恵器 高台付椀	口径(11.5) 底径 (7.6) 器高 4.7	外面　体部轆轤整形、底部回転篦削りの可能性があるが、自然釉のため観察不可能 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②褐灰～灰色 ③還元	1/2残存 外面全体に自然釉付着
5	須恵器 短頸壷	口径(10.5) 底径 器高	外面　体部轆轤整形、上位に2条の沈線 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②褐灰色 ③還元	口～体部下位 1/4残存 外面に自然釉
6	土師器 甕	口径 21.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②褐色 ③普通	口～胴部上位 4/5残存



第30図　8号住居跡・カマド



第31図　8号住居跡出土遺物

8号住居跡　（第30・31図　表20　図版2－4・13）

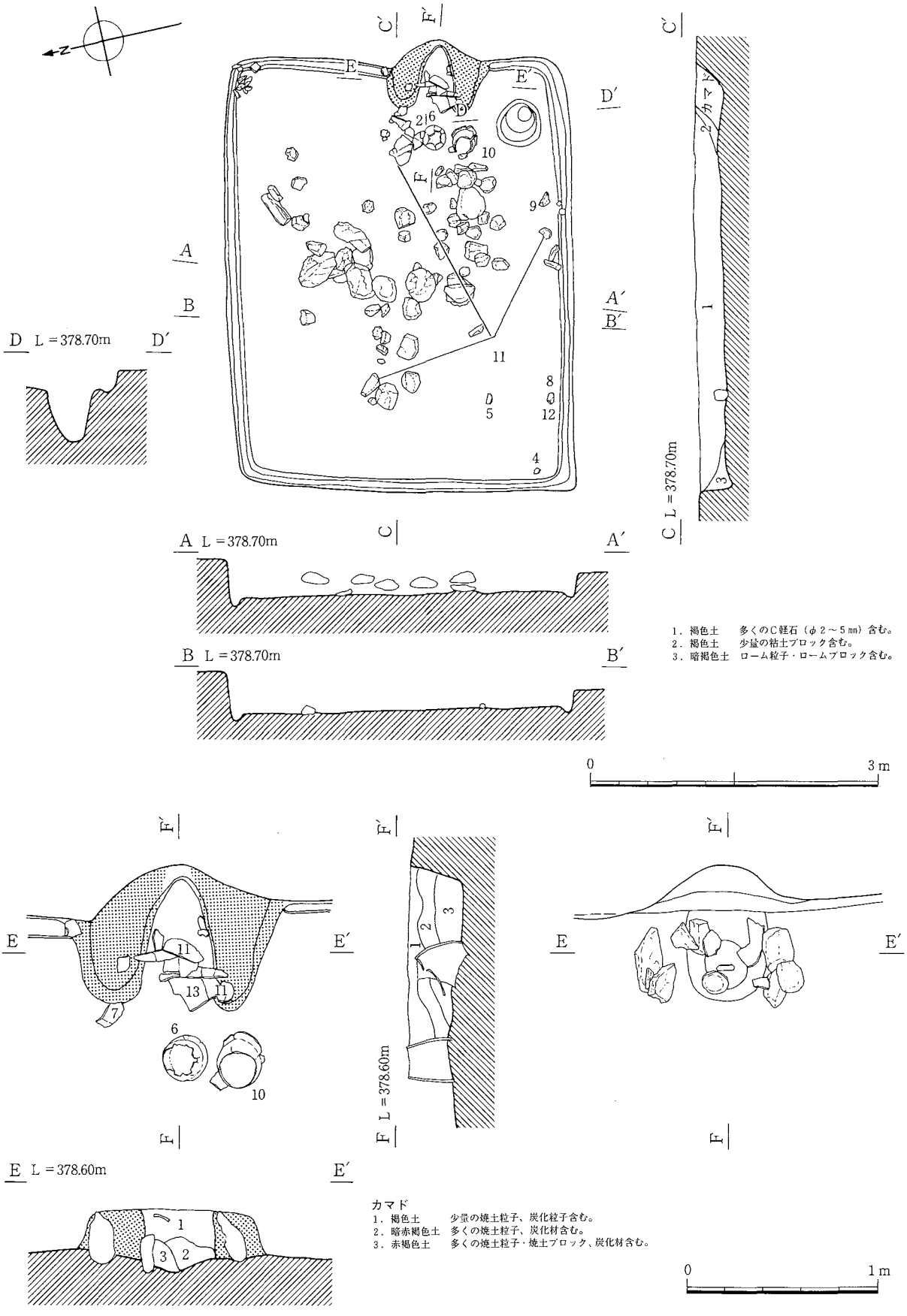
Bk－73グリッドに位置し、主軸はN－25°－Eを指向する。**形態**　方形を基調とするが、南西隅が鈍角になるために西壁辺がやや短くなる。**規模**　床面の中軸線上で長軸長2.95ｍ×短軸長2.75ｍを測り、床面積は約8.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　北壁中央のやや東寄りに付設する。燃焼部は壁内に存在し、火床と袖の直下は浅い土坑状となっている。袖は石材と粘土により構築され、天井部も石材が使用されていたと思われる。煙道部は壁外に幅75㎝・長さ82㎝の「V」字状に掘り込み、煙道の壁には石材を設置しており、緩やかに立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　カマド・貯蔵穴付近を除き巡る。断面形は幅が5～16㎝・深さが5～15㎝の「U」字形状を呈する。**貯蔵穴**　住居北東部に位置するが、北壁より約40㎝ほど離れている。平面形は長軸長63㎝・短軸長50㎝の卵形を呈し、断面形は深さ20㎝の皿状を呈する。**遺物**　床上よりやや浮いた状態で、土師器・須恵器が出土している。

第20表　8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量（㎝）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口径 13.7 摘み 3.8 器高 2.7	外面　体部轆轤整形、天井部回転篦削り後回転撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元、堅緻	3/4残存
2	須恵器 坏	口径(12.2) 底径 (7.1) 器高 3.4	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	1/5残存 外面に薄い自然釉付着
3	土師器 甕	口径(22.2) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、下半斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、小礫、角閃石 ②にぶい褐色 ③普通	口～胴部中位1/2残存、胴部内面に煤付着
4	土師器 甕	口径 20.5 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で	①細砂粒、白色粒 ②赤褐色 ③普通	口～胴部上位1/4残存
5	須恵器 甕	口径 底径 器高	外面　轆轤整形、平行叩き後撫で 内面　轆轤整形、叩き後篦撫で	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒 ②灰色 ③還元	胴部1/8残存
6	須恵器 甑	口径 底径 17.0 器高	外面　轆轤整形、胴部撫で、下位斜縦位篦削り、底部篦削り及び撫で 内面　胴部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	胴部下位1/4残存

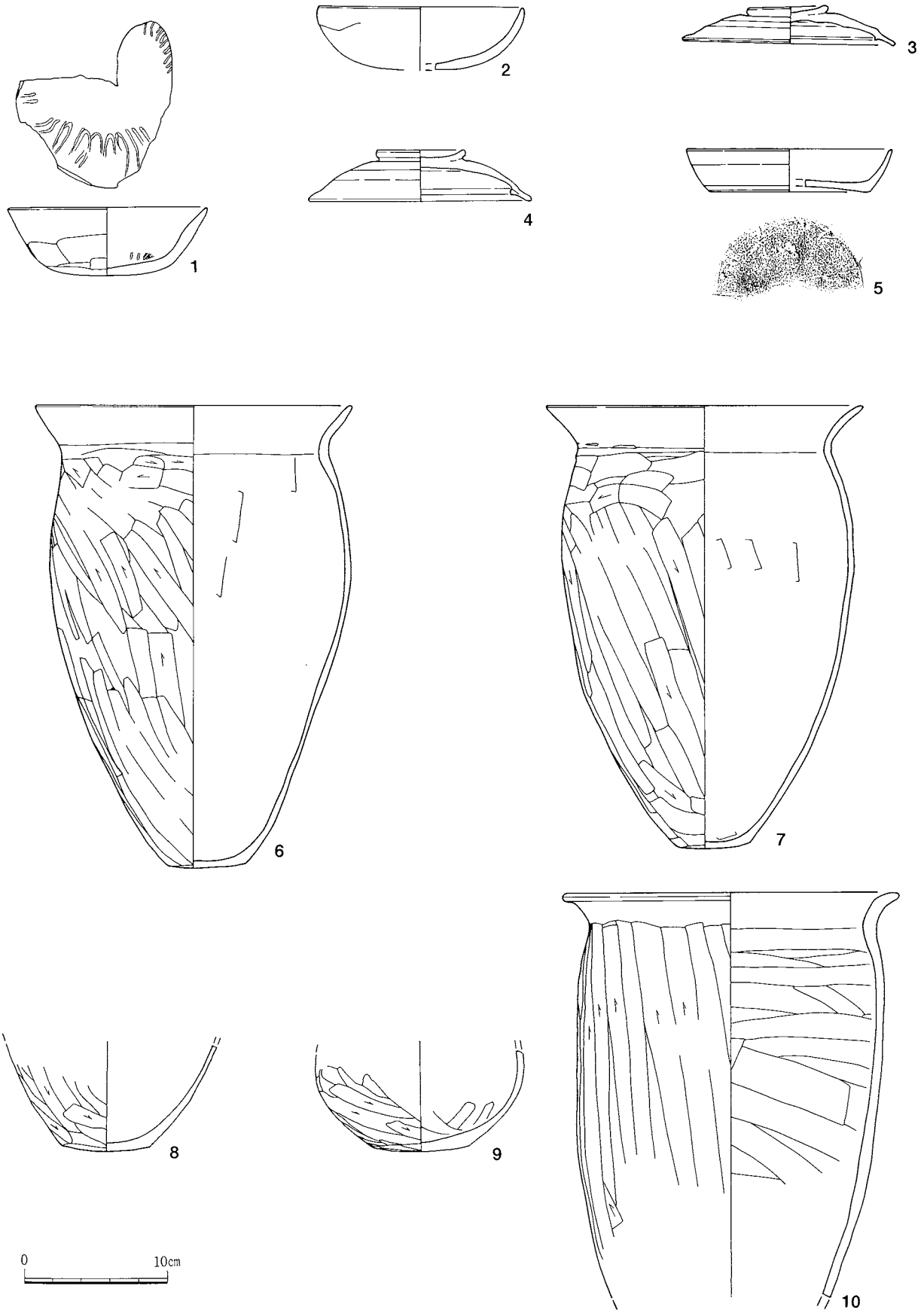
9号住居跡　（第32～34図　表21　図版2－5・13・14）

Bk－73グリッドに位置し、主軸はN－105°－Eを指向する。**形態**　長方形を呈し、東壁のカマド両脇の壁は僅かに食い違う。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.2ｍ×短軸長3.35ｍを測り、床面積は約14.1㎡を測る。柱穴は検出されない。**埋土**　褐色土を基調とする人為堆積土。**カマド**　東壁中央部のやや南寄りに付設する。燃焼部は壁より内側に存在し、火床部は長軸長50㎝・短軸長43㎝・深さが10㎝程の皿状の浅い土坑状を呈している。燃焼部の中心には甕が出土している。袖は粘土と石材により構築されており、天井部もまた同様な材料で構築されていたと思われる。煙道部は幅82㎝・長さ23㎝と浅く壁を掘り込み、急な角度で立ち上がっている。**床面**　ほぼ平坦であり、住居中央部の床面から覆土下層にかけて被熱した人頭大の川原石が集中して出土している。住居廃絶時に投げこまれたものであろうか。また、カマド前面の床面直上には土師器の甕2点が倒立して置かれている。**壁溝**　全周する。断面形状は幅7～15㎝・深さ5～10㎝の「U」字形状を呈する。**貯蔵穴**　東南隅に位置し、南壁に接するのに対してカマドを有する東壁よりやや離れて付設する。長軸長50㎝・短軸長45㎝の不整円形を呈し、断面形は深さ56㎝の「U」字形状を呈する。**遺物**　土師器・須恵器・石製品が出土している。

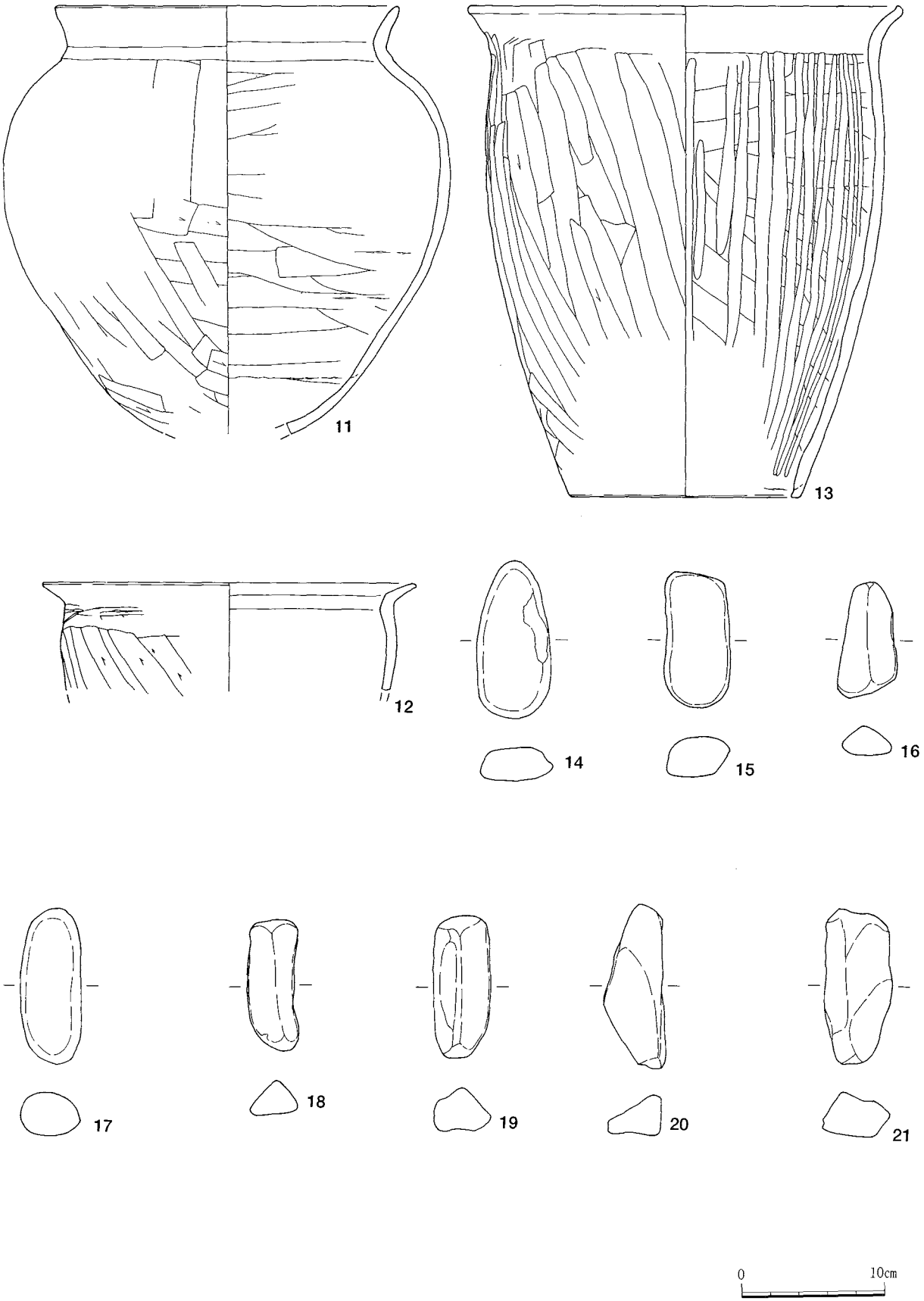


1．褐色土　多くのC軽石（φ2～5㎜）含む。
2．褐色土　少量の粘土ブロック含む。
3．暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む。

第32図　9号住居跡・カマド



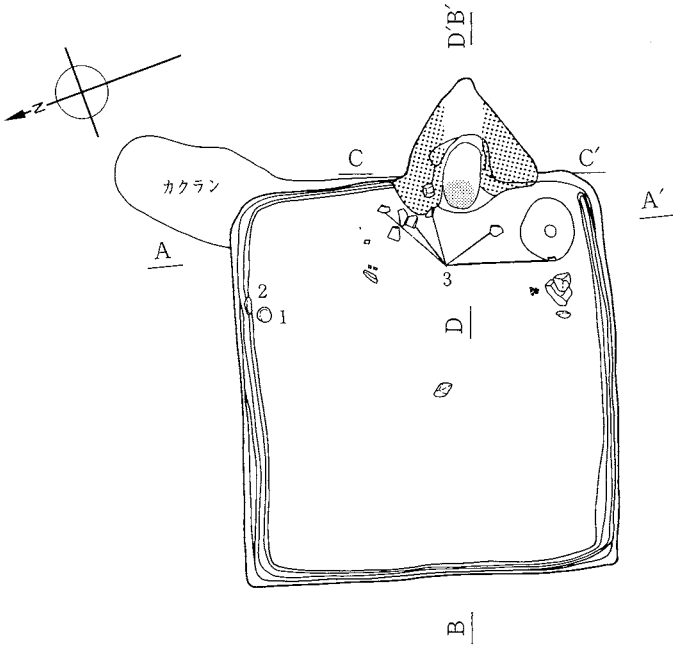
第33図　９号住居跡出土遺物（１）

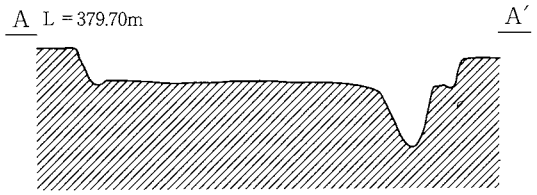


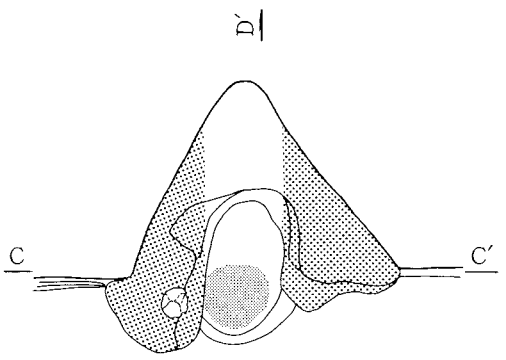
第34図　9号住居跡出土遺物（2）

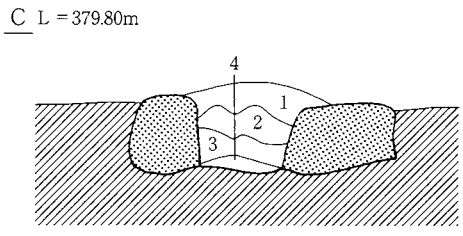
第21表　9号住居跡出土遺物観察表

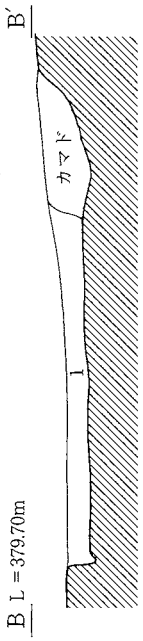
番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
1	土師器 坏	口径(14.0) 底径(10.0) 器高 4.7	外面　口縁部横撫で、体部・底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒、白色粒 ②橙色 ③普通	口～底部1/4 残存
2	土師器 坏	口径(14.3) 底径 器高 (4.4)	外面　器面が溶けて調整不明瞭 内面　器面が溶けて調整不明瞭	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②橙色 ③普通	1/5残存
3	須恵器 蓋	口径 14.8 摘み 5.8 器高 2.5	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①黒色鉱物粒、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	完形
4	須恵器 蓋	口径 15.4 摘み 6.0 器高 3.6	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①白色粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	2/5残存 外面に自然釉
5	須恵器 坏	口径(14.4) 底径(11.0) 器高 3.0	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②褐灰色 ③還元、堅緻	1/4残存
6	土師器 甕	口径 22.0 底径 5.5 器高 32.3	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、同下半斜縦位篦削り、底部篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、小礫 ②にぶい赤褐色 ③普通	胴部一部欠損
7	土師器 甕	口径 22.0 底径 5.2 器高 31.0	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、同下半斜縦位篦削り、底部篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	4/5残存
8	土師器 甕	口径 底径 6.1 器高	外面　胴部斜縦位篦削り 内面　胴部篦撫で	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②明赤褐色 ③普通	胴部下位残存
9	土師器 小型甕	口径 底径 6.6 器高	外面　胴部斜縦位篦削り 内面　胴部篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②にぶい赤褐色 ③普通	胴部上位欠損
10	土師器 甕	口径 23.3 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①粗砂粒、片岩、石英 ②にぶい橙色 ③普通	口～胴部下位 残存
11	土師器 甕	口径(23.8) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上半縦位篦削り、同下半斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒、礫、白色粒、褐色鉱物粒 ②橙色 ③普通	口～胴部下位 1/4残存
12	土師器 甕	口径(26.0) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で	①細砂粒、褐色鉱物粒、白色粒 ②にぶい橙色 ③普通	口～胴部上位 1/4残存
13	土師器 甑	口径(29.8) 底径(15.8) 器高 34.1	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で後縦位篦研磨	①細砂粒、褐色鉱物粒、白色粒 ②にぶい橙色 ③普通	口～底部1/4 残存
14	石	長さ11.0　幅5.2　厚さ2.3			
15	石	長さ 9.2　幅4.6　厚さ3.8			
16	石	長さ 8.0　幅4.1　厚さ2.1			
17	石	長さ10.8　幅4.2　厚さ3.0			
18	石	長さ 9.1　幅3.3　厚さ2.3			
19	石	長さ 9.9　幅4.1　厚さ2.9			
20	石	長さ11.2　幅4.1　厚さ2.8			
21	石	長さ10.8　幅4.6　厚さ3.0			



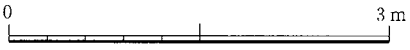


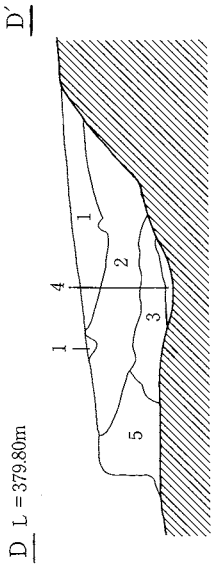






1．茶褐色土　C軽石（φ2～7㎜）、炭化粒子含む。



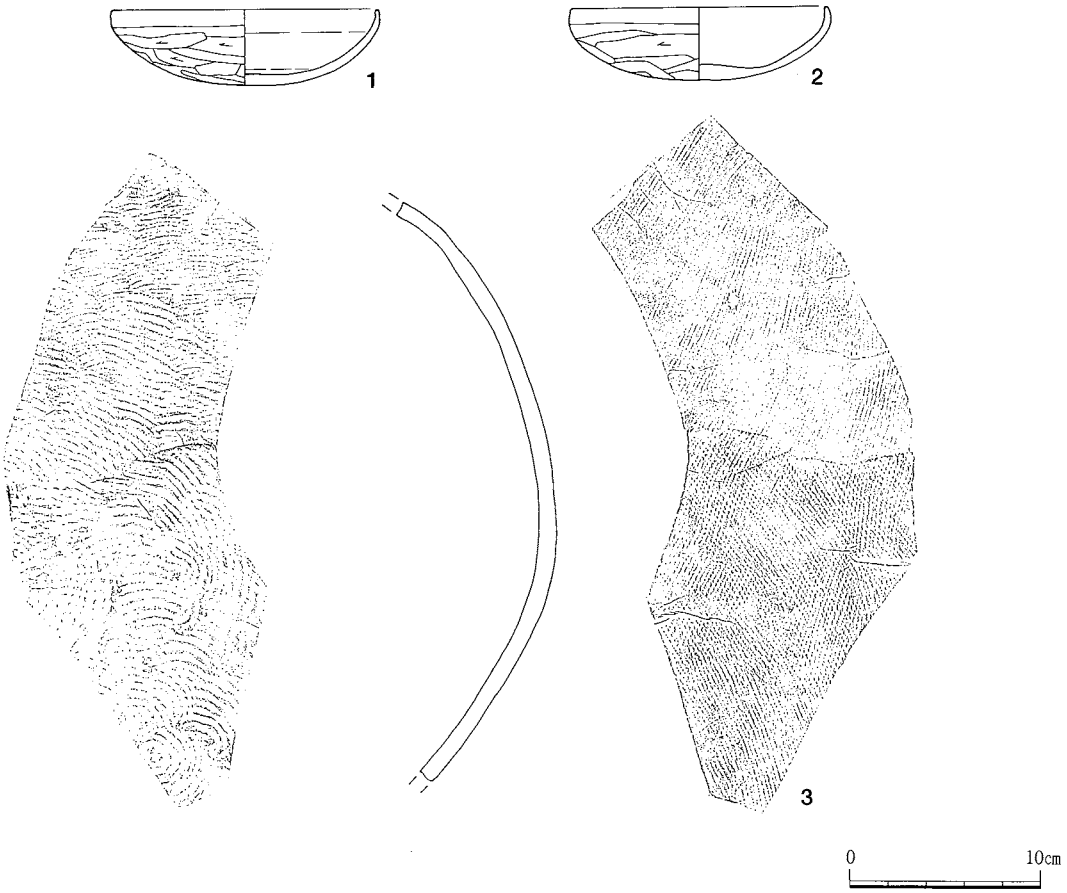


カマド
1．茶褐色土　C軽石（φ2～7㎜）、炭化粒子含む。
2．褐色土　多くのローム粒子、少量の炭化粒子、焼土粒子含む。
3．褐色土　多くの炭化粒子、ローム粒子、焼土ブロック含む。
4．赤褐色土　多くの焼土粒子・焼土ブロック含む。
5．茶褐色土　C軽石（φ2～7㎜）、炭化粒子含む。

第35図　10号住居跡・カマド

10号住居跡　（第35・36図　表22　図版３－１・14）

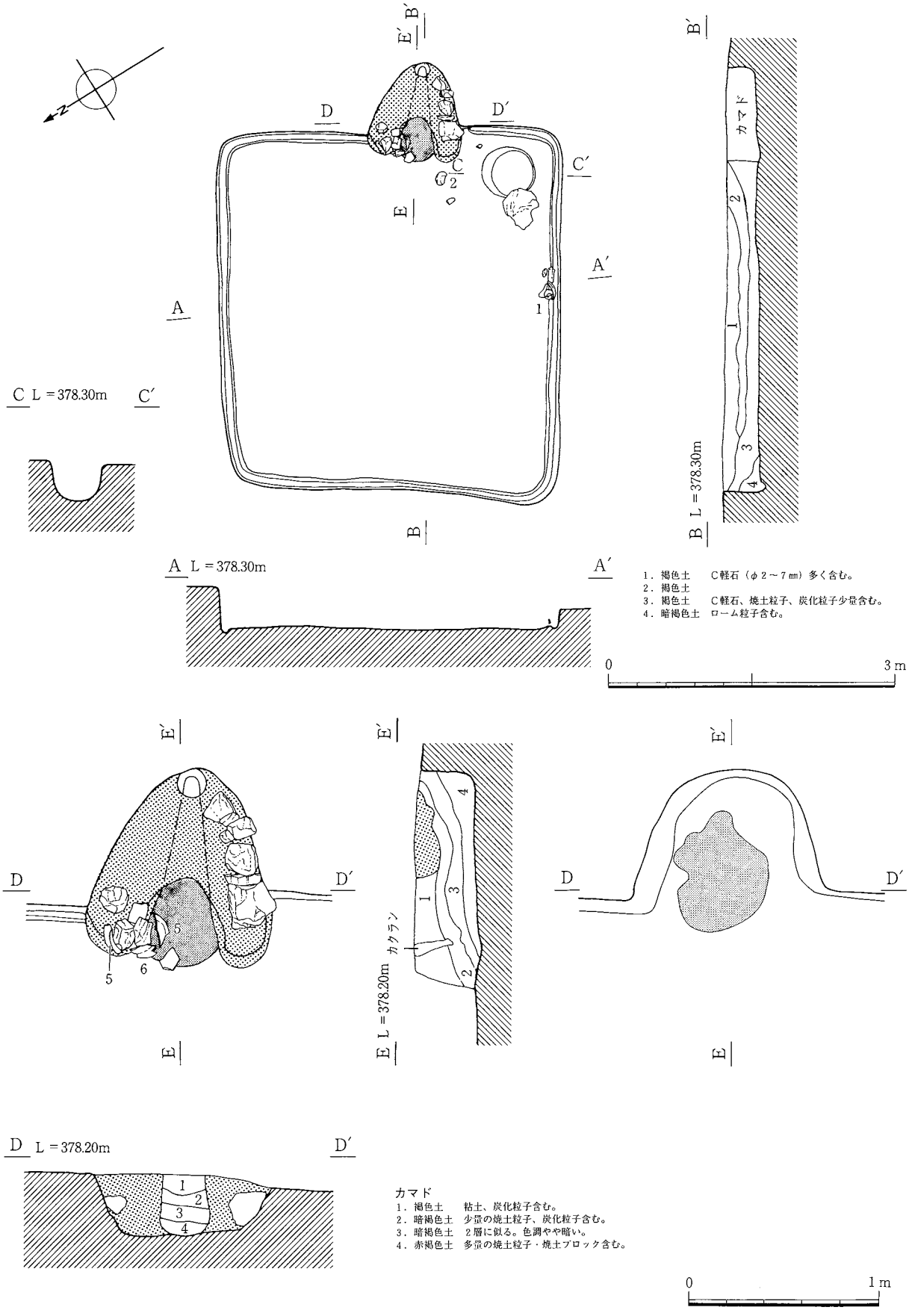
Bi－74グリッドに位置し、主軸はＮ－110°－Ｅを指向する。**形態**　方形基調で、西壁辺がやや短い。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.0ｍ×短軸長2.70ｍを測り、床面積は約8.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　東壁中央北寄りに位置する。燃焼部は壁外に存在し、カマド全体の形状は幅106cm・長さ80cmの「Ｖ」字形状を呈する。煙道部は緩やかに立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　南東隅の一部を除き全周し、断面形状は幅５～15cm・深さ３～６cmの「Ｕ」字形状を呈する。**貯蔵穴**　カマドの南東に位置する。平面形状は長軸長50cm・短軸長43cmの円形を呈し、断面形は深さ45cmの「Ｖ」字形状を呈する。**遺物**　土師器・須恵器が出土している。



第36図　10号住居跡出土遺物

第22表　10号住居跡出土遺物観察表

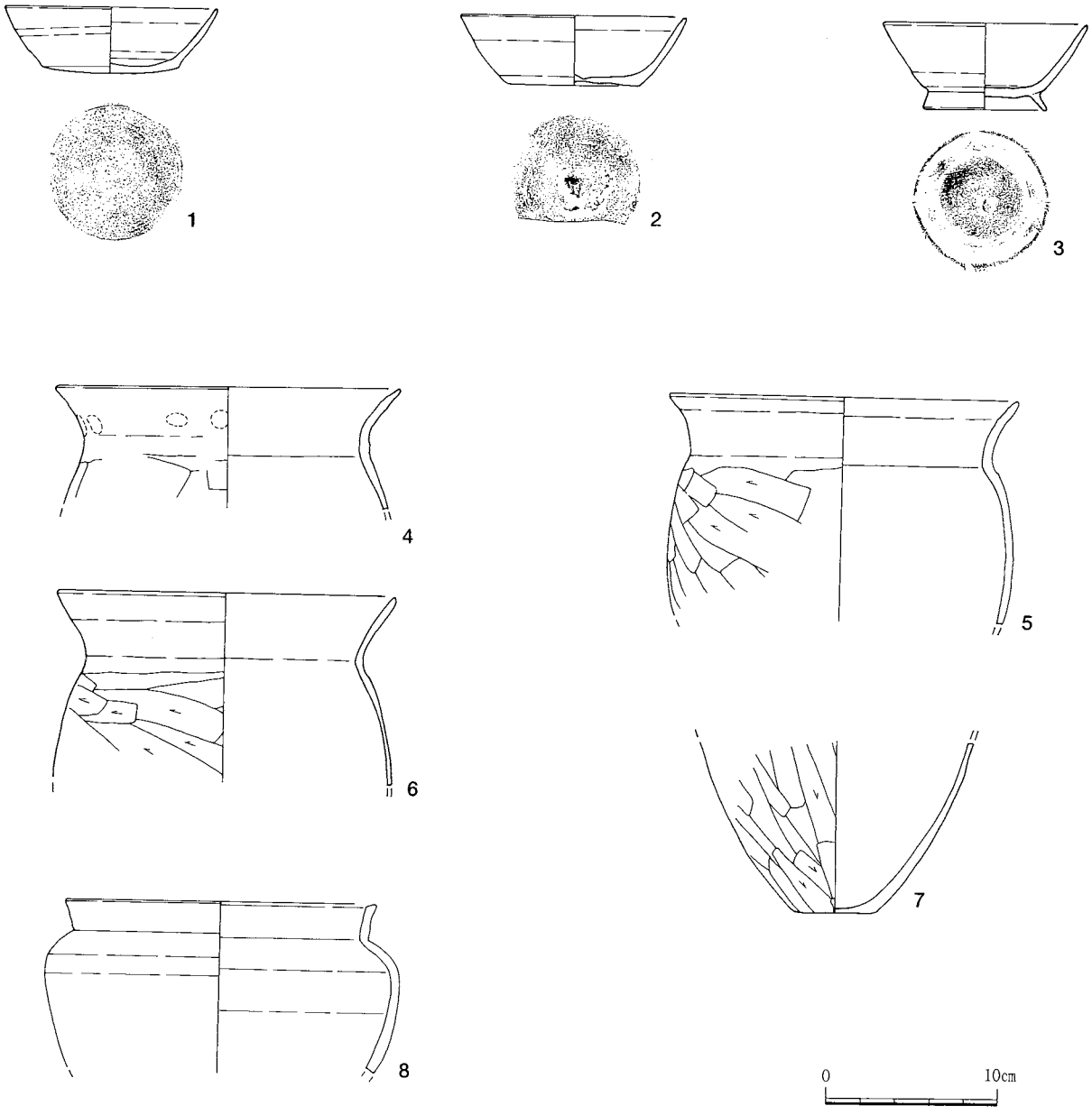
番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径 17.0 底径 器高 4.0	外面　口縁部横撫で、体部斜横位箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③普通	完形
2	土師器 坏	口径 13.4 底径 器高 3.8	外面　口縁部横撫で、体部斜横位箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で	①白色粒、石英、角閃石 ②橙色 ③普通	3/4残存
3	須恵器 甕	口径 底径 器高	外面　轆轤整形、胴部平行叩き 内面　轆轤整形、同心円の当て具痕顕著	①白色粒、細砂粒 ②灰色 ③還元	胴部1/8残存



第37図　11号住居跡・カマド

11号住居跡　（第37・38図　表23　図版３－２・14）

Bl－73グリッドに位置し、主軸はＮ－125°－Ｅを指向する。**形態**　方形を基調とするが、北隅が鈍角に開き台形状となる。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.50ｍ×短軸長3.35ｍを測り、床面積は約11.7㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　東壁中央やや南寄りに位置する。燃焼部は壁と壁を結んだライン上に存在し、煙道部は壁外に延びる。袖等には石材が使用されており、天井部は遺存している。煙道は幅15～50cm・長さ63cmを測り、壁外へと水平に掘り込まれ、先端で垂直近くに立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**全周する。断面形は幅７～12cm×深さ５～７cmの「Ｕ」字形状となる。**貯蔵穴**　南東隅に位置する。平面形は径56cmの円形を呈し、断面形は深さ40cmの「Ｕ」字形状を呈する。**遺物**　土師器・須恵器が３層を中心に包蔵されていた。



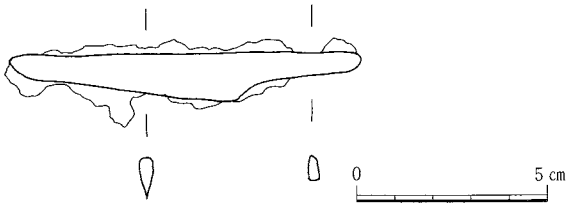
第38図　11号住居跡出土遺物

第23表　11号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
1	須恵器 坏	口径 12.4 底径 8.1 器高 3.8	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦削り後周辺部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①黒色鉱物粒、白色粒 ②灰色 ③還元	口縁一部欠損
2	須恵器 坏	口径 13.0 底径 7.6 器高 4.0	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後周辺部指撫で 内面　体部轆轤整形	①小礫 ②明オリーブ灰色 ③還元	1/2残存
3	須恵器 高台付椀	口径 11.8 底径 7.0 器高 5.0	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後周辺部回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①白色粒 ②灰色 ③還元	1/2残存
4	土師器 甕	口径(19.8) 底径 器高	外面　口縁部指頭押圧後横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①白色粒 ②赤褐色 ③普通	口～胴部上位 2/5残存
5	土師器 甕	口径 20.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①黒色鉱物粒、褐色鉱物粒 ②にぶい褐色 ③普通	口～胴部中位 1/2残存
6	土師器 甕	口径 19.6 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	口～胴部中位 1/4残存
7	土師器 甕	口径 底径 (4.6) 器高	外面　胴部斜縦位篦削り 内面　胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒、白色粒 ②褐色 ③普通	胴部下位1/2 残存
8	須恵器 広口壷	口径 18.0 底径 器高	外面　体部轆轤整形 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、石英 ②灰白～にぶい黄橙色 ③還元、やや軟質	口～胴部中位 3/4残存

12号住居跡　（第39・40図　表24　図版３－３・14）

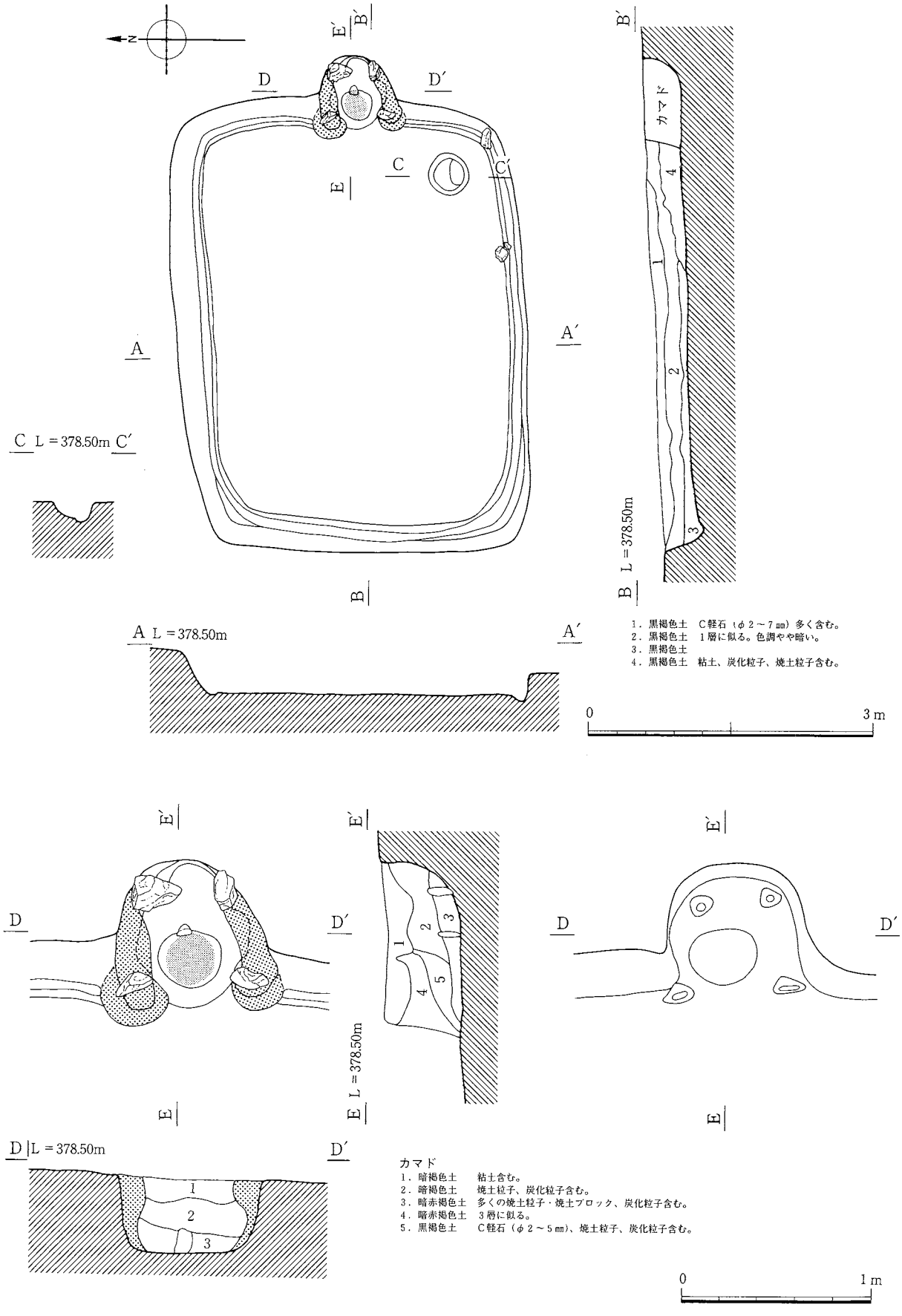
Bl－74グリッドに位置し、主軸は東西軸に乗る。**形態**　長方形を基調とするが、ややルーズである。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.15ｍ×短軸長3.15ｍを測り、床面積は約13.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　東壁のほぼ中央部に位置する。燃焼部は壁外に存在し、カマド全体は幅86cm・長さ50cmの「U」字形を呈する。燃焼部の四隅には立石が見られ、天井部や袖と壁は石材により構築されていたと思われ、燃焼部中央には支脚に使用された立石が存在する。煙道部はほぼ直立して立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　全周する。断面形は幅は８～25cm・深さが３～６cmの「U」字形状を呈する。**貯蔵穴**　南東隅に位置する。平面形は径43cmの円形を呈し、深さが20cmで、底面は二段に掘り込まれる。**遺物**　鉄製の刀子１点を掲載した。



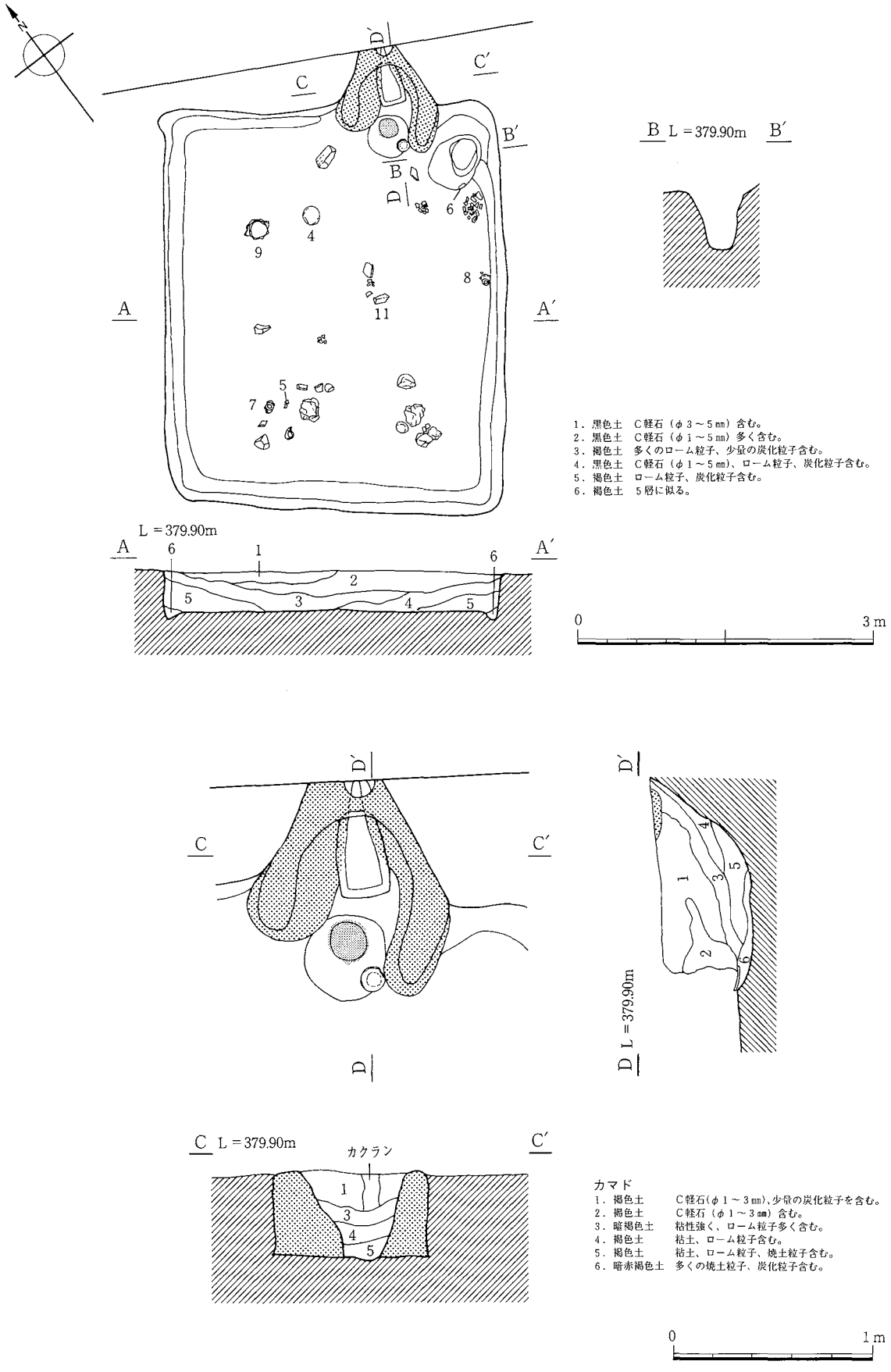
第39図　12号住居跡出土遺物

第24表　12号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
1	鉄製品 刀子	全長 9.1	刃部　幅 1.3 厚 0.3 茎部　幅 0.7 厚 0.3 関の形状は錆が著しく、不明瞭		完形



第40図　12号住居跡・カマド



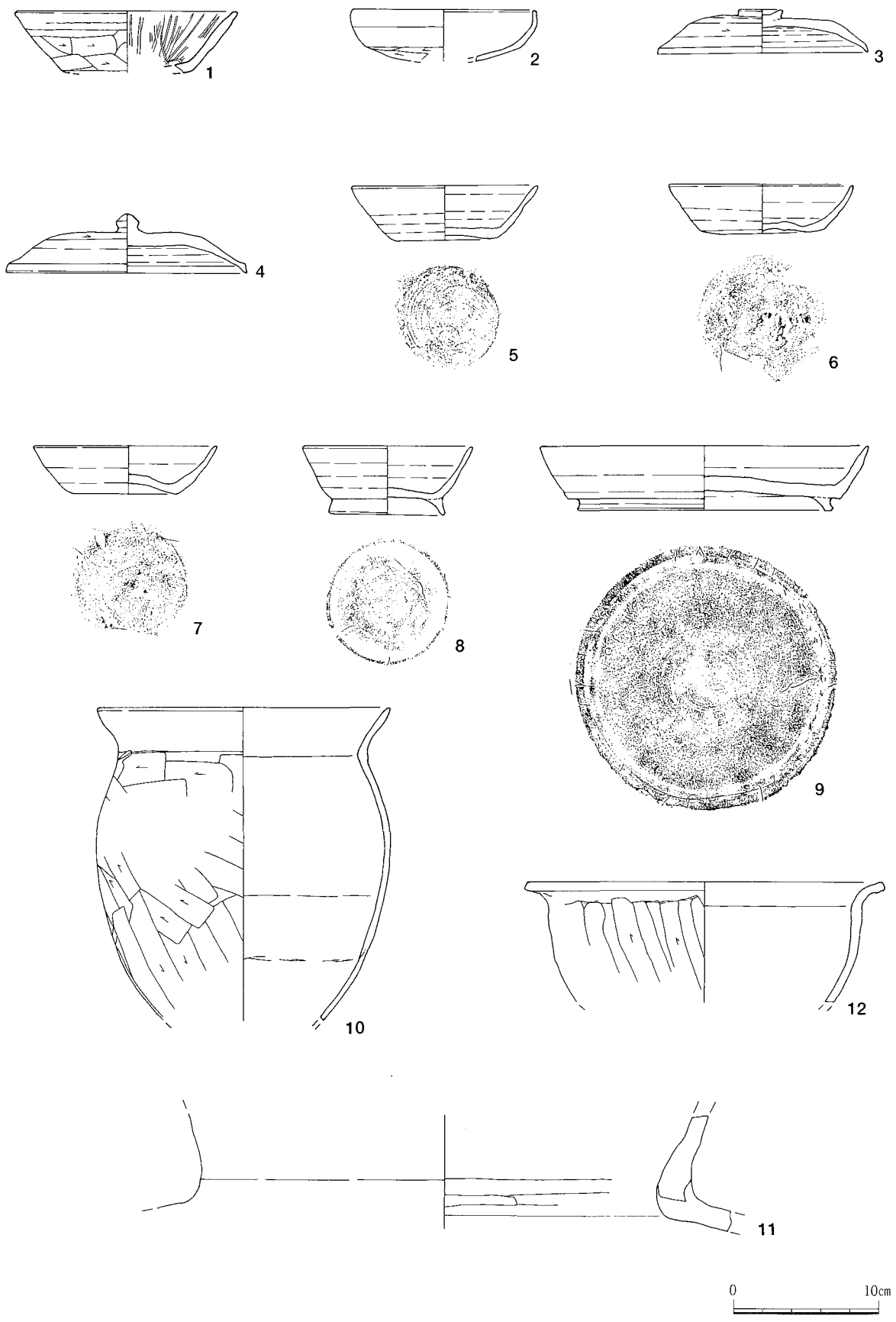
第41図　13号住居跡・カマド

13号住居跡　（第41・42図　表25　図版３－４・14）

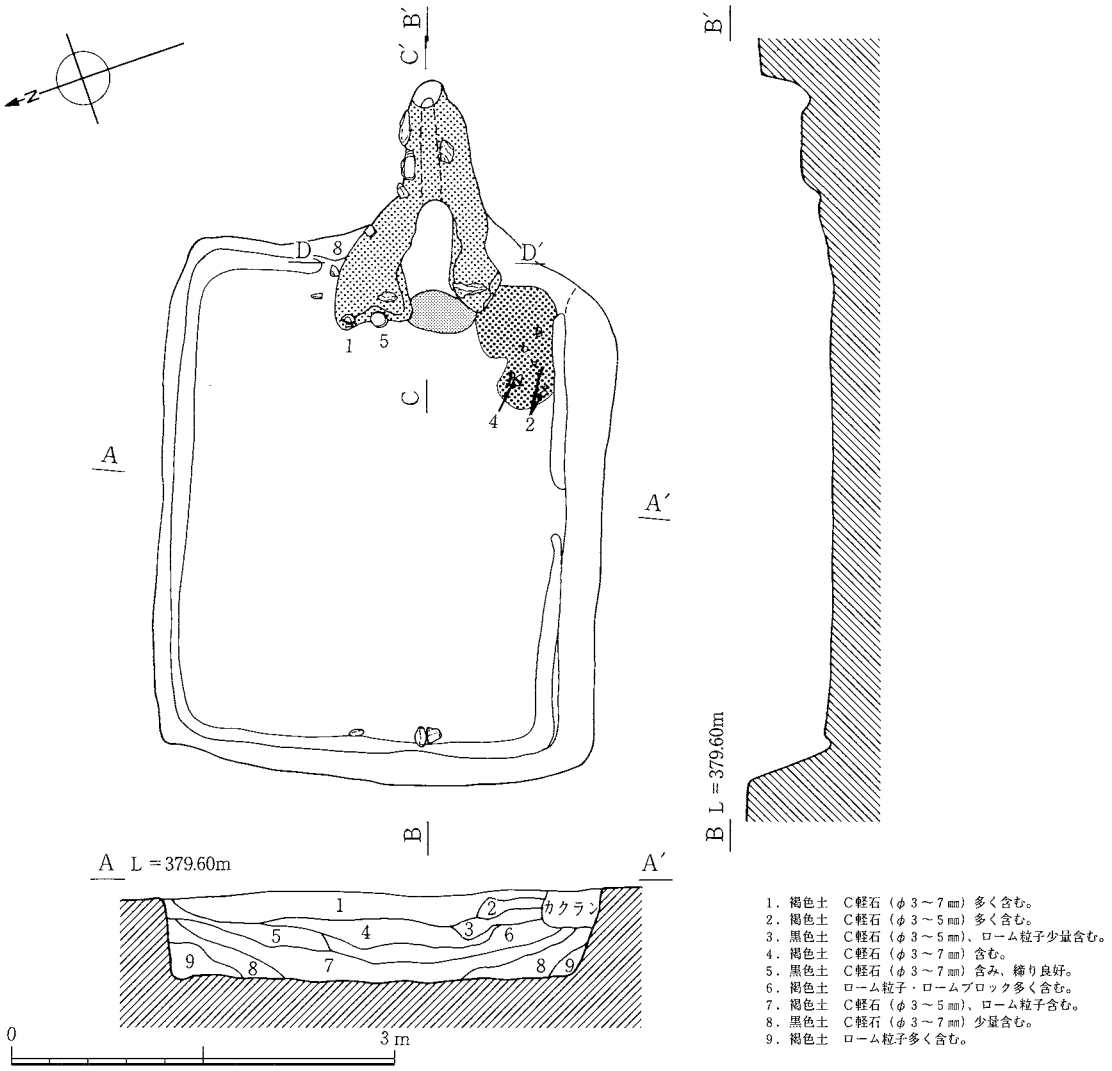
Bj－77グリッドに位置し、主軸はＮ－32°－Ｅを指向する。**形態**　均整のとれた長方形を呈する。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.55ｍ×短軸長3.12ｍを測り、床面積は約11.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　北壁の東寄りに付設する。燃焼部の中心は壁と壁を結んだライン上にあり、袖は粘土を主体とする混和土により構築されている。煙道部は先端が調査区外に延びており、「Ｖ」字形状に壁外に掘り込み、やや急な角度で立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　北東隅を除き全周し、端部の一方は貯蔵穴に連結する。断面形は幅６～16cm・深さが５～10cmの「Ｕ」字形状となる。**貯蔵穴**　北東隅に位置する。長軸長62cm・短軸長50cm・深さ62cmの不整円形を呈し、断面形は柱穴状である。**遺物**　土師器・須恵器が床面よりやや浮いた状態で出土している。

第25表　13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(15.2) 底径 (9.0) 器高	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒、雲母 ②橙色 ③普通	1/5残存
2	土師器 坏	口径(12.6) 底径(10.3) 器高	外面　口縁部横撫で、底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で	①細砂粒、白色粒、雲母 ②明赤褐色 ③普通	1/2残存
3	須恵器 蓋	口径 14.4 摘み　3.0 器高　3.0	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形、天井部に摺った痕跡と底径8.6cmの坏の重ね焼き痕	①細・粗砂粒、白色粒、小礫 ②灰黄～灰色 ③還元	5/6残存 内面に自然釉 摘みに朱墨痕
4	須恵器 蓋	口径 16.6 摘み　1.4 器高　4.1	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②灰オリーブ色	ほぼ完形
5	須恵器 坏	口径 12.8 底径　6.9 器高　3.7	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	2/3残存
6	須恵器 坏	口径(12.6) 底径 (8.7) 器高 (3.3)	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後周辺部撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰オリーブ色 ③還元	3/4残存 外面に自然釉
7	須恵器 坏	口径(12.6) 底径　7.3 器高 (3.3)	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り後右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒、小礫　②灰色 ③還元	1/3残存
8	須恵器 高台付椀	口径 11.7 底径　7.7 器高　4.7	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒、小礫　②灰色 ③還元	ほぼ完形
9	須恵器 盤	口径(22.6) 底径 17.4 器高　4.4	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒　②灰色 ③還元	1/2残存
10	土師器 甕	口径 20.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、同下半斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で	①細・粗砂粒 ②褐灰色 ③普通	口～胴部下位 1/4残存
11	須恵器 甕	口径 底径 器高	外面　轆轤整形 内面　轆轤整形、頸部横位篦撫で	①細・粗砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	頸部1/6残存 外面に自然釉
12	土師器 鉢	口径(24.2) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部縦位篦撫で	①細・粗砂粒、雲母 ②にぶい褐色 ③普通	口～胴部中位 1/4残存



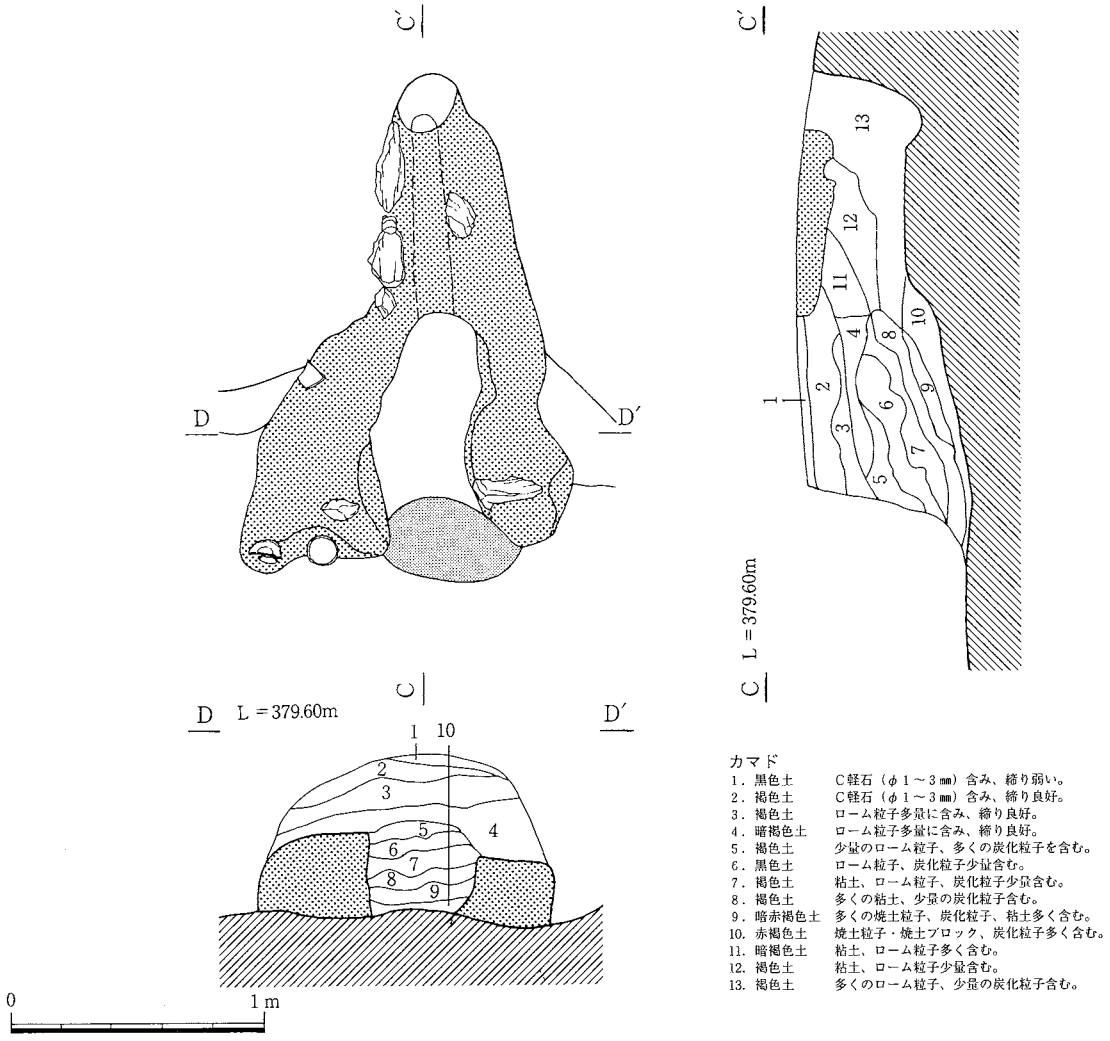
第42図　13号住居跡出土遺物



第43図　14号住居跡

14号住居跡　（第43～45　表26・27　図版3－6・14・15）

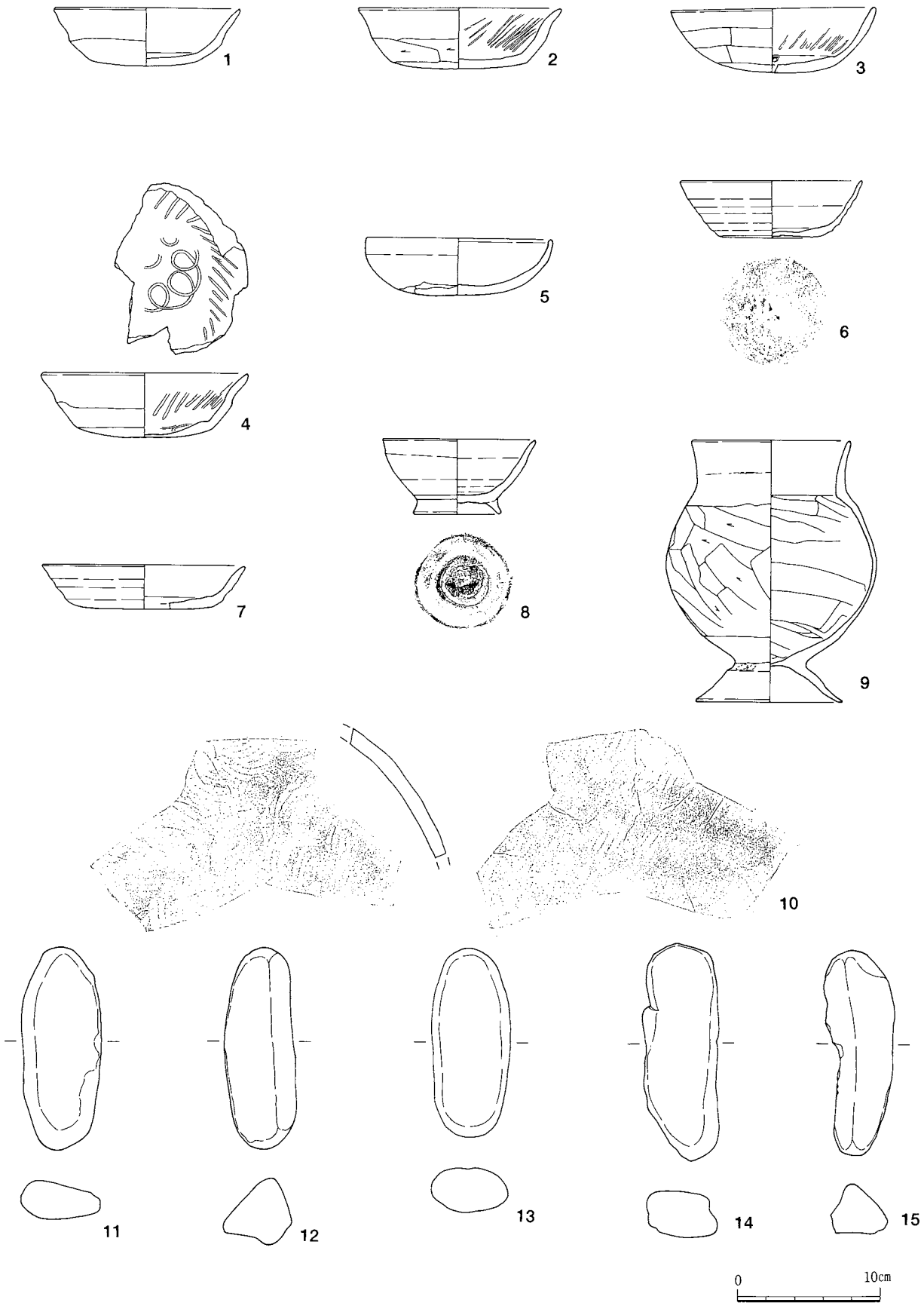
Bk－76・77グリッドに位置し、主軸はN－115°－Eを指向する。形態　長方形を基調とし、南東隅は隅丸となる。規模　床面の中軸線上で長軸長3.60ｍ×短軸長2.95ｍを測り、床面積は約10.6㎡である。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマド　東壁中央の南寄りに位置する。燃焼部は壁を幅125㎝・長さ40㎝の長方形に掘り込み、そこより粘土と石材により構築された袖が住居内まで延びる。そのため燃焼部の中心は壁と壁を結んだライン上となり、焚口部の両側には立石が設置されている。煙道部は燃焼部との境に段を有した後、水平に93㎝程溝状に延び、先端でほぼ直立して立ち上がり、壁の上部には石材が貼られている。床面　ほぼ平坦で、住居南東隅の床面直上には焼土が存在する。壁溝　ほぼ全周するが、東壁のカマド周辺と南壁の中央部で切れている。断面形は幅6～20㎝・深さ3～6㎝の「U」字形状を呈する。遺物　土師器・須恵器・石製品が6・7層を中心に包蔵されていた。



第44図　14号住居跡カマド

第26表　14号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径 12.9 底径 器高 6.4	外面　口縁部横撫で、体部箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で、放射状暗文の痕跡が認められる	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②橙色 ③普通	4/5残存
2	土師器 坏	口径 14.2 底径 9.0 器高 4.3	外面　口縁部横撫で、体部横位箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文	①細・粗砂粒、褐色鉱物粒 ②にぶい橙色 ③普通	1/2残存
3	土師器 坏	口径(14.0) 底径 (8.4) 器高 4.6	外面　口縁部横撫で、体部横位箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①小礫、片岩 ②にぶい橙色 ③普通	1/2残存
4	土師器 坏	口径 14.4 底径 (9.5) 器高 4.5	外面　口縁部横撫で、体部横位箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文、底部螺旋状暗文	①褐色鉱物粒 ②にぶい橙色 ③普通	1/2残存
5	土師器 坏	口径 12.8 底径 器高 4.0	外面　口縁部横撫で、体部撫で、底部箆削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で	①褐色鉱物粒 ②にぶい黄橙色 ③普通	完形
6	須恵器 坏	口径(12.8) 底径 7.2 器高 3.6	外面　体部轆轤整形、底部右回転箆切り後周辺部箆撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②褐灰色 ③還元	2/3残存



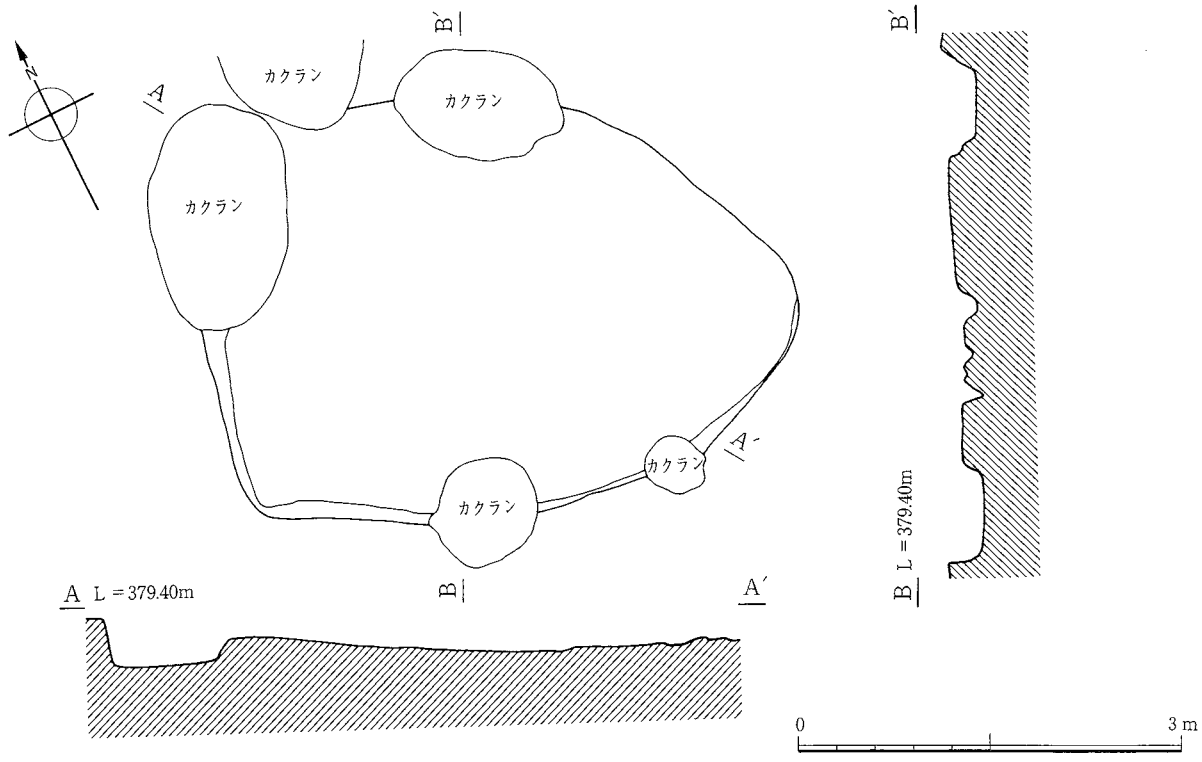
第45図　14号住居跡出土遺物

第27表　14号住居跡出土遺物観察表（２）

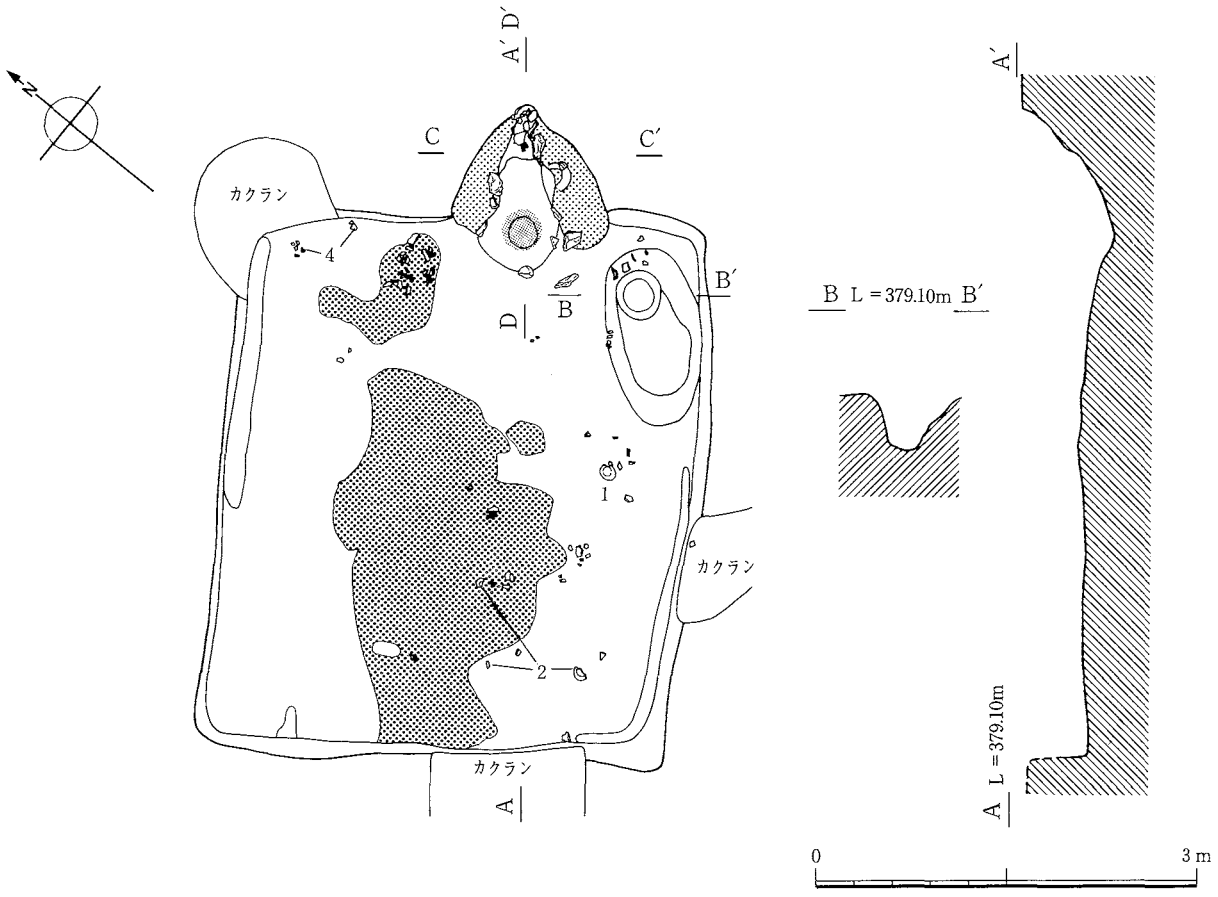
番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
7	須恵器 坏	口径 14.0 底径 9.6 器高 3.1	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	1/5残存
8	須恵器 高台付椀	口径 10.6 底径 6.1 器高 5.3	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①白色粒 ②灰色 ③還元	ほぼ完形
9	土師器 小型台付甕	口径(11.4) 底径 10.0 器高 18.1	外面　口縁部横撫で、胴部上位斜横位篦削り、同下半斜縦位篦削り、台部横撫で 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②にぶい褐色 ③普通	1/2残存
10	須恵器 甕	口径 底径 器高	外面　轆轤整形、平行叩き 内面　轆轤整形、同心円の当て具痕	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②オリーブ灰色 ③還元	胴部破片
11	石	長さ14.2　幅5.6　厚さ2.7			
12	石	長さ14.1　幅4.9　厚さ4.7			
13	石	長さ13.6　幅5.6　厚さ3.2			
14	石	長さ15.0　幅5.3　厚さ3.2			
15	石	長さ14.3　幅4.9　厚さ3.5			

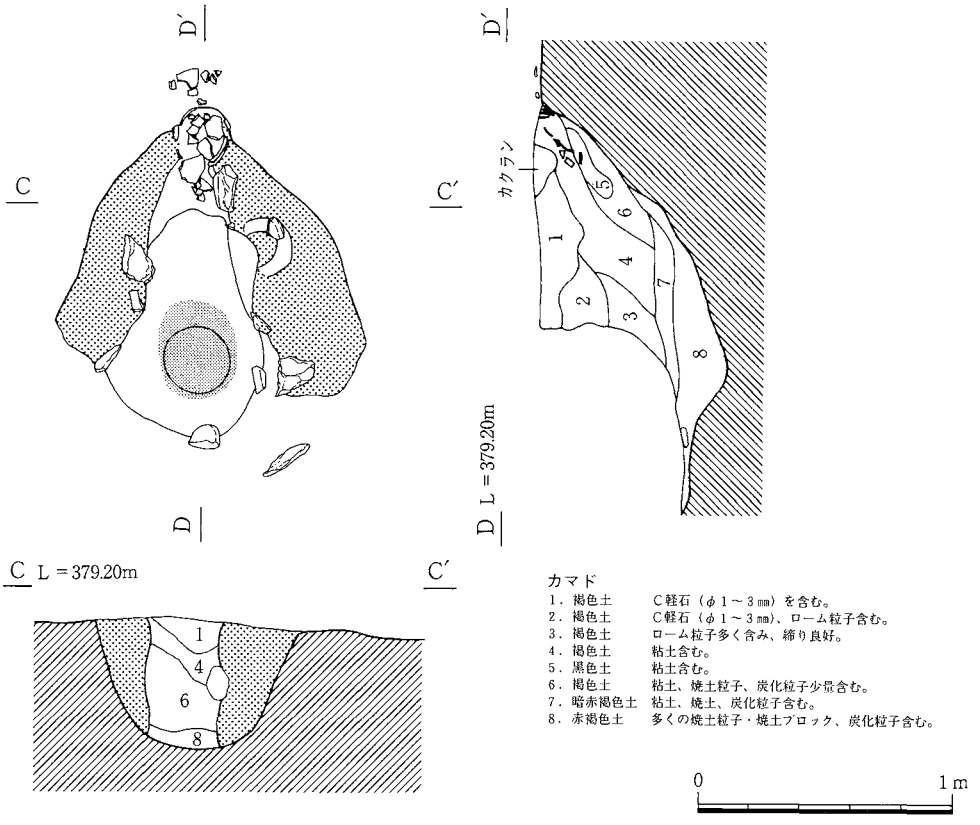
15号住居跡　（第46図）

Bk－77・78グリッドに位置し、南壁と西壁及び床面の一部のみが確認されている。住居跡として取り扱ったが判断材料に乏しく、詳細は不明である。現形状はルーズな台形状を呈し、規模は長軸長4.5ｍ×短軸長3.1ｍを測る。遺物　検出されない。



第46図　15号住居跡

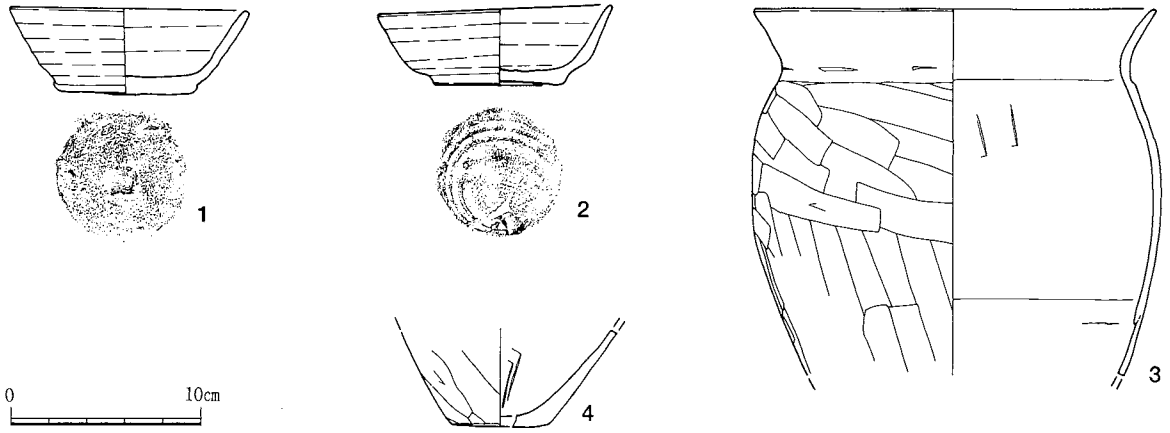




第47図　16号住居跡・カマド

16号住居跡　（第47・48図　表28　図版３－７・15）

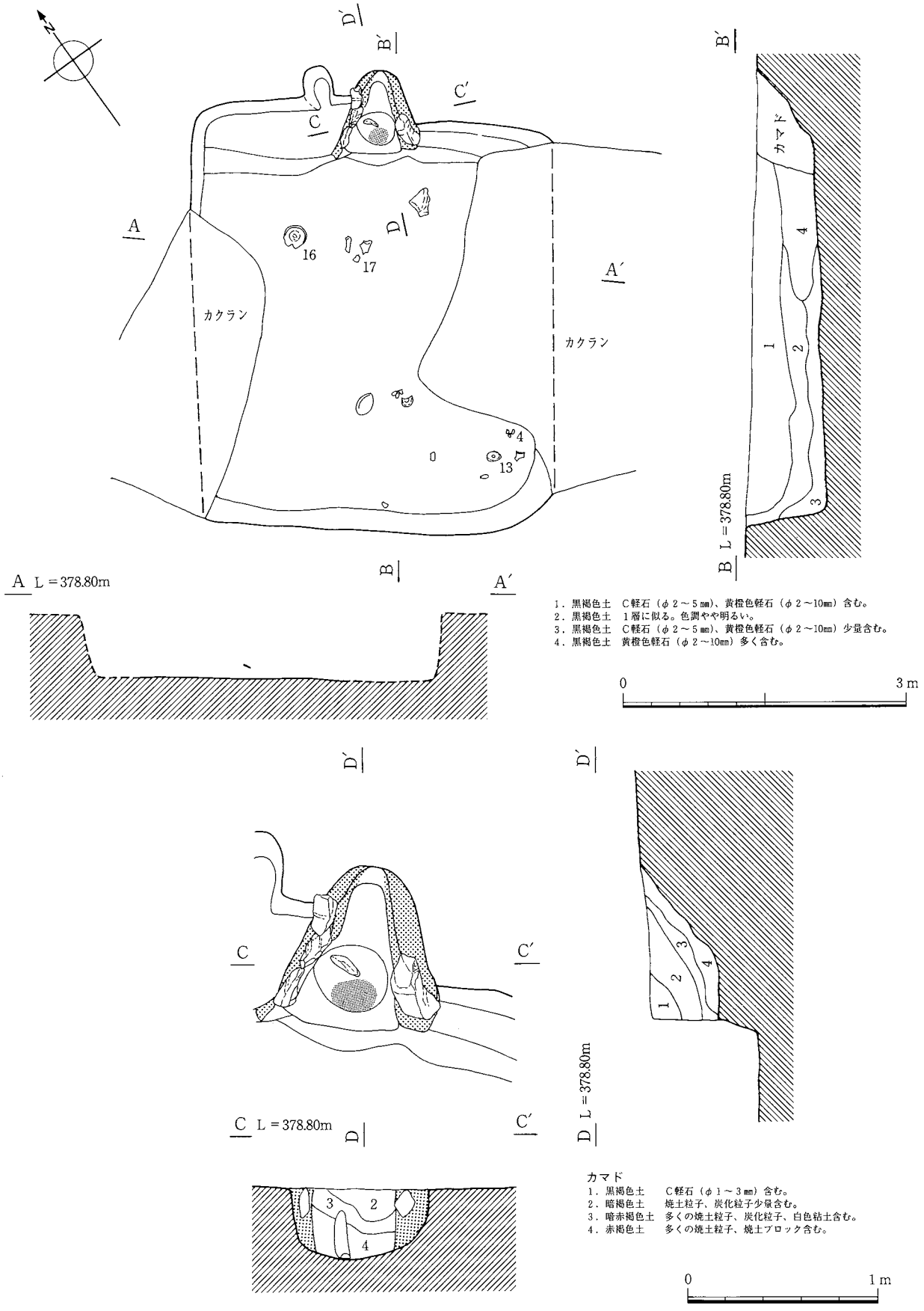
Bk・Bl－78グリッドに位置し、主軸はＮ－48°－Ｅを指向する。**形態**　長方形を基調とする。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.07ｍ×短軸長3.70ｍを測り、床面積は約15.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　北東壁中央のやや東寄りに位置する。燃焼部の中心は壁と壁を結んだライン上に位置し、袖には石材が用いられている。煙道部は幅110cm・長さ90cmの「Ｖ」字形状に壁を掘り込み、やや急な角度で立ち上がり、先端部に底を抜いた土師器甕が設置されている。**床面**　ほぼ平坦であり、住居内中央部の床上を中心に焼土が認められる。**壁溝**　北西壁半部と南東壁半部に存在する。断面形は幅６～18・深さ５～10cmの「Ｕ」字形状を呈する。**貯蔵穴**　北東隅に位置する。平面形は長軸長142cm・短軸長75cmの長楕円形を呈し、深さは43cmである。**遺物**　土師器・須恵器が床上より出土している。



第48図　16号住居跡出土遺物

第28表　16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 坏	口径 12.3 底径 6.9 器高 4.5	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	1/6欠損
2	須恵器 坏	口径 12.3 底径 6.8 器高 4.0	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒　②灰白色 ③還元	口縁一部欠損
3	土師器 甕	口径 21.1 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位斜横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②赤褐色 ③普通	口～胴部中位 2/3残存
4	土師器 甕	口径 底径 5.1 器高	外面　胴部下位斜縦位篦削り、底部篦削り 内面　胴部下位横位篦撫で	①細砂粒、白色粒 ②赤褐色 ③普通	胴部下位3/4 残存



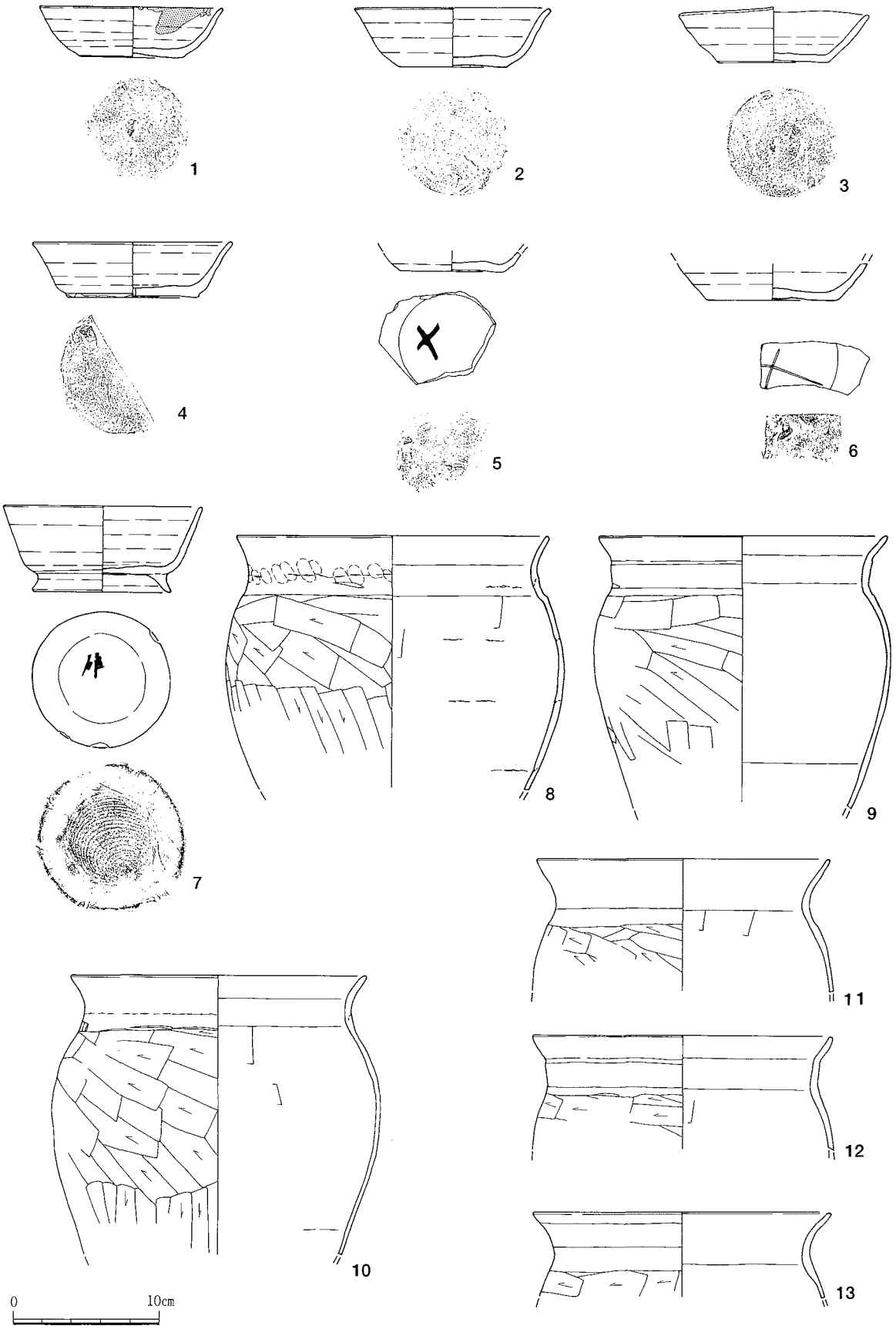
第49図　17号住居跡・カマド

17号住居跡　（第49～51図　表29・30　図版15・16）

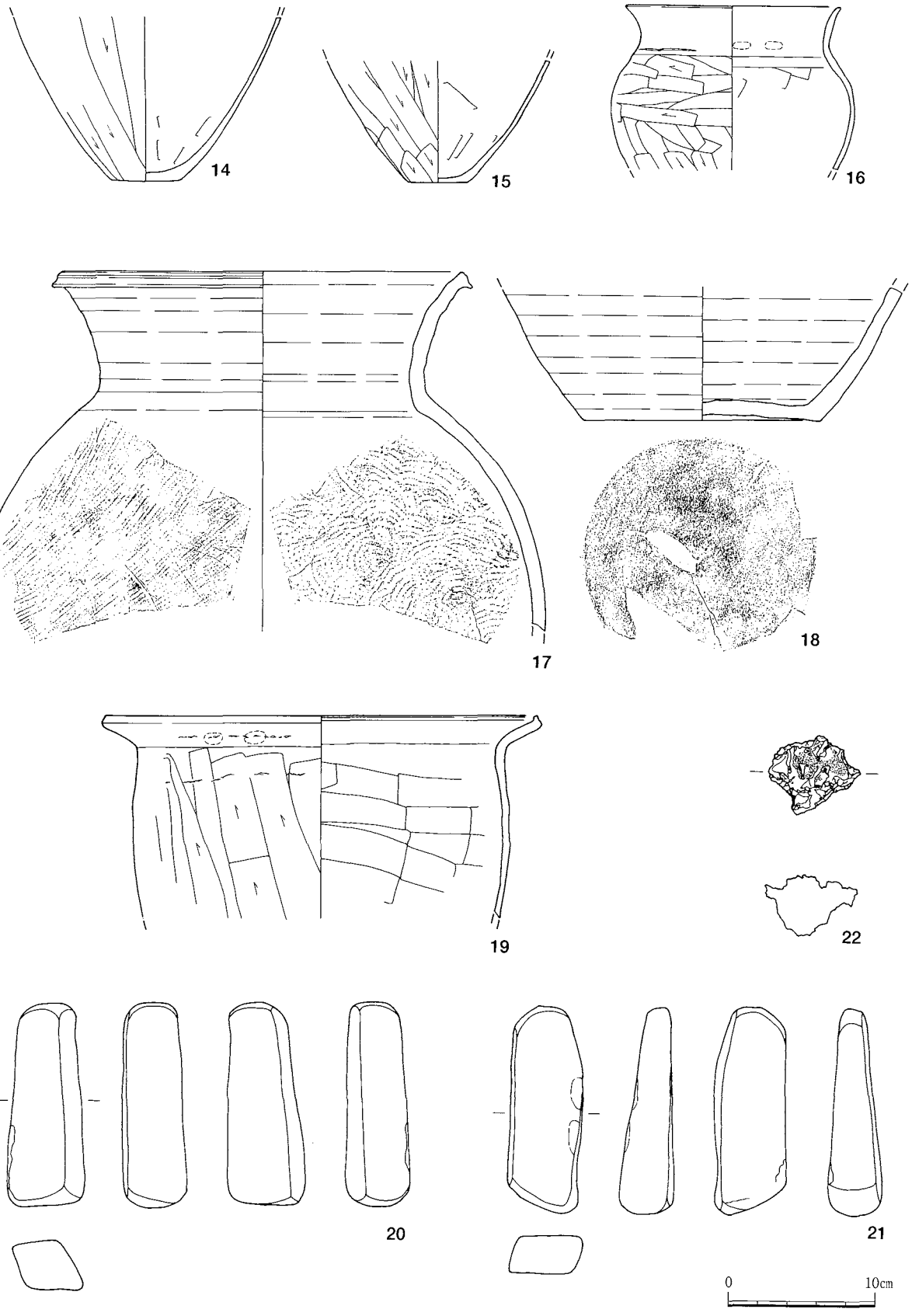
Bp－75グリッドに位置し、主軸はN－32°－Eを指向する。**形態**　東西両壁の大部分を撹乱により削平されているが、長方形を呈すると思われる。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.70ｍ×短軸長推定で3.50ｍを測り、床面積は推定12.9㎡である。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。**カマド**　北壁中央部に位置する。全体の形状は幅95㎝・長さ75㎝の「U」字形状平面となり、燃焼部は壁外に存在する。袖と壁は石材を貼り付けて構築されており、天井部・焚口等も同様であったと思われる。燃焼部の中央部には立石の支脚が存在し、煙道はやや急な角度で立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦である。カマドの両壁には地山を掘り残して、幅22～55㎝、床面よりの高さ20㎝前後を測る、いわゆる棚状遺構が付設されている。**遺物**　土師器・須恵器・石製品・鉄滓が３層の下部を中心に包蔵されていた。

第29表　17号住居跡出土遺物観察表（１）

番号	器種	法量（㎝）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 坏	口径 12.5 底径 7.1 器高 3.4	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	ほぼ完形 内面に油煙付着
2	須恵器 坏	口径 13.4 底径 7.4 器高 4.1	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②暗灰色 ③還元	4/5残存
3	須恵器 坏	口径 12.8 底径 7.4 器高 3.8	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	5/6残存
4	須恵器 坏	口径(13.6) 底径 (8.8) 器高 (3.8)	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	2/5残存
5	須恵器 坏	口径 底径 6.8 器高	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②黒～暗褐色 ③酸化	底部2/3残存 底部外面に墨書
6	須恵器 坏	口径 底径 (8.6) 器高	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元、堅緻	底部1/8残存 底部外面に線刻
7	須恵器 高台付坏	口径(13.5) 底径 9.3 器高 5.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	1/2残存 底部外面に墨書「碓」
8	土師器 甕	口径 21.2 底径 器高	外面　口縁部指頭による押圧整形後横撫で、胴部上位斜横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、褐色鉱物粒、白色粒 ②橙～にぶい橙色 ③普通	口～胴部中位 4/5残存
9	土師器 甕	口径 19.7 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位斜横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②橙色 ③普通	口～胴部中位 1/2残存
10	土師器 甕	口径 20.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位斜横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②橙色 ③普通	口～胴部中位 1/3残存
11	土師器 甕	口径 20.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒 ②にぶい灰褐色 ③普通	口～胴部上位 1/2残存



第50図　17号住居跡出土遺物（１）



第51図　17号住居跡出土遺物（２）

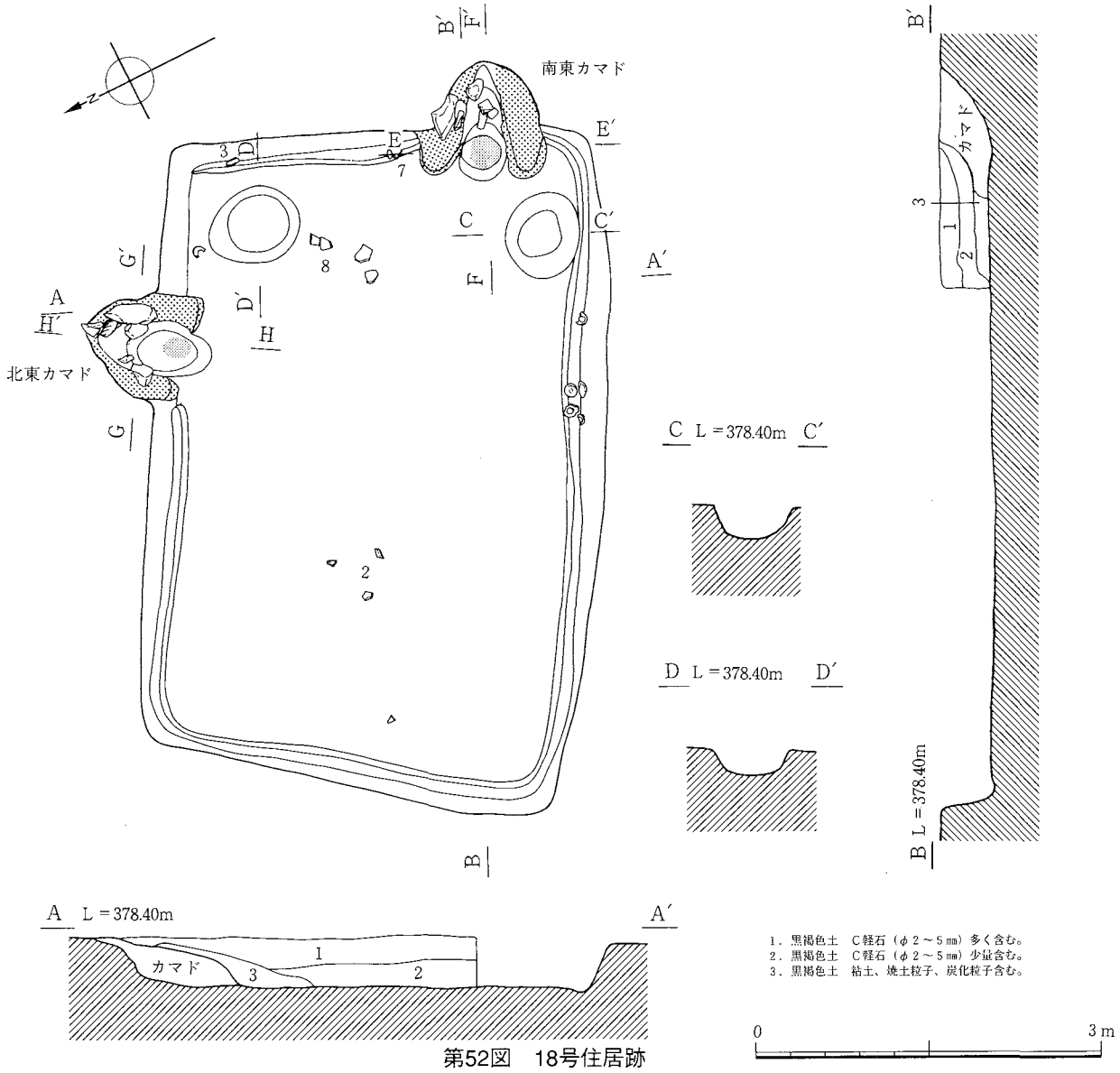
第30表　17号住居跡出土遺物観察表（２）

番号	器　種	法　量（cm）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
12	土師器 甕	口径 20.5 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②にぶい橙色 ③普通	口縁部1/3 残存
13	土師器 甕	口径 20.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①角閃石、白色粒 ②明赤褐色 ③普通	口縁部2/5 残存
14	土師器 甕	口径 底径 4.6 器高	外面　胴部斜縦位篦削り、底部篦削り 内面　胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②にぶい黄橙～橙色 ③普通	胴部下位2/3 残存
15	土師器 甕	口径 底径 4.0 器高	外面　胴部斜縦位篦削り、底部篦削り 内面　胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒 ②褐～橙色 ③普通	胴部下位1/2 残存
16	土師器 小型甕	口径 14.6 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、角閃石、白色粒 ②橙～黒褐色 ③普通	口～胴部中位 2/5残存
17	須恵器 甕	口径(27.0) 底径 器高	外面　轆轤整形、平行叩き 内面　轆轤整形、同心円の当て具痕	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒　②灰白色 ③還元	口～胴部上位 1/5残存
18	須恵器 甕	口径 底径 16.0 器高	外面　轆轤整形、胴部平行叩き後回転撫で、底部撫で 内面　胴部轆轤整形、底部指頭痕	①細砂粒 ②灰～灰白色 ③還元	底～胴部下位 残存
19	土師器 甑	口径 29.3 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、片岩、白色粒 ②にぶい橙色 ③普通	口～胴部中位 1/4残存
20	石製品 砥石	長　13.7 幅　3.5 厚　3.7			
21	石製品 砥石	長　13.9 幅　4.8 厚　3.7			
22	鉄　滓	長　6.3 幅　4.9 厚　4.1			

18号住居跡　（第52～54図　表31・32　図版４－１・16）

Bo－76グリッドに位置し、北東壁に付設されたカマド中軸線はN－125°－Eを指向する。**形態**　北東壁辺に比して南西壁辺がやや長いため、略台形状となる。**規模**　床面の中軸線上で長軸長5.12ｍ×短軸長3.31ｍを測り、床面積は約16.9㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　北東壁の東寄りと南東壁の南寄りに２基付設されている。北東壁のカマドは壁外に掘り込まれており、全体の平面形状は幅70cm・長さ83cmの半円形を呈する。燃焼部は壁外に存在し、煙道部はやや急な角度で立ち上がる。燃焼部と煙道部の壁には石材が貼りつけられており、天井・焚口は石材が用いられていたと思われる。南東壁のカマドの燃焼部は壁と壁を結んだライン上に位置し、袖と壁は石材により構築されている。煙道部は幅76cm・長さ38cmの半円形に壁を掘り込み、やや急な立ち上がりとなる。**床面**　ほぼ平坦である。**壁溝**　北東壁隅を除き、ほぼ全周する。断面形は幅５～15cm・深さ４cmの「U」字形を呈する。**貯蔵穴**　２基ともカマドに向かって右側に付設されている。北東壁隅の貯蔵穴は長軸長55cm・短軸長45cmの楕円形平面を有し、断面形は深さが14cmの鍋底状を呈する。南東壁隅の貯蔵穴は長軸長49cm・短軸長44cmのほぼ円形平面を有し、断面形は深さが16cmの鍋底状

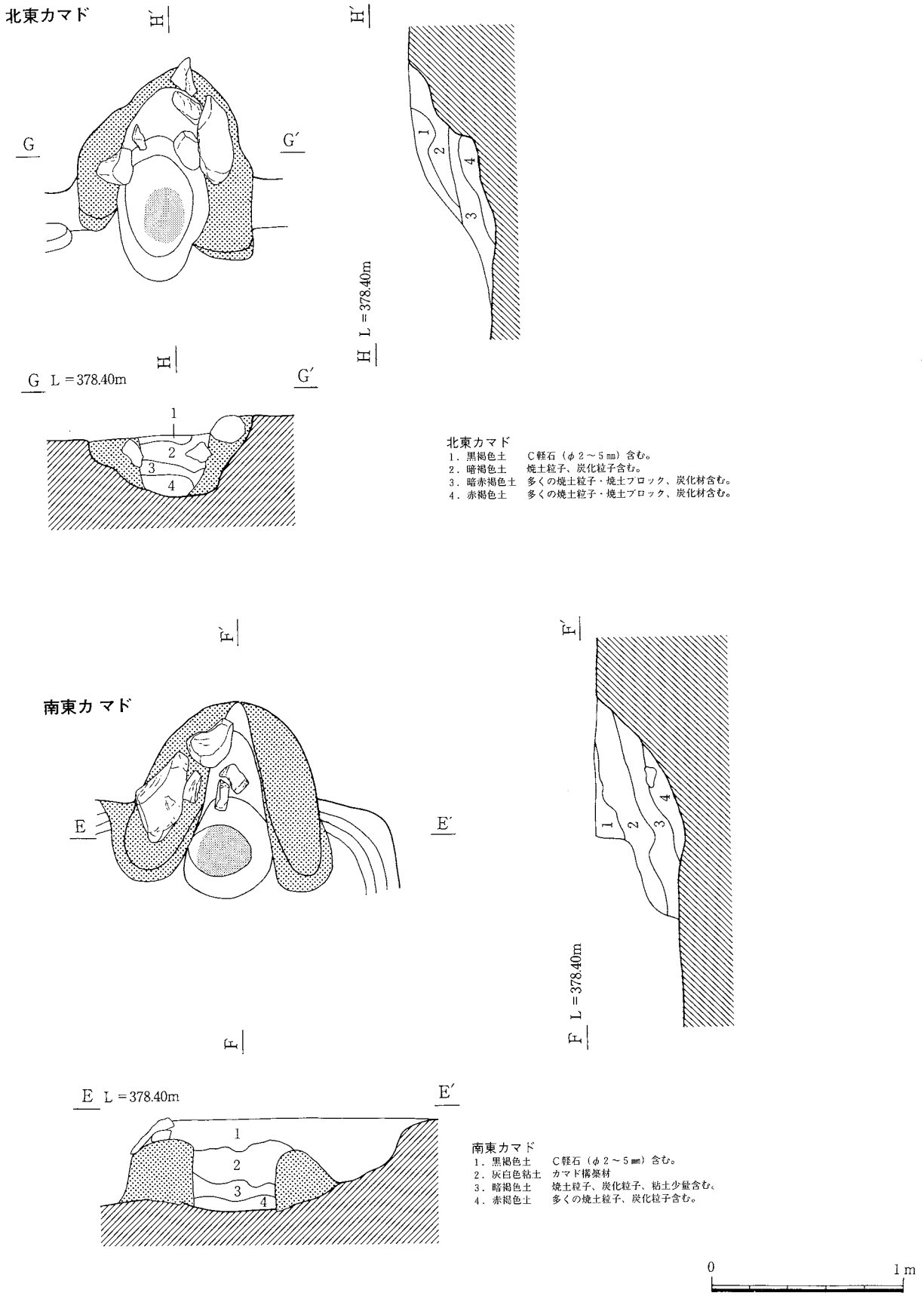
を呈する。遺物　土師器・須恵器が検出されている。南西の壁際には浮いた状態で須恵器坏がまとまって出土した。



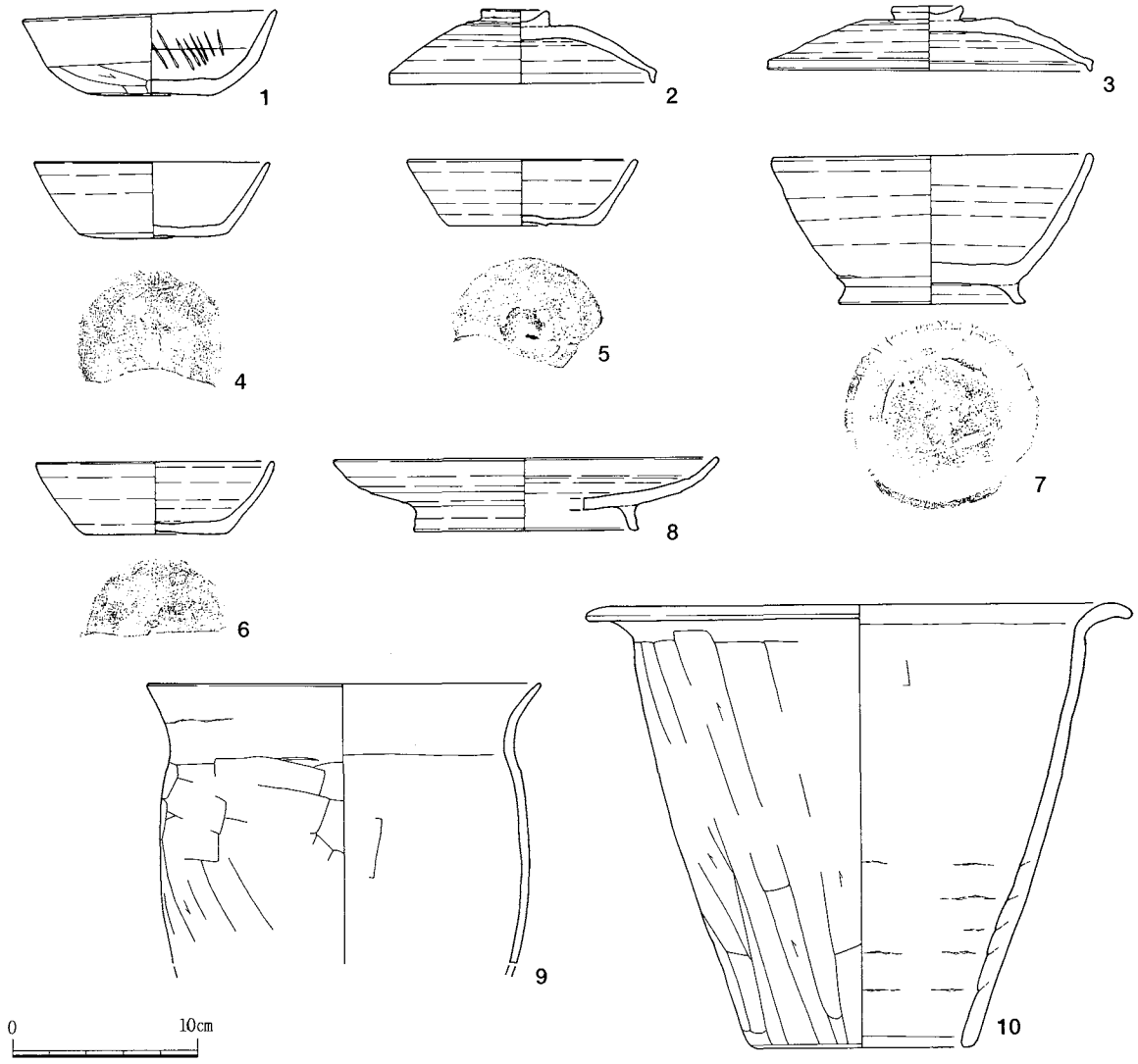
第52図　18号住居跡

第31表　18号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径 13.6 底径 6.8 器高 4.3	外面　口縁部横撫で、体部斜横位篦削り、底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状篦研磨	①粗砂粒、片岩、褐色鉱物粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	ほぼ完形
2	須恵器 蓋	口径 14.2 摘み 3.6 器高 4.0	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①粗砂粒、白色粒、黒色鉱物粒　②灰色 ③還元	ほぼ完形
3	須恵器 蓋	口径 17.3 摘み 3.7 器高 3.4	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	ほぼ完形
4	須恵器 坏	口径 12.6 底径 8.0 器高 4.1	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②暗灰色 ③還元	2/3残存



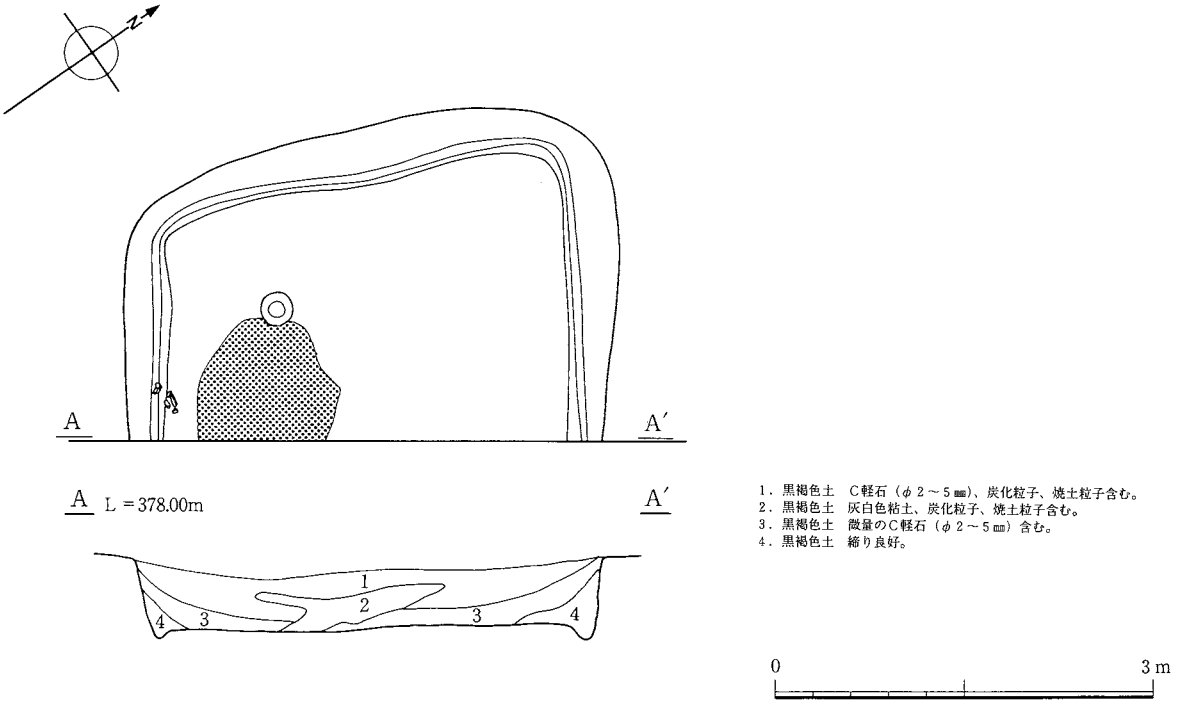
第53図　18号住居跡カマド



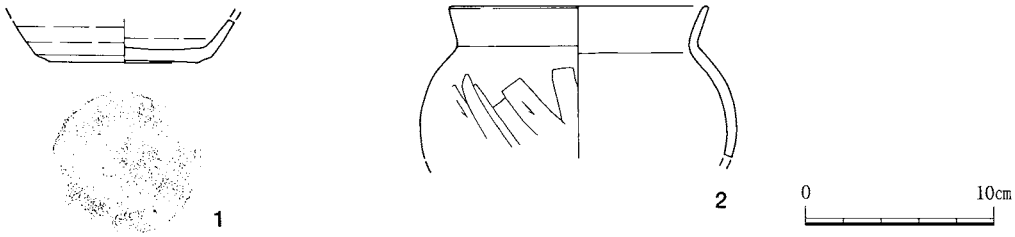
第54図　18号住居跡出土遺物

第32表　18号住居跡出土遺物観察表（２）

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
5	須恵器 坏	口径 18.5 底径 (8.1) 器高 3.6	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元、堅緻	1/2残存
6	須恵器 坏	口径 12.7 底径 7.8 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部回転篦切り後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②暗灰色 ③還元、堅緻	1/2残存
7	須恵器 高台付椀	口径 17.0 底径 9.9 器高 8.0	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元、堅緻	5/6残存
8	須恵器 皿	口径(20.8) 底径(11.9) 器高 (3.9)	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元、堅緻	1/8残存
9	土師器 甕	口径 21.2 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、同中位斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で後撫で	①細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ②赤褐色 ③普通	口～胴部中位 1/2残存
10	土師器 甑	口径 27.2 底径(11.4) 器高 23.9	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で、指撫で	①細・粗砂粒、片岩、白色粒 ②赤褐色 ③普通	1/4残存



第55図　19号住居跡



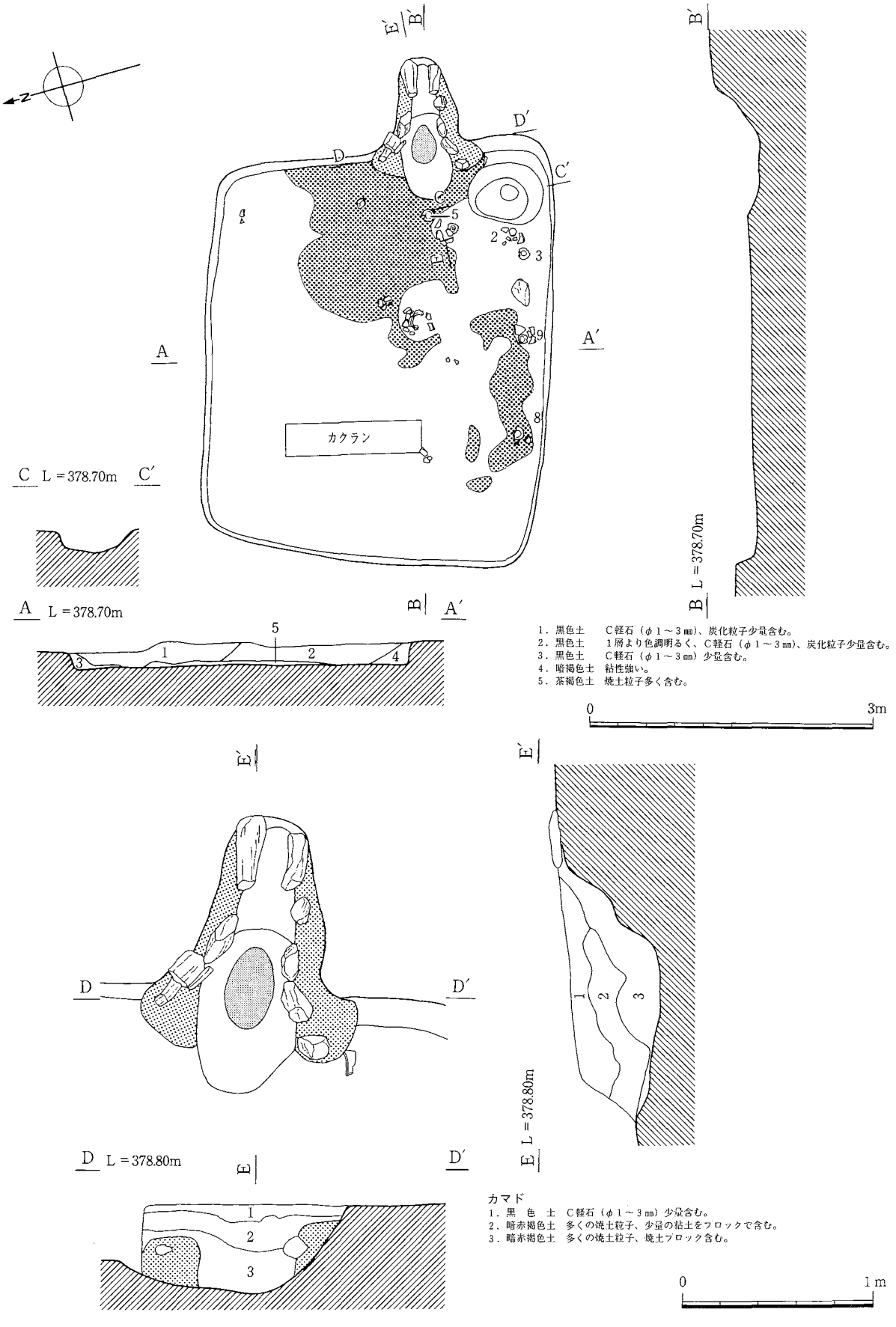
第56図　19号住居跡出土遺物

19号住居跡　（第55・56図　表33　図版16）

Bn・Bo－77グリッドに位置し、住居の南東部分は未調査区に延びるため詳細は不明である。**形態**　方形基調と思われる。**規模**　床面中軸線上で、長軸長3.30ｍ・現短軸長2.0ｍを測る。カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。**床面**　ほぼ平坦であり、住居南部中央の床面上には焼土が認められる。**壁溝**　検出された範囲内では全周する。壁溝の断面形は幅が５～15cm・深さが６cmの「U」字形状を呈する。**遺物**　土師器・須恵器が出土した。

第33表　19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 坏	口径 底径 7.8 器高	外面　体部轆轤整形、底部切り離し後右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	底部のみ残存
2	土師器 小型甕	口径 13.4 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部撫で	①細砂粒、雲母、白色粒 ②橙色 ③普通	口～胴部中位 1/6残存



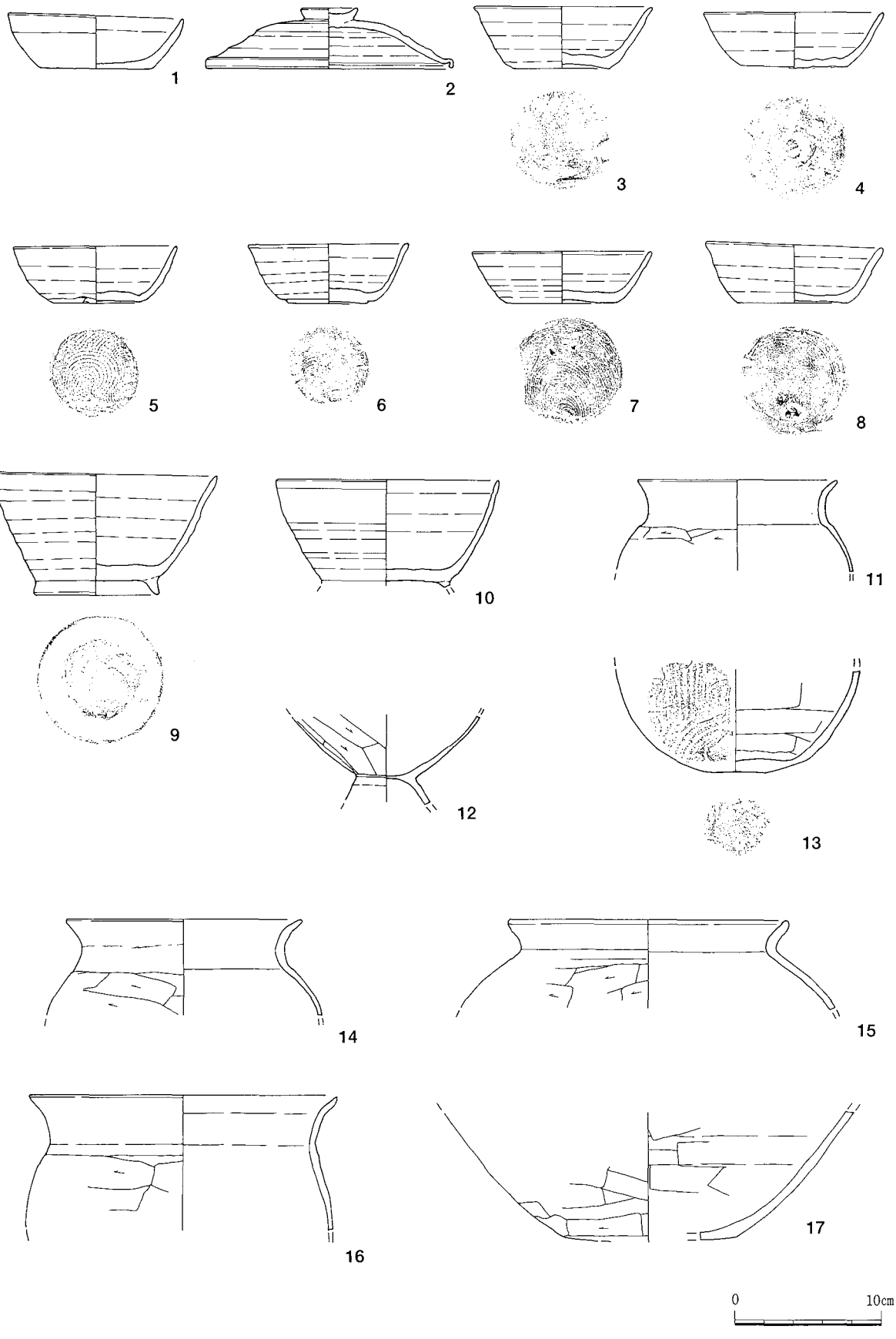
第57図　20号住居跡・カマド

20号住居跡　（第57・58図　表34・35　図版16・17）

Bp－78グリッドに位置し、主軸はN－113°－Eを指向する。**形態**　東壁・西壁・北壁の各辺の長さがほぼ等しいのに対し、南壁がやや長くなるため台形状となる。設計の段階において、方形を意図したと思われる。柱穴・壁溝は検出されていない。**規模**　床面の中軸線上で長軸長4.15ｍ×短軸長3.50ｍを測り、床面積は約14.5㎡である。**カマド**　南東壁中央のやや南寄りに付設される。燃焼部は壁と壁を結んだライン上に位置し、煙道部は壁外に大きく延びる。燃焼部から煙道部にかけての壁体には石材が用いられており、天井部・焚口部も石材を主体に構築されていると考えられる。煙道部は幅48cm・長さ60cmの「U」字形平面を呈し、やや急に立ち上がる。**床面**　ほぼ平坦であり、カマドの前面と南壁付近を中心に、床面直上に厚さ２～５cm程の焼土層が乗っていた。**貯蔵穴**　南東隅に位置する。平面形状は長軸長53cm・短軸長45cmの楕円形を呈し、断面形は深さが15cmの皿状を呈する。**遺物**　カマドの前面と貯蔵穴周辺の床上を中心に、土師器・須恵器が出土した。

第34表　20号住居跡出土遺物観察表（１）

番号	器種	法量（cm）	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(12.0) 底径 (7.5) 器高 (3.8)	外面　器面が溶けて調整は不明瞭 内面　器面が溶けて調整は不明瞭	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③軟質	1/2残存
2	須恵器 蓋	口径(16.8) 摘み 3.8 器高 3.8	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、小礫、白色粒 ②灰色 ③還元	1/2残存
3	須恵器 坏	口径 12.3 底径 6.6 器高 4.2	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り後周辺部篦撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②黒～灰白色 ③還元	口縁一部欠損
4	須恵器 坏	口径 12.2 底径 7.2 器高 3.8	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、小礫 ②灰白色 ③還元	7/8残存
5	須恵器 坏	口径 11.2 底径 5.8 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り後周辺部篦撫で 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②黄灰色 ③還元	口縁一部欠損
6	須恵器 坏	口径 10.9 底径 5.4 器高 3.5	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ②にぶい褐色 ③還元	完形
7	須恵器 坏	口径(12.2) 底径 (7.6) 器高 3.5	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	2/3残存
8	須恵器 坏	口径 12.0 底径 7.5 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②灰色 ③還元	3/4残存
9	須恵器 高台付椀	口径 15.7 底径 8.4 器高 8.3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、小礫、黒色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	4/5残存



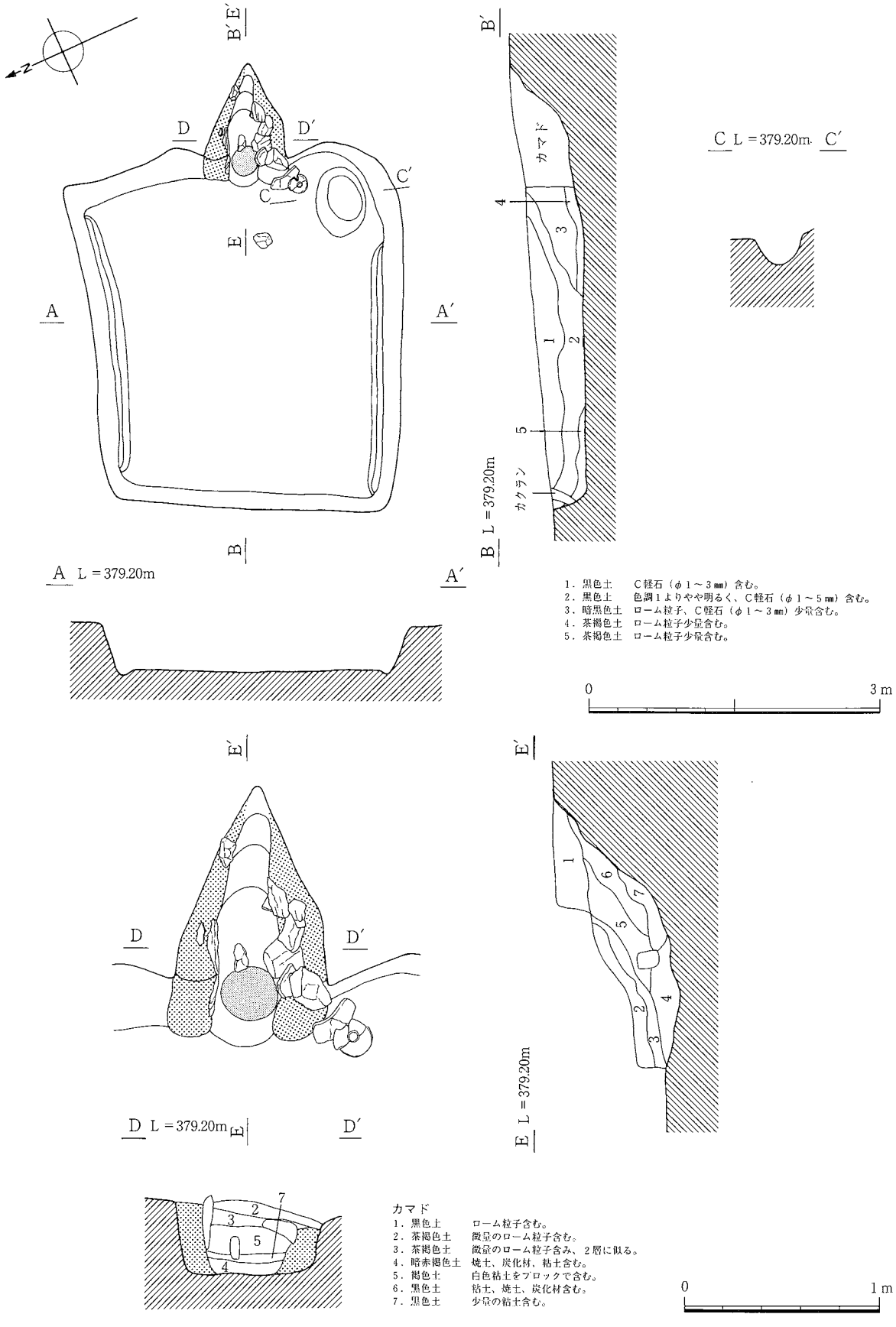
第58図　20号住居跡出土遺物

第35表　20号住居跡出土遺物観察表（２）

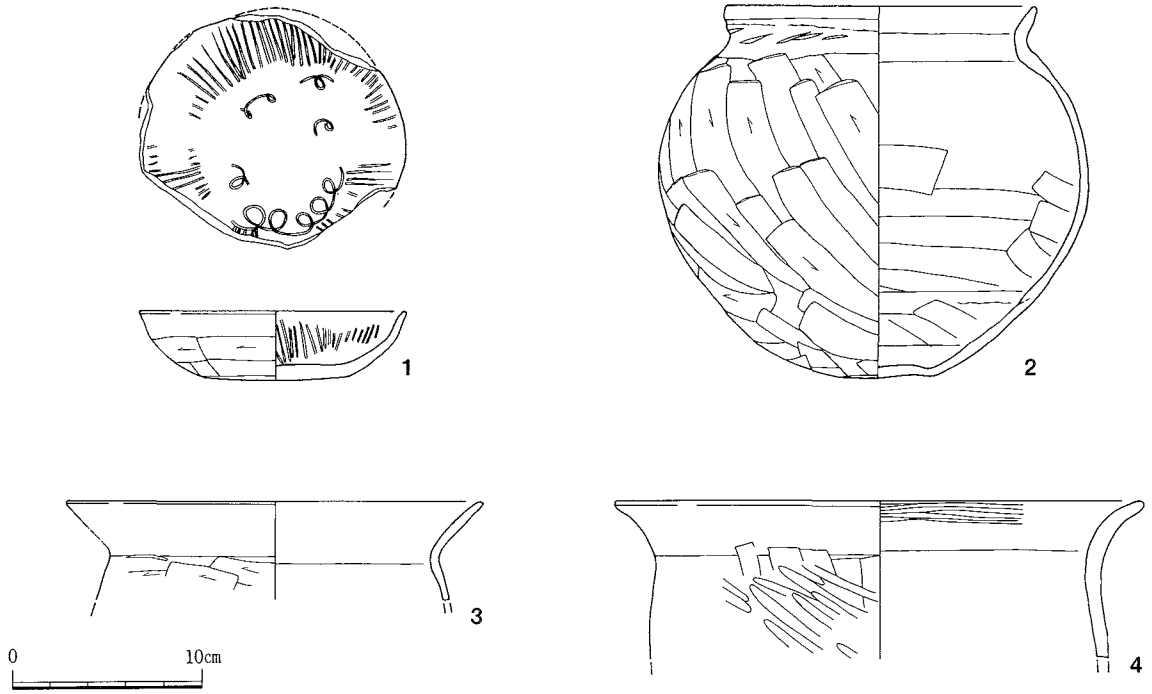
番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
10	須恵器 高台付椀	口径 16.0 底径 器高	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②灰色 ③還元	1/4残存
11	土師器 小型甕	口径 13.6 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	口～胴部上位 1/2残存
12	土師器 台付甕	口径 底径 器高	外面　胴部斜縦位篦削り、台部横撫で 内面　胴部篦撫で	①細・粗砂粒 ②赤褐色 ③普通	胴部下位残存
13	土師器 小型甕	口径 底径　3.3 器高	外面　５本単位の粗い刷毛目 内面　胴部横位篦撫で 古墳時代前期のものか	①細・粗砂粒、白色粒 ②灰白色 ③良好	胴部1/3残存 底部に木葉痕
14	土師器 甕	口径 16.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②にぶい赤褐色 ③普通	口～胴部上位 1/2残存
15	土師器 甕	口径(25.2) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、雲母、角閃石、石英、小礫　②橙色 ③普通	口～胴部上位 1/10残存
16	土師器 甕	口径 21.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒 ②赤褐色 ③普通	口～胴部上位 3/4残存
17	土師器 甕	口径 底径 11.9 器高	外面　胴部横位篦削り 内面　胴部横位篦撫で	①細・粗砂粒、小礫 ②にぶい赤褐色 ③普通	胴部下位1/4 残存

21号住居跡　（第59・60図　表36　図版４－２・17）

Bo－79グリッドに位置し、主軸はＮ－112°－Ｅを指向する。**形態**　方形を意図して構築されたと思われるが、南東壁辺が長いため台形状となる。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.15ｍ×短軸長2.55ｍを測り、床面積は約8.1㎡である。柱穴は検出されていない。**カマド**　南東壁中央に位置する。カマドは壁外に存在し、全体の平面形状は幅が1.25ｍ・長さ1.30ｍの「Ｖ」字形を呈する。燃焼部には石材が認められ、天井部・焚口部は石材を主体に構築されていたものと思われる。煙道部はやや急な角度で立ち上がる。**床面**　ほぼ水平で、平坦である。**壁溝**　南壁・北壁に巡る。壁溝の断面形は幅７㎝・深さが５㎝の「Ｕ」字形を呈す。**貯蔵穴**　住居南東隅に位置する。平面形は長軸長47㎝・短軸長34㎝の楕円形を呈し、断面形は深さが22㎝の「Ｕ」字形を呈す。**遺物**　土師器が出土した。



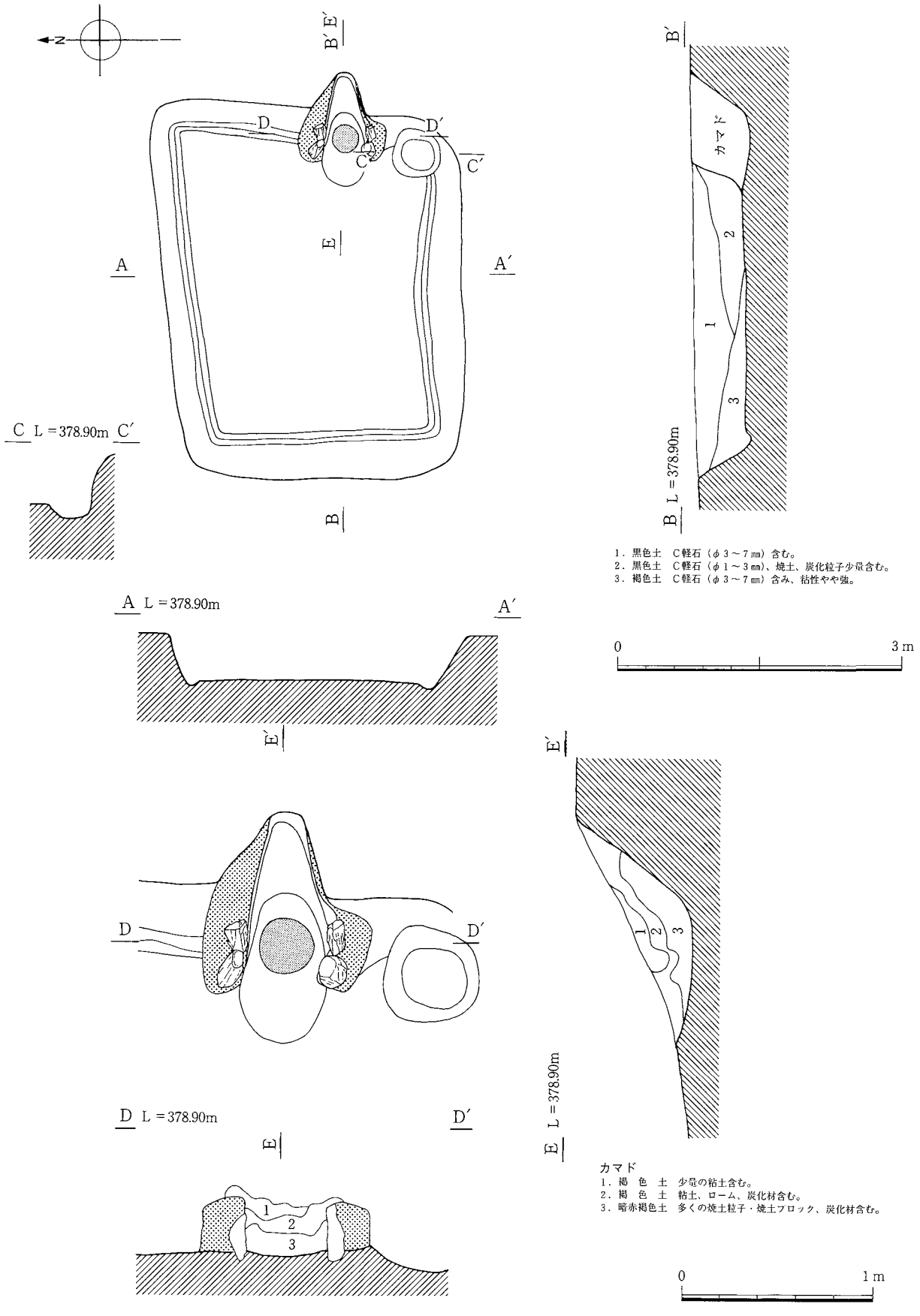
第59図　21号住居跡・カマド



第60図　21号住居跡出土遺物

第36表　21号住居跡出土遺物観察表

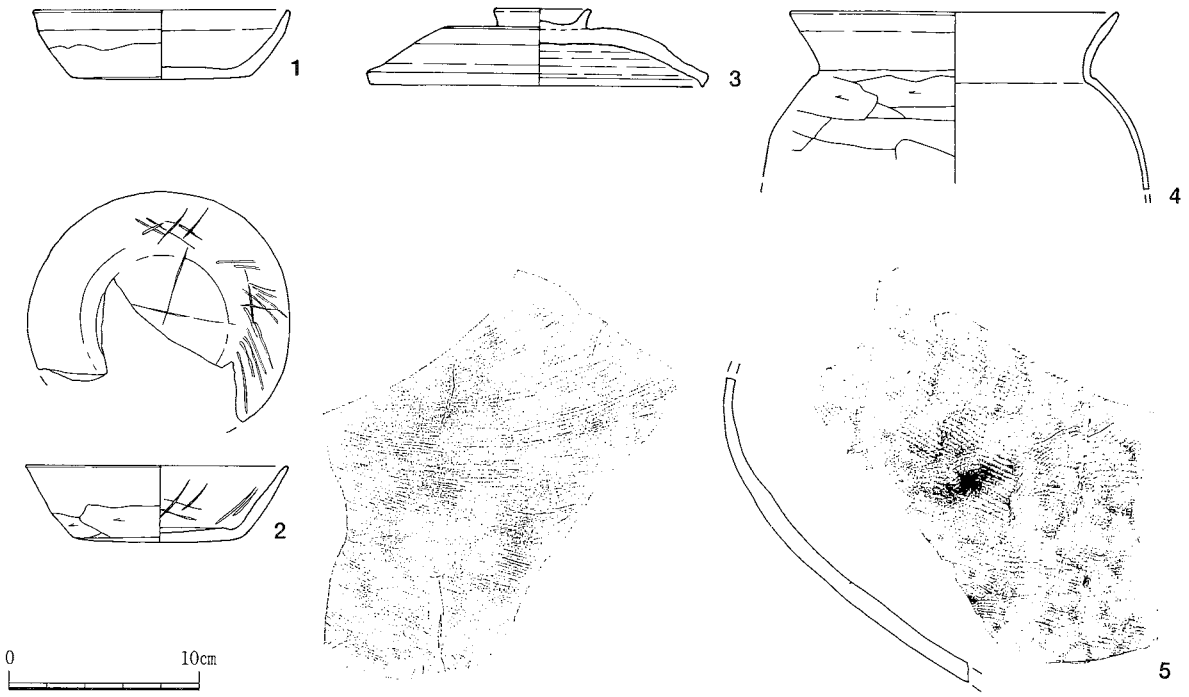
番号	器　種	法　量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備　考
1	土師器 坏	口径(14.0) 底径 7.8 器高 3.6	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り、底部篦削り 内面　撫で後体部放射状、底部螺旋状篦研磨	①細砂粒、石英、小礫、角閃石 ②橙色 ③やや不良	3/4残存
2	土師器 甕	口径 16.4 底径 5.1 器高 19.5	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で後撫で	①細砂粒、白色粒、小礫 ②赤褐色 ③普通	ほぼ完形
3	土師器 甕	口径 21.9 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、白色粒、角閃石 ②にぶい橙色 ③普通	口縁部1/6 残存
4	土師器 甕	口径 28.0 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部斜縦位篦削り後斜横位篦撫で 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①片岩 ②明赤褐～黒色 ③普通	口縁部1/7 残存



第61図　22号住居跡・カマド

22号住居跡　（第61・62図　表37　図版４－３・17）

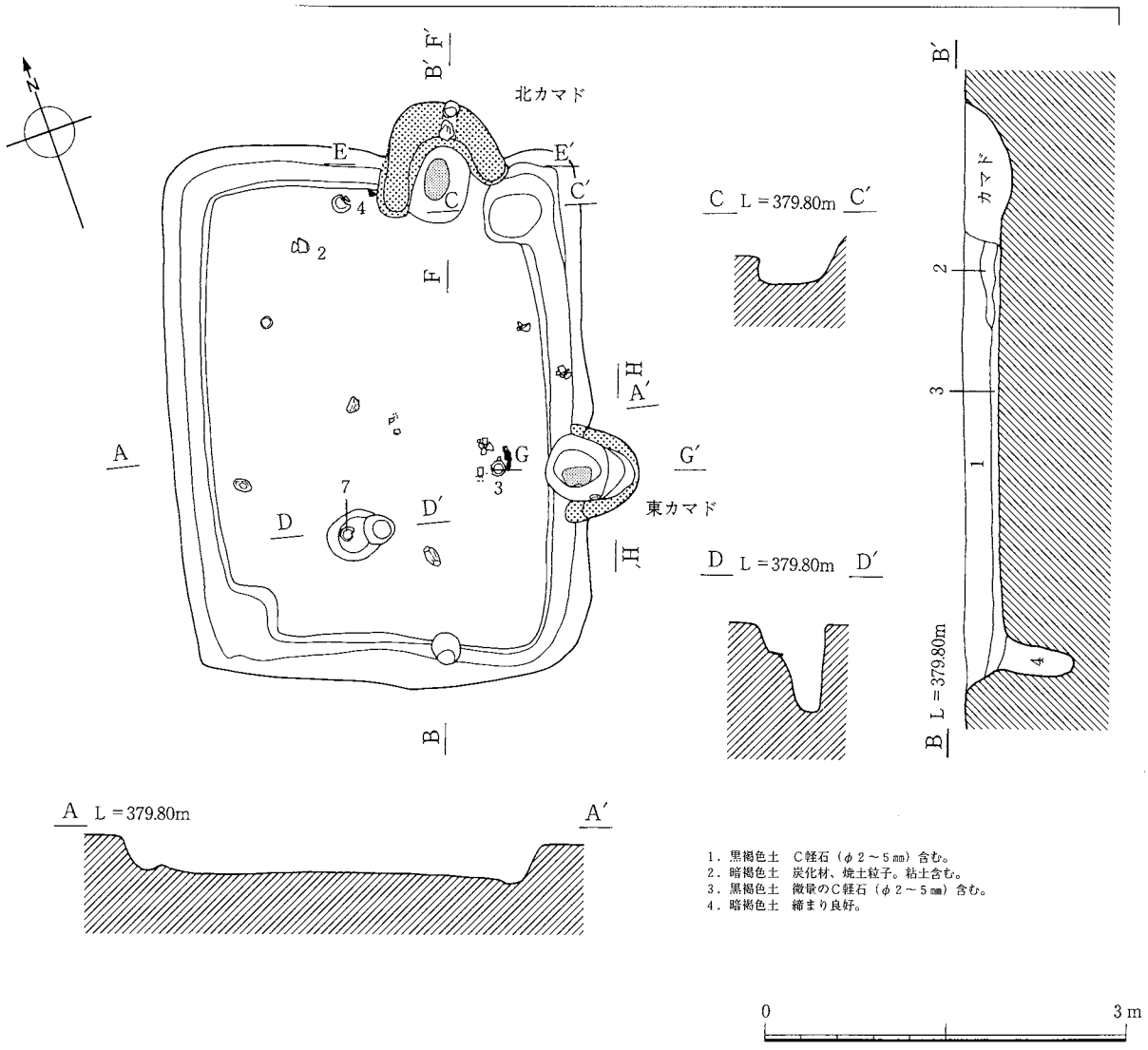
Bo・Bp－78・79グリッドに位置し、主軸は東西軸に一致する。形態　東西に長い長方形を呈するが、北東隅が鋭角となり、台形に近似する。規模　床面の中軸線上で長軸長2.95ｍ×短軸長2.72ｍを測り、床面積は約８㎡である。柱穴は検出されていない。カマド　東壁の南寄りに位置する。燃焼部は住居内に位置し、袖部には立石が認められ、天井部も石材によって構築されていたと思われる。煙道部は幅80cm・長さ52cmの「Ｖ」字形状平面を呈し、急な角度で立ち上がる。床面　ほぼ平坦である。壁溝　ほぼ全周し、断面形は幅10cm・深さ４cmの「Ｕ」字形を呈する。貯蔵穴　東南隅に位置する。平面形状は径35cmのほぼ円形を呈し、断面形は深さ８cmの鍋底状を呈する。遺物　土師器・須恵器が出土している。



第62図　22号住居跡出土遺物

第37表　22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(13.4) 底径 9.5 器高 (3.6)	外面　口縁部横撫で、体部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒、片岩 ②橙色 ③普通	1/2残存
2	土師器 坏	口径 13.6 底径 8.7 器高 4.0	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で後放射状暗文	①細砂粒、褐色鉱物粒、雲母、小礫 ②橙色 ③やや軟質	3/4残存 内面に焼成後の線刻有り
3	須恵器 蓋	口径 17.5 摘み 4.9 器高 4.1	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、白色粒 ②灰白色 ③還元	口縁一部欠損
4	土師器 甕	口径(17.2) 底径 器高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で	①細砂粒、雲母、角閃石 ②赤褐色 ③良好	口～胴部中位 1/4残存
5	須恵器 甕	口径 底径 器高	外面　轆轤整形、平行叩き後篦撫で 内面　轆轤整形、平行の当て具痕	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②灰色 ③還元	胴部破片

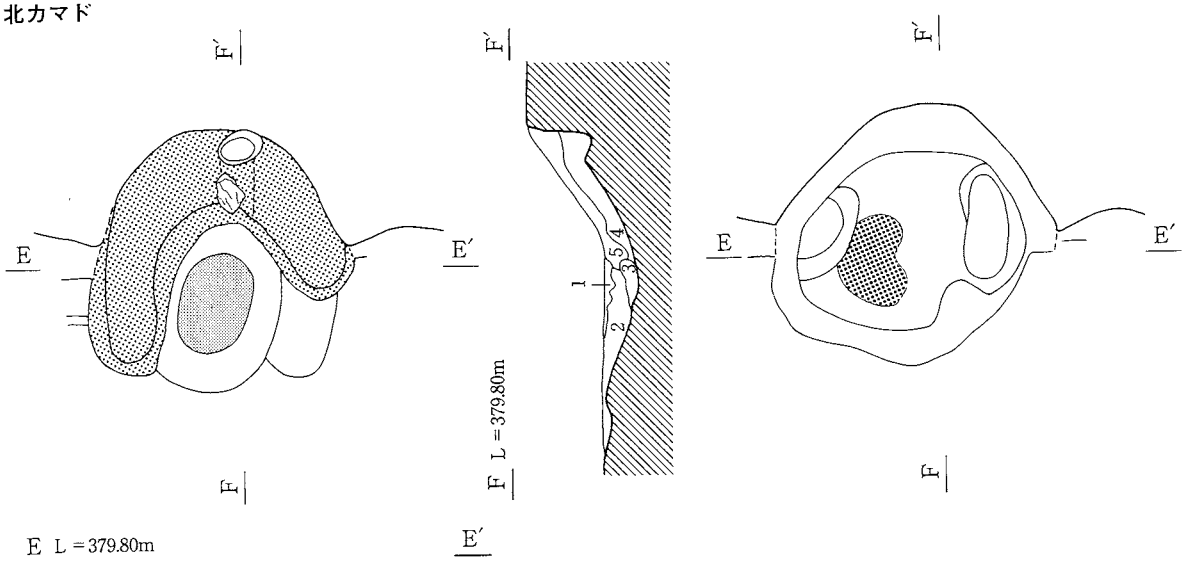


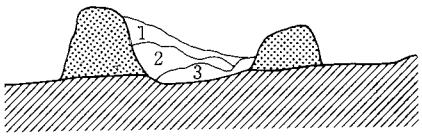
第63図　23号住居跡

23号住居跡　（第63～65図　表38　図版4－4・17）

Bp－80・81グリッドに位置し、北壁に付設されたカマド中軸線はN－13°－Eを指向する。**形態**　長方形を基調とする。**規模**　床面の中軸線上で長軸長3.65ｍ×短軸長2.85ｍを測り、床面積は約10.4㎡である。主柱穴は検出されていない。**カマド**　北壁東寄りと東壁中央やや南寄りに2基が付設されており、北壁のカマドが新しい。北壁のカマドは燃焼部を住居内に有し、袖は一個の石材と粘土を含む暗褐色の混和土により構築され、天井部は遺存している。煙道部は幅75cm・長さ35cmの半円形に壁を掘り込み構築され、立ち上がりは急な角度である。東壁のカマドは燃焼部を住居内に有しており、袖はすでに削平されている。煙道部は幅57cm・長さ40cmの半円形に壁を掘り込み構築され、立ち上がりは急な角度である。**床面**　平坦である。**壁溝**　全周する。断面形は幅14cm・深さ3～15cmの「U」字形を呈する。**貯蔵穴**　北東隅に位置する。平面形状は長軸長40cm・短軸長38cmの隅丸方形を呈し、深さ36cmの鍋底状を呈する。**備考**　住居南部中央の床面と南壁に接してピットが計2基検出されているが住居との関係は不明である。**遺物**　土師器・須恵器が床上を中心に出土している。

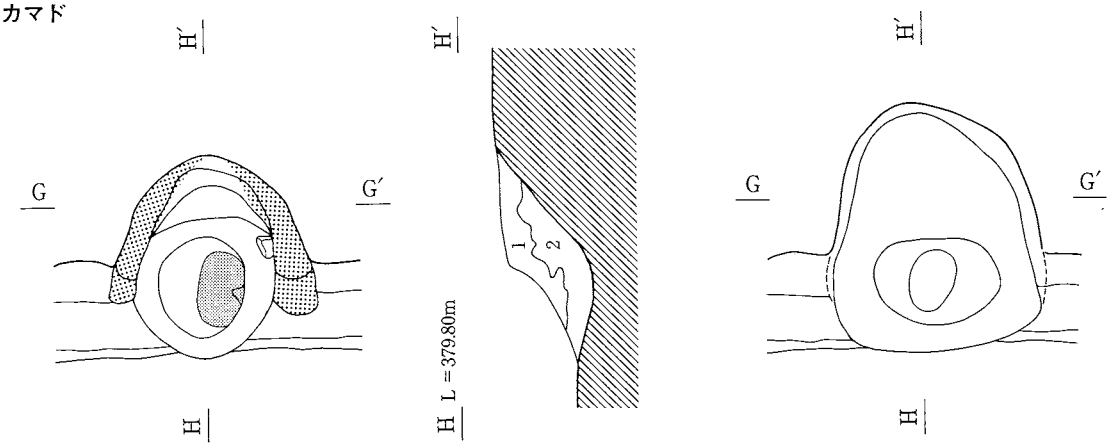
北カマド

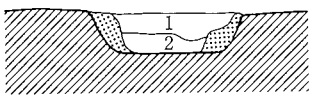




北カマド
1．暗褐色土　粘性やや強い。
2．暗赤褐色土　焼土粒子含み、締り良好。
3．暗赤褐色土　2層に似る。
4．暗赤褐色土　多くの焼土粒子、焼土ブロック含む。
5．黒色土　多くの粘土含む。

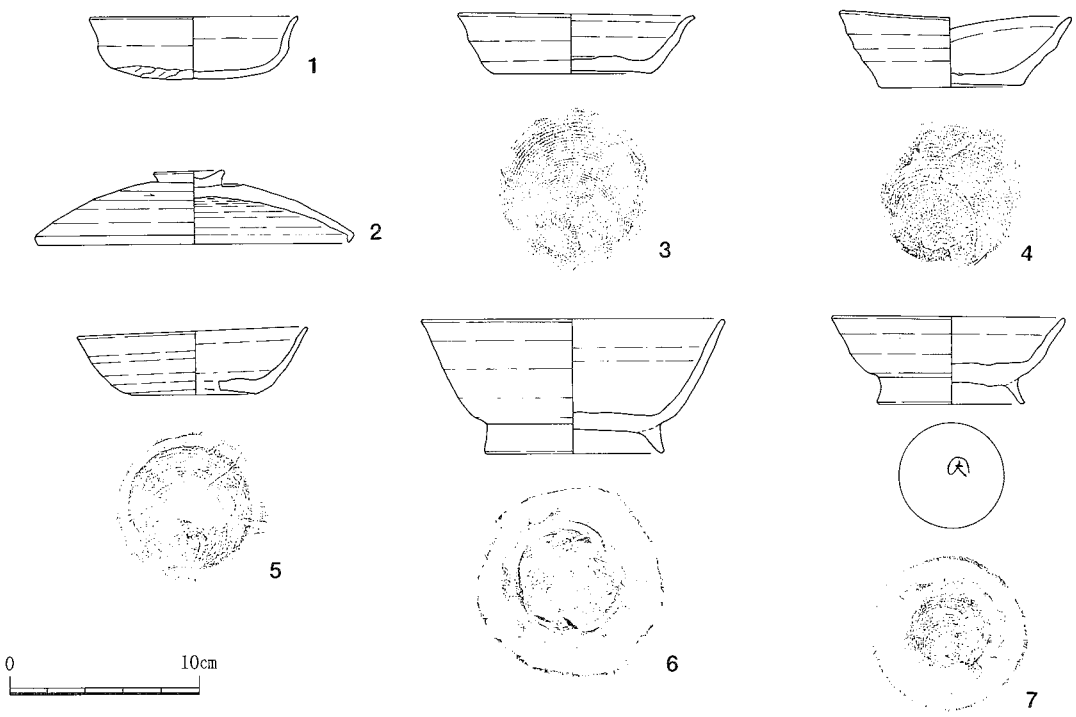
東カマド





東カマド
1．暗褐色土　粘土含む。
2．暗赤褐色土　多くの焼土粒子・焼土ブロック、粘土、炭化材含む。

第64図　23号住居跡カマド



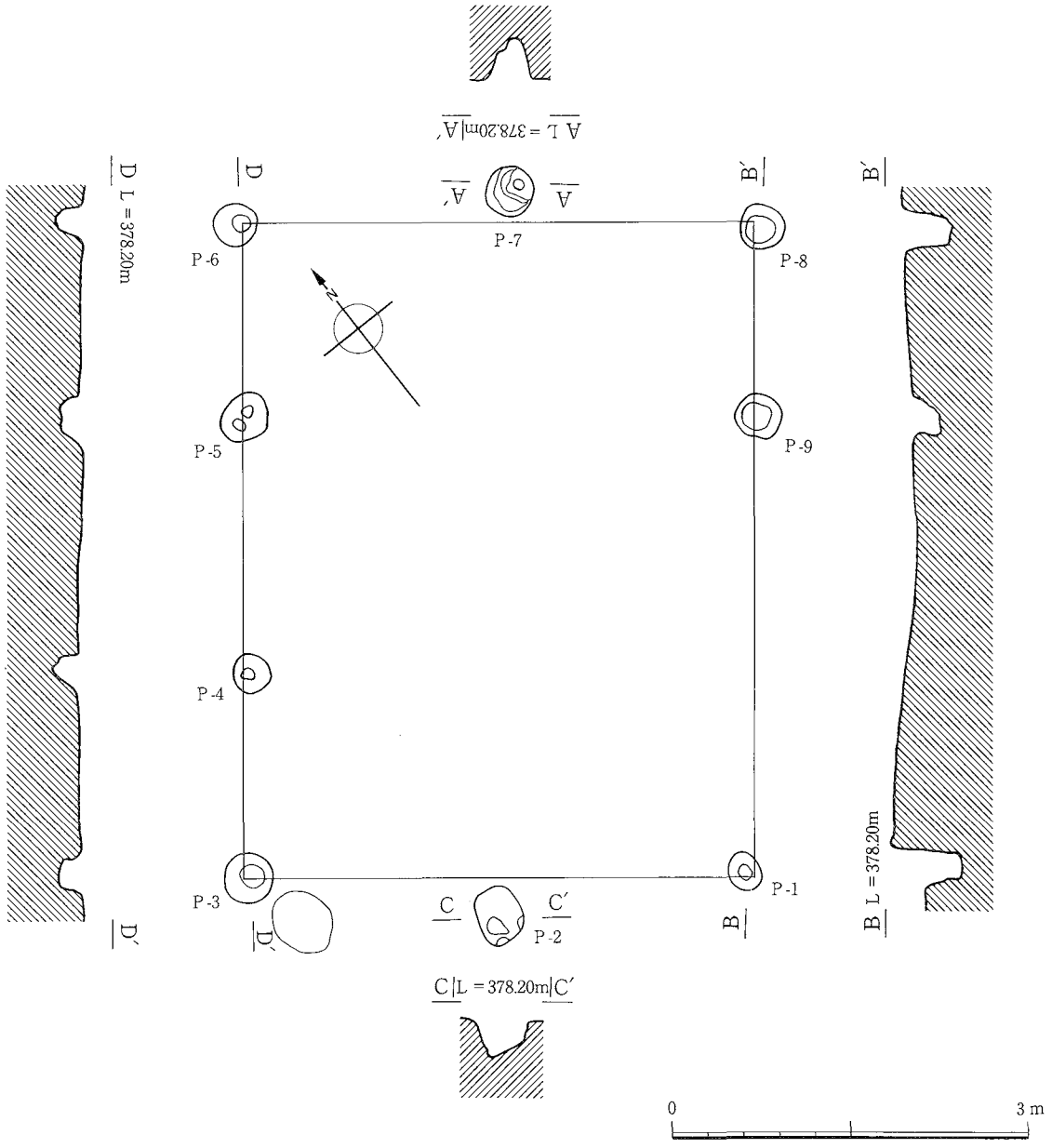
第65図　23号住居跡出土遺物

第38表　23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 坏	口径(11.6) 底径 (8.6) 器高 (3.3)	外面　口縁部横撫で、底部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部撫で	①細・粗砂粒 ②明赤褐色 ③普通	3/5残存
2	須恵器 蓋	口径(16.3) 摘み 3.5 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②灰白色 ③還元	1/2残存
3	須恵器 坏	口径 12.5 底径 8.3 器高 3.1	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒 ②灰色 ③還元	5/6残存
4	須恵器 坏	口径 12.2 底径 7.5 器高 3.9	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒　②黒～にぶい黄褐色 ③還元	3/4残存 焼き歪が顕著
5	須恵器 坏	口径(12.2) 底径 6.6 器高 3.3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒 ②黄灰色 ③還元	1/2残存
6	須恵器 高台付椀	口径(16.0) 底径 9.2 器高 4.2	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、褐色鉱物粒 ②灰色 ③還元	1/3残存
7	須恵器 高台付椀	口径 12.2 底径 7.6 器高 4.6	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	①細砂粒、黒色鉱物粒、小礫 ②灰～灰白色 ③還元	1/4残存 底部外面に墨書

掘立柱建物跡

東地区に於て検出された4棟の建物は、配置及び棟方向より住居跡群との相互関係が想定される。規模構成は2間×2間が2棟、3間×2間が1棟の側柱式で、3号掘立は2間×2間の柱間を4基の柱穴が規則的に囲繞する特殊な建物跡である。



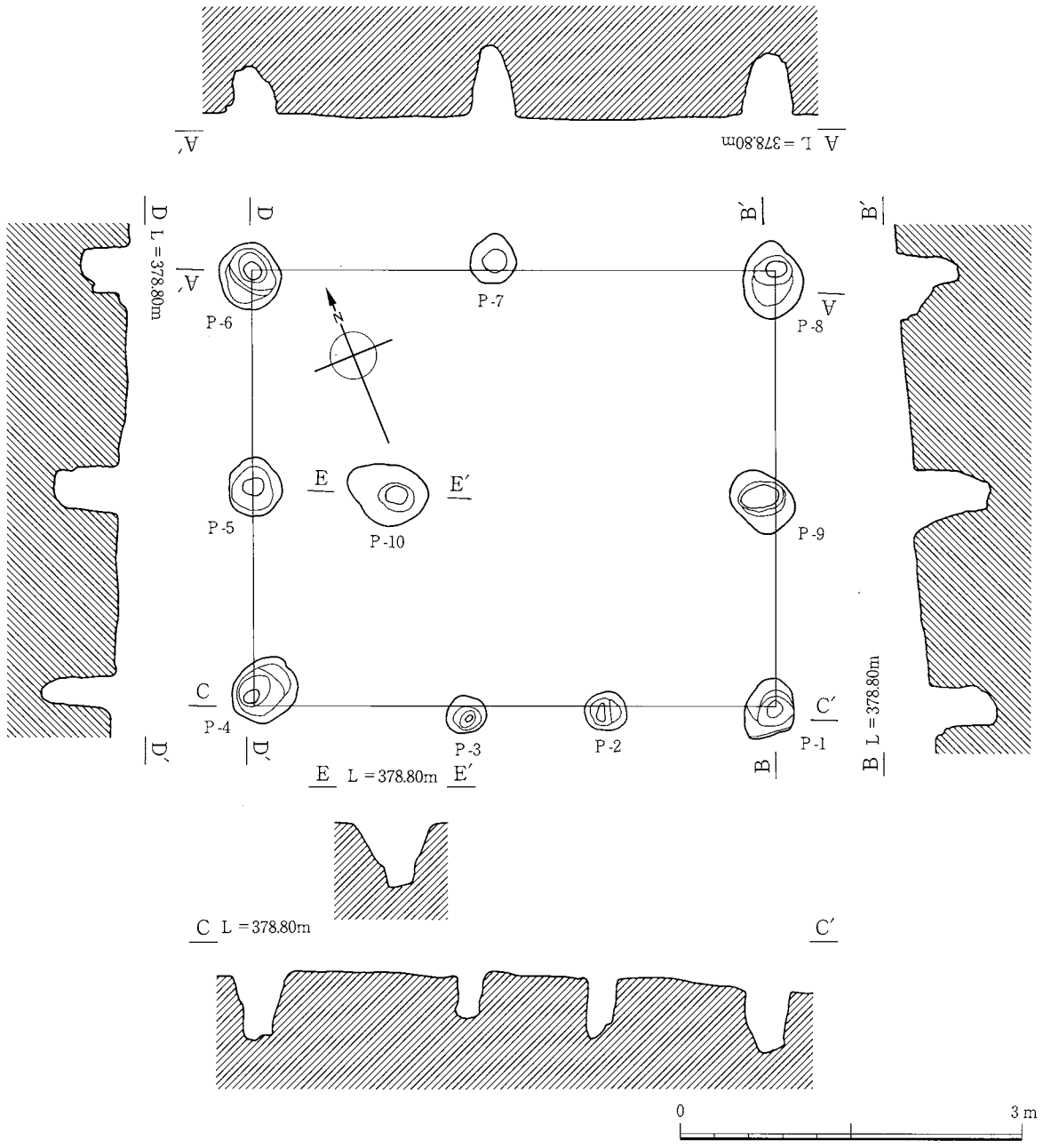
第66図　1号掘立柱建物跡

第39表　1号掘立柱建物跡ピット計測表　（単位m）

番　号	P－1	P－2	P－3	P－4	P－5	P－6	P－7	P－8	P－9
長　径	0.35	0.50	0.44	0.32	0.45	0.38	0.43	0.38	0.41
深　さ	0.32	0.33	0.17	0.18	0.18	0.23	0.36	0.40	0.25

1号掘立柱建物跡　（第66図　表39　図版4－5）

Bl－72グリッドに位置する。主軸がN－40°－Eを指向する桁行3間、梁間2間の建物で、7号住居跡を切り込んで構築されていた。東桁行の南寄り2本目の柱穴は検出されておらず、両妻側の中柱は南北両辺より外側に、柱穴一本分程突出するような形で配列されており、近接棟持柱と考えられる。柱間寸法は不等間で、東桁行は5.50m（1.60m・3.90m）、西桁行は5.60m（1.75m・2.15m・1.70m）、北梁間は4.50m（2.40m・2.10m）、南梁間は4.35m（2.15m・2.20m）を測る。柱穴の平面形は円形を基調とし、最大の柱穴径が50cm、最小が32cmとなり、深さは最深例で40cm、最も浅い例で17cmと一定しない。



第67図　2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡　（第67図　表40　図版4－6）

Bk・Bl－73・74グリッドに位置する。主軸がN－64°－Wを指向する桁行2間、梁間2間の東西棟建物である。南辺桁行のP－2・3は柱穴径・掘り込みとも他の柱穴より小さく掘り込まれ、北辺柱穴と対応しない。P－10は両妻側の中柱に対応する。柱間寸法は不等間で、北桁行は4.70m（2.20m・2.50m）、南桁行は4.65m（1.50m・1.25m・1.90m）、東梁間は3.95m（2.05m・1.90m）、西梁間は3.85m（1.90m・1.95m）を測る。柱穴は円形を基調とする平面形で、最大の柱穴径が74cm、最小が36cmとなり、深さは最深例で68cm、最も浅い例で40cmであるが、P－2・3を除き60cm前後とほぼ一定している。

第40表　2号掘立柱建物跡ピット計測表　（単位m）

番　号	P－1	P－2	P－3	P－4	P－5	P－6	P－7	P－8	P－9	P－10
長　径	0.58	0.39	0.36	0.64	0.53	0.60	0.44	0.69	0.61	0.74
深　さ	0.59	0.54	0.40	0.61	0.58	0.43	0.62	0.53	0.68	0.55

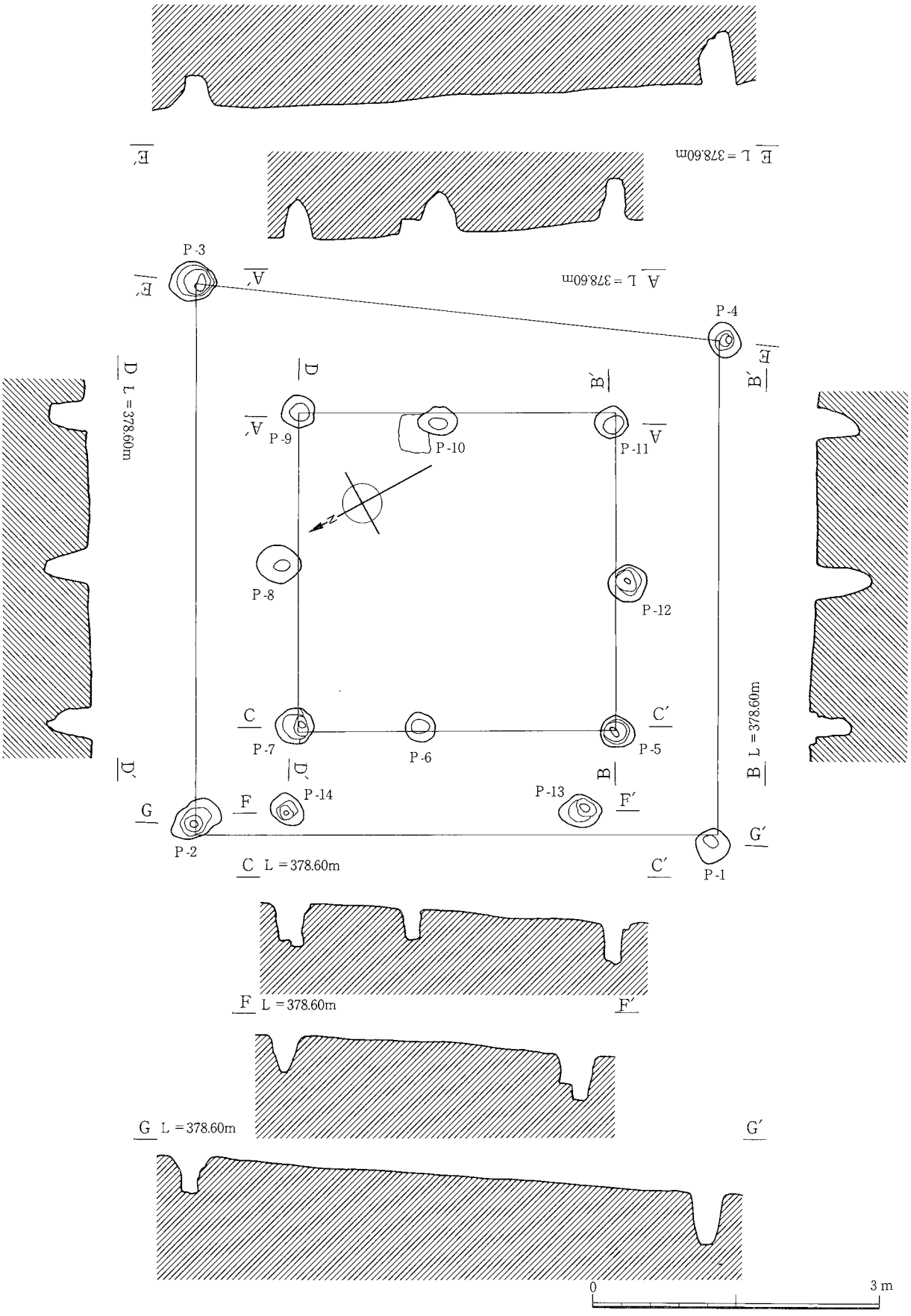
3号掘立柱建物跡　（第68図　表41　図版4－7）

Bl・Bm－74・75グリッドに位置し、南北軸がN－33°－Eを指向する。正方形の平面規格をもつ建物で桁行2間、梁間2間の身舎に、身舎の対角線上に乗る4基の柱穴と西辺に2基の柱穴が伴う。詳細は不明ながら、外周の柱列間に身舎の柱穴に対応する軒支柱の存在した可能性も考えられる。村堂的な建物跡だったのではなかろうか。柱穴間寸法は身舎で南辺3.40m（1.65m・1.65m）、北辺は3.40m（1.65m・1.65m）、西辺3.40m（2.20m・1.20m）、東辺3.40m（1.20m・2.20m）で、建物を囲む柱穴の柱穴間距離は南辺で5.45m・北辺5.70m・西辺5.60m・東辺5.70mを測る。柱穴は円形を基調とし、最大の柱穴で径57cm、最小で32cmとなり、深さは最深例で58cm、最も浅い例で34cmである。総じて柱穴基底部に顕著な「アタリ」が観察される。

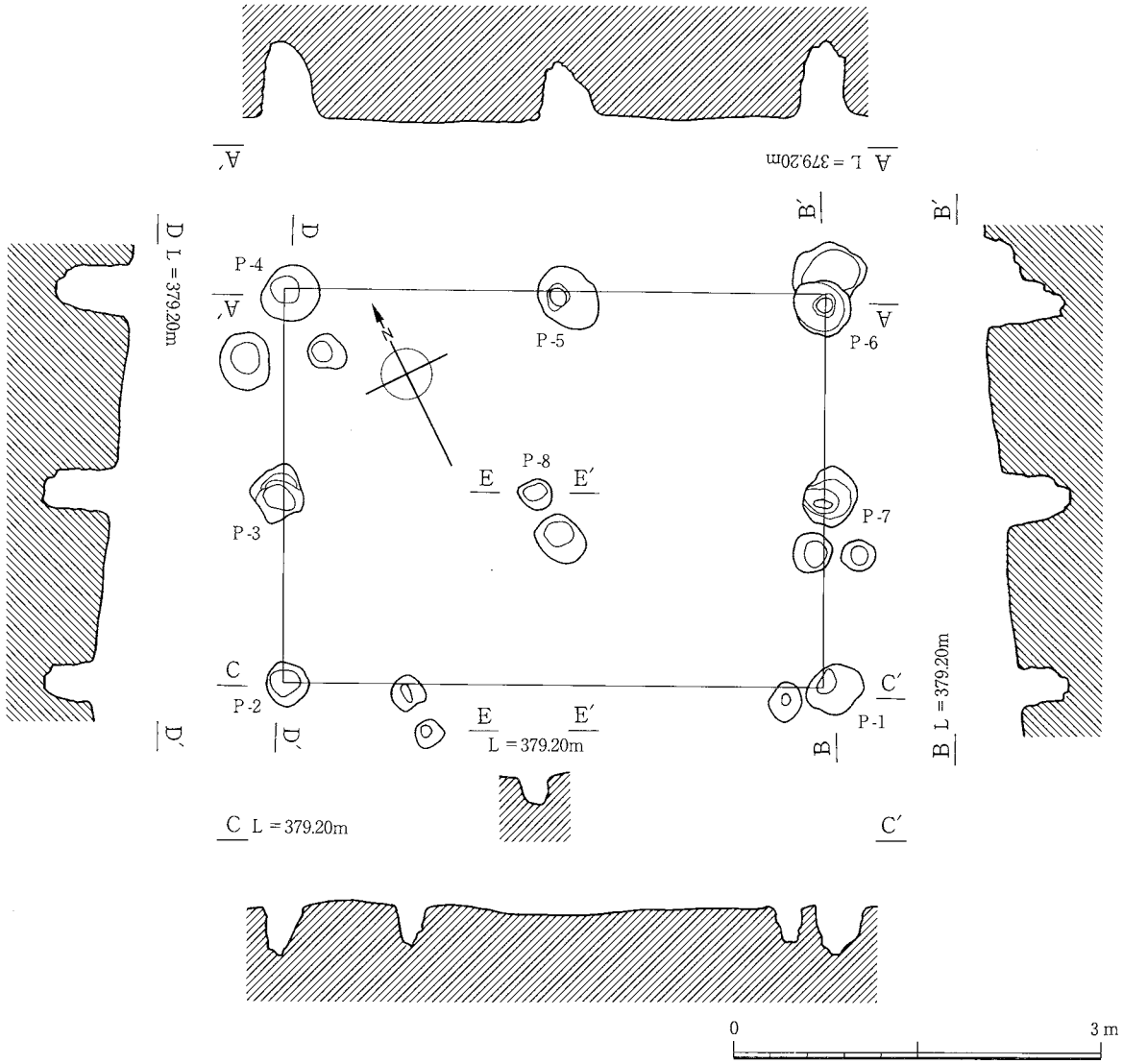
第41表　3号掘立柱建物跡ピット計測表　（単位m）

番　号	P－1	P－2	P－3	P－4	P－5	P－6	P－7	P－8	P－9	P－10
長　径	0.37	0.41	0.37	0.32	0.41	0.48	0.37	0.42	0.37	0.38
深　さ	0.45	0.58	0.45	0.34	0.47	0.47	0.40	0.43	0.55	0.54

番　号	P－11	P－12	P－13	P－14
長　径	0.57	0.51	0.45	0.38
深　さ	0.45	0.37	0.46	0.38



第68図　3号掘立柱建物跡



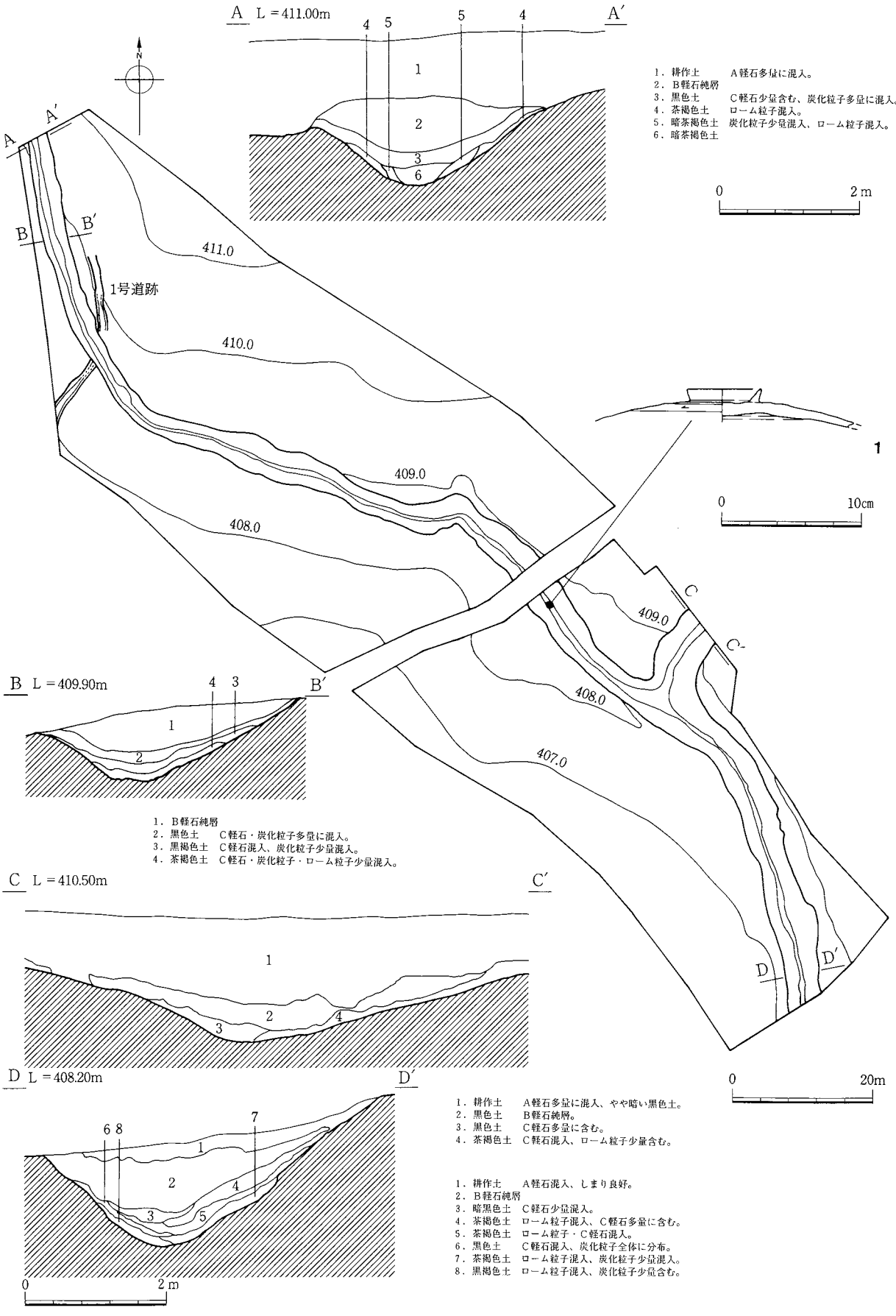
第69図　4号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡　（第69図　表42　図版4－8）

Bl－76グリッドに位置する。主軸がN－60°－Wを指向する桁行2間、梁間2間の東西棟建物で、南辺の中柱は検出されていない。規模は南桁行が4.55m、北桁行は4.50m（2.25m・2.25m）、西梁間は3.30m（1.65m・1.65m）、東梁間は3.15m（1.65m・1.50m）で、最大の柱穴で径58cm、最小で29cmとなり、深さは最深例で65cm、最も浅い例で20cmである。また、P－8は両妻側の中柱に対応している。

第42表　4号掘立柱建物跡ピット計測表　（単位m）

番　号	P－1	P－2	P－3	P－4	P－5	P－6	P－7	P－8
長　径	0.49	0.37	0.51	0.51	0.58	0.50	0.50	0.29
深　さ	0.45	0.40	0.58	0.61	0.48	0.65	0.55	0.20


A L＝411.00m
A′
1．耕作土　A軽石多量に混入。
2．B軽石純層
3．黒色土　C軽石少量含む、炭化粒子多量に混入。
4．茶褐色土　ローム粒子混入。
5．暗茶褐色土　炭化粒子少量混入、ローム粒子混入。
6．暗茶褐色土
0　2m
B
B′
411.0
1号道跡
410.0
409.0
408.0
1
0　10cm
C
C′
409.0
408.0
407.0
B L＝409.90m
B′
1．B軽石純層
2．黒色土　C軽石・炭化粒子多量に混入。
3．黒褐色土　C軽石混入、炭化粒子少量混入。
4．茶褐色土　C軽石・炭化粒子・ローム粒子少量混入。
C L＝410.50m
C′
D
D′
0　20m
D L＝408.20m
D′
1．耕作土　A軽石多量に混入、やや暗い黒色土。
2．黒色土　B軽石純層。
3．黒色土　C軽石多量に含む。
4．茶褐色土　C軽石混入、ローム粒子少量含む。
1．耕作土　A軽石混入、しまり良好。
2．B軽石純層
3．暗黒色土　C軽石少量混入。
4．茶褐色土　ローム粒子混入、C軽石多量に含む。
5．茶褐色土　ローム粒子・C軽石混入。
6．黒色土　C軽石混入、炭化粒子全体に分布。
7．茶褐色土　ローム粒子混入、炭化粒子少量混入。
8．黒褐色土　ローム粒子混入、炭化粒子少量含む。
0　2m

第70図　1号溝状遺構

溝状遺構

西地区に於て検出された古代の大溝で、調査区を等高線に沿って横断している。部分的ではあるが底面及び側面に顕著な硬化面が観察されている。

1号溝状遺構（第70図　表43　図版6・7－1～3・17）

A～M－1～12グリッドに於て検出され、I－10グリッド付近で「T」字形に分岐してる。確認現長は約183mを測り、東・西端は更に調査区外へと延びる。溝の走行方向は地勢に沿って蛇行しており、中央部付近で東西軸より約35°東偏し、東・西端は概ね南北軸に沿っている。分岐して北方向に延びる溝は、等高線に直行して構築され、底面の傾斜角は約4°となっている。溝の走行方向を規定している地勢は、中央部が南方向、東・西端が南西方向へと高さを減じ、傾斜角はいずれも4～5°の範疇にあり、同溝の標高は408.4～409.0mを測る。規模は規格性を欠き上端幅3～7m・下端幅0.5～1.2m・掘り込み0.55～1.55mを測り、断面形は「U」字状もしくは「V」字状を呈し、壁は20～28°の角度で立ち上がる。底面は総じて基本層序8層の中位前後まで掘り込まれ、多少の起伏は有るものの基底レベルに大差は無い。また、「T」字形に分岐する溝内の底面及び壁面は、歩行によると考えられる顕著な硬化が認められる。埋土は概ね自然堆積と判断され、層中には浅間B軽石が純層で入り、B軽石の下層には炭化粒子が混入する。

遺物は須恵器の坏蓋片1点が、基底面より出土した。

第43表　1号溝状遺構出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口径 摘み 5.2 器高	外面　体部轆轤整形、天井部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	①白色粒、黒色鉱物粒、赤色鉱物粒 ②灰色 ③還元	笠部の中位～かえり部分欠損

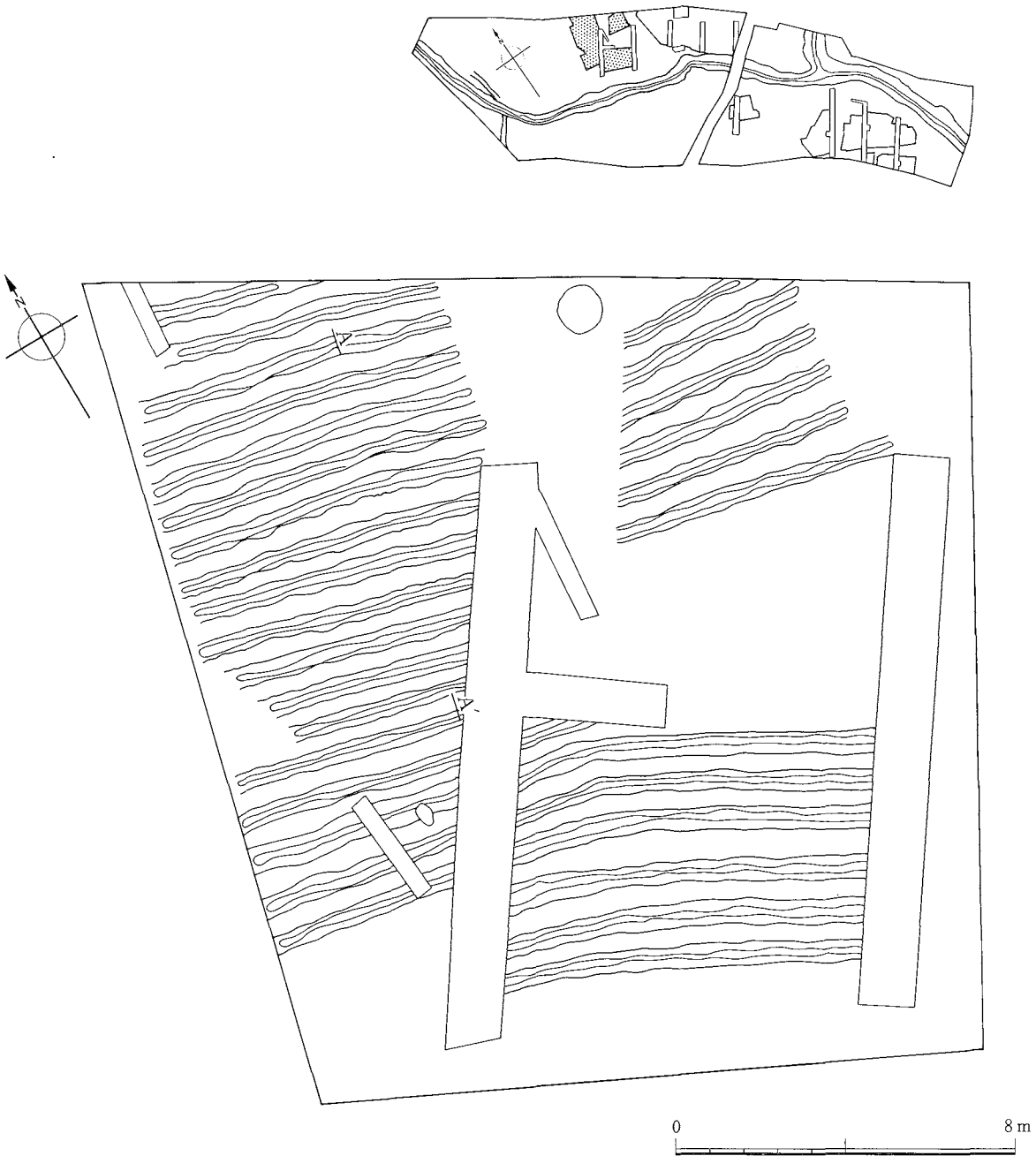
畠跡

西地区に於て検出され、検出箇所より大きく4区画に分けられる。枚数については、畝の走行方向と重複関係より6枚程が予想される。耕作年代は埋土より、1号畠跡は浅間B軽石降下以前と判断される。

1号畠跡（第71図）

C～E－5・6グリッドに位置する。標高は410.6～409.6mの範疇にあり、地勢は南方向へ緩やかに傾斜する。畝の走行方向は約73°西偏し、地形の傾斜に沿った縦畝の畠をとっている。畝は確認できる箇所とできない箇所があるが、できない箇所は後世の耕作等により消滅したものと思われる。畝の現状規模は、上端幅40～50cm・下端幅15～25cm・深さ10～25cmを測り、畝には浅間B軽石が純層で入る。

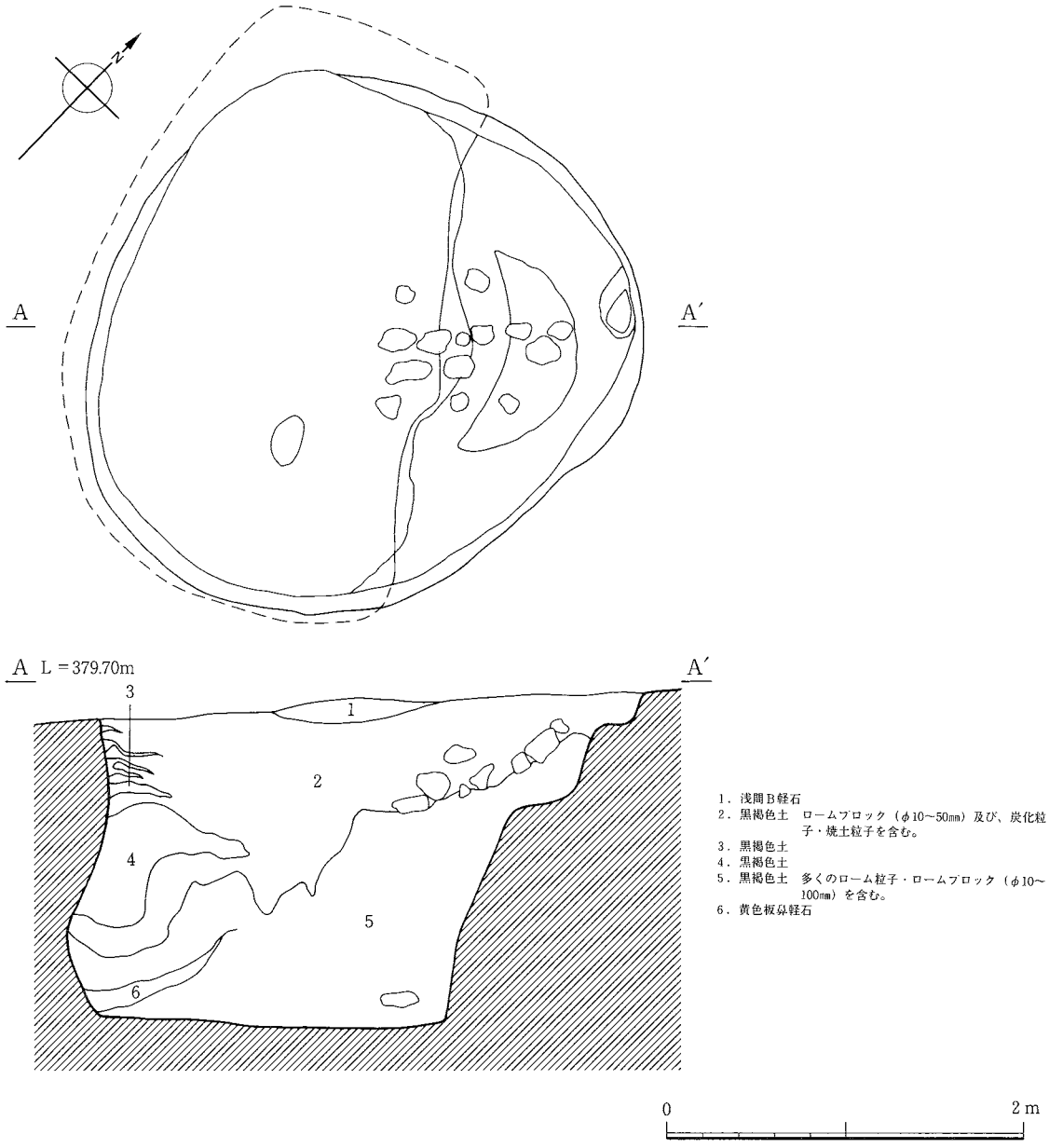
遺物は無い。



第71図　1号畠跡

井戸跡

集落が構成されている東地区に於て、１基が検出されている。基底面が不透水層まで達し、２層を中心に被熱礫・炭化粒子・焼土粒子等が埋納されていた事実関係より井戸跡と判断した。



第72図　１号井戸跡

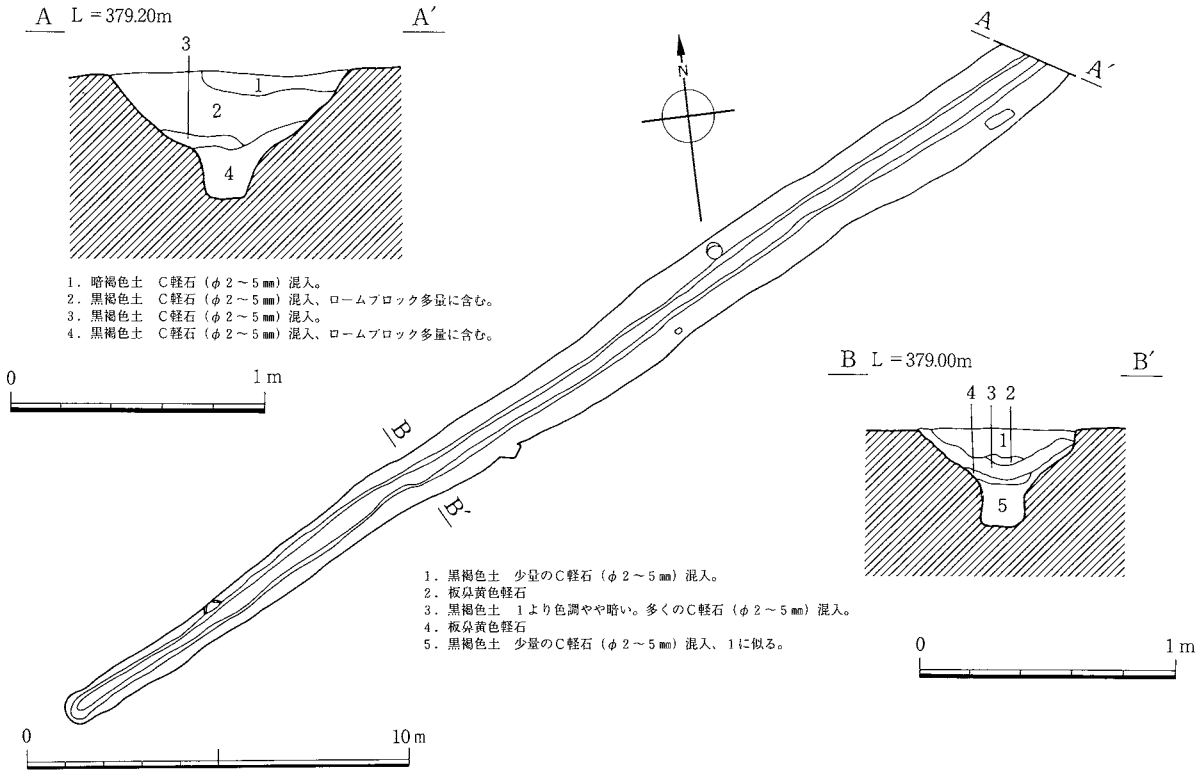
１号井戸跡（第72図　図版８－２）

Bj－76グリッドに位置する円筒形の素掘り井戸で、東側の井壁には井戸口と考えられる階段状の施設が認められる。井戸口付近を除く井壁状況は、開口部よりの垂線に対し中位下半で約10～35cm程抉れている。規模は開口部径3.0～3.2ｍ・基底部径3.25～3.45ｍ・掘り込み1.8ｍ・基底標高377.8ｍを測り、底面は平坦である。埋土は１層に浅間Ｂ軽石が入り、２～５層は埋め戻す。

土器の出土は無かった。

溝

集落が構成されている東地区に於て、１条が検出されている。



第73図　１号溝

１号溝（第73図　図版８－３）

Bl・Bm－76～79グリッド内を南西方向（115°西偏）へ走る斜行溝で、Bm－76グリッド内で途絶している。規模は確認現長31ｍ・上面径1.3～1.9ｍ・下面径0.3ｍ・掘り込み0.8～1.0ｍを測り、南西方向に向かうに従って規模を減じる。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がった後、約35°前後の角度で内湾気味に立ち上がる。埋土は黒褐色土を基調とし、各層に二次堆積の浅間Ｃ軽石を少量含む。

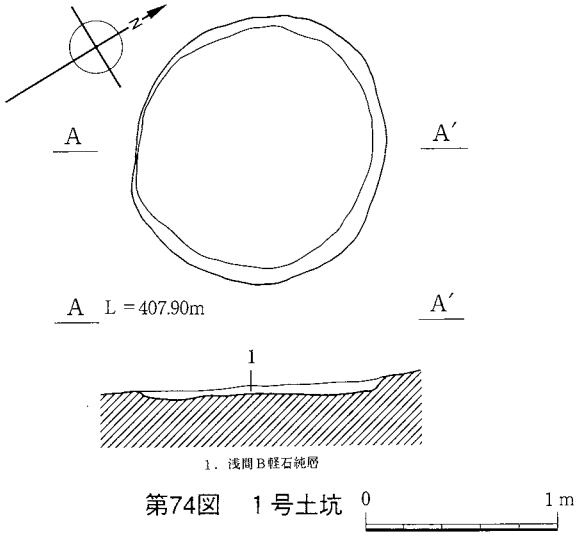
埋土より古代の溝と判断される。遺物は無かった。

土坑

西地区に於て１基が検出されている。埋土に浅間Ｂ軽石を純層で含む事より、平安時代の所産と判断される。

１号土坑　（第74図）

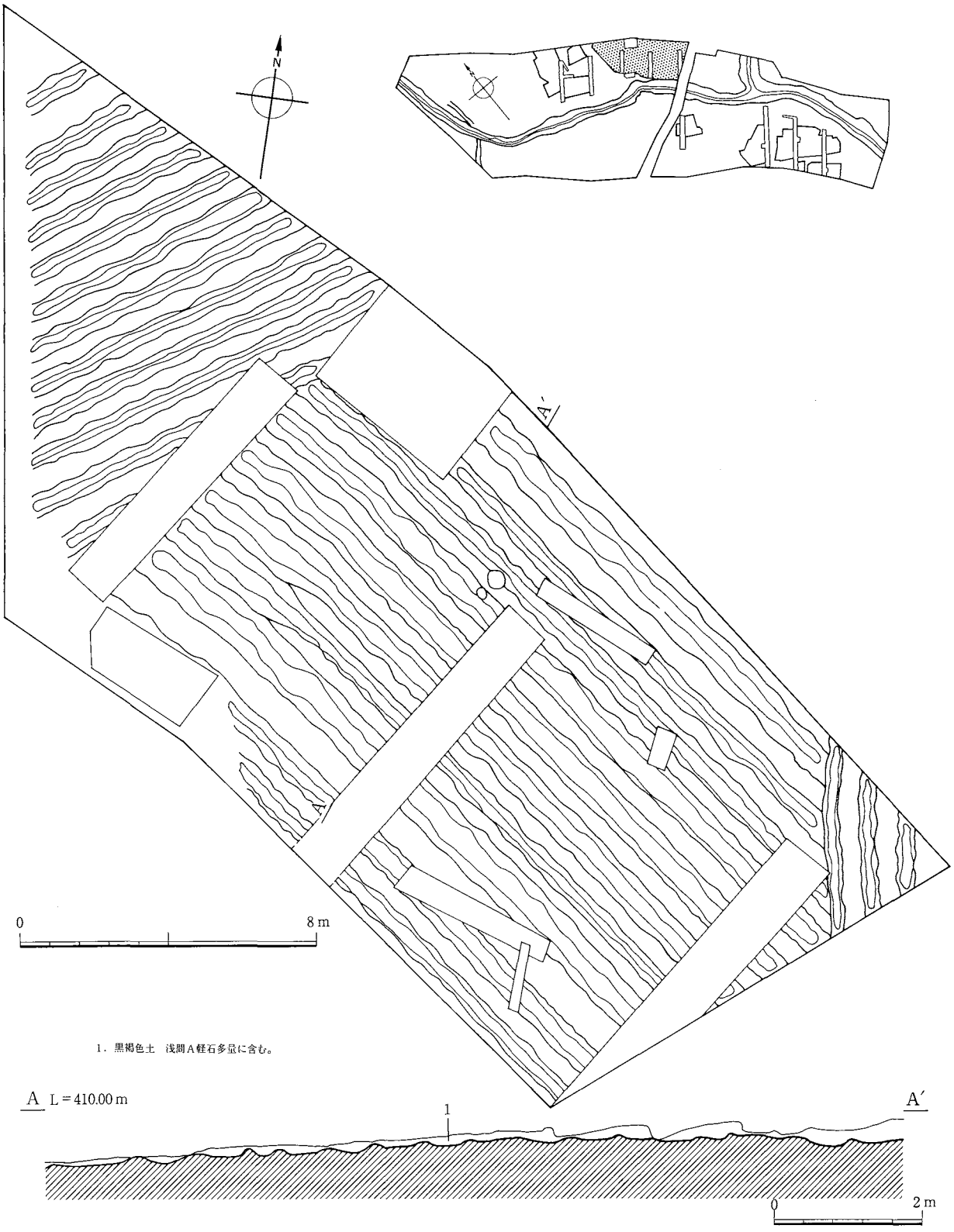
Ｉ－８グリッドに位置する。平面形は径130㎝の円形平面を有し、断面形は深さが６㎝の鍋底状を呈する。埋土には浅間Ｂ軽石が純層で入る。



第74図　１号土坑

第5節　近世

西地区に於て畠跡3枚と道跡1条が検出されている。何れも埋土に浅間A軽石が含まれる事より、近世の所産と判断される。



第75図　2号畠跡

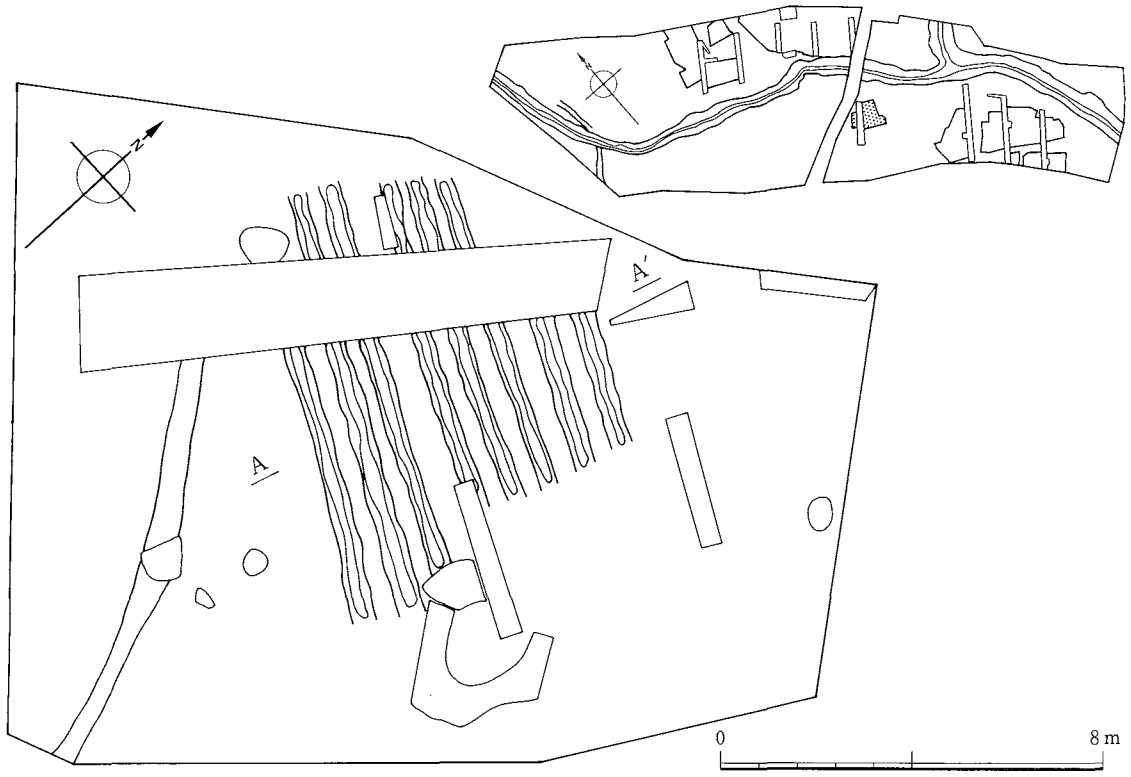
畠跡

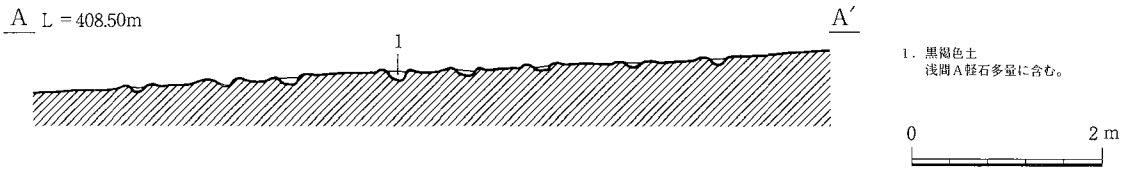
西地区に於て検出され、検出箇所より大きく４区画に分けられる。枚数については、畝の走行方向と重複関係より６枚程が予想される。耕作年代は埋土より、２～４号畠跡が浅間Ａ軽石降下以前と判断される。

２号畠跡（第75図）

Ｄ～Ｇ－７～８グリッドに位置する。標高は410.6～409.6ｍの範疇にあり、地勢は南西方向へ緩やかに傾斜する。畝の走行方向及び重複関係より３枚の畠の存在が予想され、中央の幅広の畝を両端の畠地が切り込んで畝立てしている。畝の走行方向は北より順に55°東偏、50°西偏、10°西偏し、現状規模は順に上端幅40～65cm・下端幅22～30cm・深さ10～20cm、上端幅95～120cm・下端幅25～65cm・深さ10～25cm、上端幅35～40cm・下端幅15～20cm・深さ10～20cmを測る。畝合いには浅間Ａ軽石が入る。

遺物は無い。



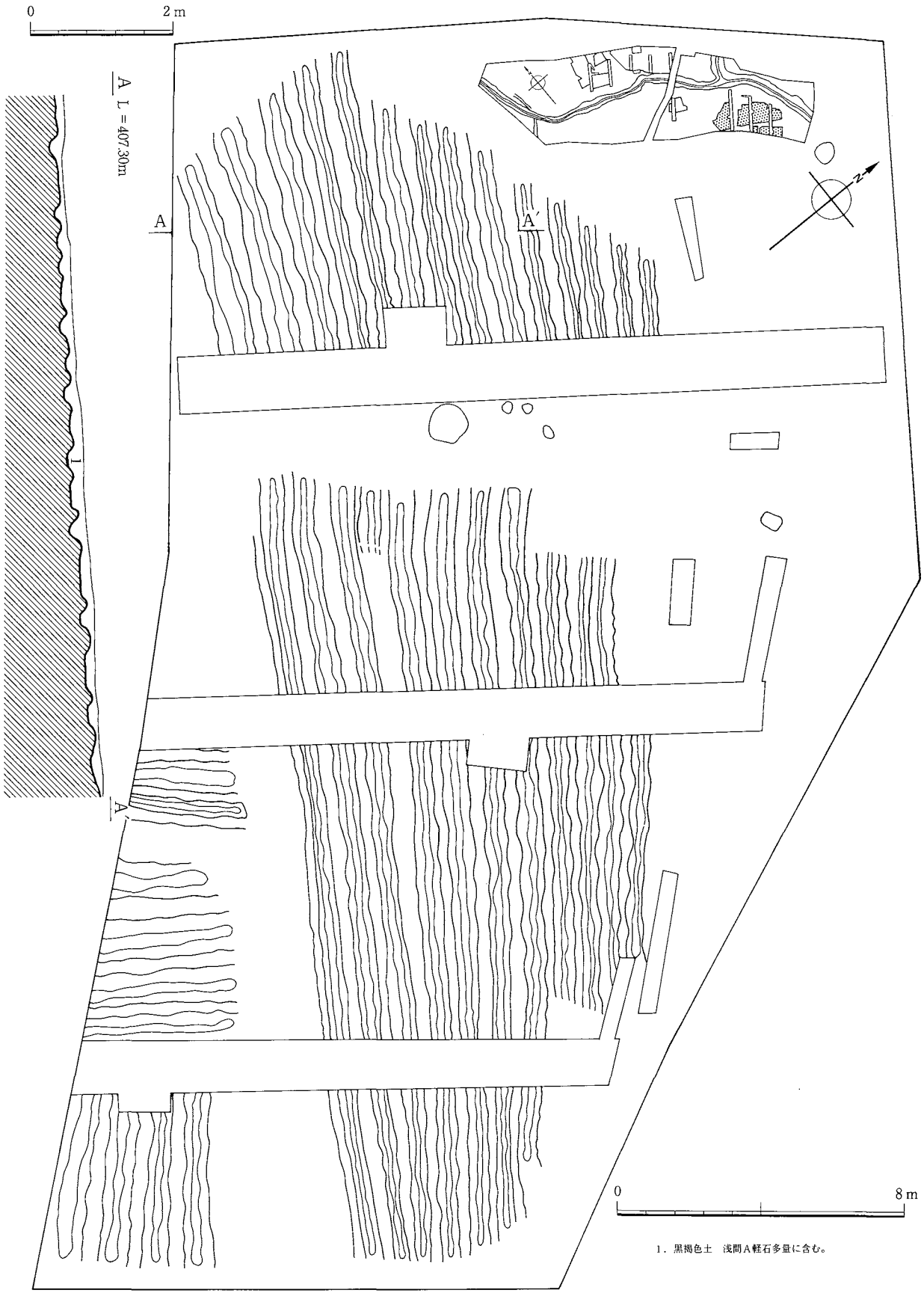


第76図　３号畠跡

３号畠跡　（第76図）

Ｈ・Ｉ－７・８グリッドに位置する。標高は408.6～407.6ｍの範疇にあり、地勢は南西方向に緩やかに傾斜する。畝の走行方向は約63°西偏し、地形の傾斜に沿った縦畝の畠をとっている。畝の現状規模は、上端幅40～50cm・下端幅15～25cm・深さ19～25cmを測り、畝合いには浅間Ａ軽石が入る。

遺物は無い。



第77図　4号畠跡

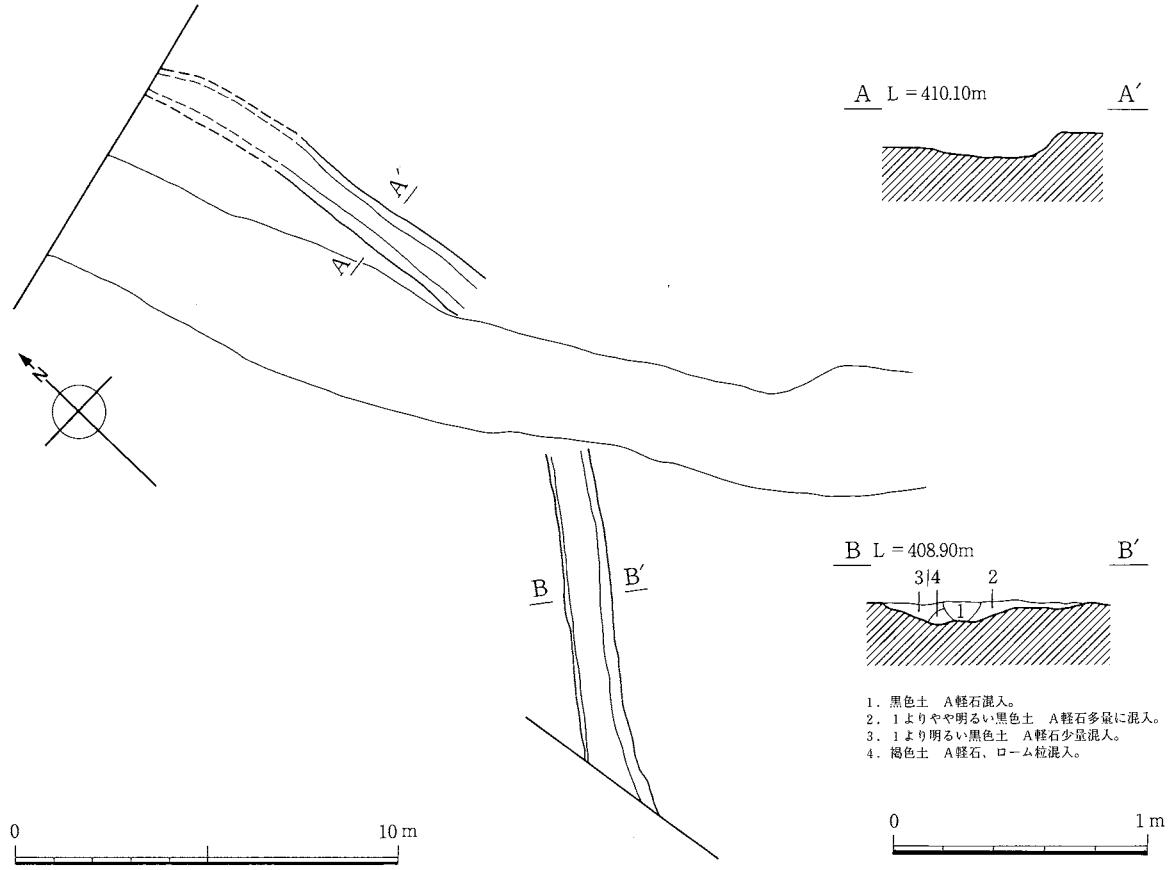
4号畠跡　（第77図　図版８－１）

Ｉ～Ｍ－８～11グリッドに位置する。標高は407.8～407ｍの範疇にあり、地勢は南西方向へ緩やかに傾斜する。畝の走行方向及び規模より２枚の畠地を想定した。大きな畠地の畝方向は約63°西偏し、現状規模は上端幅40～50cm・下端幅15～25cm・深さ10～25cmを測る。畝の走行方向・規模・埋土が３号耕作跡に近似する事より、同一の耕作跡と判断される。小さな畠地の畝方向は約40°東偏し、概ね大きな畠地の畝と直行して畝立てされている。畝の現状規模は、上端幅80～120cm・下端幅30～40cm・深さ15～25cmを測り、畝合いには浅間Ａ軽石が入る。新旧関係は小さな畠地が新しい。

遺物は無い。

道跡

西地区に於て１条が検出されている。底面に歩行によると考えられる顕著な硬化面が確認されたため、道跡と判断した。



第78図　１号道跡

１号道跡　（第78図）

調査区の南方向より等高線に直行して走り、１号溝状遺構と交差した後、同溝と並走して北方向へと向かい、掘り込み及び硬化面はＣ－３グリッド内で途絶している。新旧関係は１号道跡が新しく、１号溝状遺構が埋没した後に構築されていた。規模は確認現長24ｍ・上面径1.0～1.6ｍ・下面径0.5～0.9ｍ・深さ15cm前後を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色を基調とし、浅間Ａ軽石が混入している。

機能年代は浅間Ａ軽石降下前後であり、遺物は無かった。

第５章　まとめ

第１節　概観

調査の結果、東・西地区に於て遺構・遺物が検出され、中央地区では縄文土器がトレンチ溝の表層より、若干量出土するにとどまった。検出された遺物は縄文時代から近世に至る長期に亘るが、遺構を伴っての検出は奈良・平安時代に限られている。

東地区では縄文土器が表層を中心に若干量採集され、弥生時代では再葬墓の可能性のある中期初頭の土器・土器細片が出土している。奈良・平安時代に入り大型の溝状遺構が１条と畠跡１枚が検出され、中・近世に至り畠跡３枚と道跡１条が検出されている。

西地区では奈良・平安時代の所産である竪穴式住居跡23棟、掘立柱建物跡４棟、井戸跡１基、溝１条より構成される集落跡が検出された。集落は標高378～379ｍ前後の比較的平坦な台地上に展開しており、集落の延びは周辺の地形より、現集落跡の背面（丘陵裾部との境界付近）に若干展開する程度と推察される。

また、東地区に於て確認された該期遺構とは時期的に一致するものの、相互関係の有無は定かでは無い。

第２節　縄文時代

遺構は検出されておらず、前期から後期に至る土器片が表層を中心に、調査区全線に亘り薄く出土している。出土した土器は前期では花積下層式・黒浜式・諸磯ｂ式、中期では五領ヶ台式・阿玉台式・曽利式・加曽利Ｅ３・４式、後期では称名寺式・堀之内式・加曽利Ｂ式がある。また、各期を通しての遺物量は概ね同量で、出土位置にも顕著な偏在傾向も認められない。

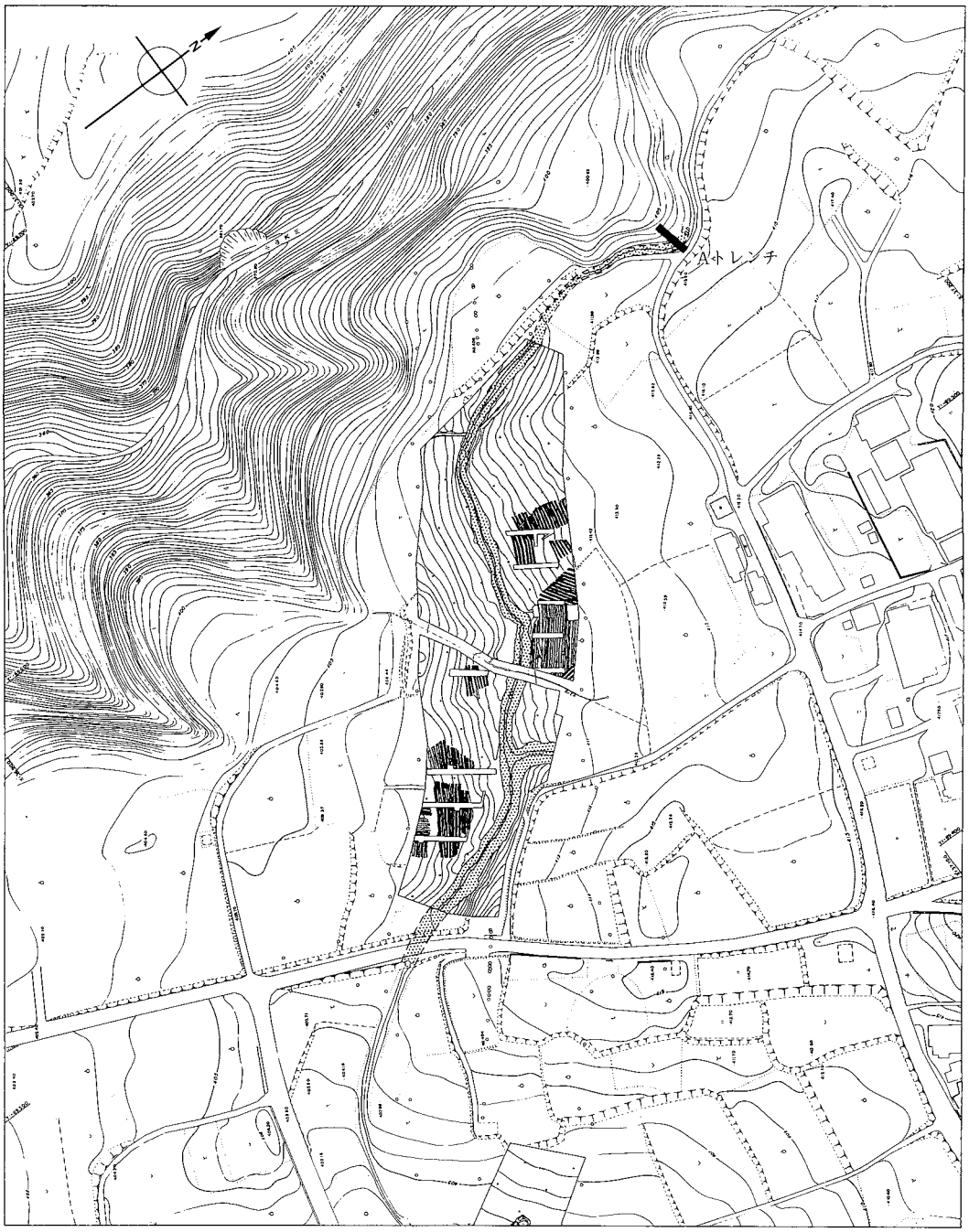
第３節　弥生時代

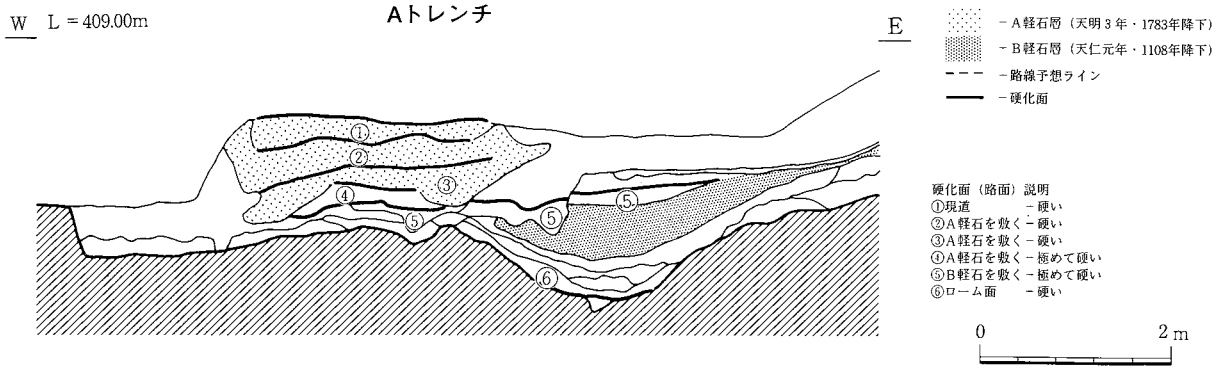
遺構は検出されておらず、西地区のＧ－９グリッドを中心に土器が出土している。出土状況は基本層序Ⅰの第３層の上位から中位にかけて包蔵されており、器種は甕に少量の壷が加わる。第14図の１は最も遺存の良い甕形土器で、破片ながら同一レベルで一括出土したものである。１は胴部上位に最大径をもち、口縁と胴部に文様帯を設け、束状の工具で擬縄文を施文の後、沈線による横線と菱形文を形成している。内面は丁寧な調整を施し、胴部下位内面に焦げ・外面に炭化物の付着が認められる。

帰属年代は上記した特徴より中期初頭の岩櫃山式期の所産と考えられるもので、他の土器に関しても概ね同様の年代観が与えられよう。

また、１については第４章・第１節で土器棺である可能性を指摘したが、土器の中やその周辺で人骨・獣骨等の出土もなく、更に土器埋納のための土坑が検出されていない。よって、土器棺である積極的な根拠には乏しい。しかし、当甕形土器が包蔵されていた層は、褐色もしくは暗褐色を基調としており、調査段階に於て土坑の存在に留意しながら掘り下げたにも拘らず、土坑を確認し得なかった可能性も否定できない。

また、藤岡市のＣ11沖Ⅱ遺跡等をはじめとし、再葬墓として報告される該期資料の多くに炭化物の付着が観察されると言う報告があり、近年に至り炭化物の付着が土器棺の属性の一つとの認識があるようである。しかし、炭化物・煤等の付着は明らかに煮沸具として使用された事実を示すものであろうが、再葬過程に於ける意味合いについては未だ不透明と考える。したがって、当土器については、前述した事実関係より土器棺である可能性を指摘するにとどめたい。





第79図　１号溝状遺構の調査区外断面実測図と路線予想ライン

第4節　古代

当時代の遺構・遺物の詳細については、第4章の第4節で述べてきた。当節では住居跡、掘立柱建物跡と1号溝状遺構について触れていく。住居跡には年代観を与えた後、遺構及び集落の推移を考え、掘立柱建物跡については、住居跡との重複関係や配置関係より相互関連の有無を探る。また、謎とした1号溝状遺構については、主にその性格について考えて行きたい。

住居跡

8世紀前半に入ると最初に9・10・21号住居跡が構築される。石材を主体に構築されたカマドは東壁に付設され、主軸方向をN－105°～112°－Eの範疇に揃える。いずれも壁溝と貯蔵穴を有し、床面に主柱を持たない。床面積は9号住居跡が14.1㎡で、10・21号住居跡が8.1㎡と等しく平均値は10.1㎡を測る。

土器の器種構成は、土師器は坏・甕・小型甕・甑で須恵器は坏・甕である。該期の特徴は、長甕には胴部と口縁の境の締まりがなく、粗雑な調整による口縁部と胴部の不明瞭化が顕著になるもの。一般的な甕には長甕に比して短胴化し、肩部に横位のヘラ削り調整が施され、口縁部に最大径を持ち、器肉は薄く口縁部が「く」の字状に外反するものが見られる。土師器坏はやや深い丸底から直立した口縁に移行し、須恵器蓋はかえりと大きな摘みを持つ。また、土師器坏に内底面に螺旋状、体部内面に放射状の暗文を施したものが出現している。

次代の8世紀後半には3・5・14・19・22号住居跡が構築される。カマドは東壁に付設され、燃焼部は前代に比して壁外に向かい、燃焼部の中心は壁と壁のライン上や壁外に位置するものが認められる。主軸方向はN－90°～125°－Eの範疇に揃え、床面に主柱を持たない。床面積は前代に比して拡張傾向にあり、計測不能な19号住居跡を除く平均値は11.9㎡を測る。

土器の器種構成は、土師器は坏・甕・小型甕・台付甕で須恵器は坏・甕・椀・蓋がある。一般的な土師器甕は5号住居跡の3に見られる様に、口縁部が緩やかに外反し、前代に比して肩部の張りが大きくなり、口径と胴部最大径がほぼ等しくなる。小型甕は口縁部が厚く短く外反するものと、薄く長く外反するものがある。土師器坏は平底傾向、丸底傾向のものが混在し、内底面に螺旋状、体部内面に放射状の暗文が施されるものが目立つ。須恵器坏は回転ヘラ切りの後、周縁を撫でるものが主体であり、底部の切り離しに回転糸切りは認められない。須恵器蓋はかえりが無く、天上部は回転ヘラ切りである。

9世紀前半には6・8・11・13・16・18・23号住居跡が構築される。カマドは東壁、北壁、もしくは両壁に付設され、前代に比して煙道は長く延び、燃焼部の中心は壁と壁のライン上か壁外に位置するものが主体となる。主軸は東か北を指向するものに分かれ、若干のバラツキ傾向にある。床面には主柱を持たず、床面積は前代に比して更に拡張傾向にあり、平均値は12.7㎡を測る。

土器の器種構成は、土師器は坏・甕・鉢で須恵器は坏・高台坏・皿・甕・広口壷がある。8号住居跡の5に代表される一般的な土師器甕は、口縁部が緩やかに外反し、肩部に最大径を持つ。土師器坏は平底傾向のものだけとなり、客体的存在となる。依然として体部内面に放射状の暗文が認められる。須恵器坏は量的に土師器坏を凌駕する。底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りが混在し、後者が主体的となる。蓋はかえりが無く、摘みは小型化し、外面のヘラ削りは天井部のみとなる。

9世紀中葉には、当遺跡の最終段階となる7・17・20号住居跡が構築される。カマドは7・17号が北壁に、21号が東壁に付設され、燃焼部の中心は前代とほぼ同様である。床面には主柱を持たず、床面積は11.4㎡を測る。8世紀中葉より拡張を続けた床面積が、初めて縮小に転じている。

土器の器種構成は、土師器は坏・甕・甑で須恵器は坏・高台坏・甕・蓋・短頸壷がある。一般的な土師器甕は、口縁部下半が立ち上がって頸部が明瞭化し、肩部の張りがより一層顕著になる。また、17号住居跡の15に代表される所謂「コ」の字口縁状のものが出現する。須恵器坏は、体部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りが混在し、糸切り未調整のものが主流となる。土師器坏は1点のみで、底部が丸みを残しながらも平底化している。依然として内底面に螺旋状、内面体部に放射状の暗文が認められる。

以上が住居跡の推移の概略である。これによれば、集落の構成員は集落の出現期より増え続け、9世紀前半にピークを迎えた後、集落の途絶前夜である9世紀中葉頃には出現期までに減少する。その構成員の増減に、各期における平均的な床面積の拡張・縮小が連動している点も注目される。また、集落が隆盛を迎える9世紀前半にはカマドの付設位置が様々となり、煙道の長い（0.9ｍ前後）カマドが認められる。

掘立柱建物跡

4棟の掘立より遺物は出土しておらず、1号掘立は7号住居跡を切り込んで構築されていた。よって、1号掘立のみが9世紀中葉以降の所産と判断され、他の掘立の帰属年代は不透明である。しかし、各期の住居跡群との配置関係は、9世紀前半では2～4号、特に村堂的建物とした3号掘立を囲む様に配置しており、他の期については規則性は見いだせない。したがって、1号掘立を除く建物跡は、9世紀前半代の所産と推察される。

1号溝状遺構

規模・形状については第4章・第4節で述べてきたが、改めて概略を説明し、後に遺構の性格について考えて行きたい。

等高線に沿って走る溝は規格性に欠き、規模は調査全長183ｍ、上端幅3～7ｍ、下端幅0.5～1.2ｍ、深さ0.55～1.55ｍを測り、断面形は概ね「U」字状を呈する。埋土は自然堆積と判断されるもので、上層もしくは中層に浅間Ｂ軽石（天仁元年・1108年降下）が純層で入る。また、「T」字形に分岐する溝内の底面及び壁面には、歩行によると考えられる顕著な硬化が認められた。帰属時期は、埋土の堆積状況と基底面より出土した須恵器蓋より8世紀代と考えられる。

さて、性格であるが、おおくの地元研究者が東山道と主張する一方、不明な点が多いとしながらも、道、特に東山道ではないとの意見がある。その各々の論拠を述べる前に、概略の東山道について触れておく。

周知の通り東山道という名称は、道路を意味するとともに、行政区画の名称でもあり、律令政府が中央と地方とを緊密に連絡し、有事の際には軍の速やかな移動を目的とした官道の一つである。『延喜式』民部上による東山道の構成国は、近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八ヶ国であり、それ以前には幾多の変遷があったとされる。『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条による上野国のルートは、坂本・野後・群馬・佐位・新田の五駅があり、何れも中路としての規定に従い坂本に駅馬15疋、他は10疋ずつ設置された。

まず、東山道とする論拠は以下の通りである。

① 群馬県歴史の道調査報告書や松井田町史、東山道号考に於ける推定東山道と位置・方向とも一致する。
② 部分的であるが、溝の底部・側壁に路面と思われる顕著な硬化面が認められた。
③ 8世紀代の所産と考えられ、集落に通ずる三叉路（T字形の分岐点）がある。
④ 律令政治の弛緩により道面の管理が滞れば、その時点よりすぐに大雨の度に水が流れ、溝状の浸食が始まる。溝の大きさは、交通量・土質・雨量・水の流量・流速・廃道になるまでの年月で決まる。したがって、当初の道幅とはほとんど無関係となる。
⑤ 特に山間部の道は、廃道になると数年で全面に雑草や低木類が繁茂し、かなりの雨でも流水がなくなり

土砂の堆積が始まる。このような経過をたどり、溝状となった古い道が今日現在でも町内の各所に見られる。

以上が地元研究者が東山道と主張する主な論拠である。では次に、道、特に東山道とは考えられない論拠についてである。

永い間、古代の道路は幹線道路でも、踏み分け道をいくぶん整備・拡幅した屈折の多い小路であり、幅1～2ｍ程度のものと思われてきた。しかし、近年の発掘調査の成果によれば、畿内の都城に連なる下ツ道が23ｍ、難波大道が18ｍもの道幅があり、県内の新田町『下新田遺跡』でも新田町から下野国へ向かう東山道とみなされる幅12ｍ程の道路状遺構が検出されている。（木下良編『古代道路』、吉川弘文館、1996年）

これらに代表される官道は直線的に路線をとり、道の両脇に側溝を有し、道幅は6～13ｍもある計画的な大道で、路面に強度を得るための様々な地業を施している。また、牛車の轍と考えられる硬化面が各地で指摘されており、都とその周辺のみならず、地方に於ても牛車の往来が比較的頻繁であったことが予想されている。かくも律令政府が整備した官道は、計画的かつ規則的であったのである。

以上に、当遺構が東山道であると言う論拠と官道たる道とは認めがたいという論拠の概略をまとめた。

最後に筆者の論であるが、こうしてみると二つの論の根底には大きな違いがあることに気付く。それは、前者が標高410ｍ前後を測る緩斜面に、そして後者は基本的に平野部に於て検出されているのである。いかに律令制の理念をもって作道された計画道路であっても、山道・峠道を畿内の道や平野部の道の概念で推し量ることは、当時の土木技術や構築後の恒常的補修の必要性といった側面からも少々困難と考えられる。

話は前後してしまったが、筆者は溝状遺構は基本的に道跡と考えている。ただし、東山道であるか否かは別としてである。その論拠は前述した地元の研究者の論に準ずるものであり、後に実施された調査区外の試掘調査（第79図）である。試掘の結果、現道の下よりは順に、浅間Ａ軽石（天明３年・1783年降下）を含む水平な硬化面、浅間Ｂ軽石（天仁元年・1108年降下）を敷く水平な硬化面、そしてその横下より浅間Ｂ軽石が純層で入る溝状遺構の延びが確認されている。溝状遺構の上より確認された水平な硬化面は、鎌倉期と江戸期の道跡と判断されるもので、硬化面下の堆積層は皿状を呈していた。本遺跡のように地形的に制約の多い場所では特に、道の下には道が走るという踏襲性があるのであろう。

結論として、平野部の道の概念をもって山の道・峠の道を画一的に考えるのは少々無理があろう。例え栃木県南那須町の「鴻野山地区推定東山道」に見られるように、丘陵を跨ぎ作道されている調査事例があったとしてもである。いずれにせよ今回の調査では、確実に道、それも東山道と確定し得るだけの成果は見いだせなかった。しかしながら、山間部に於ける官道を考えるうえでは大きな資料と成り得たと考える。

第５節　近世

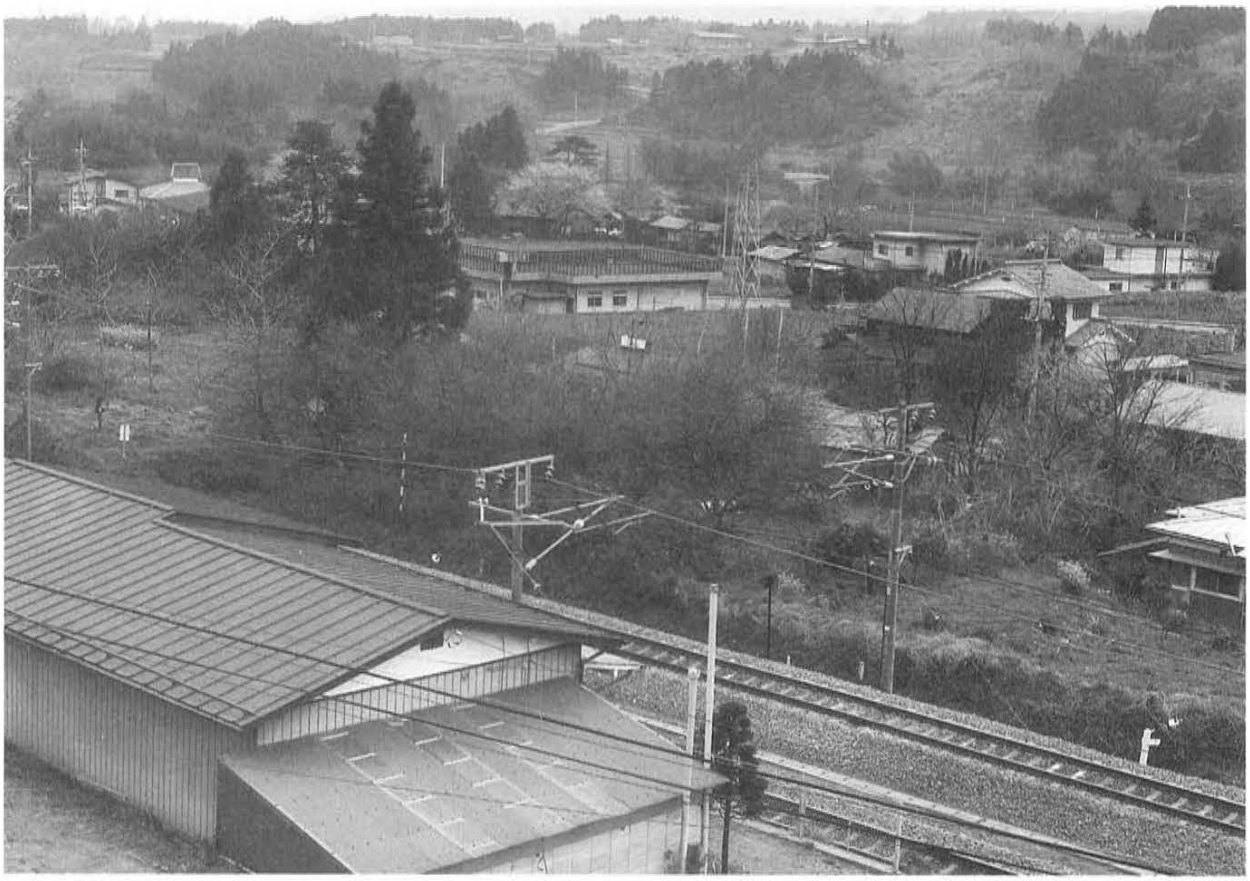
便宜上３区画とした畠跡は、畝の走行方向と重複関係より４枚程度と予想され、何れの畝合いにも浅間Ａ軽石が充填されていた。一枚あたりの作付け面積については、後世の撹乱や耕作によって不確定である。耕作物は不明であり、畝合いによる規模は２～３号耕作跡が概ね同様で、４号耕作跡がやや広くなる。

１号道跡は、１号溝状遺構が完全に埋没した後に作道されており、埋土には浅間Ａ軽石が含まれていた。走行方向は１号溝状遺構と交差した後に、同溝と並走している。硬化面はＣ－２グリッド内で途絶しているが、規模・形状より、調査区外で実施した試掘調査（第79図）により検出された江戸期の道に連絡する可能性が高いと推察される。

参考・引用文献

『松井田町誌』　松井田町誌編さん委員会　1985
田口修　『五料山岸遺跡』　－上信越自動車道（工事用道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－　松井田町教育委員会　1991
『芳賀東部団地遺跡Ⅱ』　－古墳～平安時代編　その２－　前橋市教育委員会　1988
伊藤簾倫他　『下新田遺跡』　山武考古学研究所　1992
木下良　『古代を考える古代道路』　吉川弘文館　1995
『文化財信濃』　－東山道サミット特集号　第16号　第３・４号－　長野県文化財保護協会　1990
『歴史の道調査報告書　東山道』　－群馬県歴史の道調査報告書第十六集－　群馬県教育委員会　1983
高橋美久二　『古代交通の考古地理』　大明堂　1995
宮本長二郎　『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版　1996

写　真　図　版



1．ＪＲ信越線・国道18号間調査前現況（北より）

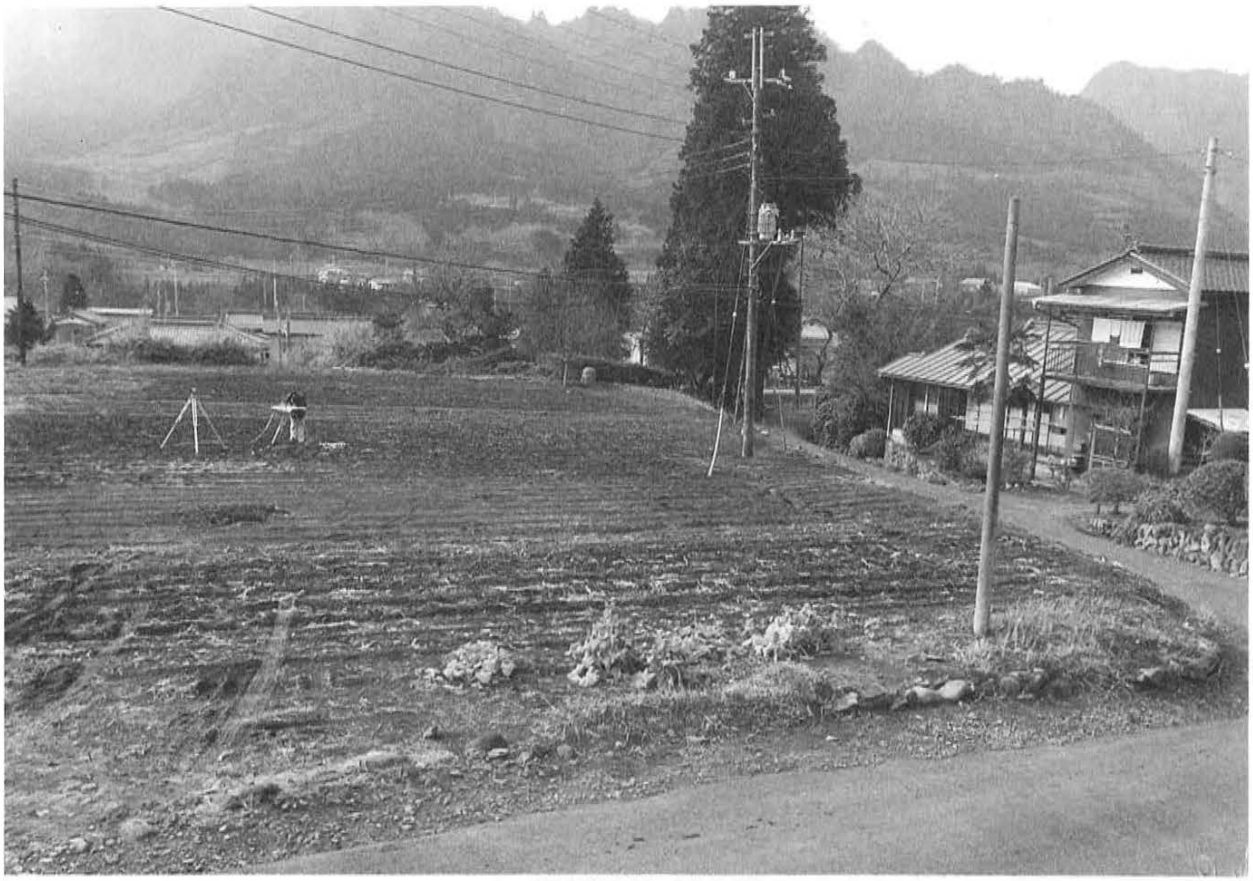
2．国道18号南側調査前現況（北より）

五料平遺跡

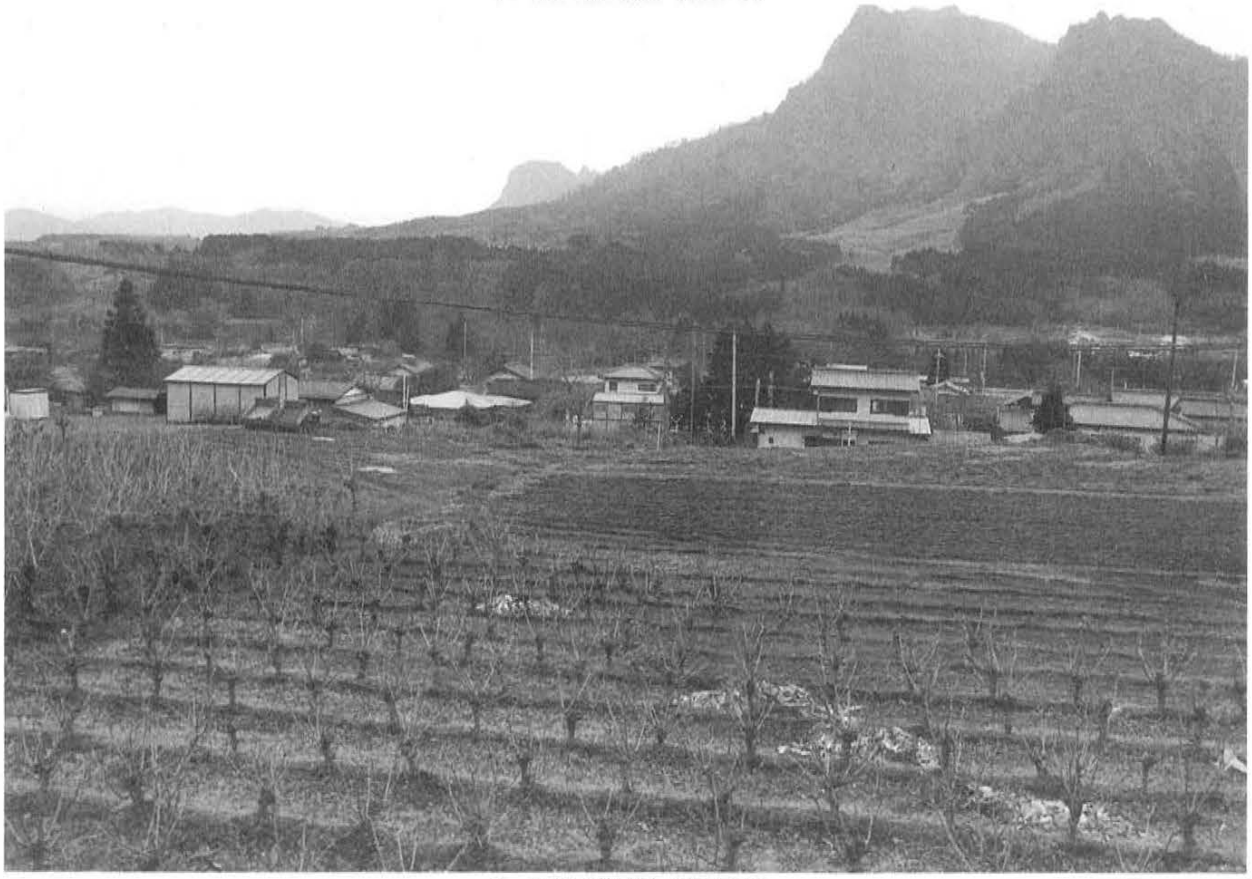
図版2

1．ＪＲ信越線南側調査前現況（北より）

2．ＪＲ信越線町道間調査前（南より）



1．調査前現況（北より）



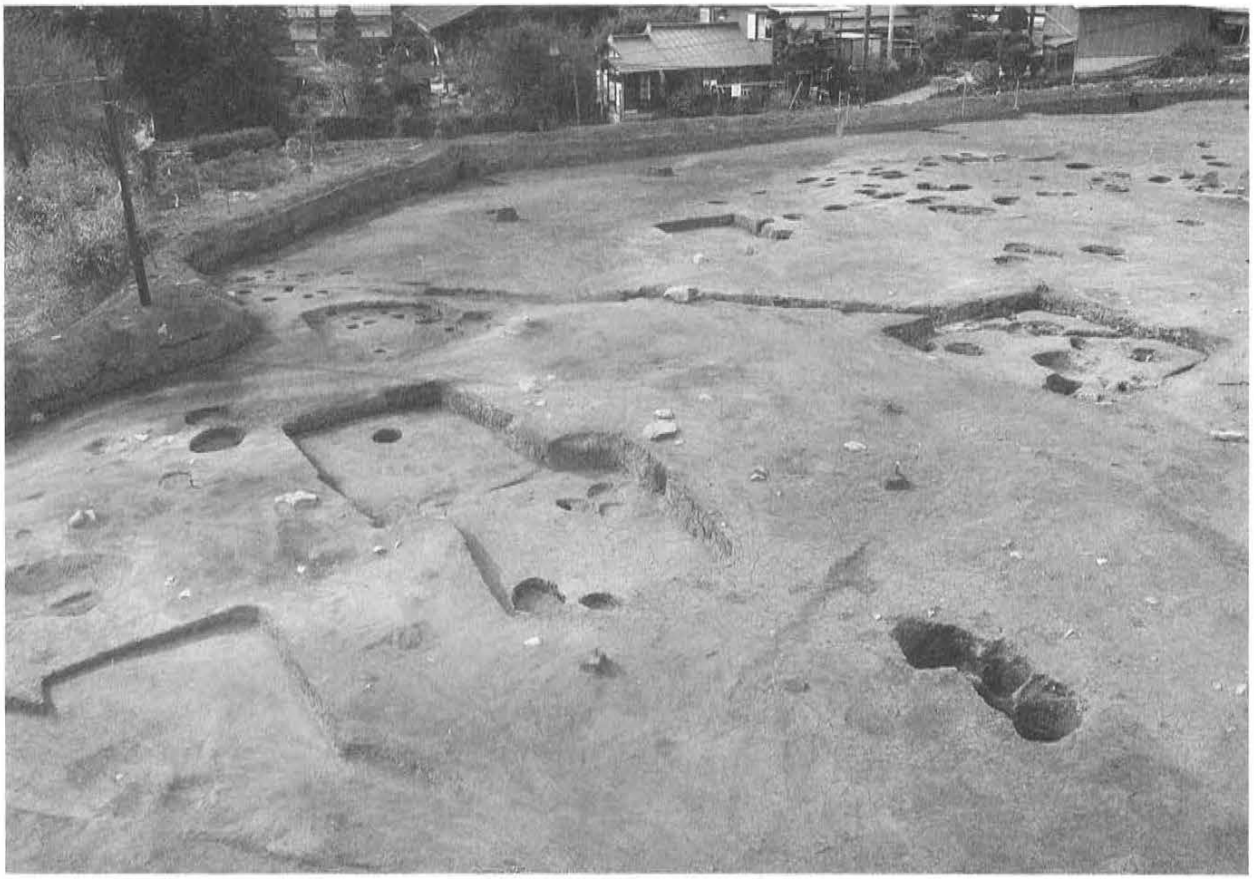
2．調査前現況（北より）

五料平遺跡

図版4

1．調査区全景（北西より）

2．調査区全景（南より）



1．調査区全景（南より）

2．調査区全景（南西より）

五料平遺跡

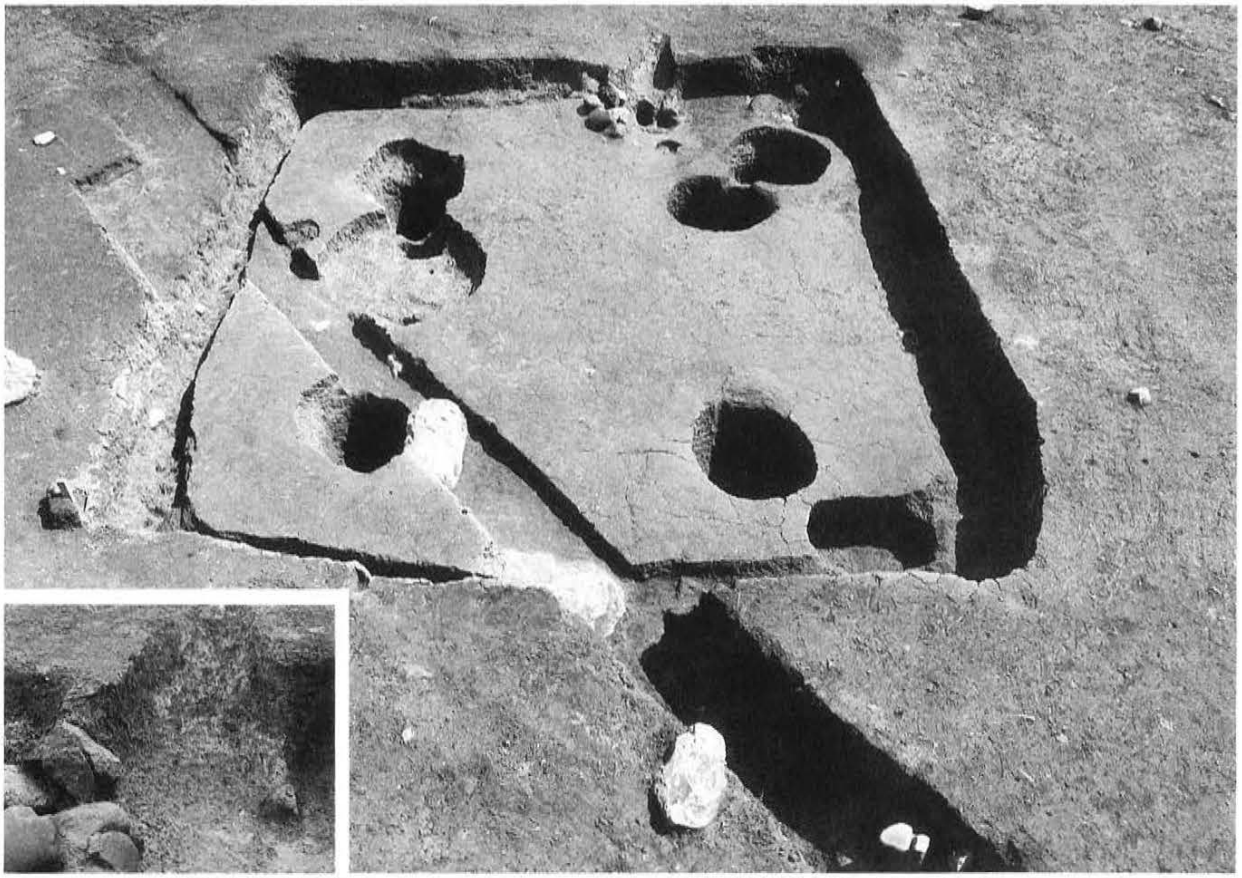
図版6

1．1号住居跡完掘状況（南西より）

2．2号住居跡完掘状況（西より）

3．3号住居跡完掘状況（西より）

4．3号住居跡遺物出土状況（西より）



5．4号住居跡構築状況（北西より）

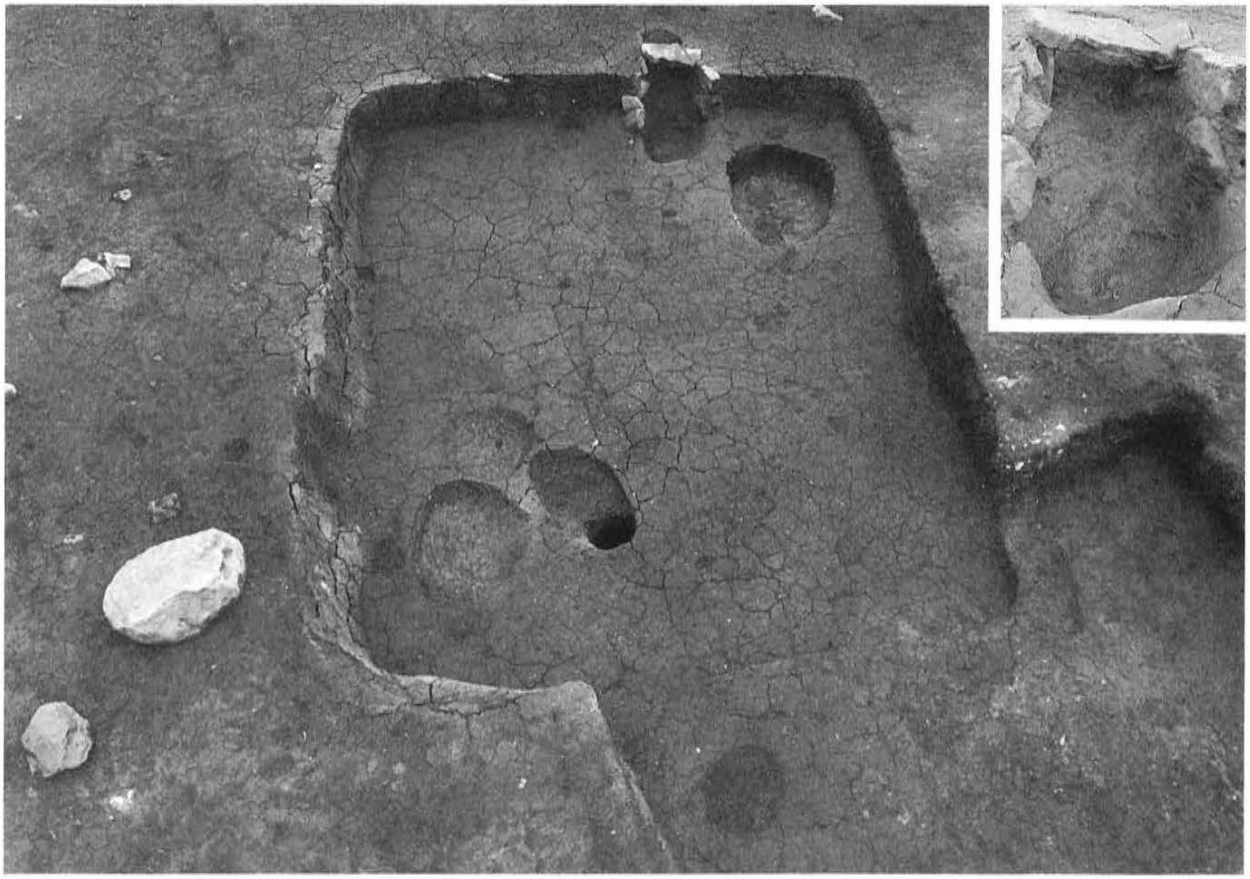
6.同カマド出土状況(北西より)

図版7

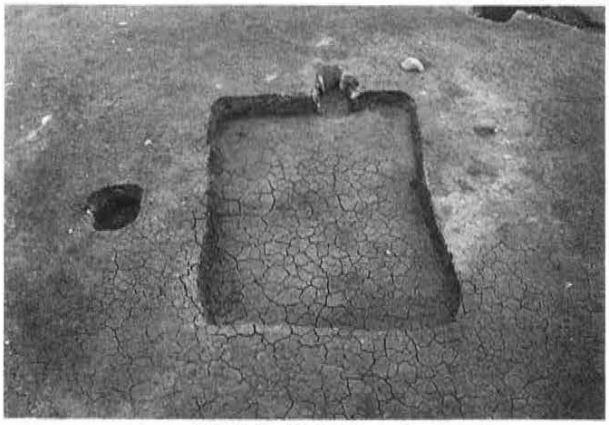
1．4号住居跡遺物出土状況（北西より）

2．同遺物出土状況（西より）

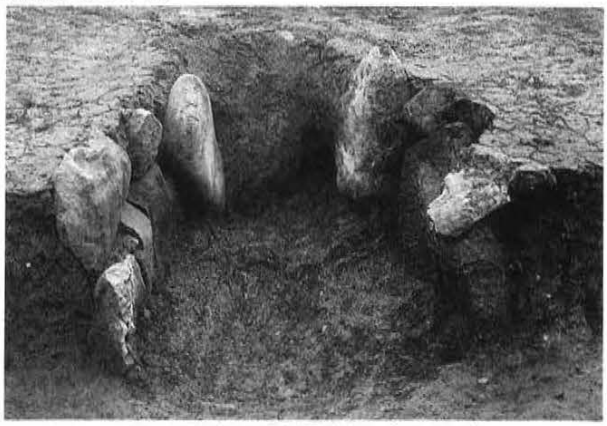
4.同カマド出土状況(西より)



3．5号住居跡構築状況（西より）



5．6号住居跡構築状況（西より）

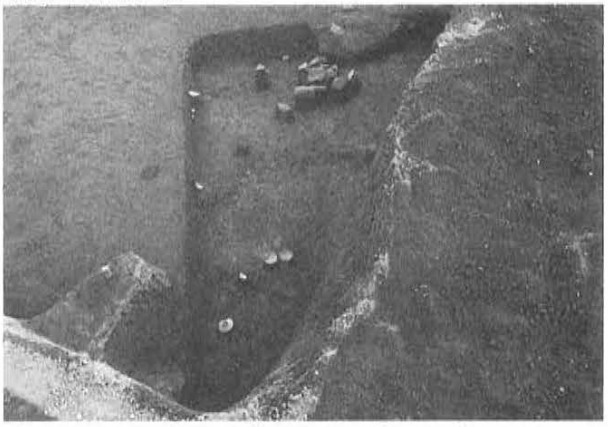


6．同カマド完掘状況（西より）

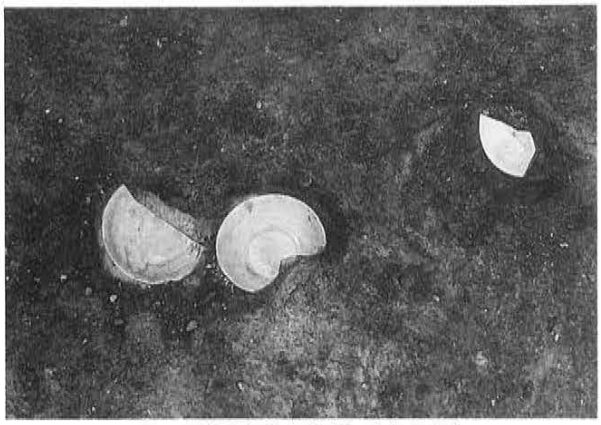
図版8

1．7号住居跡完掘状況（北西より）

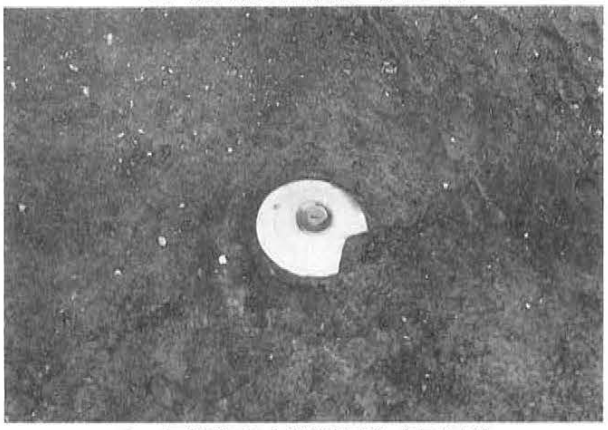
2．同カマド遺物出土状況（北西より）



3．同遺物出土状況（西より）



4．同遺物出土状況（東より）



5．同遺物出土状況近影（南より）

1．1号掘立柱建物跡（南より）

2．1号集石出土状況（北東）

3．2号集石出土状況（南東より）

4．3号集石出土状況（西より）

5．4号集石出土状況（南より）

五料平遺跡

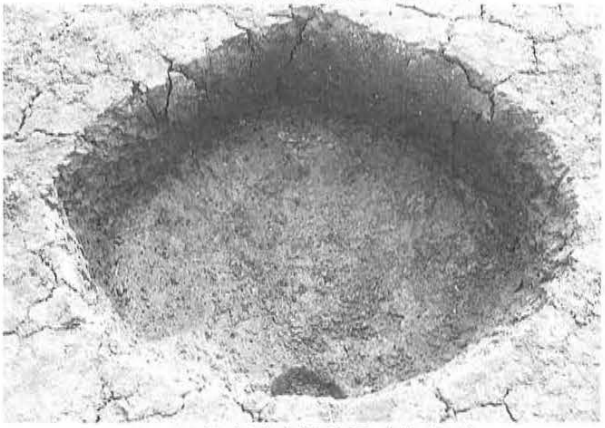
図版10

1．6号集石出土状況（北西より）

2．1号土坑完掘状況（南より）

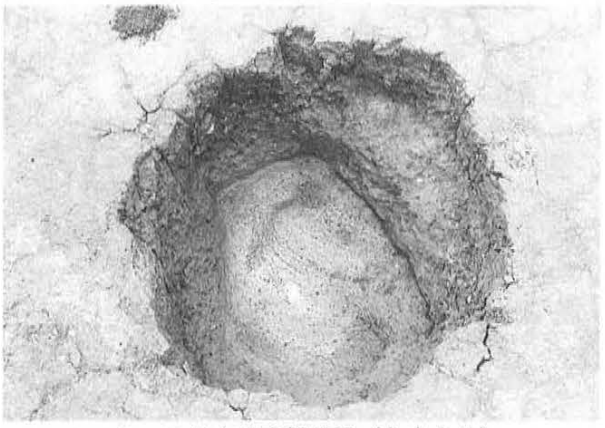
3．2号土坑完掘状況（東より）

4．3号土坑完掘状況（東より）



5．31号土坑完掘状況（北より）

6．32・33号土坑完掘状況（北東より）

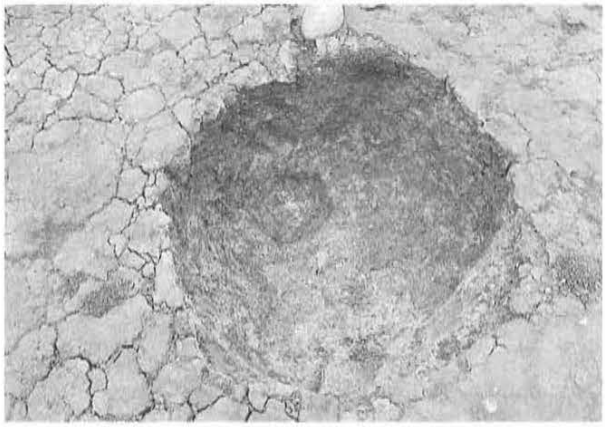


7．38号土坑完掘状況（北東より）

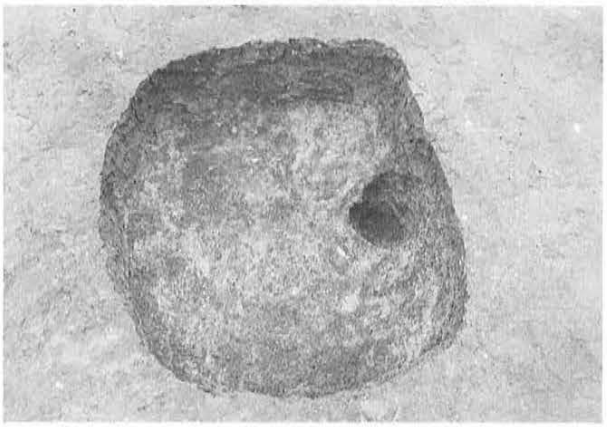
8．43・61号土坑完掘状況（北西より）

1．51号土坑完掘状況（東より）

2．57号土坑完掘状況（北東より）

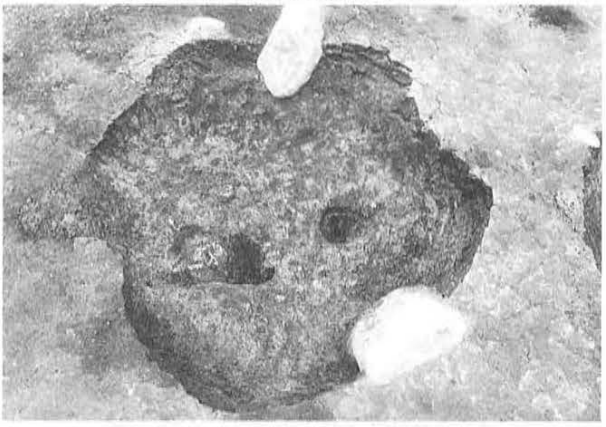


3．64号土坑完掘状況（南西より）

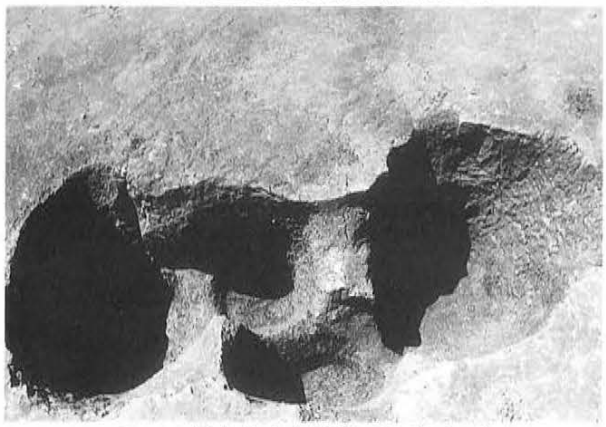


4．69号土坑完掘状況（南より）

5．72号土坑完掘状況（南東より）



6．73号土坑完掘状況（南東より）



7．76号土坑完掘状況（北東より）

8．85号土坑完掘状況（南より）

五料平遺跡

図版12

1．2号溝遺物出土状況（東より）

2．1トレンチ（東より）

3．2トレンチ（東より）

4．3トレンチ（東より）

5．4トレンチ（東より）

6．5トレンチ（東より）

7．6~8トレンチ(南より)

8．9~11トレンチ(北より)

9．12~15トレンチ(南より)

1．17･18B軽下状況(南西より)

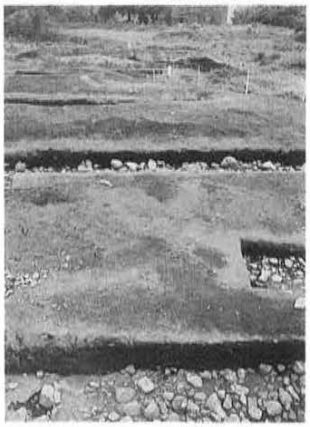
2．19~21トレンチ(北より)

3．21トレンチ確認状況(西より)

4．22トレンチ（西より）

5．23トレンチ（西より）

6．24トレンチ（西より）

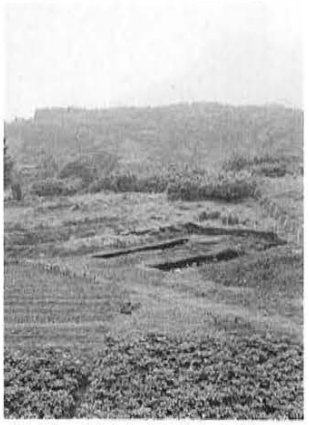

7．22~25トレンチ(北より)

8．25トレンチ（東より）

9．23トレンチ土層断面(北より)

10．22トレンチ土層断面(西より)

11．24トレンチ土層断面(西より)


12．24~27トレンチ(北より)

13．26トレンチ（西より）

14．27トレンチ（東より）

15．28トレンチ（西より）

16．国道トレンチ全景（北より）

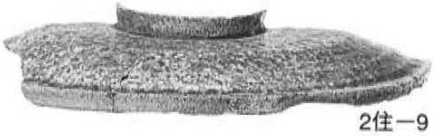
図版14

2住－1

2住－2

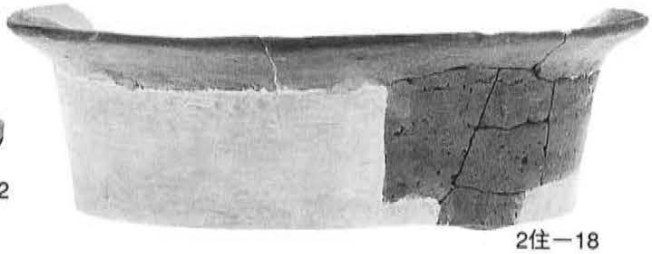
2住－3

2住－8


2住－9

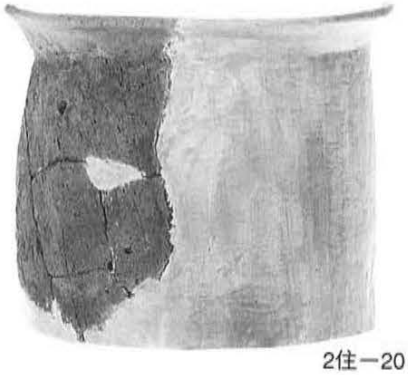
2住－11

2住－12


2住－18

2住－21

2住－19


2住－20

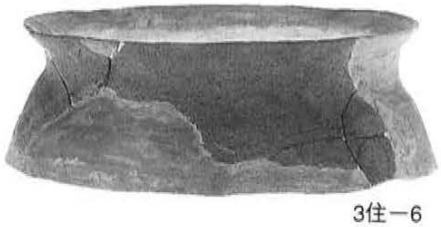
2住－22

2住－23

3住－2

3住－4

3住－5


3住－6

3住－8

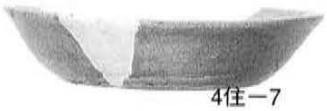
2・3号住居跡出土遺物

4住－2

4住－3

4住－4

4住－5


4住－7

4住－8

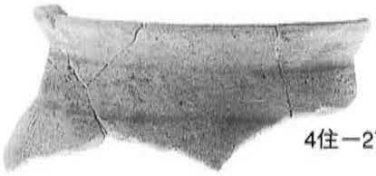
4住－9

4住－16

4住－18

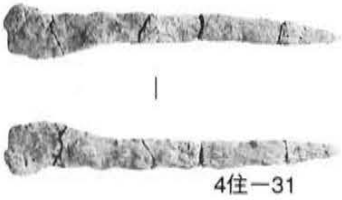
4住－22

4住－21


4住－27

4住－29

4住－30


4住－31

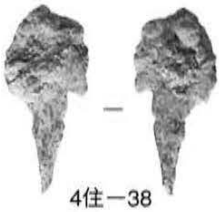
4住－32

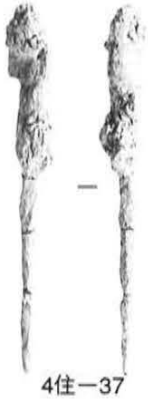
4住－33

4住－34

4住－35

4住－36


4住－38


4住－37

4住－39

4住－40

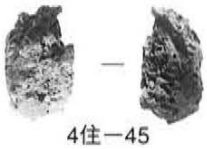
4住－41

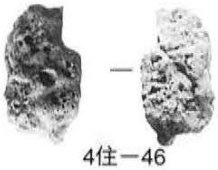
4住－42

4住－44

4住－47

4住－43


4住－45


4住－46

4住－48

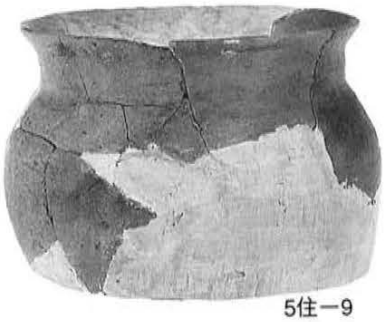
4号住居跡出土遺物

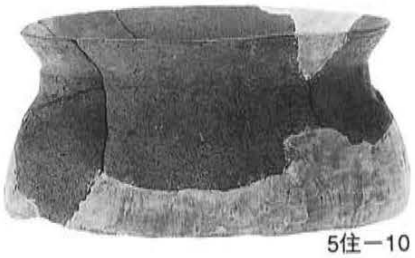
図版16

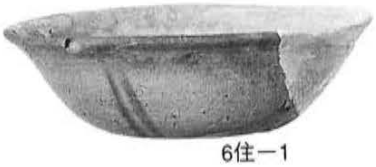
5住－1

5住－5

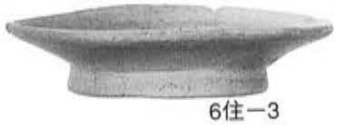
5住－8


5住－9

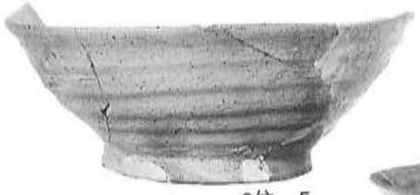

5住－10

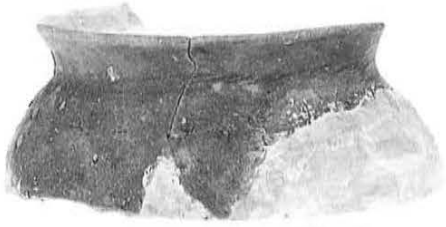

6住－1

6住－2

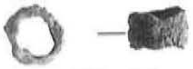

6住－3

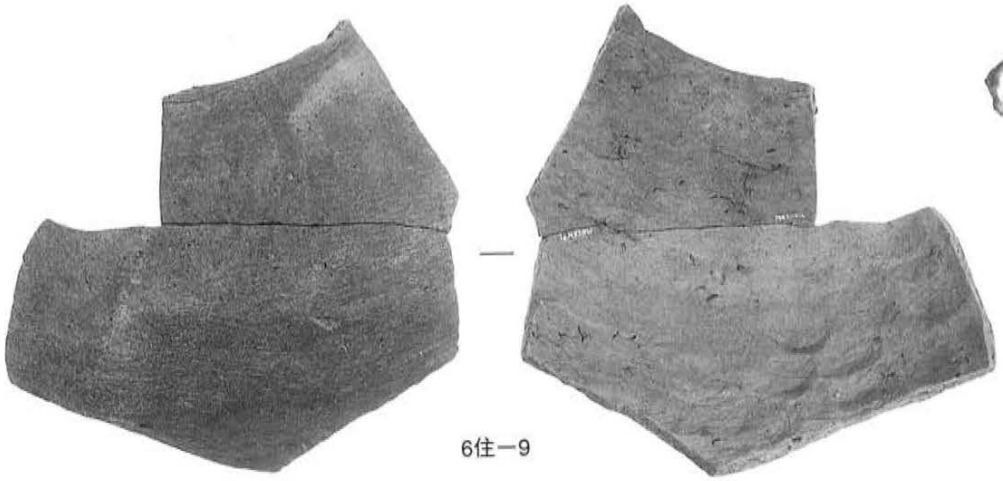
6住－4


6住－5

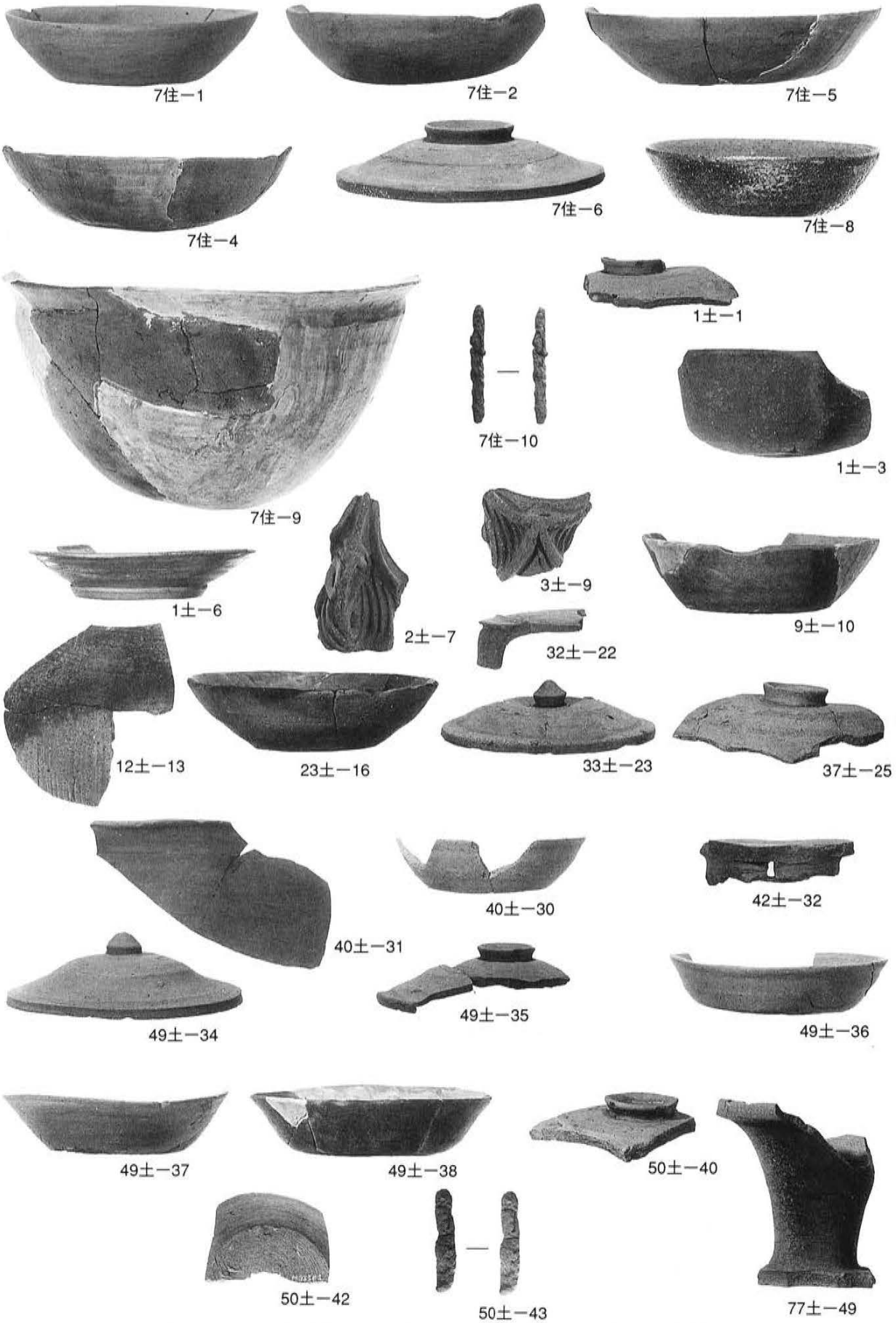

6住－8

6住－6


6住－10

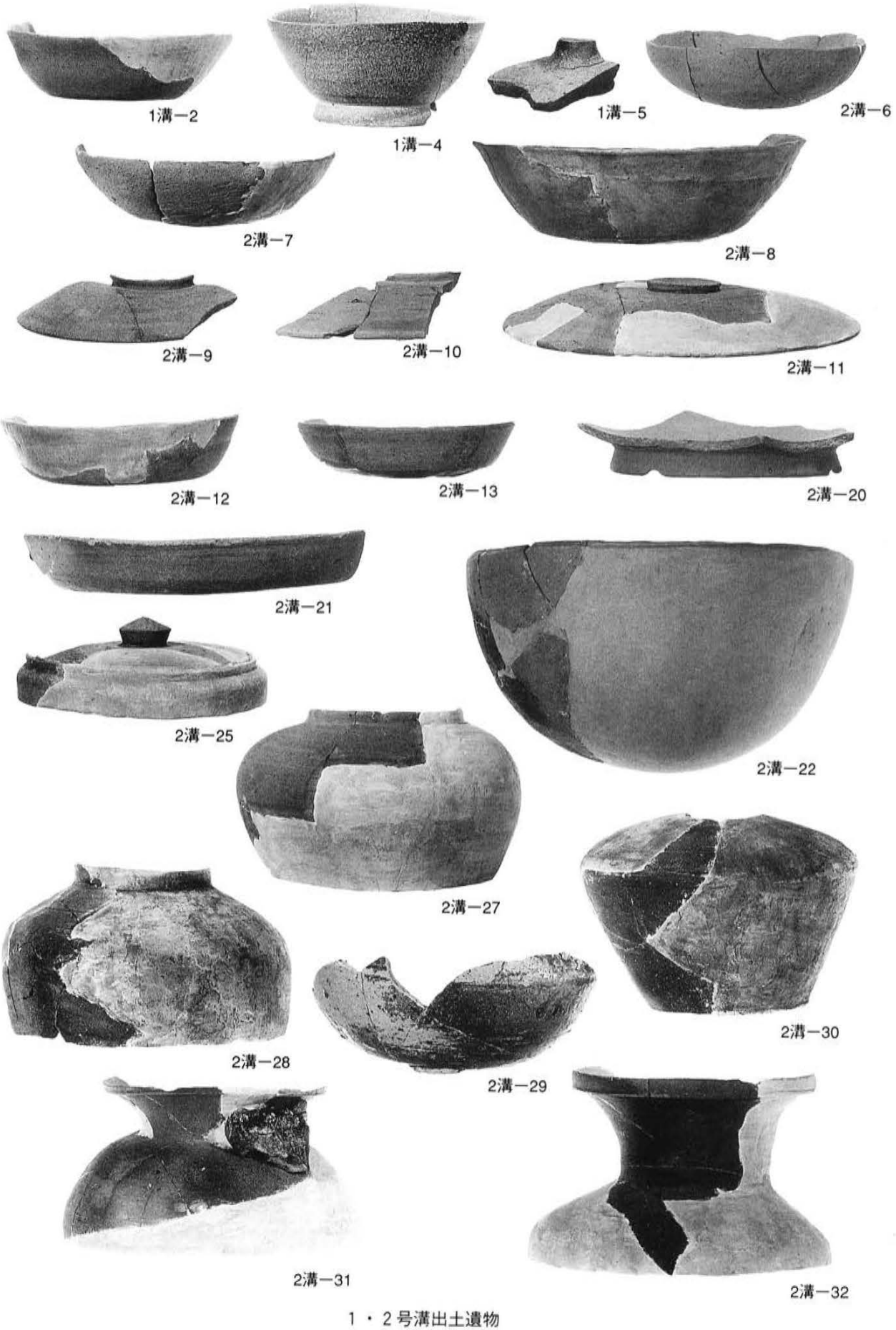

6住－9

5・6号住居跡出土遺物



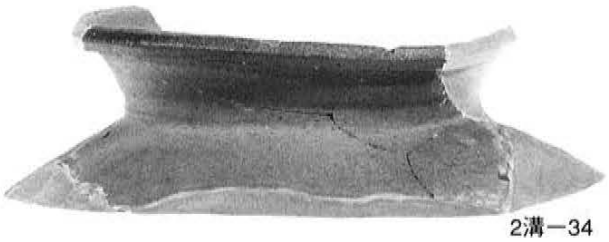
7号住居跡・1・2・9・12・23・33・37・40・42・49・50・77号土坑出土遺物

図版18

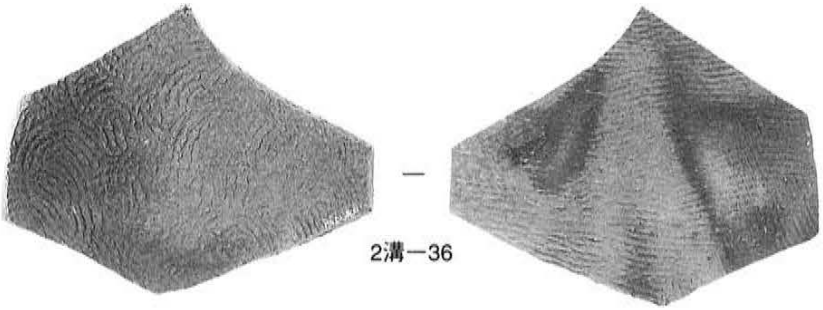


1・2号溝出土遺物

2溝－33


2溝－34

2溝－35


2溝－36

2溝－37

2溝－39

2溝－40

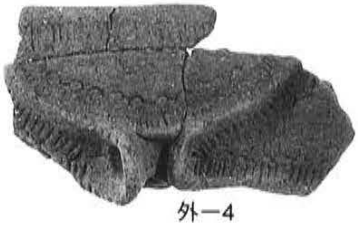
2溝－41

2溝－42

外－1

外－2

外－3


外－4

外－5

外－6

外－7

外－8

外－9

外－10

外－11

外－12

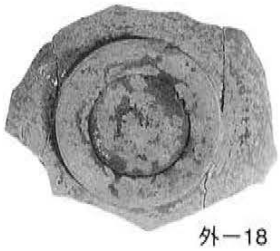
外－13

外－14

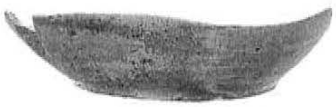
外－15

外－19

外－20

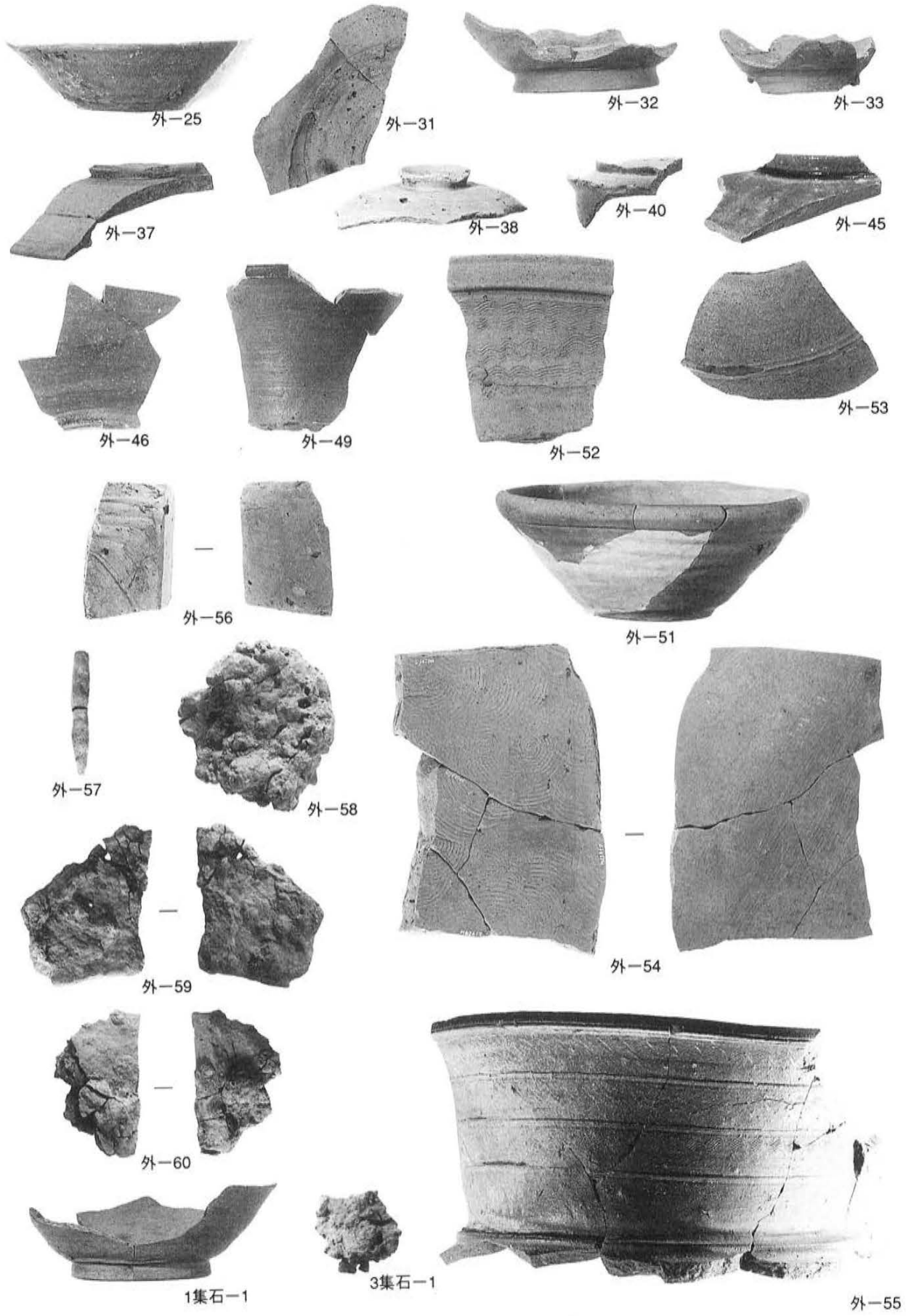

外－18

外－21


外－23

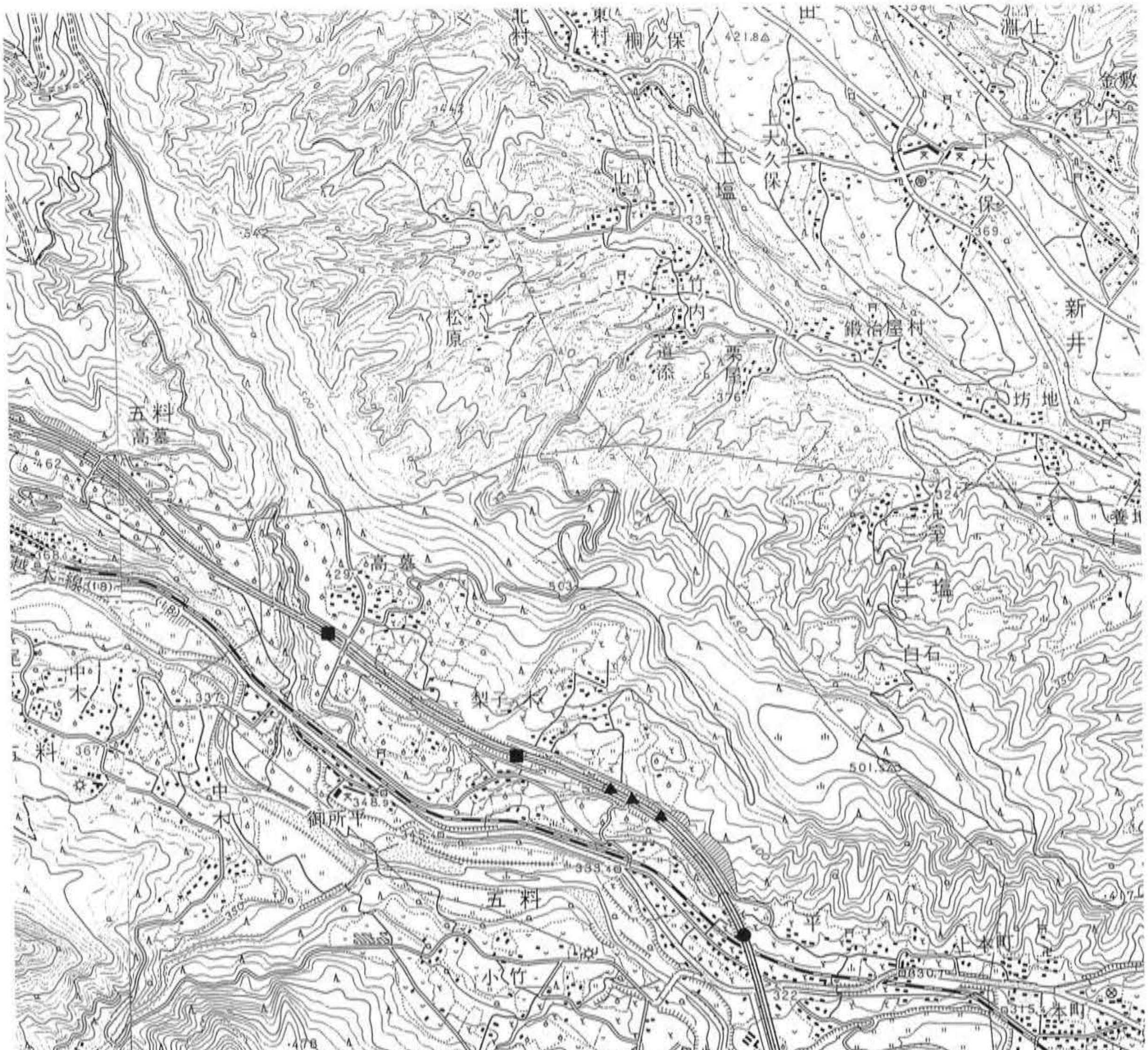
2号溝・遺構外出土遺物

図版20



1・3号集石・遺構外出土遺物

写　真　図　版



●－五料平遺跡　▲－五料野ヶ久保遺跡　■－五料稲荷谷戸遺跡

500m 0 500 1000 1500

図版1

1．空撮（国土地理院1991年撮影ＫＴ－91－ＩＸ　Ｃ７－３）

●－五料平遺跡　▲－五料野ヶ久保遺跡　■－五料稲荷谷戸遺跡

五料野ヶ久保遺跡

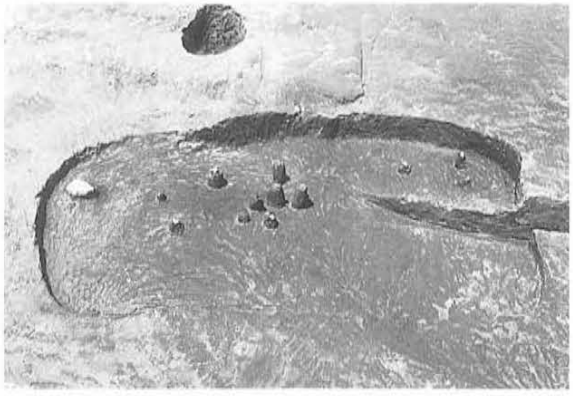
図版2

1．遺跡全景（空撮）

2．東調査区全景（空撮）

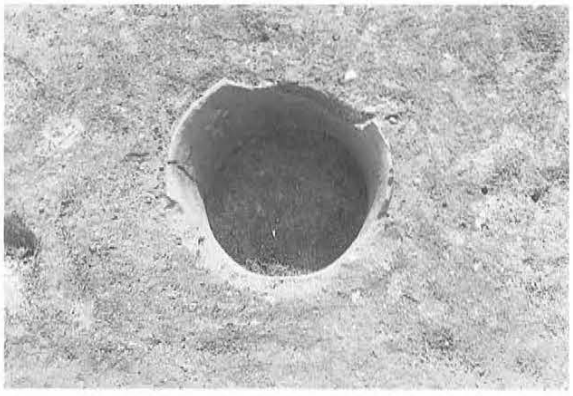
1．東調査区全景

2．同　遠景



3．1号住居跡

4．2号住居跡



5．同　埋設土器

五料野ヶ久保遺跡

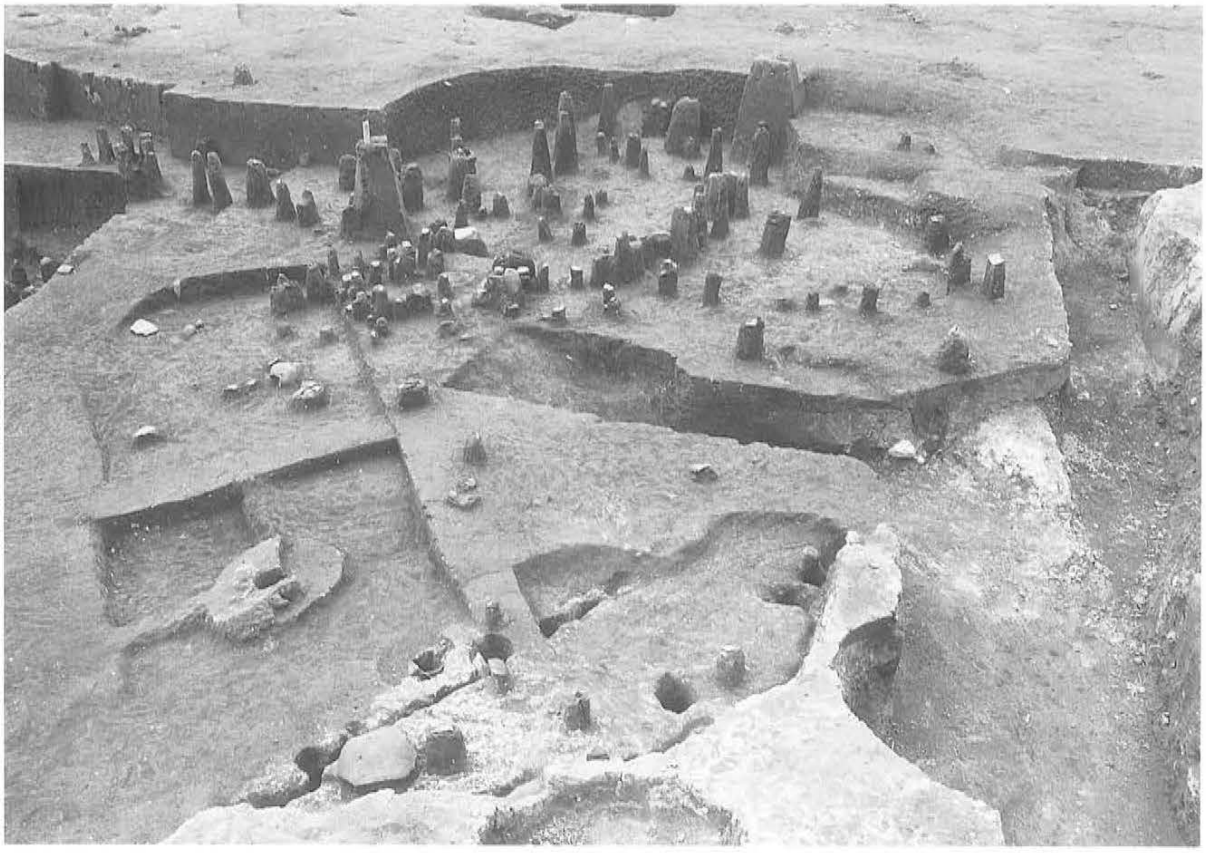
図版4

1．3号住居跡

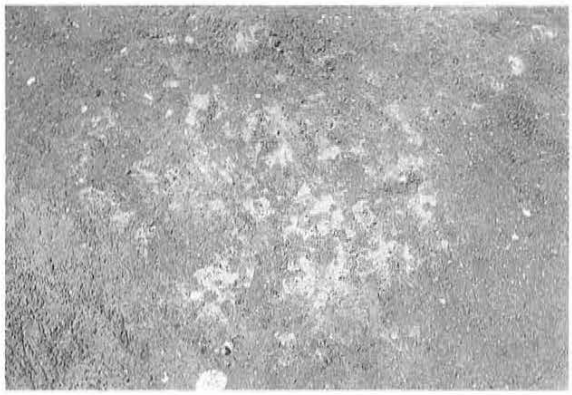
2．6号住居跡

3．同　覆土堆積状況

4．同　遺物出土状況



5．5・7・8号住居跡遺物出土状況



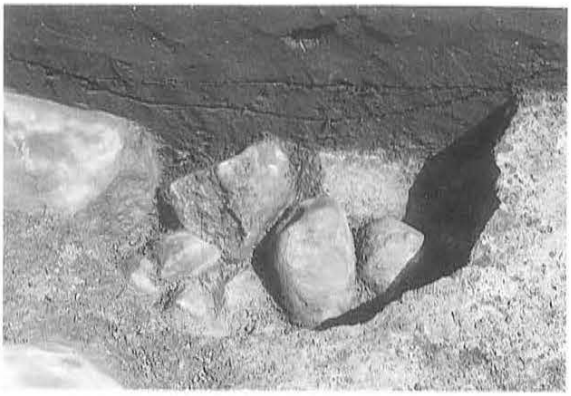
1．5号住居跡焼土

2．7号住居跡埋設土器

3．1号土坑

4．10号土坑

5．17号土坑



6．20号土坑

7．2号集石

8．Q－29グリッド遺物出土状況

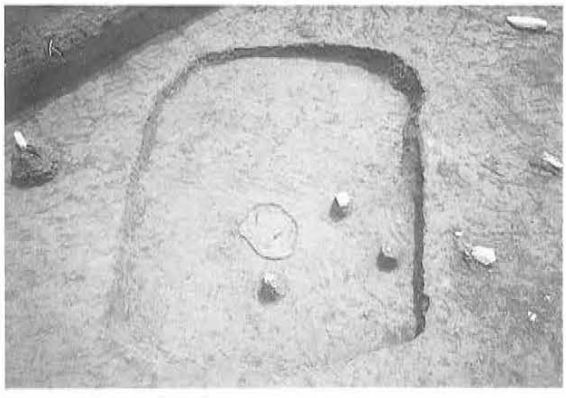
五料野ヶ久保遺跡

図版6

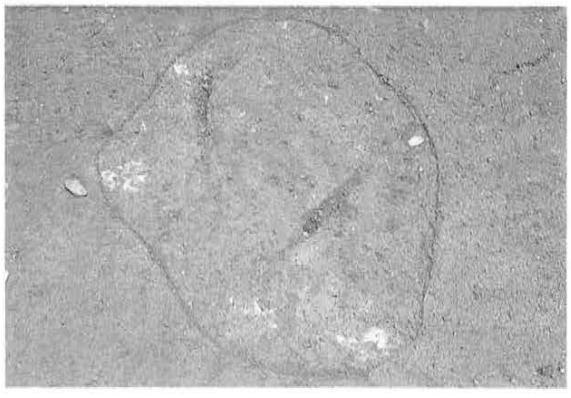
1．中央調査区遺構配置状況（空撮）

2．同　基本堆積土層

3．12号住居跡



4．13号住居跡



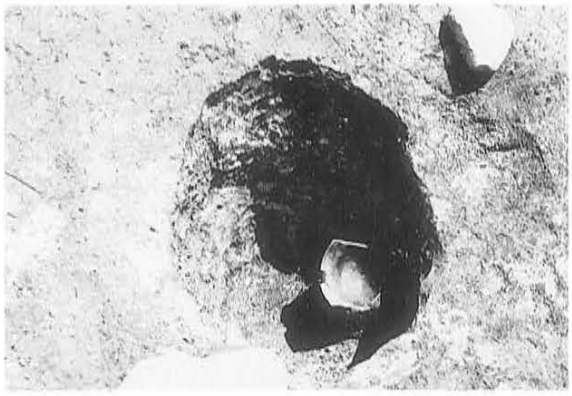
5．同　炉跡

1．17号住居跡

2．同　埋設土器

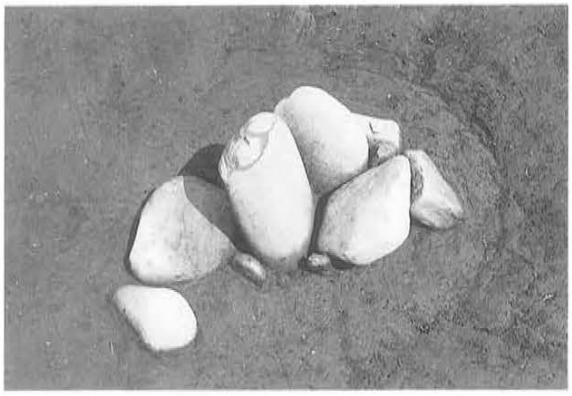
3．28号土坑

4．33号土坑



5．34号土坑

6．３号集石



7．１号配石

8．２号敷石遺構

図版8

1．2号敷石遺構遺物出土状況

2．同

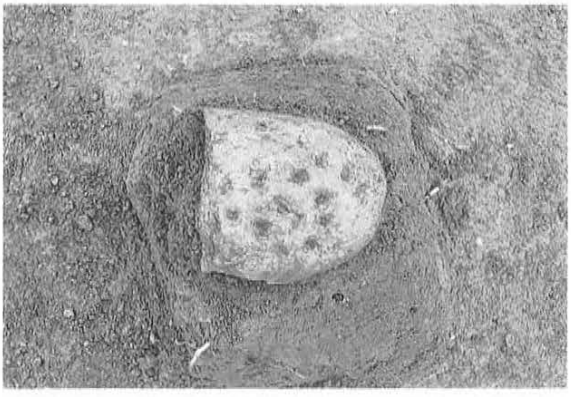
3．1号埋設土器

4．5号埋設土器

5．L－15グリッド遺物出土状況

6．I－16グリッド遺物出土状況

7．J－16グリッド石錘出土状況



8．K－15グリッド多孔石出土状況

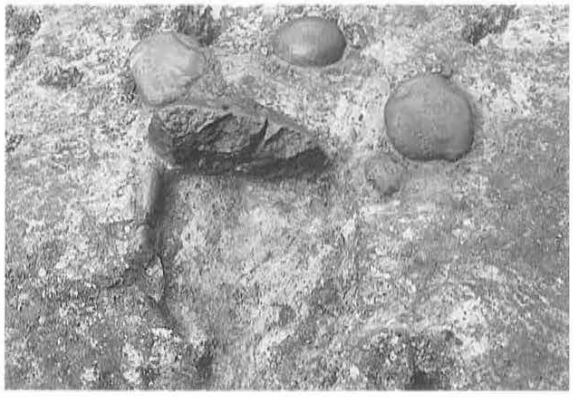
1．西調査区南側遺構配置状況（空撮）

2．同

3．西調査区南側遠景

4．Ⅰ－10グリッド遺物出土状況

5．14号住居跡



6．同　炉跡

7．同　土偶脚部出土状況

8．同　注口土器出土状況

五料野ヶ久保遺跡

図版10

1．15号住居跡

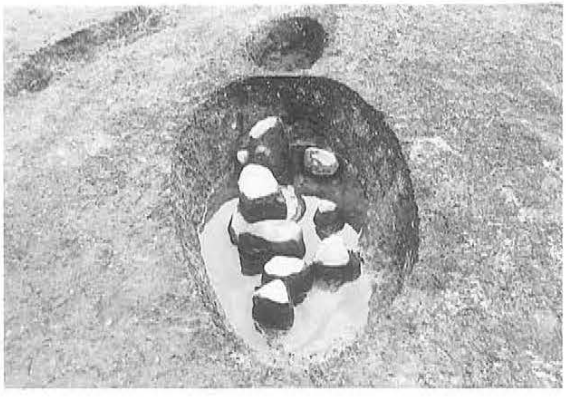
2．同　遺物出土状況

3．27号土坑

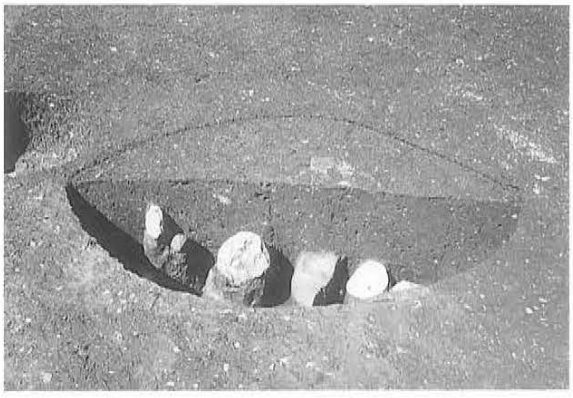
4．同　遺物出土状況

5．38号土坑

6．2号埋設土器



7．40号土坑



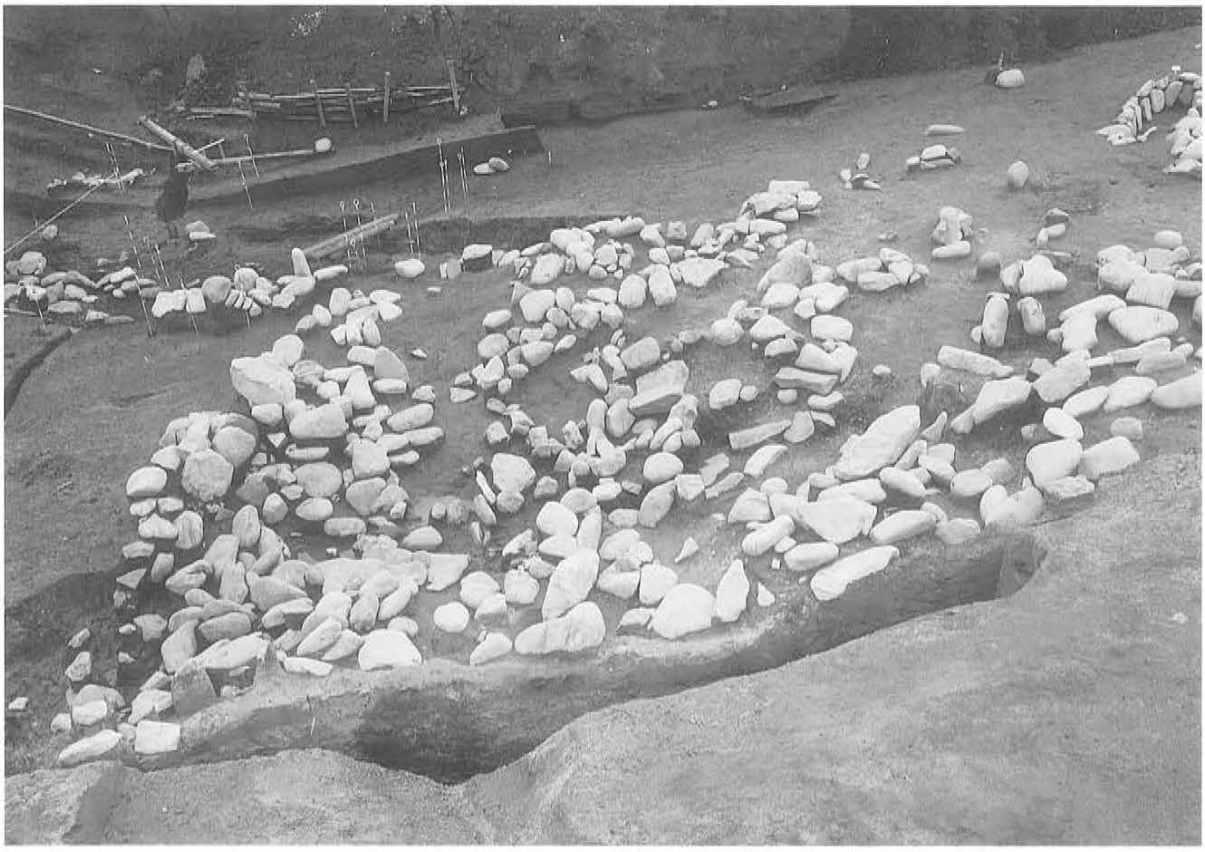
8．同　覆土堆積状況

1．西調査区北側配石遺構全景（空撮）

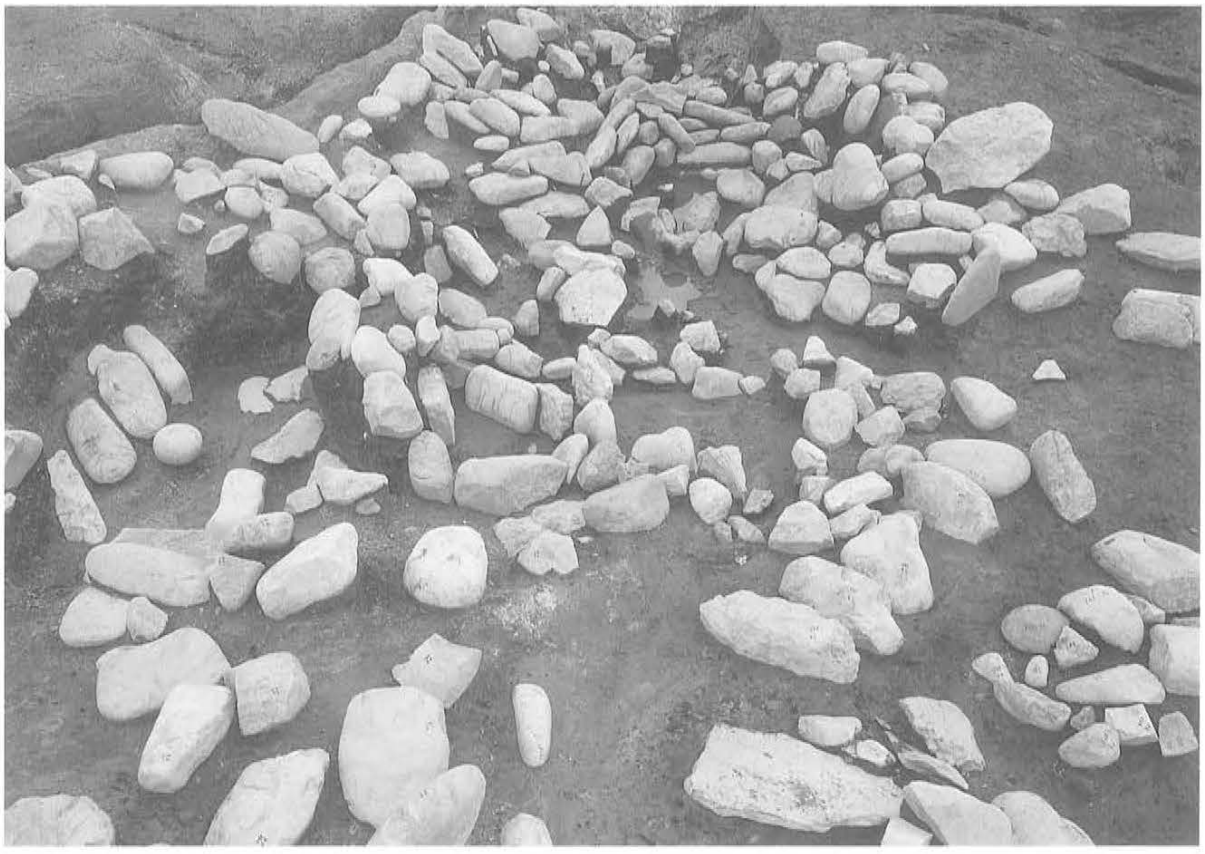
2．同　配石遺構検出状況

五料野ヶ久保遺跡

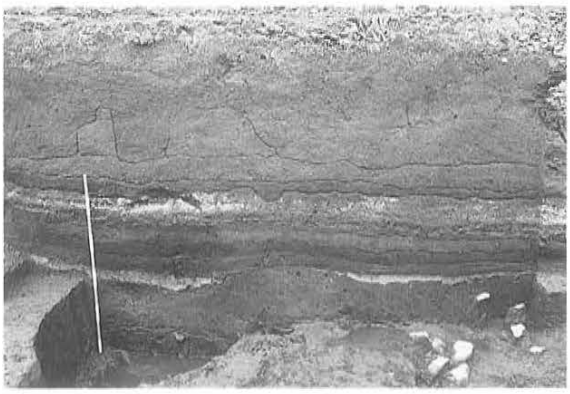
図版12



1．配石遺構検出状況



2．同

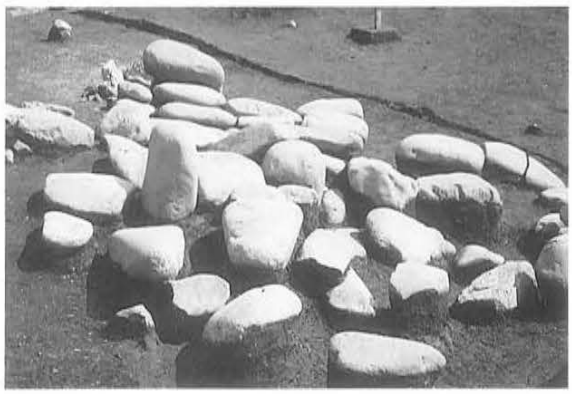


1．基本堆積土層

2．配石遺構検出状況

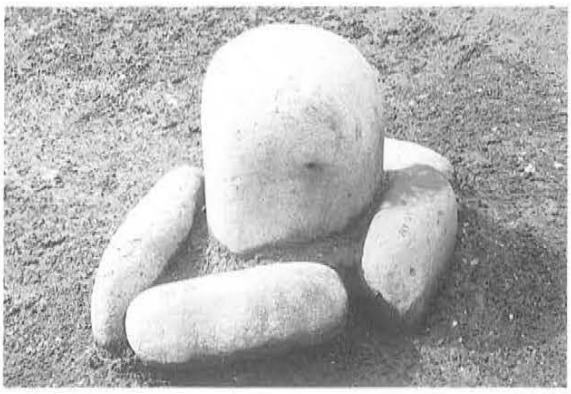
3．同

4．同



5．G－9グリッド配石遺構近景

6．同　立石、組石検出状況



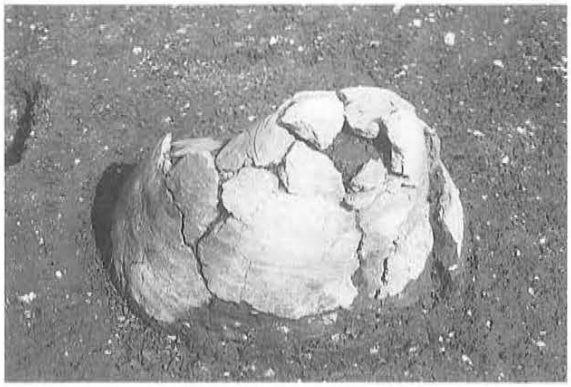
7．同　立石近景

8．F－8グリッド配石近景

五料野ヶ久保遺跡

図版14

1．G－8グリッド遺物出土状況

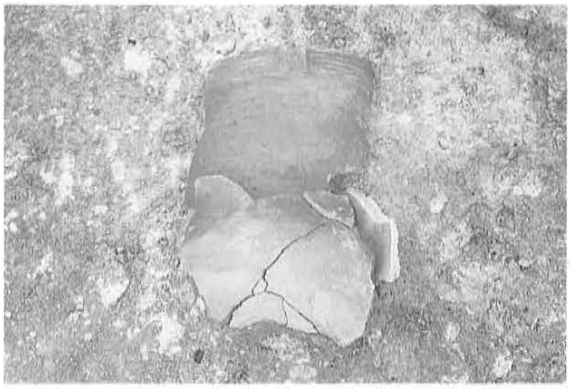


2．同

3．同

4．H－10グリッド遺物出土状況

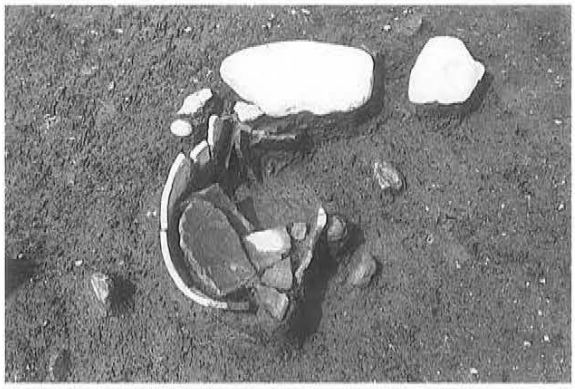
5．G－8グリッド遺物出土状況



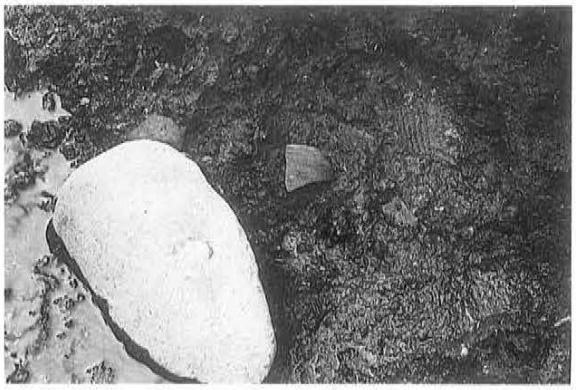
6．F－8グリッド遺物出土状況

7．G－9グリッド遺物出土状況

8．同



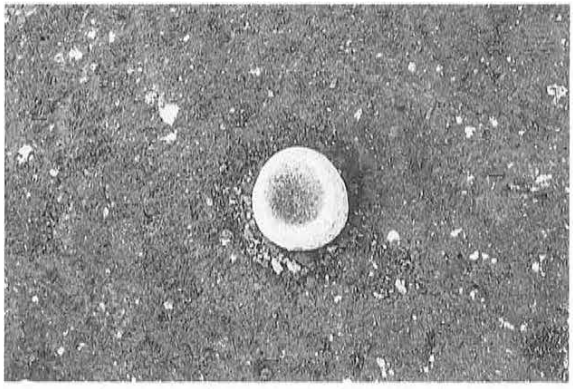
1．Ｆ－９グリッド遺物出土状況



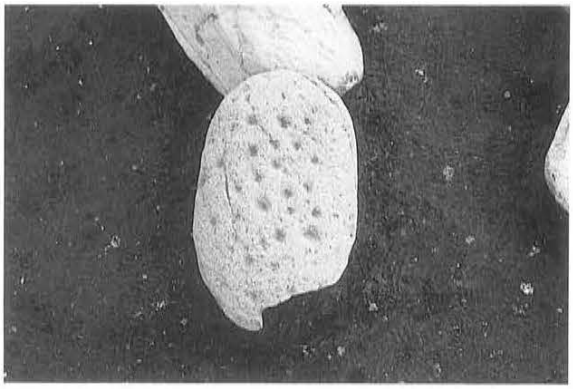
2．Ｇ－９グリッド遺物出土状況

3．Ｇ－８グリッド土偶出土状況

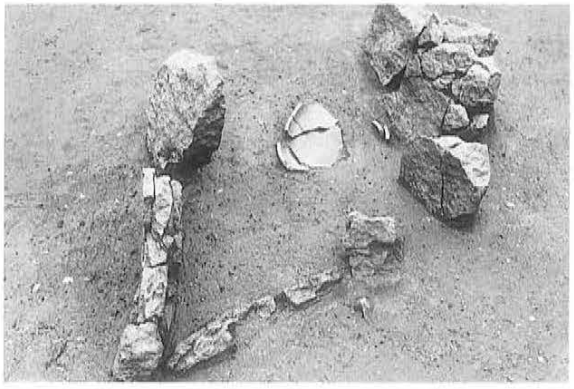
4．Ｆ－９グリッド土偶脚部出土状況



5．Ｆ－９グリッド遺物出土状況



6．Ｆ－８グリッド多孔石出土状況

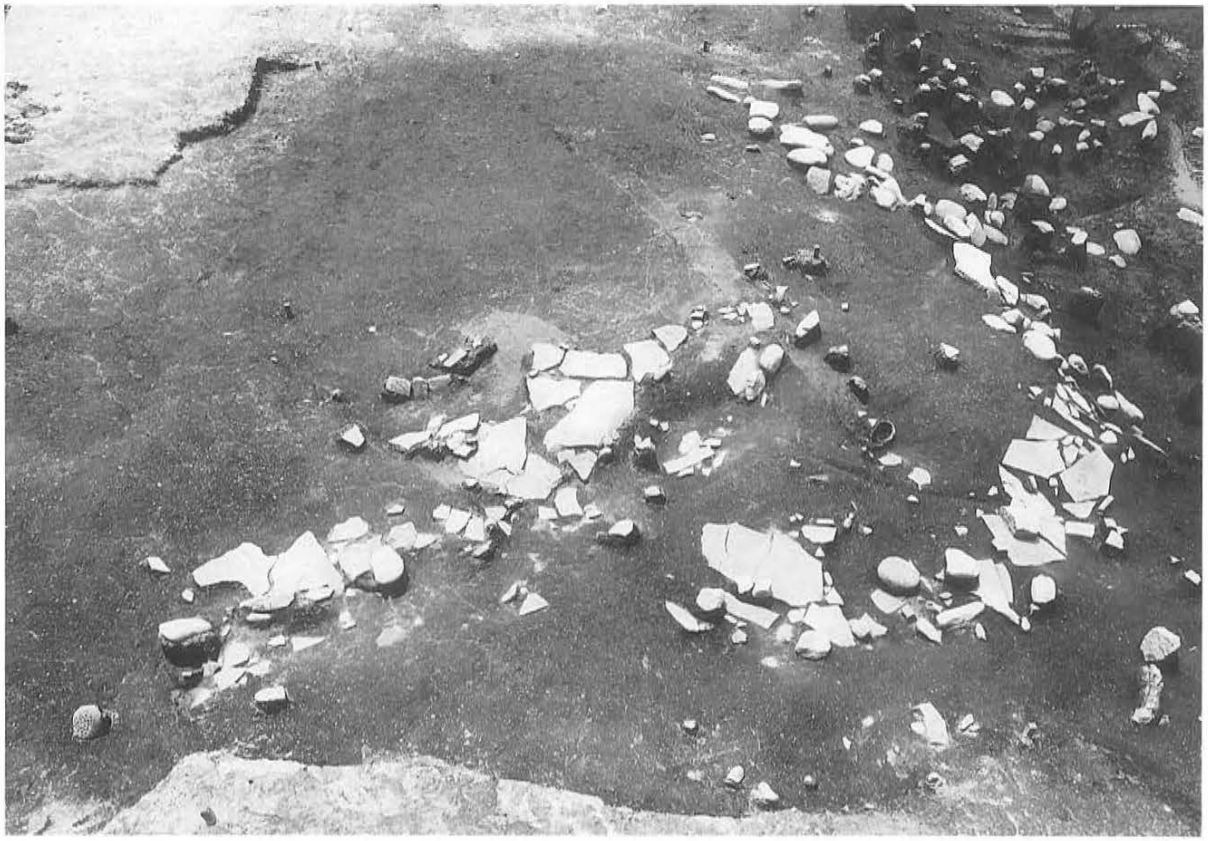


7．１号炉跡

8．２号炉跡

五料野ヶ久保遺跡

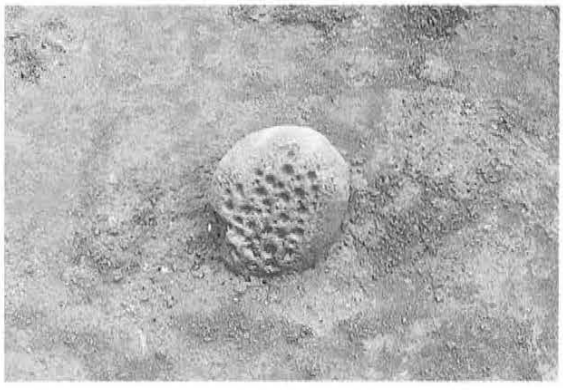
図版16



1．1号敷石遺構全景

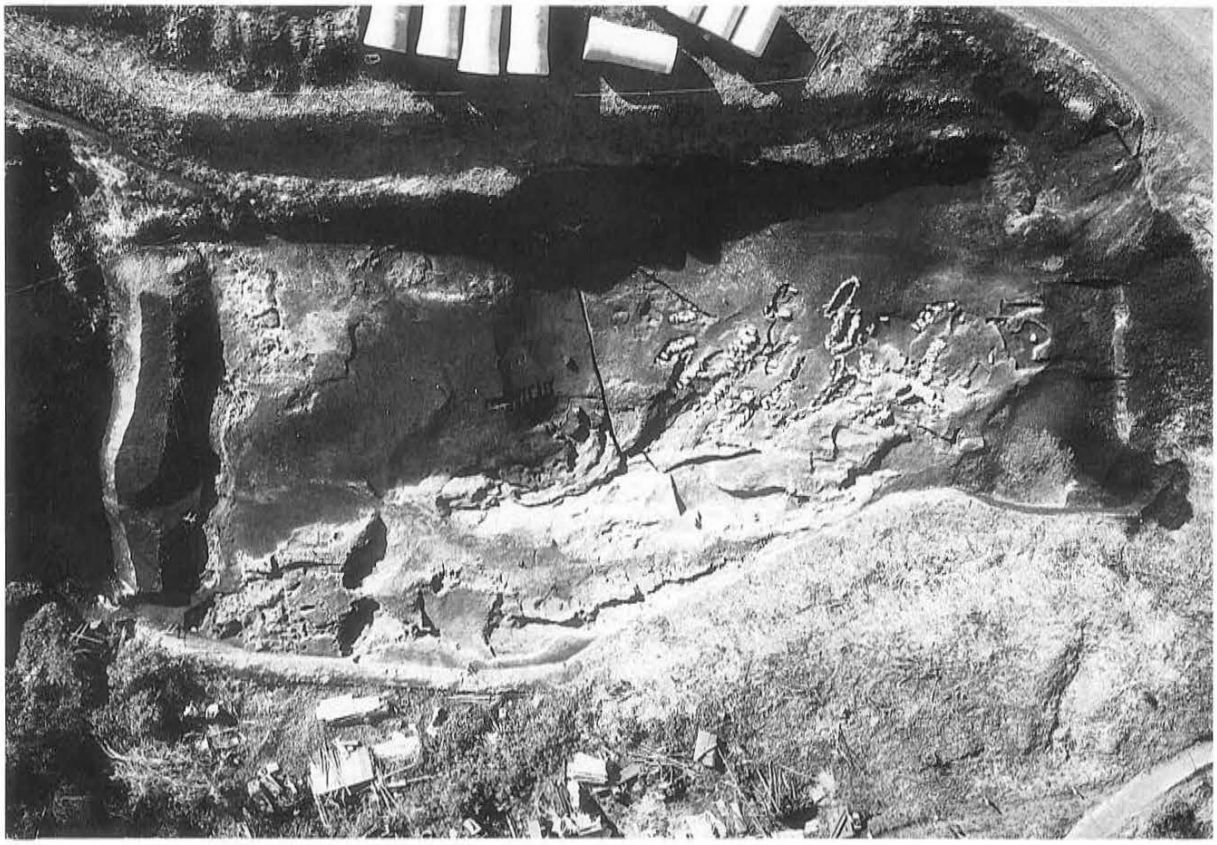
2．同　埋設土器

3．同　脚付石皿型土製品出土状況

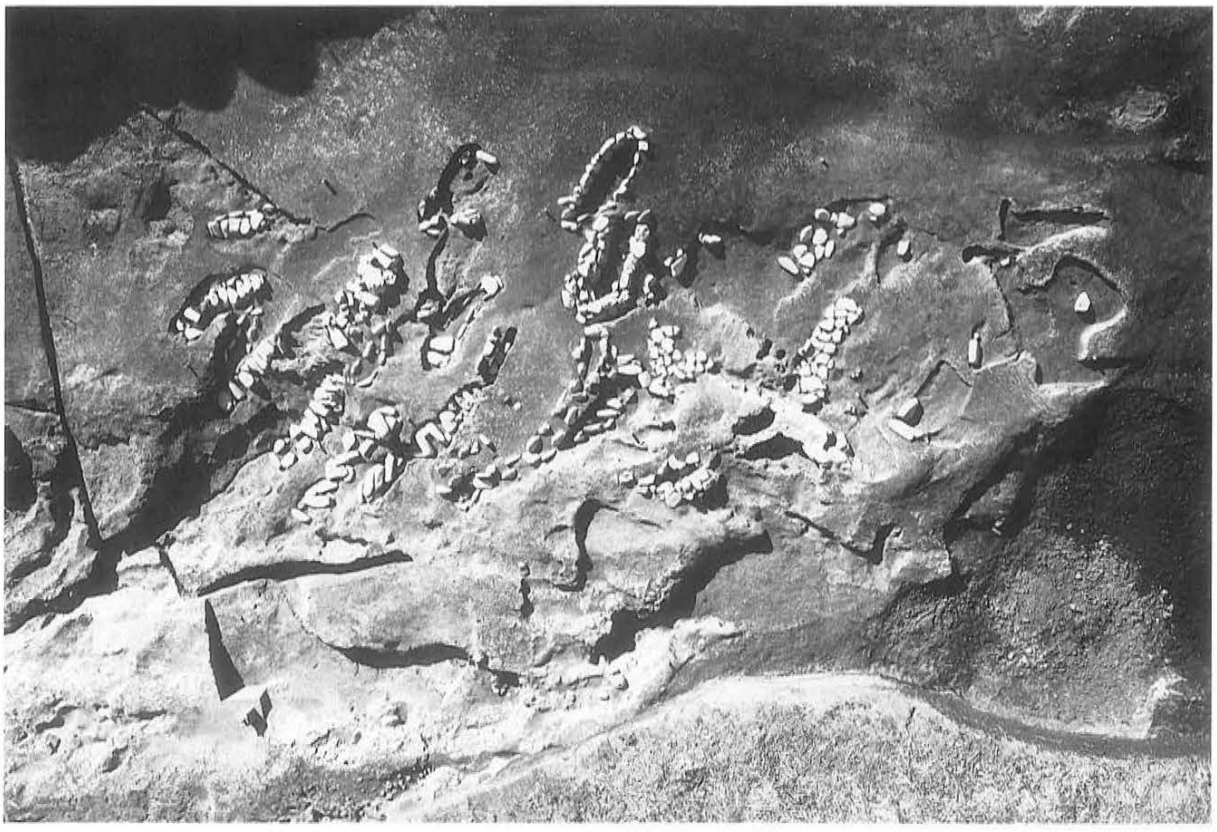


4．同　多孔石出土状況

5．同　石棒出土状況



1．西調査区北側配石墓全景（空撮）

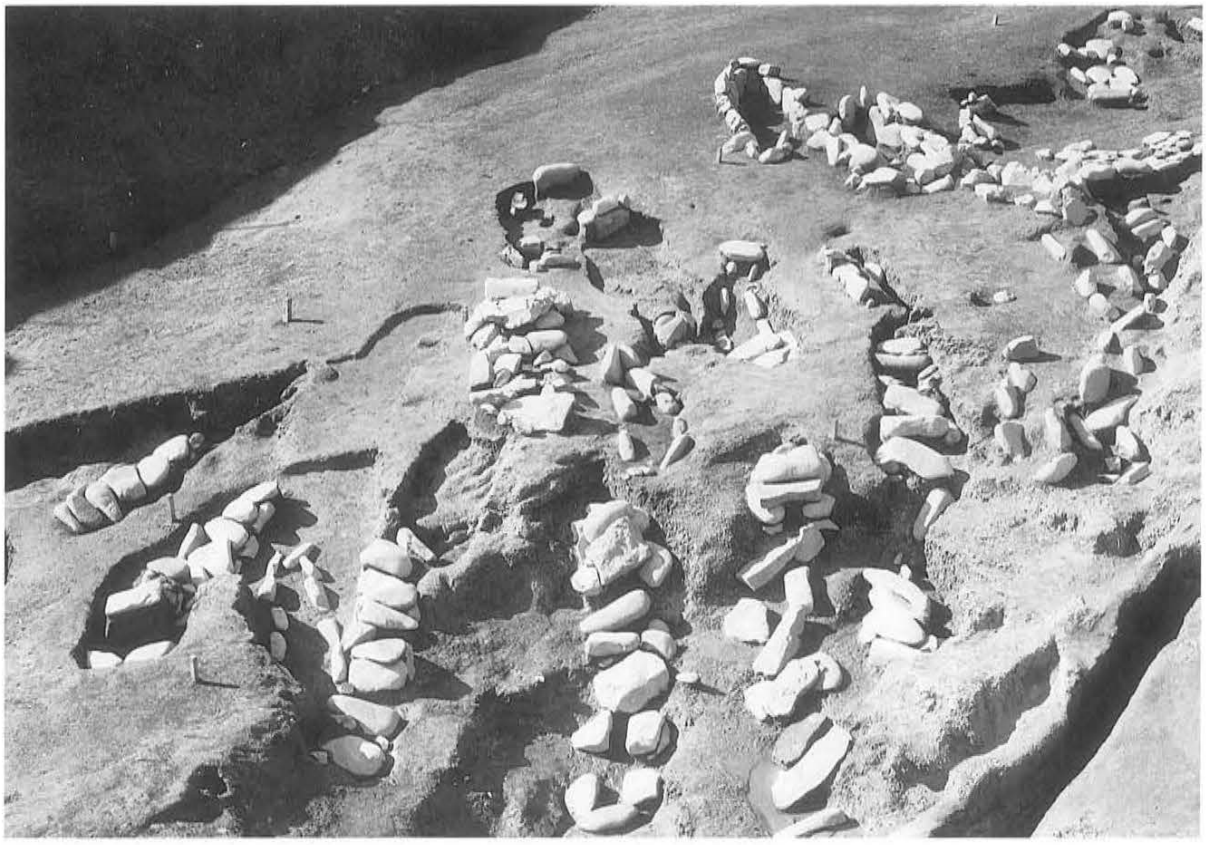


2．同　配石墓配置状況（空撮）

五料野ヶ久保遺跡

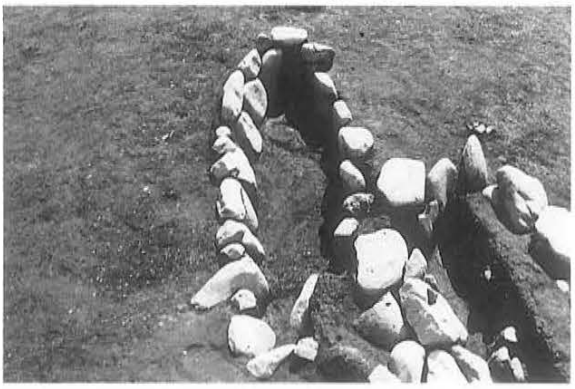
図版18

1．配石墓配置状況

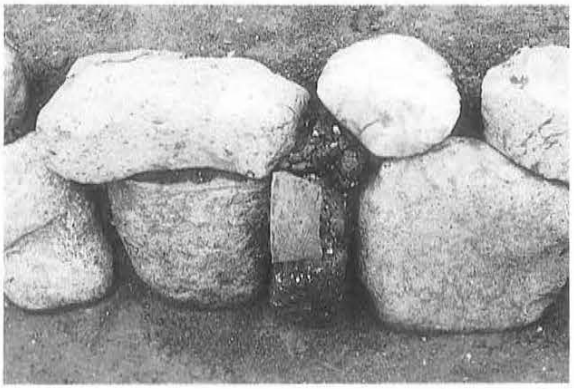


2．同

1．1・2号配石墓



2．1号配石墓

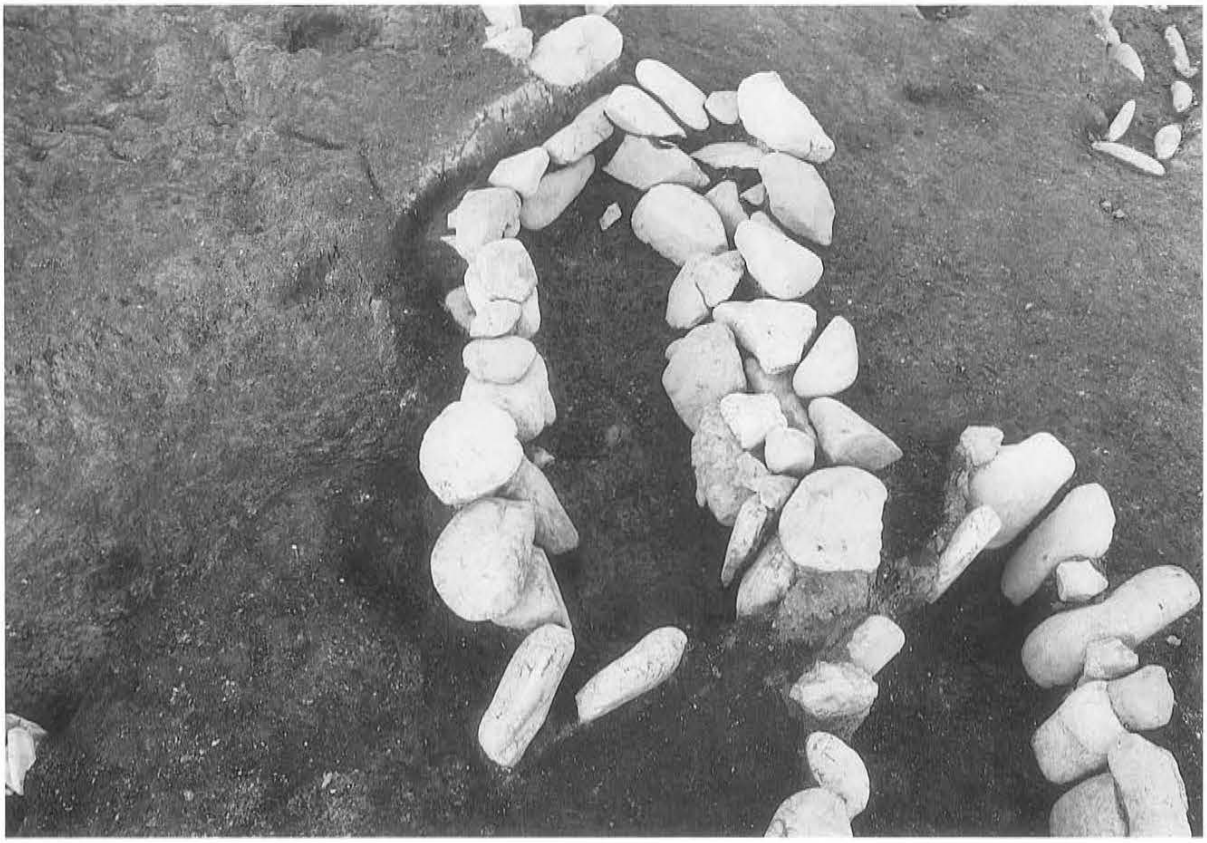


3．同　遺物出土状況

4．同　構築状況

5．同

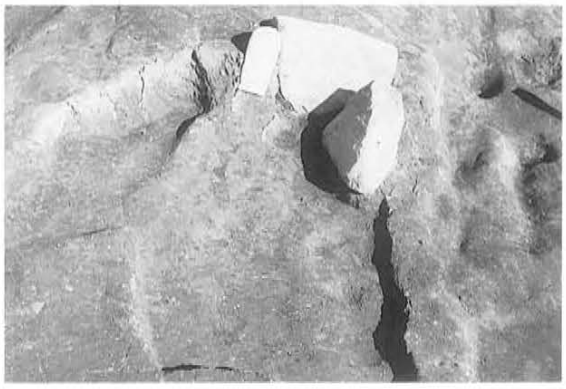
図版20



1．2号配石墓

2．同　構築状況

3．同



4．3号配石墓

5．4号配石墓完掘

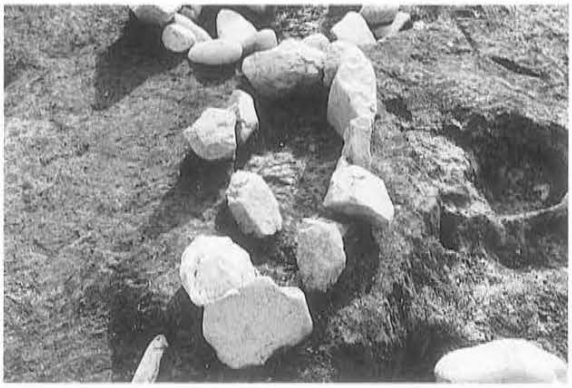
1．配石墓西側配置状況

2．5号配石墓

3．6号配石墓

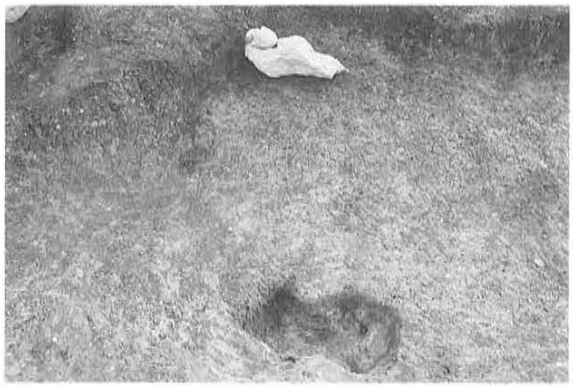
4．同

5．7号配石墓



6．8号配石墓

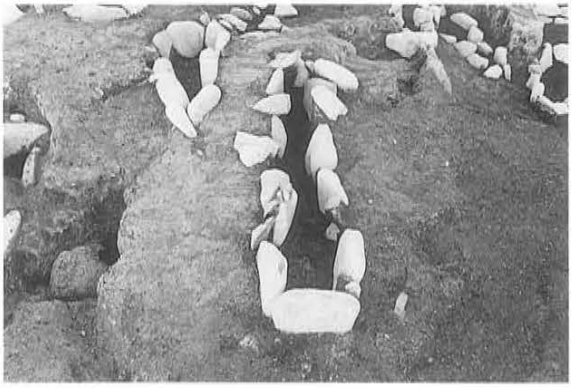
7．9号配石墓



8．10号配石墓

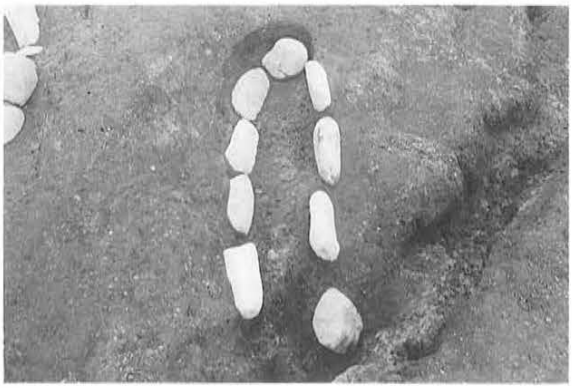
図版22

1．11号配石墓



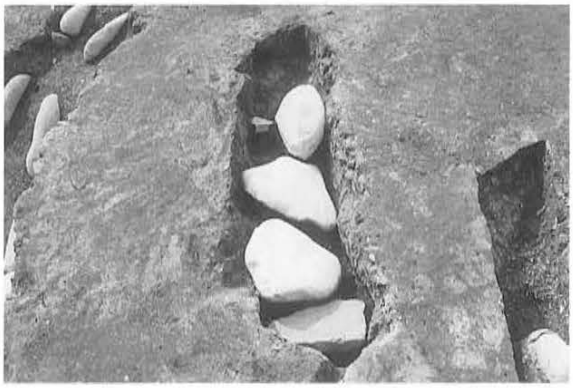
2．同

3．12号配石墓

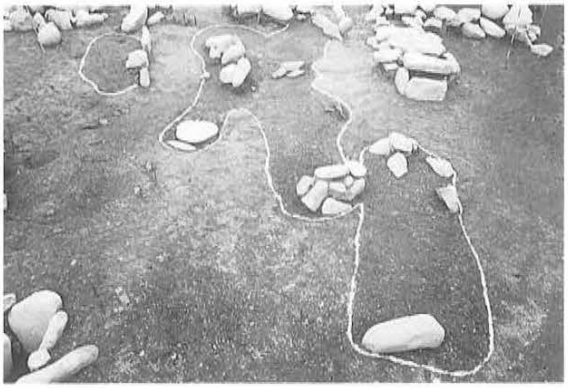


4．同

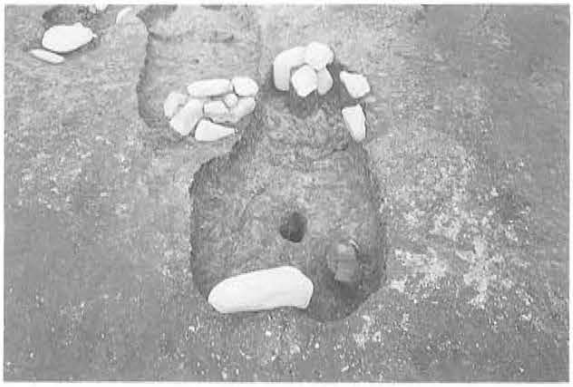
5．13号配石墓覆土堆積状況



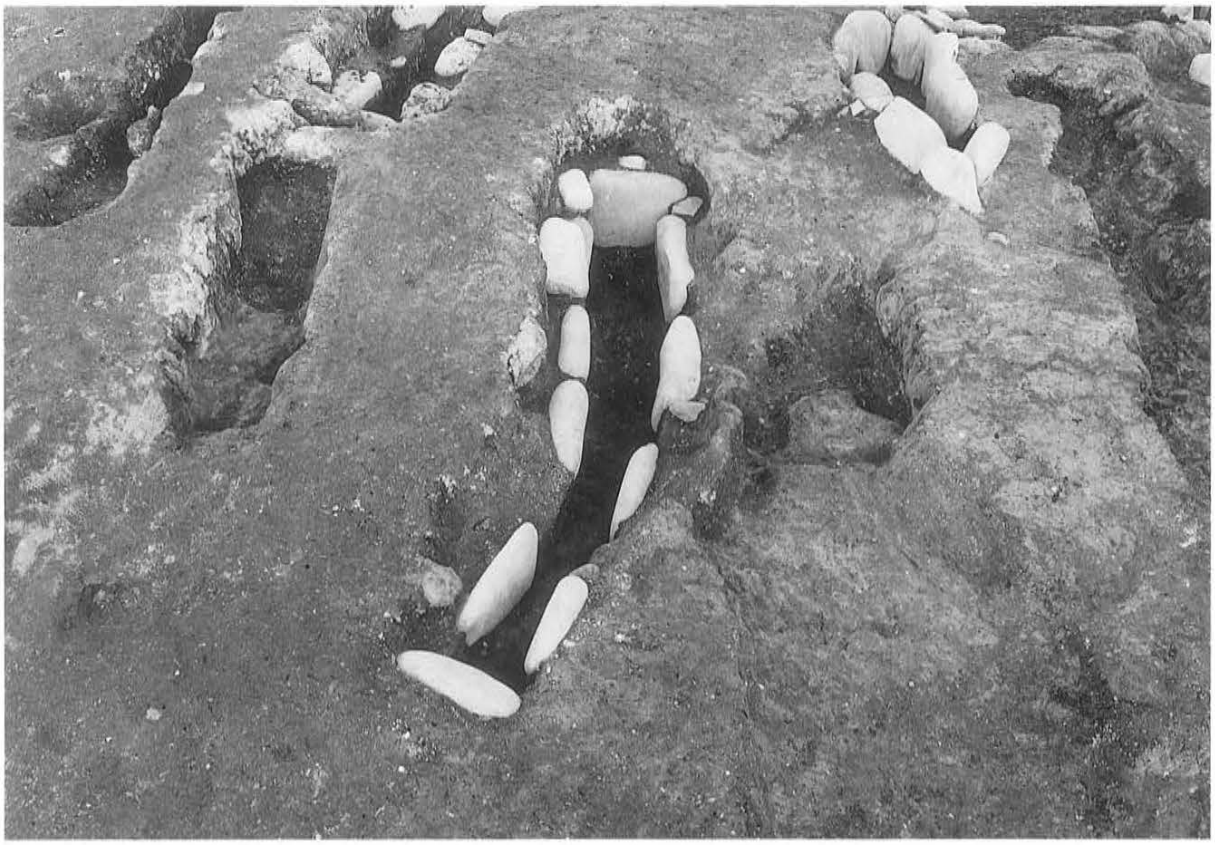
6．13号配石墓



7．13～17号配石墓確認状況

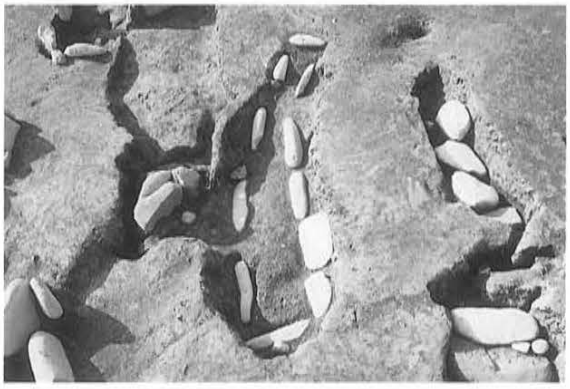


8．14号配石墓



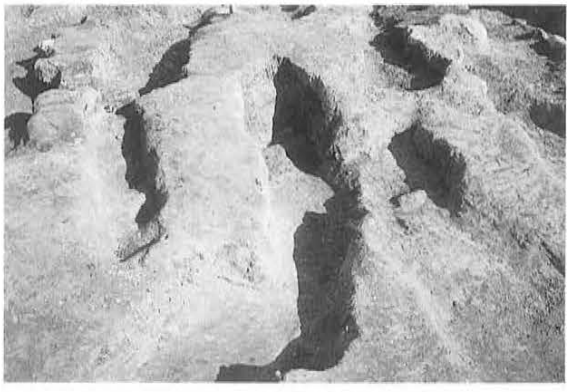
1．15号配石墓

2．同



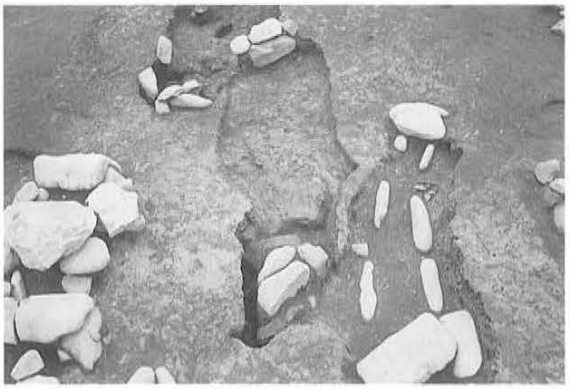
3．同　蓋石除去状況

4．同　覆土堆積状況

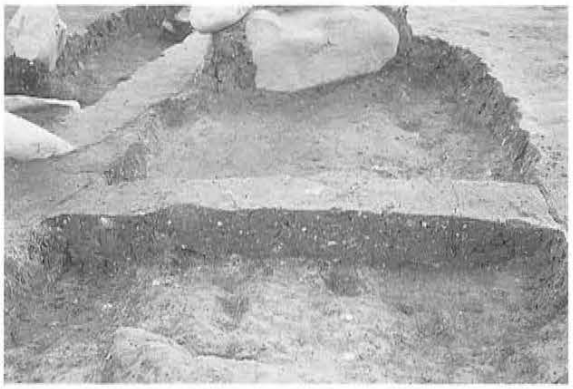


5．同　完掘

図版24

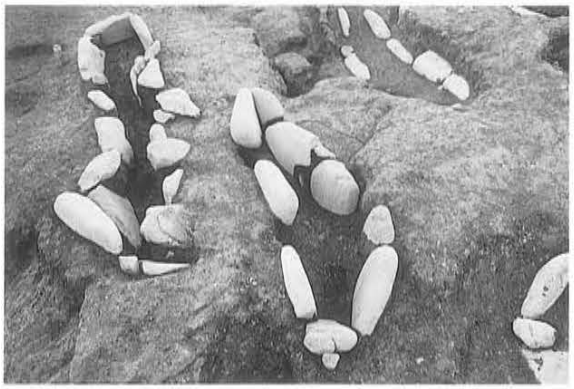


1．16号配石墓



2．同　土層状況

3．同　遺物出土状況



4．17号配石墓

5．12・18～21号配石墓配列状況

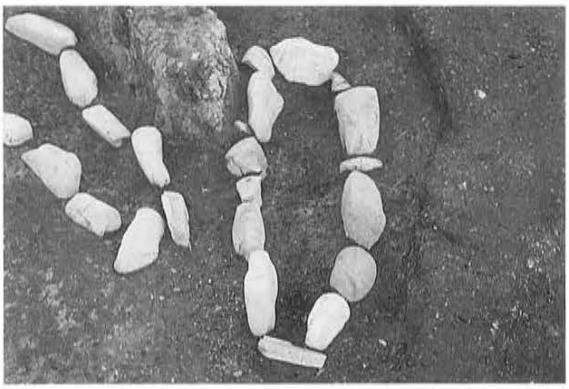
1．18～21号配石墓

2．同　蓋石除去状況

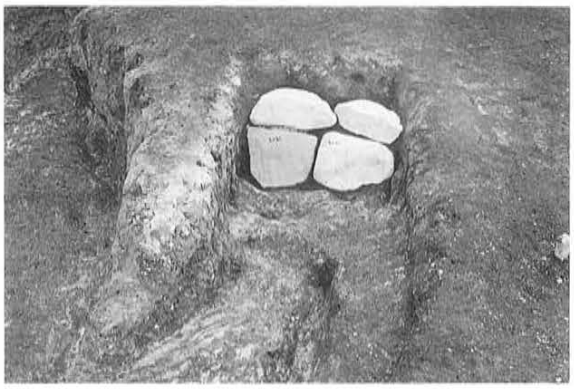
図版26

1．18・19号配石墓遺物出土状況

2．18号配石墓覆土堆積状況



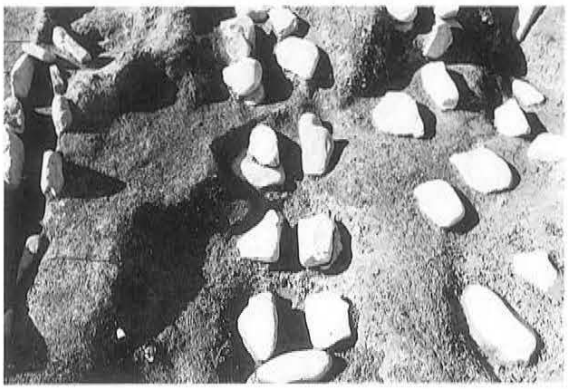
3．18号配石墓



4．19号配石墓

5．20・21号配石墓確認状況

6．20・21号配石墓蓋石除去状況



7．22号配石墓

8．23号配石墓

1．22～24号配石墓配列状況

2．22・23号配石墓蓋石除去状況

五料野ヶ久保遺跡

図版28

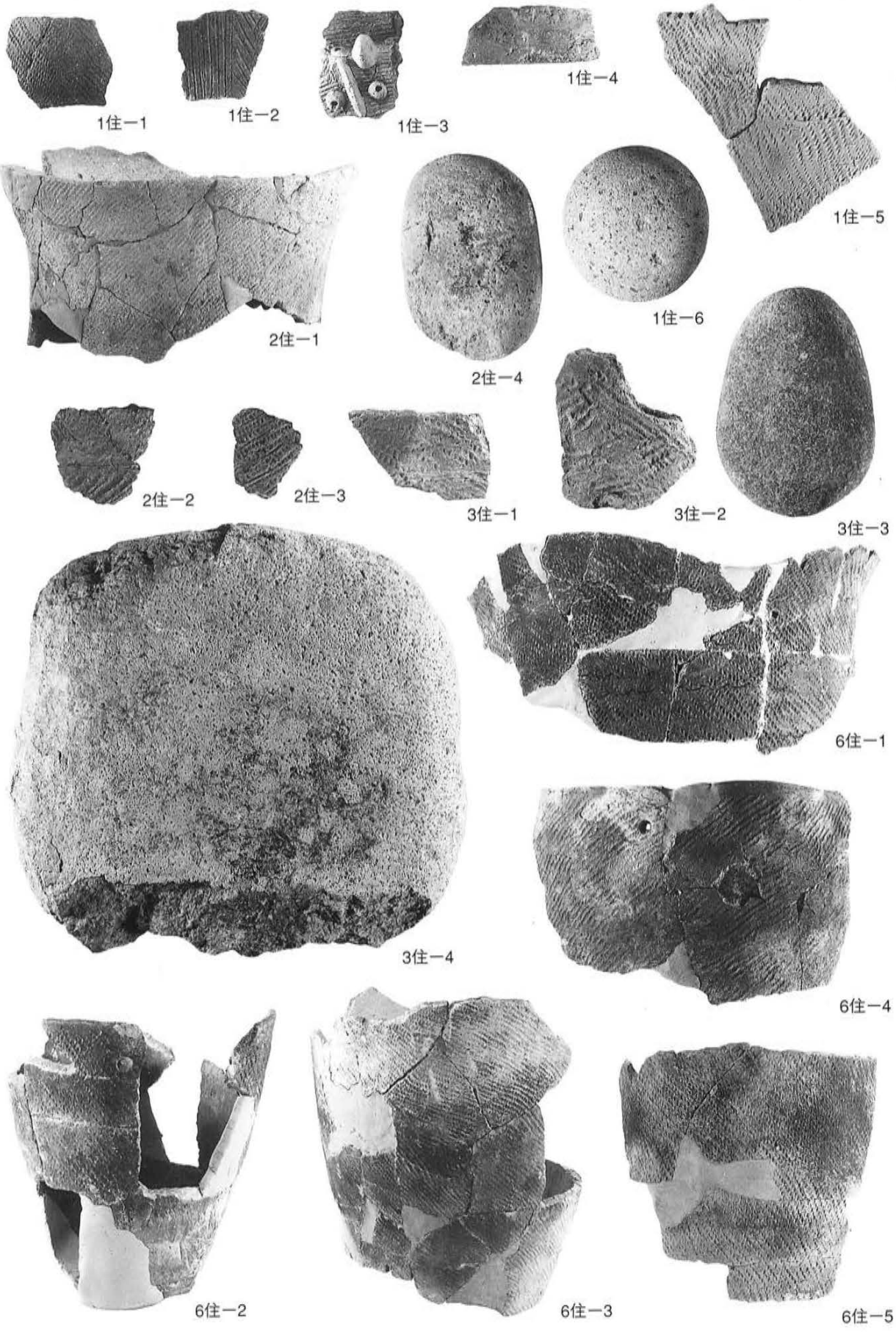
1．24号配石墓確認状況

2．同　遺物出土状況

3．同　調査状況

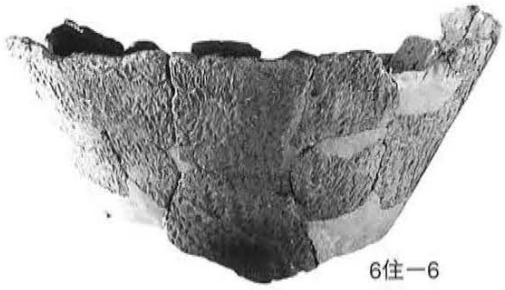
4．26号配石墓確認状況

5．41号土坑

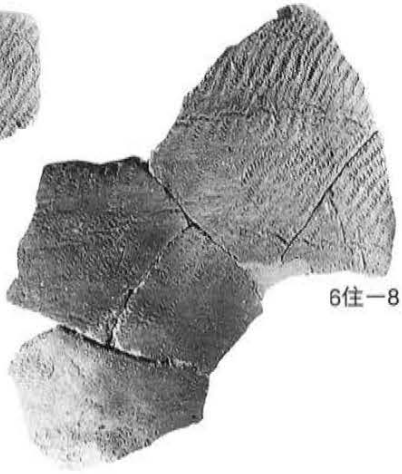


東調査区１～３・６号住居跡出土遺物

図版30

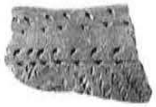

6住－6

6住－7


6住－8

6住－9

6住－10


6住－11

6住－12

6住－13

6住－14

6住－15

6住－16

6住－17

6住－18

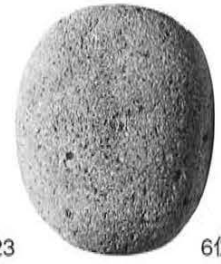
6住－19

6住－20

6住－21

6住－22

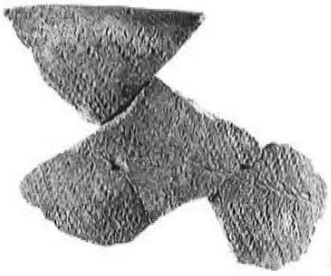
6住－23


6住－24

6住－25

6住－26

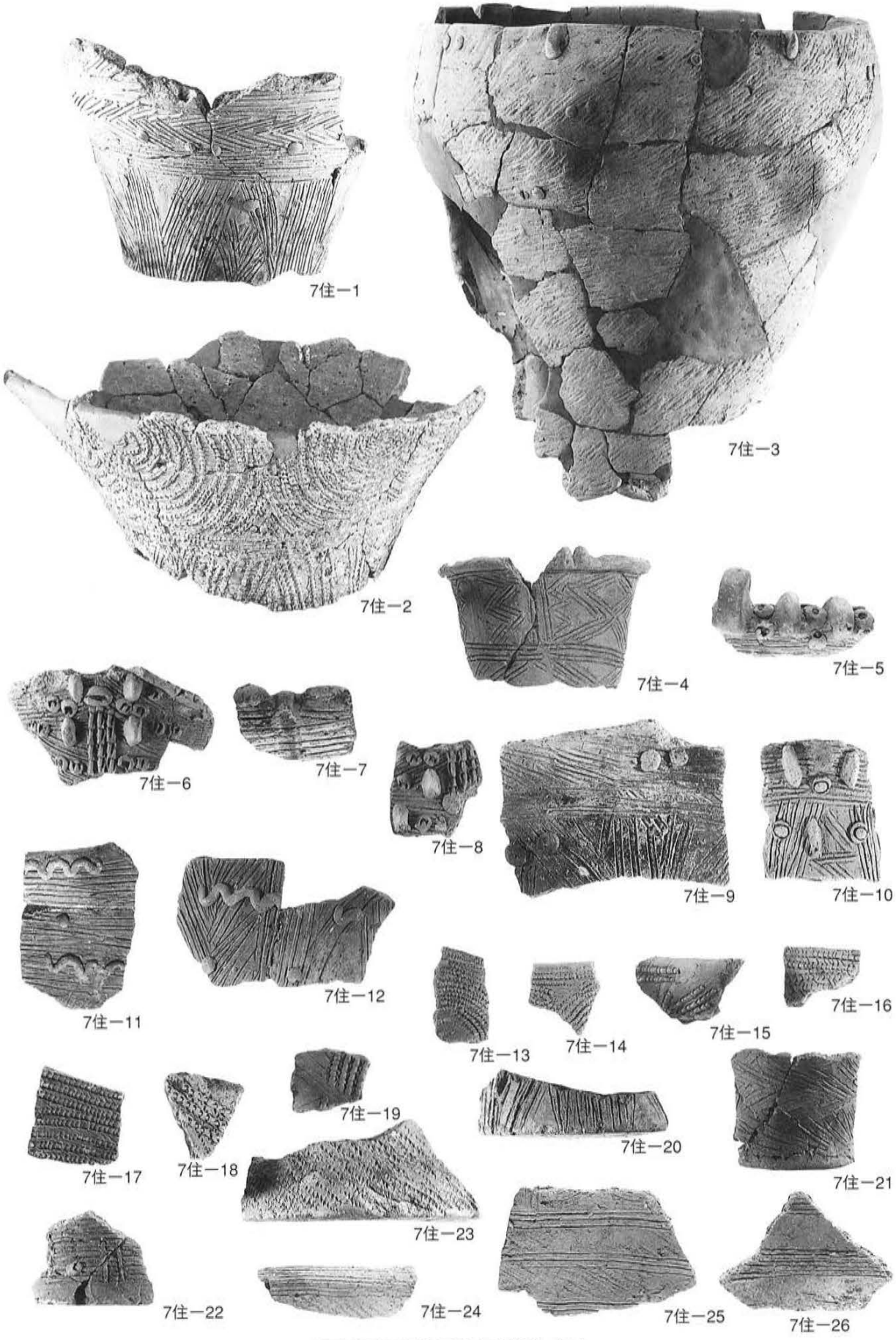
6住－27


5住－1

5住－2

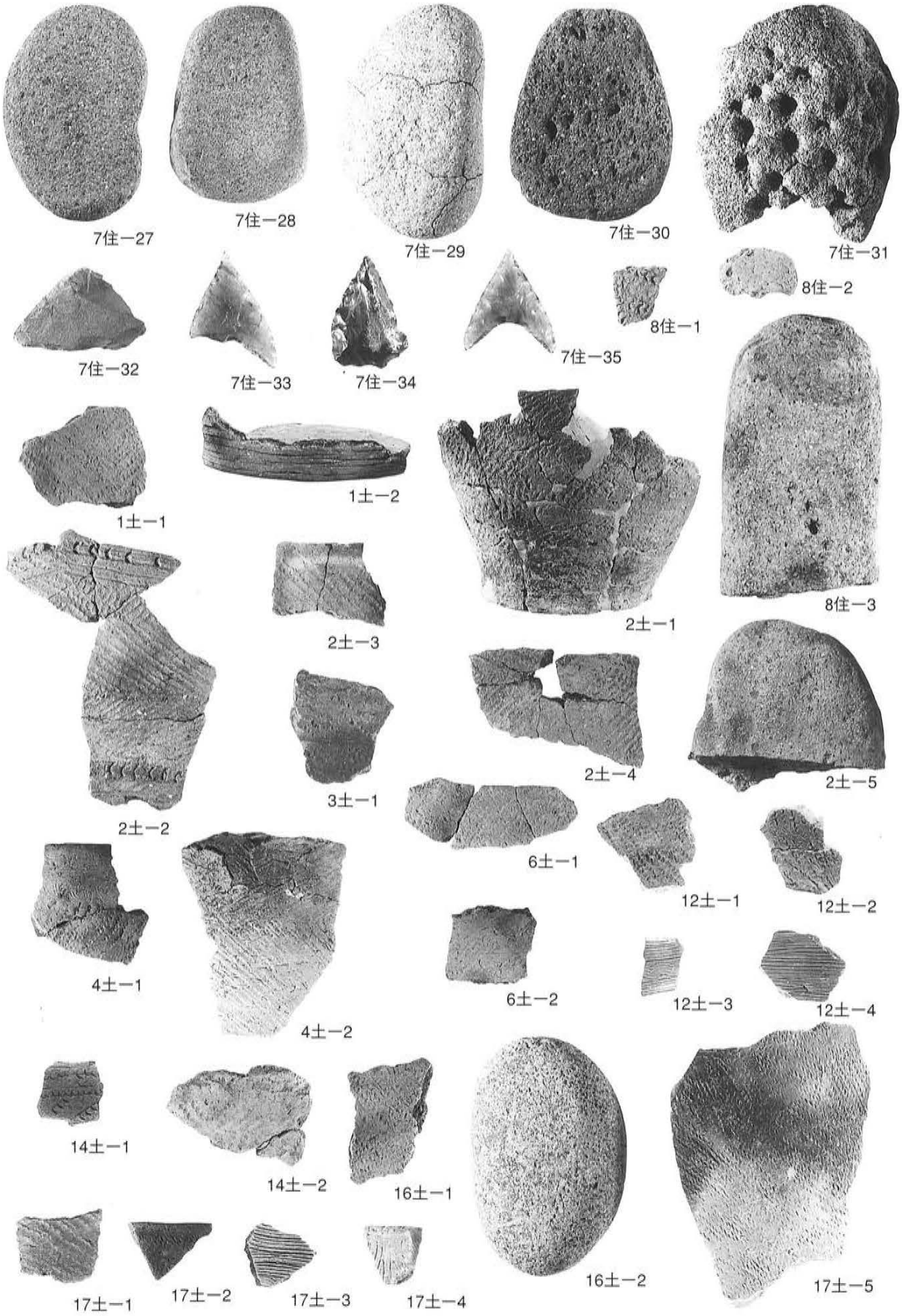
5住－3

東調査区５・６号住居跡出土遺物

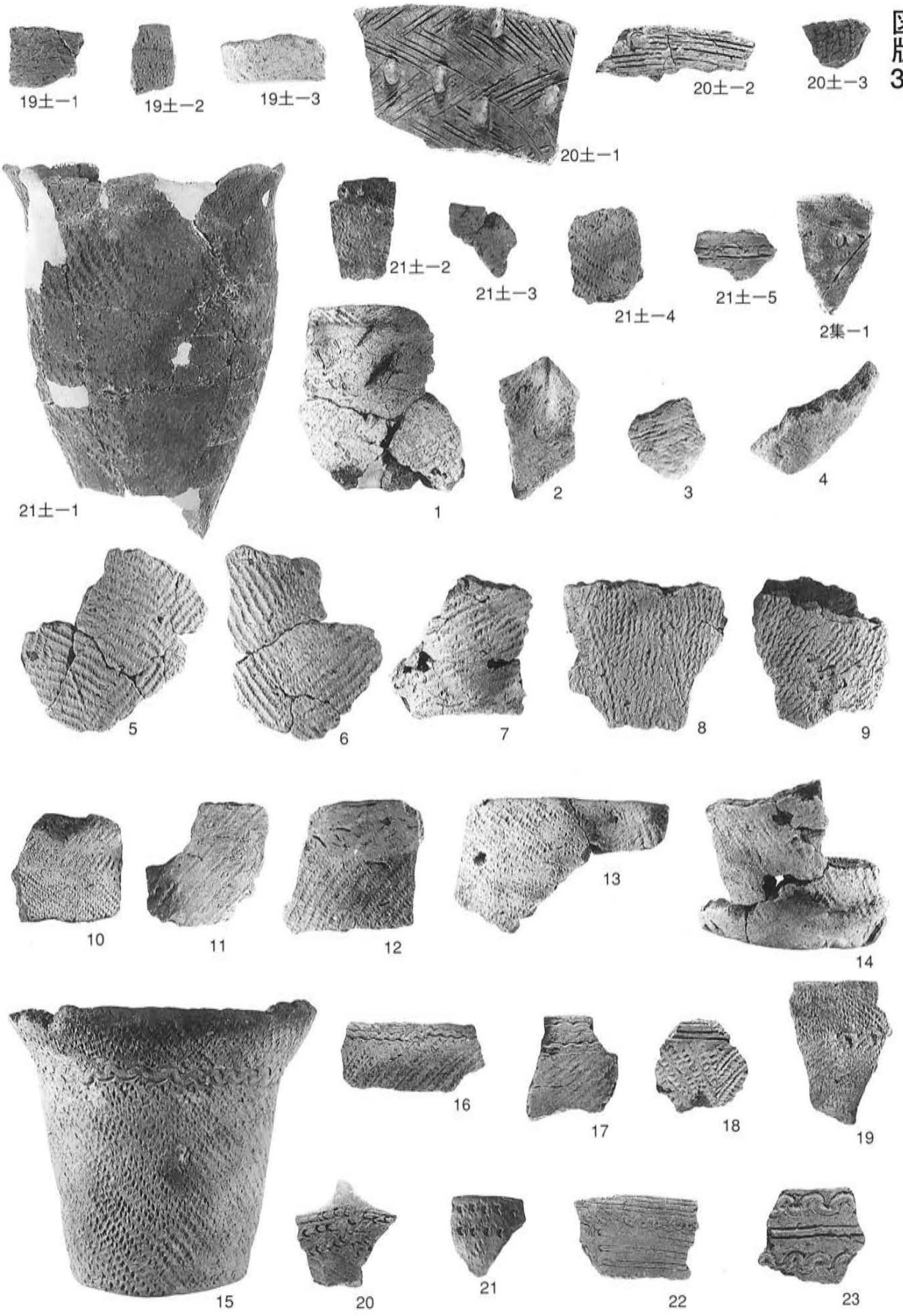


東調査区７号住居跡出土遺物（１）

図版32

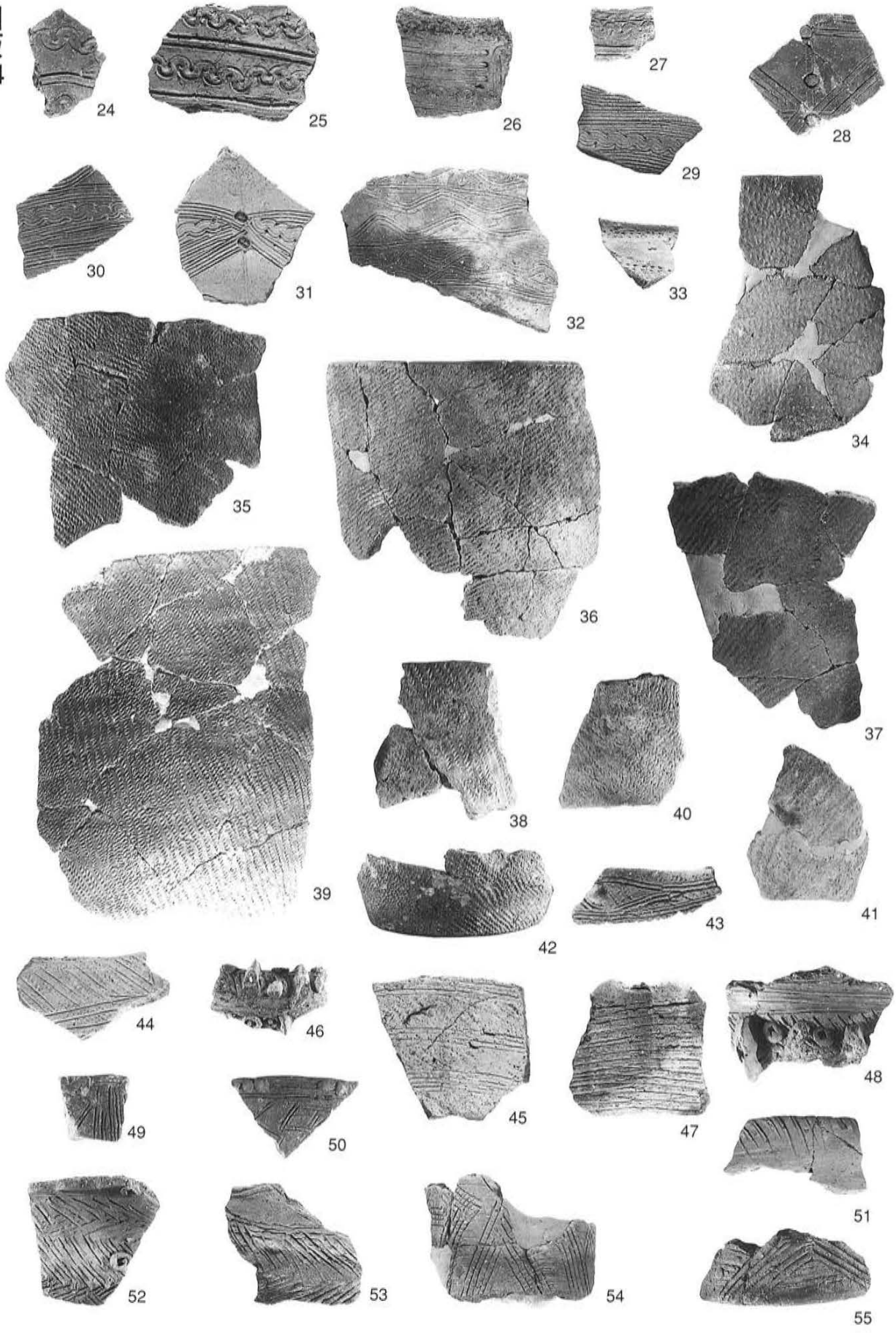


東調査区７号住居跡（２）・土坑（１）出土遺物



東調査区土坑（2）・遺構外出土遺物（1）

図版34



東調査区遺構外出土遺物（２）

東調査区遺構外出土遺物（3）

五料野ヶ久保遺跡

図版36

12住−1

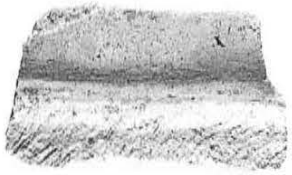
12住−2

12住−3

13住−1

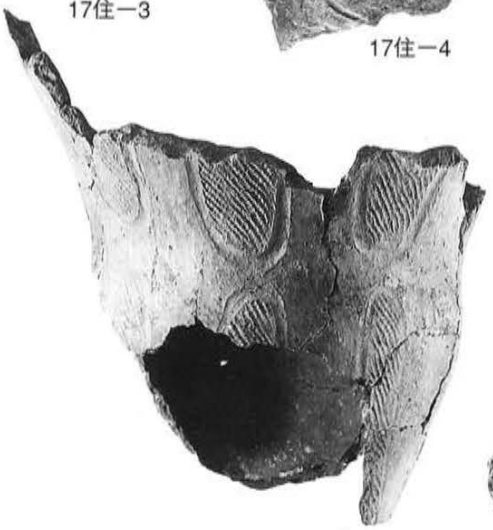
13住−2

17住−1


17住−2

17住−3

17住−4


17住−5

17住−6

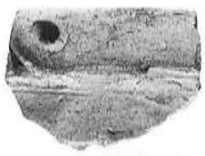
17住−7

17住−8

28土−3

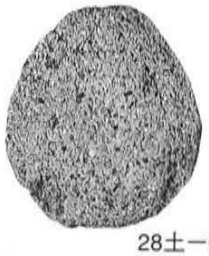
28住−4

26土−1


28土−1

28土−2

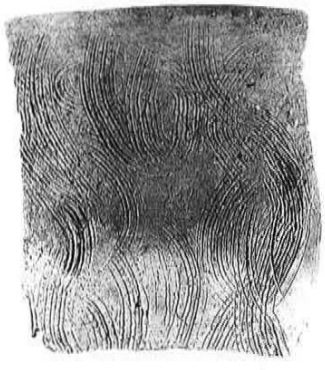
28土−5


28土−6

33土−5

33土−2

33土−4


32土−1

33土−1

33土−3

中央調査区住居跡・土坑出土遺物

34土－1

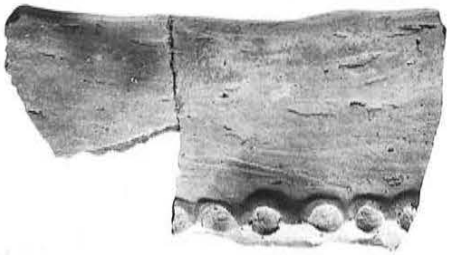
35土－1

35土－2

3集－1

3集－2

6集－1


7集－1

7集－4

7集－2

7集－3

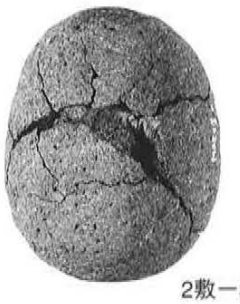
2敷－1

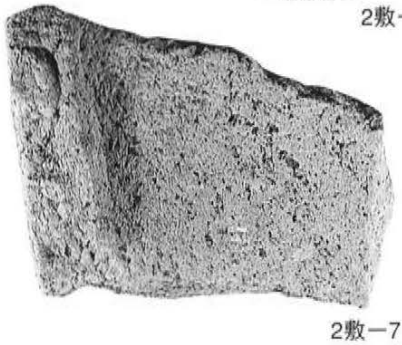
2敷－3

2敷－4

2敷－6

2敷－2


2敷－5


2敷－7

中央調査区土坑・集石・敷石出土遺物

五料野ヶ久保遺跡

図版38

1埋

3埋

4埋

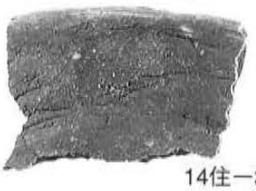
6埋

5埋

中央調査区埋設土器

14住－1

14住－2


14住－3

14住－4

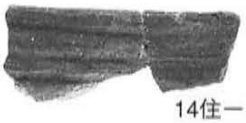
14住－5

14住－6

14住－7

14住－8

14住－9


14住－10

14住－11

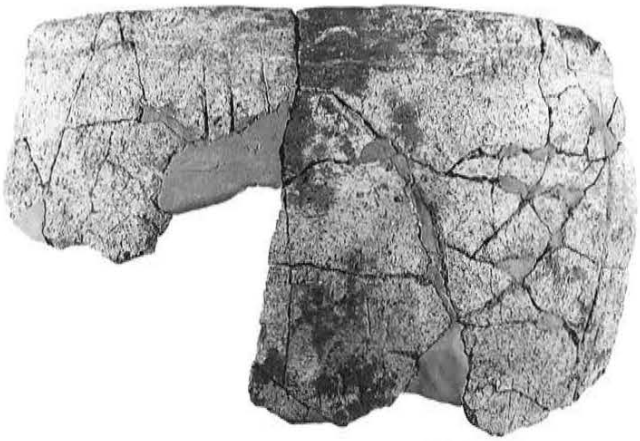
14住－12

14住－13

14住－14

14住－15

14住－16

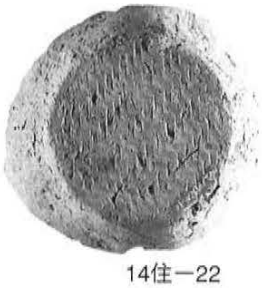

14住－20

14住－17

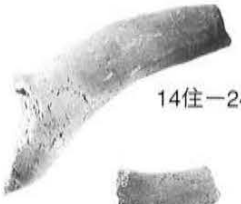
14住－18

14住－19

14住－21


14住－22

14住－23


14住－24

14住－25

14住－26

西調査区14号住居跡出土遺物（１）

図版40

14住－27

14住－28

14住－29

14住－31

14住－30

14住－32

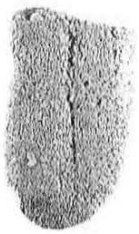
14住－33

14住－34

14住－35

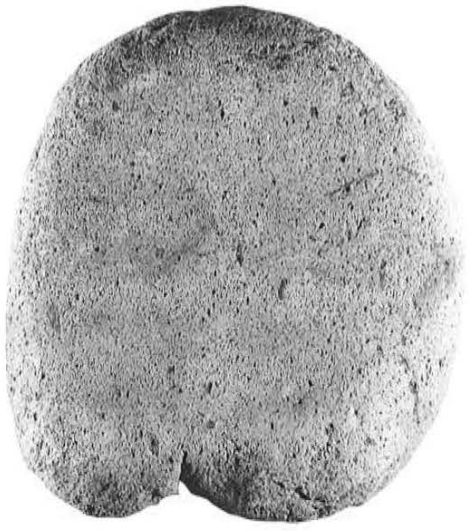
14住－36

14住－37


14住－38

14住－39

14住－40


14住－43

14住－41

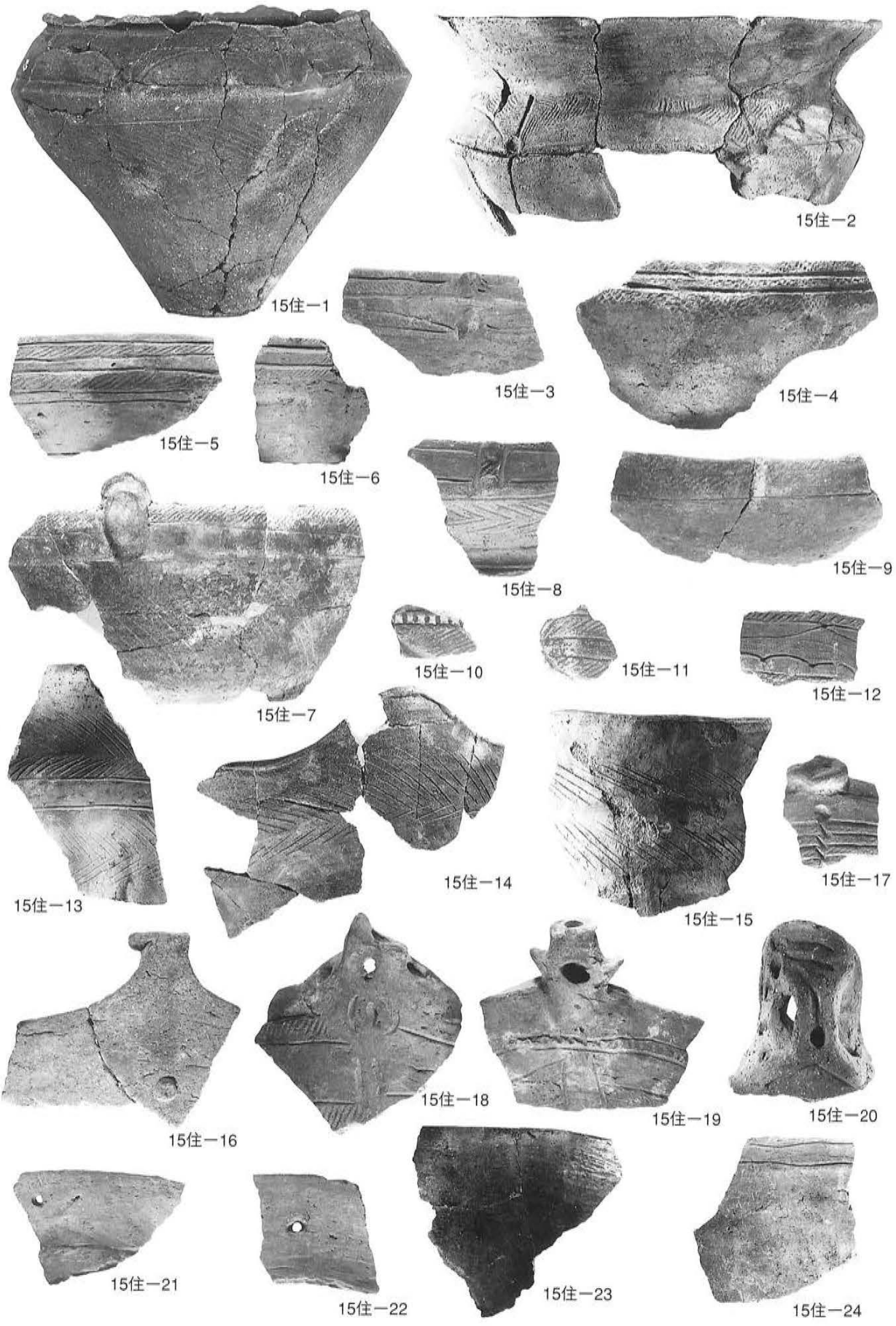
14住－46

14住－42

14住－44

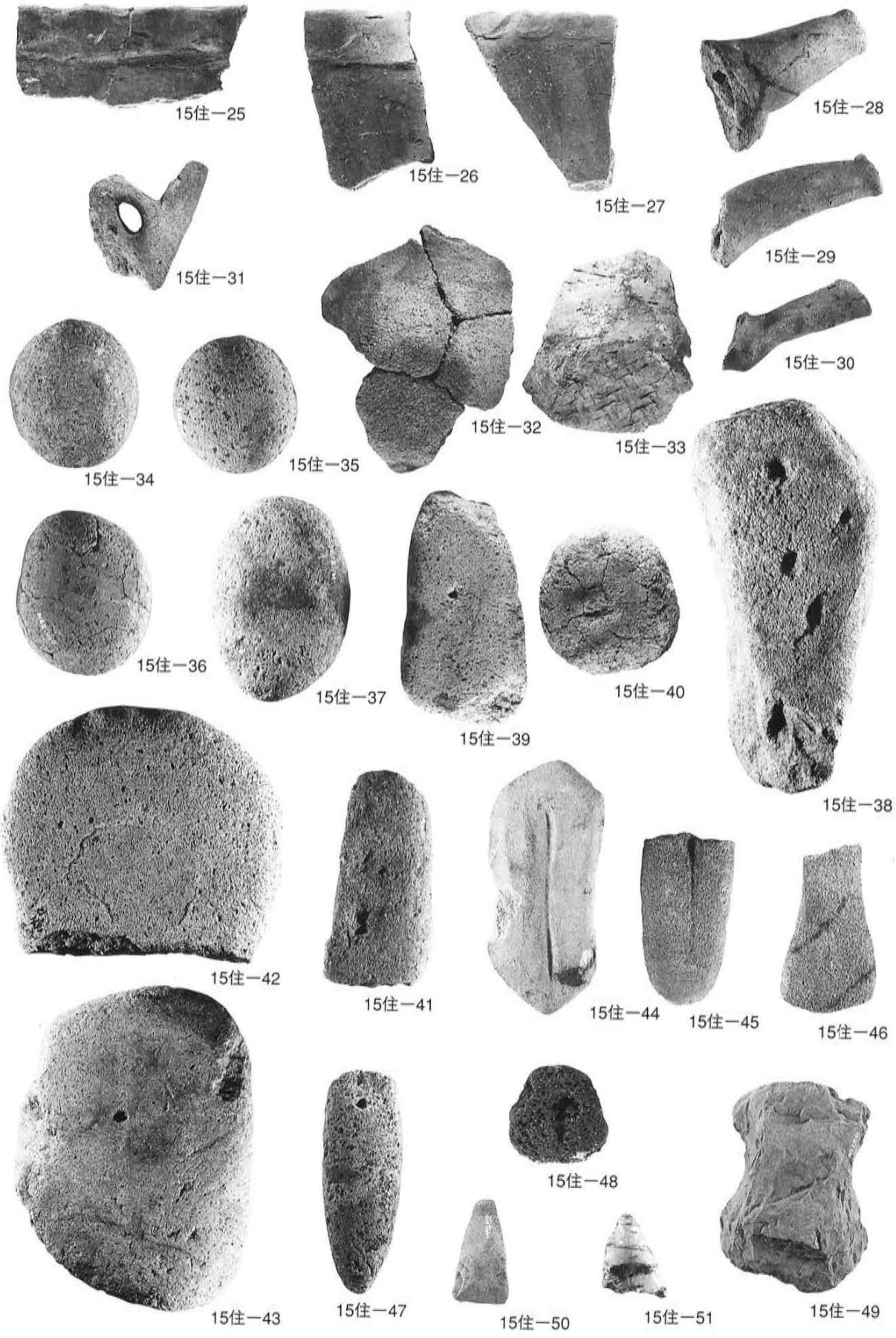
14住－45

西調査区14号住居跡出土遺物（２）



西調査区15号住居跡出土遺物（1）

図版42



西調査区15号住居跡出土遺物（２）

24土−1

25土−1

38土−1

25土−2

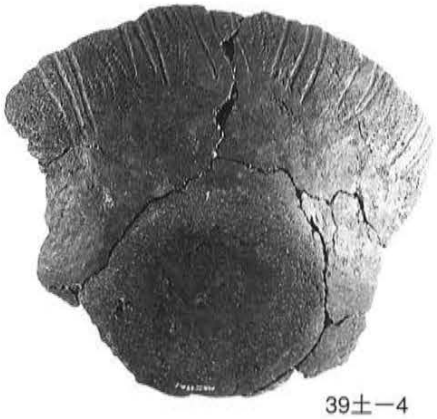
27土−1

27土−2

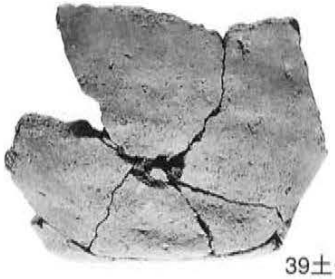
39土−1

39土−2

39土−3



39土−4



39土−5

西調査区土坑出土遺物

図版44

40土－1

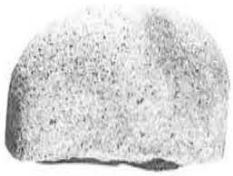
40土－2

40土－3

40土－5

2埋－1

40土－4



40土－6

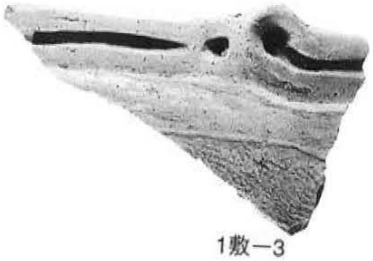
2埋－2

2埋－3

西調査区40号土坑出土遺物・２号埋設土器

1敷－1

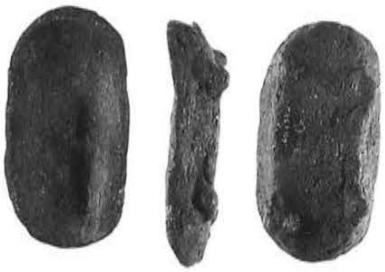
1敷－2


1敷－3

1敷－4

1敷－6

1敷－5


1敷－7

1敷－8

1敷－9

1敷－10

1敷－12

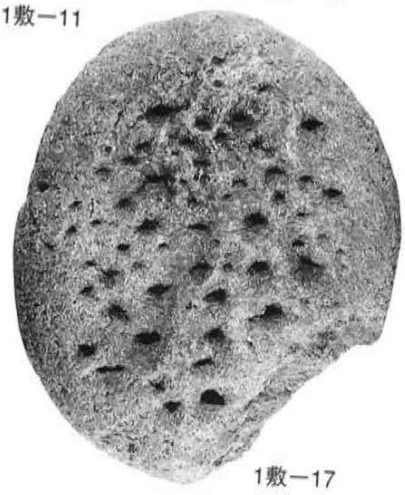
1敷－11

1敷－13

1敷－14

1敷－15

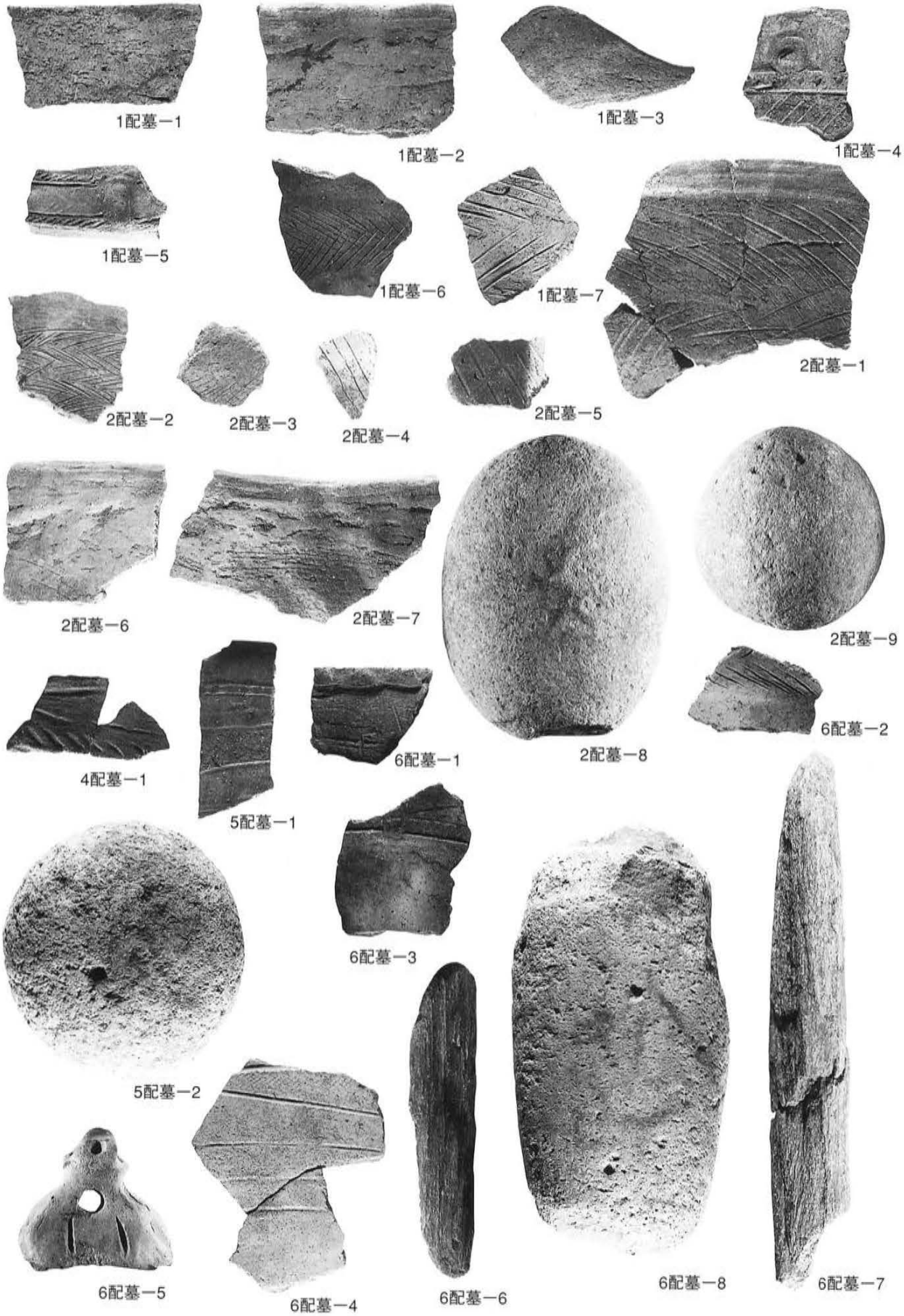
1敷－16


1敷－17

1炉－1

西調査区１号敷石遺構・１号炉跡出土遺物

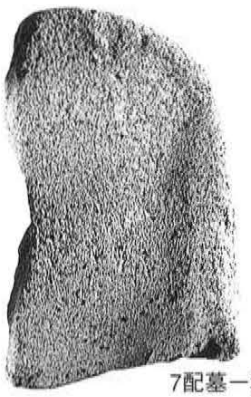
図版46

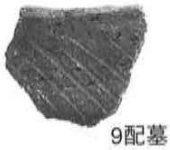


西調査区配石墓出土遺物（1）

7配墓－1

7配墓－2

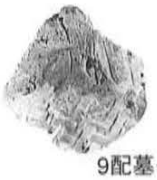

7配墓－3


9配墓－1

9配墓－2

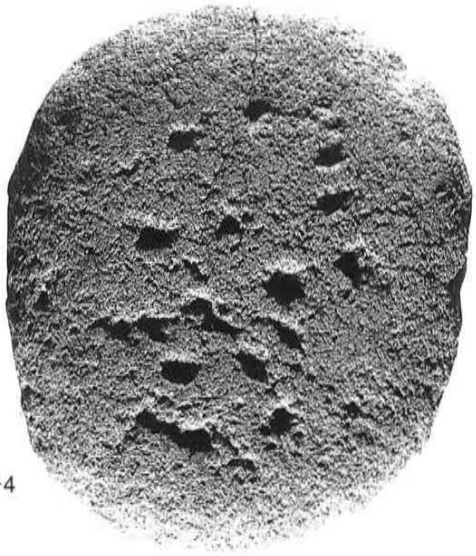
7配墓－4

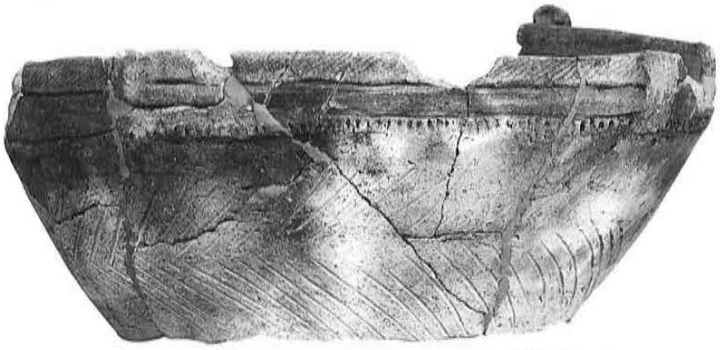
8配墓－1


9配墓－3

11配墓－1

9配墓－4




16配墓－2

16配墓－1

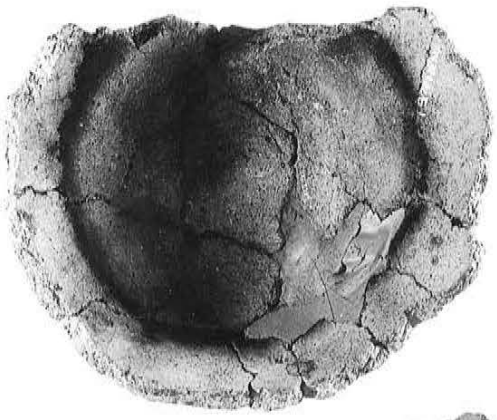
14配墓－1

17配墓－1

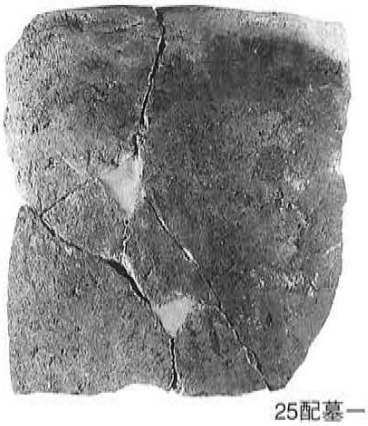
18配墓－1

西調査区配石墓出土遺物（2）

図版48

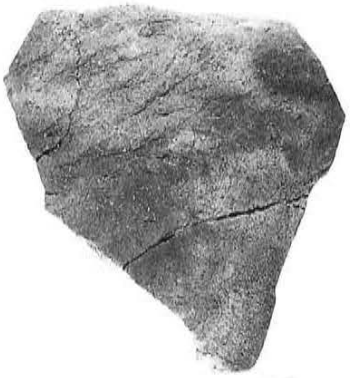


24配墓－2

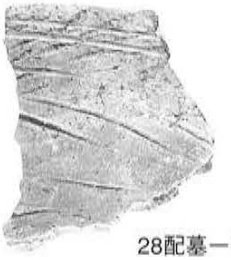


25配墓－1

24配墓－1



25配墓－2

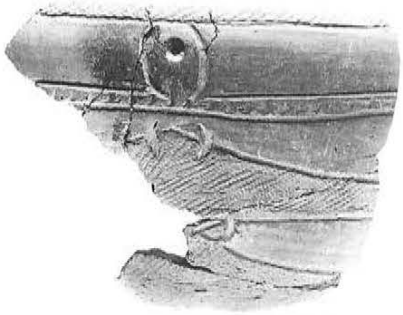


28配墓－1

28配墓－3

28配墓－2

28配墓－4

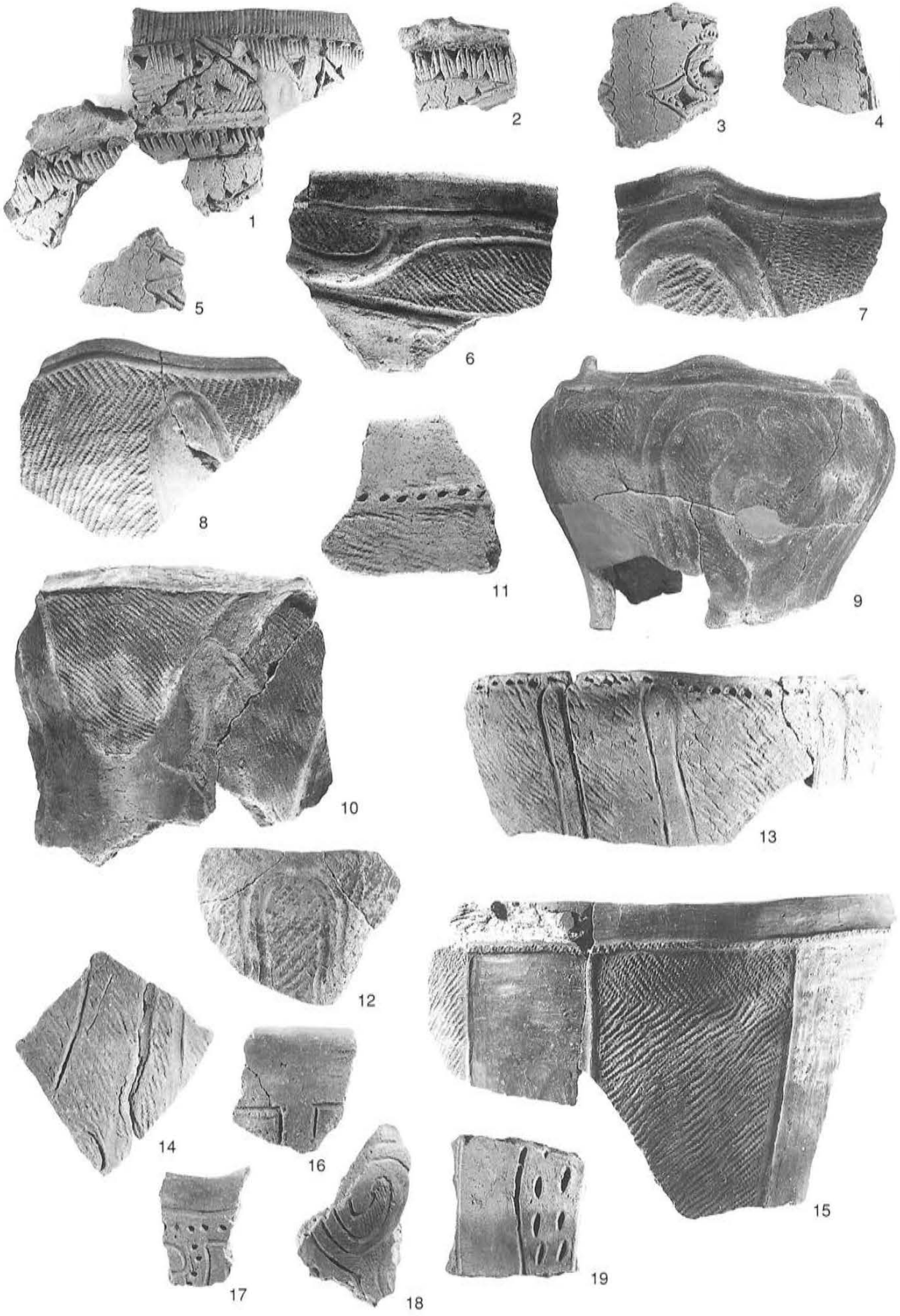


41土－1

41土－2

43土－1

西調査区配石墓（３）・配石内土坑出土遺物



グリッド出土遺物（1）

図版50

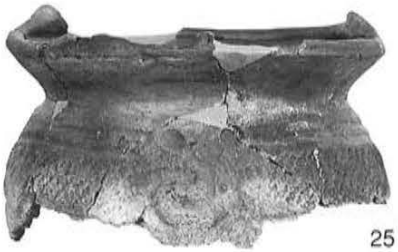
20

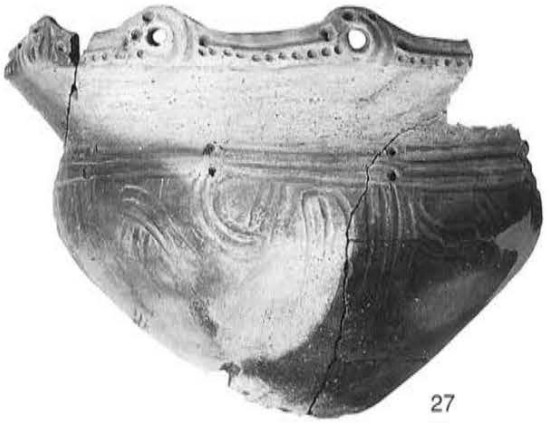
21

24

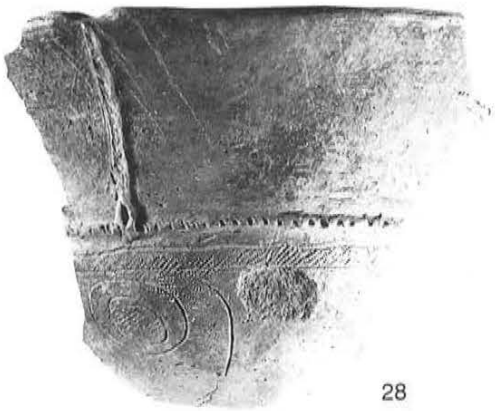
22

23


25

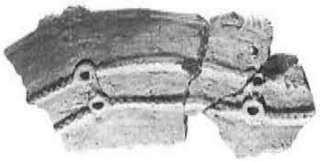

27

26


28

グリッド出土遺物（2）

29



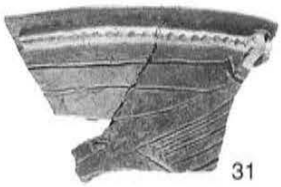
32

30

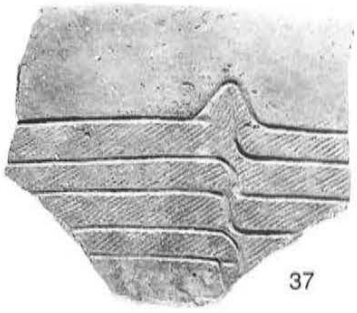
33

35

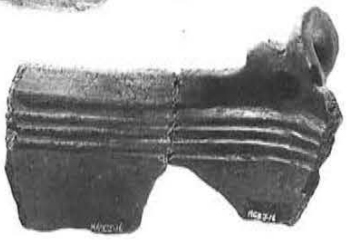
34



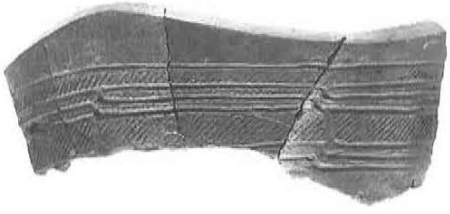
31

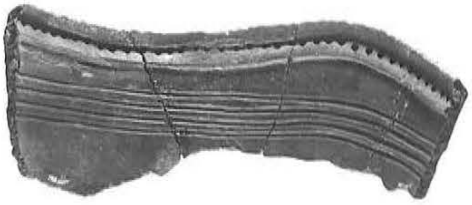


37



38





36

グリッド出土遺物（3）

図版52

39

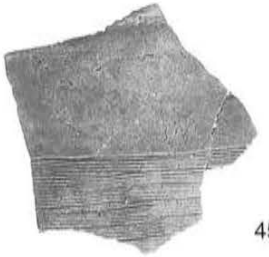
40

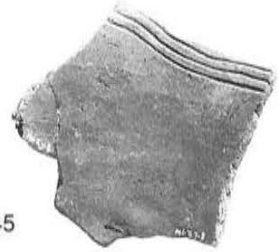
41

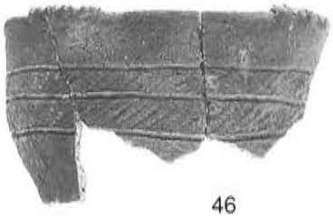
43

42

44

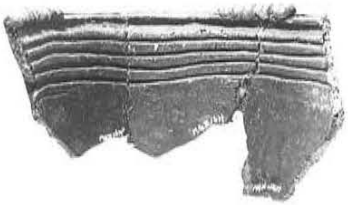



45

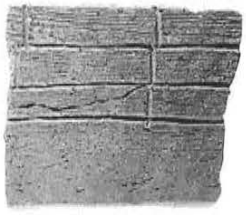

46

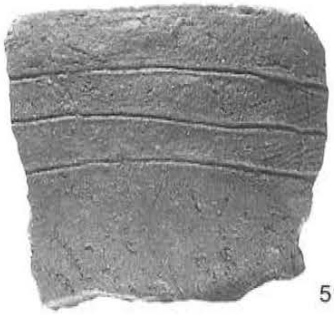
47

48



49


50


51

グリッド出土遺物（4）

52

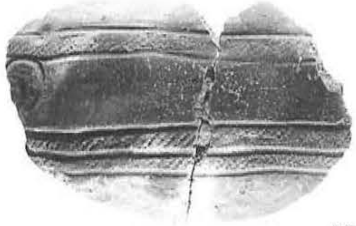
55

54

56

53

57



58

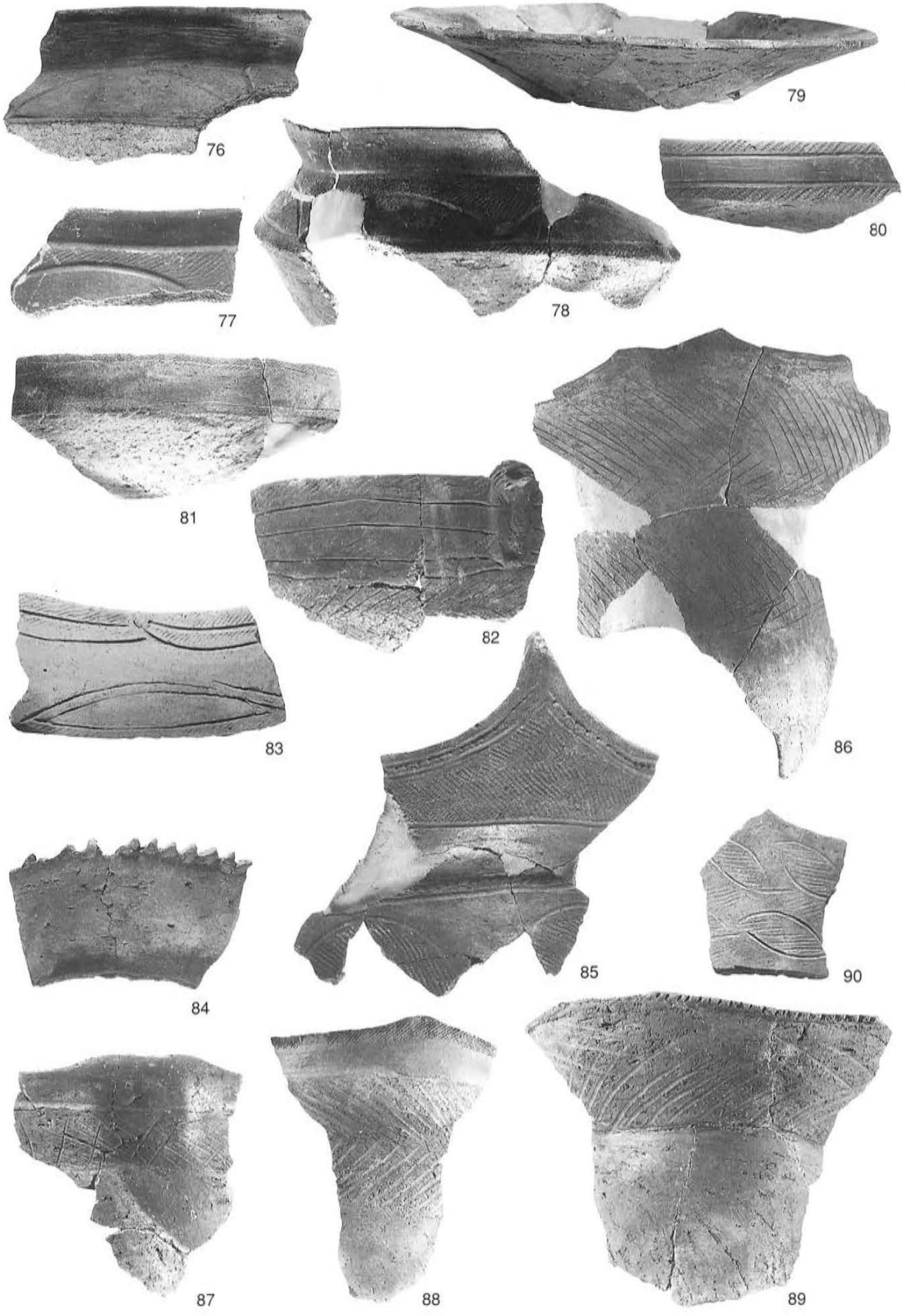
59

60

グリッド出土遺物（5）

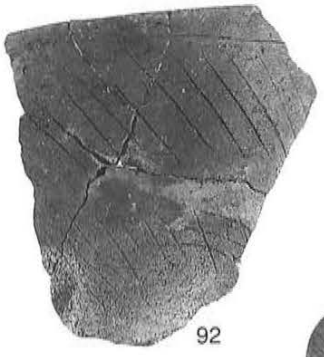
図版54

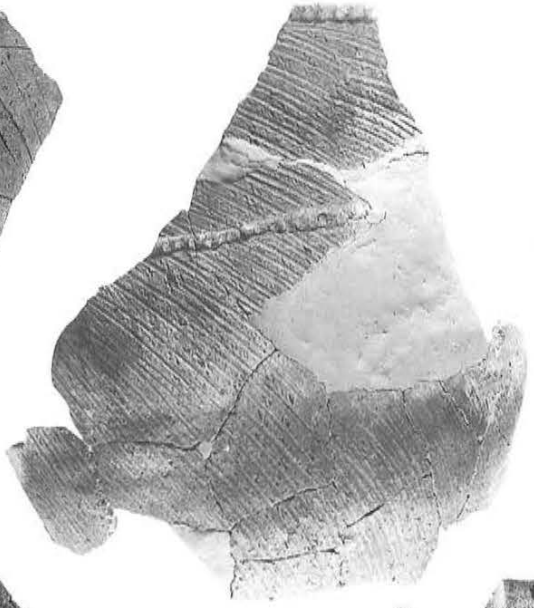
グリッド出土遺物（6）

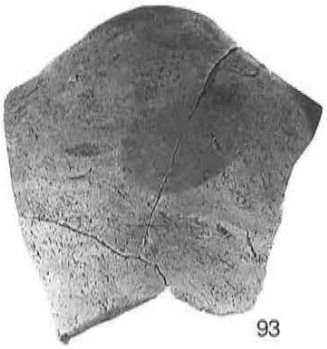


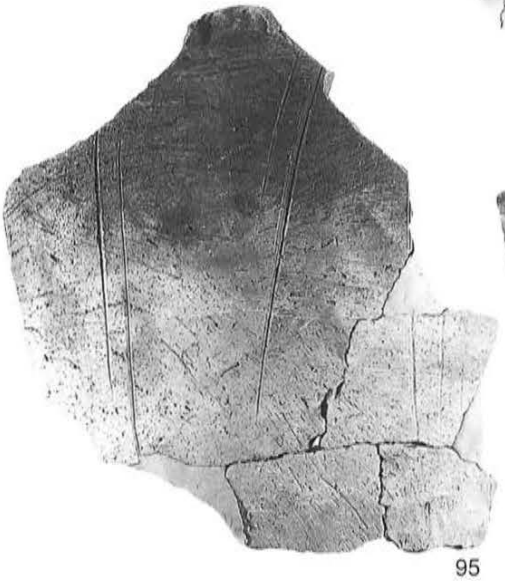
グリッド出土遺物（7）

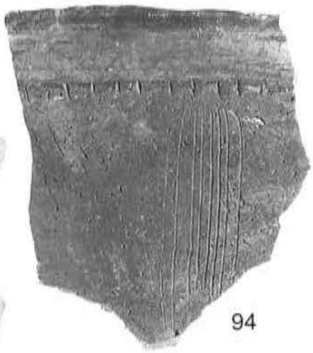
図版56

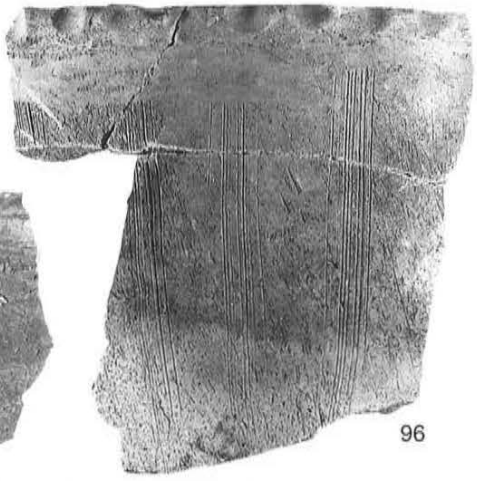

92


91


93


95


94

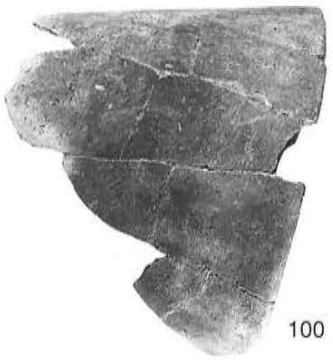

96

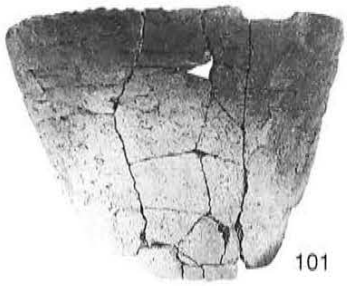
98

97

99

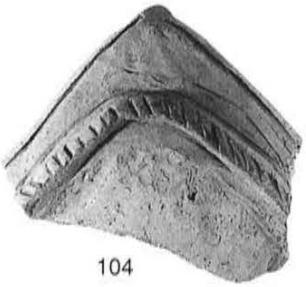
グリッド出土遺物（8）


100


101

102

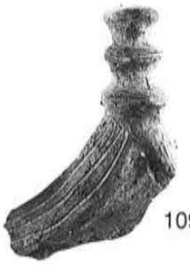
103


104

105

106

107


109

117

108

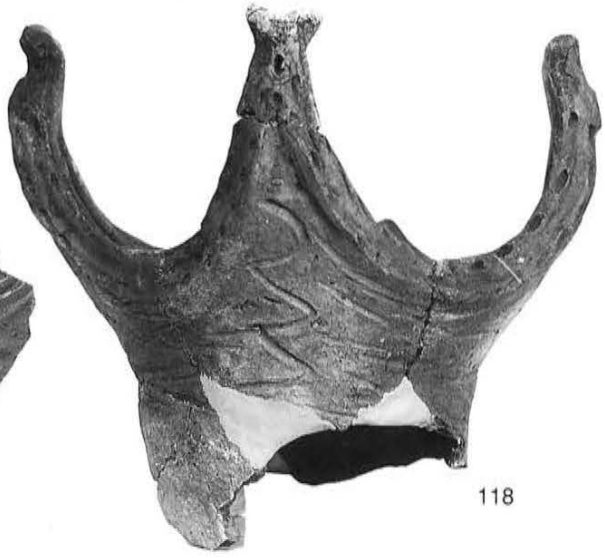
110

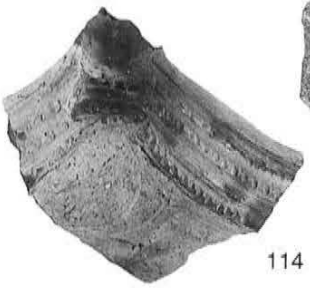
111

115

112

113

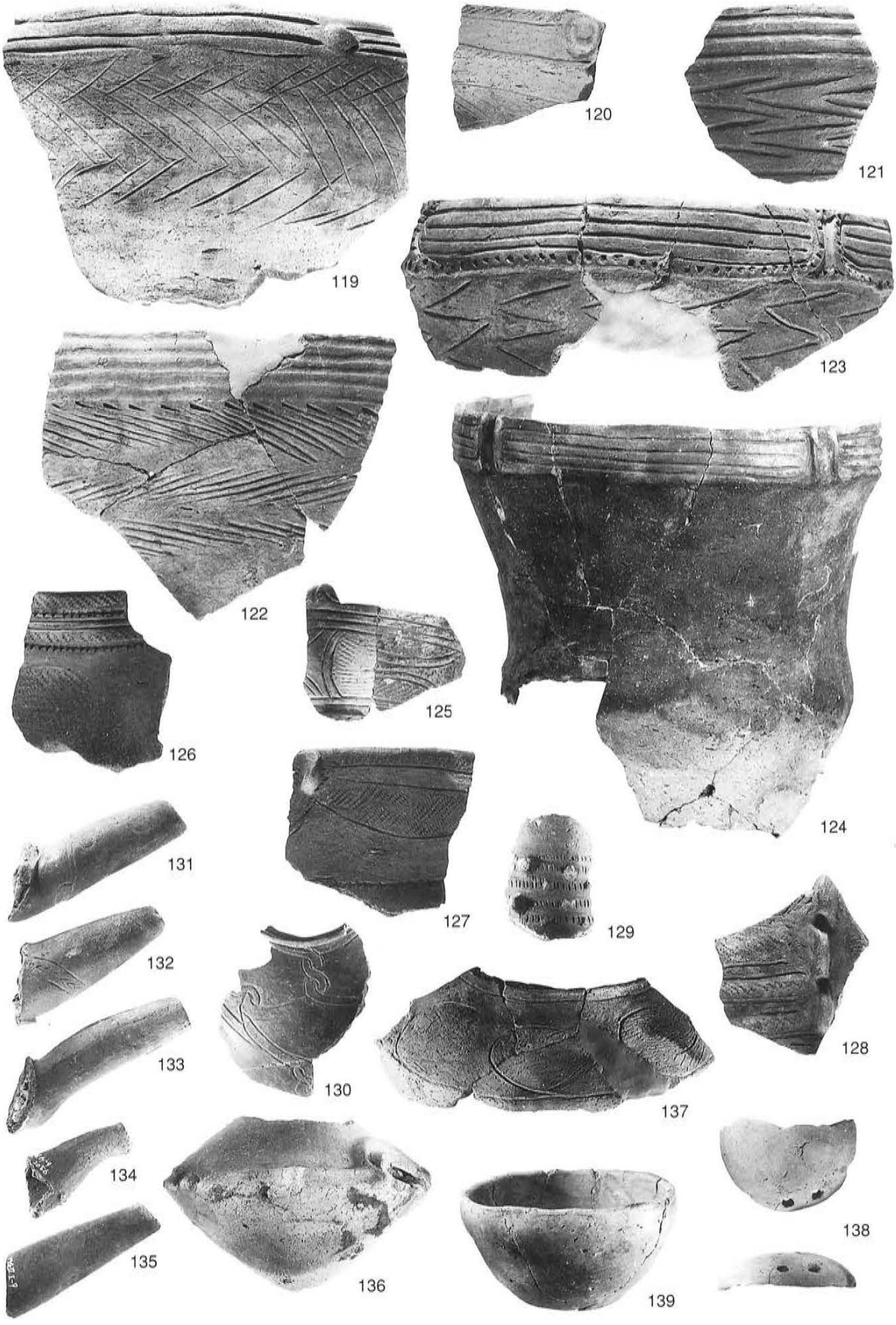

118


114

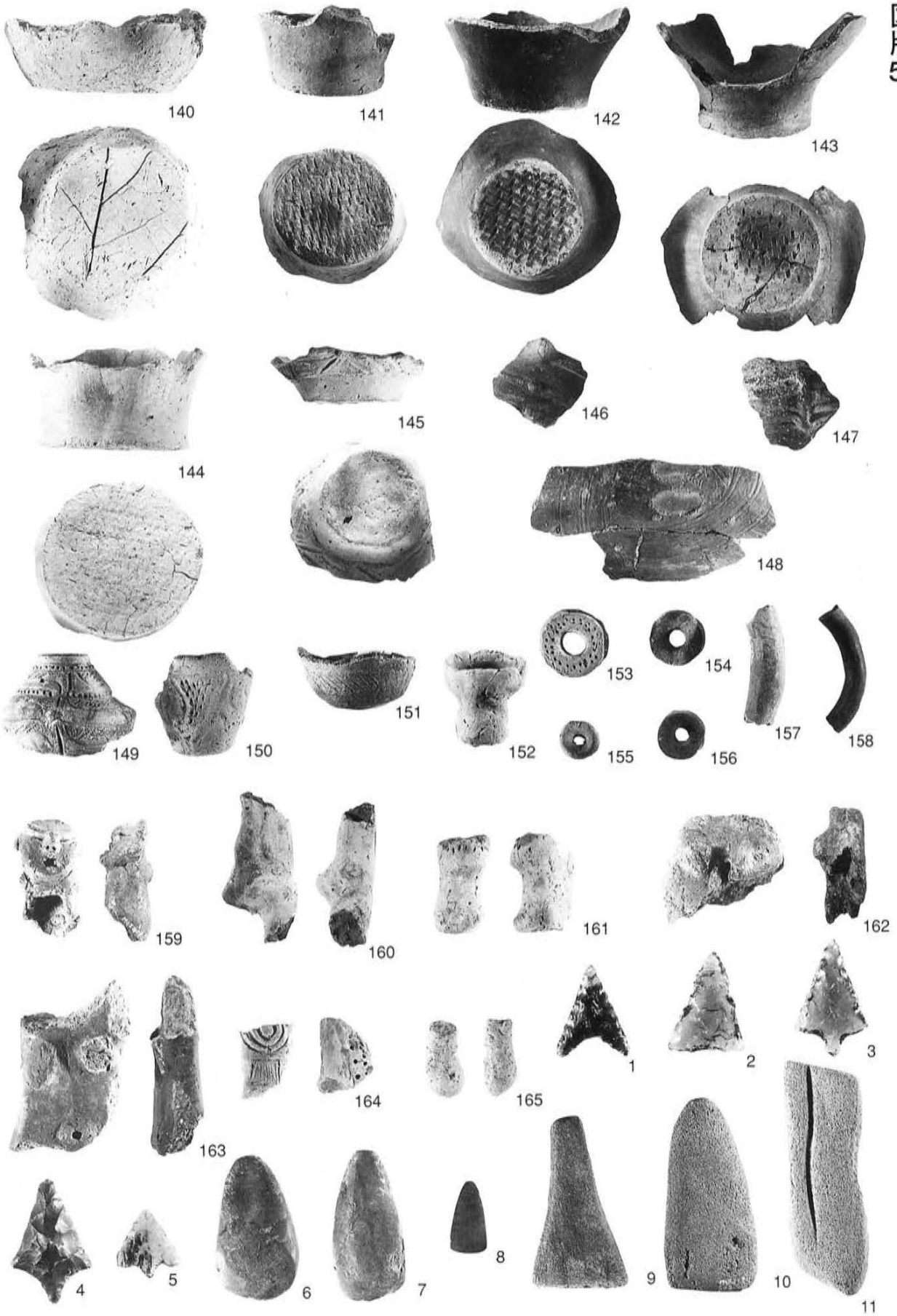
116

グリッド出土遺物（9）

図版58



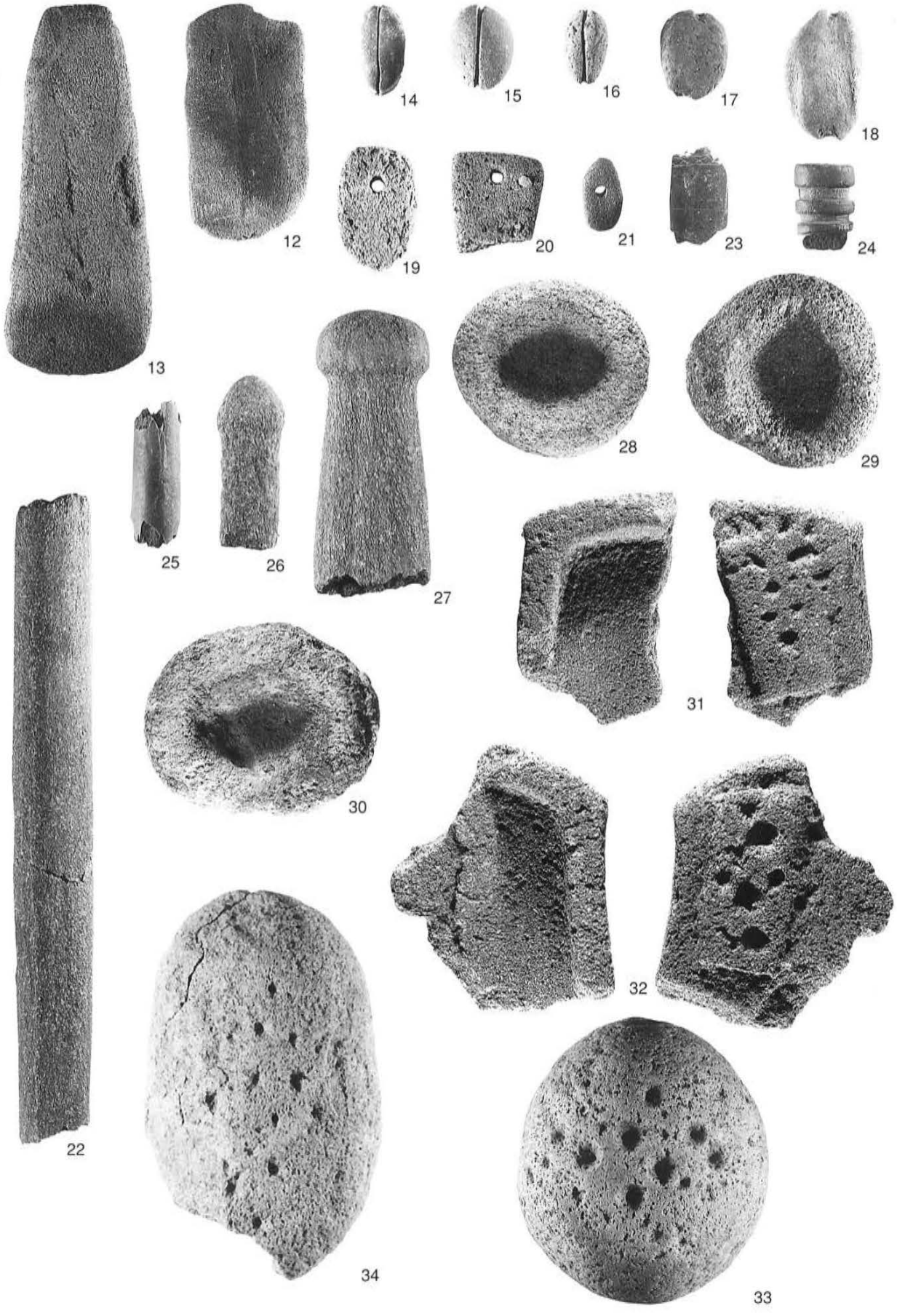
グリッド出土遺物（10）


140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

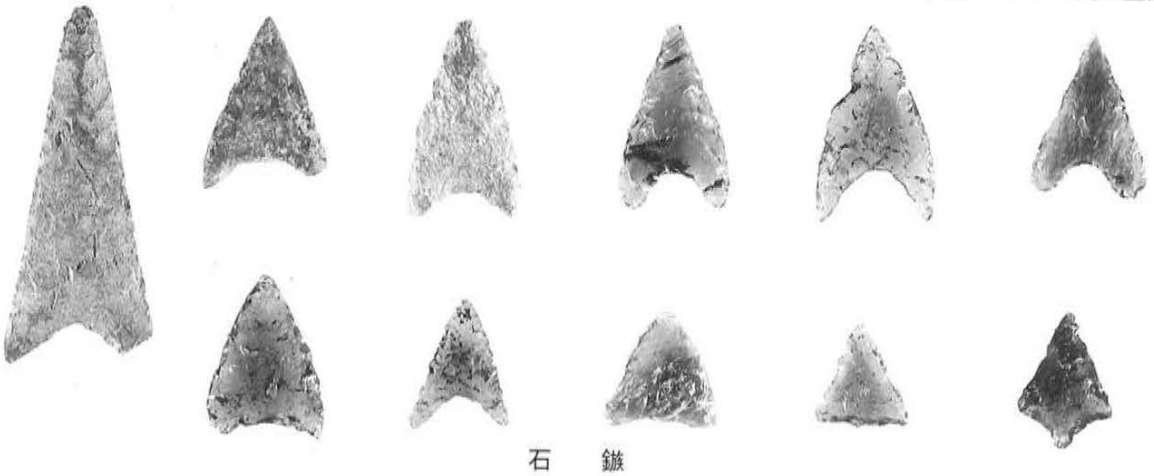
グリッド出土遺物（11）

五料野ヶ久保遺跡

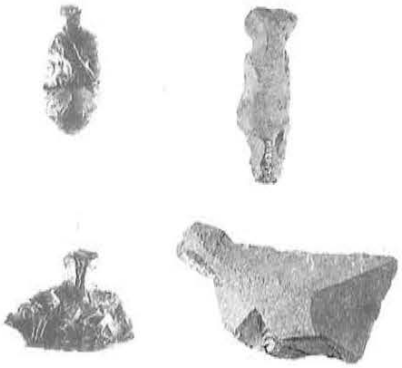
図版60



グリッド出土遺物（12）



石　鏃

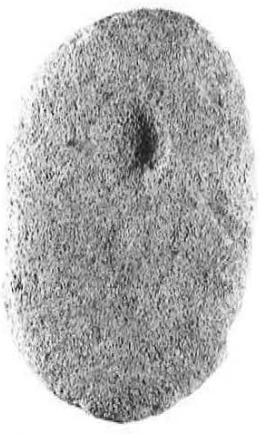


石　匙

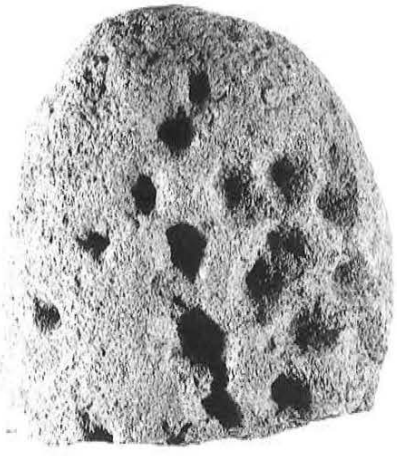
磨製石斧

打製石斧

凹　石

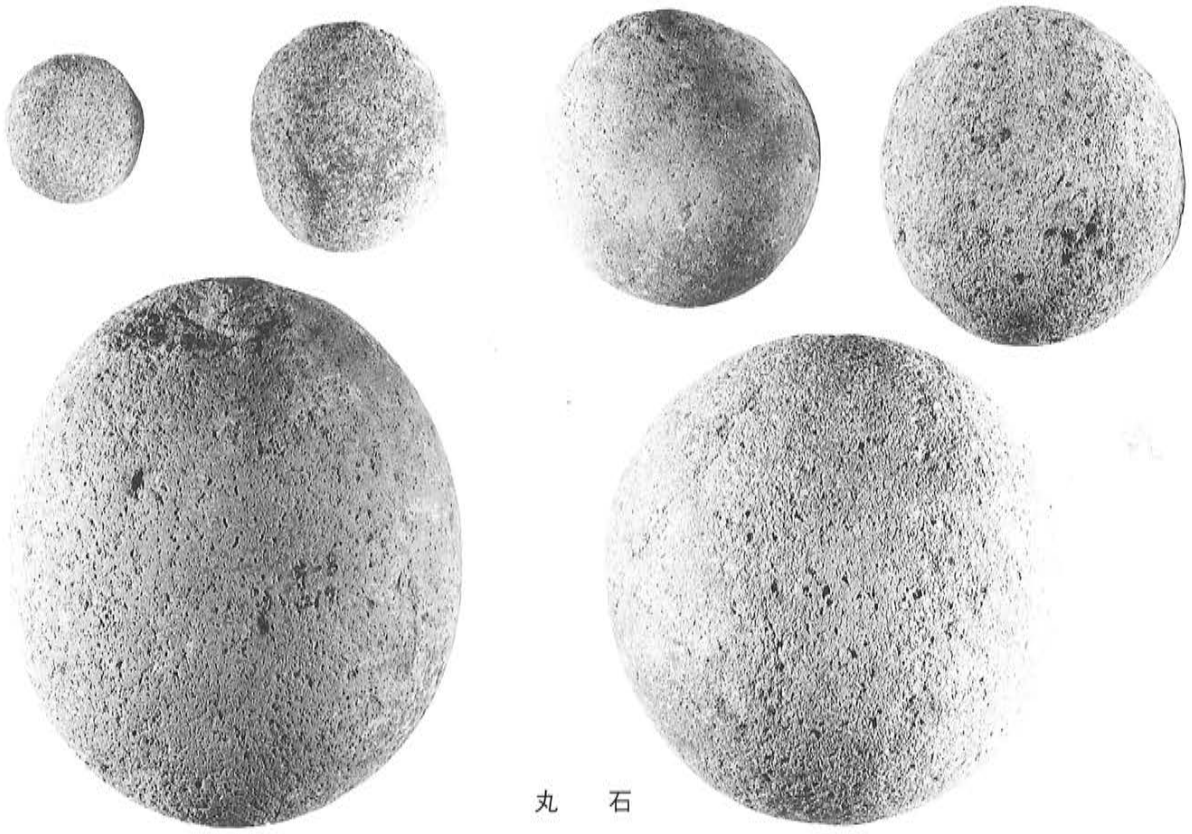


中央調査区出土石器



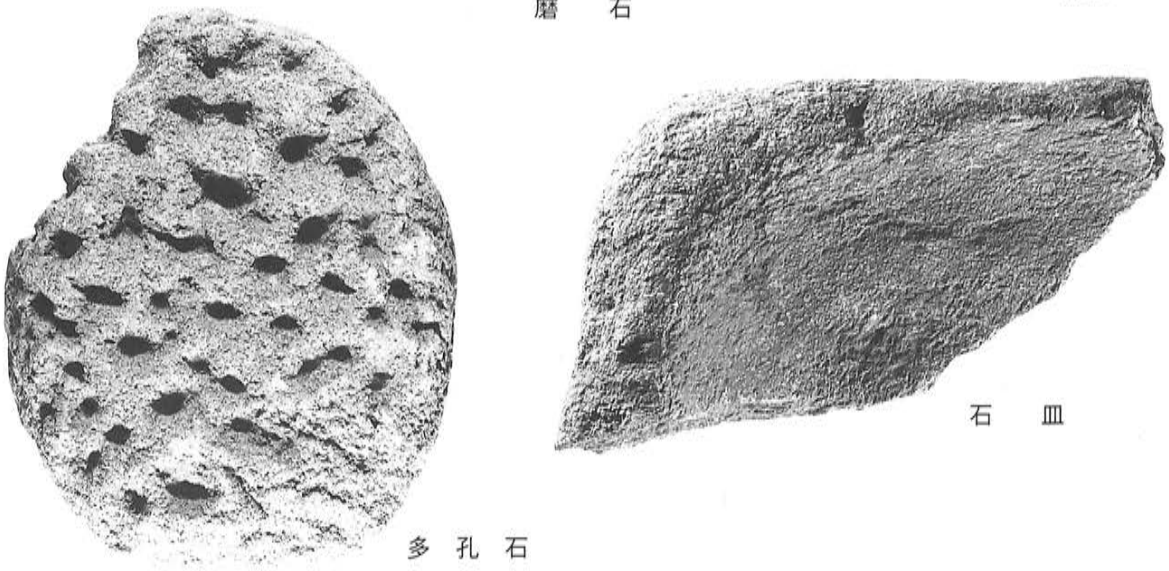
多孔石

図版62



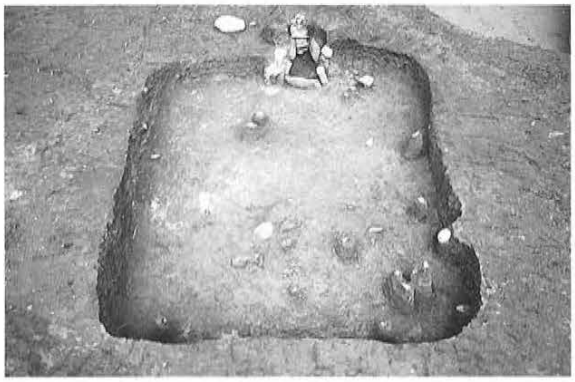
丸　石

磨　石



多孔石　　石　皿

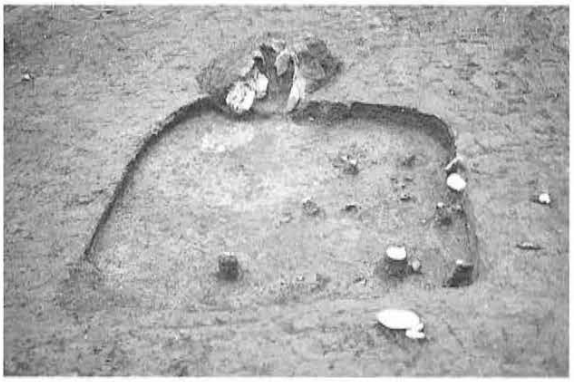
西調査区出土石器



1．10号住居跡

2．同　遺物出土状況

3．同　カマド



4．11号住居跡

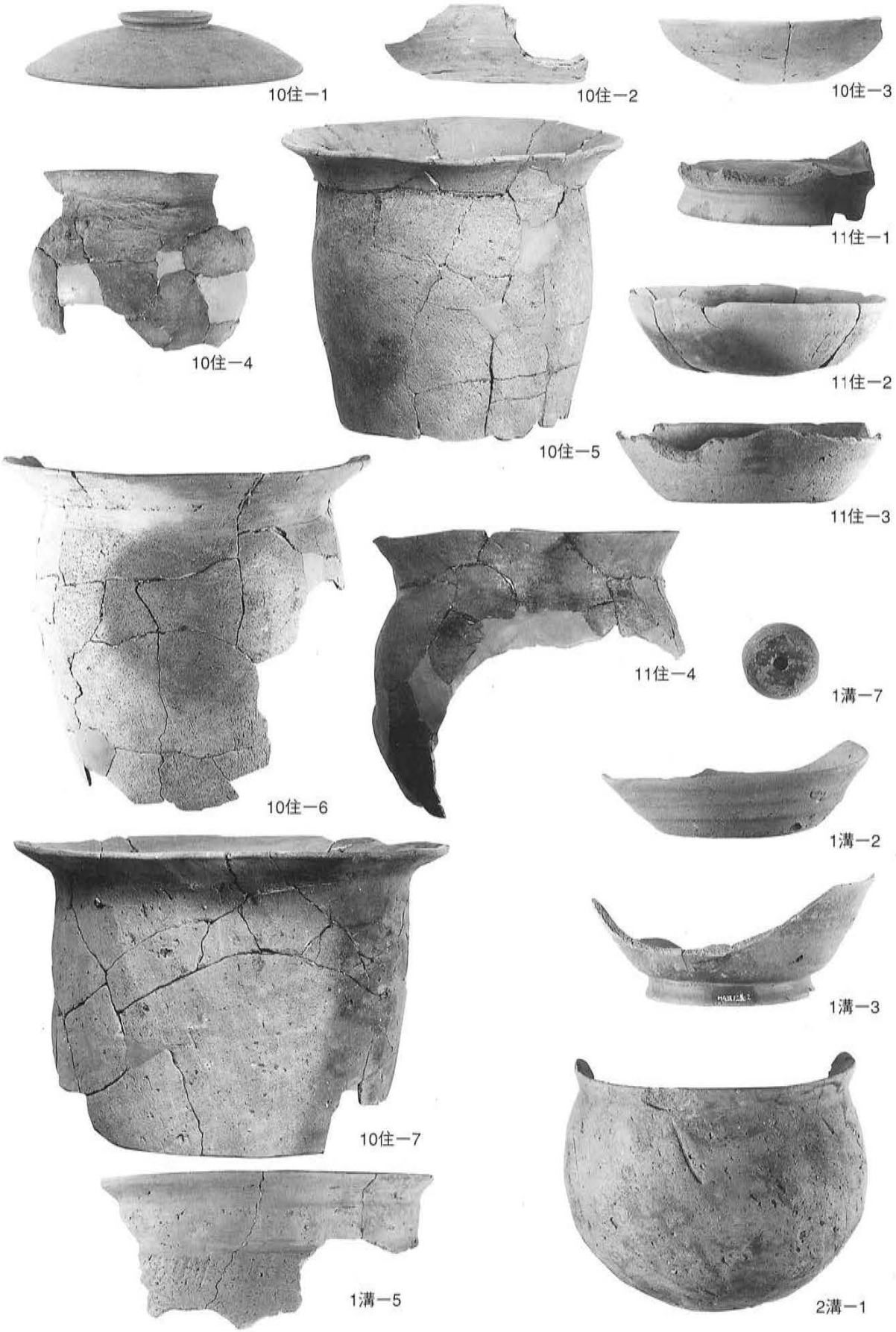
5．同　カマド

6．同　遺物出土状況

7．2号溝跡

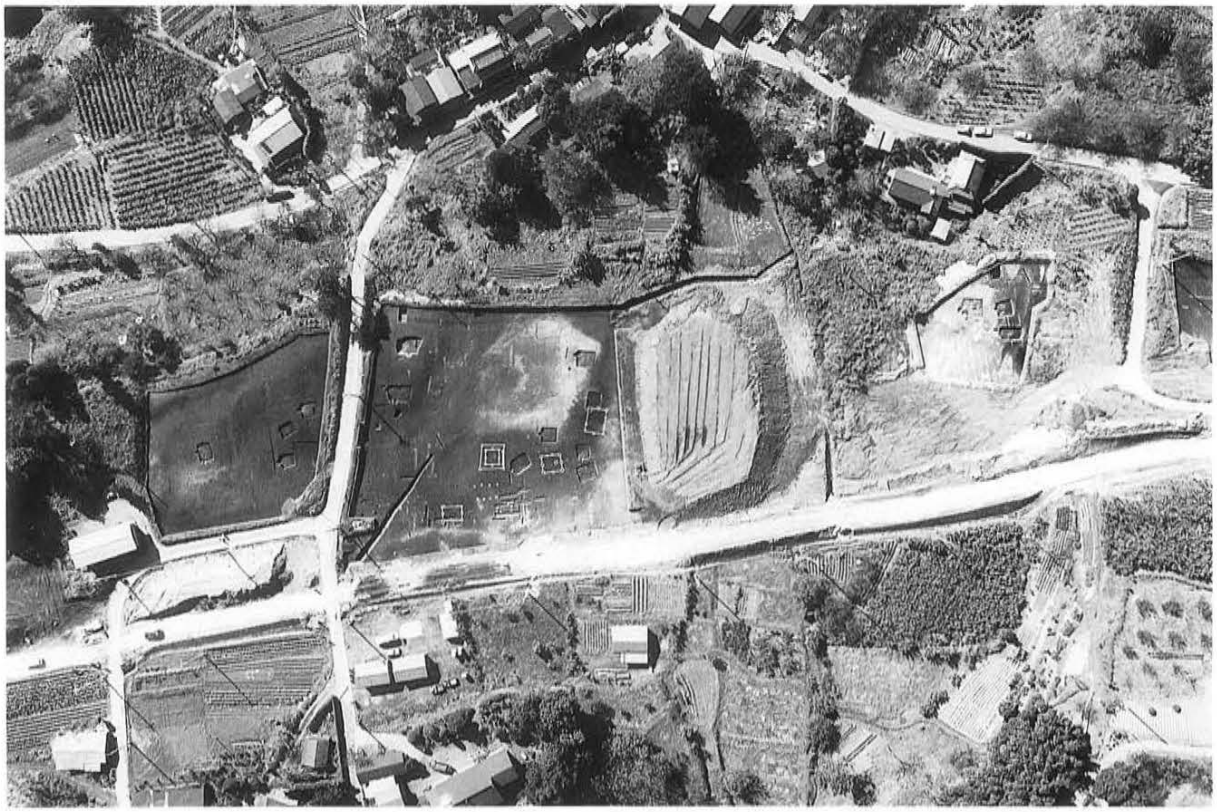
8．同　遺物出土状況

図版64



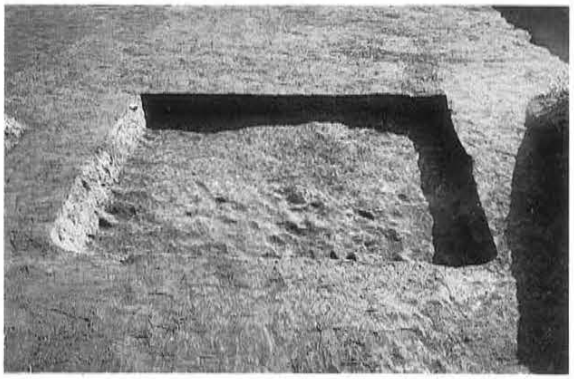
10・11号住居跡・1・2号溝跡出土遺物

写　真　図　版



1．東地区全景（航空写真）

2．1号住居跡全景（北より）



3．2号住居跡全景（北より）

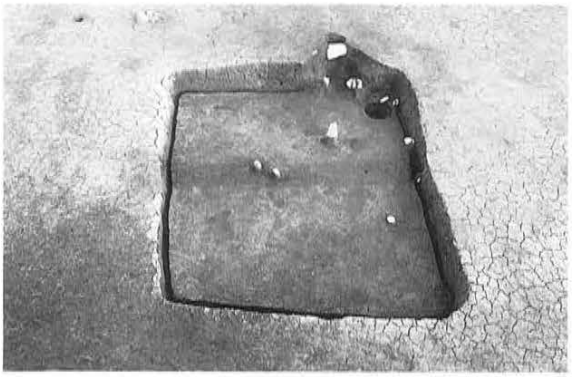
4．3号住居跡全景（西より）

5．4号住居跡全景（西より）

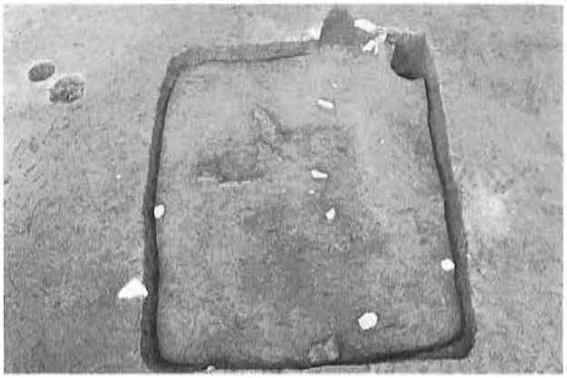
五料稲荷谷戸遺跡

図版2

1．5号住居跡全景（西より）



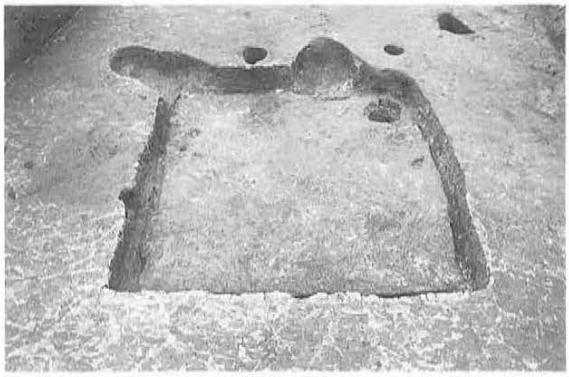
2．6号住居跡全景（西より）



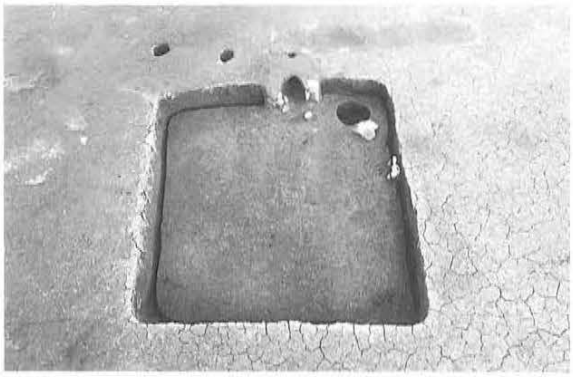
3．7号住居跡全景（南より）

4．8号住居跡全景（南より）

5．9号住居跡遺物出土状況（西より）



1．10号住居跡全景（西より）



2．11号住居跡全景（西より）

3．12号住居跡全景（西より）

4．13号住居跡全景（南より）

5．14号住居跡全景（西より）

6．14号住居跡カマド（西より）

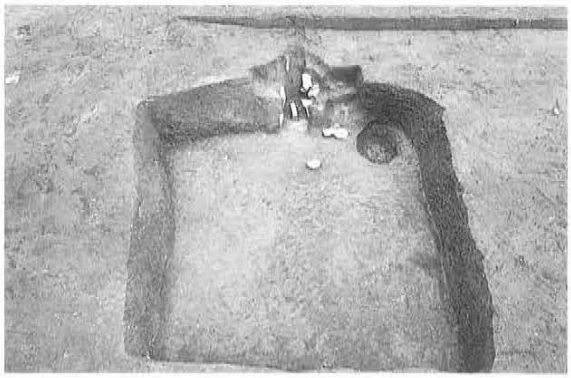
7．16号住居跡全景（南より）

8．18号住居跡全景（南より）

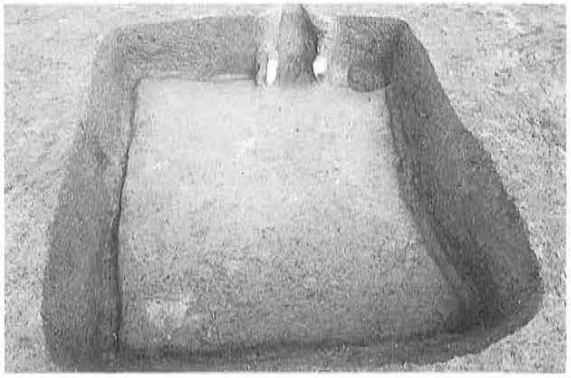
五料稲荷谷戸遺跡

図版4

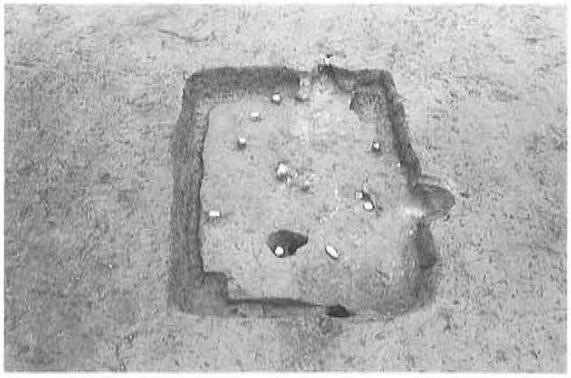
1．18号住居跡全景（西より）



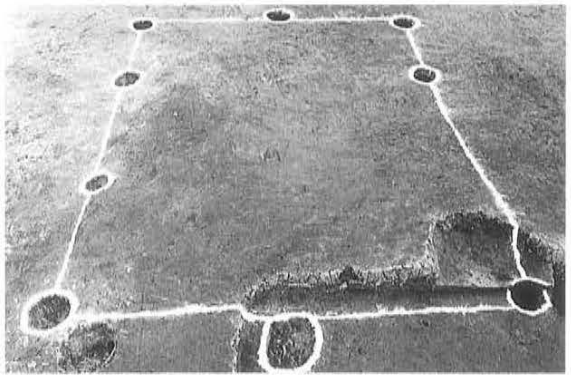
2．21号住居跡全景（西より）



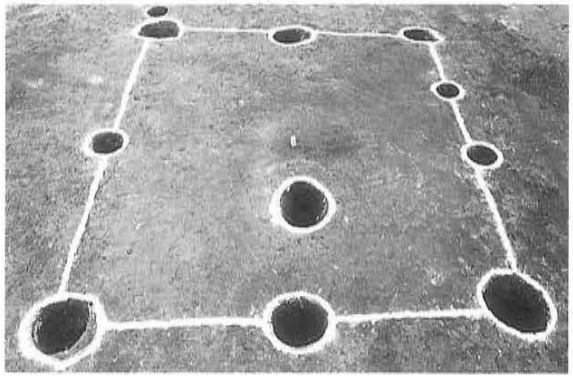
3．22号住居跡全景（西より）



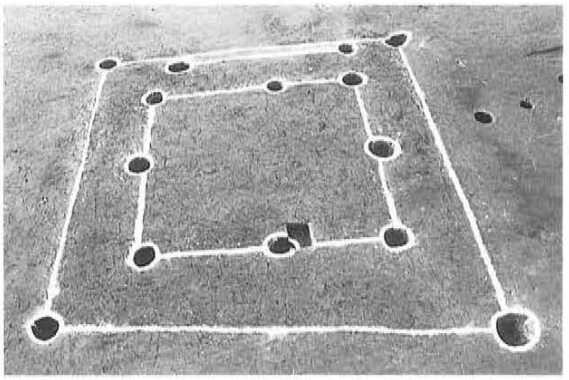
4．23号住居跡全景（南より）



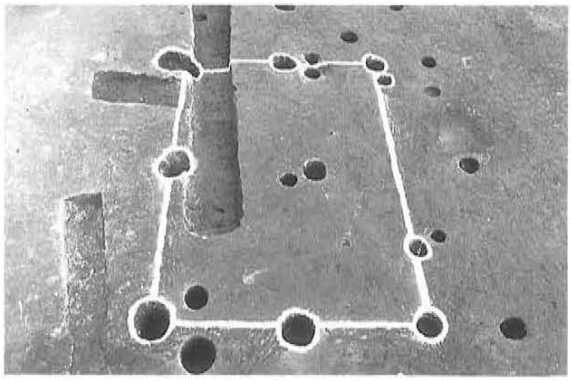
5．1号掘立柱建物跡全景（南より）



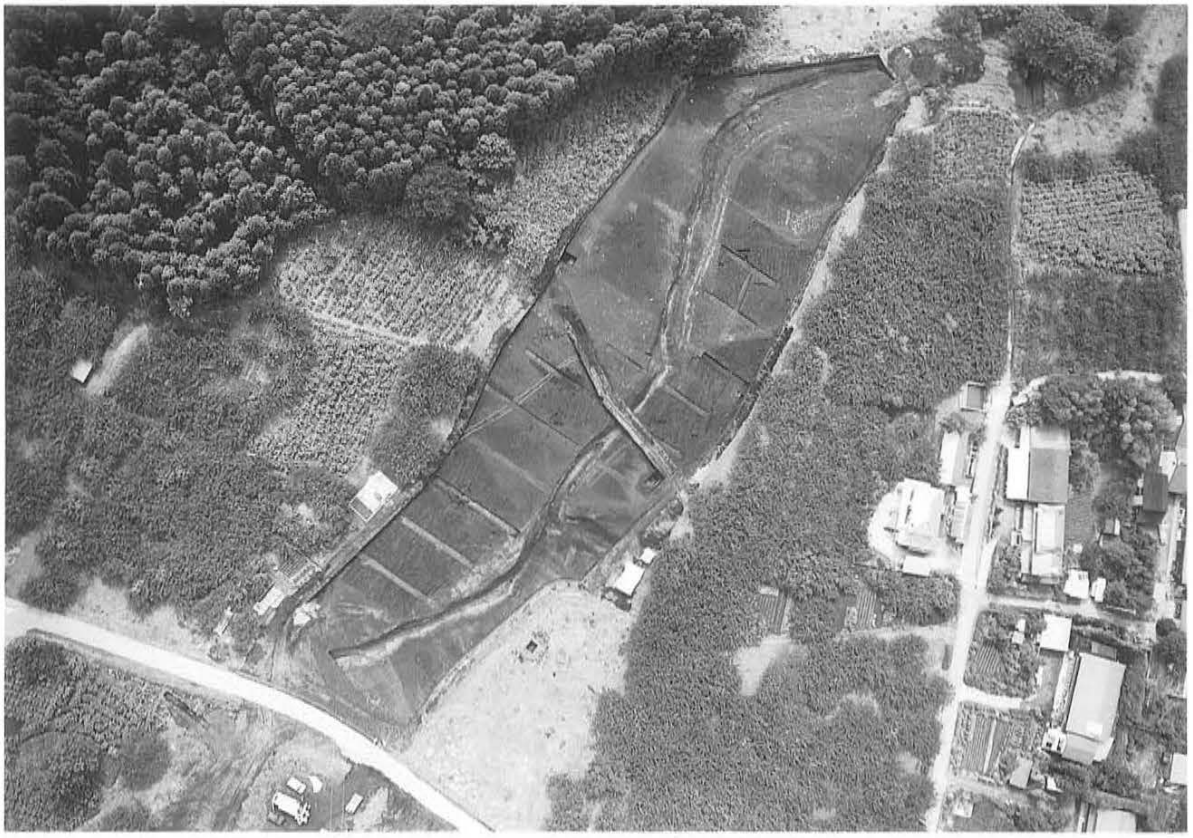
6．2号掘立柱建物跡全景（西より）



7．3号掘立柱建物跡全景（東より）



8．4号掘立柱建物跡全景（西より）



1．西地区全景（航空写真）

2．1号溝状遺構中央部付近（東より）

五料稲荷谷戸遺跡

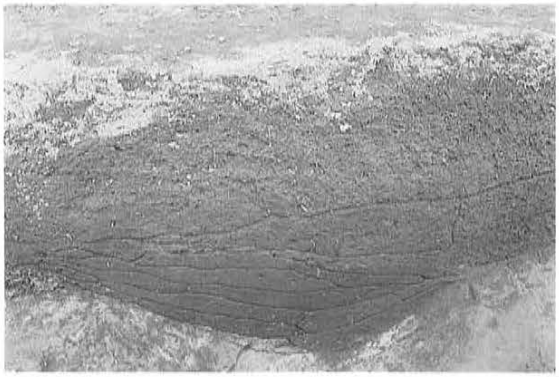
図版6

1．１号溝状遺構分岐点（北より）

2．１号溝状西側付近（北より）

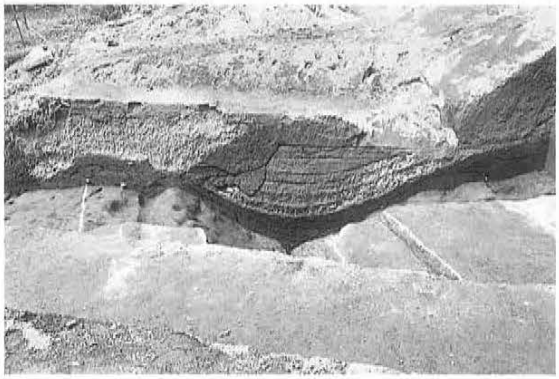
1．１号溝状遺構セクションＡ－Ａ′（東より）

2．１号溝状遺構セクションＢ－Ｂ′（西より）



3．１号溝状遺構セクションＣ－Ｃ′（東より）

4．調査区外Ａトレンチ全景（北より）

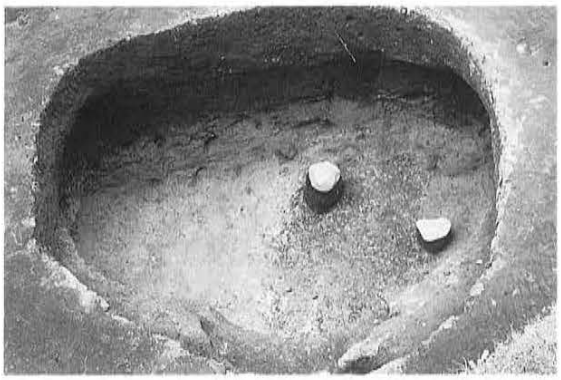


5．調査区外Ａトレンチセクション（東より）

五料稲荷谷戸遺跡

図版8

1．4号畠跡（西より）



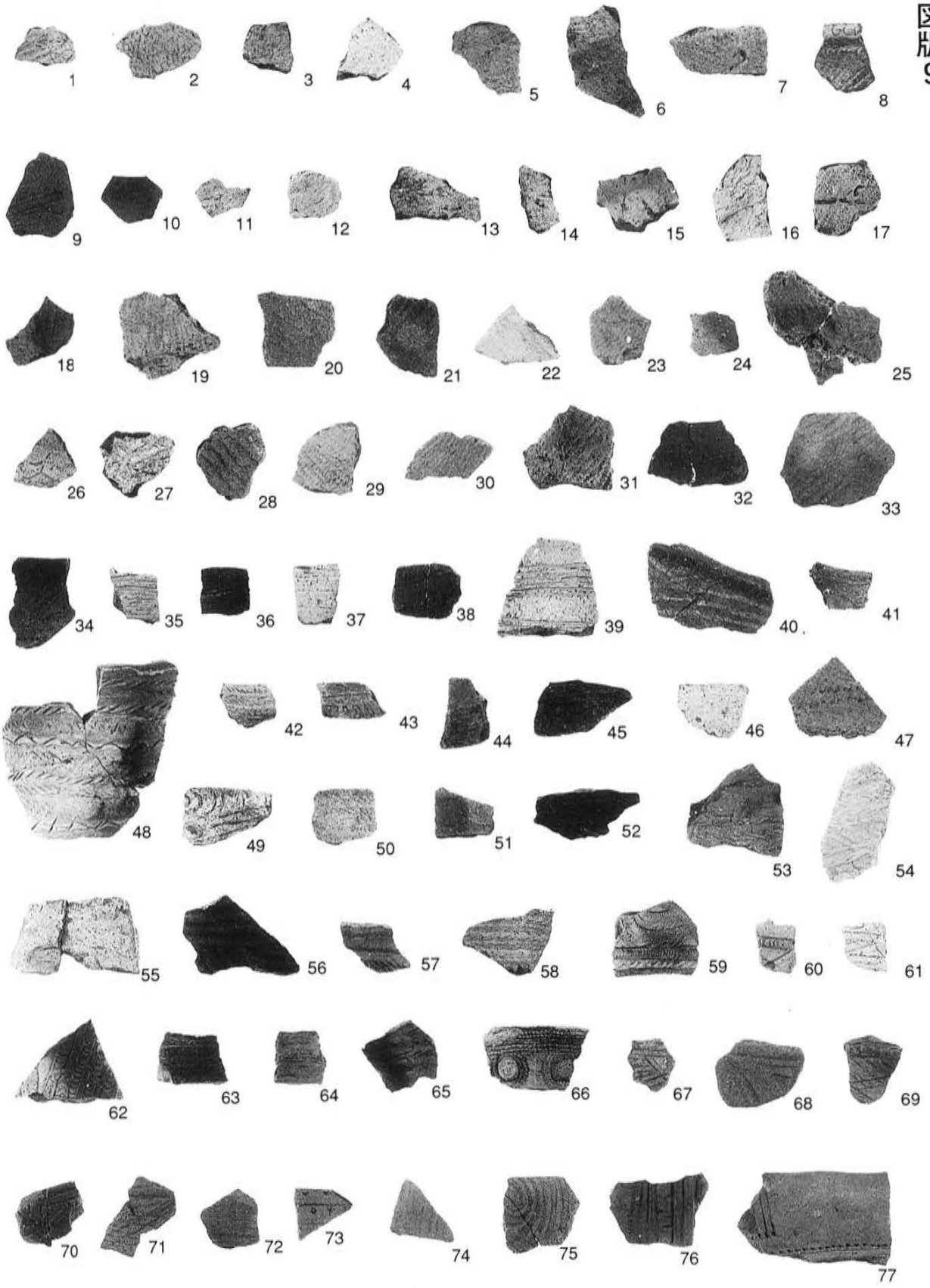
2．1号井戸跡（東より）

3．1号溝（東より）

4．基本層序Ⅰ

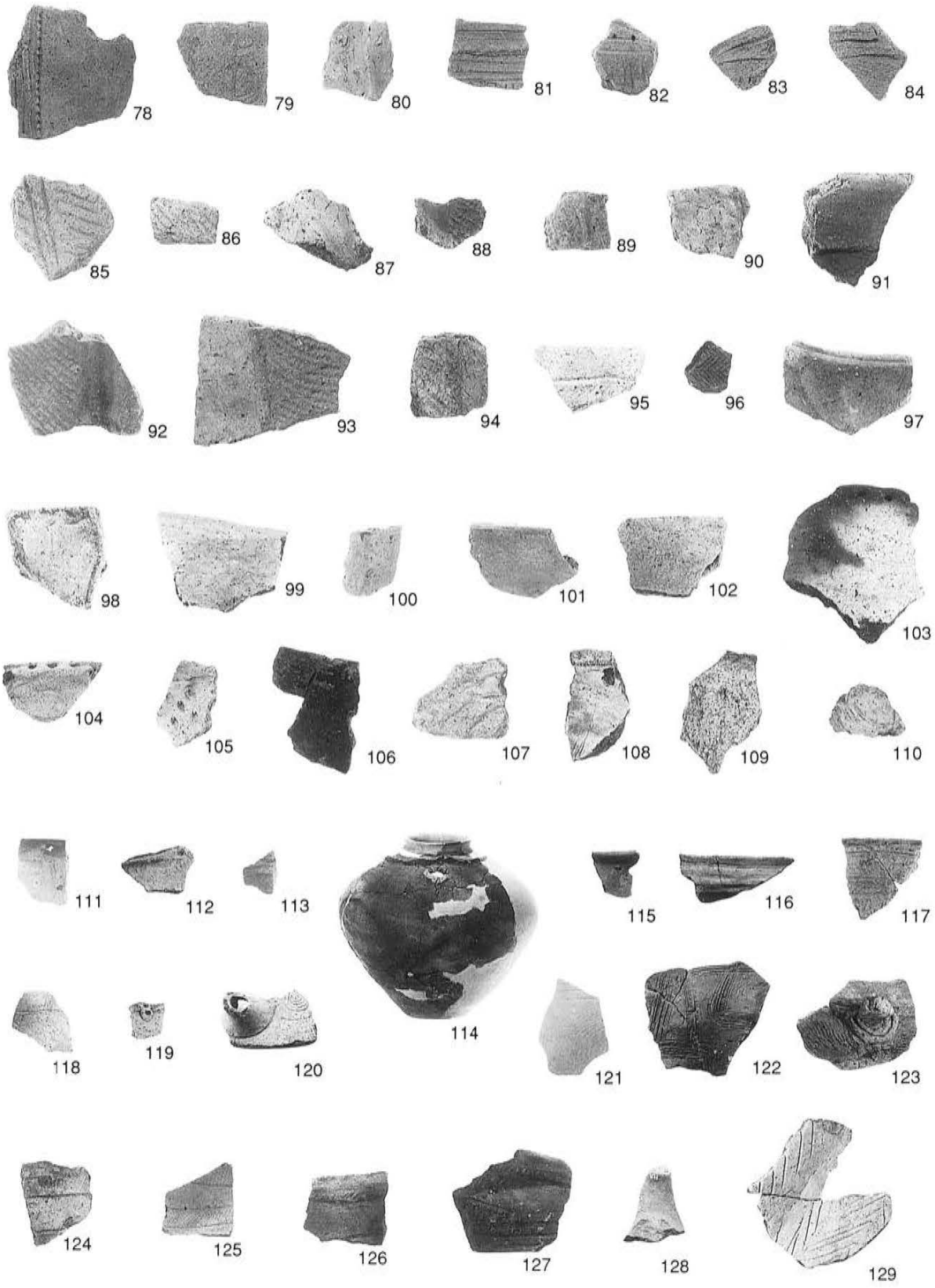
5．基本層序Ⅲ

図版9

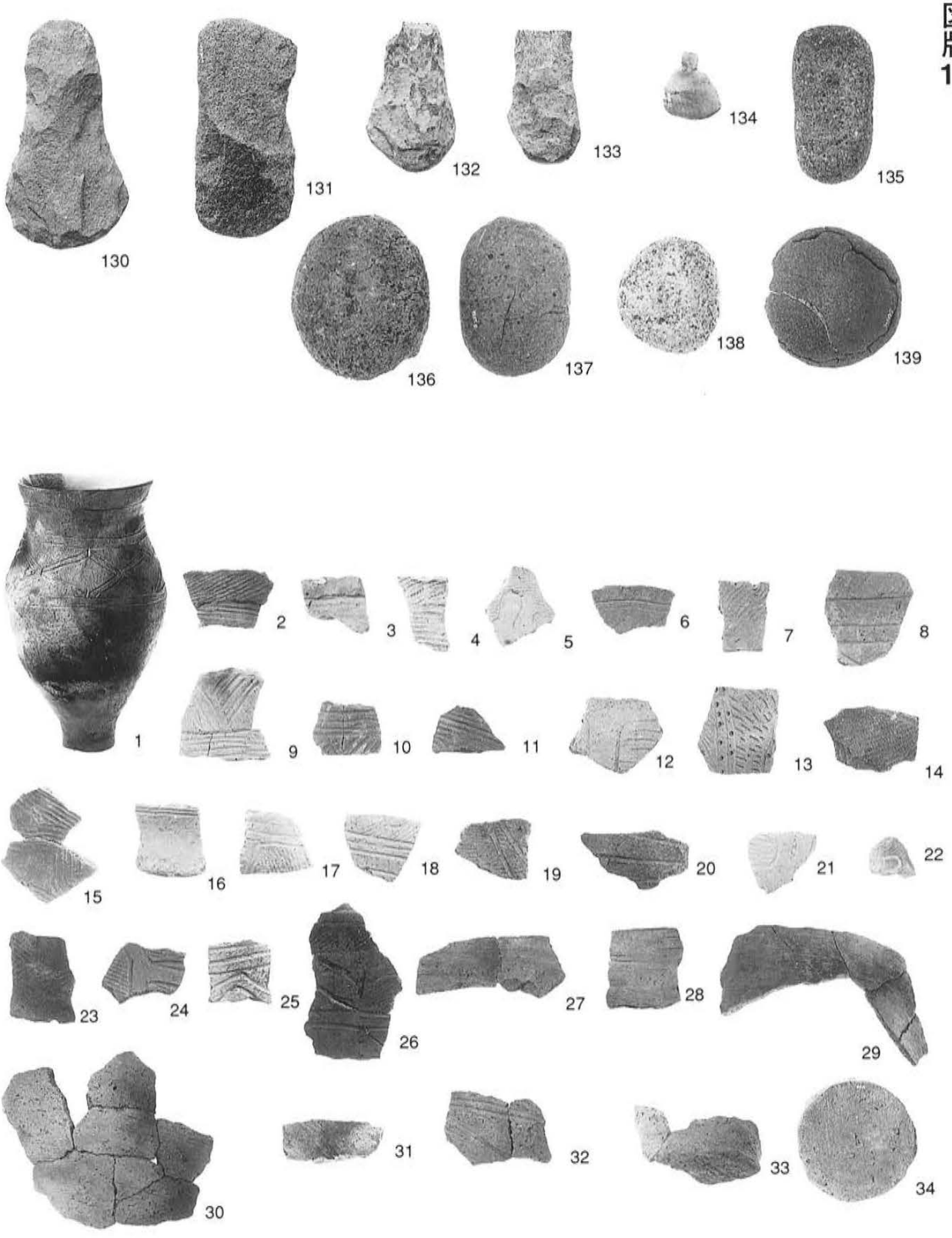


縄文時代出土遺物（1）

図版10

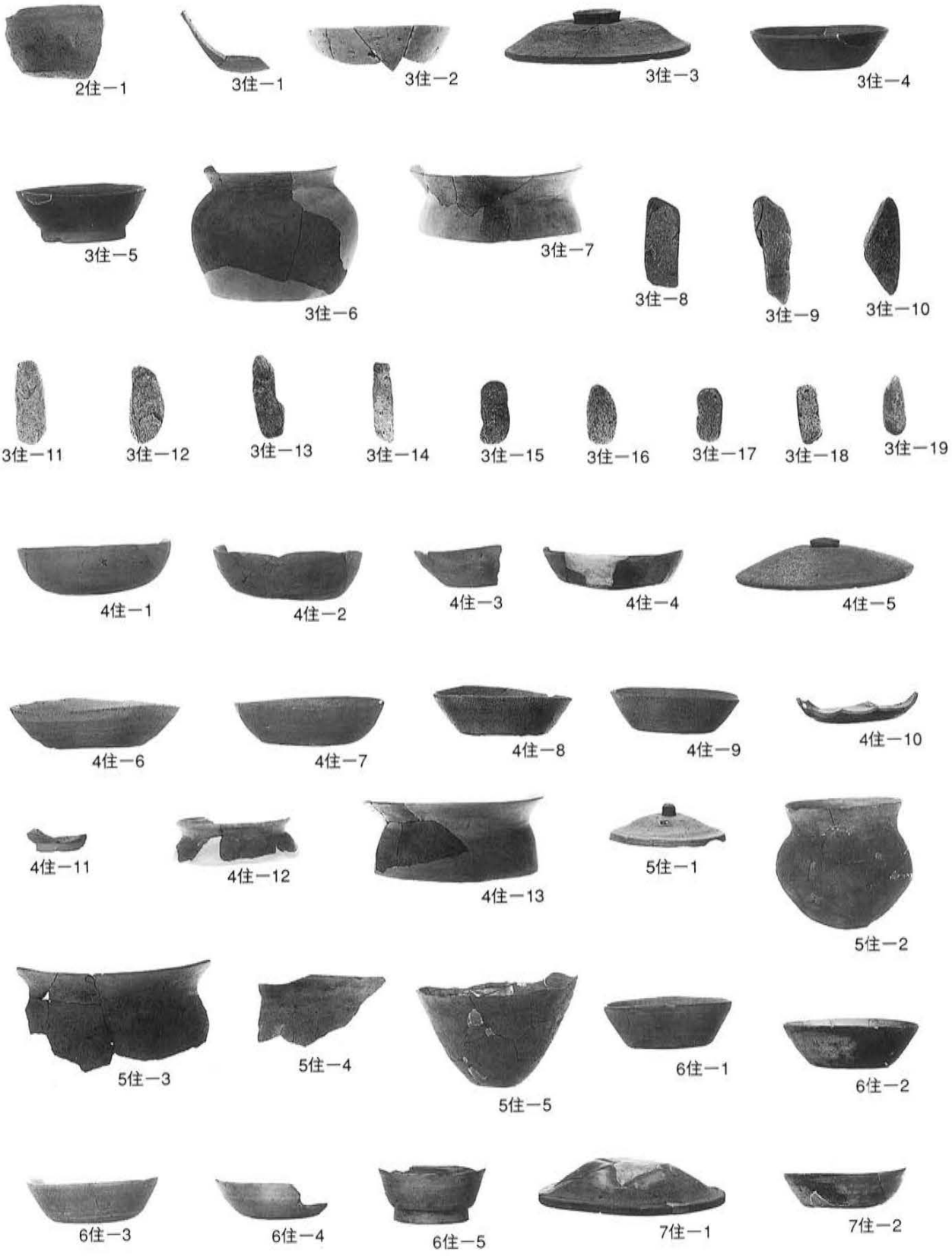


縄文時代出土遺物（２）

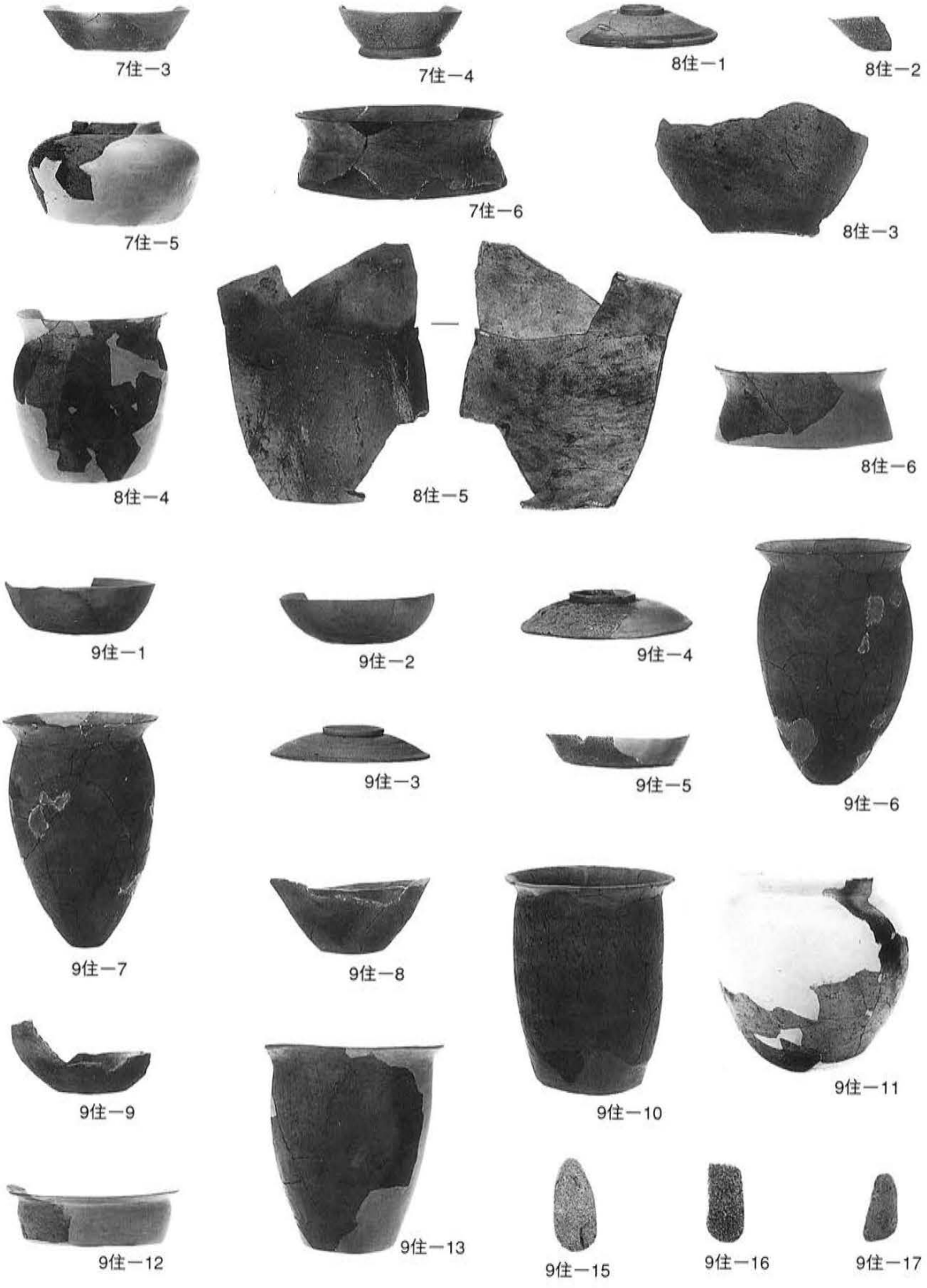


縄文時代出土遺物（３）・弥生時代出土遺物

図版12



2～7号住居跡出土遺物


7住－3
7住－4
8住－1
8住－2
7住－5
7住－6
8住－3
8住－4
8住－5
8住－6
9住－1
9住－2
9住－4
9住－3
9住－5
9住－6
9住－7
9住－8
9住－10
9住－11
9住－9
9住－12
9住－13
9住－15
9住－16
9住－17

7～9号住居跡出土遺物

五料稲荷谷戸遺跡

図版14

9住－18

9住－19

9住－20

9住－21

9住－22

10住－3

10住－1

10住－2

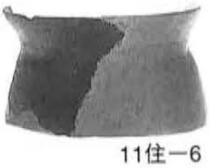
11住－1

11住－2

11住－3

11住－4

11住－5


11住－6

11住－7

11住－8

12住－1

13住－1

13住－2

13住－3

13住－4

13住－5

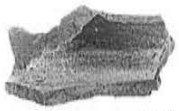
13住－6

13住－7

13住－8

13住－9

13住－10


13住－11

13住－12

14住－1

14住－2

14住－3

9～14号住居跡出土遺物

図版15

14住－4

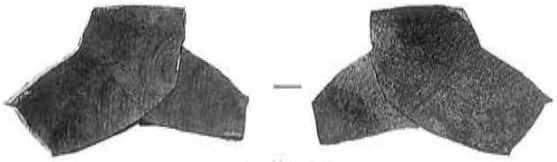
14住－5

14住－6

14住－7

14住－8

14住－9


14住－10

14住－11

14住－12

14住－13

14住－14

14住－15

16住－1

16住－2

16住－3

16住－4

17住－1

17住－2

17住－3

17住－4

17住－5

17住－6

17住－7

17住－8

17住－9

17住－10

14・16・17号住居跡出土遺物

五料稲荷谷戸遺跡

図版16

17住－11

17住－12

17住－13

17住－14

17住－15

17住－16

17住－17

17住－18

17住－19

17住－20

17住－21

17住－22

18住－1

18住－2

18住－3

18住－4

18住－5

18住－6

18住－7

18住－8

18住－9

18住－10

19住－1

19住－2

20住－1

20住－2

20住－3

20住－4

20住－5

20住－6

17～20号住居跡出土遺物

20住－7

20住－8

20住－9

20住－10

20住－11

20住－12

20住－13

20住－14

20住－15

20住－16

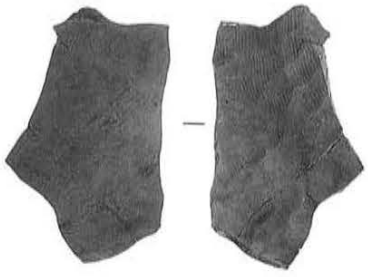
21住－1

21住－2

21住－3

21住－4

22住－1


22住－5

22住－2

22住－3

22住－4

23住－1

23住－2

23住－5

23住－3

23住－4

23住－6

23住－7

20～23号住居跡出土遺物

五料平遺跡
（五料Ⅰ遺跡）

五料野ヶ久保遺跡
（五料Ⅱ遺跡）

五料稲荷谷戸遺跡
（高墓遺跡）

－関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷　平成９年３月１日
発行　平成９年３月31日

編集　山武考古学研究所
発行　日本道路公団
群馬県教育委員会
松井田町遺跡調査会
印刷　㈱文化総合企画
千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12
☎(0476)93－0593